

カルデアの落ちなし意
味なしのぐだぐだ短編
集

御手洗団子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルデアでこんなことが起こってたらなーと思ってることを頭の中を空っぽにして落ちなし意味なしで書いていく、ぐだぐだな物語集。 なんじゃこりゃと思うこと間違いなし！

目次

夢の中で和服美人と、ローマと。	1	マスターとニンジャ小太郎の事件簿。	94
食欲旺盛なケルトと性欲旺盛なケルトの話。	8	吾輩はキヤッツである、いや犬かも。	113
魔法少女のカルデア奮闘記。	20	円卓が、鍋を囲んで、大惨事。	123
若返りマスターと、慈母アタランテ。	39	夢をみる魔法少女。	136
お菓子に目が無い茨木と、可笑しな集団との話。	56	ぐだ子と思ったらトーサカになった話。	148
清姫外伝、焰色の接吻編	66	モードレッド外伝 叛逆の騎士、もしくは乙女？	169
逸話の話と、お酒は二十歳になってから。	80	ゴルゴーンの末弟、誕生？	196
		温泉とマスターと恋バナ。	225
		魔法少女のパラノーマルなアクティビ	

	テイ	241		
	ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリーの憂鬱	259		
	カルデアに神様を求めるのは間違っているだろうか？	289		
	泣けなかつた少年の話。	307		
	マスター、帰省する。　　くお誘い編く	324		
	マスター、帰省する。　　くただいま編く	336		
	マシユ学校へ行く。　く初登校編く	350		
	マスター、帰省するくヨヒメン襲来編く			
	妹、巻き込まれるく無理矢理帰省編く			369
	マスターと武蔵と、ときどきじいじ	387		
	マスター、帰省するくわくわくざぶーん編く	411		
	妹、巻き込まれるく激闘わくわくざぶーん編く	427		
	ぐだぐだカルデア。　その宝石の名前は	445		
	？	504		
	チョコレート・ディア・	520		
	マシユ学校へ行く。　くチョコレートクツ			

キーはミントの香りゝ | 536

リリイパンデミック！ アラサー紳士

編。 | 554

星の海にて狼は鳴く。 | 577

無頼漢とハンバーグ。 | 600

マスター、帰省するゝ鯖を釣るサバと太

陽編ゝ | 624

風邪とローンなレンジヤーとアルターエ

ゴ。 | 644

女子会、男子会。 似た物同士。

672

メガネデスパニックと鼻血。 | 685

クッキーとおにぎりど、アルターエゴど。

another sky 編 お宝写真と | 709

女神の微笑み。 | 730

お酒は二十歳になつてから！ | 743

ミック・メルトリリス | 767

夢の中で和服美人と、ローマと。

その日、人類最後のマスターは頬に触れる優しい風と共に目を覚ました。

見てみるとそこはいつも自分が就寝しているマイルームではなく、暖かい日差しと、心地よい風が吹く草原であった。

そして頭には柔らかない感触、就寝しているときに使っているダ・ウインチちゃん特製反発調整機能付き枕よりも心地よい感触と暖かさが両立されたような、いつまでも寝ていたくなるような、そんな心地よい感触がマスターを包んでいた。

「おはよう、いえ、おやすみなさいかしら？　またこうして会えるなんて思ってもみなかったわね」

愛おしそうに頭をなでられたことで自分が膝枕されていたことにマスターは気付いた。顔を见ようと顔を動かすが、サーヴァントの顔には影がかかっており誰かが分からない。

夢を共有しているということは自分と契約してるサーヴァントなのだろうが、夢の中だからだろうか声を頼りに思い出そうとしても記憶に霞が掛かったように上手く思い出すことができないでいた。

「ふふ、良いのよそのまま。これは夢、ひと時の幻。目もくらむ朝焼けが貴方の眠りを妨げるまで、こうしていきましょう?」

マイルームだから朝焼けは見られないのでは? というツツコミを最上の膝枕を手放したくないマスターはそつと飲み込み、頭を膝枕に沈ませる。花の様な甘い匂いがマスターの鼻孔をくすぐり、その匂いをもつと味わうようにマスターは無意識にその膝の中に頭を埋めた。

「ふふふ、可愛らしい人。何時もは貴方を遠くから見守るだけだけれど、今この時ぐらいは二人つきりで……」

そんなマスターの髪を柔らかな手櫛で梳かしながら、そのままマスターの耳や頬へと手を伸ばし始めた。すこしくすぐったく感じたマスターが身をよじらせると女性サーヴァントは嬉しそうにまた頭を撫で始める。

「ああ、あの子もこんな気持ちだったのかしら……どちらかと言うとあの子はさされてい
る側だったけど」

何かを思い出したのかサーヴァントはくすりと笑うと、マスターの耳に口を近づけ
「ふうー……」

と息を吹きかけた。突然の刺激にマスターの体が震える。何事かと女性のサー
ヴァントの方へ顔を向けようとするが、顔をがっちりとホールドされてピクリとも動け

なかった。

「うふふ、やつぱりこそばゆいものなのね。顔が真っ赤で林檎みたい……なんだかもっとしたくなってしまおうね」

そのまま耳元で囁かれる言葉に、ますます顔を赤くするマスター。なんだかマタ・ハリから時々受ける誘惑の様な、ブーデイカから受ける甘やかしの様な、それ二つを足して両儀さんを加えた様な、そんな今までにないタイプの女性のイタズラに、マスターの心臓はどんどん高く速く跳ねていった。

「えーつとこの後は、んー……」

「?!?!」

サーヴアントはマスターの耳から離れ、そこから頬へと移動したかと思えば、そのままマスターへとついばむような口づけをし始めた。しかもそれはどんどんと口の方へと近づいていくではないか。

これはいささかこの人類最後のマスターには刺激が強すぎた。何せ女性経験どころか、エスカレーター式で幼稚園から高校、そして進学予定だった大学まで全て男子しかいない男子校だったので異性と手をつなぐという行為自体、自分の母親としかやったことが無いという有様だったのだ。なので貞操観念——実際は女性に向けて使われることが多い言葉なのだが——が高く、女性との接触も避けるような男であった。

まあ良く言うと純粹で硬派、悪く言うと只のヘタレなのである。

「!!——!」

必死でやめる様に説得をするのだが、サーヴァントは微笑みながら受け流すだけ。

いや決して、決してマスターにとつては嫌なわけではないのだが、このまま女性に良いままにされて唇を奪われたとなつてはたとえ夢の中であつても男の沽券にかかわる。

現実ではマリーのベーゼや静謐のハサンとの事故でいとも簡単に奪われてしまったが、あれは事故であると心の中で決めつけなかったことにしている。所謂現実逃避と
言うものだ。

「んっ、んっ。大丈夫、誰も見ていないわ。ここは貴方と私だけの世界だもの」

そういつて、サーヴァントの唇はついにマスターの唇の端へと到達した。次の一回でマスターの唇へと到達するであろう。マスターの顔はもはや赤くなりすぎて白が混じつたピンクになつていた。熟したリンゴと言うより桃である。

「……………いいわよね?」

少し恥ずかしがった声でマスターに尋ねるが、ヘタレなマスターは、良いよ。とも、駄目だ。とも言えずエリCh anライブを前にした子イヌのように震えるだけである。

その様子を見たサーヴァントはくすりと笑うとマスターの唇を奪うべくそのまま唇

と近づけていき――

「例えそれが夢であれど、只々平穩な世界にて男女が睦ましく愛を語る……これもまたローマ」

視界の端に映つた異様な雰囲気を醸し出している筋肉ダルマに驚いて、唇は触れ合う寸前で止まった。

「……どなた？」

「私はローマであり、ローマは私である。ローマとは世界であり、そこで横たわる我が子もまたローマ。そして根源の一部、お前もまたローマなのだ」

「ごめんなさい、良く分からないわ……」

現れるはずのない夢の中に出てきた大男、ローマ帝国の神祖である最も偉大なローマの王ロムルス。それはマスターにとつては天の救いであつたか、それとも目の前で御馳走を奪わんと来た地獄からの使者だつたか。

表情がめまぐるしく変わるマスターの表情からは読み取れなかつたが、この夢が終わるのは確かな事であつた。

「そう……この人を起こしに来たのね。まだ朝にはなっていないはずだけれど？」

「確かに我が子が穏やかな朝日に包まれるまで時間はある。だが我が子に余裕はない。このまま夢の中で蜜月を過ごすのも良いだろう。だがそうすると現実では非

ローマ的な行いが起き、カルデアは混沌の炎と化すことになる」
「つまりマスターに何かが起きようとしているのね？」

ロムルスのみならぬ言い方に、マスターも女性サーヴァントも緊張していた。自分たちがこうしている間にも世界を救うためのカルデアに危機が迫っているのだ、となれば今すぐにでも目を覚まして対処しなければならぬ。もう少しだけ触れ合いたかった気持ちもマスターとサーヴァントにはあるにはあったが。

「——直球的に言う、夜這いに来たある三人が扉の前で鉢合わせになっている」
「あら」

「——!!!」

これでもかと言うくらいに女性サーヴァントにしがみつくとマスター。まるで起きさないと喋っているように女性サーヴァントの膝へ顔を埋めながら手はしっかりと背中にしてホールドしている。どれだけ起きたくないか推して知るべし。

「無駄だ、お前もローマならば覚悟を決めローマ」

ある意味惰眠貪つてる場合じゃねえ状況なのだが、寝ても地獄起きても地獄ならいっそこのまま寝ていた方が心の平穏だけは保たれる、そう考えたのである。ところが問屋が卸さない、ロムルスはマスターの足を掴むとそのまま引きずるようにマスターをどこかへ連れて行ってしまった。声にもならないマスターの泣き声が当たりに響いたが、

あいにくここは夢の中、頼みの和服美人サーヴァントも困ったように笑いながら手を振るだけである。

「今度は起きているときに膝枕してあげましょう……」

もはや遠くなったマスターの泣き声を聞き、起きた後のマスターの身を気遣いながら和服美人サーヴァントはそう思うのであった。

夜明けは近い。

食欲旺盛なケルトと性欲旺盛なケルトの話。

日々の激闘を戦い抜く人類最後のマスターにとって、気の休まる時間はそう多くない。レイシフトが無い時でもサーヴァントと訓練し、時にはサーヴァントのお願いをかなえるために奔走し、時には夢の中でさえサーヴァントと繋がり命がけでサーヴァントとの記憶を追体験する。

ナーサリーライムとのお茶会に出席し、メ切り前で部屋に籠りっぱなしの作家サーヴァント達に間食を持っていったり、いつの間にかマイルームに入り込んだジャックと一緒にお昼寝したり、それを目撃したバーサーカーの嫉妬の炎から逃走したりとマスターには休日と言うものは一切ないのだ。

なのでカルデアの食堂で取る食事は数少ないマスターの心休まる時間であった。

カルデアのおかんとブーティカと源頼光世話焼きお母さん むりやりお母さん他に気が向いたらキャッツやロビンフツドなどなどから繰り出される世界の一流シェフにも劣らない料理の数々はマスターの疲れた体と心を解きほぐし、満足感を与え、また作る方もマスターの時々見せる本来ならば元の日常で見せていたのであろう子供っぽい笑顔を見て、充足感を覚えるのだ。

若干一名その笑顔をみて涎を垂らす母がいたりするのだが――

「いやあ、うまい！ 俺が生きていた時代の食い物でも美味だと満足していたが、この味を知ってしまったら元に戻るには苦勞するだろうなあ！ いやあ、世界とは広い物よな！」

「もうちよつと静かに食べよフェルグス。 ちよ、こつちにござ飯粒が飛んできてるんですけど!？」

「ふふ、性欲もさることながらお主はアルスター一の健啖家であつたな。 しかし、こつちやつて食を共にするということのも久しいな。 しかもこのミソ・スープであつたか……なかなか奥が深い」

「うむ、なんと脂ののつた鮭だろうか！ 知恵の鮭にも劣らずの一品。 またこの鮭を見事に調理した腕前もまた見事だ……」

「お、俺は今とんでもない方々と卓を囲んでいるのでは……ああマスター骨ならば私がつとりましょう」

「クーちゃん！ ほらあーん！ あーん！ あー……ちよつとガン無視!？」

無論、食事とはコミュニケーションの一環としても有効である。 旨い飯に旨い酒、これがあれば誰だつて気を良くするし仲だつて深まりやすい。 なので絆を深めるためにマスターはサーヴァントやカルデア職員と共に食することがほとんどだった。

それにマスターは一人で食べるより誰かと笑いながら食べるほうがずっとござ飯も美味

しくなると考えていた。

と言うことで今回マスターはエミヤと源頼光に協力してもらい日本食の体験と言うことで誇り高きケルトの戦士たちと共に食を囲んでいた。

メニューはシンプルに焼き鮭に味噌汁、それに漬物や卵焼きなどを添えたもので、すべてエミヤが調理したものであった。因みに食材提供は俵藤太からである。

「うむ、この白米は実に良い。甘やかな味がこの鮭とよく合う！ どれもう一杯おかわりというこう」

笑いながら茶碗を持って厨房へと入っていくフェルグス・マッククロイを見るとサーヴァントは本来は食事が必要としないということをマスターは忘れそうになる。

もうこれで六杯目のおかわりであり、鮭も三匹目である。俵の兄さんがいなかったら他のサーヴァントの分がなくなりどこかの王の聖剣が真名解放されていたであろうことは間違いない。

「……………?」

「うん？ 皆良く食べる？ それはそうであろう、食べるということは生きるということ。自然の力を自分の体に取り込むということ。日々生きるか死ぬかの戦士たちにとって食事とは切っても切り離せない物だ。どれ私も鮭とミソスープを……」

「そんなこと言って戦衣装が入らなくなっても知らねーあぶねっ!!」

「サーヴァントは体型は変化しないので問題ない」

「問題ねーなら槍を投げんなよ!」

槍をクローリーリン顔面直撃コースで投げてから厨房へと入っていくスカサハと入れ替わりでフェルグスがおかわりを持って席へと帰ってきた。茶碗にはこれでもかと言わくらしい白米が山盛りになっており、鮭も二匹皿に載せていた。正に健啖家ここにありと言う盛り方である。

「??」

「ん? まあ俺は姐さんほど深く考えているわけでない。ただ旨い飯、旨い酒それと良い女! それがあれば日々は満たされていたし、良い戦いにも恵まれた。それがあつたら十分。それ以上を求めるのは戦士としては欲深すぎる」

「??」

「んん? 鮭二匹は欲深だと? はっはっは! 確かにちと贅沢だったか! これは失敬、だがこの鮭と白米が旨すぎるのがいかん! 今日ばかりは見逃してくれ!」

豪快に笑いながら鮭と白米をかきこむように食べ始めるフェルグス、鮭の骨など気にせず一緒に噛み砕いている。流石ケルト一の益荒男と評されるフェルグス、食べ方も豪快である。

フェルグスはすでに山のように盛られていた白米を半分以上食べるとふと思いつい

た様に、先ほどからクー・フリーンに食べてもらおうと鮭を丸ごと一匹頬に押し付けているメイヴに向って話しかけた。

「旨い飯に有りつけた、後は旨い酒と良い女だが……どうだメイヴ、今夜は俺と旨い酒と共に一晩過ごさぬか？」

「!?!」

突然のフェルグスの誘いに、なぜかマスターが咳き込む。デイルムツドが慌てて水を飲ませようと厨房へと入っていく。クー・フリーンは始まったとばかりに笑みを漏らし、フインはそのド直球な誘いになぜか感銘を受け、ちようどおかわりを持って帰ってきたスカサハはやれやれとため息をついている。

「絶！対！い！や！」

「即答!?! 何故だ!?!」

「だって何時までたつても終わらないんだもの！ こっちの身にもなって頂戴！ それ、に。今私はクーちゃん狙いなんですもの！ ねークーちゅわあーん」

「あーめんどくせー」

そういつてクー・フリーンに抱き着く女王メイヴ、当のクー・フリーンは面倒なのに捕まったと言いたげな表情で鮭の骨をかじっている。

「そうか……ならば邪魔をするわけにはいかな。うむ。ならばスカサハの姐さん

はどうか!」

焼き鮭をその卓越した技術で肉を一片とも残さず、だが骨は一本とも欠かさずに食べているスカサハは誘いを受けるとその箸を止め、ため息をついた。

「まったく……お主は少し節操がなさすぎるぞ。まあワシは別にかまわんが」

「おお! 僥倖!」

「その代り、食後の運動に付き合ってもらおうか。その後はまだその命が尽きていないのならばその時は相手をしよう」

「お、おお……この命、今はマスターの物。無駄に使うわけもいかんしな……その話はマスターに尽くしてから、お願いしよう」

「!?!」

デイルムツドが持つてきた水を飲んで、ようやく落ち着いたマスターがフェルグスの誘いをどういう事だと問い詰める。女性経験のないマスターにとってフェルグスの直球さは衝撃だった、マスターにとって女性とのそういう行為はもつとお互いを知り合ってからやるものだと思っていたし、恥ずかしげもなく抱きたいと相手に伝えること自体マスターには聖杯回収よりも難しいことであった。

「なんだ、マスター。女を床に誘うのがそれほど珍しい事か? 良い女がいたら声をかける。抱きたかったら抱きたいと声にする! 良い女を抱くことは良い男になるため

の「つだぞ? ああ無理矢理はいかん、そんなことは戦の褒美として村娘を襲う奴らと
なんも変わらんからな」

「!!」

「直球過ぎる? それはそうとも! 恋心は極力胸に秘める物だが、高ぶる心を収める
には俺はこれしか方法を知らん。 時には思ったことを声に出るまま伝えることも大
事なことだ」

「!?!?」

「はっはっは! そんなに恥ずかしがるな! その年ならば女子の一人や二人抱いたこ
とがあるだろう? その時の気持ちを感じ出してみる。 女を抱きたいという気持ち
は劣情ではない、抱きたい女を前にしながら何も行動を起こさないことこそが劣情……
マスター? どうした?」

「」

「ん? どうしたそんなに耳に口を近づけて、言いたいことがあるのなら直接……うむ
? ふむ……ふむ……」

どうも周りに聞かれたくない事らしく、マスターはフェルグスの耳元で話し始めた。
しかしそんな堂々と内緒話をされては誰もが気になるもの、デイルムツドの制止にも
耳を貸さずフィンは親指をかむかむし始め、スカサハはルーンを使って無理矢理盗み聞

きしようとしている。 案外ケルトの連中は悪戯好きと言うか、子供っぽい所がある。 純粋な戦闘者としての側面なのかは分からないが、そのせいで一番の常識人である デイルムツドの胃が捻じれ狂う日も近い。

「なんだマスター！ お前まだ女を抱いたことが無いのか！ なんと勿体ない！ 人生の半分を損しているぞ！」

「?!?!」

フェルグスの驚いた声が食堂中に響き渡り、食堂で食事をしていた特定の女性サーヴァントの動きが一瞬止まった。 マスターが顔を真っ赤にしながらフェルグスを殴りつけるが当のフェルグスは笑いながら、マスターに謝っている。 スカサハとフィンは何だそんなことかと呆れ半分だが、マスターにとっては自害レベルの赤っ恥である、ここにマシユがいたらそれこそマスターは自分の舌を食いちぎる勢いであつただろう。

「フェルグス、そのくらいにしとけ。 俺たちの時代と違って坊主の時代じゃそういうことは色々と厳しいんだよ」

「なんと、現代では禁欲生活でも強制されているのか」

「アンタが凄すぎるだけだ」

現代に召喚されたことがあるクー・フリーンがフェルグスをたしなめるが、フェルグ

スにとってはマスターがまだそういうことに未経験なのは驚きであった。なんせカ
ルデアにおいてマスターに好意を寄せる女性サーヴァントは少なくない。またマス
ターが自分の部屋にサーヴァントを呼び寄せることも多々あるので、そういったことは
もう経験済みだとフェルグスは思っていたのである。

「ま、マスター気をお確かに！ 大丈夫です！ 女性経験が無くともそれを恥じることは
ありません！ 私の逸話を見れば分かるでしょうなまじ女性経験があると」

「イケメンは黙つとれ
「マスター!？」

必死にケルト一番の苦労人であるデイルムツドがマスターを慰めている間、フェルグ
スがつい放つてしまった一言はサーヴァントからサーヴァントへと伝わっていつてし
まった。

大半のサーヴァントはそつとしておいてやれ。とか、そんなこと暴露してやんな
よ。とか、馬鹿め！ 何を恥じる必要がある、俺も童貞だ！ など主に男性サーヴァ
ントからの同情的な意見が多かったが、問題はそれ以外の一部の女性サーヴァントだっ
た。

「旦那様……私のために清い体でいてくれるなんて、私は幸せ者です……今参りますね」

「ああ、息子が嫁を貰った時に恥をかかせないようにするのも母の役目。嫁なんて有り得ませんが、ここは私が一肌脱ぐしかありませんね」

「食べていいの力？　ならばマヨネーズをあえるとしよう。うーん高カロリーなのだナ」

「あの、私はバーサーカーじゃなくてアサシンなのですが、なぜこのメンバーに……いえ寝床には忍び込んでますが」

と事の発端はいつも通りのバーサーカー共であった。自分たちがマスターの初めてになるのだと聞かない彼女たちはいつしか自分に初めてを捧げるために今日まで貞操を守っていたのだと話を捻じ曲げ、同士達と結託し、他のクラスのサーヴァントまで仲間に引き入れ、マスターを襲う算段までつけ始めていた。因みに皆が皆最初は自分だと思ひ込んでいたので、遅かれ早かれ内輪もめするのは確定である。

「先輩は私が守ります！　いや……あの……守った後はどうするかまではノーコメントです！」

「人類を守るためのマスターを性に溺れさせようとは言語道断です！　大丈夫です！　旗を使えば一ターンはマスターを守れます！」

「いや、私に話を振られても困るぞ、私は誓いを立てているのだし……え？　うむ、まあマスターの貞操を守るのは大事なことだな、うん」

「いやそつとしておいてあげなさいよ……ちよつと！ 誰よいまぼそつと未経験同士気が合うのかなとか言ったの!? それ不名誉とかそんなの通り越してただのいじめだからね!」

「クリステイヌ……君を汚そうとする者を私は誰一人として許しはしない……」
「息子が乱暴されようとして黙っている母がいると思えますか？」

そうはさせぬ、せつかく今まで綺麗な身でいたのだこのまま清纯な身でいてもらうと聖職者や、純潔を誓うものや、巻き込まれただけのドラ娘や、頼りになる後輩や、お前どつから湧いた精神汚染者や、あれ、貴方向こう側にいませんでした？ などなど貞操観念が高いサーヴァント達が同盟を組みマスターの貞操を守るために徒党を組んだ。

そうしてカルデアは、マスターの純潔はしかるべき時まで私が守る！ 組（反乱分子あり）と、マスター全ての初めては私が貰う！ 組（ほぼ全員が反乱分子）といやマスターが可愛そうだろそつとしておいてやれよ組に割れることとなった。

ドクターからの反応は「人類の一大事になにやっつてんの君たち!」 だったがダ・ウインちゃんも面白そうなので許可した。 やはり天才はどこかネジが一本無くなっている。

そんな中マスターはそんな馬鹿みたいなことが行われているとは露とも知らず、フェルグスから童貞だということをカルデア中にバラされた傷心を癒すために、アステリオ

スやナーサリーライムやジャックなど純粋なカルデア年少組と遊ぶようになっていた。対傷心宝具皆に絵本を読み聞かせ。それはマスターに将来保育士の職を目指させるには十分であつた。みんな純粹でかわいいや、ああこらジャックちゃん解体しちやダメでしょそんなくろひげばつちいですよ。

それが後にマスターがロリに走つたと抗争を激化させる要因となるのだが、マスターは知る由もない。

マスターの明日はどつちだ。

魔法少女のカルデア奮闘記。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとクロエ・フォン・アインツベルンは魔法少女である。

イリヤスフィールはイリヤは小学五年生、元氣真つ盛りな銀髪赤目で貴族っぽい名前で召使っぽい人が二人いて、血の繋がらない兄に恋する何処にでもいる心優しき女の子である。

クロエはクロはイリヤから生まれた、銀髪金眼でイリヤよりは艶っぽい小悪魔な性格で、イリヤ達と暮らしながらイリヤと同じ男を愛す罪深き女（自称）でイリヤと姉の座を奪い合う何処にでもいる女の子である。

二人は今カルデアで世界を救うための手伝いをしている。

本当は魔法少女の世界でイリヤはグランドマスターと出会い、共に旅をして魔法少女の世界とクロと親友の美遊を救い、元の世界へ帰還した……はずなのだが気付くとそこは知らない天井。聞けばマスターと縁を結んだことで魔法少女としてのイリヤがこちらに召喚されてしまったらしい。だが本体はちゃんと帰っているので安心してほしいとのこと。しかもついでにちゃっかりクロもいた。

最初は混乱していたイリヤだが、自分たちのために全力を尽くしてくれたマスターとマシユのためにクロと共に世界を救うお手伝いをすることにしたのだった。少女の笑顔は世界を救う。

さてそんな二人はなぜかカルデアの中でランドセルを背負い、廊下を歩いていた。

「よし、これで今日のバベツジ先生のアリでもわかる算数講座おわりー！」

「もー、なんでこんなところまで来て勉強しなければならぬわけー！」

「クロエさん知らなかったんですか？ 勉強からは逃げられないんですよ！」

イリヤのそばをくるくると旋回しながら喋るうさんくさい素敵なステツキはルビーという魔術礼装で、戦闘時はイリヤはこれを使って変身するのだ。なおその性格はどこかの割烹着メイドを思わせるが、それは他人のそら似であろう。

それはそうと二人がカルデアでランドセルを背負っている理由、それはある人物が良かれと思つてマスターに一つの提案したのが発端であった。

それはイリヤとクロがカルデアに来てからしばらくたったある日の事である、ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス、通称Pがマスターにある提案をした。

「マスター、あの少女たちに勉強をさせませんか？」

「??」

「はい、彼女たちは私達英霊と違った形でここへ召喚された身。私達とは違ってすでに完成された身ではあらず、その心と体はまだ成長途中にあります。なので下手に命の危険に晒すということは人格への影響が懸念されます。彼女たちは過去にいる私達とは違い様々な未来への可能性を持つ所謂発芽したての小さな芽なのです、私はその芽を摘ませるようなことはしたくない……」

「??」

「さすが、その通りですマスター。彼女たちの命を守るためにも知識を付けさせるのです。無論年相応の基礎的学問も学んでいただきます、どうでしょう? これならば彼女たちもここでの生活を有意義にできるはずです」

「??」

「はい? え、ええまあ彼女たちが聖杯の器ということにも興味がありますが……はい? 研究したいんじゃないか? まあ……そうですね……」

とパラケルススの提案により、彼女たちには対サーヴァントの訓練に加え、様々な講座が用意されることとなった。

小学五年生からの基礎科目は勿論、レイシフト先で役に立つサバイバル講座、はたまた料理教室など様々な講座は皆すべてサーヴァントが講師として教壇に立ち指導する。

マスターが指定してるものと基礎科目は基本的に出席するのが決まりだが、その他の講座はイリヤ達自ら決めても良いことになっており、また他のサーヴァントも興味があるならば参加して良いことになっている。――因みにアタランテのサブイバル講座は必須科目である――

イリヤが好んで通う講座は、ブーデイカのお料理講座や、メディアによる闇の魔術に對する防衛術講座、マタ・ハリのスタイルアップ講座、牛若丸の兄上から喜んでもらえる101のこと。 などである。

クロの場合はメイヴの出来る女と出来ない女の違いはここだ！講座。 玉藻の殿方を射とめる料理百選。 ヘクトールの無駄に足の速い奴はこう煽る！講座。 ブリュンヒルデの愛する殿方の仕留め方講座などを好んで受講している。

なお清姫の愛する人の見守り方、酒呑童子の ■■■ 講座、黒髭のオタクカルチャーの歴史、は諸事情より中止となりました。 ご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません―ロマニ・アーキマン

「バベツジは確かに分かりやすいんだけど、蒸気音が気になるのよねー」

「というか、あの人……人なのかな？ なんだか時々目がピカーン！ って光るけど……」

「イリヤさん達はどれだけ凄い人に算数を教わってるか分かってないみたいですねえ

……いいですかーこの先生たちは一流の一流。現代のお偉いさん方がいくらお金を積んだってできない経験をしているんですよー？」

「確かに……でもエジソンさんがライオンだつて知らなかったよ……あとテスラさんと仲悪かったんだね……」

「まあいつつ喧嘩してるしね、あの人たち……つてイリヤそれ何よ」

クロがイリヤが持っているカードに指をさした。カードには、良くできました！と可愛くプリントされたシール（ダ・ヴィンチちゃん製）が張られており、イリヤのカードにはなかなかの枚数がたまっていた。

「あれ？ クロ貰ってないの？ ちゃーんと授業を真面目に受けて宿題もやるともらえるんだー。7枚溜まるごとにね、マスターさんからなんでもひとつご褒美が貰えるの！ この前なんかマスターさんとマシユさんとでピクニックに行つたんだよ、楽しかったなー……」

目を閉じてイリヤはしみじみと思ひ出す、レイシフトで景色が綺麗な草原へと飛び、マシユとマスター二人と手をつなぎながら辺りを散歩しながら自然の景色を楽しみ、お腹が空いたら大きな木の下で三人でお弁当を食べた。どれもイリヤの好物ばかりで、びつくりするほど美味しかったし、どこか自分の兄を思い出す味だった。お腹が膨れたら、みんなでお昼寝をすることになり、マシユはイリヤに膝枕を提供し、マスターは

歌を歌いながらイリヤが寝付くまで頭を撫でてもらった。マスターはイリヤが驚くほど上手く、何処で練習したのか聞いてみると、ファントム・ジ・オペラというサーヴァントのおかげだと言ったきり、マスターの眼はなぜか遠くを見ていたのでそれ以上は追及できなかった。まあとりあえず控えめに言つても最高の一日であったのだ。

「えー！ それ私聞いてないんですけどー!？」

「クロさんは時々サボる、来ても寝てる、宿題は未提出という有様ですからねー、もらえなくても自業自得としかー」

因果観面、ぶーぶーと文句をたれるクロだが完全にクロが悪いので、イリヤはフォローする義務もなくもうそろそろ次で二回目のお願いが出来る枚数に達する自分のカードを見て笑みを漏らしていた。

次は何をお願いしようか、またマスターさんにあの歌を聞かせてもらおうか、それとも時々着ているあのスーツで執事になってもらったりとかは許してくれるだろうか。

そしてマシユさんにはメイドの恰好を……ああ妄想がひろがるプリズマ……

「イリヤさん、クロエさん、お疲れ様です。授業はもう今日は終わりですか？」

とそこにマシユがやってきた、今は鎧を脱ぎ非戦闘服姿で、眼鏡姿が大変によろしい。

そうだ二人には眼鏡を追加でつけてもらおう！ イリヤの妄想に眼鏡姿のマスター

とマシユが追加された。これで布陣は完璧である。この戦い勝ったぞ！

「イリヤさん!? 顔が今にもとろけそうですよ!?!」

「だ、だいひょうぶでひゅ……」

「それよりもマシユ! 私にもシールをよこさないよ!」

「シールですか? あれは品行方正、成績優秀者に渡される神聖な物。欲しいと言われて渡すわけにはいかないのです」

「イリヤが十枚以上持つてて私が存在すら知らなかったつて、どういうことよ! こんなの姉の面目が保たれないわ! いちまい一枚ぐらいいいでしょ?」

駄々をこねるクロにマシユは顎に手を乗せ考える、確かに一枚も持つてないのは可愛そうだが、無条件でシールを上げるのはルール違反である。なによりがんばってきたイリヤに失礼だ。散々考えた結果、手元にあるマスターへの書類を見て思いついた。

「ならば、この資料をマスターに届けていただきますか? そしたら一枚シールを……」
「なんだ、そのくらい楽勝じゃない。早い者勝ちね! このシール、私が貰ったわ!」
「ああちよつとクロ! ずるい! 私もシールが欲しいのに!」

クロはマシユから資料を強引に受け取ると、目にも止まらぬ速さでマスターの部屋へと駆けて行った。

「もう! ルビー!」

「おお、面白くなってきましたねえ！」

続いてイリヤが魔法少女へと変身「残念ながら変身バンクは省略された」し、クロの後を高速飛行によって追いかける。道すがらカリギュラのスカートが高速飛行の際のイタズラな風によってめくりあがったが、全然嬉しくない光景であった。

「あ、廊下を走ることは非常時以外禁止されています！空を飛ぶのも……行つてしまいました」

風のように走り去つていった二人に、マシユはただ佇み、ため息を漏らすだけであったが、何故だかあの二人に振り回されることはなぜか嫌いではなかった。いままで自分に身近な人物はドクターロマン、所長だけであった。それから自分の先輩が出来て、様々な英霊と出会い、自分の中の世界が広がった。その中での二人は、あるがままに子供である二人はマシユにとつてはいつの間にか守るべき対象になった。

まあ簡単に言うとな彼女の中の属性に姉属性が芽生え始めているのだが、そのことにまだマシユは気付かない。何時の日か姉属性に完全に目覚め、マスターを手玉に取るくらい余裕と包容力が目覚めた時、その時こそ真のデンジャラス・ビーストが目覚めるであろうが、まだその時に至るまでには長い道のりが必要であった。

「ターツチ！ 私の勝ちね！」

「はあ……はあ……お、追いつけなかった……」

「走りながら弓矢を撃つてくるとはなかなかクロさんも大人げないですね」

マスターの部屋までの競走はクロの勝利で終わっていた、勝因はクロから繰り出される投影による雨の様な矢による移動妨害である。

連射される矢は、イリヤの移動ルートを妨害し、強制的に変更させ、大きく遠回りさせた。途中でクロが指を滑らせ通路上にいたクー・フリーンに流れ矢が飛んできていたがそこは光の御子、矢避けの加護でその矢はクー・フリーン（術）へと向ったが矢避けの加護で、更にクー・フリーン（若）へと飛んでいき、更に更に矢避けの加護で元のクー・フリーンに行きもう一度矢避けの加護、これを三回繰り返し、元のクー・フリーンに刺さることでようやく止まった。

クロはイリヤに比べて戦闘センスは勝っている様子で、その場で臨機応変に対応できる力はマスターからも時々褒められていた。

「ふっふーん、勝てばいいのよ。勝てば！」

「お、おのれー」

クロは勝利の笑みを浮かべながら、マスターのドアの前へと立った。ドアには魔術を妨害する結果と共に指紋、声紋認証による厳重なロックが配備されており、その他に「用がある時はノックを」、「許可なき入室を禁ず」、「入った後で許可を取るとは許可を取ったことになりません」、「お願いだからベッドに入り込まないで」などと書かれてい

る張り紙が貼られていた。

クロが鼻歌を歌いながらドアをノックすると、奥から誰かの足音が近づいてきた。これで勝利はクロの者になるかと思われたが。

「マスター！ 書類をとどけ……に……」

「あら、あらあら。 どなたかと思つたらクロエさんでしたか。 てつきり悪い虫がマスターを拐かしに來たのかと……」

ドアから出てきたのは素晴らしく大きい胸であつた。 というかクロの身長だとその大きすぎる胸で顔が見えない。 だが逆に考えて胸で顔が見えない人物は限られていた。 そしてこのおっとりした声と、あらあらうふふな性格を含めると一人しかいなかった。

「ら、ライコー……さん」

「あ、頼光さん！ こんにちは！」

「あらあらうふふ、イリヤさんまでこんにちは、もうそろそろ夕餉の時間だからこんばんは。 かもしれませんね。 うふふ」

「あ、本当だ。 あははー」

イリヤと頼光は笑い合うがクロは冷や汗を流していた。 イリヤは源頼光のスタイルとその性格に憧れており、すぐに懐いて互いに仲良くなつたが、クロはそうはいかな

かった。

確かに悪い人以外には誰にでも優しいし、その凄まじいまでの戦闘力と戦術眼は参考にしてあげなくもなかったが、ある日見た光景がある意味クロのトラウマになっていた。

それは模擬戦闘時にイリヤとクロとその場にたまたま居合わせた頼光が加わった時の話だった。

その日は二人ともすこぶる調子が良く最高得点を叩き出した、戦闘終了時にマスターが褒めて、良く頑張ったねと二人を抱擁しながら撫でてくれたのだ。クロは気安く年頃の乙女を抱きしめるなとも思ったが、マスターから良い匂いもするし、まあ許してやろうと体を預けようとした時にふと頼光が目に入った、否、目に入ってしまった。

その時の頼光のマスターを見る、あの自分の子供を見る様な慈愛と一人の男として強く見ている融ける様な情愛が入り混じった目と、自分たちに視線を移したときに一瞬映った様々な負の感情が真っ黒い液体となって渦を巻いた様な恐ろしい目が。

その時クロは思った、この女だけは怒らせては不味いことになる。てかマスターはなんでこんな一つ対応間違つたらG・ジャイアント・さらばになる人と契約してるの？ と。

それ以来クロにとって頼光は天敵となっていた。

「あれ？ マスターさんはいないんですか？」

「ええ、昼から金時と鍛錬に出かけているみたいですね。また夕餉時に遅れなければいいのですけど……何か愛する息子にご用でしたか？」

「は、はい。マシユさんからマスターに書類を渡すように頼まれて……」

「まあ、偉いですね。金時ときたらなにか頼みごとしようとするたびに姿をくらますのですから、二人の爪の垢を煎じて飲ませたいぐらいです」

そういつて頼光はイリヤとクロの頭を撫でる。イリヤは気持ちよさそうに目を細めるが、クロはいつ自分の首を捻られるかと気が気ではなかった。

「マスターはおそらく今はトレーニングルームにいるでしょう。これは飴です、がんばってくださいね」

「はいー」

そういつて頼光はマスターの部屋に帰っていった。ドアが閉まった後クロから汗がどつと噴き出す。何かあそこだけ雰囲気違くない？ ルビーもなんだか一言も喋ってなかったし。てかマスターいないのにどうやって部屋に入ったの？ 疑問が次から次へと浮かぶがどれも考えないことにした、考えたくない。

「はあ……死ぬかと思った……ってイリヤ？」

気が付くと、イリヤは姿を消していた。ついでに手元にあつた資料もない。廊下を見ると廊下を全力滑走しているイリヤの後ろ姿が見えた。

「あつ、ちよつとずるいわよー!!」

「自分だつてさつき同じことしたじゃーん！ 勝負はまだ終わつたわけではないぞ！

慢心したうぬが敗因よ！」

「おのれおのれおのれ!!」

「うーん二人とも口調が可笑しくなつてますよー。これはこれで面白可笑しいからアリですが」

またまた廊下での激闘が始まろうとしていた、ナイチンゲールが居れば埃が舞うからと無理やりにも止めただろうが生憎、黒髭の部屋を消毒中で忙しく、この場にはいなかった。

「——!!」

「おお、さすが大将！ 記録更新だぜ！ こりや俺も負けてられねえな！」

ここはカルデアのトレーニングルーム、元々は選出されたマスター候補たちが使つていたルームではあるが、今はサーヴァント用に大改装され、鍛錬好きなサーヴァントや、暇を持て余し汗を流しに来るサーヴァントが利用していた。

無論マスターの鍛錬場にも使われている。日々の失敗を許されれない任務においてマスターは最重要、自分が膝をくじけば全てが終わると理解しているマスターは自分

の体を鍛える事も忘れなかった。

レオニダスや金時から効率の良い体の鍛え方を学び、食事にもエミヤ達が栄養価とカロリーを徹底して計算され、無理をしようものならナイチンゲールが殴って止める。こうして皆から支えられて作られたマスターの肉体は、己の最上へと近づいて行っていた。因みに細マツチョ体系で女性サーヴァントからの評判も良い。

まあ隣で100kg以上あるダンベルを2つも持つて楽々上げ下げしてる金時たちにはどうやっても敵う気はしないが。

「ムアスタアア！ 調子はどうですか、このスパルタじゃないスパルタ式筋肉トレーニング方式は!!」

「!!」

「そうでしよう、そうでしよう！ 健全なる筋肉は健全なる肉体に宿る！ まあ当時の私達からすれば準備運動みたいなものでしたが！」

「!？」

「ゴールデンだぜ……」

夕飯の時間も近づいており、また遅れて頼光さまに雷落とされるのは勘弁だぜ、俺っち雷神様のハーフなのによ。と各自がもう片づけ始めた時、なにか遠くから騒音が聞こえてきた。

「む？ マスター、何やら勢いよくこっちに近づいてくる気配が……」

「あん？ また廊下で馬でも走らせてるやつが……なんだあ!？」

「!？」

ガラスを破って入ってくる影が二つ、思わず敵かと思ひ二人はマスターの前に出るが、その姿を見たるとたん構えを解いた。

「マスターさん！ 書類でへぶっ!？」

「マスター！ 書類を持ってきてあいたあ!？」

イリヤとクロがマスターに書類を届けるために空中で書類の奪い合いをしているのだが、まったく事情を知らない三人にとっては親方！ 空で幼女二人がもみくちゃになっっている！ という文字だけ見ればサンソンをご紹介しますねと言われそうな状況である。

「おーい！ お二人さん何やってんだー？ ってあぶねえ！ 魔弾とか矢とかとばしてんじやねえよ！」

「ぬううん！ お二人とも危ないですよ!! ここは筋肉を鍛える場、魔術とか遠距離とか関係ない場所です！」

「!!!」

二人の激闘はヒートアップしており、矢が魔弾が室内を滅茶苦茶にしながら書類を奪

い合う事態になっている。只々呆気にとられて見ていることしかできない三人はどうにか被害に遭わないよう、身を守ることしかできなかった。

「——っあ!!」

「っ! 貰った!」

その時イリヤの手から書類が滑り落ちる、クロはその隙を逃さずに書類を取ろうと手を伸ばした。

「させないっ——!」

すかさずイリヤも手を伸ばし、二人の手はほぼ同時に書類へと伸び

「ごめんなさい……」

「ごめんなさい……」

「ぶっクスクス……ぶふー!」

「全くもう!」

夕飯の時間、賑やかなカルデアの食堂で大きなたんこぶを作った二人と笑いをこらえている性悪ステッキはマシユのお説教を食らっていた。

カルデアのトレーニンブルームは壊滅的でありしばらく使用禁止、廊下の三割がぼろぼろになる有様であった。二人のたんこぶはそれを知ったナイチンゲールから賜つ

たものである。

結局書類も二つに破けて、読めたものではなくなった。

「全く、只の競走ならまだしも撃ち合いをしながらなんて！ マスターが怪我をしたらどうするんですか！」

「……………」

「いいえ、マスターは甘いんです！」

珍しく強気なマシユにたじたじなマスター、傍から見れば尻にひかれた夫とその妻である。怒られているイリヤは少し涙目で、クロもさすがに反省して俯いている。

「はあ……全くもう、反省しているのでこれ以上はもう怒りませんが。当然、シールは無いです」

「うう、ごめんなさい……」

俯く二人を見て、マシユが溜息を吐くとポケットからセイバーのイラストが描かれたシールを二枚机の上に置いた。

「え？ これって……」

「代わりとして、廊下の掃除とトレーニングルームの補修を手伝うこと。いいですね？」

二人の顔がみるみる内に明るくなった、シールを持って飛び跳ね始めた。それを見

てマシユも少し笑った。

「私も十分甘い？ ……ふふっそうかもしれませんね。 あっ……」

マスターがマシユの頭を優しくなでる。 慣れない感覚に顔を赤くしながら次はマシユが俯いてしまった。

「わ、私にもご褒美ですか……いえ！ 決して嫌では……はい、そのまま……」

なんか遠くから熱い目線を感じるがマスターは気にしないことにした。 気にしなくない。

しばらくしてイリヤがシールをカードに張り付けてからマスターの近くにやってきた。 マシユは真っ赤になっただままだ。

「ま、マスターさん！ これ！」

マスターの目の前へカードを持ってくると枠はすべてシールで埋まっていた、マスターへのお願い権が満たされていることを知らせたかったのだろう。

「はい！ それで今度のお願いなんですけど……えーつとこんな時どう伝えたら……ルヴィアさんの所にいた様なメイドさんの様な……」

自分が伝えたいことが上手く表現できないのか、記憶を巡って適切な言葉をひねり出そうとしているイリヤ。 マスターの方は次はシヨツピングかな？ と考えていたが

……

「えーっと！ そうだ！ 男のメイドさんになってください!!」

「

食堂が凍った。 何名かのサーヴァントは席を勢いよく立つ。 何処かの女神の姉妹が邪悪な笑みをこぼす。 黒髭がカメラの用意をする。

マスターの未来はどっちだ。

若返りマスターと、慈母アタランテ。

人理継続保障機関フィニス・カルデア。人類の絶滅を防ぐために設立されたこの機関は今やこの地球で唯一人間が存在できる場所である。

作戦開始前には百人単位が在籍していたカルデア職員たちも、レフ・ライノールの爆破テロによって二十数名にまで数を減らされていた。いまや召喚されたサーヴァントの方が多という事態である。

正直に言うと結構肩身が狭い。周りには本に出てくる偉人、英雄ばかり、どうも自分たちが話しかけて良いものか考えるのだ。そう考えると最後のマスターの少年やドクターロマンは大したものである。

「しかし、英霊にも現代料理に精通している者がいるとは驚きだな……」

「ええ、しかも滅茶苦茶美味しいわ……エミヤという英霊が来てから職員の士気は五割増しよ」

「前は交代制だったからなあ、いかんせん当たり外れの差が大きくて……」

「あ、そういうえば私エミヤさんからお茶に誘われたことありますよ」

「なんと!？」

「意外と気さくなのか……」

カルデアの食堂で食事をしながら会話をしているのは、休憩中のカルデアスタッフである。如何にも研究者という風貌の者から、会社の受付にいる様な者まで様々だ。

それもそのはず、あの大爆発から生き残れたのはその場になかったからである、作戦の主要メンバーではなく、裏方の研究職、アナウンス係、副オペレーターなどである。

それでも皆一流の仕事をこなす者達だが、周りがその上を行く天才ばかりなので直接的な仕事から外されていた。それが今は人類の滅亡をかけた作戦のメンバーである、その心理的重圧は想像もできない。

「あの少年はどうしている?」

「今は戦闘シミュレーション中みたいですね、凄いですよあの子、毎回スコアを更新していきます。疑似サーヴァントを使ったマスター候補四十七名の時のスコアじゃもう相対的戦闘評価はできませんね」

「へえ、大したもんだ。最初の頃は評価外としてマシンから評価もされない有様で、大丈夫なのかと不安になっていたが……立派になったもんだ」

「時々一緒にご飯食べたりしますよ、私の休憩時間とあの子の夕食の時間が被るので」

「意外と交友関係があるのね、貴女……それで彼は?」

「ええ、意外とノリが良いというか、話し上手でした。あと笑うと結構可愛いですよ」

「そういう事じゃなくて！ 彼の体調などに異常はなかったか聞いてるの！」
「あああ！ はい！ 元気な様子でした！」

カルデアスタッフ達に笑いが起きる。基本的に皆仲は良い、技術職と研究職とで対立したりするが皆こうして一緒に食事をして笑い合うぐらいには仲は良いのだ。それは皆々の心の中に「世界が危ないのに、個人的な喧嘩をしている場合ではない」と思っている所もあるのだろうが、皆あのドクターロマンのようにお人好しなのも一因であった。

「全くもう……」

「でも先輩も年下好きって言ってませんでした？」

「なっ!？」

「あー、だから少年が廊下を歩いているときジーンと見てたわけか！」

「堅物女史の意外な一面を発見だな」

「ちがっ違う違う!! ただこのカルデアの一番の重要人物だから気にしてただけだ！」

「それだけだ！ 本当だぞ！」

顔を真っ赤にして否定する白衣を着たカルデア職員。余りにも必死に否定するので、あれ？ もしかしてマジで脈ある？ とその場にいる全員が疑惑を持つこととなった。

「しっかし、子供の頃はこんなことになるとは思いませんでしたな」

「そうですね。子供の頃なんか魔術なんて本当にあるとは思わなかったし。まさか世界を救うお手伝いをする事になるなんてさらに思いませんでした」

オペレータ担当のカルデアスタッフが小さく笑う。ポニーテールと豊満な胸が揺れる様を見て、なるほど、エミヤという英霊もなかなか目のあるやつだと男子職員は心の中でひっそりと思った。

「私は家系が魔術師の家系だから、魔術の事は知っていたな。テレビであるような夢のある物ではなかったが……しかし年かな、子供の頃を思い出すなんて。ん？」

何かに白衣を引っ張られる感じがした堅物女史と呼ばれているカルデアスタッフはふと引っ張られる方へと顔を向けた。

「……子供？」

「どうしたどうしたー？」

「わ、かわいい子ですねー？ 誰の子でしょう？」

「堅物女史の子か？」

「んなわけあるか！」

そこにいたのは、小さな子供であった。近頃召喚された魔法少女よりも少し年下ぐらいであろうか、黒い髪の毛に綺麗な青い目をしており大人しい印象を受ける。

その子供が無言で白衣を引っ張っていた。その仕草だけでも可愛らしい子ではあるが、疑問がカルデアスタッフたちに生じた。

「この子、何処から来たんでしよう？」

カルデアには子供はいないのだ。いや、いると言えばいるのだが、それは人間ではなくサーヴァントだ。しかしながら目の前の子供はれっきとした人間である。

ならば誰の子供か、生き残ったスタッフの中には子供持ちはいない。ならば何処かのサーヴァントがレイシフト帰りに連れてきたか？ カルデアのサーヴァントの何人かはやりかねない奴が何人かいる。だがそんなことをすればマスターが気づくだろう。謎は深まるばかりだったが、その謎は一人のデミ・サーヴァントの登場によってあっさりと解かれた。

「せんぱーい！ どこですかー!! せんぱーい!!」

マシユが大声を上げながら、食堂へと入ってきた。元々大声を上げるような子では無いので皆驚いてマシユの方を見る。マシユは視線に気付くとスタッフの方へと近づいて行った。

「お食事中しません、先輩を見ませんでした？」

「先輩って、あの子でしょ？ 一緒に模擬戦闘中じゃなかったの？」

「それがいろいろと事情がありまして……」

「ああそうだ、こんな子が居たんだが。この子はあれか？ 新しいサーヴァントか何かか？ それにしては人間の反応が……」

そういいながら子供を抱き上げてマシユの前へと立たせる。その子供はマシユを見ると咲いた花のような可愛らしい笑顔を向けた。だが当のマシユはその子供を見ると驚くべきことを口にした。

「先輩！ 此処にいたんですか！」

「……はい？」

時は模擬戦闘の休憩時まで遡る。二人は流れる汗を拭きながら、水分補給をしている。空中に今回の戦闘評価が表示される、画面にはハイスコアを示す王冠のマークが表示されており、二人の戦闘技術が成長していることを示していた。

「先輩お疲れ様です。ハイスコア更新ですよ、さすが先輩です日々成長していつています」

「！」

「わ、私のおかげ……ですか？ い、いえ私は先輩の指示通りに動いているだけですし。」

「私はもつと先輩のお役に立ちたいのです、もつともつと……」

「！」

「私がいるから頑張れる？　　そ、そうですね……そういつてもらえると嬉しい……です」
赤くなった顔を見られないように少し俯くマシユ。　　メディアさんが見たらさぞお肌
肌が潤う光景であろうが、その光景は突然マスターが胸を押さえ苦しみ始めた事で終わ
りを告げた。

「先輩!!　　どうしたんですか!!　　しっかりしてください!　　ドクター!　　ドクター応答
を!」

苦しみに耐えられずに倒れ込んだマスターに駆け寄り、マシユは即刻ドクターロマン
へとモニターをつないだ。　　ドクターの方もマスターの異常を検知したらしく慌しく
動いている。

「マシユ!　　彼のバイタルが急激に変化している!　　いっただうしたんだい!」

「分かりません!　　いきなり苦しみ始めて……ああ駄目!　　しっかりしてください!
マスター!」

見るとマスターの体はどんどんとその体を縮ませ……縮ませ?

「マス……え?　　え?」

「マシユ、どうしたんだい!?　　次は彼のバイタルが急に異常値から安定値に戻ったぞ!
彼の身にいったい何が起こったんだい!」

「ドクター……マスターが……」

それはマシユが何時も目にする黒い髪、凜とした綺麗な青い目。そこだけ見れば何処も異常は無かった。

「子供になってしまいました……」

「……はい？」

他全ては子供のそれになってしまっている以外は。

「もう！ 辺りを一人で出歩いては駄目だといったでしょう！ ここは広いんです、危ないんです。危ない人に攫われたらどうするんですか！」

保護してもらっていたカルデアスタッフの皆さんに礼を言ってから、食堂からマイルームを目指しマシユと子供になったマスターは手をつないで廊下を歩いていった。

傍から見ると年の離れた姉と弟の微笑ましい光景にも見えたが、実際問題カルデアの危機である。

ドクターロマンとダ・ウインチちゃんが調べたところ、サーヴァントとの契約も令呪も機能しているがマスター自身の記憶が幼少期まで戻ってしまっていることが事が分かった。つまりサーヴァントを指揮する能力が失われてしまっているのだ、この状況だと聖杯探索どころかもし敵がマスター目当てに敵を送ってきたりでもしたらおしまいである。即刻ダ・ウインチちゃんは元に戻すために研究を始めた、あとこういう事

態の時の大体の黒幕パラケルススにも出頭命令を出した。

とりあえず、今の最重要事項はマスターの安全なのだが、この子供マスター中々好奇心旺盛で、マシユの目を盗んではカルデアの中を探検しようとするのだ。

そのせいでマシユはそのたびにカルデアの中を探し回る破目になった。まったくジル元帥にでもぼつたり出会ったどうするのか。

「やつほーマシユ。何して……ややや！ なにこの子！ かわ、かわいいー！ 抱っこさせてー！」

「あら、本当。なんだかマスターに似てるわね……？ 貴方の子供？」
「ち、違いますー！」

すると、声より先に服装で誰か分かるカルデア選手権上位のブーティカとマタ・ハリのコンビが声をかけてきた。子供化しているマスターを見るなりブーティカは素早い動作でマスターを担ぎ上げた。妙にテンションが高い、久しぶりに親戚の子供を見てテンションが上がるおばちゃんのようなのだ。

「じ、実は……」

マシユが事情を説明する。二人はにわかには信じられない様子であったが、手の令呪と魔力のパスの通じ方を見ると信じざるを得なくなった。

別に秘密にしているわけではないのだが、知ったと勝手に元々暴走しているのにさら

に暴走に暴走を重ねそうな人物に何名か心当たりがあるので、なるべく知られないようにしたいのがマシユの本音であった。子供になつてもマスターの女難の相というか人難の相は失われない。もはや呪いではなからうか。

「んー、確かにあの子の面影があるねー！　こんなかわい子が十年もすればあんな凛々しくなるんだから正に男子三日会わざればってやつだ！　もーお姉さんちゅーしちやうー！」

「あら、じゃあ私も……」

「ちよ、ちよつとお二人とも何を!?」

二人のお姉さんにサンドされながらキスの嵐を食らう子供のマスター、大人たちから見れば何とも羨ましい光景であるが、生憎当のマスターは子供。美女二人のキスを鬱陶しく感じたのか強引に抜け出すとまた廊下を駆けだした。

「あら残念、振られてしまいました」

「なるほど、子供のころから硬派だったか」

「ああ、また！　待つてくくださいマスター！　一人で歩いたら危険だと……」

待てと言つて待つ奴がいるか、マスターはマシユの呼び声を無視して駆けだす。だがマシユもデミ・サーヴァント、子供の走力なんかでは数秒で追いつくだろう。

だが、マシユがマスターを捕まえようと駆けだした瞬間、一陣の風が吹き、マシユが

瞬きする間にマスターの姿は掻き消えてしまった。まさに一瞬の出来事である。

「先輩が消えた!? まさか何かの魔術で……」

「いや、あれは物理的な速さだね。凄い速さ、私じゃなきゃ見逃しちゃうね」

「と、どうか早すぎて逆に判別がついてしまうわね。子供好きって話ですから、出てこない方が不思議ですけど」

困惑するマシユとは反対になんだか分かり顔の二人、何のことだか分からないマシユはさらに困惑してしまう。 どういう事か尋ねると、二人は笑いながらあるサーヴァントの名前を出した。

「マスター、起きたか。 すまない、汝には少し速過ぎたみたいだな……」

強い衝撃のせいで少しの間気を失っていたマスターが目を覚ますと、そこは獅子の様な耳と尻尾を持つサーヴァント、ギリシャ神話の狩人アタランテの部屋であった。

「うむ、なるほど確かにマスターだ。 子供になってもその令呪は消えないのだな」

マスターはアタランテに抱きしめられている形にでベットに座っており、アタランテからは先の二人のような圧倒的柔らかさは感じなかったが、まるで動物が自らの子供にするような頬ずりと、ほのかに香る林檎の香りがマスターを安心させた。 マスターを抱きしめているアタランテの眼はいつもの獣の様に鋭いものではなく我が子を見る様

な柔らかな目差しであり、その表情は聖母の笑みを思わせる微笑みだった。まあやったことは衝動的な誘拐なのだが。

「うむ、汝の匂いがする……令呪を見るまでもなかったか。この匂いも変わらないのだな……私の好きな匂い……」

「？」

「うん？ 私からも林檎の匂いがする？ ふふ、そうか……そういわれたのは初めてだな、子供になる前のお主もそう感じていたのか？」

「??」

「ああ、今の汝には分からぬか。今お主を戻すために様々な者どもが東から西へと走り回っている。その姿もあと数刻で元に戻るだろう。だから、もう少し、このままで……」

アタランテは少しマスターを抱きしめる力を強め、その髪に顔を埋める。マスターには少しくすぐったかったが、母に抱きしめてられているような安心感がマスターを包み、マスターはアタランテへと体を深く預ける。ダ・ウインチちゃんが見ればノリノリで絵にしようとするほど美しい姿だった。

「」

「母、か。私は子宝に恵まれなかったから良くわからないが……なるほどこれが親子

という物なのかもしれない」

ふと、ありえないことだがマスターとの子供を夢想する。黒い髪には少し緑がかかっており、目の色は父似。目つきは男児ならば父似に、女兒ならば母似になるだろう。尻尾と獣耳は生えてくるだろうか。……なるほど意外と悪くない気分だ、心臓も少し高鳴る。確かに他のサーヴァント共に見せると場合によっては暴走するだろう。この形容しがたい気持ちには中毒性がある。

「……………」

「眠るがいい、マスター。次に目が覚めた時は元に戻っているだろう」

アタランテに頭を撫でられながら、ゆっくりと微睡の中に身を落とすマスター。最後に感じたのは唇に何か当たった感触であった。

「いやあ、あの少年がまさか若返るとは……」

「英霊という奴は何でもアリだな」

「お肌が潤う薬とか作ってもらうことってできるでしょうか？ 徹夜続きでお肌が

……………」

「止めておきなさい。ロクな目に合わないわよ」

数日後、カルデアの食堂にて四人のカルデアスタッフたちが昼食を食べていた。今

日の料理はブーティカの新チューである。大きく切られた野菜が濃厚なシチューと絡み合い、しかしながら優しい味。隠し味に少しのチーズが入っている。旨い。

「何にせよ元に戻ってよかった。原因は何だったんだ？」

「あるサーヴァントが作った薬を、勝手に持ち出した馬鹿がいるらしい。それで食堂に隠していたら、あの子がエミヤ特製のスポーツドリンクと間違えて持つて行ったのが事の発端らしい」

犯人はBB AをBB Aじゃなくしてやろうと思った。反省はしているが後悔はしていないでござる。と供述しており、ルーラーたちによるカルデア裁判ではリアル黒髭危機一髪の刑の判決が下された。因みに黒髭だけじゃなく被告が入る樽も刺す剣もリアルである。

「お騒がせな……まあ子供になった彼は中々可愛かったな」

「あー、マシユが連れて行ったときすこし寂しそうだったな、自分の膝にも乗せていたし」

「あれ？ 先輩もしかして目覚めちゃいました？」

「堅物女史の意外すぎる一面だな」

「違う！ 違う違う!!」

真つ赤になって否定する白衣のカルデアスタッフ、あまりにも否定するので周りは、

あれ？ これもしかして。 とある疑念を持たざるを得なかったがとりあえず笑いでごまかした。

「全く、人をからかうのも……ん？」

なんだか白衣を引つ張られる感覚がした。 なんだかこの前もあつた様な。 と、嫌な予感を覚えながら顔を向けると。

「子供……」

「じゃあご馳走様」

「うむ、シチュー。 美味だった」

「あ、私エミヤさんとお茶する約束があつたんでした！」

とてつもなく嫌な予感がしたカルデアスタッフは皆席を立つ、なんだか次は見ているだけじゃ済まない気がしたのだ。 なんだか遠くから騒音が聞こえてくるし。

「大将ー！ 何処だー！！」

「せんばーい！！」

そしていきなりバイクで食堂に突入してくる金時（騎）とマシユ。 どこかその顔は焦っている、まるで何かから逃げているかのように

「どおとおおーおおとおおにいいいい行ったのですかあああああ？」

と、遠くからおどろおどろしい声が聞こえてきた。 え？ カルデアに魔獣かなんか

バイクの車体が、車輪が変化し、まさに雷の速さで食堂から発進した。 堅物女史の悲鳴が一瞬で遠くなる。

「……なんだったんだ？」

「とにかく関わらないのが一番だ、南無、堅物女史よ。 人類の平和は私たちに任せろ」

「と、とにかく厨房から出ましょ……う……」

食堂に戻ろうとしたオペレータ担当のカルデアスタッフが固まる。

「うん？ どうし……た……」

「……やばい……」

三人の目の前に、古風な美人が立っていた。 長く美しい黒髪に、何ともオペレータ担当のボディを超えるダイナマイトボディであったが。 誰がどう見ても正気には見えない、目にはどうやったのか大きくハートマークが描かれており、鼻からは一筋の血が流れていた。 表情は心ここに非ずといった感じで、目は虚空を見つめている。

「あの……ここに私の子が来ませんでしたか？ あとバイクに乗った我が子も……もしかしてご存知ですか……？」

目が三人を捉える、どうも自分たちにも危険はないと思つたがそれは思い違いだったらしい。 影がどんどん三人に近づいていき、食堂は悲鳴と絶叫で満たされた。

カルデア職員の明日はどっちだ。

お菓子に目が無い茨木と、可笑しな集団との話。

深夜。サーヴァントも眠る―サーヴァントに睡眠は必要ないのだが―丑三つ時、誰もいないカルデアの食堂に影が一つ。

人のモノではない大きな二つの角、燃えたぎるように赤く、武者鎧を容易く切り裂く爪をもつ手足。そして金色に輝くばかりの美しい長髪。見よ彼の者は人ではあらぬ、人から奪い、人を攫い、人を食す。見よ彼の者は鬼である。大江山の鬼である。

大江山が大将、大江山の茨木童子である。

そんな鬼が夜更けに人目を忍んで、まるでコソ泥のようにカルデアの食堂に忍び込むのには重大な理由があった。

大江山の鬼がそんな恥を忍んでまでやらなければならぬ理由、それは――

「きひひひ、くふふふ、きゃっはははははは！ あった、あったぞ！ あつぷるぱいとやら
！」

洋菓子探しであった。

「うむ、どうなつにぷりんもあるな……くふふ良い、良いぞ！ 正にここは宝物殿！ 洋菓子宝物殿よ！」

既に片手にはこの頃教えてもらったココアを注いだコップを持っている。これはココアパウダーと同じ量の砂糖を入れ、溶かし、更に生クリームと牛乳を入れて甘々にした特別レシピである。マスターがレイシフト中の疲労回復のためにエミヤから教えてもらった秘伝のレシピで、どんな疲労も一発で吹っ飛ぶのだ。作り方はマスターやエミヤは頑として教えなかつたため、時々温めにして飲ませてもらったいたフオウ君から聞きだした。

「旨し。ココア旨し」

過酷なレイシフトに於いて粉末ココアは志気向上薬に属す。今飲んでいる鬼は只の甘いもの好きなだけであるが。

「おのれあのマスター^人_間め、あつぷるばいはあの緑の狩人の物だから駄目だと？ ふん、そんなことをはいいそうですか、と素直に聞く鬼がいるものか！ 鬼を何だと思っておる、幼子と同じような扱いをしておって……おお！ これは見たこともないチョコレート！ 吾が美味しくいただいてやろうではないか……」

エミヤ達が日々のおやつ用に作って保管している冷蔵庫から、両手で抱えるほどの洋菓子を持ちご満悦の茨木童子。おそらく翌日にはデザート盗難という第一級カルデア法違反者として山狩りならぬカルデア狩りによって捕縛、肅清されるだろうが、今の茨木童子にはまったくもって知りえぬことであつた。

「ふふふ、大量大量。奪いたいだけ奪い、食べるだけ食う。これが鬼の醍醐味よー」
それでいいのか鬼の醍醐味。上機嫌に鼻歌を歌いながら食堂から出ようとした瞬間。何者かの気配を捉えた茨木童子は素早く厨房へと入りその身を隠した。流石の鬼である、一切気配を感じさせぬ見事な隠れ方であった。その両手にスイーツが無ければ。

「あら？ 誰かの声が聞こえた様な気がしたのですが……まあいいでしょう、議長である私が遅れては示しがつきませんし……」

食堂へと入ってきたのは、カルデア一正直な乙女（本人談）清姫であった。何時もとは違う漆黒の着物を来ており、食堂に入ると何もせず手に持っている蠟燭の明かりだけをつけ、席に着いた。

「なんだ？ あやつもすいーつを食べに来たのではないのか……何にせよあやつ一人なら気付かれずにここから……ん？」

ココアが冷めぬ内にと食堂から気配を消して出て行こうとした時、またも食堂に誰かが入ってきた。人間ではない事は確かだが、只でさえ暗いうえになぜか「母」と書かれた紙袋を被っており、誰だか判別がつかない。何にせよ恰好を見る限りまともな奴ではなさそうだ、と茨木は自分の今の姿も顧みず思った。

「あら、あらあら。議長、お早いですのね」

「これはこれは、いつも一番手に来るとはさすが『まざあ』様ですね」

「いえいえ、名誉会員としてこれ位は……あら、他の皆様もおいでになられたようですね」

すると二人だけではなく、そろそろと数名が食堂の中に入ってくる。どれも紙袋を頭に被っており、なんだか怪しい宗教集団のようだ。なんだか茨木は即刻逃げ出した気分になったが、なかなか食堂にいる謎の人物たちは手練れの気配を持っており上手く逃げだせる機会が掴めない。なので茨木はこの怪しげな集団が食堂を去るまで厨房に隠れるしかなかった。

「皆様、集まりのようですね。今回はめでたく新しくこの会合に加わったメンバーを紹介いたします。毒、こちらへ」

清姫は、皆が着席したことを確認すると一人の女性を紹介した。清姫に呼ばれた女性が前が出る。なんだか褐色な肌色に、黒い衣装に青い花を一刺ししていて、「毒」と書かれた紙袋を頭に被っていた。

「あの……初めてお呼びにかかりました。毒と申します……今回はきよひ、議長からお誘いを受けてきました。あの、よろしく願います」

周りから小さく拍手が送られる。毒と呼ばれた少女はあまり人前に出ることが慣れていないのかいそいそと自分の席に戻っていった。

「それでは、早速今回の議題に移りましょう。毒さんは初めてですから無理をせず、嘘をつかないようにゆっくりで結構ですからね」

議長と呼ばれている清姫が何処にしまっていたのか、プラカードを出すと机の上に立てた。

「今回の議題は、『旦那様が時々見せる男らしい姿』です！」

「おぉー」

「は？」

思わず茨木から声が出た、出さずにはいられなかった。なんだこの集会、大江山でもこんな間抜けは集まりはなかったぞ。なんぞこれ……なんぞこれ……茨木の頭に疑問が次々に浮かんでは消える。

「今回は、大人しめだけれどいざという時には熱くなったり、夢中でふざけたりする旦那様の、時々見せた胸が高鳴る男らしい姿を報告していただきましょう！」

「じゃあ、まずは僕たちが」

手を挙げたのは二人のサーヴァント、背の高い方は「海」、背の低い方は「賊」と書いてある袋を被っている。

「この前に、レイシフトの事故で南国の島に遭難した時の話なんだけど」

「その時にメア……賊さんが何かに引っかかって転ぼうとした時ですわ」

「その時に、マスターがとつさに僕を抱きかかえてくれてね。マスターって意外と筋肉あるんだよ？ 知ってた？ その時はマスターも水着だったから、胸板に密着してね。 ああこの子も男なんだなあ……って」

「その後に私も転びましたけど、その時はさすがに支えきれずに一緒に倒れてしまいました。 まあその後は……ふふふ」

「最後が何か気になりますけど……なるほど、それは中々乙女心にくるシチュエーションですね……」

食堂の各々が二人に賞賛を送る、ぶつちやげ皆紙袋被っているので何かの儀式にしか見えない。 怖い。

「じゃあ次は沖……桜さんがいきますよー！」

勢いよく手を挙げたのは「桜」と書かれた紙袋を被った、和服姿のサーヴァントだった。 なんだか紙袋の口元らへんが赤く染まっている。

「この前に一緒にマスターと一緒に模擬訓練を行った時の事です！ その時は桜さんも一緒だったからなのか、高難易度の訓練も難なくクリアーし好成績を残せました！ そして休憩時に、汗をタオルで拭きながら水を飲むマスターの姿がなんだか色っぽく見えたんです！」

「……それだけですか？ 確かに水も滴る旦那様……と言いますが、海賊さんコンビと

比べると……」

「いいえ、これからです！　それで、休憩中に私の病弱スキルが発動してしまつてまた吐血してしまつたんです。　そしたらマスターがすぐに駆け寄つて抱きかかえてくれて……そ、そして自分が飲んでいた水をわ、私の口にツ!!」

「なんと……!」

何人かの紙袋が席を立ちあがる。　食堂がざわめきに満たされ、清姫がテーブルを扇子で叩き静粛を促す。　それほど衝撃な出来事だつたらしい。　マスターからすれば無意識にやったことだろうが、それが実性質が悪かつた、こつちのアプローチには氣付いて流す癖に、自らアプローチしたときマスターは殆ど無自覚である、自らが人間誑しだと氣付いていない。

「だつたら俺も、マスターと無人島の時に一緒に寢床で寝たぞ!」

と袋に「サモ」と書かれたサーヴァントが声を張り上げた。

「だつたら、私も子イヌと一緒に一緒にの宿屋に泊つたわよ!　何にもなかつたけど!」

その次は「鱈」と書かれた紙袋を被る、水着か鎧か分からない衣装のサーヴァントがカミングアウト。　場は一層盛り上げを見せた。

「静粛に!　今回の議題は旦那様ますたあが見せる男らしい姿ですよ!　まったく、それはそうと先ほどの二人の発言が嘘では無いことが分かつたので問い詰めてきてもいいですか

「？」

なんだかんだで一番落ち着いていないのは清姫だった、先ほどから口から火がチロチロと出ている。いつ転身火生三昧しても可笑しくない状況である。

先ほどからうんざりとしてゐる茨木がさらにうんざりした。一体何なにやつてるのだこやつ等、そんなに欲しいなら奪えばいいではないか、英霊共がなんとなさけないと。

「ならば、私が……」

場を元に戻すように、「無当選」と書かれた尻尾が生えたサーヴァントがおずおずと手を挙げた。

「私が部屋で過ごしていると、突然マスターが部屋に来た。マスターがあちらから部屋に来るのは珍しいことだとは皆知っていると思うが、手にアップルパイを持っていてな。どうしたのか聞くとなんとマスター自らが作ったというではないか。何時も世話になってゐるからと私のために他の英霊に作り方を聞いてまで手間をかけてくれたのだ。その時のマスターの笑顔と私に隠そうとする絆創膏だらけの手がいまだに忘れられない。他と比べると男らしい姿ではないとは思いますが……私はそういう所があやつが一番良いところだと思ふのだ」

部屋が静まり返る。清姫も、周りの紙袋も皆、頭を覚ましたようだった。飽きれ

ていた茨木も、少し驚いた顔をしていた。あれ？じゃあこのアップルパイ誰の？と。

「そうですね、そういう所が旦那様ますたあの良い所ですもの」

「誰が良い思いをしたかで争っているのではあの子の良い所を見つけられませんものね」

各々がしみじみと思い出す、サーヴァントの自分に親身になってくれたマスターの事を忘れて自分の事ばかり語っていた。そういう所に信頼を置いたのに。と

「そうやねえ、旦那はんはそういう所が一番男らしいわあ。どこかの鬼がその無当選はんの洋菓子愚図るもんやから、仕方なく苦労してもう一つ作るところかなあ……なあ茨木？」

気付くと茨木の後ろに「酒」と書かれた紙袋を被った、恰好が過激な幼子型サーヴァントが立っていた。紙袋からなんだか角つぽい物が飛び出ている。

「その声、もしかして……」

「盗み聞き、趣味が悪いわあ……あとその両手にえらい乗ってる甘味、それはこの後皆で食べるもんやって……しつとつた？」

「いや、あの、その……これはその……」

「酒」の字がどんどん赤く光る、逃げようとするやとすぐ後ろには、紙袋たちが囲むように

立っていた。それぞれ開いた穴から鈍く光る目が除く。

「いや、まて話せばわかる！　そ、それに酒呑の話ではこのあつぷるぱいは吾のもの……」

震える茨木に紙袋たちがじりじりとにじり寄る。　食堂のドアがゆっくりと閉まっていく……

「お、おうちかえるー！！」

——茨木童子の明日はどっちだ。

清姫外伝、焰色の接吻編

ここはおなじみ人理継続保障機関カルデア。今日も様々な英霊たちが集い、力を合わせて人類を救うためにマスターと共に特異点へと赴く。まさに人類最後の希望である。

そんなカルデアで、一人のサーヴァントが嫉妬の炎で身を焦がしていた。

「この頃、私の扱いが雑ではありませんか……?」

腰まで伸びた綺麗な長髪は絹の糸のようにきめ細かく、上品に笑う様は鈴の音の様な声も合わさって、見た者の記憶に焼きつくほど可憐で、行動一つ一つに品があり、まさに立てば芍薬歩けば牡丹な少女。幼さの残る顔には恋に燃えて爛々と輝く目に、二つの角。彼女は恋に燃える女、日本が生み出した恋に生きた女シリーズ（玉藻作）の代表ともいっても過言ではない少女。清姫である。

因みに恋に生きたシ

リーズの原点は玉藻ママであるらしい

「旦那様の伴侶と言えはこの私、私の旦那様といえばますたあ。正に相思相愛の究極系だと言っても良い関係のはずなのに、このごろの旦那様ときたら他の女性に首ったけ

の様子……私の事は忘れたとばかりに訓練なども頼光さんや、酒呑さんなどとばかり……これはもはや浮気といつてもいいのでは……？」

元々女性から慕われる性質なのは分かっている、自分が愛した安珍の生まれ変わりなのだ。女性から慕われるのは当たりまえ、だからマスターが周りからちやほやされようとも笑って許せる、なぜなら妻は自分なのだから。

だが、他の女の所に行くのは許せない。自分が愛した安珍の生まれ変わりだからこそ、今度こそ約束を果たしてもらおう。忘れるものかこの痛み、忘れるものかこの悲しみ。是我安珍。ゼーガアンデン

というわけで清姫はいよいよへびおこであった。まあ他の女性サーヴァントに焼きもちを焼いているだけなのだが、このままでは焼きもちどころか焼きマスターまで出来そうな勢いである。裏を返せば自分のマスターを盗られそうだと焦っている証拠でもあったが、今の清姫の頭の中にあるのはどうやってマスターの目を自分に向けさせるかであった。

「しかし、どうしましょうか……お部屋に入ろうとも旦那様ますたあの部屋は簡単には入ることが出来ません……」

出会ったばかりの頃のマスターの部屋はまだ部屋のロックも只のキーカードで行われているだけの簡単な扉であり、清姫は毎日のように忍び込んでその体に抱かれようと

迫ったものだが、今では、指紋、声紋、構成遺伝子の認証ロックに加え、エクスカリバーのビームを三秒程度なら耐えられるほどの魔術的にも物理的にも強靱な扉でその部屋は閉ざされており、そう簡単には侵入できなくなっていた。清姫にとっては自分の事を理解して貰っている様な感じがして、とても嬉しく思っていたが、このような時はとても煩わしい。扉の接続部分を根気よく、大体四日ぐらいかけて溶かしていけば侵入できると思うが、いかんせんその間にマスターが帰ってきては意味がない。

「仕方がありません。こういう時は妙に凝らずにすれえとに行くのが一番だと玉藻さんも言っていましたし、原点に立ち直るとしましょう！」

「ダーリンの心を仕留める101の方法」(アルテミス、玉藻共同出版)を握りながら立ち上がる清姫。　　なんだか碌でもないことが起きようとしていた。　　そこ、いつもの事とか言わない。

次の日、マスターが部屋から出ようとすると妙な光景に出会わした。

「はい！ 私、清姫は一大決心いたしました！」

なぜマイルームの前に正座で居るのかをマスターは聞いたのだが、完全に聞こえていない。　　なんだか今日の清姫はいつもにもまして暴走しているような雰囲気マス

ターには感じ取れた。だってなんか二ト口の甘い匂いがするし。

「旦那様ますたあ、いえ今からはだありんと呼ばせていただきます！　だありん！　私と恋人からやり直しましょう!!」

部屋に戻り、扉をすべて施錠するマスター。ヤバイよ、清姫がスイーツ拗らせちゃったよ……マスターは頭を抱えた、なんだかアルテミスを見たアタランテの気持ちがいまなら分かる気がする。いつも何を言ってるか分からない清姫であるが、今回はいつにもまして訳が分からない、だありんってなんだつちや……

「ああ、ますたあ！　じゃなかつただありん！　お願いします！　今日だけは今日一日だけはちゃんと話を聞いてくださいまし！」

激しいノックと共にマスターを呼ぶ声が聞こえるが、心を鬼にして枕に顔を突っ伏し体を震わせながら部屋の隅にて待機するマスター。怖がっているわけではない、決して怖がっているわけではない。ただ震える体を抑えきれないだけなのだ。それに訓練の連続で疲れている、正直そつとしてほしかった。

「……くすん、くすん」

しばらく無視し続けていると、扉の向こうからすすり泣く声が聞こえた。何時もは諦めて食事時に再突入してくる清姫であったが、今回は違った、泣いている。あの清姫が泣いているのだ、一瞬嘘泣きかと思つたが、嘘を徹底的に嫌う彼女にはありえない

事であった。

「くすん、ごめんなさい……ますたあ。また日を改めます……」

マスターはため息を一つ漏らすと、自分の頬を思いつきり引つ叩いた。清姫だってサーヴァントだが、その前に一人の女の子なのだ。普段は自分の都合のいいように話を解釈する子だがそれが出来ないくらい拒絶してしまったらしい、流石にそれは酷い仕打ちだった、自分の身の可愛さに、目の前の女の子を傷つけてしまったのだ。

「ますたあ……」

決心してマイルームのドアを開くと、泣き顔の清姫が見る見るうちに笑顔に変わっていく。自分から蛇に食べられに行く鼠の気持ちになったが、これでいい、女の子は笑顔が一番だとマスターは思った。

「旦那様、旦那様……ふ、ふ、ふ……」

数十分後、腕を組みながらカルデアの廊下を歩く清姫とマスターの姿があった。すれ違う人、皆が驚きで目を丸くしている。なんせ、無理矢理清姫が腕を組んでいるの

ではなく、マスターも清姫に微笑みかけながら時々清姫の頭を撫でたりしているのである。清姫は一体どんな魔術……いや魔法をかけたのだ!?! あのマスターが自らあのよな事を……ついに人理は崩壊してしまったのか!?! とカルデア職員は急いでマスターの心理状態のチェックに急ぎ、キャスターのサーヴァントたちは解呪のために自らの工房に急いだ。

「ふふふ、幸せです……」

清姫の出した願いは、今日一日恋人になつてほしいという物であつた。清姫からしたら、旦那様が自分の魅力を忘れつつあるので、自分の魅力を再確認してもらおうと今日一日恋人からやり直してまた惚れてもらう計画らしい。マスターからしたら意味不明な計画であつたが、要は自分が清姫を蔑にしたせいで起きたことである、確かにこの頃増えてきた愛に生きるサーヴァントたちに疲れ清姫を避けていたのも事実だつた、色々なストレスが溜まつていたのであろう。そして挙句の果てに清姫を泣かせてしまった、傷つけてしまった、このマスターが清姫の願いに答えたのはその罪滅ぼしである。蔑にはいけない仲間でありながら自分の好意を持っていることを利用して無意識に我慢させていた、そのケジメであつた。

「はい、旦那様あーん♪」

散々いちゃつきながら廊下を歩いた後は食堂で、清姫が作った料理に舌鼓を打つ。

清姫も嘘さえつかなければ良くできた嫁である、肉じゃがだってお手の物、柔らかい肉と芯まで味が通ったジャガイモが美味しい。隣にあつた山盛りのマッシュポテトは一体だれが作ったのだろうか――

「え？ 私はそのな……はい、では、あ、あーん……」

次はマスターから、清姫の口に肉じゃがを運ぶ。まさかの食べさせ合いつこに食堂にいた誰もが驚くというより、戦慄する。何名かは歯ぎしりもしている。あのマスターがああ清姫といちゃついている。あのアンデルセンがタブレットを落とし、シエイクスピアが原稿に飲んでいたコーヒーを嘔き出す。それぐらい衝撃的な出来事である。

「美味しいですけど、すこし……恥ずかしいですね。つ、次は私ですよ！ はいあーん！」

モーツァルトが楽器の音を外した。

「こうやって、旦那様のお部屋で過ごすのも久しぶりですね」

食堂で腹ごしらえをした後、目を丸くしている周りの人の視線を背に受けながらまた廊下でイチヤイチャとしながらマスターのマイルームへ戻ってきた。部屋で何をす

るかと思えば、マスターの部屋の掃除や、マスターの洗濯物にアイロンをかけたりと、マスターの身の回りの世話であった。

「？」

「いいえ、これが私が今やりたいことなのです。私はこれで幸せなのですもの」

幸せそうに笑いながら、また掃除を再開する清姫。ふとベッドの下に何かを見つけたのか、手を伸ばして一つの本を取り出した。

「あら、あらあち旦那様、これは何でしょう？」

「?!?!」

それは同士黒髭くろひげから貰ったパイケットの戦利品であった。中身は和風美人とのチヨメチヨメ。貰ったはいいもののどうしていいか分からず、誰にも見つからない場所へと隠していたのである。ニトクリスできえ見つけきれなかった物を一瞬で見つけるとは流石というしかない。

「……」

「へえ、あの黒髭さんから……」

「??」

「いえ？　怒ってませんか？　殿方ですからそれ位興味があるのが普通でしょう。嘘も言っていないみたいですし……黒髭さんのお部屋は後で洗浄もしますが」

グッバイ黒髭、君の事は忘れない。 毎度毎度ひどい目にあう黒髭に心の中で合掌する。

「でも、この本は処分いたしますね？」

清姫のにこやかなグッドスマイルにマスターはいいえとは言えず、パイケット本はその場で焼却された。 さらば黒髭の置き土産。

「~~~~~」

その後はベッドで二人より添いながら過ごしていたが、清姫の提案によってカルデアに一つある、温泉へと足を向けていた。 カルデア職員のリフレッシュのため用意されたこの場所は実際は温泉ではなく大きい風呂であったが、マイルームはシャワーしかないの、日本生まれのマスターや日本出身のサーヴァントは重宝していた。

清姫は温度調整のためと言ってどこかに行ったので今はマスター一人が温泉に入っている。 良い湯加減で、日々の疲れも吹き飛ばすようだった。

「湯加減はどうですか？」

何処からか清姫の声が聞こえる、丁度良いと伝えると清姫は

「でしたら次はお背中を流しますね」

といった間にかマスター後ろに姿を現した。 さすがストーキングのスキル持ち、全

くマスターに気配を悟られず背後へと回った。

「!!」

「ふふふ、そこまで驚かなくても良いではありませんか、今は私達は恋人なのです、一緒のお風呂に入っても可笑しく何てありません」

そういう問題ではないと焦るが、マスターもどこかでは混浴する予感はしていた。

あと期待もしていた。

「意外に、背中が大きいんですね……」

「!?!?!」

後ろから手を回され、抱きしめられるマスター。柔らかな感触が背中当たり、清姫のため息めいた吐息が耳にかかる。青少年の何か危険な状況であった。清姫は着痩せするタイプである、普段は着物で隠れているが、なかなか大きい。フェルグスの叔父貴が反応していたので間違いなく女の体としては極上なのだろう。マスターの顔は真っ赤である。

しかし当の清姫は悲痛な声で、ある願いを言った。

「お願いがあります、旦那様^{ますたあ}。一度でいいのです、私に『愛してる』と言ってくださいませんか……接吻までは求めませんから、ただその一言を……」

清姫は素晴らしいながら強く抱きしめる。しかしながらそれは不可能に近いことは

清姫自身が分かっていた。所詮は自らが強請ってもらった今日一日だけの権利、目の前のマスターは優しい、優しすぎる。これが他の誰かなら嘘でも愛してると言ってくれるだろう、だが自分は嘘を許すことが出来ない。自分を悲しませないための嘘でも一切許せず、目の前の愛する男を燃やしてしまうだろう。そしてそれを理解している目の前の愛すべき男は自分を悲しませないために嘘を付けないだろう。どちらにせよ清姫はその言葉を聞くことは出来ないのだ。

初めて清姫は自分の願いを後悔した。その言葉を聞きたいがために、今日マスターに無理を聞いてもらったのに、その言葉が出ることは無いことは分かっていたのだ。自分の気持ちに嘘ついたわけではない、偽りで塗りつぶしたわけではない。心のどこかで希望を持っていたのだ、マスターがその言葉を本心から言ってくれるかもしれない。

「だがマスターはただ何も言わず、清姫の手をそつと握るだけだった。」

「旦那様ますたあ、今日はありがとうございます。あの、嬉しかったです。旦那様ますたあが私のお願いごとを聞いてくれるなんて、日々の献身的な後方警備の賜物でしょうか」

そういつて清姫は悪戯っぽく笑う。

あの後二人はマスターのマイルームまで一言も話さなすことはなかった。このドアが閉められると、明日からは元の通り、バーサーカーらしくまたマスターを追いかける日々である。

「今回で、ますたあ旦那様も私の魅力を再発見できたでしょう！　これから浮気もほどほどに私を戦いにお使いくださいね、じゃないと嫉妬のあまり燃やしてしまうからもしれませんから」

その建前まだ続いていたのかと苦笑するマスター、二人して笑い合う。　なんだか二人ともぎこちない笑い方だった。

「そ、それではお休みなさい。旦那様、ますたあ愛しています」

やはり、自分は愛したもからは愛されないのだ。

清姫は流れそうになる涙を押しとどめる。　ここで涙でも流してしまえば、今日の楽しい思い出は全て嘘になる。　それだけは嫌だった。　あの日のように駆け出そうとする、あの日とは逆に愛する者から逃げるために。　今日この日を良い思い出にしておくために。

だが、マスターはそれでは納得できなかつた。

「！」

「えっ、きやつ」

清姫の手を掴むと、強引にマイルームの中へと引きこむ。マイルームドアが閉まり、電気もつけられていない部屋で二人だけが抱き合っている。目の前の相手の顔が辛うじて見えるほどの暗さだった。

「……なに、を……」

突然の出来事に顔を赤くして困惑する清姫の目を見据えると、マスターは深呼吸し、言葉を放った。

「……愛してる」

「は、はいっ、んむうっ……!?!」

間髪入れずに、清姫の口を奪う。なんせ自分から口づけをする経験は初めてであり、ぎこちないがそれでも恰好はついてはいただろう。初めてのキスの味がニト口の味というのも悪くは無いとマスターは思った。

別に清姫に同情したわけでもない、憐みを抱いたからでもない。狂っていても、生前の人間と重ねていても、自分を慕ってくれる人が今日一日だけでも愛してくれと、それが自分でも不可能と知りながらも願ってきた、だったらこつちも全力で相手を愛すべきだと、そう思っただけである。

今日一日、この時間だけでも何もかも忘れて目の前の相手をただ愛そうと思っただけである。それにマスターも少なからずとも清姫を思っていた。ならそれだけで十

分じやないか。

「はあ、旦那様、嘘じやない……旦那様が私を愛してくれた……！」

清姫が涙を流しながら、何度もマスターと口づけをする。清姫の涙は驚くほど暖かく、その情熱的な口づけは両者とも赤く火照させる、まさに焰色の接吻だった。

そのままもつれ込むようにベットへと倒れ込む。

「はあ、はあっ……あの……」

マスターから押し倒されるような体勢になった清姫がマスターの顔を見る、顔は上気して赤く、いつもは優しい青い目がなんだか獣の様だった。何を求められているのが察しが付き、清姫の顔がさらに赤くなる。なんだかんだで清姫もそっちの方面は、まったくもって経験が無い。どうなるだろうか予想もつかない。

だからこう言うしかなかった。

「優しくしてくださいね……」

清姫の明日はどっちだ

逸話の話と、お酒は二十歳になってから。

「いやあ、拙者ここではドラゴンスレイヤーとは言われているものの、生前は文字通り振るしか能の無い田舎者であつたゆえ、実は討ち合いは以前召喚された聖杯戦争が初めてなのだ」

「ここはおなじみカルデア食堂、つい最近深夜で謎の爆発があり食堂の半分が焦げ付いており、現在改築中である。」

席にすわり、茶菓子と共にお茶を飲んでるのは緋色の雅な陣羽織に身を包み、華がある美男だが鋭い武人の目を持っている。どこかいつも飄々とした花鳥風月を愛する流浪人、佐々木小次郎である。

「へえ、それであの腕前というのは見事というしかありませんね。その長い刀はどこから?」

「ああ、これは山奥で出会った老人から譲り受けたもの。まさに劍聖と呼べる御仁だった」

「日ノ本の山奥は一体どうなっているのか誰も疑問に思わないんじゃないだろうか……」

小次郎のほかにも、沖田総司、織田信長や坂田金時ゴールデンや源頼光など日本出身のサーヴァ

ントが周りに座っていた。みなそれぞれ茶菓子やお茶を飲んだりして、各々会話を楽しんでる。

それもそのはず今日は信長の主催の天正十年だよ！ 日ノ本出身全員集合の会であり。ほぼすべての日本サーヴァントが集まっており、マスターも一応日本出身として招待されている。

「
??」

「ばつ大将、此処でその話題はやばい！」

「まあ、母の刀が気になるのですか？ うふふ、これは安綱。人が作りうる最上の武器、我が天網恢恢の雷に耐えうる唯一の刀。それ、そのちんけな虫を切り潰したことでついた名が童子切りです。中々有名な刀だとは思いますが……」

「その名をうちの前でだすいうことは、この場でその牛乳うしちちごと首もぎりとってもええつちゆうことやなあ？」

「酒呑！ 待て！ しばし待てまだこのしゅーくりーむが食い終わってぬああああ！」

二人の放つ、濃過ぎる殺気にシュークリームが耐えられず爆発する。慌てて金時が止めに入るが、それは自らを差し出す御神供と同じ。嫁姑に挟まれる夫のベリーハドモードである。しかしマスターが止めに入ると、その身がいろいろと危ない。マスターは金時のように二人から逃げられる力が無いのだ。マスターは金時の様な力

が無いことを悔いるが、無くて良かったとも心の底から思っている。

「旦那様ますたあ、私の逸話は勿論……存じですよね？」

いつの間にか、マスターの背後に回っている清姫。さつきまで貴女向こうで玉藻さんと談笑していませんか？ 恋する乙女のスピードは韋駄天をしばし凌駕する。

「……………」

「ふふ、嬉しい。私もマスターの事なら何でも知っていますよ？」

それつて、どういう、意味で。マスターが聞き出そうと後ろを向いたとき、清姫は向こうの方で玉藻と談笑していた。焰色の接吻を習得してからなんだか清姫が妖怪じみてきているような気がする。

「……………」

気を取り直して次は沖田総司の所へ話を聞きに行く、かの新撰組一番隊隊長、日本人なら誰でも知っているであろう新撰組にいた本人から話を聞けるのだ。歴史家からすれば涎が出る話であろう。

「一番強かった相手？ うーん稽古では斉藤さんか永倉さんが強かったですかねー、土方さんはああ見えて指揮官寄りと言いますか人を操る方が上手かったですね、時々聞かされる俳句は下手でしたけど……………」

「……………!!」

マスターも男であり日本出である。　　なんだかロマンあふれる話に目が輝き始め、もつと話をとせがみ始めた。

「わわ、なんだかマスター今日はぐいぐい来ますね、沖田さん的には嫌いじゃありませんよ？」

敵？　敵は勿論薩長の奴らです!!」

「お前、薩長ほんとに嫌いなんじやのう」

「そもそも剣術が気に入りません、なんですかあの即死ゲー、沖田さんじゃなかったら死んでましたよ。　　というか何人か切られましたけど。」

「？」

「え？　　そうですねーまず猿声に怯むと速攻切られて死にます、次に防御すると刀ごと切られて死にます、籠手で受け止めようとしても切られます。　　逃げると追いかけて切られます。　　その代り一発でも避けると相手が死にます」

「なんじやそのクソゲー」

「本当にそんな感じなんですって！　　ですから強者が出てきた時は皆で囲んで棒で叩いてましたね、永倉さんの反照・龍飛剣か斉藤さんの牙突・一閃ぐらいじやないと勝てない相手もいましたし」

「なんじやその後半のなんとかに剣心に出てきそうな技名は」

「？」

「ぬ？　三千世界と書いて三段撃ちもなかなかか？　ふふん、カッコいいじゃろう」

マスターはどっちもどっちと言いたかったのであるが、なかなかのポジティブ思考である第六天魔王は、無い胸を反らして自慢する。

「てか、ワシにも聞かぬか！　戦国時代といったワシ！　ワシといったら戦国時代であるう！」

そりゃ日本史のポピュラー中のポピュラーの織田信長を聞いて大正時代を思い浮かべる人はいないだろう。え？　大正時代にいた？　はは、そんな馬鹿な。

「なにになに？　教科書で腐るほど見たからいりません？　……そーかそーか！　それほど有名になっちゃってるかワシ！　良い良い許す！」

何かひとりでに納得しながら笑うポジティブ天魔王。　　とうかマスターにしてみれば有名なあの織田信長が女性だった時点でもはやそのとき歴史が動いたというかあつちから歴史が動いてきた並の衝撃である。

「主殿！　私の逸話はどうでしょうか！」

と、話を聞きつけ素早くマスターの駆けつけた影が一つ。　彼女こそマスターが召喚時に驚いたサーヴァントランクのトップ5に入る人物であり、天才的な格好と天才的な戦闘力でマスターに天災と首を運んでくる天才。　名を牛若丸。　あの日本人なら知

らない方が少ないぐらいに有名な人物源義経その人である。……その人であるが、マスターが思っていたイメージと違いすぎたため「主に服装が」最初の頃は狸が化けているんではないかと思っていた時もある。

兄上大好きっ子であり、マスター大好きっ子である彼女は自らの逸話を主に聞いてもらって感心してもらおうと、まるであるはずもない尻尾を振るような勢いでマスターに迫ってきた。

「私の逸話は一つ一つが宝具に昇華されるほど有名な物ばかり、きつと主殿の好奇心も満たされるはずですよ！」

「いや、義経殿もあまりにも有名なためマスター殿も大体の話は知っているのでは……」
「黙れ、主殿に私の逸話を知ってもらい、おお、凄いな牛若丸はこれからも期待しているぞ、そら褒美に頭を撫でてやろうよーしよーし。としてもらうのだ」

「いやですから」

「黙れ、主殿との身長差は頭を撫でられるのに丁度良い差なのだ」と玉藻殿も言っていた
牛若丸の部下に対する冷徹さを一身に受けとめる武蔵坊弁慶、カルデアの中でもなかなかの苦勞人である。口が裂けても言えないがどちらかと言うと幼少期のマスターは源義経よりかその忠義の部下である武蔵坊弁慶に憧れていた時期があった。本物の前では言えないが。言ったら牛若丸が弁慶の首を一息に跳ねようとする光景があ

りありと浮かぶからだ。

「？」

「む？ 拙僧から義経殿の話ですか？ そうですなあ、あれは屋島の戦いの事でござったな。一隻の平家の船がこちらを挑発してきた時でござった……」

「！」

マスターが反応する、屋島の戦いの時に那須与一が船上の扇を一発で打ち抜いた逸話だ。しかしそれは那須与一の逸話であり、牛若丸の逸話ではないはずだ。もしや牛若丸も扇を打ち抜いたのだろうか？

「いえ、違えます。その時の扇を打ち抜くように命じたのが義経殿でござる。無理だと辞退しようとする那須与一殿へ、『撃たぬのであればその場で腹を切れ。撃つのであれば一発で射よ。それ以外は腹を切れ』と言い放ちまして、結果生死をかけた与一殿の一射は見事命中、敵もあつぱれと船内から出てきたところを容赦なく討ち抜き始めたのが義経殿で……」

「そうか、そんなに首から下が無くなりたいか」

頼光に負けぬとも劣らぬ殺気を放ちながら刀を抜く牛若丸、首から上ではなく首から下と言うあたり本気である。ミンチにでもするのであるだろうか。

「!!」

「そ、そんな天才だなんて皆の前で言われると恥ずかしゆうございます。　ああ、頭まで……！！　牛若は幸せ者です……」

とりあえず、そんなグロテスクな光景を見たくないマスターは、とりあえず褒めながら牛若丸の頭を撫でる。　撫でられた牛若丸は嬉しそうに目を細め、今にも蕩けそうな顔をしている。　なんだかその時の顔が頼光さんの愛が暴走しているときにそっくりでやっぱり子孫なんだなあ、しみじみと感じるマスターであった。

「そーいや、オレっちの逸話とか余り知られてねーよな……」

しばらく牛若丸を撫で続けた後、金時の逸話を聞きに来たマスターであったが、どうも金時もその逸話の事で悩んでいた。　確かに金時といえば金太郎、つまり彼の幼少期が有名であり彼が頼光の元で活躍していた坂田金時の逸話はあまり知られていない。

「何処を見ても、クマとタイマン張ったとか、背丈より高い黄金喰まさかりい担いでいたとかばっかだしよお……あんまし記憶に残ってねエのかあ……何も残せてなかつたつてか……？」

そのまま落ち込んでいく金時、金時君はこう見えて結構繊細なところがあるんです。

「！」

「今が一番カッコいい……か。　あんがとよ大将、そうだな、オレはアン

夕の記憶に残ればそれでイイ。　ゴールデンにハートに届いたぜ。　さすが俺たちの大将だ、アンタの一言で悩んでいたこと一瞬で消えやがった、まったくオレっちが馬鹿みてえだ」

本当に五秒前まで悩んでいたことがウソみたいに消えてなくなった金時。　時にはたつたの一言が人の悩みを吹き飛ばすことがある。　ユウジョウ!

「ほんなら旦那はん、一つ面白い出来事、おしえてやるか?　ふうー……」

「!?!」

気配も無しに、いつの間にか後ろから姿を現し、マスターの耳に息を吹きかける酒呑童子。　なんだか今日は後ろを取られる事が多い。　こういう男の友情シーンをあえてぶち壊しにするのが鬼である、金時も露骨に嫌な顔をする。

「ある時な、あの牛女の名前を騙って好き放題しとる連中がおった。　うちらからしたら枯れた細枝の様な連中やったけど、名乗りだけは中々聞きこたえのある連中だね。

そんである日その偽物に丁度通りかかった小僧がその連中の名乗りを聞いて、たまらずぼんつと飛び出してこういうた」

「ばっ、やめー!」

「我こそが丹波國大江山の酒呑童子を熱狂させし坂田金時なり、とな。　ほーん、夢中にさせられたんやねえ、うちが小僧に。　まあ間違つてはおらんけど……あんときは驚い

たなあ……」

「？」

「しら、知らねえよ！ そんな昔の事覚えちやいねえっつーの！」

「なんや、赤くなつて。 ホント愛い奴やね……」

口に手を当てながら笑う酒呑童子、ゴールデンもおちよくられつばなしである。さすが鬼と言ったところか、若干一名弾けたシュークリームを悲しそうに見つめ続けている鬼もいるけど。

「先ほどから楽しそうですね。 虫風情が……！」

「おっとー！」

これまた影もなく登場した頼光が童子切りを酒呑童子に向けて一閃、凄まじい速さと共に繰り出されるその横なぎは、当たれば鬼ともいえどその首は軽く飛ぶだろう。これが金時だけならば、金時が介入することで丸くは収まらないが、正十二面体ぐらいには収まる。だが今回はマスターもその場にいた、頼光からすれば鬼が愛する息子二人を拐している凶である、当然怒りも二倍である。

「おっと、子供離れが出来ない牛女が気づいたみたいやね。 旦那はんか小僧かどちらか一人にしたらいかがです？」

「親が愛する子供を一人しか持つてはいけないという道理はありません」

「はん、子供が自分を愛すると思つとつたらいかんなあ……自分がどう思われてるか、考えたことあるん？」

「ほぎきましたね、ちつぽけな虫が！」

殺意がさらに膨らむ、これ以上続くと流石に殺し合いに発展しかねない。だが煽るだけ煽つて自分は戦う気が無いのか、酒の入った器を床に零すと、そのまま茨木童子を連れて食堂を飛び出した。

「今日は、気分じゃあらへんし。旦那はんを巻き込みたくないしなあ、精々楽しみや、いくで茨木」

「しゅーくりーむ、吾のしゅーくりーむ……」

「虫が逃がすと……！」

「待て！ 頼光サマ！ あの野郎酒を……！」

床に零された酒は床に落ちる前に蒸発し、霧となって部屋を充満させた。一息吸っただけで、金時の体が赤くなる、ダメージと判断して狂化の段階が上がったのだ。それほど強力な酒が部屋を充満してしまった。

「いけません！」

頼光が、マスターを抱きしめる。豊満すぎる胸に包まれて息が出来なくなる。あの意味天国だが待っているのは地獄である、

「この霧を吸っては、確実に泥酔状態になってしまいます。幸い私は大丈夫なようですが……」

というかマシユの対不浄の加護がついているのでマスターも息を吸って平気なのが、ある意味頼光の手、いや胸によって死の淵に近づいていた。

「そう、私は大丈夫です……とこころであなた様は中々しつかりとした体つきをしているのですね……うふふ……」

そういうしながら、マスターの体をまさぐり始める頼光。しかも心なしか手つきがいやらしいし、どんどんと下半身の方へと向かって言っている。完全に部下にセクハラする上司である。

「だあー！ 頼光サマあんた自分が酒弱いって知ってるだろうが！ とうー！」

「いひゃい!？」

後ろから、頼光の頭をチョップする金時、危うく胸のせいで人理が崩壊するところであった。

金時は自ら酔いを狂化ランクアップのダメージ判定に回していることで泥酔化を防いでおり、彼はこの空間で唯一まともなサーヴァントであった。

「大将！ さつさとこころからおわあ!？」

「きんときー！ こころで何をやっているのですー？ ははさびしいですよー？ うふふ

ぎゅー！」

驚くべき速さで復活した頼光が次は金時に抱き着いた、ものすごい力で抱きしめ、金時では無かったら全身の骨が砕けているであろう。本当にあの頼光さんはなんなんだ!?

「ぬわーっ！ 大将逃げろー！ ああもう抱き着くんじゃねーよガキじゃねーんだから！」

金時を助けようと走るマスターだが、誰かに足を掴まれ、その場に倒れ込んでしまう。「主殿ではありませぬか、となるとここは天国でしょうか。 沢山の兄上と、たくさんの主殿がいますー幸せですーいま首を献上いたしますー！」

「なんだか物騒な事を言いながら足に抱き着いてくる牛若丸。 後ろの方では信長が「猿ー！ どこじゃー！ 茶を持ってーい！」と叫びながらうろろしており、弁慶がなんだか体を肥大化させてマッスルポーズをとっている、控えめに言つて地獄であった。」

「ああマスターこんなところに。 沖田さん探したんですよー、ひつく！ マスターはなんで私の様な人斬りに優しくしてくれるんですかーひつく！ そんなに優しくされたら期待してしまいますよ、ひつく。 期待していいんですかー？ 人斬り風情が貴方に……ひつくー！」

「ああ旦那様、触れてくださいませ……この唇の温度も、この胸の柔らかさも全てあなた

様のものがございます。さあまたあの日のように……!」

いつの間にか沖田と清姫から片手ずつ抱きしめられて、ついに身動き一つ出来なくなつたマスター。二人とも顔が赤く、目が蕩けている。沖田は胸に顔を埋め始め、清姫はマスターの耳を舐め始めている。――そこが弱点だと知っているのだ――

頼みの金時も、頼光から抱きしめられて身動きできない。誰かが異常を察して助けに来るまであと十分はかかるだろう。それまでこの天国の様な地獄を耐えねばならぬというのか。

「お酒は二十歳になってから……そう呟くマスター、もはや流れに身を任すしかなかった。」

――マスターと金時の明日はどっちだ

マスターとニンジャ小太郎の事件簿。

（「ここまでのあらずじ」コタロウはかつて日本にいたアシガラ・マウンテンで暗躍していたフウマンニンジャクランのヘッドである。今の主であるヒューマン・コンテニューエシヨン・セキュリティ・オーゲン・カルデアのマスターに出来の良いクナイ・ダートが倉庫から見つけたので一本護身用に献上しようと、マスターのマイルームを訪ねていた）

「マスター＝サン？ いらっしやいますか？」

「用があるならノックをね」、「ノック重点」、「無断入室はスゴイシツレイ」、「フートンに忍び込むのはやめなかい」などが書かれた張り紙をされているドアをノックする。ドアは声紋認証は勿論マスターからのレイジユを通したマジックパワーを確認できなければ開かない仕組みになっている。ダ・ヴィンチちゃん製スゴイカタイトビラシステムはかの騎士王のビームを三秒耐える。 実際スゴイ。

「マスター＝サン？ おかしいな、この時間はお部屋でお休みになられているはず……まさか！」

コタロウは焦った、懐からマイルームフリーパスを取り出す。これはマスターがマ

イルームに入っても変な事をしないサーヴァントと判断した者のみを持つことが出来る非常時専用のカードキーである。

「ええドスエ」

カードを通すとオイラン（声：酒吞童子）の声と共にドアのロックが解除され扉が開いていく。コタロウは部屋に音もなく突入するとすぐさま常人の三倍以上あるニンジャ視力で索敵！ その身のこなしはヤバイ級サーヴァントでも捉えるのは難しい。

「マスターご無事でアイエツ!？」

マスターはベッドの上にいた。だがマスターは何者かに押さえつけられており、陸に打ち上げられたマグロめいた動きをして抵抗をしている！

「これで私の中に旦那様の魔力が循環！ 私の霊基もパワーアップし、私も満たされる！ どうですか？ 実際ギブ&テイクでしょうか？ フィーヒヒヒ！ワタクシいま体温何度あるのでしょうか!？」

ブツダ！ 皆さんの中に日本昔話に詳しい者がいるのなら此処で分かるだろう。

どう考えてもギブ&ギブな提案をしているのはヤバイ級マスター追跡者、キヨヒメである！ マスターを押さえつけあからさまに無理矢理前後しようと迫っており、このままでは青少年の何か危険ない！

「おい、やめないか！」

「アイエ!? コタロウさん!? どうしてここが!」

「状況判断だ!」

唐突なアンブッシュに対応できないキヨヒメを鎖でがんじがらめにして捕縛する!

「イヤーツ!」

「ンアーツ!」

マスターに興奮して、正常な思考が取れないサーヴァントを捕縛するなどコタロウにとつてはベイビーサブミッションなのだ。捕縛され天井からつられながらも火を噴いているキヨヒメはボンボリ・カザリダルマめいている。

「マスターさん。大丈夫でしたか」

マルノウチ製電動こけしめいた動きをしているマスターに手を差し伸べるコタロウ、そうしてまたコタロウはマスターの危機を救ったのである。

(デンジャラス・イン・ザ・マイルーム終わり ゲンジ・キンドネイピング・ザ・マスターに続く)

「しかしながらなぜ清姫さんがマイルームに?」

マイルームでマスターに入れてもらったココアを飲みながら、風魔小太郎は疑問を口にした。あんなに頑丈で強固なロックを清姫はどうやって破ったのだろうか。忍

者である自分でさえ破るのには相当の苦勞を要するであろうに。

「はい？ カードキーを持つてた？ ナンデ？」

誰かから拝借したのであろうか。しかしマイルームのカードキーは他人への貸し借りは禁止されているし、盗もうにも皆手練れなので清姫の戦闘力では難しい。――それこそマスターの指示が有れば別であろうが――

だとすれば考えられるのは偽物を誰かが作っている可能性がある。そうなれば由々しき事態である、誰もがマイルームに入れるようになってしまったら、マスターはレイシフト先で寝泊まりする方が安全だろう。

「清姫さん、カードキーをお持ちなんですよね？」

「ええ、嘘をつくのは嫌ですから正直に答えますと作ってもらいました」

「やはり……」

宙ぶらりんになっている清姫が笑顔で答える、笑顔の先が小太郎の後ろにいるマスターに向けられているのは明らかであり、捕縛されてもなおマスターに向かおうとしている。鬼かこの人。

「作成者は誰です？」

「それは……嘘になりますから答えられません。 ってあれ？ 偽物だったんですか、

それ……」

「はい、マスターは取引されてません」

「おのれ、私に嘘をつきましたね……しゃああああ……ですが、商談は成立しています。教えることは嘘になりますので諦めてください。」

「なるほど、それならば仕方ありません。少々痛い目にあつていただきます……」
 懐から何かを取り出そうとしている小太郎、拷問をする気だと感づいたマスターが止めに入ろうとする。

「ここに、以前に主殿と金時殿とで足柄山の温泉に男水入らずでレイシフトした時の写真があります……名を付けるとするならば、うつとりと美しい紅葉見ながら入浴する……」

「しゃああああああ!!」

ぶんぶんと首を振る清姫、なるほど痛い目を見るところのはどちらかというとマスターであったか。忍者怖い。何時撮ったの。

「他には出回っていません、現品これ限りです。 此処で吐かぬならこの写真を……」
 「破り捨てるとでも言うつもりですか!？」

「いえ、複製してばら撒きます」

「しゃああああああ!!」

「!?」

もし複製でもされて出回ったらそれは清姫だけの物ではなくなる。一点ものだからこそ価値があるのだ。それに清姫にとっては許しがたいことであった、自分の人生どころか魂が輪廻するときの伴侶の写真をどうして他の女子に見せられようか。だが犯人を言ってしまうえば嘘をついてしまう。清姫はどうかこうにか良い手立てを
考え……

「海賊たちを訪ねなさい」

嘘にならない程度にヒントを与えることで良しとした。

「ふむ、清姫さんでしたらこれが限界でしょう、ありがとうございます。ならば約束通り……うつとりと美しい紅葉見ながら入浴するフォウ殿です……一言も主殿とは言っておりません故」

「じゃあああああ!! きいいいい! 恨めしやあああああ!」

怒りの炎を噴きながら、ぶらんぶらんと揺れる清姫を背中にマイルームを出るマスターと小太郎、流石ニンジャ汚い。マスターは心の中で小太郎君は怒らせないようにしようと思つた。

マイルームを出て向かったのは、アン&メアリーの部屋である。清姫は海賊たちを

訪ねろと言った、このカルデアには海賊のサーヴァントは何人かいるが、その中でもアン&メアリーはその海賊らしい無法さでマイルームにたびたび侵入していた前科がある。マスターと小太郎はまずは前科者を調べることにした。

「……………」

「はい、ドレイクさんはあまり忍び込む、という人ではありませんし。黒髭さんは男なので……」

なるほど。　と思いながらアン&メアリーの部屋についたマスターはドアをノックする。　数秒した後にはパタパタとこちらに向かつて歩いてくる足音が聞こえてくる。　ついでに何かに装填する音も。

「黒髭さん、次来たたら殺しますって言いましたわよね……」

そしてドアから出てきたのはアンでもメアリーでもなく銃口であった、ピタツとマスターのおでこに当てられる。　慌てて小太郎がマスターを庇おうと前に出る。　いたい日頃黒髭はどんな扱いを受けているのか。

「え？　あら？　バーソロミューが好きそうな子と……マスター!?　し、失礼しました、てつきりあの髭かと。　メアリー！　マスターが来ましたわよー!!」

どつかの髭じゃない事を確認したアンが大きな声でメアリーを呼ぶ、するともう一つドタドタと走ってくる足音が聞こえてアンの隣からひよっこり顔を出した。

「……一人じゃないんだ。まあ立ち話もなんだし入りなよ、そのバーソロミューが好きそうな子も。ちよつと散らかつてるけどね」

そしてなぜか拗ねてまた部屋の中へと消えた。アンもあらあらと笑いながら手招きしている。小太郎はバーソロミューが誰だか気になったが、マスターは深く考えない事をお勧めした。世の中には知らないことが良いこともあるのだ。

「これは……」

そしてアン&メアリーの部屋に入った二人だが、入って最初に驚いたのはその部屋の汚さだった。ピザの空き箱が無造作に積まれており、空の酒瓶も何本も床に転がっている。ベットにはアンとメアリーの武器だろうか銃とカトラスが無造作に置かれていてまさに座る場所が無い。というか部屋が酒臭い。カルデアのおかんがこの惨状を見たら、説教と共に速やかに清掃に移らせるであろうことは間違いない。

「だから言つたじゃないかちよつと散らかつてるつて」

「まあ、マスターたちが座るところはスペースを空けましたから。コタローさんでしたか、貴方もそこにどうぞ」

周りの酒瓶を無理矢理押しやつて出来たスペースにクッションが二つ置かれ、二人はそこに座るしかなかった。流石海賊、船以外の所は大雑把すぎる。仕方なくマス

ターと小太郎が座ると、マスターの膝の上にメアリーが乗ってくる。メアリーの髪がふわりとマスターの鼻に触れ、こんな汚部屋に住んでいるのにふわりといい匂いがした。

「……何か文句ある？」

「……………」

「よろしい」

仕方なく膝にメアリーを乗せたまま話をすることにする。小太郎は妙な光景に目を丸くしているが、とりあえず気にしないようにして、アンたちに事情聴取を開始する。「うーん……確かにきよひーさんとは何回か共謀をしたことがありますが、あの人妙な所でお堅いところがございませうから。根本的な所で話が拗れちゃうんですわよね」「き、共謀を企てたことはともかく、マイルームのカードキーの偽造事件には関係ないか？」

「ねえ、マスター今度アンと一緒に海に出ようよ。バニー着てきてあげるよバニー。好きでしょ？ 着てくるとチラチラ見てくるの知ってるよ？」

「……………」

バレていたのかと、マスターが顔を赤くしている間にも小太郎の事情聴取は進んでいく。話を聞く限り、今回の事件にアンとメアリーは関わってはいないようである。

しかしそれだと残りの海賊は黒髭とドレイク卿、卿を付けるとくすぐったいからやめておくれと恥ずかしがる。だけである。人柄的にドレイクはあり得ないし、黒髭はマイルームに不法侵入する根拠がない。しかし清姫が嘘をつくことはありえない、完全に捜査は手詰まりだった。

「ああ、でも昨日きよひーさんと会いましたわよ、ピザをかう帰りに。たしかあそこは

「？」

「はい？」

「まさか、首謀者では無くて目撃者の事を言っていたなんて……」

「はい、僕たちには『海賊に会え』としか言ってませんし、嘘ではありませんね」

というわけでアン&メアリーの部屋から出て、やってきたのはダ・ヴィンチちゃん工房である。因みに今度一緒に海に出る約束をしないとメアリーがマスターの膝から下りなかつたので仕方なくマスターは次の機会に一緒に行こうと約束を交わすことになった。その時に小さくメアリーが「バニー、楽しみにね」とマスターに言っていたのを小太郎は聞き逃さなかつた。許してやってほしい彼も男おのこなのだ。

「ん？ おお、珍しい組み合わせだね。蒼眼の好青年と赤髪の日隠れ属性持ち美少年、いいねー色のコントラストが実に良い！ ベネー！」

とマスターと小太郎が工房に入ってくるなかまた変な事言ってる世紀の天才。

思えばカードキーやあの強力なマイルームのドアを作ったのはこの天才である。モナ・リザなどの贋作はいくつもあるが、セキュリティに関しては贋作などは作れるはずがなかった。つまり、元々カードキーを作れるのは一人しかいなかった。

「御用改めです。貴方には第一級カルデア法違反の容疑がかかっています、速やかに自首をするのなら温情を考えましょう」

「はい？ この私にかい？ というかそのカルデア法は私が作ったのに？」

第一級カルデア法違反は、数あるカルデア禁止事項の中でも一番重い罪を表す言葉である、その法を犯した者は三人以上のルーラーのサーヴァント達による大体十五分程のスピード裁判にかけられ、大体酷い目に合う。この頃行われたのは、罪人黒髭のリアル黒髭危機一髪と、罪人茨木童子のリアルカラドボルグによる虫歯除去である。

「？」

「はい？ 清姫ちゃんにあの扉のカードキーを作った？ 妙だね、君が作っても良いって言い出したんじゃないのかい？」

「!？」

「ど、どういふことですか？」

「だって書類が、はいこれ」

そうやってダ・ウインチちゃんが見せてきたのは、カードキーの承諾書だった。

ちゃんと書類にマスターの署名とマスターの専用判子も押ししており、それがちゃんとした正式の書類だということは確かだった。

「た、確かに主殿の判子、この判子ではないと許可が下りないのはカードキーを持っていく僕が一番良く知っている……」

「だろう？ ついに君も清姫ちゃんを娶ることにしたのかとびつくらこいたんだけどね。違ったかー」

「……………」

「そんな恥ずかしがることないじゃないか、だって君実際清姫ちゃんと」

「?!?!?!」

慌ててマスターがダ・ウインチちゃんの口を手で塞ぐ。あの日の事はあの夜だけの

二人だけの秘密なのになぜ知っているのだろうか、もしかしたらドクターも知っているのではないだろうか、なんだかマスターは親にバレた中学生の様な気持ちになつて

た。
「ま、とにかく清姫ちゃんが持つてきたこれは偽造書類だったんだね、私の目を欺くとは

中々の天才じゃないか。だ、け、ど、スンスンと……」

清姫の偽造書類を犬のように嗅ぎ出すダ・ウインちゃん。少し考えるそぶりを見せて、何か合点のいった様子を見せると不敵な笑みを見せた。

「ふふん、やっぱりインクまでは偽造できないか。だれも私がインクまで自作してるとは思わないみたいだね！ やはり私は誰にも予見できない天才だ！」

「い、インクのおいで分かるのですか!?!」

「勿論！ 私を誰だと思っている？ そしてこの偽造書類の出所も分かった！」

「!?!」

「フーフ、天才かだと？ 無論天才だとも！ この地球の文明が三回滅んでも私の様な天才は現れないと自負しているよ！」

ダ・ウインちゃん胸を張る。さすが自分の体を作り変えた天才へんたいは格が違った。これで犯人が分かる。

「ふん、来やがったか。流石マスターと言ってやるぜ……その小僧もな」

「まさか、貴方だったとは……清姫さんは最初から犯人の事を言っていたんだ……」

マスターと小太郎がその犯人の部屋に着いたとき、犯人は暗い部屋の中に一人椅子に座っていた。まるで二人が来ることを見越していたようだ。

「?」

「何故だつて? 決まつてんだろ金だよ。世の中それが無きややっていけねえんだ、それ以外の理由に何があるつてんだ。あの嬢ちゃんはたつぷりと支払つてくれたぜ?」

「それでも主殿に忠誠を誓うサーヴァントですか!」

「あん? 俺たちを誰だと思つてやがる、泣く子も黙る海賊様だぞ? そんなごっこ遊びはよそでやりな」

「貴様……!」

「」

前に出る小太郎を制止するマスター、その眼は悲しくも真直ぐに目の前の犯人を見据える。そして一言犯人に対してこういった。

「進捗どうですか?」

「フン………ゼーんぜん駄目でござるよー!」

と思つたけどあの子全然モデルになつてくれないし! 仕方なく同じかわういさを持つ

つステンノさんに頼んだらお金だけ持つてどつか消えちゃうし! しかたないからなんとなく作つてた偽造書類使つて清姫ちゃんにカードキー業者として商談するけど、あの子怖くて結局元から八割引きの値段にされるし! 頼光さんからはもはや十割引き

でござやる！ おねがいマスター手伝ってくださいー！ ほらパイケット連れてつて上げるから！ 欲しいでしょ？ 禁断の頁欲しいでござやろう!!」

犯人……黒髭の手に手錠がかけられる。結局清姫の海賊を訪ねると言った通り、海賊が犯人であった。ダ・ヴィンチちゃん目の目を欺くほどの器用さを持つていながら、結局金に困った挙句の犯行である。もはやなんというか憐みの前に嫌悪感しか湧いてこない号泣の仕方で行きされる黒髭、ジャンヌに「パイケットのモデルになってみませぬか？ そのパイの大きさならびつたしで……」と云って、マルタさんから鉄拳を見舞った黒髭にはもはやルーラー裁判で一切の慈悲は貰えないだろう。可哀想に次は極刑があり得る。どうか清姫をだまぐらかしたのである。極刑は免れない。

「結局、黒髭さんが犯人でしたね。最初から僕が黒髭さんの所に行っていればこんな手間は……」

「！」

「はい？ 僕がいなかったら最初から解決できなかった……？ いえ、でもそんな……」

「信賴してる……ですか。いえ、僕にはもつたいないお言葉です。……でも嬉しいです。ありがとうございます」

「君」

笑い合うマスターと小太郎。彼らの間に「黒髭という犠牲があつたもの」また

一つ固い絆が結ばれた。

彼らの明日には祝福があるだろう。

〔ここまでのであらずじ〕マスターはコタロウと共にクロヒゲの野望を打ち破り、部屋へと帰ってきていた。明日もまた早いブツダよ彼にしぼしの休息を……〕

濃密な一日を過ごしたマスターは、生き締めされたマグロのようにフートンに倒れ込んだ。実際疲れた、今日はこのまま寝よう。そう思いながら目を閉じるマスターは今日の疲れからか自らのウカツに気付かなかった。注意は一秒、後遺症が死ぬまで。平安時代の哲学剣士、ミヤモトマサシがこの状況を見たらこのハイクを詠むであろう。

「旦那様……」
ますたあ

おお、ブツダ！ 読者の皆様の中にサーヴァント視力と聴力をお持ちの方はいるのだろうか。もし持っていたのだとしたらこのへびめいてマスターの体をフートンの中から這いずりよってくるキヨヒメを確認することが出来るだろう！ あからさまにへびなのだ！ コタロウの捕縛から逃れた彼女はそのままこの時までマスターのフートンに忍び込んでいたのである！ コワイ！

「だがマスターはもはや夢の中へと入りこんでおり、キヨヒメに気付かない！ ナムアミダブツ!!」

「さあ、私とネンゴロしましょう……」

その時、ドアから「ええドスエ」というオイランの声と共にマイルームのスゴイカタイトビラシシステムが開錠された。 おおまだブツダは寝ていられなかった！ マスターの信頼足るサーヴァントがエントリリーしてきたのである！ だがキヨヒメも二度もウカツではない、ドアが開いた瞬間からアンブッシュ体勢に入る！

「イヤーツー！」

キヨヒメが入ってきた人物に向かって炎を吐く、ドラゴンⅡジツである！

「イヤーツー！」

「ワツザツ!?!」

しかし入ってきた人物はそんな炎を手を払うだけで消して見せた！ ワザマエ！

キヨヒメのドラゴンⅡジツの炎をそんな簡単に消せるのはヤバイ級サーヴァントしかない。

キヨヒメは謎の人物に向かってオジギをした。 挨拶は戦い前の礼儀である。 や

らないとスゴイシツレイにあたるのだ。

「ドーモ、キヨヒメです。あなたは？」

しかしキヨヒメ自身が放った炎の残り火によってその人物は誰かすぐに分かった。

「ドーモ、キヨヒメさん。ライコウです。我が愛する子を貰いに来た！」

おお！ ブツダよ寝ていられるのですか！ キヨヒメからマスターを救うために現れたのはキヨヒメより性質の悪いヘイアン・ゲンジクランのヘッド、ライコウであった！
ライコウの胸は豊満である。

「アイエエエエ!? ゲンジ!? ゲンジナンデ!?」

さすがの騒動に目が覚めたマスターは目の前のゲンジにG R Sによってマルノウチ製電動こけしめいた震えを始めている。

「ああ、私のカワイイアカチャン。いま安心させてあげますからね、アイイ遥かに良い。泣きじやくる我が子が笑う姿に変わる光景が見えます……」

ライコウから母性的アトモスフィアから香る狂気！ ドラッグを使わずともこの状態である！ マスターを見て舌なめずりをするさまは、獲物を前にしたライオンめいている！ コワイ！

「さあ、ワタシの胸にダイブしてくるのです……アイイ……遥かに良い……」

「近づくなオバケめ！ 旦那様は渡さない！」

手を広げながら近づいてくるライコウを阻止するために手を広げるキヨヒメ。 戦

いが始まろうとしていた。

まさには前門のタイガー、後門のバッファローである。マスターの明日はどっちだ。

(ゲンジ・キンドネイピング・ザ・マスター#1終わり #2に続く)

吾輩はキヤツツである、いや犬かも。

吾輩は猫である、いや犬か、それとも狐……？ まあいいニンジンをも所望するぞ。

あ、タマモキヤツトであつた、失念失念。所で猫缶はまだか？

今回アタシは素材集めに親愛なるご主人と東奔西走の時間なのである、これが終わつたら報酬の金のキヤツツを貰いながらご主人と昼寝の時間なのである。うーんグツ
モーニン。

「ちよつと、まだ終わらないわけ？」

「エリちゃんさん、疲れたのならメジエド様に乗せていつて貰つたらどうです？」

「ちよつと乗り心地というか、なんか変な感触しますが」

「いやよ!!? というか変な感触つて何!!?」

「ちよつと待て! このメンバーになんで吾が入っている!? 鬼だぞ!? 吾ほんこつ
じゃないぞ!」

が、そうは魚屋さんが卸さない。今回のメンバーはご主人が血に迷い迷つた結果、
一人の時は真面目なのに複数人いるとポンコツになる三人組が集まってしまった。

エリザベートトカゲにニトクリスさざん草女王に茨木童子とらふん。何をどう考えたらこんなキヤツトでも面倒

臭いことになるかと分かる三人組を集めてしまったのか、ご主人バーサーカー説を強く推すのだな、だがそれがいい。

「！」

「次で最後？ ホントそれ？ もうこれ以上お洋服汚すのはいやなんだけど……」

「私の衣装貸しましょうか？ これもなかなか良い素材で……」

「いやよ！ アンタの衣装全体的に薄いじゃない！ てかそれ胸隠していることになるの!?!」

「吾は鬼ぞ……なぜこやつらと一緒なのだ……ちよこけーき食べたい……」

うーん、本当にうっさいなこの三人。 オリジナルをはるかに超えるおしやべり野郎なのだ、どっかのサンマさんか？ サンマさんで思い出したがサンマさんって言いにくいな、さん抜かしてマでいいじゃないやなろうか、マ。 あ、ご主人ニンジンをしよもう……おろ？

「あれ？ 子イヌは？」

「本当ですね、同盟者の姿が見えません。もしかしてはぐれたのでは？」

「おい、あれじゃないのか。あれ」

とらふんが空に指をさすと、なんとご主人様に翼が生えて飛んでいるではないか、ご主人インザスカイ。 うむ、アタシもいつか空を飛んでみたいものだ。 いや見事。

「違うわよ！ アレワイバーンに攫われてんのよ！ 子イヌー！」

「いけません、急ぎますよ！ でませい！」

「まったく世話の焼ける……」

鬼が走って先導するのを後ろから、なんか布被ったおっさんの群れの上に乗りながら移動するアタシ達、なんか変な感触するな。 布引つ搔いて良い力？

「駄目です！」

「どうしよう！ このままじゃ子イヌ食べられちゃうわよ!?!」

うむ、それは不味い。 いやご主人は美味しそうなのだが、食べられるのは不味いだ、悲しくなる。 ん？ なんで不味いとわかるのだ？ 今度少しかじってみるか。

あの蛇もご主人を食べたのだし、いや、あれはご主人が食べたのか？ まあ良いやご主人が幸せなのが一番、一番。 今一生を終えそうであるが。

「なーに一人でお話してんの！ ちよつと、もつとスピード上げられないの？」

「これが最高速度です！ ああもう、こんな時にオジマンディアス様のスフィックスを借りれば……一体三スカラベは高いですが……」

「あの王様今いないでしょ！ こうなったら私の唄でメロメロに……！」

「いけません！ 先にマスターが冥界に召されます！」

「なんでよ!!」

「いいから、追いかけるぞ！ 巢に帰るのであれば、まだあやつは大丈夫であろう！」
追いかけるときでもうるさいなこの三人。三枚におろして良いか？ ご主人なでなでを所望する。ご主人？ あ、空の上だった。うーむ、ご主人と離れると寂しい気持ちなのだ。

「ここいらで降りたはずです……」

「見てなさいよ、パパツつと蹴散らして子イヌに喜んでもらうんだから……」

「巢が見えたぞ……まったく鬼にここまでさせたのだ、旨い酒と洋菓子をマスターには払ってもらうぞ」

というわけで、どっかの友人身代わりにして逃げたマラソンランナー並に走りに走った結果山の中腹に巢を発見、焼いたら大きな目玉焼きになりそうな卵もある、ご主人に作ってやろう、きつと喜ぶ。

ご主人は氣を失つたらしく、巢に投げ入れられたままぴくりともしない。どれアタシも一緒にお昼寝と行くか。もちろん有象無象を蹴散らしてからである。

「ちよ、ちよつと待ちなさい！ 見なさいアレ！」

するとトカゲが邪魔してきた、指をさした先には只のドラゴンが徘徊しているだけである。なにか問題でもあるのか？

「あるに決まってるでしょ！ あんなでつかいのと戦ってたら他のワイバーンも来ちゃうでしょうが！」

じゃあどうする、ここでみんなで焼き肉パーティーでもするか？ ならキャットはマグロのあぶり焼きを所望する。その代りご主人は頂かれる、それはいけない食うならキャットを食えい。まあどうしようもないときは、誰かがあのドラゴンの前で踊ればいいのだ。 実際オリジナルもそれで引きこもりから脱却した。

「つまり、誰かが囿になっっている間にあの巣からマスターを救出するということですか……」

「それで、誰が行くのだ」

「……」

一気に静かになる三人。 うむ、古池や、フロググダイブ、スプラッシュ。 この場全ての間が誰かの立候補を待っている状態である。 まあ小学校で先生に怒られたとき誰が最初に謝りに行くかという問題と同じである。

「……ニトクリス行きなさいよ、ぎざーん使えるでしょ？」

「嫌ですよ、あのドラゴン絶対ライダーですよ。 ぎざーんしても即死入らずにびたーん、びたーん、されて消える運命です」

「じゃあ、イバラギン……あんだバーサーカーだし、変化持つてるから行けるでしょ」

「いや無理だ。 見ろあの龍絶対HP十万以上あるぞ、バスター十の羅生門しても吾のレベルじゃびたーんされて終わりである。 とうか汝なれが行かぬか、お主の超音痴攻撃なら長距離から行けるのではないか？」

「超音波ね!? 超音波! ソニックブームだからね!？」

ふむ、全く見てられぬ。 家に帰るんだな、お前にも家族がいるだろう。 ここはキャッツがなんとかしなければならぬ、手を上げるアタシに皆が注目、もしかしてアタシ今輝いてる？

「まさか、キャッツ……アタタが行くつもりなの……？」

「変化のスキルを持っていてもそれは自殺行為ですよ!。」

「いや吾も持つておるのだが……」

任せろ、アタシはご主人の為ならこの命、いくらでも捨てる覚悟である。 ご主人の笑

顔の為なら、このくらい笑ってやってやるのだ。

「アタタ……子イヌのためにそこまで……」

なので……もちろん囿は我以外の奴が行く。

「……へ？」

「……はい？」

「……うむ？」

ダスヴィダーニヤ、うむ猫っぽくて言葉は好きなのだ。アタシはこの言葉を三人にかけると同時に、蹴飛ばした。うむ、すつきり。

「ちよおおおおおお!! アンタ覚えてなさいよおおおお……!!」

三人まとめて転げ落ちていく、多分止まる頃にはあのでっかいの目の前であろう。すまぬ、これもすべてご主人のため、タマモは皆忠犬であるゆえ。

龍の咆哮を背中で聞きながら、アタシは走った。ワイバーン共が気づいてこちらに飛んでくる。食材が六匹! 父さん今日はステーキだ! 巣までの直線距離で推定十三秒、途中のワイバーン足す、受けるダメージ足す、引くの宝具開帳。推定到達時間二十三秒!

「真の酒池肉林をお見せしよう……」

地を踏み、爪を尖らせ、全身に力を伝える。されど動きはしなやかに、まるで森を走る虎のように。肉を求め虎は行く。誰が為? もちろんご主人まつしぐら! 見るがいい、微睡の日差し、良妻賢母の心意気! 有象無象すべて皆殺しだワン!

「燦々日光午睡宮酒池肉林!!」

通った後には十七分割されたワイバーンしか残らない……まさに瞬殺。そのまま走って、巣に到達。うーんラップみたいなのだ。ご主人の元へ計測通りに十八秒

で到達すると、そのまま隣に倒れ込む、これ使うと眠くなるのだな……うーんグツモーニン。

目を覚ますと、なんだか安眠枕に頭を乗せた状態だった。うーむ、中々の一品……送料込でおいくら？

「??」
と思つたらご主人の膝だった、なるほどアタシが好き匂いがするはずである。ついで頭を撫でてもらっている。うむ、端的言う幸せ。だけど少し悲しい顔をしている、なぜだ？ ご主人が悲しいと自分も悲しい。なにせ忠犬ゆえ。

「」
なるほど、怪我をしていたのか。確かに無理矢理に突っ込み過ぎた、身長百九十五、体重百キロ近い紳士だったらモーマンタイだっただろうが、生憎今のアタシは身長百六十の体重■■なのだ。どうやら胸のあたりが真っ赤に染まつていたのでご主人も驚いたらしい、昼寝して八割方治っているから心配はナッシングなのだが。

「」
キャットが怪我をされるとご主人が悲しい？ うむ、ご主人が悲しむのであればキャッツは自重しよう。ご主人が泣いたら私も泣く。なにせ忠猫ゆえ。

ところで傷が胸の所にあるので躊躇しているようだが、がっしり掴んでいいゾ？ 勿論その他もろもろの料金はプラスされるが。

「うむ、茹蛸のように真つ赤になるご主人。なるほど蛇もこうやったのか？ ご主人の食べ方がなんとなくわかつたキヤッツであつた。」

「うむ、有り難うとな？ そんな言葉は要らない。なにせ忠狐ゆえ、ご主人が笑えばそれでよいのだ。アタシはそれが一番。」

「それでも有り難う？ うむ、そんな情熱のこもつた青い目で見られたら顔が赤くなるぞ。キヤッツ誑しめ。」

「？」
 「そして向こうを指さすご主人。どれどれ、夕日に向かつてダツシユとかの展開ではなさそうである。」

「いやあああああ！ 子イヌ、助けてええええええ!!」

「ちよつと！ もうちよつと早く走れないのですか!？」

「なぜ吾が汝達を負ぶつて走らねばいけないのだ!! オイ人間どうにしろおお!!」

うーん走ってくるのはずっこけ三人組とドラゴンにワイバーンの群れ。 どう見ても地獄絵図なのだな。

「うむ、ご主人が言うのならしよすがない。 このキャットもう一働きである。 傷も治って気分リフレッシュ。 ご主人も近くにいるし、今日の夕飯もあつちから来ている。」

全て、全て キャッツgodna 方向に向かっている。 だが褒美が欲しい、なので何時もの通りこういうことにする。

「ご主人、報酬に人参を頂こう!!」

「ご主人とアタシの明日はどっちだ。」

円卓が、鍋を囲んで、大惨事。

蓋を開けると、良い匂いが周囲を満たした。中には肉やら野菜やらが詰まったり、まるで箸でよそれ、その口に入れられるのを待っているかのように浮いている。

寒いときにはこれ、家族、友人、一人より二人、二人より大勢。食事だけではなく皆で温まることにも特化した料理。鍋である。

おなじみエミヤ率いるお母さんが率いるカルデア食堂では、今日はお鍋デーであった。エミヤプロデュースのジャパニーズ鍋料理である。

そしてその中でも周りの目を引くグループがあった。

「なるほど、これがニッポンの鍋……スープとはまた違うのですね……潰したポテトは入れなくても良かったのですか？」

「やめなさいガウエイン卿、既に具材は煮込まれている。追加の食材はまず食べ終わってから入れるのだ」

「トリスタン、まだ食前の祈りも済んでいないのですから。その器を食卓に置きなさい。箸もです」

「私は悲しい……なぜベディヴィエール卿は私の行動を先読みしてくるのでしょうか」

……」

「日本の料理なんだしよ、手を合わせて頂きますで良くねえか？ オレ、アレずつと待つ
のめんどくさいんだよなあ……」

「確かにモードレッドさんの言うことも分かりますが……ランスロット卿どちらを御向
きで？ あちらは鍋ではなく調理しているブーティカさんでは？」

「さ、さあ！ 頂こうではないか！ 手を合わせて頂きますで宜しいのですか？ マス
ター？」

「！」

丸型テーブルに座っているのは、かのアーサー王伝説出てくる騎士たち、
ナイト・オブ・ラウンス円卓の騎士達である。その一人一人が凛々しく、優雅で、華がある美男たちである。

周りの女性たちはそのアイドルグループ並の美男たちに思わず立ち止まる。され
どご用心、皆案外プレイボーイである。トリスタンは召喚初日にブーティカを口説こ
うとしたら同じく口説こうとしていたランスロットと小競り合いになった。そのあ
とマシユによってランスロットは傷心を負うことになったが。

「うむ、なるほど。確かに旨い。王が日本食を最良する理由も分かるな……」

「確かに濃過ぎもせず、薄すぎもせず……なるほどこれは中々……」

「野菜も味が染みみてて美味ですね……」

「私は悲しい……なぜベディ卿は私が取ろうとした野菜をすべて持つていくのか……」
「マスター、その肉オレにくれよ！」

「モードレッドさん、お肉はまだおかわりがありますから……」

マスターに合わせて各々が手を合わせて頂きましたした後、皆が箸を進めていく。さすがカルデアの誇るオカン、すこぶる好評である。有名なシエフ百人とメル友というのも冗談ではないのかもしれない。味が染みた野菜を食べながらマスターはそう思った。

今回の円卓との食事はマッシュが提案したものである。折角再会できたのだから当時の諍いなど関係なく昔のように食を囲むのはどうかというんだかマッシュらしい提案であった。アルトリアは自分がいると皆畏まってしまおうという理由で辞退してしまい、今はセイバー顔超決戦首がポロるよく私以外のセイバー死ね〜大鍋早食い対決！で食事をしている。無論担当はエミヤである。

「なるほど……これは肉をミンチにして丸めているのですね……なるほど私のマッシュに近い所があります……丸めた野菜は無いのですか？」

「お前肉食わないのになんでそんな筋肉あるんだよ……おつ肉見つけ！ うーん、やっぱり肉だよなあ！」

「モードレッド卿、野菜もお食べないと体に悪いですよ」

「サーヴァントが体を悪くするもんかよ！ さっさと食わねえとお前の分まで食っちゃまうぞ」

「私は悲しい……モードレッド卿にまで横取りをされるとは……」

「――！」

「私は嬉しい……あと美味しい……ありがとうございます、マスターはお優しいですかね……」

「ま、マシユ。良かったら私の肉を」

「いりません。先輩、お豆腐がいい感じに染みてますよ。良かったらどうぞ」

ブーティカさんの「ご飯の時ぐらいいは鎧を脱ぎなさい！」というお叱りの元、この場では皆が鎧を脱いでおり、軽装の状態である。ここカルデアでは生涯その兜を取らなかったというモードレッドも兜を取って過ごしているの、王以外の円卓の騎士たちは大いに驚いた。トリスタンとランスロットは禁句を口に出してしまい、マスターから止められるまでクラレント片手に追い回すという事態が起きた、片方が円卓最強の騎士なのでなんなくいなしてはいたが。

「しかし、またこのようにして食を囲めるとは思いませんでした。英霊として召喚されても戦い合う身だと思っていましたから」

「そうだな、卿達とまたこのように食事ができるのは正に奇跡としかいいようがない」

ガウエイン達の頭に昔の光景がよぎる、木漏れ日の中、王に忠誠を誓い、共に語り合
い、励みあつた仲間たちとの記憶。この身はすでに死すともこの輝かしい記憶だけは
魂に刻まれている。結末があんなことになってしまったとしても、それを無いことに
してしまうことはその輝かしい記憶達もなかったことにしてしまうということ。そ
れだけは自らの魂にかけて阻止しなければいけない、だからマスターの召喚に答え、魔
術王との戦いに加わっているのだ。今はみんなで鍋囲んでるけど。

「それと、具材が少なくなってきたことですし。入れますか？ マツシュしたジャガ
イモと人参の団子」

「いや、それは次の機会にお願ひしよう……といつかいつの間につつたのだ」
それとガウエイン卿の潰してきた野菜の記憶も無かつたことにしてはいけない。

「あー！ マスター、それオレが狙つてた肉団子だぞー略奪だー反逆するぞー」

「いい加減にしないか、子供みたいに具材を取られたぐらいでいちいち……トリスタン
卿、いま私の器から肉を盗らなかつたか？」

「おお、私は知らひやく……」

「嘘をつけ！ 口がもごもご言ってるではないか！」

「……………」

まあまあとランスロットとトリスタンを落ち着かせながら自分の肉団子をモードレッドまで持つていくマスター、器にはなくそのままモードレッドの口にまで持つていくあたりトリスタン達を笑えないように思えるが、こっちは天然である。つまり余計性質が悪い。

「おまつ、そういう事をするから……つたく……あーむ！」

呆れたような表情と照れている様な表情を混ぜ合わせたような顔をしながら肉団子を頬張るモードレッド。ぶつぶつと小言を言っているがなんだか嬉しそうでもある。

「これは驚いた。あのモードレッドが……マスターはサー・アグラヴェイン並にじゃじゃ馬の手綱を握るのが得意なのですね……」

「誰がじゃじゃ馬だ！ ぶった切るぞ！」

「先輩、私も肉団子を……その……」

「……」

「え、もう無い？ そう、ですか……」

「ならばマシユ、私の肉団子をとりたま」

「いりません」

なんだか少し不機嫌なマシユ。ほーらこうなつたと言わんばかりのモードレッドと、ハートが壊れそうな円卓最強の騎士、それを苦笑しながら見ているベディヴィエー

ル。その隙に具材を集め始めているトリスタン。お堅い職場でも和気藹々というか、フリーダムな空間になるのも鍋の魅力だろうか。そのまま騒がしく鍋の時間は流れて行った。

だが、鍋の具材も尽きてくる頃に事件は起こった。

「お、ロールキャベツっていうんだろこれ、おもしれーな。へへつもらいいい!？」

モードレッドが鍋に残っていたロールキャベツを取ろうと箸を伸ばした瞬間、そのキャベツを三膳の箸が同時に掴んだ。

「ん?」

「おや?」

「おお……?」

見ればモードレッドのほかに三人の騎士がロールキャベツを掴んでいる。どうやら皆それを狙っていたらしく、離す様子は無い。

「おい、誰の物に手をつけてんだ?」

「無論私のキャベツだ、貴様の物ではない」

「いいえ、サー・ランスロットそれは私のロールキャベツです。十五分前から目を付けていました。因みにキャベツだけいただきます、あとは好きにどうぞ!」

「じゃあ普通にキャベツだけ食ってろよ！」

「ああ……私は悲しい……そのロールは私のキャベツです……十六分から目を付けていましたから」

騎士道精神は何処に行つたと言いたいような連中であるが、今は無礼講。引いたものから飢えるのみである。後トリスタンが妙にせこい。

「皆さん、騎士道精神をお忘れですか。そういった物は分け合うものと」

「うるせえ、草食系男女！」

「おん……っ!? 訂正しなさいモードレッド卿! 私は身長百八十以上ありますし声も低音です! 何処かのインドの王子と一緒にしないでいただきたい!」

あの温厚なベデイヴィエールが声を荒らげる。以前なんだか得体のしれない髭から女物の服を薦められて以来、彼にそういった話は円卓内ではタブーであった。因みにその服は髭と一緒にデッドエンドつたらしい。南無。

「そのロールキャベツは争いの根源! 私が処理します!」

「ああ、円卓の良心であるベデイ先輩まで……どうしましょう……」

「?」

お鍋のしめは何にしようかといって厨房へと自分の器を持ちながら向かうマスター、どうやら巻き込まれたくないらしい。マシユも慌ててついていった。

「騎士は徒手にて死せず……」

「あつ手前エ！ 宝具はずりいぞ！」

ランスロットのナイト・オブ・オーナーによって宝具化した箸が三人の箸を巧みにはじき、ロールキャベツを持ちあげた。そのままランスロットの器へ入れようとするが

「ぬんぬんぬんぬんぬんぬん！！」

「オラオラオラオラオラオラ！！」

流石は円卓の騎士、諦めずガウエインとモードレッドは目にも留まらぬ速さでキャベツを掴もうと箸を伸ばす。

「くっ……だがまだまだ！」

しかしランスロットも円卓最強と謳われた騎士、その二人を相手取りながら獲物を簡単に渡そうとはしない。

結果、ロールキャベツが空中で浮かんでいるように見えるくらいにその攻防戦は激しさを増していく。

「確かに二人がかりは少し厳しいが、私が何の考えも無しに騎士は徒手にて死せずを発動させていると思つたのが卿らの敗北だ」

「なにっ！」

ガウエインの箸にひびが入り始める、モードレッドの箸はすでに一本が破損している状態だ。

「まさかランスロット卿！ 初めからこれが狙いでしたか！」

「今更気づいても遅い、ぬん！」

そう、ランスロットは獲物を取るために宝具を使ったわけではない。相手の武器はを破壊するために宝具を使い打ち合いへと持ち込んだのだ。結果二人の箸はランスロットの一突きで粉々に粉砕された。円卓最強の肩書は伊達ではなかった。

「この戦い、私の勝利だ——何!？」

そう確信した瞬間、ランスロットの箸が二つに折れた。ロールキャベツが下へと落ちていく。そしてその先には——

「おお……わひゃふいはかなふい……このひょうなけちゅまふゆになるなど……」

最早何を言ってるか分からないトリスタンがスライディングでロールキャベツの落下地点に口を開けたまま待機していた。足にはフェイルノートがあり、それでランスロットの箸を真つ二つにしたのだ。それでいいのかフェイルノート。というかアツアツのロールキャベツは中々に一口で食べるのは厳しいと思うのだが。

「取りました。そこまです」

伏兵は油断している敵に特に有効である。トリスタンの口にロールキャベツが入

ろうと落下してきたところを銀の腕が掴んだ。ベディヴェールである。

「まったく、円卓の騎士たるものがロールキャベツ一つに争つてどうするのです。此処は正々堂々とじゃんけんかなんか……どうしました？」

平和的に解決しようとしたベディヴェールであったが、自分の銀の腕の性能に気付いていないらしく、キャベツが自分の腕で焼き焦がれていることに気付いていなかった。その結果……

「エクスカリバー 転輪する……」

「クラレント 我が麗しき……」

「アロンダイト 縛鎖全断……」

怒りに燃えた三人が宝具を開帳していく、突然の宝具の使用にマスターの体の力が抜けてマシユに倒れ込む。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 宝具はさすがにやり過ぎでしょう!? トリスタンからも何か……」

「……スヤア」

「寝ている!? 待つてくださいい話せばわかります！」

「知るかー!!」

異口同音の三人の叫びが響き、食堂に光が満ちた。

「まったく貴方達は何をしているのですか！」

鍋とは時に人を暴走させてしまう呪いがかけられている。時々そうエミヤ先輩はニヒルな笑みをこぼしながらそう言っていた。なるほどその通りかもしれない。

半壊した食堂で、アルトリアから説教を受けている円卓の騎士四人を見ていると心からそう思うマスターであった。ちなみに説教はアルトリアシリーズが出向いた豪華マンツーマンのお説教である。一番きついのはリレイである。なんだか泣きそうになりながらお説教されると心が壊れそうになるのだ。

「まったく、なんだこの有様は……おいマスター無事か？」

ラムレイに乗りながら、厨房へと入っていくアルトリアのランサーオルタナティブ。なんだかんだで様子見が良いのがオルタさん達である。

「いるなら返事———— おお……」

「あ、いや！ 違うのです！ これは事故で……」

厨房で見たのはマシユを抑え込みその胸に頭を埋めているマスター。どう見ても事案であった。

「ふむ……まあギルティだろうな」

ランサーオルタの槍がゆっくりと回転を始める。

「ま、待ってください！ 本当に事故なんです！ ま、マスターも早く起きてください！」

だがマスターは意識が朦朧としたままマシユの胸から動かない。　　というか動けない。

「せ、先輩ー！！」

マシユの声が厨房に響く。　　翌日有様をみたエミヤが絶望しかけるのだが、それはまた別のお話。

——マスターの明日はどっちだ？

夢をみる魔法少女。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとクロエ・フォン・アインツベルンはそれはそれは可愛い魔法少女です。

どちらとも外国にお城を持ってそうな外国の風貌のお嬢様ですが、れっきとした日本育ちのお嬢様です。なので文化も、感覚も日本人なのでした。

今はいろんな事情があつてカルデアという人類を守るお仕事のお手伝いをしていきます。

「さあさあ座つて座つて！ 楽しいお茶会の始まりよ！ とうういんくる、とうういんくる、りとるばつと！ うふふ気違いのお茶会なんていつたらひどいんだから！」

「とう……いんくる？」

「時々何言つてるか分からない時あるわよね、あの子」

そんな二人は今日は不思議な女の子からお茶会に誘われていました。まるで絵本の中から出てきたような素敵な女の子！ 流れる様な美しい銀の髪、輝かんばかりの大きくてキラキラした目、片手には絵本を持ち、にこやかに笑う笑顔は花の様！ 名前はナーサリーライム、カルデアに召喚されたサーヴァントの一人です。

「さあさ、ここでは大人の気難しい話も、マナーも何もなし！ 素敵なお菓子に美味しいお茶が勢ぞろい！」

「でもお茶にお菓子つけていってもなんにもないよ？」

煌く昼下がり、ナーサリーの部屋に入った二人は手を引かれるまま椅子に案内されるまま座りますが、可笑しいことがありました。ナーサリーはお茶会だといったのにテーブルにはお菓子どころかお茶さえおいてありません。ごっこ遊びの事だったのでしようか、すこしクロエはがっかりしました。

「なんだ、ごっこ遊びだったら始めからそういつてよね……」

「ごっこ遊び？ 何を言ってるのかしら。ごっこ遊びですつてうふふ！」

「でも、テーブルには何も無いんだけど……」

「さてと、チェリーパイは好き？ カスタードは？ パイナップルにローストターキーは好きかしら？」

「なによもう、からかっているの？」

クロエが付き合っていないとでもいうように、席を立ちました。しかしナーサリーは笑ったまま、指をパチンと鳴らしました、その時でした。

「え……なに、これ……」

「え、え!? えー!!」

二人が瞬きをした瞬間、なんの変哲もない只の部屋はそれは王様が食事するような豪華なお城の部屋へと変わっていました。只のテーブルは豪華な円卓に見事なテーブルクロスが引かれ、綺麗なティーカップが四つ置かれていました。

「私はほかの女の子たちとは違うの。」

「なな、これどうやって!?!」

「どうなっちゃってんのよ……」

二人が驚く姿にクスクスと笑いながらナーサリーがいつの間にか持っていたベルを鳴らしました。するとしばらくして執事の恰好をした男の人が部屋に入ってきました。

「って、マスターさん!?! ひゃあああ! その姿!?!」

「?」

「ええ、お茶をお願いね。 そうね……ローズヒップ。それとお菓子のマカロンはカシス味でね」

入ってきた男の人はなんとカルデアのマスターでした。執事の服を着たマスターは眼鏡をかけておりなんだかいつもとは違う雰囲気でした。マスターはナーサリーの注文を受けるとお辞儀をしてからまた部屋を出ていきました。二人には何が何だかわかりません。

「私、頭がおかしくなっちゃったのかしら……」

「ええ、そうだと思うわ。でも実をいうと、素敵な人はみんな頭がおかしいのよ」

「わたしたちはイチゴ味が良かった」

「ひゅい!?!」

イリヤが驚いて隣を見ると、またイリヤぐらいの小さな女の子が席に座っていていました。これまた銀髪に、クリツとした目が可愛い女の子。なんだかナイフを持っているのが怖いですが、ナーサリーのお茶友達のジャック・ザ・リツパーちゃんでした。名前が怖いけど可愛い女の子達なんです。

「じ、ジャックちゃん!?! 何時からそこに!?!」

「最初からいたよ? あなた達が気付かなかっただけ」

ジャックお得意の気配遮断でしょうか、良く見たら服装も何時もの薄着ではなく、ふりふりのドレスを着ていますし、緑の帽子もかぶっています。

「な、なんなのよここは……いつたいなにしたのアンタ……」

「もう、好奇心旺盛な力キさんね。セイウチさんに食べられても知らないんだから。」

想像は世界を変えるの」

「いや、答えになってないわよ……」

もはや展開について来れなくなってきた二人、ふとドアがノックされたと思う

と。執事姿のマスターがケーキスタンドを持って入ってきました。次はメイド姿のマシユも一緒です、ティーポッドを持っており、もちろん眼鏡つきでした。

「■■■■!？」

「ちよ、ちよつと落ち着きなさいよ！ 鼻血出てるわよアンタ!？」

「だ、だってこのこうけいひゃ……」

余りの衝撃的な光景に少女がしてはいけない顔をしながら鼻血を垂れ流すイリヤ、落ちた血からは花が咲き始めています。

テーブルの置かれたケーキスタンドにはサンドイッチからクッキー、ケーキと美味しそうなスイーツが山ほど置かれており、マカロンもカシス味とイチゴ味が乗せてあります。

「わあ……！ ありがとうおかあさん！」

マスターはジャックに笑いかけながら、ナプキンとお皿を配っていきます。その間にメイド姿のマシユは紅茶をカップに注いでいきます。良い香りがクロエの鼻孔をくすぐります。イリヤはあふれる鼻血でそれどころではありませんが。

「ありがとう、これはお礼ね」

全て配り終えたマスターとマシユを自分の顔まで近づけさせて、二人のほっぺにキス

をするナーサリー。褒美を受けた二人は、微笑みながら少女たちに礼をするとまた部屋から出ていきました。

「うわあ……こんな漫画で見る様なお茶会私初めて……!」

「あら、イリヤとクロは貴族みたいだし経験済みだと思っただけれど」

「いや、私たちはどつちかと言うと日本生まれの平民育ちというか……」

貴族っぽい名前をしている二人ですが、血の繋がらない兄とメイドさんが二人いるぐらいの至つて普通の家庭に生まれた二人でしたから、このような英国式のようなティータ임을体験するのは初めてでした。

「私たちお腹すいたー」

「そうね、先にも言つた通りマナーなんか気にしなくていいから楽しみましょう!」

それからお茶会が始まりました。甘酸っぱい紅茶はお菓子との相性は抜群で、お菓子は二人が食べたこともないくらい美味しいお菓子ばかりでした。どこかの鬼さんも誘えばよかつたかなとイリヤが思うくらいでした。

「それで、結局ここはどこなのよ?」

ケーキを食べながら、クロエがナーサリーに尋ねます。イリヤは紅茶のおかわりをメイドのマシユに注いで貰つておりまた鼻血を出そうとしていました。

「夢よ、子供たちの夢の欠片」

「夢え？ どういう事？」

「どういう事か分からずクロエは顔を傾けます。一方イリヤは口についていたお菓子の欠片をマスターから取ってもらい顔を真っ赤にして、湯気が出ていました。」

『『全てのものは本来あるべき場所で見つかるべきで、普通は見つかるものなの』
こは子供たちの夢が集まったところよ』

「ますますわけわかんないわよ！」

「世界が燃えてしまつてから、子供達も燃えて、残つたのは子供たちの夢だけだった。」

「こは子供達の夢の墓場なの」

「ナーサリーがそういうと、部屋に一匹の蝶が入り込んできてテーブルに着いたと思うとそのまま羽を広げ、そのままテーブルの模様になりました。」

「んなつ……!?!」

クロエが驚きますが、ジャックとナーサリーは驚くこともなく紅茶を飲んでいきます。イリヤはマシユからまた紅茶のおかわりを貰つており見ていませんでした。

「此処は夢だもの、なんにも不思議じゃないわ。子供たちが想像することは何でも起きるの」

「じ、じゃあこのお城みたいところも、お菓子もお茶も、あのマスターたちも!?!」

「そう、まあこのお茶会は私が想像しているものだけだ。あのマスターとマシユはイ

リヤが想像している物……あの子の場合妄想って言った方がいいのかしら？ 此処では子供たちが思ったことは何でも叶うの。 なんとって夢の中だもの」

「だからジャックのお菓子も……」

「そういうこと。 うふふ楽しいでしょ！」

愉しそうに笑うナーサリーですがその顔は少し悲しそうにも見えました。

「本当にここは不思議の国のアリスみたいなの！ 上は下だし、後ろを向くと前だし、外が中だったのよ！ 本当に……！ でもあんなことが起きてから、夢を見れる子供はもう貴方達だけ……」

そこでクロエは思い出しました。 ここカルデアの外では地獄が広がっていることに、ここ以外に人間はいないということに。 此処が子供たちの夢の墓場という言葉にも納得がいきました。

「ごめんなさいね。 ただ少しさびしくなっただけなの、子供の夢が無いなんて悲しいもの……」

「ナーサリー……」

クロエは少し考え込むと、顔をパツと上に向けて言いました。 何か悪いことを思っていた顔です。

「つまり……この空間では想像が大事ってわけね！ 見てなさい！」

「はい？ 何の話をしてるの？」

一人話を聞いていなかった、イリヤが不思議そうにクロエを見ます。クロエは少し邪悪な顔をしながらマスターとマシユに顔を向けるとなにやら念じ始めました。

「クロ？ 何をして……」

すると、マスターとマシユの間になんとか妙な空気が流れ始め

「ああ……いけません、メイド長……そんな皆様が見ています……んう……」

「？」

「ああ……そこは……いけません……」

「んなー……?!?! クロ！ マスターさんとマシユさんに何をしたのー!?!」

なんだか濃厚に絡み合うマスターとマシユに顔を真っ赤にして大声を上げるイリヤ。

小学五年生には刺激が強すぎます。

「ハーハッハ！ 此処では妄想力が物を言うのよ！ むむむ！」

クロエがさらに念じるとクロエの恰好が王様の姿になりました。 なんだが無駄に

ゴージャスです。

「な、なにそれー!? じゃあ私も……ぬぬぬ！」

それを見たイリヤが念じると、ポンっと出てきた煙の後に、自分が憧れていた魔法少女マジカル☆ブシドームサシのコスチュームの姿になりました。 とても可愛らしい

姿です。どこかの黒髭が見たら、まあ30メートル以内に近寄れないように呪縛されていますが、卒倒することでしょう。

「す、すごーい！ なにこれ!!」

まるで聖杯を手にしたような力にイリヤも興奮します。呑み込みの速いイリヤはその後も剣を出したりステッキを出したりと自分が思うように物を創造していきます。

「ぐぬ、さすがイリヤ。妄想だけは私の上を行くわね……だけど負けないわ!」

負けじとクロエもイリヤに対抗して様々な物を出していきます。「なんだか大人向けのものが多いですが」しばらくすると二人とも対抗心が燃え上がったのか、背中に翼を生やして飛んでいってしまいました。ナーサリーはそんな二人の姿を目をまん丸くして見ていました。

「満足した?」

そつとジャックが後ろから尋ねます。口にはこれでもかというぐらいお菓子を詰めこんでいてリスみたいになっていました。

「ええ、楽しいわ! とっても!」

外で暴れまわる二人を見ながら、ナーサリーはとても可愛らしい笑顔で笑いました。子供の夢が帰ってきたような気がしたのです。それはとても喜ばしいことでした。

「皆さん、夕ご飯が出来ましたよ。 食堂に……」

「？」

夕方になって、ナーサリーの部屋に皆集まっていると聞いたマシユとマスターがナーサリーの部屋を訪ねます。 しかし返事が無いので、二人は部屋の中へと入ることにしました。

「皆さん、ご飯で……先輩？」

「え？ あつ、うふふ……なるほど、少しだけ寝かせてあげましょうか」

二人が見たのは、四人仲良くベッドで寝ている姿でした。 みな気持ちよく熟睡しており、なんだか起こすのがもったいないくらいの良い笑顔でした。

「おかあさん……」

「この装備なら……くろにい……」

「ぐふふ……次は二人に何のしゅちゅえーしょんを……」

「うふふ、楽しい、楽しいわ……」

マスターとマシユはお互いに顔を見て笑うと、風邪をひかないように毛布を掛けて、部屋からこっそりと出ていきました。

彼女達によい明日がありますように。

そう祈りながら、マシユは部屋の電気を消して、お休みなさいと一言つぶやきました。

ぐだ子と思つたらトーサカになった話。

「いやあ、本当にエミヤさんつてお料理御上手ですよ、中華も作れるなんて！」

「本当だよなあ、時々俺たちに間食作つてくれるし」

「掃除までしてもらうとなんだか申し訳ないがな」

「なんだかここのマスターがおかん呼びするのも分かる気がするな」

「ここはおなじみカルデア食堂、大体物事の始まりはいつもここから。今日はカルデア職員達の他に、周りには何人かのサーヴァントも食事をしており、なんだか食堂が賑やかである。因みに今日の昼食はエミヤが作った中華三昧である。」

「そういう彼はどうしている？」

「今日の予定は確かシュミレーターで戦闘訓練中ですな。相手はアーサーペンドラゴンとか」

「シミュレーターな、あとあの人アーサーじゃなくてアルトリアらしい」

「そういえばそうか、女性だからな。しかしかの王がまさか女だったとは……」

「歴史家達がみたら発狂ものの光景を私たちは見ているのではないか？」

様々な英霊が集うカルデアでは歴史には無い意外な真実が、そこで歩いていたりす

る。ある日本歴史好きのカルデア職員はかの織田信長がカルデアに来たとき真っ先に会いに行つたらしいがその後ぐだぐだになつて帰つてきた。是非もないよネ!

「そーいや、白衣女史その首飾りは何だ?」

どう見ても研究職とは思えないほどの強面なカルデア職員が、白衣を着たカルデア職員にかかつてた首飾りを指さした。それは中々に綺麗な宝石がはめ込んであり、微弱でありながら魔力を感じさせた。

「これか、これは彼にもらつたものだ、前に世話になつたからと言つてな。彼の魔力が多少入っているらしい。まったく義理堅いといふかなんといふか……」

そーいいながら嬉しそーな顔で首飾りを撫でる白衣のカルデア職員。あんなに堅物な女が恋する乙女みたいじゃないかと周りのカルデア職員が驚く、サーヴァントさえ誑す人間誑し的一幕を見たよーな気がした。

「へえ……」

「ふう〜ん」

「ほほーう」

「な、なんだその顔は! 止めないか!」

白衣を来たカルデア職員をなんだか良い物を見たよー様な表情で見る三人。なんだかんで仲良しである。

「……………んん？」

と、唐突に白衣を引つ張られる感覚がするカルデア職員。　なんだかこの前もこんなことが無かったかと思いつながら振り返る。

「んん……………？　誰だ？」

そこには一人の女の子がいた、長い黒髪に綺麗な青い目をしており、出ている所は出ている体であった、ここが学校ならばアイドルになれたに違いない。　年齢はマスターと同じくらいだろうか、なんだか落ち着かない様子で、なぜか男性用の魔術礼装を着ていた。

「うわあ、可愛いー。　新人さんですか？」

「なあ、アレどのくらいあると思う？」

「C……………いやDか？　なかなか」

二人の男子カルデア職員が、ひそひそと相手の胸を測定し始める。　男性用の礼装を来ているので胸がくつきりと浮かんでいる。

「先輩たち最低です」

「全くだ、それで君は？　新しい協力者かな？」

カルデア職員でも知らないとなると、冬木の女性のようにレイシフトでこつちに来た協力者だろうか、いったい誰なんだろうか。　話を聞こうとすると食堂の扉が勢いよく

開いた。

「マスター！ 此処にいましたか！ 逃げても駄目です！ さあ着替えに行きますよ！」

「！！」

「駄目です！ その恰好は適しません！」

そういつて食堂に入ってきたのはマシユだった、先ほどの少女を捕まえるとそのままひっぱるように連れて行ってしまった。残されたのは呆気にとられたカルデア職員四人組みである。

「なんだったんだ、今の？」

「さあ？ でもマシユちゃんがなんだか張り切っていましたね」

「先輩君以外の人間に張り切ることなんてあまりないから珍しいな……」

「そうだな、マスターである……マスター？ マスター!?」

時はトレーニング室のシミュレーター、失礼シミュレーター室でマスターたちが戦闘訓練を行っていた時までさかのぼる。

シミュレーター室はサーヴァント達も実際に入って訓練することが出来る空間であ

り、時たまサーヴァント同士で腕試ししたり、サーヴァントが教官としてマスターを鍛えるために訓練を行ったりしている。今日は後者で、講師はあのアーサー王伝説で有名なアルトリア・ペンドラゴンである。

「ここまでにしましょうか、日々成長しているようで何よりです」

「あ、ありがとうございます……」

「……………」

訓練が終わり、マシユもマスターも肩で息をしてその場にへたり込む、騎士王の訓練は中々にハードであり、容赦がない。ジャンヌダルクと同レベルかそれ以上のスパルタである。

「マシユもマスターとの連携が上達していますね、マシユが前に話していたようにアイコンタクトだけで分かりあえる日も近いのでは？」

「そ、そうでしょうか……」

騎士王から褒められるに慣れていないのか照れくさそうにしながら水を飲むマシユ。

息を荒く、汗が光るマシユがいつもより色っぽく見えてマスターは横目でチラチラと見ながら水を飲んでた。大事な後輩をそんな目で見るわけにはいかないと思っ
ているのだが、悲しいかなマスターも健全な男子であり、いけないいけないと思
いながら見てしまうのがやめられないマスターである。許してほしい彼も男なのだ。

「さてと、それでは食堂で昼食といきましょうか。今日は中華メインということで中々楽しみなのです」

「ふふ、そうですね。行きましようか、先輩。……先輩？」

昼食の時間が近く、なんだか生き生きとしているアルトリアに苦笑しながらマシユはマスターを呼ぶが返事が無い。不思議に思い振り返ると、そこにはマスターが胸を押さえ倒れ込んでいた。

「マスター!? どうしたのですか!」

「せ、先輩!! ドクター!! 先輩が!」

マシユが駆け寄り、ドクターに緊急通信を送る。アルトリアもマスターを抱きかかえ状態を確認するが目立った外傷はない。それならば何かの病気なのだろうか、しかしながらアルトリアには医療知識は無く、手の施しようがない。

「こつちにも確認したよ! 彼のバイタルが急激に変化している! 彼の頃こんな**ば**つかりだな!」

「早く回復手段を……せん、ぱい……?」

「これは……いったい……?」

アルトリアが抱きかかえているマスターを見て、マシユは小さく悲鳴を上げた。髪の毛が伸び始めている、骨格も変わってきており、身長も縮んで行っている。なんだ

か肉付きも良くなり、胸も膨らんで……胸も膨らむ!?

「どうしたんだいマシユ!? なんだかこんな展開前にもあつたような気がするんだけど!」

スラリとした体、流れる様に綺麗な長髪、柔らかな肌。それは誰がどう見ても彼ではなく、今カルデアのマスターは――

「はい、ドクター……先輩が、女の子に、なつちやいました……」

彼女になつていた。

「はい……?」

「今の先輩は女の子なんですから、女性用の服を着用しなくちゃ……」

「……………」

マシユに引きずられながら廊下を進んでいくマスター。その体は完全に女性のものであり、男子用の制服を着ているせいで所々が強調されていた。――主に胸や尻が――

しかしながら女の体でも、心は男なのだ。女物の服を着るのは抵抗がある。マスターにだってプライドはあるのだ。

とりあえずこんな時の元凶と大体こいつが悪いに出頭命令を出し、問題解決にダ・ヴィンチちゃんを頼んでいた。ダ・ヴィンチちゃんの事だし明日中には解決できるだ

ろう。だが解決できるまでがマシユには心配だった、なんせ今のマスターは黒髪、蒼眼の美少女だ。カルデアを一人でほつき歩いてたら何があるか分からない。

マスターをお守りするの自分だと今回のマシユは張り切っていた。

「……………」

「はい、駄目です。可愛くなった先輩は可愛い服装をするべきです！」

何か別な張り切り方もしているマシユに、マスターは若干不安を覚えながら、廊下を歩いていく。いざとなれば女性じゃなくても大きめの男物の服を着れば良いことだと思いい今はマシユに大人しくついていくことにしたらしい。

「おや、マシユ。丁度良かった、今度の食材についてなんだが……ん？ そちらのじよせ……………」

すると向こうから歩いて来ていたエミヤがマシユとマスターに向かって話しかけてきた、どうやら今度の献立について相談があったらしいが、今のマスターの姿をみて絶句する。

「んなつ……………」

「あ、エミヤ先輩この人はマス」

「凜?! なんて君がこんなところに居る!？」

「はい?」

「？」

りん？ どなた？ と首を傾げるマシユとマスター。 どうやらエミヤの知り合いに似ていたらしい、エミヤの顔が真っ青になったり、曖昧な表情になったりして完全にパニックになっている。

「いえ、エミヤ先輩、この方はリンという人ではなく」

「人ではない!? まさか、英霊トーサカか!? 借金がかさみ過ぎたのか!? だからあれほど資産管理はしっかりしろと私はいったのだ!」

「エミヤ先輩落ち着いてください、この人はマスターです」

「マスター!? 何時の間に君はマスターになったのだ!? まさか過去のレイシフトで!? というかまた君は人のサーヴァントと契約を……いやあれは私が狙ってやったものだが……」

「ち、違います! 落ち着いてください! マスターではありません、あああマスターですがリンという人ではないのです!」

「ど、どういふことだ……?」

ようやく落ち着きを取り戻したエミヤに事情を説明するマシユ。 いつもクールなエミヤのかつてない慌て様にマスターはよっぽどその人に因縁があったのだろうと思った。「真冬のテムズ川に突き落とされるとか」

「す、すまない私の知人に似ていたのな……しかし似すぎている……君の母親の旧姓はトーサカだったりしないかね？ まあとりあえずだ」

コホン、と咳をしながらエミヤがマスターの後ろに回ると、何処からか取り出した髪留めでマスターの長い髪の毛をツーサイドアップに仕立てあげた。マシユが詠嘆の声を漏らしながら目を輝かせる。

「うむ、この髪型がしつくり来るな……それでは私は厨房に戻ることにしよう、あまり出歩かない事をお勧めするぞ、マスター」

「髪型を変えるだけで、先輩の美少女率が三十パーセント上昇しました……流石エミヤ先輩……」

「……??」

何が何だか分からないままに、髪型を変えられたマスターは只々困惑するのみである。あと美少女率って何？

「あーマシユさんだー！ こんにちはヴェエエエエエ！ 凜さんんんんん！」

「リン!? なんてこんなところにいるのよー」

次に出会ったのは魔法少女の二人、イリヤにクロエである。これまた二人の知り合いに似ていたらしく、イリヤに至っては小学生が出してはいけない声を出しながら驚い

ている。

「いえ、イリヤさん。これはですね……」

「えー!? マスターさんなのー!? た、確かに凜さんとは思えない優しさオーラが出ているし……」

「でもいくらなんでも似すぎでしょ……」

「もしかしてグランドマスターのグランドマザーらへんは凜さんかもしれないませぬー」

またリンである。エミヤの焦り方と、イリヤの反応を見る限りどうやらとんでもない人らしいが、そこまで恐れられるとはもしかしてリンという女性は魔女か何かなのだろうか。マスターはイリヤ達に聞いてみることにした。

「……?」

「ふえ? ええーつと厳しいというか、無茶苦茶というか……マスターさんの性格を全部反転したような……」

「でもツンデレだから、時々優しいのよね。あとお兄ちゃんを狙ってくる泥棒猫その

ー」

「一言で表すならあかいあくまですかねー」

やはり悪魔か何からしい、今度メッフィーに聞いてみようと思つた。マスターは心の中で思つた。

「でも、マスターが女の子になっちゃうなんて……でも可愛いわね……」
「だよー……」

まじまじとマスターを見るイリヤとクロ。　　なんだか目に怪しげな光が宿り、ニヤニヤと笑いながらマスターに近づいていた。

「ま、マスターさん。　可愛い服とかに興味はありませんか？」

「そうよね、せっかく可愛くなれたんだからそんな男物の服よりも可愛い服がいいわよねー」

手をわきわきしながら近づいてくる小学生二人組、マスターは身の危険を感じてマシユに助けを求めろるが

「そうですね……しかし先輩のサイズに合う服がありますか？」

「そこらへんは任せて頂戴、丁度セイバーに着せようとした服があるから代用できるわ」
　　なんだかマシユもノリノリでマスターに服を着せようとしていた、しかもいつの間にか何処かの神代の魔術師まで隣にいて寸法を目測している。　　まさにマスターにとつては四面楚歌である。　　ギラギラと輝いている目に若干の恐怖をマスターは覚えた。

「フリフリ……はメイド服で見飽きているから、チャイナなんてどうかしら」

「はいはい！　私は巫女さんがいいとおもいまーす！」

「あら貴方意外と剛の者ね、こんど私の衣装室に招待しようかしら」

「先輩はどちらが……あれ？先輩がいません」

「身の危険を感じて逃げたわね……」

たまらずその場から逃げ出すマスター、あのままいると写真撮影までされかねない。とにかく見つからないように必死に走るマスター、なんだか体のあちこちが重い、主に胸とか尻とか。

「!?」

「おつ……つと！ 中々鋭いタックルじゃねえか大将！ ゴールデンだぜ！」

ふと後ろを気にしてばかりで前への注意を怠つたマスターが曲がり角で現れた筋肉にぶつかつてしまう。このゴールデンな肉質なゴールデン筋肉を持つサーヴァントは一人しかいない、坂田金時ゴールデンである。彼は走つてきたマスターを柔らかく受け止めて怪我をしないようにしたのだ、ゴールデン気配りである。

「あれま、お二人とも大丈夫ですか？ つてまあなんて少女漫画チック……ここに来てから重すぎる愛しか見てないタマモちゃんには潤う光景ですわね」

狐の耳と尻尾が生えた和服美人でありタマモキャットのオリジナル、玉藻が後ろから現れる。美しい毛並が乱れるからと普段は一緒に歩くことを避ける玉藻であったが、昼食を取るために食堂に向かつていたところ金時とばったり会ってしまったので仕方なく共に歩いていった。

「大丈夫か、たいしょ……って大将じゃねえ! すまねえ、つい大将かと勘違いしちゃまって……」

「どこからどう見ても女の子でしょうが……あれ? 貴女何処かでお会いしませんでした? なんとというか月らへんで。 というか……うむむ……?」

慌てて、マスターを離す金時。 女性を抱きしめていたと分かると顔がゴールデン赤くなっている。 彼はこう見えても純情なんです。

「いや、金時さん。 そのお方マスターですよ、多分ですけど」

「はあ? 何言ってるんだ? うちの大将は男だっつーの」

「いえ、外見こそ女性ですがこのイケ魂は確かに……」

「あら、あらあら。 どうしましょう、清姫さん。 我が子を抱きしめた悪い虫が見えた気がしたのですが……」

「浮気者は燃やしますが……この場合どうでしょう、事故のように見えましたか……」

と、今のマスターにとつて一番出会いたくない相手のナンバー1と第一位が同時に来てしまった。 清姫と源頼光の宇宙的暗黒点コンビである。

清姫は興味がなさそうに見ているが、頼光の方は若干お怒りの状態で、なんだか背筋が凍るような視線を向けられる。 今までそんな頼光の視線を浴びたことが無かった。 マスターは知らずのうちに足が震えて来ていた。

「ま、まてまてストップだ頼光サマ！ 曲がり角でぶつかっただけで怪我もしてねえ、頼光サマが怒ることもねえよ」

近づいてくる頼光に対してマスターを庇うように前にでる金時。 ゴールデン心意気である。

「……清姫さん？」

「嘘はついていないみたいですね。確かに事故の様です」

「……はあ。 ごめんなさい、うちの金時がご迷惑をかけたみたいですね、この子の母として謝罪いたします。 お怪我はありませんか？」

「うわあ、あの変わり様……わたくしも人の事言えませんが、腹が黒いとかそういうレベルではありませんね……天然でやってますし」

誤解と分かるると一転して大人しい女性としてマスターに接して来る頼光、その変わり様はまるで先ほどの怒りなどは初めからなかったようであり、それがマスターに若干の恐怖を与えた。

「さてと、昼餉に遅れてしまいます。 金時さんと玉藻さんもご一緒に如何ですか？ そこにいる旦那様も……ますたあ？ 私、いまなんと……？」

ふと自分から出た言葉に困惑する清姫。 目の前の女性に向かって旦那様といったのはどういうことだ？ 何故旦那様以外の人を旦那様と言って嘘にならない？ 様々

な疑問が清姫の頭の中で混ざり合い、小惑星爆発を起こし、一つの結論が出来上がった。「マスターの匂い、マスターの髪、マスターの目。違うのは性別だけ……これから導き出される答えは一つ……」

「？」

いきなり興奮しながらマスターに近づいてくる清姫。もしかして自分の正体が分かったのだろうか、清姫はバーサーカーだが勘だけは妙に鋭い。マスターは冷や汗を垂らしながら清姫を見るしかなかった。

「もしかして……貴女は未来から来た旦那様ますたあと私の子供なのでは……?!」

「さすが清姫ちゃん、斜め上どころじゃない考え方をしますね……」

どうしてそう言ったと言いたいぐらいの迷解答を出す迷探偵清姫。流石はバー

サーカーである、理屈何て無いに等しい。

「なん……だって……そりゃあオレっちが大将に見間違うわけだぜ！」

「?!」

どうして納得できるのかとマスターが頭を抱える。此処にはバーサーカーしかないのか？

「いいえ、落ち着いてください。その子は清姫さんの子供ではありません」

と、ここで落ち着いた声で興奮する清姫と金時を鎮める頼光、さすがは源氏の棟梁で

ある。 バーサーカーであつてもその知性は失われて

「おそらく私と我が子との子供です!」

「わたくしもうご飯食べに行つていいですか?」

バーサーカーだつた。 しかも思いつきり我が子との子供とか言つてしまつては
辺り清姫より倫理的に危ない。

「ら、頼光サンとの子供!? つーとこいつも俺の大将つてわけか!」

「いいえ、私の娘です!」

頼りのゴールデンも信じきつてゐる。 というか彼つて純情だよな。

なんだかささらにろくでもない事が起きそうな予感に、ただマスターはため息をつくし
かなかつた。

「あの子がマスターだつたとは……」

「普通にカップ目測してた俺たちが馬鹿みたいだな」

「なんで男子つていつつもあんなんですかね?」

「知らん、私に聞くな」

「こゝはおなじみカルデア食堂。なのだが、昨日起こつたマスターの娘争奪戦争のせい

で半分が黒こげになっていた。マスターの娘が召喚されたというバーサーカー二人の勘違いで起きたこの戦争は、カルデアの廊下と部屋の四割が壊滅するという大惨事になり。今は戦争に参加したサーヴァントが責任を持って片づけている最中である。

「んで、どうしてマスターが女の子に？」

「どうも、インド神話を知ったどこかの人がラーマさんを女の子にしたくて、パラケルスさんの工房から盗んだらしいですよ」

「それで、またマスターが間違つて冷蔵庫から持ち出してしまったと……」

「この前と何も変わってないではないか……」

「なんだか似たような話を聞いたような気がしてため息を吐くカルデア職員。因みに首謀者の黒い髭は第一級カルデア裁判にかけられることもなく、その場でマルタさんからボコボコにされた。南無。」

「でも、あの子の女の子姿可愛かったよな……」

「うむ、あの大惨事には堪えたが、その後のファッションショーも良い出来であった」

「あれ可愛かったですよね！ ゲスト参加のアストルフォちゃんも可愛かったですし

！」

「彼の方は元に戻っても続けられたけどな……最後の方なんか泣きながら着替えさせられてたぞ……」

しかしながら意外に似合っていたので、密かに写真を撮って保存しているのは白衣のカルデア職員だけの秘密である。

「じ、じゃあ俺はここで……」

「俺も」

「私、エミヤさんから食後のお茶のお誘いを受けてたんでした！」

「ん？ どうしたお前達……？」

まだ半分も食べていないのに、白衣以外のカルデア職員が皆急いで席を立つ。妙に思っていると、ふと白衣を引っ張られるような感覚を覚えた。

「ああ……もしかして……」

なんだか全身をほとぼしる嫌な予感を受けながら、後ろにを向くと。一人の少女がいた。髪と目が薄い赤色で、なんだか幼い印象を受ける顔とクリツとした目が可愛い女の子である。

なぜか男用の魔術礼装を着ており、涙目になりながら白衣を引っ張っていた。

「マスター！ どこにいるのさー！ あ、いた！」

と、ヒポグリフに乗ったアストルフォとマシユが食堂のドアを壊しながら入ってきた。

「先輩！ 此処にいたんですか！ 早く逃げますよ！」

「ますたあ……ますたあ……!!」

「どこいったのですかああああ？ 遠慮せずに娘なのだから甘えていいのですよおおおおお？」

「あわわわ！ もうこつち来てるよ！ なんであの子マスターをマスターの娘なんて勘違いしているのかな?! 髪の色だって違うじゃん！」

「愛の力でしようか！」

「オルランドじゃあるまいし!!」

「だがマスターは断固として白衣を離さない。なんだか恐怖のあまり幼児退行しているようにも見える。——それか道連れを求めているようにも——」

「さて、また私か!? まてまて白衣ならいくらでもやるから!!」

「もー！ 仕方がない！ 一緒に連れて行くよ！ よっこいしょ！」

「対シヨック姿勢を！ 今回は前回よりもハードですよ！」

「じゃあ連れて行くなよ!!? ちよつとまて心の準備がいやあああああ……」

ものすごい速さで食堂から飛び出していくヒポグリフ。可愛そうに、前回のバイクの時だって一日は何も食べられないほど酔ってしまったのに。またこそそと厨房へと隠れていた職員たちは手を合わせて合掌した。

「彼女はどうかあがいても生き残れない運命なんだな」

「悲しいな……」

「でも、この状況って多分私達も前回と同じ目に遭いませんか？」
「……」

皆、そこで口をつぐむ。言っではならない事を口にしてしまったオペレータ担当のカルデア職員は自らの失態に気付き、青くなってしまった。

足音が近づいてくる、それも二つ。しかし恐る恐る厨房から顔を出すと、そこには誰もいない。通り過ぎてくれたのかと三人は安堵する。

「……」

「我が息子との娘を探しているのですが……」

誰もいないはずの後ろから声がした。振り向くとそこには……

カルデアの職員はどっちだ

モードレッド外伝 叛逆の騎士、もしくは乙女？

「此処はおなじみ人理継続保障機関カルデア。次の特異点に備え英霊たちと日々訓練に勤しんでいるマスターだが、毎日訓練ばかりでは体が壊れてしまう。ムアスタアアアア！筋肉は動かした分だけ休ませるのも大事なのです！」とレオニダスも言っている。

「……………」

「フオーウ……」

なので今日のマスターがやるべきことはただ休むということだった。ベツトの上でだらけながら遊びに来たフオーウ君をモフモフし、心も体もリフレッシュ。正にマスターにとっては最高の休日の過ごし方だった……だったのだが。

「おい、今日は外には出んのか。ネタをくれネタを、締め切りが近いのだ。いや近かったと言わべきだが」

Expectation is the root of all heartache.

「期待はあらゆる苦悩のもとと申しますが、実は吾輩明日で×切りなのです。いえ、実際には三日前でしたが、明日で限界なのでマスターにネタを頂戴せねば明日からはもやしとレオニダス殿が作ったなめこが主食になってしまいます」

こんな時に限ってマスターの部屋にはカルデア働かないサーヴァント選手権の上位に組み込む作家サーヴァント二人が邪魔しに来ていた。どうか来ててもネタが無いらしく、詩的に時には感情的に愚痴っているだけなので本当に邪魔である。

「……………」

「なに? そんなに愚痴るのだったら書くのを止めろ? 阿呆かお前は、世の中の作

家が皆楽しみながら書いていると思うな。×切りとネタ切れに悩みながら書き上げ

た後の何ともいえない快感が醍醐味なんだ」

「苦勞は楽しんでやれば、苦痛を癒す。まあ、悩むことも楽しみなのですよ吾輩達に

とっては、ということでもネタを所望します」

「フォーウ……」

「だってらせて自分の部屋でやってくださいと抗議の視線を向けるマスターとフォウ君。ごもつともな意見であるが基本駄目人間もといサーヴァントな二人はそんな視線さえネタにしようとする。

「……………」

「なんで×切り前にやらなかったのか? 鬼かお前は、俺が夏休みの宿題を早めに終わらせる優等生に見えるか? こっちは夏休み最後の日どころか新学期始まってむこう一週間はまだセーフだ」

「Time is a very bankrupt.」
 「時」は破産者である。×切りを守らない吾々ではなく、夏休みを長くし過ぎた編集者に問題があるのですな」

「作家^{フオー}ってみんなこんなだよねー！」

フオウ君が完全に見下した様な鳴き声を上げるが、もちろん何と言っているか分からないがマスターだけは何となく何と言おうとしているのかは伝わった。どこかの花の魔術師のせいだろうか。

「―― 隙ありっ!!」

「―― !?」

もう作家サーヴァントたちを無視して昼寝でもしようかと不貞腐れ寝を実行しようとしたマスターに一つの影が突然襲いかかった。影はマスターを毛布で包むとその上に押し掛かり、マスターを身動きできないようにして頭にチョップをした。

「はっはー! 敵将打ち取ったりー! このHPやらATKやら上がりそうな秘宝は我がものだー!」

「フオー!?!」

勝利の声を上げながら、フオウ君をライオンのキングなりに持ち上げるのはアーサー王伝説に出てくる叛逆の騎士、モードレッドであった。カルデアでは訓練と非常時以外では鎧は脱ぐようにブーデイカから決められており、今はホットパンツにTシャツ一

枚の姿である。――なおカルナは鎧を剥ぎ落とすため、特例で免除されている――

「――!!」

「フォー！」

「うおっ！ おのれ二匹そろって叛逆か！ よい！ ならばこのモー王が直々相手してやろう！」

やられてばかりで堪るかと思われ、フォウ君がモードレッドの顔に貼り付くと同時に、マスターが逆にモードレッドを布団に包もうとして、もみくちゃになる二人と一匹。二人の笑い声と一匹の鳴き声が部屋に響く。

モードレッドは円卓の騎士の中で一番最初に召喚された騎士であり、マスターとの付き合いも長い。

マスターにとっては、気難しく、わがままで粗暴であるが、自分を信じ剣と誇りと命を預けてくれた、マシユとはまた違った側面のサーヴァント^相。

モードレッドにとっては、馬鹿で、弱ちく、むこう知らずではあるが、気難しい自分を受け入れ、叛逆の騎士を愚直なまでに信じ、そして全てを預けたマスター^相。

最初こそ反発しあう二人であったが、一緒に特異点を旅していきながら絆は絡まり、時にほめて、そして更に強く絡まり、今ではマスターとモードレッドはお互いに信頼し合い、言いたいことを言える親友ともいえる仲であった。

「わはははは！ くすぐるのは無しだつて……」

「はあ、見るからに幼児二人がじゃれ合う図だな。 つまらん、やるならプロレスごっこぐらいして見せろ」

「じゃじゃ馬ならしにしてはどうも幼稚すぎますな。 どちらかと言うと猪……うりばうですか」

つまらなそうにじゃれ合う二人を見ている作家達に気付いて固まるモードレッド、どうやらマスターに奇襲するのに夢中で二人には気付いていなかったからしい。

「いつから……居やがった？」

「おまえの頭はジャガイモでも詰まっているらしいな、さすがジャガイモのマツシユが主食だっただけある！ どちらが先に入っていたかも分からないほどのマツシユ頭だ！」

「うむ、The plays the thing 劇こそまさにうつつけ！ 良い喜劇役者になれましょう」

「ぶった切る……！」

「!!!」

クラレントを構えたモードレッドを慌てて止めるマスター。 これでもこの人たちは仲間なんです。 主に人間が見たくないとところを嬉々として暴いてくるけど仲間なんです。 働かないけど、この頃マスターにコーヒーどころかシチュー作らせたりして

るけど仲間なんです。

「そもそもうら若き男女がベッドでまさぐり合つてると思つたら、その実は幼子たちの戯れですと来た！ これではまさに話にもならない！」

「純粹すぎる関係大いに結構ですが、どうもこう、袋とじ開いたらなんの変哲もないピンナップだった時のがっかり感ですな、一種の詐欺でしょう」

「止めるなマスター。 此処で切つた方が人類のためになる」

「!!」

「ドフォー!？」

女と言う単語に更に熱が付いたのか、もはや振り上げながら作家達に近づくモードレッド、フォウ君も加わつて必死に止めているが、当の作家たちは顔色変えずネタを探している。

「つたく、早く出ていきやがれ」

マスターとフォウ君の必死の説得により何とか怒りを鎮めるモードレッド、煽りを任されれば右出る者はいない作家二人と沸点が低いモードレッドとの組み合わせは火薬庫に火種を投げ込むことと同義である。

「言わなくとも出ていくとも、こう五月蠅いと書けるものも書けん」

「そうですね、ではリア王じゃなかったリア充のマスター。 じゃじゃうりぼうならし

もほどほどに……」

「出てけー!!」

ダメ人間二人を蹴りだすモードレッド、これでせいせいしたと溜息を吐きながらベッドに戻ってきた。マスターは苦笑するばかりである。

「つたく、なんだか疲れた……誰が幼稚だつてのあいっだつてガキじゃねーか」

「ああ? 中身はおっさん? くくっ……確かにな! さてと、じゃあ星のフォウ争奪戦再開といくか! とーりやー!!」

「!?!」

マスターに布団と共に飛びかかるモードレッド、まだまだ勝負はついていなかったらしく、またフォウ君をかけた戦いに火蓋が切られた。今度はアンデルセンが言ったようにプロレス技も混ざり合い、巻き込まれたフォウ君はもうヘトヘトであった。

「ぜえ……ぜえ……諦めろぐだぐだ王、マウントを取った、地の利を得たぞー!」

「!」

どれくらい長い時間続いたのだろうか、二人ともいつの間にか意味も終わりもない遊びに熱中し、ベッドのシーツはぐちゃぐちゃ、布団もしわくちやになつてしまい、枕からは羽が飛び出ている。フォウ君の毛並もくしゃくしゃで部屋隅っこで不貞腐れて

寝てしまっている。この光景をエミヤ達オカンが見たらさぞ雷が落ちるだろう。

「ふふ……さつさと負けを認めるんだな」

マスターの上に乗っかりながら勝利を確信した笑みで見下ろすモードレッド、さすがは直感スキル持ち、マスターの攻撃を華麗に避けながらクラレント（枕）をマスターの頭部へと打ち込み、ふらついたところを抑え込んでの勝利であった。

「……………」

「よしよし、貴様は捕虜として丁重に扱ってやろう！ ……あー疲れた……」

流石にモードレッドには敵わないと、笑いながら敗北を認めるマスター。モードレッドもさすがに疲れたのか、マスターの上へと倒れ込む、二人とも汗をびっしょりと掻いていて息も荒い。

「ん……良く見るとお前ってさ、綺麗な目してるよな」

ふとモードレッドとマスターの目が合うと、そのままモードレッドはマスターの目を見つめた。青玉サファイアを思わせる様な淡い青色の瞳がモードレッドを捉え、モードレッドももつと近くで見ようと、どんと顔近づけてくる。

「……………」

「うん？ オレの目も？ そ、そうかな……」

同時にマスターもモードレッドの吸い込まれるような翡翠の様な美しい緑色の目に

惹かれていた。結果二人とも目を見つめ合ったまま顔を近づけていく。

「……」

「……」

二人とも、一言もしゃべらずに顔だけが近づいていく。妙な雰囲気にもードレッドの直感が「ダメよ」と警鐘を鳴らしているが、なんだか止まらない。そして二人の顔がどンドンと近づいていき――

「……いって」

「……っ」

お互いの鼻先がぶつかった。なんだか二人とも間抜けみたいで二人して無邪気な子供のように笑い合う。それでも密着した体は離れようとしなかった。

「……んっ」

そして先に唇を奪ったのはモードレッドだった。勢いが付きすぎて歯がぶつかりお互い少し涙目になるが、そのまま深く口づける。まるで人工呼吸の様な深いキスだった。

「んむ……ふはっ……」

「……」

「ん？ ……んんっ」

息が続かなくなってモードレッドが口を離れたところで、次はマスターから口づけをした。モードレッドとは逆に触れるだけのキスだったが、熱い唇の感触がモードレッドの体を火花のようにつらぬいた。

「はあ……」

「……………」

熟した果実の様な甘ったるい匂いが二人の鼻をくすぐる、モードレッドの直感が警鐘が鳴りやまないがそんなものはまるで聞こえていないようだった。目が蕩ける、また

二人の顔が近づいていき――

「あ、あのう……」

ドアから聞こえた声によって、勢いよく離れた。

「うひゃああ!? 白い父上!?!」

「……………!?!」

見れば、花の少女騎士であるアルトリア・リリィがアップルパイを手に持ちながら、顔をゆでられた蝋みたいに真っ赤にしながら部屋の入り口に立っていた。なるほど事実の匂いはアップルパイであったか。

「い、いやですね、私、エミヤさんと一緒にパイを作りました、そのあの、おすそ分けしようとおもって、その、ドアをノックしても返事が無かったので、あのそのあのえつと

……ごめんなさい!!」

丁寧にアップルパイを置いてから部屋から走り去るアルトリア・リリイ。荒れたベッドの上で汗だくの二人が口づけしていたらそれはそう思うだろう。

「えつと……オレはなにを……して……」

冷静になって、今までの事を振り返るモードレッド。たしかマスターと遊んで、目が気になって、見つめ合って、その後は……あとは……

「……くられんと、どばー!!」

「!?!」

鼻から勢いよく魔力が奔流するモードレッド。いまさら自分がとんでもないことをしたことに気付く。

「お、おれおれおれ! にやー!? にやー!?」

解説不可能な事を言いながら脱兎の如く部屋を飛び出していくモードレッド。一人残されたマスターは自分をとんでもないことをしていたのではないかと一人顔を真っ赤にしながら枕へ顔を埋めた。

「先輩はモードレッドさんと喧嘩でもしたのですか?」

「?」

それから数日後、カルデア食堂でマシユと食事をしながら、マスターは曖昧な返事をした。この頃モードレッドの様子というとそれはそれは可笑しいものであった。

マスターと出会うと逃げ出し、直感スキルを駆使して出会わなくても逃げ出す。その癖して他のサーヴァントがマスターといると不機嫌になり、何かあったかと聞かれると顔を真っ赤にして怒り出す。誰がどう見ても二人に何かがあったのだが、二人に訊いても頑として口を開かない。なので近頃のカルデアの奥様方の噂はそれで持ちきりであった。

「もしそうだったら早く仲直りすることを推奨します。先輩たちが仲たがいでいると私も悲しくなります」

「……………」

「喧嘩はしていない？　しかしながらこの頃のモードレッドさんの行動は先輩に対して冷たくありませんか？」

マスターからしてみれば、どうやって仲直りなんてすればいいか分からなかった。

そもそも喧嘩なんてしていない、だが喧嘩をしていないからこそこつちが謝ったら済むという問題ではなかった、それに話そうとしてもあつちはすごい勢いで逃げていくので言葉を交わすこともできない。

「……………」

マシユに気付かれぬように溜息をつく、何故あんなことをしてしまったのかマスターは今でも分からなかった。マスターからしてみればモードレッドと一緒に馬鹿やるような相棒であり、そんな感情を抱いたこともなかった。そもそも女扱いをする と怒る。しかしあの時はなぜか二人ともそんな複雑な思いなんて欠片も無く、ただ口を塞いでいた。一体どうして、頭の中で様々な感情の糸が絡まり合って頭を重くする。

「ふん、幼児が成長したか。それでも小学生低学年ぐらいの成長だが、その感情を知るには十分な成長だろう」

とそんなマスターの横にアンデルセンが座ってきた。手には原稿とコーヒーを持っていて。またネタ探しだろうか？

「……………」

「うん？ べ切り？ 安心しろ、これは来週分だ。お前たちの砂糖よりも甘つたるい状況を見たらネタには困らん」

「アンデルセン先生？ 何を言って……」

「一緒に居過ぎて、これが当たり前と思っていたんだろう？ だが一緒に居過ぎて、普通に過ぎていれば当たり前に思う感情も無くしている。阿呆め、男だぞお前は。そ

してあつちは女、こうなるのは必然とも言える。むしろ今までこうならなかったのが奇跡なのだ。お前が今感じている思いは何だ？面倒な物全部取っ払ってそれだけ感じてみる」

さすがにアンデルセンには御見通しだったらしい、少し説教じみた言葉を聞いて、マスターの頭の中で絡み合っていた様々な感情の糸が解けていく。

「ほう、気付いたか。そうだその感情だ。いいぞ、低学年から初心な中学生までには成長したらしい」

「礼を言うぐらいならコーヒーの一つや二つ持ってこい」

「あの、お二人とも言いたい何の話を……」

「！」

「仲直りする方法を思いついた？」

誰もいない廊下でモードレッドは荒れに荒れていた。渦巻いた感情が胸を突き破ろうとして何度も声を上げる。マスターに会おうと思うと胸が高鳴る、顔を思い浮かべると顔が熱くなる。他の奴というだけで胸がざわつく、あの笑顔が誰かに向けられ

るだけで頭に血が上る。だが足はマスターを見るたびに遠くへと向かってしまふ、なんだか顔を直視できない。

今まで自分が感じたことがない感情に戸惑い、それがモードレッドを苛つかせる。

「ああ、私の勘が当たってしまった！なるほど、純粹さ故にそれに気付いても感情のコントロールが効かないのですな。まるで生まれたての赤ん坊がそのまま大きくなつてしまったかの様……」

「今のオレは一度キレたら制御できんぞ」

すると、モードレッドに今、会うとアウトなことになること間違いなしなサーヴァントトゥートップの一人、シエイクスピアが声をかけてきた。こいつを見ても殺意しか湧かないのに、なぜアイツは違うとさらにモードレッドはさらに困惑する。

「それは怖い。ですがこうやって何時までもうじうじとされるのは吾輩としても目も当てられませんので」

「オマエ斬りたいのか？」

「芝居はしまいまでやらせておくれ。とりあえず、最後まで話をお聞きなさい」

「……早く済ませろ」

クラレントを下ろし、話だけは聞いてやろうと壁に寄り掛かる。だがクラレントは放さない、もしもシエイクスピアの話がどうでもよかつたらその場で叩き切るつもりで

ある。

「単刀直入に言いましょう、生まれたてのじやじや馬よ、貴女は今やつと恋を知ったのです」

「……はあ？」

「貴方は、当たり前のように常に共に居たせいで、当たり前前に芽生える感情に気付かなかつたのです。 貴方はなんだ？ マスターとサーヴァント。 ふむそうでしょう、では男と女とは思わなかつたのですか？ こうなるのは当たり前なのです。」

Love looks not with the eyes but with the mind.
恋は目でなく心で見えるもの。 貴方達は相手をそういつた心で見えることをしなかつた」

「お前一体何を言ってる……」

「彼からの接吻を受け、目は蕩け、天にも上るような気分で呆けていた。 それで貴方なのです」

モードレッドの顔がどんどんと赤くなる、彼女の直感がまたもや「ダメよ」と警鐘を鳴らす。 次の言葉を聞いてしまったら自分は制御できなくなる。

「そうです、今の貴女はなんとも簡単な存在」

「止めろ」

「何処にでもいる」

「止めろ!!」

Frainty, thy name is woman.
「弱きもの、汝の名は女なり。」

モードレッドのメーターが振りきれれる。最早誰にも止められない、クラレント片手にシエイクスピアに飛びかかる。首を狙った一閃は容易に彼の首を胴体から離すだろう。

だがシエイクスピアの体は霧のように消え去る。キャスターによる幻影だ。

「貴女は認めるぐらいなら死んだ方がマシだと考えるでしょう、ならば Comelady, die to live. さあ、お嬢さん、死んで生きるのです。明日への一步は昨日との決別! さらばですさらば……あ、メディア殿、もう通信切つてもらつても良いですか? このままじゃかっこつか」

声だけ残して消え去っていくシエイクスピア、残されたモードレッドは行き場のない怒りを壁にぶつける。

「糞がつ! 言いたい放題言いやがつて! 自分が女だつてことぐらい知つてんだよ! くそつ! くそつ!」

怒りを紛らわせるように壁を何度も殴る、だがシエイクスピアの言葉はモードレッドに渦巻いていた謎の感情の正体を明らかにさせた。怒りも冷めていくにつれて別の感情がモードレッドを熱くさせる

「まったく、死んで生きろだ？ こっちは一回死んでるつっの……あーもー!!」

頭を掻きながら、吹っ切れたように声を上げるモードレッド。 気持ちがあつたのならば、後は行動しかない。

「男か、女か……生きるか死ぬか、それが問題だ。つてか、まったく……」

マシユと食堂から帰ってきたマスターがマイルームの扉を開ける。 仲直りという関係を改善する方法は見つけたが、肝心のモードレッドが逃げてしまうのでどうしようか考えていたマスターだがどうもいい方法が思いつかない。 いっそアルトリアに頼んでみるかと考えていると、ふとベッドの布団が妙に膨らんでいるのに気付いた。

だがマスターは天井を見ると、これが清姫や頼光だった場合、毛布は囿で自らは天井に張り付いていることが多いからである。 もはやホラー映画の類だが警戒を怠るとマスターはホラー映画より酷い目にあうのだ。 だが天井には誰もいない。 ならば毛布に潜り込んでいるのは誰なのだろうか、警戒をしながらベッドに近づいていく。

「？」

「……隙ありっ!」

「!?!」

ベッドに近づいた途端に、毛布の中から手が伸びてきて、マスターを毛布の中へと引

きずり込んだ。しまった、今回は天井がブラフであつたかと後悔したが、何時まで経つても何もしてくる気配がない、マスターが不思議に思い目をうつすらと開けてみると。

「よ、よお……」

そこにはモードレッドがマスターに馬乗りをしながら照れくさそうに笑っていた。毛布の中なので、熱がこもり、モードレッドの匂いも濃く感じられた。

「……」

「いや、そのなんだ……その……とう！」

言葉につまり、なんだか気恥ずかしくなってきた二人だが、突然モードレッドがマスターの首筋にチョップを当てる。

「よ、よし。敵将捉えたり！ 死にたくなければ……そのなんだ、オレの物になれ！ ……んだよ笑うなよ！ このっ！」

「……!!」

モードレッドらしいやり方に、堪え切れず笑い出すマスター。よほど恥ずかしかったのか、顔を赤くしながらマスターにチョップを繰り返す。マスターにとっては可愛らしいが、なんせ相手はサーヴァントなのでちよつと痛い。

「……！」

「ふあっ……」

マスターが謝りながらモードレッドを抱きしめる。抱きしめられたモードレッドはさつきまでの勢いは何処に行ったのか急にしおらしくなり、マスターの背中に腕を回す。お互いの体温が伝わって、心臓の音が聞こえてくるぐらい静かになった。いつかのように、二人がお互いの目を見つめ合う。こんなこと前は何とも思わなかった二人だが、今は心臓が飛び出しそうなくらいに跳ねている。そして顔がゆつくりと近づいていく。

「んむっ……」

口づけを交わす二人、軽く、触れるような、まるで無垢な子供同士が意味も分からず交わすようなキスである。

「ああ……ちくしょう……やっぱ好きだ。お前の事」

「？」

モードレッドが、照れくささをごまかすように、今度は深く、貪るようなキスをする。

モードレッドがマスターの半開きの口をこじ開ける様に舌を入れる、マスターの口に甘い香りが広がり、マスターも無意識に舌を絡ませる。体を摺合せ、お互いの口内を

貪る姿はまるで蛇が絡み合うようである。

「時々、自分が誰だかわからなくなる」

長い長いキスの後モードレッドは、自嘲気味に自分の事を口にした。

「女だと言われると怒り、しかし男扱いされても怒る。自分でも分からなくなるんだ、オレは男になりたかったのか、ただ女だと侮られるのが我慢ならなかったのか」

「……………それは」

「でもな、マスター。オマエの前だけでなら、お前と二人だけなら、俺は好きな方になれる気がするんだ。伝承通りの叛逆の騎士でも、その、なんだ。一人の女でも……どっちがいい？」

そういつて顔を背ける、いろんな感情が混ざり合つて、まともにマスターの顔が見れなくなるぐらい顔が赤くなっている。元々女扱いされると殺気まで出す彼女だ、相当の覚悟をしたのだろうとマスターは察した。

「そのままでもいいよ」

「……………え？」

しかし、マスターの返答は意外な物であった。モードレッドからしてみたらどっちを選んでも、マスターの望む通りになれるはずだったのだが、そのままがいいと言われるとどうすればいいか分からなかった。

「女扱いされると怒って、男扱いしても怒って、アルトリアの悪口も褒めるのも駄目で、

他のサーヴァントとレイシフトするだけでも不機嫌になるし、意見が違っただけで喧嘩になったりもするけど」

「な、なんだよ……そこまで言わなくなっただけいいじゃねえか」

「でも、そんなところ全部含めてモードレッドなんだ。男でもなくて女でもない、そんなモードレッドが俺は好きだ」

「んなつ……おまつ……」

金魚みたいに口をパクパクとさせながら、顔も金魚みたいに赤くなっていくモードレッド。いまにも煙が出そうな勢いである。

「そ……んなことをマジな顔して言いやがって、此処まで悩んだ俺が馬鹿みてえじゃねえか……バカ、ばーか……」

「？」

そのまま、マスターを抱きしめるモードレッド、マスターの胸に顔をうずめて、しばらくそのままにいると何かを決心した様に顔を上げてこういった。

「オレを貰え」

「!？」

驚いて、モードレッドの目を見るマスター。モードレッドはマスターを一時も逸らさずに見つめ続ける、どうやら本気らしい。毛布の中の温度で二人は汗が伝って

た。マスターがモードレッドの汗をぬぐうと、モードレッドは小さく頷く。

「ひゃう……」

嬌声と共に、毛布が蠢いていく

「うーむ！ これで今週のネタには困りませんな。この目で見れないのは残念ですが、まあこのさい音声だけでも筆は進みます」

「まったく、いったんはどうなるかと思つたが、一件落着だな。マシユ嬢から恋愛小説のリクエストがあつた時はさすがの俺も焦つたが、これでよし。うら若き少年少女の愛のお話程読者諸君に砂糖をぶちまけるネタはないからな。いつかはくつつくだろうが、メ切りの問題上、煽つて早めにくつつけさせて正解だつた」

隣の部屋ではダメ人間二人が壁に当てたコップを耳に当てながら執筆中であつた。

「おお、全く若さとは良いものですな、しかしアンデルセン、貴方は人を愛さなかつたのでは……」

「そうだ、俺は人を愛さん。だが人の色恋沙汰を遠くから冷やかすのは嫌いとはいつていない」

「なるほど、最悪の性格ですな」

「お前も人の事が言えるか」

「これはこれは、まったくですな。フハハハハハ！」

二人とも腕がせわしなく執筆に向かっている。アンデルセンはタブレットで、シェイクスピアはタイプライターで驚異的な速さで文章を進めていく。正に今の二人は絶好調そのものであった。盗み聞きしながらではあるが。

「お二人とも楽しそうですね」

「げえっ?! 聖処女?!」

と、そこに現れたのはジャンヌダルクである、隣にはマルタと天草士郎までいる。

「さてと、マスターの部屋への盗聴行為は第一級カルデア法違反ということは知っていますよね?」

「も、勿論ですとも! いやあ、そんなことをする女性サーヴァントたちには困りますな!」

マルタがボキボキと指を鳴らす。普通に怖い。普通に町娘モードである。

「アンタ達、現行犯逮捕という言葉は知っているわね?」

「勿論だ、タブレットあるからググっても良いぞ?」

部屋の入り口には強化解除に定評のあるツインアームビッグ克蘭チ時貞が陣取っている。これではもう逃げられない。

「どうでしょう、今回の犯行は罰金50万QP、またはナーサリーのお説教ルーム行きと言うことで」

「賛成」

「賛成です」

「早っ!? ベ、弁護士を要求しますぞ!」

「却下します」

スピード裁判に定評があるルーラー裁判が幕を開け幕が下がる。所要時間3秒程度である。

「さて、お支払い頂くお金はお持ちですか?」

「いやあ吾輩、原稿料が来週でして」

「同じく、作家とは貧乏なものだ」

因みに円卓が金融業をしているが、あまりにも高い利子なので誰も利用したがい。い。

「ならば、ギルティですな」

「さ、さらば、私を忘れるでないぞ。」

「言っている場合か」

三人の影が近づいていき。二人の叫び声が隣部屋に聞こえないように響い

た。

そしてさらに数日後、おなじみカルデア食堂である。

「はい、旦那様^{ますたあ}あーん……」

「あらあら、こちらも美味しいですよ。ほら母が食べさせてあげますから口を開けて」

二人の美女のバーサーカーに挟まれながら、昼食を食べさせてもらっているマスター。何も知らない物が見れば羨ましがらるだろうが、大体事情を知っているカルデアのメンバーは憐みの視線をマスターに向けている。

「おう、マスター。またやってんのか？」

と、そこにモードレッドがやってきた。今ではマシユも安心するぐらいすっかり仲直りしており、今まで通り親友の仲に戻ったと周りからは思われていたが――

「おい、口元、ご飯粒ついてんぞー」

「？」

とモードレッドが口元を指さす。マスターが取ろうとするが、何処だか分からない。い。

「つたく、しかたねえな。取ってやるよ」

「？」

笑いながら、顔をモードレッドまで持っていくマスター、それは私の役目だというバーサーカーの熱い視線をモードレッドは華麗に無視している。さすがは円卓の騎士である。

「(ハハ)だよ(ハハ)。 んっ……」

「!？」

「んなっ！」

「■■■■っ！」

だが、モードレッドは指で取るのではなく、そのままマスターに口づけをした。食堂が騒然となり、バーサーカーでさえも余りの出来事に固まる。

「……ふはあ。 取れた取れた」

「!？」

「あん？ 決まってるだろ、オレはお前のもんだ。 そういう事はオレにさせろ」
そういつて、呆気にとられるバーサーカーに向かって悪い顔で笑う。ただ一人しかいないマスターを誰にも渡すものか。それは彼女による反逆の開始の合図であった。

モードレッドの明日はどっちだ。

ゴルゴーンの末弟、誕生？

オリオン曰く、神様を嫌いになりたかつたらギリシヤ神話を見なさい、ヘステイアちゃん以外ロクな女神いな、まてまてその弓下ろして話せばわかる。らしい、まあ神様なんてどこも人間を試すわ、試した割には勝手に失望するわ、湯浴み中偶然通りかかつてしまった狩人を動物にしちゃうわ、弟の馬鹿さに耐えられず天岩戸に引きこもるわ（玉藻談）で、何処にも真面目な神様なんて数えるほどしかない。触らぬ神に祟りなし、神様の考える事には人間は近寄らない方がよい。勇者気取りの人間なんて神様にとつては暇つぶしの道具としか見られていないかもしれないのだ。

ここカルデアにも驚くべきことに神様は存在している、正しくは自分の霊基をサーヴァントレベルまで落とした神様だが、その性格はサーヴァントのレベルをはるかに超えており、どこかの月の神様なんて日々フリーダムで、その姿を見るたびに何処かの狩人は胃を押さえるはめになっているぐらいだ。がんばれ獅子耳狩人、まだまだ苦難は始まったばかりだ、ビバ信仰。

さて、そんなカルデアに、そんな神様を二人も持つ苦勞人なサーヴァントが一人いる。大人びた風貌に、長い髪、高い身長、カルデア眼鏡ニスト選手権で常に上位をキープ

しているまさに大人のお姉さん。名をメドゥーサ、有名な方の名前ではゴルゴンだろうか。見た相手を石化させるといふ伝承は有名であり、もちろんメドゥーサもその能力を所持している。

「次は、鳳凰の羽根と……隕蹄鉄と……ふう……」

そんなメドゥーサは大きく溜息をつきながら、廊下を歩いていった。手にはお使いと書かれたメモ、なんだか何日も寝ていないような表情で体を引きずるように歩いている姿は仕事に疲れたOLの様だ。理由は姉のお使いのせいである。彼女の姉、ステンノとエウリュアレは女神である。二人とも輝かしいほどの笑顔と仕草を持って見たもの全てを魅了する美しさを持ったアイドルだが、その実その性格は人をその気にさせてあざ笑うのが趣味な控えめに言っておくまでである「悪魔ではない」そんな二人のお使いに日々駆り出され、もはやメドゥーサの体はヘトヘト、心はぼろぼろであった。

「……………」

「はい？ ああ……マスターでしたか、私はこの通り姉様達のお使いを……姉様達は基本的に自分では動かない人たちでして……」

そこに、通りがかったカルデアのマスターが心配して声をかけてきた。どうやらメドゥーサは自分でも気づかないぐらいに疲労困憊してたらしく、マスターも慌てて肩を貸して、近くの部屋に寝かせることにした。

「この頃お姉様たちのお使いのレベルが地獄級になってきています……いえ、私は良いのです、こうして三人揃えるだけでも奇跡、少しでもお姉サマーズの役に立てるのであれば私の体など……」

「――！」

「ふふ、優しいのですねマスターは……少しだけ、甘えられますか……」

そういつて疲労が限界に近づいていたのか、そのまま気絶するように眠るメドゥーサ。大事な妹であろうメドゥーサをここまで扱き使うとは、さすがのマスターも怒った。必ずかの邪知暴虐の神々を説得しなければならぬと決意した。マスターは姉妹内ヒエラルキーが分からぬ。姉の理不尽さと、妹のわがままさなど無縁だった。

けれども悪意には人一倍敏感だった。そうしてマスターは眠ったメドゥーサに毛布をかけ、精のつく食事を用意し、カルデアのスイーツバイキング無料券を枕に忍ばせてから、姉二人のいる部屋へと向かったのだった。

「それで、私達に文句を言いに来たわけ。只のマスターの癖に？」

「それで、私たちに一言言いに来たのですね。只のマスターの癖に？」

「はい、女神様」

「ますたあ、めが、ぐるぐるしてる……」

「はい、女神様」

が、何の対策も無しに二人の女神の前に行くということは怒りのままに城に入り込むメロスと同じ。結果マスターは加護があるとはいえ女神二人がかりの魅了の眼差しに耐えられず、ただの壊れたレディオのように同じ言葉を繰り返す人形のようになっていた。同じ部屋にいたアステリオスが若干怖がっている。

「はい、女神様」

「ふーん、メドゥーサが倒れたのね……やっつと」

「流石に取り柄が体力と図体しかない駄妹でも限界があつたのですね」

「はい、女神様!!」

「あら、そんなに怒らなくてもいいじゃない、姉の物は姉の物、妹の物は妹の物、この地球が始まった時から決まっていることなのよ?」

「ロクにお使いも出来ない駄妹が悪いのです、私達に文句を言われてもどうもできません」

「!!」

「ますたあ、もどつた……!!」

あまりの言い様に、魅了せんのうも解けるほどに怒り出すマスター。ステンノ達の為にメドゥーサは倒れたというのにその妹を駄妹扱いとは、懐が深すぎて心配されているマス

ターもこれには我慢ならなかった。

「へえー……貴方も怒ることってあるのね」

「……へえ、相手がメドゥーサだからでしょうか？」

「！」

「ますたあ、おちついて」

もう頭に来て何が何だか分からなくなってくるマスター、人のために真摯に怒れることも彼の魅力の一つであったが、人のためになるとブレーキが効きにくいのはマスターの欠点であった。

「ますたあ、おちついて、えうりゆあれたち、わらってる。あのかおを、するときには、なにかたくらんでる」

アステリオスが何かを感じてマスターを止めようとするが、頭に血が上ったマスターには効果が無かった。なのでつい、こんな言葉を口にしていた。

「！！」

「はあ？ 貴方がメドゥーサの代わりをする？ 冗談でも言つて良いことと悪いことがあるわよ」

「メドゥーサの代わり何て何処にもいません、アリにでもなつて出直してきてください」

「！！」

「へえ、何でもする……ふーん、令呪に誓うのね……どうする私^{ステイン}？」

「確かに、あの子の疲れを見抜けなかったのも事実……そうですね、その誓いに免じて今日一日ぐらいなら認めてあげてもいいでしょう」

「そうね、あの子にも時には休息を与えないと、じゃあ決まりね」

「？」

「ええ、認めてあげます。ふふ、マスターなのにサーヴァントに仕えたいだなんて、面白い人ね……」

まるで計画通りと言うようにじやあくに笑う女神二人、なんだかマスターが酷い目に遭うような気がしてアステリオスはおろおろしながら見守るばかりである。

「じゃあまず、呼び方を変えて貰いましょうか」

「？」

「ええ、貴方メドゥーサの代わりなんでしよう？ だったら貴方はサーヴァントを率いるマスターでなくサーヴァントに仕えるマスターなわけ、ということはまずは上下関係から改めてもらわなきゃね！」

「女神様は言われて慣れてますから……」

「愛しい人かしら？」

「うーん、愛らしい人？」

「ご主人様?」

「Basimintatlibelasi?」

「それはちよつと過激ですね」

「じゃあお姉さまね!」

「ええ、お姉さまにしましょう」

「?」

何でもするといったのは正に軽率であつた。メドゥーサの代わりと言つたがまさか妹ポジションまで代わりをさせられるとは思つていなかったマスターはただ困惑するばかりであるが、令呪に誓つたからには撤回するわけにはいかなかつた。

「人間風情が私達を姉と慕えるのです、この世で二度もない奇跡なのですよ?」

「精々、駄妹ぐらい働いてちょうだい? ぐ駄弟?」

「なんだからくでもないことが始まるうとしていた。」

「いやあ、レフのテロ以降めつきり利用者が減つてしまつた食堂だけど、これだけサーヴァントがいたら賑やかだねえ」

「今日は先輩もお休みと言うことで、サーヴァントの皆さんもそれぞれの休日を堪能し

ているようですね、あそこは海賊の皆さんでしようかまだ昼前だというのに酒盛りをしています」

ここはおなじみカルデア食堂、今日は珍しいマスターの休日であったため、サーヴァントも暇なのか食堂に集まっており賑やかだった。ロマンとマシユが食堂に入ると部屋の隅で酒盛りをしている海賊たちが目に入る。すでに何本も空の酒瓶がそこらに放置されており、いい感じに出来上がっている。

「でゅふふwwww朝っぱらから飲むお酒は堪りませんなwwww拙者このために生きてるでござやるよーあ、もう死んでるんだった！ てへー！」

「うざっ……あ、アンこれなんだろ、シヨーチュー？ 日本のお酒みただけど」

「まあ、マスターの国のお酒なんですね、早速飲んでみましょう」

「ホント、酒つてのは偉大だねえ！ このために生きている奴もいるんだからさ！ そしてこの酒は上物ばかりときた、ああたまらないね！」

「ちよつと、BBA呼んだの誰ー？ 拙者よんでないでござやるよー？」

「いえ、そもそも貴方を誰もお誘いしていません。どこから湧いてきたのですか、船内のネズミより鬱陶しいですね」

最早英霊の欠片もない酒飲み集団である。このままではカルデアの酒を飲み干してしまうと危機を覚えたマシユが止めに行こうとした時、食堂のドアが開き、マスター

がサーヴァントと共に入ってきた。

「エウリュアレたんキター！ しかもステンノちゃんもキター！ 拙者の春でござる春でござるー！」

「皆さん、おはようございます。あの、その姿は？」

「……組体操か何かかい？」

ドクターとマシユが首をかしげる。アステリオスの肩にエウリュアレが乗っているのはいつもの事なのだが、今日はマスターの肩にステンノが立ち乗っていた。けっこうマスターにはきついらしく少し足がプルプルしている。

「ほら、呼ばれていますよ。 駄弟」

「駄弟!?」

「えーつと一体どういう……」

「えつと、ますたあが、めどうさのかわりになって、ますたーがサーヴァんのサーヴァんとになって、えうりゆあれがますたあに……あれ？」

「ふふ、とにかく私ステンノの下にいる哀れなマスターは今日一日私達の所有物おとうとってわけ！ そ
うよね駄弟？」

「……」

「お姉さま!?!」

「すごいや！ あの女神から弟呼ばわりされるなんて普通じゃ天地がひっくり返ってもありえないぞお！ いやあ羨ましいなあ！」

「……………」

「はいはい！ じゃあじゃあ拙者はお兄ちゃん役を希望しまーす！ さあエビバディセイおにいちゃん！ もしくは兄上、ああ兄貴でもいいですぞー！」

「ほら、駄弟。 ドクターとマシユにお願いがあったのでしよう。 手早く済ませなさい」

他人事だと思つて楽しそうにしているドクターを恨めしそうな顔で見ながら、要件を口にするマスター。 それと食堂で手が空いているサーヴァントがいないか声をかけ始めた。 やはり体を動かして居るのが性に合っているのか何名かが手を上げる。

ドクターも快諾して、制御室に向かった。

「あれ？ 拙者放置？ 放置プレイ…………？ でもエウリュアレたちからやられると興奮するー！ でゆふふふふwwww」

「最早救いようがないですわね…………」

「本人が幸せならいいんじゃない？ たぶん」

「しかし、いきなり魔獣狩りとは、魔術師殿もなかなか苦労性ですな……その状況を見る限り」

「はは、またなんともな姿だな、君といるとどうも退屈しないようだ」

「主殿を足蹴にするとは……その首落ちてても文句はいえまいが、主殿の頼みとならば別……しかし……むむ……」

そしてマスターが向かった先はレイシフトした先のオケアノスであった。マスターの頼みとはメドローサのお使いを達成するための魔獣狩りであった、獲物は隕蹄鉄をもつケンタウロスであった。メンバーはマシユの他に食堂で手が空いていた呪腕のハサンと荊軻、それと何時の間にかついてきていた牛若丸である。

「うん、確かにそのあたりにケンタウロスの反応があるね、しかも群れだ」

「ならば、早速行動に移るとするか。 そうだな……私が一番だったら、君に酒でも一献注いでもらおうか」

「ほう、ならば私は魔術師殿に、新しいダークでも強請るとしようか。 ククク……」

「ならば牛若は主殿に……主殿に……一番になってから考えます！ では！」

ドクターの報告を聞いてから、それぞれ獲物を狩りに姿を消すサーヴァントたち。

牛若丸は張り切り過ぎたのか一飛びではるか遠くまで飛んで行つた。 マシユ達はエウリユアレ達の護衛とこちらに逃げてきたケンタウロスの討伐が役割である。

「しかしながら、なぜ先輩はエウリユアレさん達の弟に……？」

「うちの駄メデューサが心配になったんですって、ふふ、それにしたってサーヴァントのために体を張るなんてよほどのお人好しか、それとも頭が可哀想なのか……」

「メドウスさんのために……ですか」

「あら、やきもちかしら？ 可愛い所がありますね」

「ち、違います！」

ちよつと拗ねた顔をして否定するマシユ。なんだか必死に否定された気分でなんだか傷つくマスターであつたが、今は上に乗っているステンノを支えるので精一杯であつた。

「おっと、会話中すまないがそちらにもケンタウロスの反応が迫ってきているよー！」

遠くから喧騒共に蹄の音がアステリオスの耳に入り、戦闘態勢を取る。続いてマシユが盾を構えて守るようにマスターの前に来た。女神二人は戦う素振りさえ見せないが一応、警戒はしている。どんどん森がざわめくように喧騒が近くなってきた。

「……くるー！」

「……！ むぐつ!?」

「総員、戦闘たいせーい！ ……一応言ってみたかったのよ、これ」

「ええつと……りよ、了解しました！」

「みんな、ぼくが、まもる!!」

そして戦闘が始まった

「ふむ、まあ私ではこの程度か、さすが山の翁は経験が違うようだな」

「いや、荊軻殿も見事……牛若殿は……」

「主殿！ 首級を取って参りました！ どうですか！」

「いや、牛若殿、今回取ってくるのは蹄鉄であり首ではありませんぞ……」

結果はアステリオスが、ケンタウロスを千切っては投げ千切っては投げの大戦果であり、隕蹄鉄も十二分に集めることができた。因みに首の数では牛若丸が一番であったが、首は関係ないので丁重に埋めることになった。 南無。

「……？」

「そうね、私達を肩に乗せながら戦う姿は勇者様みたいだったわよ？」

「ぼくが、いちばん？ うん……ますたあも、えうりゆあれたちもだいすきだから、がんばった」

そういつて恥ずかしげに笑うアステリオス。 同じもじやもじやなのに黒髭と比べてまるで天使である。

「？」

「ごほうび？ ……じゃあ、てを、つないでかえりたい」

「手？ それだけいいの？」

「うん、えうりゆあれ、も」

「ふふ、仕方ないわね、ほら」

「へへ、あつたかい……」

そういつてエウリユアレとマスターの手をつなぎながら歩くアステリオス。暖かい手のぬくもりを感じながらアステリオスはまた皆で手をつなげられたらいいなと微笑みながら思った。

「あはは！ 樽ごともってこーい!!」

「このBB A底なしか……？ うっぷ拙者もう限界……アン氏、メアリー氏介抱して……できればナース姿で」

「解剖ならしてあげるけど？」

「私達に近づいたら頭をザク口にしますわよ」

「ねえダーリンってお酒強いの？」

「それクマに聞くの？ まあ元の状態だったら強いだろうな」

「へー、なんで？」

「そりやお持ち帰りしやすいででで！　しまった！　誘導尋問だったか！」

「麗しのアタランテ！　まさかこの目で見られるとは……余は嬉しい!!」

「帰りたい……」

マスターたちが帰ってくると、海賊たちの飲み会は人数も増えてさらに盛り上がっており、どんちゃんさわぎになっていた。「若干一名死んだ魚の様な目で胃を押さえている狩人がいるが」

「さてと、これで集まったわね……」

「集まったとは？」

「いいえ、何でもないわ……あらアステリオス、あなた髪が固まってきてるわよ、潮風にやられたのかしら……お風呂に入りましょう」

お風呂と言う単語に黒髭が反応するが、アンの銃弾によって黙らせられる。

「おふろ、しゃんぷーが、めにしみる……」

「シャンプーハットつけるから大丈夫よ」

「そうですね、私達も汗をかいてしまいましたし……駄弟」

「！」

「先輩も慣れてきましたね……」

瞬時に反応してステンノを肩に乗せるマスター、適応力はさすがだが、そんなことまで適応しているのかと少し不安になるマッシュであったが、とりあえず気にしないことにした。

「それでは行きましょうか。エウリュアレ私」

「……い、ええ、行きましょう。ステンノ私」

なんだか、また何か企んでいる笑みを漏らす女神二人であったが、肩に担いでいるマスターとアステリオスはまるで気が付いていなかった。

「めが、しみる……」

「ほらほら、あともうちよつとだから我慢しなさい」

濡れたアステリオスがまるで泡まみれの濡れたモップみたいになってエウリュアレから洗ってもらっている。髪の毛が多いのでエウリュアレも洗うのに一苦労らしい。

ぐちぐちといいながらしっかりと丁寧にあステリオスの髪の毛を洗う姿はまるで兄妹みたいである。そんな兄妹みたいな微笑ましい光景を見ながら、マスターは最大の危機に陥っていた。

「ほら、手が止まっていますよ?」

「……………」

現在マスターがいるのはカルデアの温泉施設の女湯であった。メドゥーサの代わりなのだからと無理やり連れ込まれたマスターは、今潮風で痛んだらしいステンノの髪の毛を洗っている。今は四人の他に誰もいないが、もし誰かが入ってきてしまったらマスター消滅の危機である。ある意味人理の危機でもあった。

「ほら、早くしないと誰か来てしまいますよ？ ほ、ら？」

楽しそうに笑いながら体を押し付けるステンノ、髪を洗うと言いながら、座っているのはマスターの膝の上であり先ほどから柔らかい感触がマスターの体のあちこちに当たっており顔がまだ風呂に入ってもいないのに真っ赤になってしまう。それを見てさらに面白そうに口元を歪めるステンノ。あくまである。

「……………」

「ふふ、そうそう。丁寧をお願いするわ……………」

手にシャンプーを付けて、髪を梳くようにして丁寧に洗っていく。気持ちがいいのかステンノは目を細めてうっとりとした表情で体をマスターに預ける、髪は潮風で痛んだという割には絹糸のように滑らかで指で梳いても引つかからずに滑っていく。風呂場であるから当然衣類は着ていない、必死の懇願によりタオルを巻いてもらったが、そのタオルも水を吸って透けてきている。

「う、ん……………そう、です……………ん……………」

「……………」

流石は「可憐である」ということに特化した女神である。少しでも気を抜くと抱きしめたくなる衝動がマスターを襲う。魅了をかけていないのはマスターを試して楽しんでるからである。もちろんマスターはメドゥーサの信頼に賭けてそんなことは出来ない。

「へえ、^{ステンノ}私 相手に意外と耐えるわね……」

「……………？ えうりゆあれ？」

「ああ、ごめんなさい。すぐに流してあげるわ」

「あら、タオルが……」

「……………!!」

ステンノが巻いていたタオルがはらりと落ちて、輝かしいほどの肌が露わになる。マスターが目をそらそうとするが、その美しさに目が離せない。

「ふふ、タオル、巻いてちょうだい？」

「……………!?!」

ステンノが面白そうに口元を歪めて体を押しつける、完全にマスターの反応を楽しんでいるのだ。魅惑の塊に抗うのも必至な只の人間の男、その男が自分に指一本手出し出来ない事を分かかってなお、挑発して、その反応を見て盛大に愉悦しているのだ。さ

すが暗黒姉妹である。マスターは頭が真っ白になるのを感じながら、次々に繰り出されるステンノの無理難題をこなしていくしかなかった。

そのあと、黒髭のバニー姿を想像することによってなんとか耐えることに成功したマスターはまたステンノを肩に乗せながらステンノ達の部屋へと目指していた。なにかお願いがあるらしい。因みにアステリオスはそのあとマスターがドライヤーと櫛で手入れをしてふわっふわな髪の毛になっていた。エウリユアレが気持ちよさそうに顔を埋めている。

「……」

「はい？ また肩の上に乗る？ 当たり前でしょう駄弟が姉より高い所にいるなんて有り得ません。自分が今奴隷以下の存在ということはまだわかっていなくて？」

なるほど、日ごろのメドゥーサの扱いが何となく分かる言葉に、マスターは同情した。「お願いというのはこれです」

ステンノ達の部屋に着くと、ステンノ達は一つの袋を取り出した。中身は再臨するための素材、鳳凰の羽根と今日集めた隕蹄鉄である。

「これで、あの娘を、メドゥーサを強くしてほしいの」

「？」

思いもしなかったお願いに、ふと唾然とするマスター。つまり、今日の狩りもメドゥーサに集めさせていたのも全てメドゥーサの為だったというのだろうか。

「そう、今日の狩りはあの子のため。いえ、貴方がメドゥーサを見て私達に来るところからでしょうか」

「？」

「メドゥーサのあの姿を見れば、お人好しの貴方のことだからメドゥーサを無理にでも休ませて私達の所に来ると思ったの」

「まさか。あの娘の代わりをするなんて言い出すような変な人なんて、とんだ計算違いでしたけど」

「？」

つまり、全てはメドゥーサのために女神たちが仕組んだ、遠回しな妹へのご褒美なのだろうか。実際に倒れるまで疲れさせて、マスターを巻き込むあたり遠回し過ぎるが。

「つまり、貴方は今日一日仕組まれて遊ばれたってこと。……怒った？」

「少しだけ申し訳なさそうに聞いてくるエウリュアレに、笑いながら首を振るマスター。なんだか二人がなんだかんだで妹思いだということが分かって嬉しかったの

だ、メドゥーサが姉を慕っているように、ステンノとメドゥーサも妹を愛していた。それがなんだかとても嬉しかったのだ。だからマスターは笑って二人を許した。

「……本当に変な人。 散々弄ばれたのにそうやって笑えるのですね。 いろんな勇者の様を見てきましたが、そこまで変な人はいませんでした」

「まったくね、ホントお人好しなんだから」

そういつて笑い合う三人。 アステリオスはお風呂に入って眠たくなったのかベッドですやすやと寝息を立てていた。

「？」

ふとマスターは自分から動かない女神たちが良く鳳凰の羽根を手に入れたことを不思議に思った、中々希少な物のはずなのだが、いったいどのようにして集めたのだろうか。

「ええ、おかげで何回もメドゥーサを行かせる羽目になりました」

「!?」

「ええ、当たり前でしょう？ 今はサーヴァントでも私達は女神。 試練を与える側なのですから」

「メドゥーサは疲れて、素材も集まる。 ほら、一石二鳥でしょう？ それに昔から妹の物は姉の物、姉の物は姉の物。 姉に敵う妹はいないと言われているでしょ？」

「……」
 さすが、暗黒神殿の暗黒姉妹。なぜメドウーサが姉に似なくなつたか良く分かつた
 とぼやきながらため息をついた時であつた。

「聞こえたわよ、マスター。貴方今日一日メドウーサの代わりということ忘れてな
 いかしら？ 日はもう落ちたけどまだ昇つていないわ」

中々に耳ざとい女神がそんなボヤキも聞き逃さず目がきらりと光つた。

「……」

「聞こえましてよ、マスター」

「!？」

何も言っていないのにじりじりとにじり寄つてくる女神二人、このままいい雰囲気で
 終わると思つていた空気が一変する。

「何もできないへっばこの駄弟の癖に、姉に口答えするなんて、どこまで横着なのかし
 ら」

「全く気を許した瞬間これとは……愚かな弟には少々躰が必要みたいですね私」
エウリュアレ

「ええ、立場の違いという物を分からせなくてはいけないみたいね、私」
ステシ

そのままマスターの首へと近づいてくる二人の女神。なんだか怪しい雰囲気
 に体の危機をマスターは感じる。

「一つ命令してあげる……動いちやだめよ?」

「?」

二人の歯がマスターの首筋に突き刺さる。血管の中まで入ってくる感触がしたと思うと、今まで味わったことのない感覚がマスターを襲う。

「ちう……へえ、メドゥーサほどではないけど中々良い味をしているわね……」

「ええ、男なのに処女の味がします……不思議、まるで女が混ざっているかのよう……ちう……」

血が二人の唇からこぼれて床へと落ちる。マスターは彼女たちから血を吸われていた。痛いようなくすぐりたいような、二人の柔らかい唇の感触もあってかどんどんマスターの頬も上気している。

「ぶはっ……動くなど言ったのに、まだ躰が足りないかしら。あむっ……!」

「!?!」

更に強く血を吸われる感覚に、立っていられずベッドへと倒れ込むマスター、幸いアステリオスは起きなかったが起きてしまったら大変なことになる。マスターは声を出不さないように手を口で押えるが、それでも息が漏れてしまう。

みると女神たちは、マスターが倒れたのをいいことに覆いかぶさるようにマスターを押さえつけながら、自分が血を吸いやすいようにマスターの服を乱暴に引き裂いてい

く。女神ではなくサーヴァントになったことにより身体能力が向上した事で出来るようになった、女神時代には考えることも出来ない行動である。

「はあ……とつても可愛らしい顔をしていますわよ、マスター……。 ああ本来であれば男に食い散らかされる運命の私たちが、男であるマスターをこんなにするなんて……嬉しいわ、とても……はむ」

「ふふ、まるで初夜を経験する処女みたいね。可愛いわ、マスター……」

「ふふ、メドゥーサでは見られないリアクションですね。これ以上やるとどうなるでしょう?」

「……、——!」

最早息も切れ切れで許しを請うマスター、最早息をするのもやつとの状態でこれ以上されるとどうなるか分からなかった。しかしながら興奮し、ギラギラと光る眼でマスターを見る二人の顔はそんなことは気にも留めない。

「ふふ、マスターがサーヴァントに懇願するだなんて、可笑しな人。令呪でも使えばいいのに、優しいのかしら? それとももう令呪も使う余裕がないのかしら?」

「ああ、マスターったら……」

「ふう、ちっぽけな人間の癖に馴れ馴れしくて、ずけずけと人の心に入り込んで……あむ」

「ふふ、魔力から何もかもが魔術師として三流で、阿呆みたいに真直ぐな事しか取り柄が無いのに……あむ」

「……なんで」

「なんで……」

「血だけはこんなに美味しいのかしら——！」

「——あ……」

その二人の言葉を最後に、意識の糸がプツンと切れたマスターはそのまま動かなくなってしまう。目もうつろであり、宙を彷徨ってしまったている。

「……あら？ 落ちてしまったみたいね。ふふ、だらしない顔」

「メドゥーサとは違って長く持たないのですね。まあ、でも良いでしょう。また次があるんですもの」

「そうね、今度はメドゥーサも混ぜて飲み比べをしてみましようよ」

「ああ、それは良いわね。うふふ……次が楽しみね、私」
エウリュアレ

「ええ、私。ステン次はもつと可愛がってあげましょう……うふふ」

「うふふふふ……」

「ひゃっ……」
「!!!」

声にもならぬ声を上げながら飛び起きようとするマスター。誰かから押さえても
らわなければベットから転げ落ちていたことだろう。

「お目覚めになられましたか、マスター」

気付くとマスターはメドゥーサからベッドで膝枕をされていた。柔らかい感触が
マスターを安心させる、なんだかひどく怖い夢を見たいような気がするのだ。こ、こ、こ、
吸血鬼に襲われるような。

「いえ、申し訳ありませんマスター。それは夢ではありません」

「?」
マスターが首筋に痒さを感じて、触ると、二つの何かの跡が残っていた。

「それは吸血痕です、姉様達から血を吸われたのです。すみません、姉様達は私以外の
血はあまり吸ったことが無いので加減がきかなかったのでしよう」

二人の女神からされたことを思い出し、なんだか恥ずかしくなってくるマスター。
「いったいどんなことになってしまったのだろうか。」

「私はお姉さまたちから躰として血を吸われるのですが、まさかマスターの血まで……」

申し訳ございません」

謝るメドゥーサにメドゥーサは悪くないと、笑いながら手を振るマスター。何時までも膝枕をしてもらっては悪いと思い、起き上がろうとするがすこし頭がクラクラと揺れるようでも上手く行かない。

「まだ起きない方が良いでしょう。吸血はされる側に快楽を与える反面、体に負担をかけてしまいます。その上魔力も吸われていますから……」

「？」

「姉様達ですか？ マスターの魔力を吸ったおかげで気力十分、有り余る魔力を早く消費したいと何処かへ行つてしまいました。まあ下姉様はちよつとやり過ぎたと思つて、自己嫌悪しているみたいですが……ああ、それとこれは上姉様からの伝言です『もう少し、お肉を食べるようにしなさい。ホホホ』……以上です」

「……」

まあそのおかげでメドゥーサの膝枕を味わえているのだから悪くないと言って、申し訳なさそうにしているメドゥーサが気にしないように笑うことにした。メドゥーサは何も悪くは無いのだ。

「……貴方は優しいんですね、その優しさに甘えてしまいそうです」

「？」

「……ふふ、そうですか。なら少し甘えてみましょう」

メドゥーサがマスターの目を見つめる。魔眼殺しを付けているため石化はしないが、なんだが体が固まるような錯覚を受けるほど、珍しく綺麗な目だと感じた。そのままメドゥーサの唇がマスターに近づいてくる。マスターは心臓が高鳴る音を聞きながら、ゆつくりと目を閉じる。そのままメドゥーサの唇が近づいていき――

「あむっ」

「!？」

マスターの首筋に吸いつかれた。

「ところで、お姉さまたちによれば、まるで処女の血が混ざった様な独特な味がするそうですね……」

メドゥーサの目がギラギラと輝いていく。マスターは忘れていた、メドゥーサも立派なゴルゴン姉妹の一人だということに。メドゥーサの舌が首筋を舐めて、一番良い血がでるところを探り当てる。　　というかメドゥーサの方が吸血に慣れているみたい

で――!!

「頂きます……」

マスターの明日はどっちだ……

!!!

そんな秘境の温泉にマスターとサーヴァント達が日々の疲れを癒すように浸かっていた。中々の人数が入りに来ており、なかなか賑やかである。

発端は、マスターが特異点になりそうな怪異を潰しにレイシフトした帰りの事だった。元凶であったドラゴンを倒してみると、洞窟の奥から湯気が出ていることを発見したマスター達が探索してみると、そこには湯気立ち込める温泉が湧いていたのだ。

カルデアでは滅多に入ることのできない自然の温泉に興奮したマスターは、サーヴァントと共に柵を立て、脱衣所を立て、僅か三十分程度で風呂場を立ててしまった。ほぼスカサハのルーン魔術のおかげだが――そしてせっかくなのでカルデアのサーヴァントたちも誘って疑似温泉旅行としやれこむことにしたのである。

「なんだなんだ、オジサンよりオジサンぼくなっちゃってるじゃないの。老け顔になってもしらないぞー」

ゆつくりと温泉に浸かりながら温泉の暖かさに思わず大きく息を吐くマスター、既にオジサンのヘクトールからオジサン呼ばわりされてもこの何とも言えない感覚には抗えないのだ。

「うむむ……体から力が抜けるようだ、奇妙な感覚だが、うむ、悪くは無い！ これで酌

をしてくれる良い女でもいれば最高なのだが、柵の向こうとはなあ……」

「アンタそればかりだな……しかしこういうのも悪くねえな。あつたけえだけでここまで違うとな……」

「遠い赤枝の戦士たちとこのような……俺は幸せ者だ……所で我が王よ、なぜそんなお湯をすくつたり、こぼしたりを繰り返しているのです？」

「いや、今度こそ失敗しないようにとね……」

ケルトの戦士たちも酒を持ち出し湯浴み酒と洒落こんでいる。そんなケルトの戦士たちをじつと凝視するマスター。なるほど良く見るとやはり皆一流の戦士、全く無駄のない戦いのための体つきをしている。とくに目につくのがフェルグスである、体中に戦傷はあるものの背中には傷一つついていない。まさに彼の体がその勇猛さの証明となっているのだ。

「なんだ、マスターそんなに見つめられると照れるぞ。俺の愛に応えなくなつたか？」

「**!!**」
それは勘弁だと必死に否定するマスター。やめて顔を少し赤らめないで。

「ウオオオオオオオ!! フロオオオオオオオオ!!」

「止めないか騒々しい、しかしなるほど日本のテルマエとはこういつた物か、どうだマスター……」を担保に一儲けするつもりは」

「速攻で拒否とは、さすがはマスター。私の扱いに慣れてきたようだな」

「……？ 偉大なるカエサルは水に浮く……水面に浮かぶひよこもまた同じ……つまり……？」

ローマ勢は公衆浴場などが文化に組み込まれていたこともあり、慣れた様子で温泉に浸かっている。バーサーカーであるカリギユラも湯に浸かった途端に大人しくなり、なんだか考え事を始めている。他にもスパルタクスやダレイオスも連れてきているが皆大人しく湯に浸かっている、温泉はバーサーカー特攻でもあるのであろうか？——ヘラクレスに至ってはタオルを頭に乗せて髪も湯に浸からないようにしている、何処出身だ貴方——

「ふふっ、楽しんでるようだね。 どうだろうマスター、背中でも流そうか？」

「!？」

と、後ろからマスターに寄り添ってきたのは、フランスのサーヴァント、シュヴァリエ・デオンである。自己暗示スキルによって男にでも女にでもなれる彼、もとい彼女はマスターにとって、男女どちらの扱いにしてもんだか距離が近くて困るサーヴァントであり、男の時も女の時もからかう様な仕草でマスターを惑わせる。からかい上手のデオンさんなのだ。

「!?」

「女湯に入ったんじゃないやなかったって? 失礼だな、私はこう見えてもれっきとした男だよ? 気になるのならほら、こつちを向いてみるといい……」

デオンの滑らかな肌が触れて、思わず心臓が高鳴るマスター。男湯に入ってきているということは男なのだろうが、振り向いてもしデオンが女だったらどうしようという思いがあり、中々振り向けない。デオンの方もそれが分かっているのか悪戯な笑みでもっと肌を密着させてくる。やめて、フェルグスさんが何かを思いついた顔をしている。止めて。

「ふふ、私はこのままでもいいけれど……うん?」

「あー! 此処にいた! 君はこつちだつてば!」

「え? な、なんだ! アストルフオ!」

入口の方から体にタオルを巻いて入ってきたのはアストルフオである、男湯を見回してデオンを見つけると、捕まえて引きずるようにして連れて行ってしまふ。

「僕たちには特別なお風呂が用意されているんだから! こつちこつち!」

「さて! 私はデオン風呂なんてものには入らないぞ! なんで私達だけ個室なんだ!!」

可笑しいだろう!?! せめてマスターかマリー様をおおお……」

デオンの声が遠ざかり、入り口の扉が閉まる。いつの間にかデオン風呂と、アスト

ルフォ風呂が出来ていたらしい。助かったような残念なような、何とも言えない気持ちになりながらマスターはデオンが引きずられていった入り口を見つけていた。

「ふうむマスターは美少年にも耐性が無いと見えるな。よほどの堅物なのか、ただ手を出す勇気が無いだけか。一つ転べば私のようになれたかもしれんが……」

ローマのプレイボーイが鼻を鳴らしながら言うが今のカエサルから言われても何も悔しくない、太る前のカエサルはそれは甘いマスクに細身の筋肉質の体でそれはもう惚れない女はいなかったとクレオパトラは言っていたが、今では団子と見分けがつかない体である。時の流れは怖い――それでもクレオパトラは素敵だと言っていたが――

「そもそも、女を見慣れてないというのが可笑しい。貴様は何処かの牢獄にでも繋がれていたのか？」

「――！――」

「は？ なに？ 男子校？ 何だそれは？」

「――！――」

「男子だけが許される学び舎？ そこで生活？ ……なるほど神聖隊か……」

「――？――」

なんだか聞き覚えのない単語に首をかしげるマスター。カエサルはなんだか納得した様子だが、なんだか可哀想な目でこちらを見ていた。なんだかともない勘違

いをされている様な気がするので、あとでネロかマシユに聞いてみることにしたマスターであつた。

「それよりもさ、マスターはどんな女の子が好きなの？ いい加減決めないと暴動が起こりそうな気がするんだよね、オジサン」

「おーそれだな、いい加減坊主にも女の一人や二人覚えさせとかないとな」

「いい加減ほつといてやれよアンタ方……それでマスターにロリコン疑惑が付いてヤバいことになつたこと覚えてないんすか……」

「僕はアビジャクかな？」

「無論、余はシータだ！」

「ディアナ……ネロ……」

ふとマスターが周りを見ると、騒ぎを聞きつけたサーヴァントたちがマスターを囲むように集まつてきて、いつの間にかそれぞれの好みのタイプを議論し合う場になつていた。かのテルマエでは哲学を語り合う場としても使われていたらしいが、こんな高校生が修学旅行で語り合う恋話のような議論になるとはさすが日本の温泉、テルマエとは違う意味で一步先を進んでいた。

「やはり私は年下でしょうか、精神的にはなく肉体的に」

「拙者はくやつぱりロリロリでくつるぺたなくBB&Aと真逆の様なく」

「クリステイヌ……」

「んで、坊主の好みは何なんだ？」

「可愛い娘なら誰でも好きだよ、オレは」

死んだ魚の様な目でぼつりと漏らすマスター、傍にいたエミヤが思わずっこけてしまふ。

「待て待て待て！ なぜそこで私のセリフを出すんだ!？」

「まあ確かにここは美人が勢ぞろいだもんな……あの清姫とかいう嬢ちゃんはどうだ？」

「」

「ストーリーカー癖が無ければいい子か……私が言えた義理ではないが女運が悪すぎやしな
いかね？」

「と、いうかまともな女の方が少ない気がするがな……」

「マスター！ 女性には気を付けるべきなのです！ でなければ私のように……」

「イケメンは黙つとれ」

「マスター!？」

カルデアの女子たちの話題で騒がしくなっていく男たち、何処の国、どんな時代になっても男という物は変わらないものらしい。

こちらは扉の向こうの女湯。男子たちと同じように、大勢の女性サーヴァントたちが湯浴みに訪れていた。見よ、この桃源郷を、幼いから妙齢まで、可愛いから美しいまで、大きいから小さいまですべてが揃っている。これを天国と言わずしてなんと言うか、しかし注意せよ、一つ覗こうと思えば直感スキルを持ったサーヴァントが察知し、三秒で迎撃されあの世行きである。

「うーん、久しぶりの露天風呂！ 前は無人島で入ったきりでしたから、ゆったりと日頃の疲れを癒すと思いますか……うーん尻尾もだらんとなっちゃいますねー」

「うむ！ 余のテルマエとはまた違った趣！ マスターも後で誉めてやろう、余は嬉しいー！」

「ちよつとジャック！ 動いたら髪が洗えないでしょう！」

「ナーサリー洗うの下手ー」

「風呂ですか、なんだか懐かしく感じます……ところで槍の私よそれは重たくないのですか？」

「重たくはありませんが、邪魔ではありませんね。 剣の私を羨ましく思います、そちらの方が戦いやすいでしょう」

「光を飲め……エクスカリバー……」

「わー!! 黒いアルトリアさん!? こんなところで撃っちゃダメー! クロも止めてえー!!」

こちらにも男湯と変わらないくらい賑やかであった。フランケンシュタインの漏電が心配されたりもしたが、ほとんどのサーヴァントが入浴できている状態である。それぞれ一緒に湯浴み酒を楽しんだり、乙女の話に花を咲かせたり、背中を洗いつこに憧れたマリーに付き合っつて輪になって背中を洗い合っつていたりしていた。

「あら……虫風情がなんでこんなところにいるのかしら。虫が我が子と一緒にの湯に入るなんて汚らわしい」

「ほうかほうか、その虫風情はその旦那はんから誘われたんやけどなあ……一緒に入るか? 言う顔と顔を真っ赤にしてはつてなあ、愛いこと愛いこと、ほんまかなわへんよなあ……」

「……私も誘われました。一緒に入るかと誘う顔と顔を真っ赤にして走って行ってしまいました……金時も……」

「ほーん、それって顔を真っ青にしての間違うちやう? 牛女は人の心が分からへんさかい」

「……虫が潰されたいのならそういえば良いのですよ?」

「ふふふ、見よこの団子を……中身が餡子ではなくちよこなのだ! マスターと白髪の

日本人に作らせた特注の団子よ……ふふ、彼奴もたまにはやくにたぬおおおお
!？」

が、一部は一触即発の雰囲気醸し出しており、その字の通り濃い殺気を放っている二人の間に居た茨木が団子を触った途端団子が破裂していた。

「ふう、たまにはこんな風に皆さんと一緒に風呂に入るのも、良い物ですね……先輩はどうしているでしょうか？」

「ふう、旦那様ますたあがこの向こうにいると思うだけで……ふう……」

塀の近くでゆっくりと温泉に浸かっている清姫とマシユ、マスター関連では襲う方と守る方で対立している二人だが、平時ではお互いに食事に誘い合ったり、お茶をしたりと仲の良い友人同士である。

「男湯の皆さんも盛り上がっているみたいですね、先ほどから賑やかな声が聞こえてきます」

「殿方というのは、集まると子供に返ってしまわれますからね。子供っぽい旦那様ますたあもまた素敵なのですが……」

「ええ、不思議ですね、みなさん英雄といわれている人達なんです。ふうつ」

笑い合う二人、男の子供心が何時まで経っても変わらない様に、女の笑顔の美しさもまた変わらないものである。

「……じゃあ清姫の嬢ちゃんは悪くは思ってたねえわけだ」

「……」

「あら？」

堀の向こうから自分のことを言われていると気付いた清姫は、耳を澄ましてみる。自分がいないところだとやかく言われるのは嫌いなのだが、マスターが自分の事を言っているのなら話は別である。

「まあ、確かにマスターの言う通り、美人で気配りも出来るが……マスターの安全引き換えと言われたらな……」

「まあ……まあまあ！」

それを含めても良い女の子だというマスターの言葉に頬を染めて嬉しがる清姫。普段逃げられてばかりのマスターがそんなことを思っていたとは、これはもはや遠回しの告白ではないかと思いは始めている。

「そんな旦那様……式はどちらで挙げましょうか……」

「むう……」

恍惚の表情の清姫だが、なんだか面白くないのはマシユである。自分でもよくわか

らないモヤモヤとした感情がマシユの胸で渦巻いて、清姫を羨ましく思う感情と混ざり合う。

「じゃあマシユの嬢ちゃんはどうか？」

「？」

「あつ……」

自分の名前が上がったことに胸が高鳴るマシユ。いつも期待に応える様に努力してきたが、自分の先輩は自分の事をどう思っているのだろうか。足手まといに思われていないだろうか。様々な不安と期待がマシユの頭の中を駆け巡る。

「……」

「うん？ そんな目では見れないと？ 意外だなてつきり君は……」

「そう、ですよね……」

そんな目では見れない。その言葉にマシユは心は深く沈んだ。それはそうだ、自分分は周りの女性の様な魅力もない、自分のマスターが見向きもしないのは当然だとそう思いながらお湯に顔を沈める。それでも、少しぐらい期待したってよかつたはずだ、マシユは誰にも聞かれなようにお湯の中で溜息をつく。

「」

「大切な、後輩か……」

「……………えっ?」

大切な後輩。 そうマスターは続けた。 驚いた様にマシユは顔を上げる。

「……………そういうのは、本人の前で言いたまえ」

「だな。 マシユの嬢ちゃんも喜ぶぞ」

「……………先輩」

その後マスターはマシユの活躍や、マシユがいなければできなかったことをサーヴァントに話した。 マシユが居てくれたから、マシユが頑張ってくれたから、と嬉しそうにそれを話すマスターはまるで無邪気の少年の様で、それを遠くで聞いているマシユは恥ずかしいが、とても誇らしく思えた。 先輩が自分を誇りに思っていてくれる、その思いだけで先ほどまで沈んでいた心が天にも浮かぶようであった。

「マシユさんが羨ましいです」

「いえ、でも私は……………」

「だって、あんなにますたあから思われているんですもの。 妬けてしまいます」

妬いているという割には穏やかな表情でマシユを見る清姫。 いくら同じ人に恋する乙女でも仲の良い友人の沈んだ表情を見るのは清姫だって辛いのである。

「ですが! 私はずな様からお嫁にしたいというお墨付きをもらったのです! これ

「同点ですからね！」

「せ、先輩はお嫁にしたいんじゃないやなくて良いお嫁さんになると言っただけです！」

しかしそれはそれ。清姫だつて友人のために思い人をあきらめることはしない。タオルが外れるのも構わず勢いよく立ち上がりマシユに指をさした。

「旦那様は、渡しません!!」

「そ、そもそも先輩は清姫さんの物はありませんし、わ……渡しません！」

マシユもつられて立ち上がる。この気持ちがあんなものは分からないが、清姫には渡したくないのだけは分かる。二人は胸がくつつきあう距離まで接近して目を合わせる。

「ふふっ、負けませんよ? ふふっ……」

「こちらだつて負けません! ふふふっ……」

そしてお互いに堂々と宣言した後には笑い合う。これで立派なライバル、マスターがどちらを選んでも恨みつこなしである。二人は前よりも固い絆を作つて、この話はおしま……となればよかつたのだが。

「何を怒っているのですか黒い剣の私!? 私はただそちらの方が動きやすいので羨ましいと言っただけでは……」

「モルガン!!」

「あらっ？」

「はいっ？」

向こうからアルトリア・オルタが放った黒い極光が堀に激突する。スカサハがルーンで作った堀であるが、さすがにエクスカリバーの光には耐えられない。よって、堀の一部が破壊され、ゆっくりと男湯側に倒れた。結果――

「……？」

「……はい？」

「……え、えっと」

マスターとマシユ達が、対面することになった。マシユと清姫は先ほどの出来事でタオルを外しており、またマスターも男だけの温泉に浸かっていたのでタオルは外していた。

よって、三人とも一糸纏わぬ姿であり……

「きゃあああああああああああ!!」

三人の悲鳴と歓声と叫び声が風呂場を満たすことになった。

――三人の明日はどっちだ。

魔法少女のパラノーマルなアクティビティ

誰もが寝静まる夜中。　　と言つても悪巧みをしているどこかのアヴエンジャーや、もとも寝る必要がないサーヴァントにはそれぞれ趣味の時間を作り長い夜を超えていく者達も何名かいる。

そんな中魔法少女であるイリヤとクロエは、マスターの部屋の前に来ていた。理由はマスターの部屋に忍び込み、書類を改ざんするためである。無理やり連れてこられたイリヤは寝ぼけ眼をこすり眠そうに欠伸をする。

「クロ、もう諦めて正直に言つてマスターさんに変えて貰えばいいじゃん……」
「何言つてんのよ、マスターに間違つてレオニダスのスパルタ式マツスル講座を希望しちゃつたから消してくださーいって言うわけ？　　恥ずかしすぎて死んだ方がマシよ」

「だからつてなんで私を巻き込むの……」

欠伸をかみ殺しながらイリヤは部屋の扉のロックを開ける。大体なぜクロは自分で巻き込むのか。何時ものことながら損ばっかりしている様な気分である。

しかも今は夜中、マスターが日々の訓練で疲れて寝ている所を忍び込むなんて迷惑にも甚だしい。だが、夜中マスターの部屋に忍び込むことにスリルを感じているのは否

定できなかった。あとマスターの寝顔も見てみたいという欲求も、まあ、あった。

「もう、ばれたらクロのせいだからね」

「大丈夫よ、そのためにイリヤがいるんじゃないの」

「もともと擦り付けるつもりだったの!？」

ドアのロックが解除され、ドアがゆっくりと開いていく。かの王の剣から放たれる黄金の輝きを三秒は耐えるという重厚なドアだが、イリヤが持っているキーカードがあれば難なく開いてしまう。

「お、おじゃましまーす……」

「いいわね、手早く静かによ」

イリヤ達が部屋に入ると、部屋は電気が消されて真っ暗であり、部屋の隅のテーブルに置かれているパソコンの様な端末から漏れている僅かな光だけが唯一の光源であった。

二人の呼吸以外は聞こえないくらいに静かであり、静寂と暗闇がイリヤの心を少し不安色に染めていく。これでも小学五年生、不気味な所は苦手なのだ。

「あれ、マスターさん、いない?」

「好都合ね、さっさと探すわよ……」

クロエは気にせずにテーブルに向かい資料を漁っているが、イリヤは変に思った。

もう日付を超える時間なのにマスターは寝ていないどころか部屋にもいない。部屋の妙な不気味さも相まって何か嫌な予感をイリヤは覚える。

まるで自ら蛇の腹の中へと入っていくような感覚。部屋のドアが閉まる光景が自分たちを飲み込んだ蛇が口を閉めたようにも思える。

「クロ、やっぱり止めない？　なんだか嫌な予感が……」

「此処まで来て帰れないわよ。あつ、あつたあつた……この書類を……おろ？」

テーブルを漁っていたクロエがふと近くにあつた端末に目を留める。画面には暗視加工が加わって上から写されている自分たちの姿、リアルタイムで録画されているらしく、録画中を示すように赤い文字が点滅している。

部屋の天井を見れば高度に魔術的に隠ぺいされた隠しカメラが設置されている、自分がどこから見られているのか分かって初めて認識できるほど強力である。

「ああもう！　監視カメラがあるなんて、これじゃあ私達だつてことバレバレじゃないの！　何とかして消さなきゃ……」

「とかなんで部屋の中に監視カメラがあるの……？」

クロエが何とかして証拠を隠滅しようと端末をいじくるがどうも上手くいかない。録画自体は止まるが映像自体は巻き戻ったり早送りになったりとも映像自体を排除できそうにない。それでもあきらめずにいろんなところを押しまくると、ふと

映像がある地点から再開し始めた。

「あら、固まっちゃった……壊れては無いわよね？」

「あれ、この映像ではマスターさんがいる……」

丁度今から表示されている時間を見ると、丁度今から一時間前ぐらいの映像である。映像の中では、マスターはなぜか戦闘服に着替えており、その五分後に入ってきた金時と共に部屋を出て行ってしまっている。

「マスターが出て行ったのはかなり最近だったのね……危なかったわ。でもなんで戦闘服？」

疑問に思いながら映像を見ていくと、その十五分後になぜかマスターの衣装棚からぬるりと源頼光が出てくる、髪の毛の長さも相まって何処かのホラー映画のようである。来る、きつと来る。

頼光はマスターがいらないことに気付くとなんだかブンブンと怒ったそぶりを見せながら、ほったらかしにされているマスターのベッドのシーツや毛布を綺麗に仕立て直して、部屋の掃除をしてからベッドの下をあさり、隠してあった女性サーヴァントのピンナップ写真集を灰にし、自分の写真を枕に忍ばせてから、また衣装棚へと戻っていった。

「……妖怪かつ！」

思わず突っ込みながら衣装棚の方へ振り返るクロエ、何の変哲もないただの衣装棚で

あるがさっきの映像を見た後では開けたらいけないパンドラの箱めいた雰囲気醸し出してゐる。　　とうかそもそも衣装棚の壁の向こうは廊下なのにどうやって入り込んでゐるのか。

クロエがいつそ開けてみるかと考えたが、衣装棚の扉が「ギイ……」と一人でに動き出したので、衣装棚のことは頭から消し去つて映像に目を戻した。

「あつ、静謐のハサンさんだ……綺麗だよね……」

次にその十五分後に映像に映つたのは静謐のハサンだった。何も変哲のない壁の一部が突然回転したかと思えば静謐が中から入つてきた。思わず忍者かとクロエがツツコミそうになるがよくよく考えると衣装棚から出てきた頼光の方が化け物じみていたので、何も言わずに映像を見続ける。

静謐はマスターがいないと分かるど落胆したらしく、ベットに座り込む。五分程度そのまま部屋を見回したり、足をプラプラさせて居たりしていたが、マスターがいなくてどうにもならないのか、立ち上がつて帰ろうとした。　　とその時、部屋の隅に何かを見つけたのかカメラが映らない場所まで行つてしまふ、丁度シャワー室の方だ。

「うーん？　シャワー室にも何か仕掛けが……おう？」

しばらくすると静謐がカメラの範囲内に戻つてくる。手には何かの布を握りしめており、静謐もきよろきよろ、そわそわ落ち着かない様子である。

「あれ？ 静謐さん何を持ってらんだろう……？」

「どっかで見たことあるわね……シャワー室にいったから……タオル？」

「あー！ 分かった！ あれマスターさんの洋服！」

「ああ！ それよそれ！ うわーまさかの少女マンガ的アサシン……」

静謐が手に持つてるのはマスターの私服であった。カルデアの制服と違い、マスターが就寝する時や、休日の時部屋で過ごすときに着る薄いTシャツである。シャワー室から持つてきたということはマスターが戦闘服に着替える時に脱いで洗濯籠に入れていたものだろう。静謐はマスターのTシャツに顔を近づけていき、しばらく躊躇しながらも何かを決心した様子でそのまま匂いを嗅ぐようにマスターのTシャツに顔を埋め始めた。

「うわー乙女よ、乙女が映っているわ……」

「静謐さん、私達より年上だけどね……」

Tシャツから顔を離した静謐は恍惚な表情で、またすぐにTシャツを抱きしめる。

そのままベットに倒れ込み、マスターの名前を呼びながら体をくねらせる姿は、妙に色っぽい。

いつもイリヤが見ている静謐のハサンはマスターの事はクールに「魔術師様」か「マスター」呼びなのに、この映像では顔を上気させながらマスターの名前を呼び続けている

る。余りの乙女度にイリヤのスイッチが入りかけていた。

「な、なんだかすごい物見ちゃったわね……」

「静謐さんの隠れた一面を見ちゃったような気がする……」

その後、自分の汗で毒素がTシャツに移ってしまったことに気付いた静謐はおろおろとしながら、そのままTシャツを持ったまま回転する壁で消えてしまった。途中で瘻撃してたけどあれはなんだったの？ と二人は不思議に思ったが特に気にせずに映像に目を移す。最早当初の目的は何処かに投げ捨ててしまっている。

「あれ？ これって私達？」

「ホントだ、じゃあこれで最後……びっ!？」

映像には、イリヤとクロエが忍び込んでいる様子が映し出されている。のだが、その映像を見てイリヤが小さく叫び声をあげる。

部屋に入ってきた時は確かに二人であったはずなのに、彼女たちの後ろにびたりと何者かが、くつつくようについてきているのだ。イリヤは恐怖のあまりクロエに抱き着く。

「あわ、あわわわわわ！ おおおおおお化け……!!」

「ちよ、ちよつとくつつかないでよ……!! ってちよつと待って……この映像の通りなら……」

映像は、クロエとイリヤが端末の映像を除いている所で止まっている。その間にも謎の人物はクロエとイリヤの後ろから一緒に端末を覗いており……

「今、この、部屋に、誰かがいる……!?!」

「び、びいいいい……」

「ちよつとくつつかないでつてば!」

またくつついてくるイリヤに対してクロエが振り払おうとするが、どうも腕に当たる感触が何時ものイリヤと違う。こんなにイリヤに胸があつたつけ? と疑問が浮かぶが、その疑問はイリヤの一言で簡単に解消する。

「え、私、隣にいるんだけど……」

「はいい? じゃあこの感触はな……に……」

二人は震えながらゆっくりと後ろを向く。監視カメラのレンズに、二人の恐怖にゆがんだ顔が映し出される。部屋に叫び声が木霊するがその声は誰にも聞こえることはなかった。

「!」

「おう、今日もゴールデンな鍛練だったぜ! 中々足腰の使い方も分かってきたんじゃねえか? ああつとこの軟膏をやるよ、キズに塗ると効くぜ。んじゃグッドナイト

！

金時に礼を言いながらマイルームへと戻るマスター。あちこちが痣だらけである。理由は単純、戦闘訓練の際に付いた傷である。しかし、サーヴァントの指揮をしていたわけではない。マスター自身が戦闘に参加する、つまりサーヴァントたちが何らかのアクシデントで戦闘続行不可、もしくは消滅した際に緊急脱出のために一秒でも長く生き残るための訓練である。しかし訓練するたびに傷だらけになってしまうほどの過酷なその訓練は、マシユ達が多々に許可を下ろさない。しかし少しでも足を引っぱりたくないマスターは金時たちに頼み込み極秘で訓練を行っている。

部屋に戻り、マスターが来ていた戦闘服を脱ぎ始めると肌からは大量の汗が噴き出してくる。カルデア戦闘服は極地で対応できるように様々な魔術的な補助がかけられているが、その分他の礼装よりも体が締め付けられるような感覚と、脱いだ後の体の疲労感が激しい。息を荒くしながらマスターは汗を流そうとシャワー室へと足を運んでいく。礼装保管用のクローゼットから三人分の光る目がマスターを見つめていることにも気づかずに。

「ちよ、ちよつとマスター帰ってきちゃったわよ！」

「やっぱり、正直に出て謝った方がいいんじゃない？」

「正直……素晴らしい言葉です……」

「話聞いてないし!!」

ここはマスターの部屋にある礼装保管用のクローゼットの中、二人の少女と一人のサーヴァントが所狭しと隠れる様に入り込んでいる。こちらも理由は単純、一緒に入っているサーヴァントに無理矢理入り込まされたのである。

「清姫さんはまだしもなんで私達まで、クローゼットに入らなきゃいけないの……」

「そうよ、常習犯の清姫と違って私達は初犯なんだから笑って許してもらえるのに!」

「それは……正直に申しますと貴女達と一緒にいれば旦那様ますたあに怒られなくて済むと思いまして……」

「あ、あけすけ……!」

ニコリとごまかすように笑う清姫。結局のところ、イリヤとクロエの後ろに憑りつ

く亡霊のように張り付いていた謎の人物は清姫であった。ストーキングスキルを駆

使してイリヤ達と共に堂々と正面から入り、部屋を物色していた。清姫的にはそのま

まいリヤ達には見つからずに、そのままマスターの部屋でマスターをお迎えするつも

りであったらしいが、イリヤ達に見つかったことにより計画変更。叫び声をあげるイ

リヤ達の口を塞ぎ、クローゼットの中に押し込むとそのまま自分もそこに隠れ始め、マ

スターをのぞき見、もとい隠密的に見守ることにしたのだ。

「とうるか、マスターシャワー浴びているじゃない、逃げるなら今じゃない?」

「あ、本当だ。じゃあ今のうちに……」

「逃がしません……!」

猫を捕まえる様に首根っこをつまんでクローゼットから出ていこうとする二人を引き戻そうとする清姫。腐っても魔法少女、それぞれ魔力を使い飛び出そうとするが、清姫の凄まじい力でいくらやつてもクローゼットからは逃げ出せない。貴女筋力Eでしたよね……? そうしているうちに、シャワーの音が止み、シャワー室のドアが開く音がしたので、二人とも仕方なくクローゼットの中に隠れることになる。

「??」

シャワーから上がったマスターが物音に気付き、クローゼットの前までやってくる。

ズボン履いていたが、上半身は裸であり、引き締まった肉体が惜しげもなくイリヤ達の前に晒される。しかも乾き切っていない肌と髪が相まって妙な色つぼさを醸し出している。

「わあ……マスターさんって凄い体してたんだ……」

「着やせしているタイプなのかしら……確かに抱きしめられたとき胸板が固かった気がするわ……」

「ああ旦那様ますたあだったら何て艶やかなんでしよう……あとクロエさんはその話を後で詳しく」

マスターの体を食い入るように見つめる三人。清姫に至っては興奮して息が荒い。

「……………」

「やばっ……………」

すると不審に思ったのか、マスターがクロゼットへと手を伸ばしてくる。別にならなくてもマスターは笑って許すだろうが、清姫がいるとなれば別である。子供のいたずらが大人のいたずらに変化するだけで対応はずいぶんと違ってくるのだ。自分たちにも罰が下されるかもしれない。クロエはなんとかしてマスターの気を散らそうと考えるが、クロゼットの中では手の打ちようがない。完全なる詰みである。もはやどんな言い訳をするか考えるしかなかったが、唐突にドアがノックされることによつてマスターがドアの方へ向かっていく。正に天の救いであった。

「あ、危なかった……………」

「ふう、見つかるかと思つてしまいました。でも旦那様ますたあから私を見つけるといふことは、私に求婚することと同義なのでは……………」

「もうやだこのバーサーカー」

うっとりとしながら妄想の世界に入る清姫に、なんだか学校の友人達を思い出すイリ

ヤ。 あちらもある意味バーサーカーな連中ばかりだった。

「こんばんは、マスター。 傷の処置に参りました」

「ふむ、前回よりもだいぶ傷を負う量が減ったみたいですね。 良いことです」

そういつてマイルームに入ってきたのは、天草四朗であった。 彼は、訓練によつて負った傷を文字通り修復させるためにマイルームを訪れていた。 傷を治すだけなら、メディアやナイチンゲールが一番良いのだが、生憎この訓練は男同士の秘密の特訓である。 なのでそんな男のロマンを分かるサーヴァントだけが、マスターに密かに協力していた。

「?」

「ふむ、金時さんの軟膏ですか。 確かにマスターの体には効果がありそうです。 私の魔術と併用して見ましょう、それではベットに……」

マスターがベットでうつぶせになると、天草が金時から貰った軟膏を傷口に塗りながら、回復魔術をマスターに行使していく。 打撲痕に軟膏が塗られると、不思議とその部分だけが熱くなり、さらに天草の回復魔術で、まるで打撲痕なんてなかったのように、綺麗な肌になる。 すこしばかりくすぐったいが、マスターは全身に感じていた痛みが引いていくのを感じて、大きく息を吐く。

「な、何をやってるのかしら……あれ……」

「上半身が裸のマスターさんに、天草さんが乗っかってるね……」

「ま、まさか……旦那様ますたあが衆道に……!?　こ、これがアイリさんが言っていたびいえる空間!?」

「ママは何を吹き込んだの!?!」

だが、その光景をなんだかイケナイ事と勘違いしているのはクローゼットの三人である。突然始まった濃厚な空間に、イケないと思いつつも目が離せないイリヤ達。

爽やか系なイケメンの天草と、ぽやん系男子（イリヤ調べ）のマスター。いつたいどっちがどっちなのだ、どっちが有利でどっちが不利なのだ。イリヤは頭の中でだめだと思いつつも妄想が止まらなくなって来ている。

『男の人は男の人同士で、女の子は女の子同士で恋愛すべきだと思うの……思うの……思うの……』

イリヤの頭の中で学校の友人がこちらにいらつしやいと手招きをしている。薔薇色の空間がイリヤの目の前に広がり、ゆっくり、ゆっくりとイリヤはその甘美?な世界の中へと引きずり込まれていく。

「それじゃあ、ズボンを脱いでください、そちらの方がやりやすいでしょうし」

天草の言葉に従い、ズボンを脱いでいくマスター。さらにクローゼット中は騒然とする。ベルトを外していく音がさらにイリヤの脳内妄想を加速させる。

「あわわわ！ どうしましろう！ このままでは旦那様またあが前世の安珍様のように……いやそれはそれでありですが……イリヤさん？」

「だ……だ……」

「マスターがそっち系だつて知れたらこのカルデア間違いなく滅ぶわよ……イリヤ？」

「だめー!!!」

業が深すぎる腐界から飛び出すように、クローゼットから叫びながら飛び出すイリヤ。そのまま弾丸のように飛び出したイリヤは天草を突き飛ばし、マスターの胸にダイブし大声で言い放った。

「ま、マスターさんは小さい子が好きなんだからー!!」

「!?!」

突然現れた魔法少女にロリコン発言されるマスター。確かに小さい子は好きだが、それは世話をすることが好きなのであり、黒髭の様な扱いを受けるのは甚だ心外であった。

「マスターをびいえるの道に引きずり込まないでー!!」

「!?!?!」

次に衆道疑惑をかけられていた事を知りさらに茫然とするマスター。 いった自分
分の知らないところで何が起こっているのか、天草の方を見てもやれやれと首を振るだ
けである。

「お嬢さん安心しなさい、私はこう見えてもルーラーのサーヴァント。 そんなことは
マスターにはいたしません」

「ほ、ほんと?」

「本当です、こう見えても私はあるサーヴァントとロマンスな空間になったこともあり
……」

興奮しているイリヤをなだめる様に、目線を合わせながら話しかける天草。 なんだ
かんだで子供の扱いが上手いのである。 自分がとんでもない誤解をしていたと分
かったイリヤは、ひたすら謝り続け、お詫びにとマスターの軟膏塗りを手伝うことにな
った。 これで一件落着である

「それで、貴方達はマスターの部屋で何をやっていたのです?」

「やばっ!?!」

「しゃあっ!?!」

「正座しなさい」

わけがない。

後ろでそろりそろりと逃げ出そうとしている清姫とクロエを呼びと

めると、にこやかな笑顔でその場に正座をするように命令した。哀れや哀れ、二人にはカルデア裁判が待っていることであろう。因みにイリヤはマスターの軟膏塗りの手伝いをしたことで無罪放免となった。そこ、鼻唄だとか言わない。

「うう、なんで私がこんな目に……」

後日、クロエはカルデアの廊下掃除を命じられていた。首には「私はマスターの部屋に侵入しました」と書かれている板をぶら下げている。初犯と言う理由でルーラーたちから温情をかけられ軽い罰で済んだが、清姫の方は私財という名の旦那様コレクシオンを没収の上、レオニダスのスパルタ式筋トレ講座を強制受講させられている。恐ろしや。

「周りの男たちからは笑われるし、女たちからはこの子もか……みたいな目で見られるし。赤っ恥よもー。やってらんない！」

板を投げ捨て、箒を捨て完全にサボリの体制に入るクロエ。こんな序盤のシンデレラのような事をやってられるか、私はマタ・ハリ師匠の所に戻るぞと歩きはじめるクロエだが、その肩をがっちりと捕まえる筋肉がいた。

「クロエさんやつと見つけました！ さあ筋肉を鍛える時間です！」

頭から炎出す系スパルタ王、レオニダスである。今日も躍動する筋肉が眩しく、熱

ジヤンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリーの憂鬱

此処はお馴染み、人理継続保障機関カルデア。　　なんだか早口言葉にも使えそうなこの施設では滅却された人類を救うため、多くのサーヴァントが召喚されています。

それは有名なお話の王様から、有名な童話の作家、果てには西部のお尋ね者から連続殺人鬼まで、世界中の偉人たちがここカルデアで召喚されマスターと共に世界を救うために手を取り合っています。　　その中で召喚される英霊の中にはその人物が持つていた側面が強調されて召喚されてしまう場合があり、それによって性格も属性も違う同一人物が同じ空間に存在する。　　というんだかこんがらがった状況になってしまふことがあります。　　何処かの王を例にすると黒だったり白だったり槍持っていたり槍持って黒だったり、サンタだったり、暗殺者だったり、果てには水着を着たりする王が同じ空間に存在している状況ができてしまうわけです。　　ちなみにこの状況が一般家庭で成立した場合エンゲル係数は100%超えて3000%程度上昇するという結果がバベツジ先生の計算によりはじき出されました。　　皆さんは気を付けましょうね。

さてそんな同一人物の別人がいることはそう珍しいことではないカルデア――大体何か月か一度に召喚されてきますからね――にまた一人新しいサーヴァントが召喚されて

きました。

彼女はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリーというそれはそれは可愛らしい女の子、張りのある健康的な肌、雪のように白い髪とくりくりとした金色の目、まだ幼く丸い顔つきの彼女はジャンヌ・ダルクのオルタナティブのリリーで、しかもサンタなのでした。この属性の多さ、記入するだけでも大変です。好きな物は勿論サンタ行爲とトナカイ。嫌いな物はハロウィンと目の前で黒歴史を作っていくときの未来の自分。大人つぼくあろうとして逆に子供つぼくなってしまうことが多い彼女は、つい最近カルデアに来た正真正銘の新人さんなのでした。

「ふふん！　中々綺麗になりました！」

そんなジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリー——長いのでジャンヌ・リリーに短縮します——がやっていることといえば、マスターの部屋の掃除でした。雑用をやらされてるわけではありません。たしかにジャンヌ・リリーは戦闘センスはありますが、実戦経験が乏しい彼女はまだまだ訓練段階でありまだマスターと一緒に戦闘に出ることが出来ず、お留守番言い渡されています。ですが留守番を言い渡されたといって、ただ怠惰を貪ることなんてジャンヌ・リリーはしませんでした。素直になつたジャンヌ・オルタの様な性格をしている彼女は疲れて帰ってきたマスターが喜ぶようにと自主的にマスターのお部屋を綺麗に掃除しているのです。

「これでトナカイ^{マスター}さんも喜んでくれるでしょう！　ふふふ、やはりわたしは成長したわたしより精神的に大人です……！」

疲れて帰ってきたトナカイ^{マスター}がこの部屋を見たらきつと喜んでくれるだろう、褒めてくれるに違いない。撫でてくれるだろう。もしかしたら抱っこしてくれるかもしれない。ジャンヌ・リリイはマスターの喜ぶ顔が目に見えるようで、ニヤニヤと一足先に、にやけながらマスターを待つことにしました。その心の油断がいけなかったのでしょうか。

「おつとつと……と!!」

槍代わりに持っていた箒が棚に当たると、上にあつたオブジェクトが揺れ、隣のオブジェクトに当たり、そのまたオブジェクトに当たっていき、バタバタとドミノみたいに倒れて行きます。そして最後にはマスターが夏にアルトリアと一緒に勝ち取ったブリッツのペンギンカップ優勝トロフィーにぶつかり、そのままトロフィーは床に真逆様。

「だめー!!」

ジャンヌ・リリイも慌てて飛び込むようにして手を伸ばしますが、惜しくも身長が足りず、ジャンヌ・リリイの指をかすめてトロフィーは無慈悲にも床にダイレクトに落下してしまいました。衝撃に耐えられなかったのか、可愛らしいペンギンの姿に似せら

れたトロフィーは胴体からポキリと綺麗に折れてしまい、見るも無残な姿になってしまいました。

「あ、ああああ……」

目の前の惨事にジャンヌ・リリイは顔を真っ青にして震えます。このトロフィーはいわばマスターとアルトリアとの一夏の絆の証、宝石や財宝よりも人との絆を何よりも大切にするマスターにはどんな財宝よりも価値のある物として大切にされていたものなのです。

「あ、謝らなきゃ……でも、どうしよう……!」

ジャンヌ・リリイは誰よりも真面目であろうとし、実際に誰よりも真面目で自分に厳しい女の子です。――実際にバベツジから無垢で聡明な少女判定を受けています――こういうことは下手に隠し事をせず、正直に謝った方が相手にも自分にも良いことは分かっています。実際にいつもの彼女なら相手に激怒されようとも真摯に正直に謝ったでしょう。しかし今回はいつも通りとはいきませんでした、相手がマスターだからです。

「ど、どうしよう……トナカイさんに嫌われちゃう……」

どうしよう、あの人はきつと怒るだろう。どうしよう、嫌われるかもしれない、もしかしたら口なんか利いてくれないかもしれない。どうしよう、どうしよう、嫌われ

たくない、嫌われたくない。あの^{マスター}人にだけは見捨てられたくない。様々な不安と恐怖心がジャンヌ・リリーの心を覆いつくし、正直に告白するという選択肢が遠のいていきます。サンタにとってトナカイは真つ暗な夜空の中サンタを導く存在です、トナカイから見捨てられたサンタは何も見えない夜の中でただ一人ぼっち。それは彼女にとつて永遠の孤独、存在意義の否定と同義なのでした。

「そ、そうです。メディアさんならトロフィーも……」

混乱する中でジャンヌ・リリーが思いついたのは、模型を作るのが趣味な魔女、メディアの事でした。彼女ならば、この割れたトロフィーも元の状態に直せるだろう。そうすればマスターだって許してくれるはずだ。そう思ったジャンヌ・リリーは壊れたトロフィーをカモフラージュの為にゴミ袋に詰めてから、こそこそとメディアがいる部屋へと向かっていきました。

「ご、ごめんください……」

数分後、メディアの部屋の前に立つジャンヌ・リリーが居ました。途中でゴミ袋を背負ったジャンヌ・リリーを変な目で見てくる人はいましたが、幸運ながら深く追及されることはありませんでした。

「ごめんください……」

ジャンヌ・リリーは何回か部屋のドアをノックしますが、メディアは出てくる気配はありません。鍵はかかっておらず、部屋の明かりはついているので、部屋の中にいることは確かなのですが、何回ジャンヌ・リリーがノックしても出てくる気配がありません。失礼なことですが、今は一刻を争う事態、ジャンヌ・リリーは怒られることを覚悟しながら部屋の中へと入っていききました。

「ごめんください、メディアさん？ いらつしやいますか？」

メディアの部屋の中は魔術師の工房らしく、何かの目玉や奇妙な生き物のホルマリソンの漬けなどが飾られている一方、セイバーのフィギュアやポトルシップにミニチュアの町、メディアの手作り衣装でしょうか、可愛らしい服やコスプレ衣装などが所狭しと飾られており、それらは部屋の三分の二以上を占領しています。ジャンヌ・リリーはその異様な光景に、自分が魔境に入り込んでしまったような錯覚を起こしました。可愛いと気持ち悪いが混在したこの空間は、まるで可愛いクトウルフ神のように矛盾した存在で包まれています。

「あの……メディアさんはいらつしやいます……」

「どちら様かしら？」

「きやああああ!!？」

突然ジャンヌ・リリーの後ろに一人の女性が現れました、マスクとゴーグルをつけて

手には何か奇妙な道具を持っており、胸にかけているエプロンは血で染まったかのように真っ赤でした。控えめに言ってお化け映画に出てくる連続殺人鬼です。

「きやああああ!! お、おばけー!!」

「人の部屋に入っておいてお化け呼ばわりは無いですよ。怒るわよ」

「うえ? メ、メデイアさん……なんですか?」

聞き覚えのある声に目を丸くするジャンヌ・リリイ。見ると、何時も意味深げに被っているフードと紫のローブが目につきました。何時もは凛々しくクールで大人な女性のメデイアがこんな連続殺人犯の様な恰好をしているとは露とも思っていなかったジャンヌ・リリイは目をぱちくりとさせながらメデイアを見つめています。

「えーつと……本当にメデイアさん?」

「此処を誰の部屋と思っているのかしら? ……貴方は私を知っているみたいだけど、私は貴女を知らないわね。お名前は何かしら? かわいいお嬢さん」

「あ、はい! 名前を聞くときは自分からでしたね、失礼しました! 私はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイと申します!」

「サンタ・リリイ……? またリリイが増えたのね……サンタ?」

「はい! サンタです!」

目の前のジャンヌ・オルタのリリイだと言い張る少女に、またリリイが増えたのかと

メディアは困惑しました。確かにこの頃新入りが入ったとは聞いていたが、こんな幼子とは、しかもリリーでサンタである。そろそろリリー被害者の会が作れるかもしれない。カーミラの奥さんの所はリリーが合体したらいいし。

「大きくなつた私が、メディアさんに抱き枕を極秘で依頼したことがあるはずです！それで、その腕を見込んで一つお願いが……」

「お願い？」

そういつてジャンヌ・リリーがメディアに袋の中身を見せます。中に入っていたぼろぼろのトロフィーを見て、メディアは何が起こつたのかを察しました。そして目の前の少女が俯く姿を見て、確信します。

「そう、これを私に直してほしいのね。でも私に直してもらう前に、正直にマスターに話した方がいいじゃないかしら？」

「それは……」

「わざとやったわけじゃないのでしょうか？ あの子も理不尽に怒る子じゃ……」

そういつてメディアはジャンヌ・リリーの顔を見て口をつぐみます。それはまるで必死に泣くのを我慢している子供の様に、ジャンヌ・リリーは唇を噛みしめて俯いて震えていました。それは大切な人から拒絶されたくないという子供が抱く様な恐れ。

メディアはそんなジャンヌ・リリーの姿に遠い日の自分の姿を思い出し、一つため息

をつきました。

「まったくあの子も節操無しね……分かりました、直してあげます。だからそんな顔をするのはおやめなさい」

「本当ですか!」

ジャンヌ・リリーの顔が咲いた花のように明るくなります。彼女の白い髪も合わせ、さつて白百合が咲いたような笑顔にメディアも口角を少し上げて、なぜか二着の服を取り出しました。可愛らしい西洋の人形が着る様な上品なお洋服です。

「はい白と黒。どちらが好きかしら?」

「はい? そのふりふりした服は一体……?」

「まさか、手ぶらで魔術師と交渉しようとは思っていないわよね? さ、白と黒どちらがお好み?」

「え? はい? 黒い方の私は実際見てられないので白の方が好きですが……メディアさん? 鼻息が荒いですよ? メディアさん?」

じりじりと近寄ってくるメディアに何となく身の危険を感じ後ずさりをするジャンヌ・リリーですが、いつの間にか扉はロックされ、部屋の一部分が写真撮影をするためのホワイトルームへと変わっていききました。見れば他にも衣装がばっちり揃っており、ジャンヌ・リリーは今になってメディアに頼んだことを後悔してきてきました。

「メディアさん……あの……もうそろそろ……」

そのあと一時間が経ちましたが一向にメディアの撮影会が終わる様子はありませんでした。フリフリのドレスに続き、小悪魔的衣装、ドラゴンのキグルミ、ブライド衣装、どこかのプリンセスの衣装、大人っぽいドレス、エトセトラ、エトセトラ e t c, e t c……今はひらひらのチャイナ服です。まるで人形遊びみたいに次々と着せては脱がされ、着せては脱がされでほとんどジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリー——今はジャンヌ・ダルク・オルタ・チャイナ・リリーですが——はほとんど参っていました。

「うゝ以前からジャンヌたちにもお願いしていたんだけど白い子にはきつぱりと、黒い子にはがみがみと断れるからほとんど参っていたのよね。あ、視線こつち頂戴笑顔もね」

ほとほと参っているのはこつちだと出かかる言葉をトロフィーの為と飲み込みながら、ヒクヒクとひきつる笑顔をメディアに向けるジャンヌ・チャイナ・リリー。そうしていると部屋に一人の人物が入ってきました。

「やれやれ、毎度耳にタコができるぐらいにゴミの日にはゴミ袋を玄関に出しておくよ
うに言っているはずだがね？」

浅黒い肌に白い髪、精悍な顔立ちですが何処か優しい目をして、様々な人生があつた

ことを語る印象的な背中を持つ男。人呼んでカルデアのおかんといえはこの人、英霊エミヤでした。

ぐちぐちと嫌味を言いながら部屋に入っていく姿はエプロンを着けて頭巾をかぶり、右手には絡みつくワカメのように部屋の埃を一つも逃さないダ・ウインチちゃん製まるとりシンジくんというモップを持っていました。誰がどう見ても部屋を掃除しに来たおかんです。エミヤは時々他の掃除好きサーヴァントと共にゴミ回収を行っており、特にメデアなどのキャスター勢はそのクラス故に様々なゴミが出てしまうのでエミヤ達も気合を入れなければなりません。因みに海賊サーヴァント達の部屋はいくら掃除しても三日で元のゴミ部屋の有様になってしまいます。

「分かっているわよ、青少年の部屋に無断で入ってくる母親みたいね貴方。そこに置いてるからさっさと持って行って頂戴」

「全く……またこんなに散らかして。つとずいぶん重いな、またイアソンくんが犠牲になったのかね？」

またぶつぶつと言いながらテキパキと部屋の掃除をしながら部屋の整頓までしていく姿はまごうことなきおかんです。

「ん？ おや、サンタ・リレイじゃないか、こんな所で何を？ あとその恰好はサンタとしてでは中華的だと思うのだが……」

「あ、エミヤさん。これは、その……」

「人の部屋をこんな所呼ばわりしないでくださる？ お手伝いしてもらってるのよ。ほら着替えるんだから男は部屋から出ていく！」

「また君は人のリリイをおもちゃに……そのうち訴えられても私は弁護しないからな」
手をひらひらと振ってエミヤを追い出すメディア、嘘が苦手なジャンヌ・リリイがぼろを出さないように助けたのでした。

エミヤは両手にゴミ袋を持つと次は部屋の前に出すようにとメディアに何回目かも忘れた小言を言いながら部屋を出ていきました。その後ろ姿は歴戦の英霊と言うよりはかは歴戦の主夫です。

「あの……ありがとうございます」

「なんのことかしら？ さ、あと二、三着よ、がんばりなさい」

「まだ続くんですか!？」

「うん、このくらいかしら、良く耐えたわね。それじゃあご褒美と行きましょうか」

「や、やっと終わりました……」

そのあと三着と言わず、五着も着せ替えさせられたジャンヌ・リリイ、もう心も体もヘトヘトでした。しかしながらこれでトロフィーを直してもらえらるなら安い苦労だ

とジャンヌ・リリイは思いましたが、机の上を見て漠然としました。机の上に置いていた袋が無いのです。

「あ、あれ……？　ない、袋がありません……！」

「あら？　可笑しいわね、机の上に確かに……」

そこでふとメディアはジャンヌ・リリイがトロフィーを入れた袋がゴミ袋だったことを思い出します。そして途中で入ってきたエミヤ、彼が持っていた袋は二つ。メディアの頬に冷や汗が一つ、伝いました。ジャンヌ・リリイもそのことに感づいたらしく、顔を青くしてメディアを見つめています。

カルデアの焼却炉、カルデアの電力を補う方法の一つにもなっているこの焼却炉は万物を跡形もなく燃やし尽くすぐらい強力なもので職員たちが「ファヴニールの炎にも負けない」と豪語している程でありました、そんなものにトロフィーが耐えられるわけがありません。

「まさか、先ほどのエミヤさんが……」

「おそろくね……でももうこの時間じゃ焼却炉に……」

「——っ！」

「あつ！　待ちなさい！」

メディアの制止を振り切り、ジャンヌ・リリイは部屋を飛び出していきました。目

指すは焼却炉、通る人たちが皆驚いてジャンヌ・リリーに声をかけますがジャンヌには構う暇はありません。もしかしたらまだ運ばれている途中で燃やされてはいないかもしれないと一筋の希望を持って、カルデアの廊下を走っていきます。必死に走って、息が荒くなって、不安でいっぱいになり目がうるんできません。まだ間に合うはずだ、まだ。足がもつれて転んでも、必死に焼却炉を目指すジャンヌ・リリーですが……

「嘘です……嘘……」

やつとのことでたどり着いた焼却炉は無慈悲にもその地獄の様な業火で様々なゴミを燃やし尽くしている所でした。眩しいぐらいの炎が有機物、無機物問わず、鉄でさえも溶かしつくして蒸気へと変え、最終的に魔力へと還元していきます。その炎を見つめながら、ジャンヌ・リリーは呆然と立ち尽くしました。彼女の眼からは涙が一つ、また一つと零れ落ちて床を濡らしていきます。

「おしまいです、おしまいです。折角願いを持って、友達だつて出来たのに……ひぐつ、うぐつ……ぐすつ……」

とうとうジャンヌ・リリーは手で顔を覆い、その場に崩れ落ちました。もはやただ一人孤独に泣き崩れる彼女に希望は残されていないように見えました。

無様ですね、まるでただ哀れに泣き伏せる童子の様。まったくこんな

ものが私の幼少期とは……」

「どなたですか？」

「あら？ 自分の声も忘れたのかしら？」

突然の声にジャンヌ・リリイが顔を上げると、そこには黒い衣装に身を包んだ白髪の美女が立っていました。それはジャンヌ・リリイの本来の姿、彼女の未来の姿。本来は存在しない復讐に身を落とした聖女の姿。ジャンヌ・ダルク・オルタです。つまらないという様な表情でジャンヌ・リリイを見下し、右手には何かの袋を持っています。

「ぐずつ、大きい方の私……どうしてここに、私を笑いに来たのですか？」

「もちろん！ と言いたいところだけれど……」

ジャンヌ・オルタは右手に持っていた袋をジャンヌ・リリイの前に投げます。袋の中をジャンヌ・リリイが見てみると、炎に照らされた袋の中身が反射してジャンヌ・リリイの顔を照らしました。ジャンヌ・リリイの顔が驚きに満ちました。

「これ……トロフィー……！」

「とりあえず泣き止みなさい。自分と同じ顔で泣きじゃくられると気味が悪いっただけありません」

「ど……どうしてこれを……」

「どっかの魔女が火急の用だって連絡してきただけよ、私が居てよかったわね、もう少し

で灰も残りませんでしたよ? ……別に罰で焼却炉の当番をさせられたわけじゃないからそのつもりで」

「メデイアさん……………」

メデイアが機転を利かせて、ジャンヌ・オルタに連絡して回収させてくれたのでしよう。なぜジャンヌ・オルタなのかジャンヌ・リリーには分かりませんでした。これでトロフィーを直して貰えます。ジャンヌ・リリーは袋を持ってメデイアの元に戻ろうと走つていこうとしましたが、ジャンヌ・オルタの旗がその進路を遮るようにジャンヌ・リリーの前へと突き出されました。

「……………っ! 何故邪魔するのです! 成長した私!」

「アンタが縮んだのよ……………こほん、一つ、聞きたいことがあります。……………」

「アンタこれを隠そうとするの!」

「そ、それは……………」

「私が縮んだ癖に、まるで白い方の私の様に馬鹿正直。そんなアンタがなんであいつ

に隠し事をするワケ?」

「それは! ……それは……………私は、その……………」

ジャンヌ・リリーは言いよどむと、ジャンヌ・オルタは彼女の眼を覗きます。その眼から見えたのは、孤独への怯えと拒絶の恐怖。ジャンヌ・リリーが何を恐れている

かを察したジャンヌ・オルタは、一瞬だけ悔しそうに顔を歪ませた後大声で笑い始めました。

「な……何が可笑しいのですか!!」

「はははっ! 私が! 仮にも復讐の魔女である私になる者が! 幼子であるがサーヴァントであるにもかかわらず! 一人の人間の拒絶を恐れていると!? ふふ、ふふふ! これが笑わずにいられますか! いいえ、いられませんとも!!」

「……っ! そのどこが悪いのですか!! 好きな人に嫌われたくないという思いがそんなに可笑しいですか!」

「いいえ? ちつとも! 可笑しいのは貴方はまだマスターを信じてはいないということ! 貴方はマスターから愛しんらいされている、ということ疑っている。その程度の男ではないと諭されながらも信じられずにいる。そうです! 信頼していないのは貴女の方! だからそうやって拒絶されまいと都合な真実を消そうともがいている!」

ジャンヌ・オルタの笑い声が、ジャンヌ・リリーの心にいくつももの棘となつて刺さります。リリーは胸の痛みを感じながら、必死に言い返す言葉を探しますが一向にできません、論破が得意なのに、反論が得意なのに、オルタが言った言葉にはまったくもつて言い返すことが出来ませんでした。

「な……に、を。 貴方、だって、怖がっている、くせに! 一人に、なる、のが、怖い、

くせに！ 愛、される、のが、怖いくせに！」

話をすり替える様に出てきた言葉も、途切れ途切れで出すのがやつと。ただ立っているだけなのに息がぜえぜえとまるで全力疾走した後のように苦しく、頭も朦朧としていました。

「怖いわよ？ でも、怖くない」

「は、あ？」

「いつか消える身だつてことも、この魂が地獄行きつてことも怖い。でも怖くない」

「意味が、分かりません」

「怖くないのよ。だって、アイツがいるんだから」

「あ……」

「アイツが一人にしてくれないから、地獄までついてくるつて言ってくれたから、拒絶なんかしてやるもんかって言われたから。そんなアイツを私が信じている限り何にも怖くないのよ、地獄だつて二人だったら怖くない」

そういうジャンヌ・オルタの眼は真直ぐと自信に満ち溢れていました、ジャンヌ・リリーはその眼を見て心の底から羨ましいと感じました。自分が見捨てられないと胸を誇れるのがとてもとても羨ましかったのです。リリーの心苦しさが融ける様に消えていきました。

「だ・か・ら、その袋は私が貰う」

「えっ!？」

ジャンヌ・オルタは強引にジャンヌ・リリイから袋を奪うとずんずんと部屋から出て行き、何処かへと向かい始めました。慌ててジャンヌ・リリイが付いていき何処に行くのか訳を聞き出そうとしますが、オルタは一言

「アイツがそんなことでアンタを見捨てないってことを信じさせてあげる」

と言ったきり一言も喋りませんが、リリイはあたふたしながらただついていくことしかできませんでした。

此処はおなじみカルデア食堂、レイシフトから帰ってきたマスターが夕飯を食べに来たこともあり、様々なサーヴァントが食堂にごった返しています。今日のご飯はブーティカさんの濃厚シチューです、牛乳にもこだわった母の味に皆舌鼓を打っています。「それで、男性の扱いにも長けている貴女ならどうにかいい方法を思い付かないかと思いまして……」

「うーん……いえ確かに長けているけど、マシユちゃんとランスロットさんの仲を良くするのはちよつと難しくないかしら……」

「あれは、聖女のオルタでしたね。 あちらもまた増える運命にあつたのですか……」
 マスターが見ると食堂の入り口から、ジャンヌ・オルタとジャンヌ・リリイがこちらに歩いてきていました。リリイの方は帰りがついているように見えます。

オルタはマスターの近くまで来ると、持っていた袋を勢いよく机に叩きつけました。驚いて袋の中身が見えた時、マスターとアルトリアは驚愕しました。

「これは……私とマスターが夏の大会で優勝した際の……！ 貴様これをどうした！」

「？」

「うあ……トナカイさんマスターあの、これ、その違うんです、その……」

「はあ？ 見てわからないの？ バツラバラにしてやったのよ、この私が！」

「成長した私!? 一体何を……!」

目を丸くしたジャンヌ・リリイを遮るように、完全に憤怒の表情のアルトリアとなんだか合点のいかない表情のマスターを嘲笑います。 食堂は皆ジャンヌ・オルタに注目し、何人かは「オイオイオイ」「死んだわアイツ」とまるでこの後凄まじい惨状が起こってしまふことを予測しいそいそと食堂から避難するものまでいました。

「まったく、サーヴァントとの絆がなんだといい加減五月蠅いのよね、和氣藹々とまあ目障りな。 だから壊してやったわけ、アンタ達の絆なんてその程度のものだつてね」

「そうか、それを私の前で堂々とやるといふことは私に宣戦布告した同義と捉えていい

のだな。貴様はマスターとの信頼に泥を塗った！」

聖剣を構えるアルトリア、食堂は誰も止めようとはせず、むしろ円卓の方々が鬼の形相でそれぞれの武器を抜いていますし、何かに感づいた作家サーヴァントたちは必死にペンを走らせています。

「マスター、止めないでください。彼奴はマスターの事など……マスター？」

「はあ？ 私がやったってさつきから言ってるじゃない、目だけじゃなくて耳まで悪いわけ？」

マスターはアルトリアの肩に手を置くと、ジャンヌ・オルタの眼をじつと見つめました。青い目がジャンヌ・オルタを捉え、なんだかオルタは心を見透かされるような気がして頬を赤くしながらそっぽを向きます。マスターには怒りの感情は一切なく、只々困惑するばかりでした。マスターはジャンヌ・オルタがこんな無意味に悪どいことをするような人物ではないと信じて疑わないので合点がいかず困惑しているのです。

「ひう！ 私は、その……あの……！」

その後、マスターはジャンヌ・リリイを見つめました。そしてリリイの何かを怖

がっている様な反応を見て、やっと何か合点のいった様子を見せて、一時何かを考える
と、アルトリアの肩から手を離しました。それは戦闘を許可することと同義でした。
檻から放たれたライオンのように、ゆっくりとアルトリアが間合いを詰めていきま
す。

「ちよ、ちよつとマスター！ 許可しちゃつていいの？ あの子たち本気でやり合うわ
よ!?!」

「……………」

「賭け？ 賭けつてどういう……………」

「(どうしよう……………どうしよう……………)」

いよいよ始まりそうな戦闘にジャンヌ・リリイは葛藤していました。このままで十
中八九ジャンヌ・オルタは切られてしまうでしょう。相手はセイバーの中でも円卓を
率いているあのアーサー王。他の円卓もいるこの空間でオルタが勝ち残るのは絶望
的でした。止めるには、自分がやったのだと白状するのが一番なのですが、それでは
マスターが自分を見捨てる。言わなければ見捨てられないが大きい自分が切られて
しまう。

リリイは究極の二択に、胸が締め付けられるようでした。

「覚悟は良いか？」

「いいからさっさと来なさいよ。 憤怒の炎で燃やしてあげる」

しかしリリーが悩んでいる間にも戦いの火蓋は切られようとしています。それが余計にリリーを焦らせます。 もういつその場から逃げ出せばどうだろうか、それが良い。 袋を持って、メディアさんの所まで逃げるのだ。 そうすればトロフィーも治って戦いだって……

『信じさせてあげる』

ですが、ジャンヌ・リリーが一步下がろうとすると、ジャンヌ・オルタが言った言葉が頭の中で響きます。 目の前の軽蔑していたはずの成長した自分が自分を庇うために前に立っている。 信じていないのは自分の方だと言ったジャンヌ・オルタの言葉が思い出されます。 後ろに下がろうとした足が前に進もうと力が入ってきました。

「(マスターを信じていないのは私の方……わからない、そんな難しい話は分かりません。 分かりませんが……)」

体が熱くなります、マスターに拒絶されるかもしれないという恐怖が目頭を熱くさせます。 ですが足は前へと進み始めました。 息を大きく空気を肺へと詰め込みます。

「(でも、将来の私の言葉ぐらい信じないと、私はどこにも行けません……!)」

そうしてジャンヌ・リリーは二人の間に入るように足を進めると、食堂が響くくらい大きな声で言いました。

「私が！ 壊しましたー!!」

「なっ……?」

「……ふん」

食堂が静まり返り、今度はジャンヌ・リリイを皆注目します。アルトリアでも呆気にとられて剣を下ろし、マスターは安心した様に息を吐いて今更大量の冷や汗を流していました。

「私がやったんです！ 大きい私ではありません！ 私がマスターの部屋の掃除をしているときに割ってしまったんです！ 悪いのは私なんです！」

足が震え、声が上手く出なくなってきました。ジャンヌ・リリイの目線はマスターに一心に注がれています。その眼も潤んで大粒の涙が一つ、また一つとこぼれています。

「成長した私は一切悪くありません！ だから、私をオルタ嫌わないであげ……、うあ、うああああああ……」

ついに耐え切れずにジャンヌ・リリイはその場で大声で泣き始めてしまいました。もうこれでおしまいだ、マスターからも嫌われると思うと涙が止まりませんでした。ですが、ふとリリイは誰かに優しく抱きしめられました。深い森の様な落ち着く匂いがリリイを包み、大きな手でリリイの頭を優しく撫でています。リリイはこの匂いと

手を良く知っていました。

「ぐすつ……マスタートナカイさんどうして……」

辛かっただろう、怖かっただろうとマスターは言いました。良く正直に言ってくれたねとマスターはジャンヌ・リリーに微笑みながら抱きしめ続けました。マスターから叱咤されると、見放されると思っていたリリーは驚いた表情でマスターを見つめます。

「私、マスターの宝物を……あんなに大事にしていたのに……怒らないんですか、見放さないんですか？」

「そんなことするもんかと笑いながらリリーの頭を撫でるマスター。アルトリアも察したのか困ったように笑いながらリリーに近づきます、ジャンヌ・オルタはなんだか曖昧な表情をしてそっぽを向いていました。」

「確かにトロフィーは残念ですが、なに、来年も取ればいいのです。その代り貴女にも手伝っていただきますが」

「アルトリアさんまで……あいたつ……!？」

「それでも。貴女が罰を欲するというのならば、さきほどのデコピンが罰です。王の

デコピンですから貴重なのですよ？」

そういつて微笑みながら食堂の席へと戻っていくアルトリア、ジャンヌ・リリイはデコがひりひりするのを感じながら、再度マスターへと問いかけます。

「マスタートナカイさんは私を見捨てないんですか……私は一人にならなくてもいいんでしょうか……？」

「大丈夫、君を一人にはさせないよ」

「……ぐすつ、なんで、でしょう、悲しくないのに、涙が……とまらないんです……どうしてでしょう、ぐすつ、うあああああ！」

そのまままたマスターの胸の中で大声で泣き始めるジャンヌ・リリイ。しかし今度是不安ではなく安心から出る涙のようでありました。それを見てジャンヌ・オルタはやれやれと言った様な優しい表情でリリイを見つめていました。泣きじゃくる中、リリイはやつと信じる事ができたのでした。

「別に、その騎士王とやり合いたかったから利用しただけよ。それ以外なにもありません」

その後中々泣き止まないジャンヌ・リリイを膝の上に乗せながら、マスターはジャン

ヌ・オルタと話していました。 ジャックたちがいいなーとマスターの服をひっぱって自分もと催促しています。

「てつきり、アンタも顔を真っ赤にすると思っただけど、どうしてあんな疑いも無いような目で私を見てたわけ？」

「信じてた。 ね、まったく馬鹿が付くほどお人好しよねアンタ……ありがとう……」

「？」

「何も言っていないせん！ というか、いい加減泣き止まなさいよ、自分の事みたいにもつともないじゃない！」

「ぐずっ……だつて嬉しくて……」

「これは騎士王様のデコピンが痛すぎたかもしれないわね、マスターちよつと耳を拝借しますね」

「わ、私ですか……？」

アルトリアをからかう様にマタ・ハリは冗談を言いながら、女の子を泣き止ませる良い方法があるとマスターの耳元で話しかけました。 その内容にマスターはマタ・ハリに本当か尋ねますが、マタ・ハリは大丈夫とでも言う様に指で丸を作るだけです。 マスターはなんだか乗せられてるような気がしながら、リリイの顔を上げさせるとアルト

リアがデコピンをしたところを指で撫でると、顔を近づけ

「……………え？」

「……………え？」

「……………はい？」

「ああーそれ私の子供達にもやってあげたことあるなあ……………」

「ふふふ、躊躇なくやる所もマスターの良い所よね」

再び食堂が静寂に包まれます。突然のマスターのデコチューにマタ・ハリとブー
 ディカの二名以外反応が遅れ、そして大爆発が起きました。

「いま、マスターさん私のおでこにキスを……………うーん」

「んなんなんなな！ 何やってんのアンタ!? ロリコン！ 変態！ 色欲魔人ー!!」

「おかーさん、わたしたちにもー」

「私にも！ ずるいのだわ！ ずるいのだわ！」

「旦那様ますたあああああ先ほどの行為はいつたいいいいいい!？」

「母は悲しいです……………まさか本当に我が子が幼子に……………これは早急に再教育を……………」

「おでこにですか……………たしかにそこになら毒も……………」

「……………!!」

ジャンヌ・リリイは確かに泣き止みましたが顔を沸騰させて気絶し、オルタの方は顔

を真つ赤にしなから旗でマスターの頭を叩きだし、二名の幼女がデコを広げてぴよんぴよんマスターの周りと飛び跳ね周り、二名のサーヴァントからは身以外の危険を感じる視線を受け、一名からは毒々しい視線を受けました。男性サーヴァントは笑いながらその光景を見つめ酒の肴にしています。

何時もと変わらぬ、オチにマスターは溜息をつきながら今日も平和だと現実逃避をするしかありませんでした。

マスターの明日はどちらでしょうか？

カルデアに神様を求めるのは間違っているだろうか？

「じゃあ私は、ここからこっちを頂くわね」

金星の女神がパイの表面をナイフで軽くなぞって線引きをし、傷つけた部分の内側を自分の物だという様にナイフで軽く叩いた。

これでも譲歩をしたのだと言う割にはパイの三分の二以上を主張しており、それを見て他の女神達は困ったように首を傾げる。

「んー、それじゃあ皆に持っていく分が無くなっちゃうのよねー、ここがデメテルちゃんの方、ここがアテネちゃん、ここがヘステイアちゃんでー……」

すると月の女神が金星の女神が引いた線を見無視して、皆のお土産にと次々とパイに線を引き始める。結果金星の女神が引いた時よりもさらに凶々しくパイを占領することになり、更に女神たちは唸りながら首を傾げてしまう。

「オー！ それじゃあ私の分が無くなってしまっデース！ うーん、私は一緒にいられるだけで十分ですから……よし！ このぐらいたれば満足かしら？」

「ちよつと!? なんだか遠慮している風にして半分以上持って行っているじゃない!」

「そっちは最初に三分の二も主張していいマース!」

金星の女神と南国の女神が言い争っている間に、女神ではないが冥界代表として冥界のざぎーん女王がパイの中心部分を円で囲むようにナイフで傷つけてこれでどうかと提案した。

「私としては、量より質を選びたい所存ですね。これがただ一つの物だというのであれば特に……」

「ふーん、一番美味しい所を持っていくってわけ。どこの冥界も空気が読めないというか大胆というか……」

「そうよね、それが出来れば最初からこんな不毛な話し合っていないもの」

「え？　え？」

「ハデス並に……いやあれは大人しかったから、うん！　兄さん並みに空気が読めないわね！」

お前に言われちゃおしまいだ、と月の女神に他の女神は何とも言えない目線を送るが当の月の女神は気付く様子もなくニコニコしている。なんだかんだでこの女神が一番フリーダムである。ざぎーん女王は女神トークに着いていけずもつと円を小さくした方が良かったのだろうかと思ってしまった。

「馬鹿馬鹿しい……こんな仲良しごっこをしながらいざとなったら一人も約束など守る気などありはしないくせに。『女神同盟』でもあるまいし……皆時が来ればこうする

魂胆なのだろう?」

「え? そうなのですか?」

すると何処からともなく現れた一人の蛇の女神がパイを持ち上げ、勢いよく齧り付く。パイの中身が飛び出し、その口を汚すのも気にせずそのまま食べ続け、蛇の女神はついにそのパイを食い尽くす。満足そうに口元を舐めながら嗤うような視線を他の女神たちに向ける。

「ふむ、美味だ。このパイのように彼奴もさぞ美味だと良いのだが……なあ?」

「え? ……え、え?」

蛇の女神が口を歪めると、他の女神達も愉しそうに笑った。困惑しているざざーん女王をよそに、誰もいない食堂に美しく恐ろしい笑い声だけが渦巻いていた。

リズムよく包丁がまな板に当たる音が聞こえ、鍋からはぐつぐつと何かが煮える音、フライパンからは香ばしい香りと共に肉がジューシーに焼ける音が聞こえ、それを聴く者はもうすぐ夕餉に近いことに気が付き、その鳴る腹の音と共に料理が出来上がることを待ち望む。

「ああ、フライパンの肉汁は取ってくれると助かる、ソースに使えるからな。それとそ

このボウルに卵を二個ほど落としておいてくれ、ああ卵白は別にして」

「さーてと、パイの調子はどうかなく……うん、このままあともうちょっととてここか、牛肉の煮込みはどうかなあ」

「……ああ、美味しい出汁がでています。エネミーの骨にも旨味はあるのですね……

さてと、お魚の方はどうかしら、塩で揉んでおいたから味は出ていると思うのだけれど」
お馴染みカルデア食堂は、今日は珍しくカルデアのお母さんたち大集合で料理を作っている最中であつた。和と洋、それに中華となんでもござれのフルコースのバイキング形式、基本的に当番以外の者は作りたいときに厨房を利用して良いことになっているので、たまたま気分が乗つた者達が集まるところやつて皆で料理を作つたりするのだ。

次々に作り出される料理の数々にもう待ちきれないというサーヴァントたちが一足先に食堂の席についており、アルトリアシリーズは回転する中華テーブルに座りながら他のアルトリアを目で牽制している。まるで仕留めた獲物を取り合うライオンの様である。

「あそこは夕食毎に争っているが、何か因縁でもあるのか？」

「……………」

「サバンナの飢えたライオン？　なんだそれは……？」

そんな料理が出来上がるごとに昂るブリテンライオンたちを遠目で見ながら、獅子の

耳と尻尾を持つ狩人、アタランテはカルデアのマスターと共に夕食が出来上がる時間を待っていた。

近頃マスターは戦闘時のあらゆるサーヴァントとの組み合わせに対応できるようにするために、戦闘時のサーヴァントの行動を一つ一つ改めて把握する目的で、それぞれのサーヴァントと二人だけでじっくりと時間をかけて戦闘訓練を行っていた。

今日はアタランテとの訓練であり、丁度夕飯の時間も近かったのでマスターは夕飯でも一緒にどうかとお誘いしたのだ。それにアタランテは二つ返事で了承し、共にカルデアの食堂へと来たのだった。

普通は男性には見向きもしないアタランテが自分の誘いに快く答えてくれたことに、マスターはアタランテから信頼されているみたいでなんだか口元がにやけてくるのを感じながら、手元の資料へと目を通す。資料には今日アタランテと訓練した際のデータが全て載っており、マスターはこのデータと実際訓練した際の感覚を頭の中で組み合わせながら戦闘の際に切る選択肢カドを作っていくのだ。

「それは、今日私と訓練した時の物か？　どれ、私にも見せてみる」

「？」

「見て分かるのかと？　ふつ、こう見えても私はアルゴナウタイの中では頭が切れる方だったのだぞ？　それこそイドモンやアスクレピオスには敵わなかったが……この程

度の書物……など……造作も……」

そういつてマスターが持っている書類を横から覗いてみるが、書類に書いてあるのはAやらBやらQやらの単語に良く分からない数字の羅列、それにマスターのメモが乱雑に書かれているだけで、まるで一見すると子供の落書きの様であった。

「……むう。なんだこれは、子供の落書きか……？」

「？」

「んっ！ 何だその顔は！ どちらかと言うとこれは汝の書き方の問題だろう！

もつと見せてみる！」

アタランテが体ごとマスターへと近づいてきて、書類へと手を伸ばしてきた。アタランテの美しい髪がマスターの頬を撫で、森の匂いが鼻孔をくすぐる。あんなに強力な矢を打ち出している手とは思えないほど柔らかい手がマスターの手に重なり、彼女の翠玉のような目がその美しい顔ごとマスターの目の前へとやってくる。

「」

その美しさにマスターはしばし見惚れる。目を離そうとしても離せない、マスターの暗号めいた資料に集中しているその横顔の美しさは女神の様であり、森の狩人とは思えないほど気品に満ち溢れていた。

「……？ 私の顔に何かついてるのか？」

「!!」

マスターの視線に気付いたのか、マスターを見つめ返すアタランテ。マスターは首を勢いよく横に振りながら赤くなった顔をごまかすように、暑がるふりをしながら手を仰いで顔に風を送る。目があつちこつちにせわしく動いており、誰がどう見ても三文役者である。シェイクスピアが見たらさぞ大笑いすることであろう。

「そうか、ならばあまり熱のこもった視線を送ってくれるな。私も、その、なんだ、羞恥心ぐらいあるのではな」

「……………」

そういつてそっぽを向くアタランテ。ほんのり赤くなっているアタランテの頬とピクピクと動く獣耳を見て、魚のように口をパクパクさせながら顔をアタランテより顔を真つ赤にしていくマスター。そういう反応はずるいと思う。マスターだって健全な男子なのだ。

「……お前らそんなラブコメ今どきの高校生でもやらな——」

「マスター、別の席へ移ろう。此処の席はどうも熊に呪われているらしい」

「……………」

「ちよちよちよつとまって！　せめてセリフぐらいは最後まで言わせて!!」

と、そんな二人の間に割り込んできたのはカルデアマスコット選手権で不名誉の最下

位に下り詰めたクマか人か分からない生モノ、ギリシャ神話伝説の狩人であるはずのオリオンである。因みに人気としては水着を着ていた時のマリー・アントワネットにくつついていたカニより順位が下である。何時もはアルテミスと一緒にいるのが今日は珍しく一人であった。テーブルの上にはちよこんと座る姿は人形みたいだが、なんだか可愛くないのがこのクマの不思議な所であった。

「？」

「アルテミスはどこかかって？ いやそれが昨日から姿が見えなくてな、それでてつきりお前さん達のところでもなくでもない事やってるんじゃないかと……」

「アルテミス様……」

汗っぽい液体を額から出しながら溜息をつくオリオンと、遠い目をしながら胃を押さえているアタランテ。女神様の気まぐれで気苦労が絶えないサーヴァントの二号と三号の姿がそこにあった。因みに一号はメドゥーサさん

「とにかく、アイツが関わってないんなら大丈夫か……どうアタランテちゃんお茶でも」「否、断る。止めて欲しい」

「うん、分かってた……はい！ そのお嬢ちゃん一緒にお茶しない？」

「申し訳ありませんが私はライオンの方が好みなので……」

アルテミスがいないとわかるや、速攻で女性に声をかけていくオリオン。　　こういう

色を好む所は英雄らしいが、いかんせんクマなので皆何とも言えない顔をしてスルーしていく。　　とうか喋るクマっぽい人形とお茶しないかと言われて「はい、いきまず」と言える女性はナーサリー・ライムぐらいしかいないだろう。　　そのナーサリーもオリオンをお茶会の眠りねずみぐらいにしか思っていない――

「やあその南国風のお姉さん、俺と一緒に一夜の思い出でも」

「あら可愛いクマさん。……つてあら？　あらあら！」

「おお!?　もしかして脈あり!?　おねーさん！　その胸で抱きしめて！　ギリシヤの果てまで！」

オリオンの方を向いて目を輝かせる南国風のお姉さんに、久々にロマンチックな雰囲気を感じて「やっぱり、熊になつてもいけるじゃん！　オレ！」と嬉しさのあまり少しばかり涙目になりながらお姉さんの豊満な胸に飛びつくように、オリオンはテーブルから飛び出す。　　まさに羽の生えた気分なのであろう。

「こんなところに居たんですネー！　マスター！　チャオー！」

「ふっ、まあそんなところだと思つたぜ……ぬわーっ！」

が、当の南国のお姉さんは飛びついてくるオリオンを華麗にスルーすると、そのままマスターの元へとタツクルするように抱き着きに行つた。　　すれ違う様に飛んだオリオンは正に太陽に近づきすぎたイカロスのようにただ下へと真つ逆様。　　その体の物

理的柔らかさで何回かバウンドして床へと転がると、丁度食堂に来ていたアステリオスに知らず知らずに踏みつぶされてしまった。アルテミスの罰は本人がいらない所でも健在らしい。

「ずっと探してました！ もう、どこ行ってもマスター居ませんし、私、ここに来たばかりで、しかも森と違って同じ景色が続いてるから迷ってしまいマース。でも会えてよかつたわ！ さ、私にマスター成分を補給させてくださいね、ソフーフ！」

「!?!」

眩しいばかりの笑顔でマスターに抱き着くのは、南国の部族のような出で立ちの大人びた長身の女性、ケツアル・コアトルであった。最近召喚に応じたサーヴァントであり、アルテミスとイシユタルに続いて三人目の神霊系サーヴァントである。太陽神の名に恥じない、まさに誰にでも平等に降り注ぐ太陽のように公平で、優しく、素晴らしい包容力を持つカルデアにはあまり居なかったお姉さん系のサーヴァントである。

そして何処かの過去もしくは未来で縁があったのかケツアルはマスターをえらく気に入っており「本人いわく、「秩序で、正義で、一生懸命とかお姉さんのツボすぎて反則デース！」らしい」スキンシップ激しめでマスターと接するので、どこぞの母や蛇娘が黙ってはいない。

……のだが、霊格を落としているとしても本人は女神。あの恐るべし怪異殺しの自

称母と正面から殴り合える、というカルチャリブレ対古武道の総合格闘技戦になって良
い試合してしまうほど強い。なのでカルデアサーヴァントの間ではマスター争奪戦
に強敵が乱入してきたと噂になっていた。

「!?!」

「もう、そんなに恥ずかしがることはありません！　ンフフ、そんなに暴れられると

……んーむっ」

「?!?!?!」

「えへへ、こんな風に偶然マスターの頬に唇が当たってしまったいマース！　ええ、偶然に
！」

ケツアルから頬に思いつきりのキスを食らい頭と耳から沸騰したやかんのように湯
気を出しながら固まるマスター。カルデアではマスターに関しては余計な諍いを起
こさないために「周りを挑発するような行為は禁止」と一種の協定をサーヴァントたち
は結んでいるのだが、そこは神様、そんなことは知らぬとばかりに周りに誰が居ようが
平然と抱き着き、あまつさえキスである。思いつき周りを挑発する行為に当然、良
く思わないサーヴァントたちが出てくる。

「……それくらいにしてもらおう。私とマスターはこれから今後の戦略について話し
あわなければならぬのでな」

明らかに不機嫌な顔を隠しきれていないアタランテが、マスターをケツアルの拘束から無理矢理引つ張り出す。マスターはまだ放心状態であり、アタランテが頬をつねったりひっぱたりして何とか元に戻そうとしている。

一方のケツアルはマスターを取られたことにはあまり気にせず、その様子を面白がりながら、厨房から真直ぐ喉に向けて飛んできた包丁を指で挟むようにして受け止めていた。厨房から漏れ出す濃い殺気に物騒な笑顔で答えながら指を鳴らす姿は、人を激しく照らしつける太陽神の激しい一面を思わせる。

「あらあら、まあまあ……私としたことが手が滑ってしまいました……お怪我、ありませんでした？」

「貴女、包容力があるように見せているけど実際は逆ですね。母性があり過ぎるのも困りものデース……どんな子供も幼年期の終わりを迎える物ですよ？」

「そもそも、婚姻前の男女がそんなに身をくっ付けあうものではありません。はしたないですよ？」

「オウ、都合の悪い話は聞こえないようになってマース……そもそもあなただって良くマスターに抱き着いているデース？」

「私は母なので問題ありません」

「母って便利デース……あ、これ返しマース」

厨房から聞こえるおどろおどろしい声に向つて若干呆れ気味に包丁を投げ返すケツアル、途中夕食前だというのにこつそりと冷蔵庫からスイーツを盗もうとしていた茨木の頭を掠めていき、それに驚いて声を上げてしまった茨木はルーラー達に捕まり別室へと連れて行かれてしまった。おそらく歯医者ボルグの刑であろう、南無。

「マスターさーん？ いるー？ つてあらダーリン、そんなところでお昼寝？」

「うん、ちよつとね。 天日干しでもしようかなつて……」

「……、室内よね？」

しばらくして、床でぺちやんこになった居るオリオンを頭に乘せてふわふわとマスターの所へやつてきたのは月の女神のアルテミスである。手には何かのファイルを

持つており、なんだかニコニコしてマスターを見ている。恋愛脳スライツな月の女神になんだ

か嫌な予感を感じるオリオンとアタラシテから散々引つ張られて頬が赤くなつてい

るマスター。女神様と言うのは大抵碌な事をしないのだ。

「アルテミス様、その手に持つている物は……？」

「そうそう！ マスターに見せたいものがあつたの！」

「また、レイシフトでハネムーン行きたいとか言うんじやないよな？」

「ちーがーいーまーす！ ねえマスター！ お見合いしてみない？」

「……？」

「は？」

「は……？」

食堂が一瞬で静寂に包まれる。月の女神の爆弾発言にケツアルでさえも目を丸くしてアルテミスを見ている。とうとうか神様がお見合い進めてくるってどうなのか、それってもはや一種の神託ではないのだろうか。

皆が唖然としている中、ただ一人アルテミスは手に持っていたファイルをマスターに見せてくる。

「ついこの前、あつちで集まりがあつたからついでに皆にマスターの事を紹介してみたの！ そしたら意外に皆食いついてきたっていうか、一度会ってやってもいいって

……」

「ちよ、ちよつとまった……なに？ 誰に紹介したのお前？」

「えーつと、アテナちゃんでしょ、ヘステイアちゃんでしょ、ペルちゃんでしょそれに」

「まてまてまて、待つて、ちよつと待つて。 何？ え？ もしかして集まりつてオリュンポスの集まりだったの？ というか最後のペルちゃんつてもしかしてペルセポネ？」

「ええ！ 特にアテナちゃんのツボに入っちゃったらしくて、ぜひとも自分の神殿につ

て」

「お前はマスターを星座にする気なの!?　　とうかアテナはやめろよ……お前ら処女神全員恋愛脳スレイツなんだから絶対ロクでもない事起きちゃうって……起きちゃった人が此処にいるもの……」

「アテナ様までこうなのか……?」

アタランテが絶望に震える中、遠くでメドゥーサとヘクトールが物凄い形相でこちらを凝視して、腕を勢いよくバツ字にクロスさせている。まるで絶対に行くなと訴えているようであった。何か生前に因縁でもあったのだろうか。

「……………」

「まあまあ、ちゃんと写真も持ってきているんだから!　見てみて、アテナちゃんとか超美人!」

「なんだかお見合い勧めてくるおばさんみたいになつてるぶぎゆる!」

「オウ、なんだか気の強そうな美人さんデース!　知ってる、知ってるわ!　これイシユタルちゃんと同じタイプね!　つんでれつて言うんでしょ?」

禁句を呟いたオリオンを潰しながら、アルテミスがファイルの中から写真を取り出すと、そこにはケツアルが感嘆の声を漏らすほどの輝かしい美人が写っていた。どれほど輝かしいかと言うと、輝かしすぎて写真から極光が漏れだしてマスターには写真が

光っているようにしか見えないほどに輝かしい。

「阿呆！　これ権能ありありの状態じゃねえか！　マスターもあまり見るなよ、目がつぶれるぞー」

「えー、せっかく撮ってきたのにー」

慌ててオリオンが写真を裏返しにして、アルテミスに珍しく説教をする。当のアルテミスはつまらなそうにブーブー言うだけであるが、神様と出会って星座になっちゃったオリオンからすればなんとしても阻止しなければならぬ事案であった。下手すればマスターの魂は永遠に囚われてしまうかもしれないのだ。実際アルテミスはある恋した少年を氷漬けにしている。神様なんて基本人間の都合なんて気にしない。

「うーん……さんねーん。約束通りデートしないと怒っちゃうからねダーリンー」
「へいへい、お安い御用ですって……はあ……」

その後数十分にもわたる決死のオリオンの説得に、渋々折れるアルテミス。遠くから見ていたヘラクレスもほつと肩を下ろす。とりあえずオリオンのおかげでマスターのオリオンポス行きはマスターが生きている間は中止になったわけではあるが、マスターは自分が死んでから魂は果たしてどこに行くことになるのか、少しばかり不安になった出来事であった。

「まあ、マスターが死んじやってから魂持っていつちやえはいんだしー」

「だからそれを止めなさいって！」
訂正、大きく不安になった出来事であった。

「ねえ、無銘の……エミヤだっけ。じゃあエミヤ君、ちよつとお願いがあるんだけど」
「君はいらん、そういう年でもないのね。……何の用だ？」

食堂がアルテミスとオリオンの夫婦漫才で騒がしくなっている頃、金星の女神であるイシユタルが厨房へと顔を出していた。隣では暴走しかけている頼光を必死にブレーキが止めており、イシユタルはそれを見て見ぬふりをしながらエミヤにある一つの注文オーダーをしていた。

「パイ？ 作れるが、そんな大きなものを一人で食べるつもりかね？ 体型的にもよろしくないと思うが……」

「金星投げつけるわよ？ 違うわよ、ちよつとみんなで分けるつもりなの」

「分ける？ 君がか？ ……何を企んでいる？」

「……べつにいい？」

怪しい笑みを浮かべる様子に、エミヤは似た誰かを思い出してすこし頭痛を覚えた。このごろ養父といい、義母に、義妹に、果てにはタイガーなジャガーまでもがカルデアに召喚されて絶賛胃痛中である。

「ただ、話し合いをするだけよ。誰が何処を取るかをね」

そういつて一人笑う金星の女神。なにかロクでもないことを考えていることは明白だが、悲しいかな、女神は基本的に自分勝手、人間が反抗したって無駄なのである。

——マスターの死後はどっちだ。

泣けなかつた少年の話。

ベルの心地よい音が廊下に響いています。様々な色の明かりが点いたり消えたりしています。大きなツリーに様々な飾りがぶら下がり、大きな星がてっぺんで光り輝いて、その下にはたくさんのプレゼント箱。見る物すべてが輝き、見るすべての者が輝く笑顔になる素敵な一日。

今日は素敵なクリスマス。大人も子供もおねーさんも、皆が楽しみにしていた一日なのです。

日々人理のためにその身を費やすカルデアも、今日ばかりは皆お休み。食堂ではクリスマスパーティーとして様々な豪華な料理が並び、プレゼントがならんでいます。日々休む暇のなかつたカルデア職員達も皆今日ばかりはお休み。飲むことを自重していたお酒などを酌み交わし、笑顔で言葉を交わしています。そこには英霊だつて人間だつて関係ありませんでした。

だつて世界が救われたのです。これ以上の喜びが何処にありましようか。空の光輪は無くなり、地表を覆つた炎も跡形もなく消えました。魔術教会からの連絡に

よって人間の生存も確認されました。正にカルデアは「未来を取り戻す」ことに成功したのです。

「二年。長い人生から見るとたったの一年だが、忘れる事の出来ないぐらい長い、長い一年だったな」

「実際長い人生では人類を救うなんて経験は出来ないしな」

「この作戦が成功したから、言えるのかもしれないけど。楽しかったです、とても楽しかったです。先輩たちが居て、英霊の皆さんが居て、なんだかちつとも怖くなかったです。不思議ですよね」

「……そうだな、楽しかった。失った物は返らず、払われた犠牲は私達の両手ではすくいきれないほどだった。それでも言える、私達がやってきたことは無駄ではなかったのだと。あの少年が歩いてきた旅路は全く無駄ではなかったのだと」

白衣のカルデア職員がお酒の入ったグラスを掲げると、周りの職員たちもそれに倣う様にみなグラスを掲げました。部屋がしんと静まり返りました。英霊でさえも職員に続きグラスを掲げる者もいました。

「人類を救ったグランドマスター、そしてその相棒マシユに。……そして勇ましく散っていった友人たちと、所長。そして愛すべき掛け替えのない我が友、ロマンに」

「乾杯」

「乾杯」

いなくなつてしまつた人たちの魂の平穩を祈るようにカルデア職員の皆が酒を酌み交わします。無くなつてしまつた物は多く、それを埋めることは出来ないけれど、それに引きずられてしまうほど彼らは弱くはありませんでした。乾杯が終わつた後は皆また笑顔で、パーティーを再開します。今日は一年に一度のクリスマス、ここに来ることが出来なかつた人たちの分まで楽しんでやると、部屋には笑い声が響きます。

「あ、そういえば明日からはカルデアの復旧作業が待つているからな」

「あつ……思い出したくない事を……」

「ふむ、堅物女史のこういう所は尊敬できるな」

「ある意味、世界を救うより辛い仕事ですね……」

思い出したくない事を言われたように頭を抱えるカルデアの職員たち。しかしながら日曜日の後には月曜日が来る、これも人理の一つです。カルデア職員たちは世界を救つても自分たちの仕事は変わらない事を少しばかり誇りに思いながらお酒を次々と開けていくのでした。

「先輩？ いらつしやいますか？ 皆さんお待ちかねですよ？」

食堂でのクリスマスパーティーが始まっている中、マシユは何時まで経っても食堂に
来ないマスターを心配に思いマスターの部屋へと足を運んでいました。人類を救っ
たのに、マスターに何かあったらそれこそマシユにとつては人類が減びることと同義な
のです。この間「何もかもが終わった後一人ひっそりと力尽きるマツチ売り系主人
公」の本をアンデルセンたちから読まされたのもあつて更にそれがマシユに不安を与え
ました。

「せんぱーい？ 入りますよー？」

何回ノックしても返事が無いのでマシユはどうとう心配でたまらなくなり、マスター
の部屋のマスターキーを使って部屋の中へと入っていききました。

部屋は明かりはついているものの部屋は至つて静かで、とても部屋にマスターがいる
ようには見えませんでした。

「先輩？ いらつしやるのですか？ せんぱつ……」

「……………」

「…………お休み中だったのでですね」

マスターはベットではなく、部屋の隅に置いてあるソファーに体を横にしてひっそり
と寝ている途中でした。無防備に寝顔を晒している姿は、マシユの母性本能を刺激す
るには十分であり、マシユはちよつとドキドキとしながらマスターへと近づいていきま

した。

「さすが先輩、ハサンさん達の様な気配遮断スキルをお持ちなのです、まったく気づきませんでした」

そういつてマシユは寝ているマスターを起こさぬように細心の注意を払いながら頬を突き始めました。マスターは突かれるたびに寝ているフオウ君みたいに耳をピクピクと動かし、くすぐったいのかマシユの突つつきから逃れる様に顔を動かします。

「せんぱーい、起きてくださいーい……皆さんが待つてますよー……」

なんだか癖になつてきたマシユが突つつく速度を上げますがマスターは一向に起きる気配はありません。元々マスターは眠りが深く、一度眠ると中々起きないのです。

ダ・ウインちゃんには、多くのサーヴァントと契約したせいでサーヴァントとの夢を見る時間が増えているせいだと言っていました、寝るときは廊下だろうが管制室の中でも気にせず何処でも寝てしまうマスターなのであまり関係は無いのではないかとサーヴァント達の間で噂されていました。

「ふふつ、マスターは本当に寝坊助さんなのです……こんなに突いても起きないなんひゃっ!？」

「……」

突つついてくる指が流石煩わしくなったのか、マスターが大きく首を振りました。

すると、突っつこうとしていたマシユの指が綺麗にマスターの口へと向かってしまい、結果マスターがマシユの指を啜えてしまいました。マスターの柔らかく暖かい舌の感触がマシユの指を包みます。

「せ、先輩い！ あわ、あわわわわわわ!?」

飴をなめる夢でも見ているのでしょうか、そのままマスターの舌はマシユの指を味わう様に絡んできます。何回も何回も丹念にマシユの指を綺麗にしようとするように舌がマシユの指を舐め回すので、味わったことのない感覚にマシユは指を引き抜こうとせずにそのままマスターの口の中へ指を入れたままにしてしまいます。

「先輩、そんな……はあ……」

マシユは自分の指を先輩に舐めさせているという背徳的な行為になんだか背筋がゾクゾクするような感覚を感じ、頬が上気してきていました。惜しみながらも指を引き抜くと、彼の唾液が糸を引き、マシユの濡れた指が艶やかに光っていました。なんだかマシユは自分の中のビーストがデンジャラスに昂ってくるのを感じて、ちやんとマスターを起こして皆の所へ戻ろうと考えるのですが、彼の、マスターの唇から目が離せません。先ほどまで自分の指が入っていたマスターの唇。

——もしも、もしも先ほどの状況が指ではなく■だったら……?」

マシユの体に電流が流れたかのように体が震えます。やっではいけない事だと感

じてはいるのですが、いけないと分かっているほど何故か体の抑えが利かなくなってきました。

「せ、先輩？ 起きてください、起きないと■■■■しちゃいますよ……？」

自分の心臓が跳ねる音を聞きながらマシユはゆっくりとマスターの顔へと自分の顔を近づけていき、顔が熱くなってくるのを感じながら蕩けた目で舌なめずり。

その様子と言ったらマタ・ハリも絶賛の妖絶さありましたが、この部屋にはマスター以外誰もおらず、そのマスターも寝ていて気付いてはいません。――勿体ないと思うべきか、寝ていてよかったと思うべきか――

「先輩？ 本当にしてしまいますよ……？」

デンジャラスピースト値臨界点。いまだに寝息を立てているマスターの唇に向かってマシユはそつと唇を近づけていきます、時間をかけながらも唇と唇が近づいていき、そして――

「マシユー？ マスター？ 遅いからお姉さん心配……して……」

二人があまりにも遅いので心配して部屋まで来たブーティカによつて、触れる寸前で止まりました。突然の出来事に固まるマシユに、ブーティカは二人の状況を見て、少しばかり冷や汗を流すと

「うん、そうだもんね！ 二人ともお年頃だし！ いや、その邪魔したね！ ごめん、ご

数分後、マスターとマシユの二人は食堂に向かう為廊下を歩いていました。急に起こされたマスターはなんだか寝ぼけ眼でマシユの方はなぜか顔を赤くしながら早足で歩いていました。二人が歩く廊下は所々が損壊しており、最終決戦の際の激しさを思わせませす。

「そういうえば、先輩はなぜベットではなくソファアで眠っていたのですか？ あそこは先輩の身長では少々窮屈では？」

歩きながらふとマシユは疑問を口にします。マスターの部屋では、ソファアは部屋の隅にあり、マスターは腰を掛けるにも近くにあるベットを使っていましたのでマシユはマスターがわざわざベットよりも遠くにあるソファアで寝ていたのがマシユには不思議なものでした。

「……………」

マスターは言葉を詰まらせ、少し顔を上げてマシユから顔を見られないようにすると、細く小さな声でこう言いました。

「あそこで、よく座ってたから」

マシユが驚いた様にマスターの方を向きます。マシユからはマスターの表情をうかがうことは出来ませんでした。手を必死に握りしめ、こみ上げる物を必死に抑えているかの様でした。

マシユはマスターに何と言えいいのか分かりませんでした。彼のこんな姿を見るのはこの長い旅で初めてだったのです。

「……………」

「先輩……………」

マスターは不意に立ち止まると、こちらを見ないようにはお願いしました。食堂の賑やかな声が聞こえてくる中、ただ二人は誰もいない廊下で立ち止まっていました。

マシユにとってマスターはどんな時もまっすぐで、笑いたいときに笑って、人を助けることも、助けを求めることにも躊躇が無い人でした。そんなマスターがただ一人で涙を流すまいと肩を震わせている。それは誰も見たことが無い、サーヴァントたちのマスターでもマシユにとっての先輩でもなく、彼というただの少年の年相応の姿でした。

「ごめん、マシユ。顔を洗ってくるよ」

震える声で何とか笑顔を作り出してマシユにそう言うと、少年は食堂から遠ざかるように足を向け歩き始めました。マシユにはそれがとても、とても小さい背中に見えました。

彼は強い人です、きつと明日には彼は一人で立ち直って皆の前でいつもの様に、いつもの笑顔で現れる事でしょう、別れも自分の強さに変えて彼は更に成長するでしょう。

だがそれでいいのかとマシユは思いました、彼にこのまま涙を堪えさせていいのか。
彼もまた、自分と同じように弱音を押し殺して旅をしてきたのではないのか。

「……………っ！」

「……………？」

そう思つた瞬間、マシユは少年の手を握っていました。少年は驚いた様にマシユから繋がれている手を見つめています。

「あ……………その、私は、失う悲しみにどちらが辛いとかないと思うんです。確かにドクターと私はある一種の親子の様な絆で繋がっていました、彼が人類を救うためその身を犠牲にしたと聞いて、酷い、酷い悲しみに覆われました」

何とか自分の中で言葉を組み立てて、マシユは自分が言いたいことを目の前の少年へと伝えようとします。

「でも、だからって、先輩が涙を堪える必要なんてないんです。私のために涙を堪える必要なんてないんです」

多分、きつと、この少年はドクターロマンの事だけではなく、旅の始まり、燃え盛る炎の中マシユの手を握り微笑んだ時からマシユを不安にさせないように涙を堪えているのです。

荒れ狂う嵐の様な恐怖が、理不尽なまでの強大な暴力が、心にこびり付く泥の様な悪

意が少年を襲つてもマシユの心を曇らせないために、誰も見ていない夜でさえ涙を流しはしなかったのです。それが掛け替えのない友人を失つたとしても。

「きつと、先輩は最初から私のために涙を堪えてくれたのでしよう、きつとドクターのことだつて私がこれ以上悲しまないために笑おうとしてくれたのでしよう」

「！」

否定しようとする少年をマシユは優しく抱きしめました。抱きしめられた少年は開いた両手を何処に持つていくか迷つて、ゆつくりとマシユを抱きしめ返します、薄暗い廊下で二つの影が一つになりました。

「ありがとう……きつと私はあなたがいたからこの旅を続けられた。だから次は私の番……どうか私にあなたの涙を受け止めさせて……」

だからこそマシユはこの目の前にいる愛しい少年の涙の受け皿になりたいと思ひました。マシユの抱きしめる力が強くなり、二人の体温がお互いを温めました。

マシユの言葉に少年は目を見開くと、しばらくしてぽつりと言葉を零していきました。

「？」

「はい、いっぱい泣いてください。服が濡れる事なんて気にしません」

「？」

「いいえ、男の人だつて泣くときは泣きます。可笑しくなんかありません。この前だつて黒髭さんがナイチンゲールさんから部屋を消毒されて泣いていました」

「？」

「はい、誰にも言つたりしません。そんなことはしませんとも」

「？」

「いいえ、嫌いになつたりしません。私は先輩の事が大好きですから……」

その言葉を皮切りに、一つ、また一つと少年の瞳から涙が零れ落ちていききました。

やがてそれは大粒になつてマシユの服を濡らしてもマシユは彼を抱きしめることを止めることはしませんでした。その泣き声は食堂からの喧騒で消えてしまふぐらい小さな声でしたがマシユは一つも聞き逃すこともなく彼の背中を撫でながら相槌を打ちました。

それは、彼の一年分の涙でした。泣きたくても一人の少女のために必死でこらえてきた一年分の涙でした。そして今はその少女がその涙を受け止めていました。

特異点の事、そこ出会つた人たちの事、倒してきた者達のこと、守れなかつた人たちの事、彼の喜びと怒り、楽しみと哀しみ、そして掛け替えのない友人の事が涙となつて少年から少女へと伝わっていき、その全てを流し終わるまで二人はずつと抱きしめあつていました。

「先輩、本当に大丈夫ですか？」

「！」

その後二人は食堂の前へと来ていました。泣き続けたマスターの眼は両目が真っ赤になつており誰が見ても心配することは必至ですが、マスターはそんなことは気にせず吹つ切れた笑顔でマシユに大丈夫だと答えました。

「？」

「服は大丈夫か、ですか？ 大丈夫です、少し濡れましたが、先輩の涙ですし先輩の泣き顔も見れたので全然気になんかしていません！」

「！」

「くすつ、分かつてます。 誰にも言つたりしません」

必死に懇願するマスターがマシユにはなんだか可笑しくて、マシユはくすくすと笑い始めました。 それを見てマスターは頬を膨らませますが、少し息をつくと自分も笑い始めました。

「……？」

「……はい、ドクターも先輩の泣き顔を見たかつたと言うに違いありません、あの人は笑うことと泣くことは同じくらい大事だと言っていましたから」

そういつて微笑むマシユと少し悲しげに微笑むマスター、マスターは散々泣いてやつとマシユの前で素直にドクターの事を悲しむことが出来たのでした。それはやつとマスターがロマンとの別れにマシユと向い合えた証拠でもありました。

「でも、ドクターが見てしまつたら笑つてしまふかもしれないですね。 凄いい泣きつぷりでしたから」

そういつて、またからかつてくるマシユ。 からかうのは無しだと言つているのに、ニコニコと笑いながらそんなのは知らぬとばかりです。 マシユとしては誰も知らないマスターの一面を知ることが出来て嬉しいのでしようが、このままでは先輩のメンツが潰れてしまつて困るので、マスターもお返しとばかりからかうことにしました。

「そういえばあの時、大好きつて言つてくれたけどあれは本当?」

「えっ?! ……あの、その……」

抱き合つていた時にマシユが言った言葉をすっかりと覚えていたマスターはお返しとばかりにニヤニヤと笑いながら問いかけます、問われたマシユの方はまさか覚えられていたとは思わず、顔を真っ赤にしてしどろもどろになつてしまいました。

「?」

「いえ! 嘘では……その……」

あれは安心させるための嘘だったのかーとわざと大げさに残念がるマスター。 そ

れを見てマシユはあたふたとするばかりです。少し意地が悪い気がしますが、先にか
らかつてきたのはあちらであり、マシユもからかわれていると気付いたら何時もの通り
焼きマシユマロになって食堂に入っていくだろうとマスターは高をくくっていました。
「が、今日のマシユは少しデンジャラスなビーストになっていたことにマスターは
気付いてはいませんでした。」

「……先輩、こつち向いてください」

「？」

急にマシユが真面目なトーンになったので何かと思ったマスターがマシユの方を向
くと、マシユはすぐ隣で何かを決心したような目をしてマスターを見上げていました。
「どうしたのかマスターが聴こうとすると、マシユは踵を上げて背伸びをし、マスター
の顔へ近づくと

「……んっー！」

「?!?!?!」

そのまま、目を閉じてマスターへ口づけをしました。やらかい唇の感触と、彼女の
香りがマスターを包みます。

いきなりの出来事に、ゆっくりと口を離して顔を赤くするマシユにマスターは何も言
えず顔を魔神柱の眼のように真っ赤にしながらマシユを見つめます。

「その、嘘じゃありませんからっ……大好きです……先輩……」

そのまま食堂へと顔を真っ赤にしながら入っていくマシユを呆然と見ながら、キスをされた唇を指でなぞるマスター。

なんだか、いろんな意味で今までの関係とはいられないような、そんな甘い春の訪れを一足先にマスターは感じていました。

マスターの明日はどちらでしょう。

マスター、帰省する。　　くお誘い編く

世界を救ったマスターである特別でもなんでもない只の一人の少年であり、礼装なしに魔術が使えない素人でありながら開位の贈られた魔術協会の異端児は今、町の中、一つの軒家の前に立っていた。

右手にはスーツケース、左手には愛する後輩の手とつながっている。

「先輩？　もうそろそろ……」

マシユが心配そうにマスターを見る。マスターはグランドオーダーに行くような緊張と共に覚悟を決め、そのインターホンを押した。

その家の表札にはマスターの苗字が書かれていた。

時は三日前に遡る。

人理が救われて、世界が平穏に保たれたことで英霊たちは自分の役目は終わりだと皆それぞれの場所に帰っていった。別れを言って帰る者、いつの間にか帰る者、手紙を残している者、それに――

「この頃ますたあ旦那様の様子が変と言うか、話しかけても上の空というか……マシユさんご存じありません？」

「えっ？ えーつと……何かあつたんだとおもいましゆ。 はい、何かが」

「むむ、その知ってるけど教えない的な言動……嘘ではないから余計に気になります。途中自分の名前を利用したのも憎いですね」

「あ、あはは……」

普通に帰らない者も存在した！ 帰らなかつたサーヴァントたちは普通に生活に溶け込みそれぞれ自由を満喫している。 と、いかマスターが結んだ縁とカルデアの召喚方法により普通に帰つたものも簡単にこつちに来られるらしく、感動的な別れをした後の翌日普通に居座っているサーヴァントだっている。 なんだかいろいろと台無しであつた。

「まあ、良しとしましょう……どうせ旦那様ますたあから直接聞けば良いことです、無論嘘は許しません」

「お、お手柔らかにしてあげてください」

平和になった世界の昼下がりが、マシユと意地でも残る組の清姫は共に廊下を歩いていた。 マスターの事では水と油と言うかそこに卵を入れてマヨネーズの様な関係の二人だが、マスターの事が絡まない二人は意外と仲良しである。 一緒にご飯だつて食べ

るし、一緒に女子怪、もとい女子会に参加したりする。

今日も廊下でばったり会った二人は、そのまま談笑しながら廊下を歩くことにしたのである。

因みに清姫はカルデア職員が選ぶ帰ってくださいサーヴァントランキング上位の猛者であるが、「強制送還したら井戸の中から意地でも単独顕現する」とクラスビーストのような事を言い出したため、マスターからの許可もあつて渋々カルデアに受け入れられている。嫌われているわけではない、ただ単純に魔術協会の人間と相性が悪すぎるだけなのである。

「マシユさんは時々でんじやらすびーすとになりますからね。本当はシールダーじゃなくてビーストっぽいクラスなのでは？」

「シールダーです！ あ、あれは先輩に、ダ・ヴィンチちゃんでしょうか」

ふとマシユが前を見るとマスターとダ・ヴィンチちゃんが何か話し合っている姿が見えた。マスターの手には何処かに旅行するかのよう大きなバッグを持っている。

「旦那様……っ！」

マスターを見つけると同時にパタパタと乙女らしい早足で、なぜか成人男性の全力疾走よりも早く移動する清姫。もはやテケテケといった効果音の方が正しいような気

がしてくるマシユであるが、このままでは清姫がマスターにまた迷惑をかけてしまうので疑問は隅に置いて清姫を追いかける。

「おお、マシユに清姫ちゃんじゃないか。君たちつてマスター君絡まないとすぐく仲良いよね」

「旦那様、今日もお元氣の様で嬉しいです」

「……………」

「私も元氣かと？ ……ええ、たった今元氣百倍になりました！ 私の身を案じてくださるなんてこれはもう婚約したと同義では!？」

「……………!？」

「ああ、間に合わなかった……………お話のお邪魔をしましてすいません」

「いいや、構わないよ。丁度マシユを探そうとしていたところだしね」

「私を……………ですか？」

蛇のようにマスターの腕に絡みついている清姫を引きはがしながら、マシユはダ・ヴィンチちゃんの言葉に首をかしげる。グランドオーダーも完了したし、身体検査もついこの前異常なしと報告されたので、しばらくは久しぶりの休息を満喫するようにとダ・ヴィンチちゃんから言われたばかりである、もしかしてまたデッサンのモデルだろうかと考えていると、ダ・ヴィンチは一つ咳をしてこう告げた。

「マスター君は、明日を持ってここカルデアを離れることになった」

「……………え？」

「ぴぎやつ!？」

ダ・ヴィンチちゃんから告げられた言葉に啞然とするマッシュ、清姫を引つ張ることも忘れてしまい、引つ張られていた清姫は顔から床にびたんと落つこちてしまった。

「それは、いったい……………」

「言葉通りだよ、彼は明日からここには居なくなるんだ。彼には家族がいて、元の日常がある」

「」

「そ、そうです。急すぎます！ もっと前から言ってくれても……………」

「それは……………まあ知ったら監禁してでも止めそうな人を何人か知ってるからねえ……………そこで伸びている蛇っ子とか」

いきなり告げられた事実のマッシュは、しどろもどろになりながらマスターを見つめます。その視線に気付いてもマスターは申し訳なさそうに目をそらすばかり。マッシュはもはや頭が空っぽで怒ればいいのか悲しめばいいのか分からなくなっていました。

「分かってくれるね、マッシュ。彼には一年間ずっと人理焼却の炎のせいで家族が無事

かどうかなんて分からなかったんだ。たまには顔を見せてあげなくちゃ」
「うう……先輩にも家族が……」

—— そうだ、先輩はここで生まれたわけではないのだ。

カルデアで生まれ育ったマシユはカルデアが家であり、世界であつた。だがマスターには元の家族がいて、その帰りを待つ両親がいる。マシユはその自分との違いを理解したが、なんだか心の穴がぽっかりと空くのを感じた。何時までも一緒なんておこがましいが、それでもマスターとはずっとずっと一緒に居れると思つていた自分が何処かにいたのだ。

「……そうですね、先輩だつて家族と一緒にの方が……」

心の穴が広がるのを感じながら自分を納得させていくマシユ。そうだ、彼には危険な世界は似合わない、もつと穏やかな世界で笑うべきだ。と無理矢理にでも納得させていく。

「じ、じゃあ、今日は送別会ですね！ 皆さんにばれてはいけませんから、ひっそりとして、私もがん、ば、り……」

「？」

何とか笑顔を作ろうとするが、どうも笑顔が作れない。まるで泣きそうな顔になる自分の顔を何とか笑顔に作り直そうとするが中々上手く行かない。これでは先輩が

安心して帰れない、そう思いながらもなぜかマシユは笑顔を作れなかった。心の穴が広がっていく。

「じ、じゃあ私は、これで……送別会の準備を……」

せめて泣き顔は見せないようにと、マスターを背にして走り去って行こうとするマシユ。マスターを見るとどんどん心の穴が広がっていく、マシユはなんだか風景がモノクロに見えてくるような気がした。色彩をくれた人が居なくなってしまうのだ、当然の事だろうとマシユは思いながらその場から走り去ろうとした。

「あー、まったまった！ ごめんごめん、なんだかい方向に美味しい感じに誤解してくれたので悪乗りしてしまった！」

「……へっ?」

と、慌てたダ・ヴィンチちゃんのストップがかかり、足を止めるマシユ。これ以上ここには居たくない気持ち強いが、自分が誤解をしていると言われてはマシユもそのまま走り去ることが出来なかった。

「確かにマスター君はカルデアを離れると言ったが、それは一時的、所謂帰省という物だよ」

「はい……? 帰省? カルデアを去るのでは?」

「ハハハ！ 何それそんなことしたらカルデアは三日として持たないよ!」

呆然として、ダ・ヴィンチちゃんをみるマシユ、広がった心の穴が急速に埋まっていた。ならば勘違いというの……

「じゃあ、先輩とずつとお別れなんてことは……」

「そんなの彼からお断りだろう?」

その言葉を聞いた瞬間、マシユはその場に座り込んで大きく息を吐き出す。勘違いをしていた恥ずかしさもあるが、マスターがまだ自分と一緒にいてくれると思っただけで心から安心したのだ。マシユの世界がまたカラフルに彩られていく。

「じゃあ、お別れと言つてもしばらくしたらまた会えるんですね。良かった……」

もうマシユには何の不安もなかった。確かに彼が行つてしまうことは少し寂しいが、また会えるのだ。それまでを楽しみにすればよいことだった。

「その事なんだけどね、まあここは彼から言つてもらおう」

へたり込んで安心しているマシユに向かわせるようにマスターの背中を押すダ・ヴィンチちゃん、なんだ気味が悪いぐらいニヤニヤしている。モナリザがニヤニヤするとこんな感じなのだろうか。

マシユの前に来たマスターは、少し顔を赤らめながら。一つ大きく咳をすると、マシユに向かっていくつか質問をしてきた。

「?」

「はい？ はい、美術館には興味があります、まだレイシフト以外ではどこにも行ったことがありませんから」

「？」

「は、はい。運動は苦手でしたが、運動自体は好きです。デミ・サーヴァントになってから運動能力が向上したので、さらに楽しむことが出来るようになりました。あの、先輩この質問には何の意味が……」

「？」

「日本は、好きですね。四季の変わり様が美しいですし、食べ物もおいしいと聞きます。それに、先輩の生まれた国ですから……あの先輩そろそろ……」

いきなり問われてくる意味のないような質問に、マシユは首をかしげながら答えています。人ごみは苦手か、電車は好きか、寒い所は大丈夫か。そんな質問が何個と飛び

出してきた後、マスターは緊張した顔でここからが本題だとマシユに質問をしてきた。

「……その、あるところに美術展が近くにある小さな一軒家があるんだけど。」

「……マシユは小さな家でも不満はない？」

「……！ はい、レイシフトで鍛えられてますから野宿だつて行けます」

不意にマシユはマスターの顔を見る。顔を赤くしながらも、何処か不安と期待の入り混じった目をしており、なにかの返事を待っている様であった。もしかして今まで

の質問は。

もしかして、もしかして、もしかして。心に花が開くのを感じる。

「……それで、そこには二人の夫婦が住んでいて、遠い所にアルバイトに行ったあの人の帰りを待つてるんだけど……マシユは人見知りする方？」

「いいえ、先輩がいればどんな人だって怖くありません」

——きつとそうだ、きつとそうだ。心に一本、また一本と花が咲いていく。

「……それで、そのある人は、向こうで知り合った先輩をその夫婦に紹介したい……というか、先輩に自分の住んでいる町を見せて上げたいと考えているんだけど……付いてきてくれる？」

「……っ！ はい、どこだつて先輩とお供します！ 連れて行ってください!!」

——心の中に花が咲き広がった。

目を輝かせて、マスターへと抱き着くマシユ。なんだか床から蛇が威嚇するような声が聞こえるが、今は聞こえないふりをする。

マスターは、嬉しそうにしているマシユを見て、少しほつとしながらマシユの頭を撫でる。なんだか床から蛇が威嚇するような声が聞こえるが、今は気にしない事にする。

「困みに、私もついていく。ちょっと調査があるからね」

その二人をニヤニヤ見つめながら、ダ・ヴィンチちゃんも何処からかバックを見せてける様に取り出した。なぜか宙に浮いている。

「調査？ 一体何を……」

「いや、なんとという偶然か。本当は私一人で調査に行こうと思ったんだがね。丁度彼の出身地の近くだったからさ」

「はい？ ダ・ヴィンチちゃんはどこに……」

「いやなに、ちよつと冬木に用があつてね！ あ、私の分お部屋もあるかな？」

「!?」

そういつてにやりと笑うダ・ヴィンチちゃん。いきなり増えた旅の仲間に、マシユはなんだかワクワクを隠しきれなくなっていた。マスターが生まれた町に行けるのだ。

—— マシユの旅は始まったばかり。

「静謐さん！ 旦那様は私達を置いて帰省することを決定いたしました！」

「……マシユさん。ひっそりと一人ついていくなんて……」

「……彼女を責めることは出来ません。誘ったのはマスターからですから」

「分かっていたでしょうに。清姫さん」

「ライコーン」

「だれがライコーンですか、頼光です。あの恥ずかしがり屋さんが母たちと一緒に帰

省など認められないでしょう」

「では我々は何の手立てもないままますたあ旦那様達を御見送りしてらぶらぶさせろと言うのですか！」

「そうです、それがカルデアの言う『正しいサーヴァント』のあり方です」

「自らは日々私達の目の前でイチヤイチャしているのにですか……」

「おーい頼光サマ、大将たちが出発するみたいだぜー！」

「よし……」

「行くのですか？」

「……怒られますよ？」

「旦那様には何回ストーキングしたか知れませんかよ」

マスターの明日はどっちだ

マスター、帰省する。　　くただいま編く

点滅する信号、舗装されたコンクリートに休日の学生や時間に追われた社会人たちが行き交い、無数の足音と話し声の一つのBGMとなつて街を彩っている。

そう、ここは何でもない普通の街並み。何処に行つても見ることが出来る代わり映えのない風景。

「ここが、ここが、先輩が生まれ育つた町なんですね……人が一杯います、ビルが沢山立っています。これが先輩がいた世界なんですね……ああ、あれはもしや不夜城コンビニエンスストアでは!？」

そんなどこにでもある普通の光景をまるで初めてみたかのように目を輝かせて見つめていた少女がいた。手には大きい旅行バッグを持っており、きよろきよろと周りを見ながら歩く姿は都会にやってきた田舎者のようだが、その容姿はまるでガラス細工で出来た人形のようにどこか儂げで触つただけで壊れそうな繊細さを持つた美しさをもっている。しかし隣にいる少年に見せる笑顔はまるで雪山に咲いた一輪の花のように華麗であり、可憐であつた。

彼女の名前はマシユ・キリエライト。隣にいるマスターである少年と共に世界を

救ったどこにでもいる女の子である。

「こちら、マシユ。 そんなにはしゃいだら、他の人に迷惑になってしまうよ？」

「あ、すみません。 初めてみる光景なのでつい……」

そして、もう一人少年の隣に居るのはマシユとはまた違った美人、まさに顔のパーツから体の大きさまですべて計算された様な完璧な美しさを持つまさに一つの芸術品と呼べるような絶世の美女、そう例えるならモナリザの様な、可愛さを備え持ったマシユと違い究極的に美を追求した様な美人であった。

この美女の名前は、誰もが知るレオナルド・ダ・ヴィンチ、れっきとした現美女元男である。

「……？」

「はい、とても楽しいです！ そして楽しみです！」

そして通り過ぎた人たちが振り向くぐらいの美女二人を連れて歩くマスター。

そこを代われと道行く男たちの鋭い視線が突き刺さってなんだか先ほどから冷や汗が止まらない状態である。

「いやはや、マシユがこんなにはしゃぐなんてね。 あの子の笑顔だけでもこの世界を救った価値はあると思わないかい？」

「」

「へえ、最初からあの子の為だったって？　言うじゃないか、少年。　ランスロット卿から女の子の口説き方でも習ったかい？」

「!?」

「冗談さ、それが君の強さだからね。　そら、マシユが呼んでるよ」

「せんばーい！　早く行きましよう！」

「!」

向こうで手を振るマシユに向かつて返事をして走っていくマスター。　そんな二人を見ながらダ・ヴィンチちゃんは、何もない一日の何でもない平凡な一日、彼らが待ち望んだ一日が始まるうとしていることに心の底から祝福していた。

「ほら、さっさと押しちやいなよ。　そうしてたら何時まで経っても進まないぞー」

一時間後、街をマシユの希望通りに散策しながら到着したのはある一軒家だった。

大きくもなく小さくもない平凡な一軒家であり、日本になら何処にでもある普通の家である。

だが、表札に書かれているのはマスターである少年の苗字。　これだけでカルデアの特定のサーヴァントたちにとってはある一種の特異点と同義である。

そう、彼の実家である。　　なんだかカルデアの皆はマスターは帰る家を持たない可哀想なカルデアアつ子と思つている節があるが、ちゃんと彼にも実家はある。

そんな自分の家なのに先ほどからマスターはインターホンを押すか押さないかで十分も苦悩していた。

インターホンの前で右往左往して、押そうと思つたら指を離し、また頭を抱えて悩みだし、また指を近づける、傍から見ればとんだ変人である。　　実際お隣さんが変な目で見ているのでマシユ達はなんだか居たたまれない。

「先輩、そろそろ……」

あまりにそわそわしているマスターに心配したマシユが促してくるが、実際一年半も合わなかった親に何て言えいいのかマスターには思いつかなかつた。　　こんにちわ、だろうか、それともご無沙汰してもうすだろうか。

「全く、こういう所は小心者なんだから、ほいっと！」

「!？」

何時まで経つてもうねうねと玄関を歩き回っているマスターに、呆れて我慢も限界と、勝手にダ・ヴィンチちゃんが家のインターホンのボタンを押す。　　家の中に電子音が響いて、誰かがパタパタとこちらへ歩いてくる音がして、マスターはさらにパニック状態に陥つた。　　まだ何も考えてないのにー！　　とダ・ヴィンチちゃんを睨むが当の本

人はそっぽを向いて口笛を吹くのみである。 さすが天才、解決方法はいつもダイレクト。

「はいはい、どちらさま……ま……」

そうしているうちに玄関を開けて出てきたのは、エプロンをつけた女性だった。 凛とした顔に青い目と綺麗な黒髪が腰まで伸びており、なかなかの美人だった。 何処かの湖の騎士卿だったら口説いているだろう。 あとポロロン卿も。

「あつ……」

そしてマシユはその女性を一目見た瞬間気付いた。 この女性が自分の先輩の母親なのだ。 マスターと目の前の女性の顔が綺麗に重なったのだ。

前にマスターはマシユに自分は母親似だと言っていたが、此処まで似ているとはマシユは思わなかった。

「あ、アンタ……」

「……」

マスターの母親は目の前の息子を見ると、信じられ無さそうに口をパクパクと開けたり閉じたりしている。 対するマスターの方も自分の母親に何を言ったらいいのかわからない顔で恥ずかしそうに頬を掻いていた。 無理もない、マスターは一年半の間自分だけではなく自分の家族たちの生死までかけた戦いをしてきたのだ。 今の彼の胸の

中では様々な感情が渦巻いているだろう。

「もう、あんたつたら……!」

「……………」

マスターの母親は目じりをぬぐうと我慢できないと言う様にマスターへと駆け出す、そのままマスターに飛びつくように高く飛ぶと――

「今までどこ行ってたのよこのバカ息子!!」

「……………」

「せんばーい!」

そのままマスターに鮮やかなドロップキックを繰り出した。まともに母のドロップキックを食らったマスターは勢いよく転がって行き、近くの電信柱に衝突して止まる。

「高校生なったから夏休みから寮に住みたいとか言い出すわ、仕方なく認めたら一か月もせずにスカウトされたとかで住み込みで外国に行くわ! と思つたら寝て起きたら一年半経つてるし……………いやそれはどうでもいいの……………」

「どうでもいいのですか!」

「問題なのは、何時まで経つてもあんたが学校にも行かず、寮にも帰らずに行方不明だったってこと! 人類空白の一年半の時は良いとしてもそれから一か月以上も経つてい

るのに家にも連絡入れずで一体全体何処で何やってたのか包み隠さず話しなさいいいいい!!」

「人理救つてたんだよお母様ああああ……」

そのまま追撃とばかりに、倒れているマスターにケツアルお姉さんも手放しで大絶賛するような逆エビ固めを決めて地面にタップさせるマスターの母、だがタップしようとも此処はルール無用のデスマッチ、爆笑しているダ・ヴィンチちゃんとおろおろするマシユをよそに母の説教と息子の絶叫が通りに響いていた。

「そうなんですか、そちらの施設でお世話に……家の息子馬鹿だから役に立たなかったでしょう?」

「いえいえ、こちらとしてもこの異常な事態に彼の様な前向きな子が居てくれたおかげで精神的にも助けられましたから」

「先輩!? 先輩聞こえますか!?! しっかりしてください!」

数分後、玄関で和気藹々と談笑をしているマスターの母とダ・ヴィンチちゃんの姿があった。なんだか家庭訪問に来た先生と母親みたいな雰囲気である。因みに隅ではぼろぼろになったマスターが倒れており、マシユの必死の救命活動が続いている。

「で、そのえーつとカルデア？ にいたおかげで彗星のガスで眠らずに済んだと……ご迷惑おかけしませんでした？」

「いえ、彼も雑用ながら嫌な顔一つせずに働いてくれました。明るく元気で、職場での人気もあるんですよ？」

「まあ、そんな先生つたら。家の子の精神年齢が低いから皆可愛がつてあげてるだけですよ！」

母からの容赦ない言葉に、バイタルが下がりに続けるマスター。マシユが慌てて頭を撫でながら励ましの言葉を贈るが、なかなかバイタルは上昇しない。

今回マスターは運よくカルデアの施設において、一年半の眠りから逃げる事が出来た一般人であり、カルデアでは周りの職員から勉強を教えてもらいながら雑用ではあるが仕事を手伝っていた、とダ・ヴィンチちゃんはマスターの母に説明していた。

流星に下手をせずとも一瞬で死んでしまう状況でたった一人のマスターとして世界救ってました。なんてことは言えないし、信じてもらえないだろう。

最初は怪訝な顔をしていたマスターの母であったが、天才であるダ・ヴィンチちゃんの話術に乗せられ、学校の問題は全てこちらが解決する、あとちゃんと給料も出る、と聞いた途端に上機嫌になった。今ではダ・ヴィンチちゃんのカルデアの研究員という肩書も何の疑いもなく信じている。

「まあ、こんなところでお話もなんですし、どうぞ中に。 えーつとレオナルドさんと、こちらは……」

「え、あつ！ ま、マシユ・キリエライトと申します！ あ、お初にお目にかかります！ えつと、その先輩からはそのお世話に……！」

マスターの母親から視線を向けられると慌てて自己紹介をするマシユ。緊張しすぎてしどろもどろで、視線が右往左往しており落ち着かない様子である。因みにマスターの介抱中に勢いよく立ち上がったので、マスターはまた地面に叩きつけられた。そろそろ涙で水たまりが出来そうである。

「マシユさん……綺麗な名前ね。 えーつとマシユさんはうちの子とはどういった関係で？」

「関係!? えつと先輩とはそのマスタ……パートナーと申しますか……その、なんといいですか……」

「ば、パートナー……」

パートナーという言葉にピクリと反応するマスターの母。恥ずかしそうに俯くマシユを頭のとつぺんからつま先の先まで値踏みをするように見ると、何かを考え込むように顎に手を当てる。マシユからしてみたら、自分のマスターの母親から裁定を受けているようで落ち着かない。ダ・ヴィンチは隣で笑いをこらえている。

「出会いは！」

「えっ？ あっ！ 廊下で寝ていた先輩を私とフオウさんが見つけた時からです！」

「フオウ……？ 馴れ初めは！」

「なれそつ……私を安心させるために手を握ってくれた時からです！」

「ロマンズ！ うちの子にキュンと来るところは！」

「えっと、時々見せる子供っぽい笑顔とか、寝起きの時のぼーつとした顔でしょうか！」

「メターナル！ ……ごによごによはした？」

「うなっ！ それは……その……答えられません!!」

「エクセレント！ さ、中へいらっしやい！ ほら、アンタも何時まで床に転がってん

のー！」

「ぶわははははは！ さすが君のお母さんだね！ 何て言うか肝が太い！」

「……………」

マスターの母から肩を抱かれながら家の中へと入っていくマシユ、とても気に入られたらしく「息子が嫁むすめを連れて帰ってきた」と大興奮である。

ダ・ヴィンチちゃんは大爆笑しながら、家の中へと入って行き、マスターは余りの恥ずかしさに顔を手で覆い隠しながらダ・ヴィンチちゃんに続いていく。

自分が紹介する前にマシユが気に入られたことが嬉しくもあるが、それ以上にマシユ

が赤裸々に自分の事を母に語っているのがさらに恥ずかしいらしく、頭から湯気が出ている。

「おーっと、その前に！ ストップ！ 家に入る前に私に何か言わなくちゃいけない事があるでしょ！」

と、マスターが家に入ろうとした時、マスターの母が手のひらを突き出しながら、マスターをストップさせた。

言わなくてはならない事と言われても、何も思いつかないマスターはとりあえず、思いつく限りの言葉を出す。

「？」

「ちがーう、確かに心配したけど、それはレオナルドさんから聞いたからもういい！」

「？」

「だー、寮の事はもういいの！ まったく、この鈍さはマシユちゃんも苦労したでしょうね……まったく。家に帰ったら何て言わなきゃいけないの？ 昔から母さんいつてるでしょ？」

そこで、マスターは驚くように目を見張った。マスターの母は可笑しそうに笑うと、その言葉が自分の息子の口から出るのを待っているかのようにマスターを母の眼差しで見つめる。

マスターは頬を掻いて照れくさそうにすると、恥ずかしそうに、しかしながら嬉しそうにその言葉を口にした。

「ただいま、母さん」

「お帰りなさい、さ、外寒かったでしょ。 さつさと入んなさい」

なるほど、親子だ。 とダ・ヴィンチちゃんは笑い合う二人を見ながら、そう感じていた。 笑顔が親子そろってそっくりなのだ。

マスターはこの母親を守れたことに、心の奥で一人誇りを感じながら家へと入っていった。

今日もなんでもない普通の一日が始まろうとしていた。 ——ただ一つ普通じゃないところ上げるとしたら、彼の家に家族が増えそうなことだろうか。 ——

少年の一日が、また始まる。

「しまった、今日もまた遅くなってしまった……母さん怒ってないといいいけどな……」

夜、鞆を持ったスーツの男性が家路を急いでいた。 見せたいものがあるからと早く帰ってきてネ☆ と妻から職場に電話がかかってきたのは良いものの、次の裁判の資料をまとめるのに手こずって、結局帰れたのは定時をずいぶんと過ぎてからである。 遅

くとなると決まって妻が拗ねるのを知っている男性はどう言い訳しようか悩みながら家の前へ着く。

とりあえず甘い物でも買ってきたので、頭を撫でるなりすれば機嫌を直してくれるだろうと希望的観測をしながらドアへと手をかけた。息子からはいい加減バカツプ

ル卒業しろと言われ続けているが、二人とも反省する気はない。

「か、母さんただいまー！ 甘い物買ってきたから機嫌直して……」

「あ、はいお帰りなさいですー！」

そつと、ドアを閉める。表式を確認。 良し、ちゃんと自分の名字である。 仕事

で疲れた幻覚だろう。 妻はクォーターだけど日本人離れた娘はいないし。 そう

思ってもう一度ドアに手をかける。

「た、ただいまー！ さっきなんだか可愛い娘さんがいたよな気がするけど気のせい」

「あ、どうもお世話になってます。 おおい、——君。 父君がお帰りだぞー」

そつと、ドアを閉める。表式を確認。 どうあがいても愛すべき我が家。 なぜか

モナリザが歩いて居たような気がするが、多分気のせいである。 気のせいであつて欲しい。

「あなた、玄関で一人で何やってんの？」

と、玄関で男性が頭を抱えていると、見かねた男性の妻がドアを開けて男性を迎えに

来た。男性はやつぱりさつきのは幻覚だったのだと喜び、妻へと抱き着いた。

「ああ良かった母さん！　なんだか仕事で疲れているのか知らないけど、可愛い娘さんがいたり、モナリザが歩いてたような幻覚をさー」

「ああそれ！　見せたいものつてそれなのよ！　マシユちゃんこつちいらつしやーい！」

「へっ……っ？」

男性の妻が呼ぶと、家の中からなんだか照れくさそうに先ほどの美少女と、男性の息子が出てきた。つてなんで息子、いつ帰ってきたの。

男性はもはや頭が真っ白になりながら呆然と妻を見つめる。　いったい何があったというのか。

「えっと、母さん。　これは一体……」

「父さん！　何と私達に義娘むすめが出来ました!!」

「はい……っ？　はい……っ?!」

父親の絶叫が通りに響く、なるほどこんな所は父親似か、と後ろの方でモナリザが爆笑していた。　貴方は一体誰なんだ。

父親の明日はどつちだ。

マシユ学校へ行く。　　〽初登校編〽

「はいはい、席に着いた席に着いた――!」

何も変わらない日常、と言つても、寝て起きたら彗星のガスか何かで人類は一年半も眠っていたという大事件の後だが、そんな大事件の後でも学校は続いていく。休みの日の後は学校、これもまた学生にとつての人理である。

そんな月曜の朝の朝礼前、ざわざわと賑わっている二年生の教室に先生が手を叩きながら教室に入ってくる。席を離れていた学生たちは、いそいそと席に着きながら次の授業の準備しながら先生の話に耳を傾ける。

その中で、隣同士の二人の女子生徒がひそひそと噂話に興じていた。

「今日さ、転校生。来るらしいよ」

「うっそ、男、女?」

「ウチのクラスは男! ほら、前からガス事故で休校してる男子校の……」

「あーあそこからまた来るわけ? あそこレベル高いけど女子への耐性なさすぎじゃない?」

「まー小学校からエスカレーター式の男子校だしね……」

「ま！ かっこよければなんでもいっつか！」

「さっぱりしてんなオイ」

「はいその男に飢えた女子ー、今から紹介するから静かにねー」

「飢えてませんけど!?!」

吠える女子二名の教室から所変わって、そこから一階上の一年生の教室。こちらでも今日から来る転校生の話で持ちきりであった。ただ先生が厳しいのでかなり小さな声でだが。

「なあ、今日転校生くるってな」

「マジか!? 女? それとも女子?」

「女しか頭にねーじゃねーか。でも女の子だってよ、しかも外国人」

「わが世の春が来たー!!」

「なんでこの時点でそんな自信が持てるのお前」

「だって、外国人だろ。ちよつと優しくすればそのまま……」

「そんなんだから、女子からゴミを見る目で見られるんだよ」

「女子から視線を移されることもない男よりはマシですー」

「無関心と悪意はどちらがマシなのかという議論は今だ答えは出ていません」

「うるさいぞ、そのの！ さ、入ってきなさい」

怒鳴られた男子学生二人は身を縮めこませて、転校生が入ってくるのをじっと待つ。だがやはり気になるものらしく、先生から注意を受けてもまだひっそりと噂話が続いている。

「どうしよう、外国人ってみんな年取って見えるらしいじゃん。俺年下好きなんだよね……」

「いや、この教室入ってくる時点で同い年だし。てかなんでお前と付き合う前提なの？」

「し、失礼します！」

声と共にドアが開く音がして、教室の皆がドアの方に顔を向ける。そして転校生が入ってきた瞬間

「……」

教室は静寂に包まれた。

噂話をしていた男子生徒も、友達が増えると喜んでいた女子生徒も、ちよつと悪ぶつてるヤンキーな男子生徒も、特に興味を示さなかったクールな女子生徒も、みな言葉を

フアーに座りながら丁度放送していたアニメを二人で見ている。夕飯の準備をしているマスターの母にマシユは手伝いを申し出たが「いいから座ってなさい」と笑顔で断られ、渋々マスターと共にゆったりしている。台所からは中華特有の調味料の匂いが漂って来て、マスターは今日は母の得意な中華料理だと気付いて小さくお腹を鳴らした。

「あつ……ふふつ、お腹が鳴りましたね。お母さんからは断られましたが、やはり私も手伝った方が良かったのでは……」

「母さんは中華の時は一人の方が早い？ 確かに、鉄人もびつくりのスピードですな

……良い匂い……あつ」

と、匂いを嗅いだマシユのお腹からもくう、と可愛くお腹の音が鳴る。慌ててお腹を押さえるマシユに、それを見たマスターはお返しとばかりに小さく笑う。

「わ、私だつてお腹が鳴るときだつてあります！ ……もう！」

余りにしつこくマスターが笑うので、頬を膨らませてそっぽを向くマシユ。マスターも少しデリカシーが無かったかなと反省し、機嫌を直して貰うため謝りながらそつとマシユの手の上に手を重ねた。マシユの方もしばらくして少し顔を赤らめながら指を絡ませると、そつと頭をマスターの肩に乗せてテレビを見始める。それを見て苦

笑しながらマスターも一緒にまたテレビを見始めた。アニメも終わって今はニュース番組の時間であった。

「青春ねえ……青春と言うかもはや夫婦の域に行こうとしてるんだけど、なにあれオナルドさん一年の間に何があったの？」

「いろいろですよ、いろいろ。うーん、良い匂い。今日は中華か……つとおーい二人ともイチャイチャしてないでちよつとこつち来てくれるかい？」

「い、イチャイチャしていません！」

「――！」

「うーん、セリフまで被るところがマジで夫婦ね……我が息子ながら末恐ろしいわ……」
「さて、これを見てくれるかな？」

部屋に入ってきた普段着ダ・ヴィンチを来たモナリザちゃんがテーブルに一つの書類を置いた。書類には「編入届」と書かれており、名前の欄にはマシユの名が記入されている。

「これは……？」

「穂群原学園への転入届さ、此処からはちよつとばかしかかるがね。自由な校風が売りだそだよ」

「学校……学校に行けるのですか!？」

ダ・ヴィンチちゃんの言葉を聞いてマシユは眩しいばかりに目を輝かせる。今にも

飛び跳ねんばかりに興奮しており、ダ・ヴィンチちゃんは目を丸くしながら苦笑してその他の書類をマシユに渡す。

「そっか、マシユちゃんずつと施設の病院暮らして言つてたものね……」

「でも、どうしてこんな……誰にも言つたことなんてないのに……」

「ええー誰にも？ 本当に？」

ダ・ヴィンチの言葉を聞いて、ふと、マシユは自分の先輩に視線を移す。照れくさそうに笑っているマスターを見て、マシユは感づいた。確かに誰にも言つてはいないことはなかった、ただ一人、旅の途中、就寝前にたった一回だけぼつりと漏らしたことがある。

——もしかして、もしかして……

「今回の彼の帰省にはもう二つ目的があつてね。一つはマシユを親に紹介すること、もう一つは君を学校に連れて行くことだ。いやああまりにも熱心に頼んでくるものだからさ、感謝してくれたまえよ？」

「せんばーい!!」

感極まつて、マシユはマスターがいるソファーにダイブして抱き着きに行く、マシユのマシユマロフライングボディプレスを喰らったマスターは幸せ半分鈍痛半分でマシユにハグ返しをするが、感極まり過ぎたマシユは力加減を忘れて抱きしめてくるの

で、マスターの体は内から鈍い音を出してきている。因みにマシユは嬉しさのあまりそれに気づくことはない。

「せんばい……！　せんばい……！」

「！　……！？」

「うう、良い話ねえ……息子泡吹いてるけど」

「此処の家にお邪魔してから私爆笑しかしてない気がしてるんだが！

——君泡吹

いてるのがまた！」

「ただいま……息子が泡吹いてる!？」

泡を吹く息子、それに抱き着く義娘、泣いている妻、爆笑しているモナリザ。　仕

事から帰って第一に目に入るのがこのカオスな光景なマスターの父はただ、中華料理の香りを嗅ぎながら、すこしだけ腹を鳴らすのだった。

「んだ、ぐだつち、おめえもこつちの学校さだったか！　　というか日本帰ってきてたべか」

「そうだぞ、夏休みいきなり外国行くとか言い出した時には皆『何言ってるんだこいつ』と

止めもしなかったのだが、まさかその翌日に姿を消すとは……」

「そしてあの流星の大事件だろ？ もうお前外国でくたばってんじやないかと皆して噂してたんだが……いやあまたその青い目が見れて安心した」

時は戻って穂群原学園二年の教室、難なく自己紹介を済ませたマスターはお昼休みに元の学校の友人達に囲まれていた。皆個性的であり、気さくなマスターの友人である

「ひとりなんだか訛ってる人が居るが」

マスターを囲んでいる友人はマスター含めて皆、元々は穂群原学園ではなく違う学園の生徒であり、小学校からのエスカレーター式の男子校で、小学校のクラスは学部を変えない限り高校まで変わることはなく、クラスの一人一人が強い絆で結ばれているという、人呼んで神聖ヒェロス・ロコス隊学園。

本当ならばマスターはそちらの学園に行かなくてはならないのだが……

「いやあしかし、流星のガスに続いて、うちの学校にもガス漏れが発覚するとは……まあ一年半もほったらかしだったのだから仕方がないかもしれないが……」

「でも、そのおかげで女子がいる学園生活を送ることが出来る！ いやあ冬木のガス会社さまさまだぜ！」

「んだんだ！ でもオラ達女子とロクに話したこともないから皆すぐ赤くなつてあたふたしちゃうけどな」

が、マスターたちが通っていた学校は、なぜか地下を含むいたるところからガス漏れが発生しているらしく立ち入り禁止。仕方がないので、それぞれ近くにある学校に編入されることになったのだ。――実際の所ダ・ヴィンチちゃんがマシユを同じ学校に行かせるため前々から計画している節があるが、マスターは怖くて聞けなかった。

マスターの学友もマスターと同じく女性経験が全くない者たちであり、女子がいる空間に喜んではいるが、苦勞もしているらしく、カルデアでいきなり美女たちがいる空間に放り込まることになったマスターは同じシンパシーを感じられずにはいられなかった。

「そんや、朝に上の階から獣の咆哮が聞こえたけど、此処って動物でも飼ってるのけ？」
 「お前の実家と同じにしてくれるなサルよ……ほら、ぐだ男の他にもう一人転校生が来たというからそれではないのか？」

「あー見た見た！ 外国人の子だろ！ ありや後輩共も叫ぶわ、すげー可愛かったもん」

「……………」

興奮気味に話す学友を見て、マシユの事だなど思うマスター。カルデアのサーヴァントたちは皆歴戦の美男美女ぞろいで地味に思われがちだが、マスターからして見ればマシユも十分美人で魅力的である。サーヴァントたちを見慣れたマスターが思うのだから他の一般人では相当であろう、そのことに何だか誇らしい気持ちになる反面、なんだか自分だけの後輩では無くなってくるようでいけないと思いつつもジェラシーを

感じてしまうマスター。許してほしい彼も一般男子学生なのだ。

「ほう、超絶面食いのお前がそこまで絶賛するとは、相当だったのだな」

「おうよ、綺麗なショートヘアで、片方の目が隠れてて、眼鏡かけてて、なんだか優しいような感じで彼氏の言うことなんでも聞いてくれそんな母性を持つてるような……」

「それってぐだつちの後ろにいる様なお人だべか？」

「そうそう、まさにこんな……」

と、得意げに話していたマスターの学友が固まる。ついでに教室も固まる。固まってるのはサルと呼ばれた学友と、マスターだけであり、なんだかものすごい視線を感じたマスターがゆつくりと後ろを振り向くと弁当箱を持ちながらおどおどしているマシユが居た。

「あの、先輩。良ければ一緒に昼食でも……」

「「「喜んでー!!」」」

瞬間、部屋中の男子たちの「女子も何人か含む」咆哮と共に乱闘騒ぎが始まる。

「先輩と言われたのだからそれは年上である自分の事だ」と誰もがそう思い込み、一人しかいないマシユとの昼食権を巡り凄惨な戦いを繰り広げる様は、まるで数少ない魔神柱を狙うマスターたちの狂乱の様だった。

「これが人類悪」

「？」

「え、あつそうでした。此処では先輩という呼称が皆さん全員に当てはまるのでしたね……それでは、こほん、先輩、一緒に昼食でもいかがですか？ 今日はお母さんから弁当を頂いて……もちろん先輩の分も！」

その瞬間、ぴたりと教室の喧騒が止む。箒で殴り合っていた男子も、黒板消しを煙幕代わりに使っていた男子も、教科書の角で殴るという中々痛い攻撃をしていた女子も、一斉にマスターの方へと視線を向ける。なんだか魔神柱に睨まれている様な錯覚を起こすぐらいに大量の目がマスターを見ていた。

目線から感じる感情は、嫉妬、憤怒、殺意、殺、殺、殺、殺。マスターは今度はジェラシーではなく生命の危機を感じるようになった。

「!!」

「うん？ ぐだ男君？ 何処に行こうとしているのかね？」

「まあ、座ってお茶でもしようや……」

「はー！ すっごい美人だがやー！ ぐだっちこの子と友達かなんかけ？」

「!？」

「裏切者？ 裏切ったのはそっちのそうではないのかね……？ 我等神聖隊は他人の幸せを許さぬ！」

マシユを連れて逃げようとするマスターを掴む四つの手。マスターとは深い絆で

結ばれている学友たちのまさかの裏切りに―サル以外―驚きの表情を隠せないマスタ―ではあったが、女子と言う華がない男子校の生徒において、いつの間にか美少女と仲良くなっているということ自体が裏切りに等しいのである。それがただの妬みからくる感情であつても。

「へえ、マシユちゃんは向こうでこいつと知り合つたんだね―、こいつぐだぐだしてるから苦労したでしょ」

「授業中に寝て、廊下に立たされても廊下で寝てしまうのがこの男だからな。それでついた名前はぐだぐだのぐだ男」

「まあ、オラ達はぐだつちだつたりぐだだつたりちよくちよく変えて呼んでるべ。あつマシユちゃんそれ美味しそう一口」

「「触るなツ！」」

「ウキツ!?!」

「先輩のあだ名ですか……ふふつ、なんだか可愛いですね。先輩？ 何で頭を抱えているのです？」

「……………」

学友たちの裏切りにより結局逃げ切れず、机を合わせて昼食を取るはめになったマスター。教室どころか廊下からも濃い殺気を感じるマスターは頭を抱えながらせめて何も起きないことを祈るのみである。因みにマシユは周りを囲む空気に全く気付いていない。

「？」

「はい、家庭的な和風のお弁当で、とても新鮮です！先輩のお弁当は私のとは逆に洋風ですね、から揚げにチキンライス……なるほどオーソドックスですね」

周りを刺激しないように気を付けながら、マシユと会話を交わすマスター。お弁当を食べる姿もまた可愛らしいマシユの姿に周りは癒されるが、その分「お前はマシユちゃんのなんなんだ」とマスターに殺意が向かってくる。何にもしていないのに殺意が向かってくるマスターはもはやどうすればいいのか分からない。

「むむ、先輩の持っているから揚げ美味しそうですね……さすがお母さんです、から揚げも手作り……」

「マシユちゃん、俺もから揚げ持つてるけど……」

「いえ、先輩から貰うので、ありがとうございます」

「んだな！オラも冷凍食品より手作り選ぶほごもっつー！」

「サル君には僕のから揚げ上げるねー！」

サルと呼ばれた学友にマシユから一瞬で断れた学友がから揚げを押し込んでいる間、マスターはマシユにから揚げを渡そうと箸でから揚げを持ち上げる。

周りから殺気は漂っているが、久しぶりに学友と賑やかな食事を楽し無ことが出来て、改めてマスターは自分達は日常を取り戻すことが出来たのだと実感する。あの苦しいが楽しかった旅は無駄ではなかったのだと。

「……むう」

「？」

と、から揚げをマシユのお弁当にいれようとした時、マスターはなんだかマシユが不服そうな顔をして自分を見ていることに気付いた。何か不味いことでもしたかなとマシユの方に顔を合わせると、マシユはまるで親鳥から餌を貰おうとしている雛鳥のように口を開けていた。

あれ？ この子こんなに甘えん坊だったっけ!?

マスターの額から冷や汗が流れる。確かに、人理を救ってからなんというか積極的になったマシユであるが、こんな周りが見ている中でこんなおねだりをしてくるとはマスターからは予想外であった。

「……？」

「はい、玉藻さんからこれをすればマスターはすぐさま昇天だと……」

確かに周りからすぐさま昇天されそうである。玉藻はカルデアに帰ったら金時ビリビリの刑に処すと心に決めたマスターであった。

「……ダメですか？」

「あーん……」

残念そうにマスターを見るマシユ。目の前で麵類を取り上げられたフォウ君の様な目は極大特攻であるマスターは、その眼に逆らえず死の恐怖から立ち向かいながら、から揚げを摘みマシユの口に運び込む。

「んっ……おいひいです！ あっ、少しお箸啜えてしまいましたね……」

「殺……」

周りの殺気濃度がぐんと上昇する教室内、「こんなところでいちやついてんじゃねーぞ」という女子の怒りも含めておおよそ二百パーセント程度の上昇率である。

「ずい、ぶんと、仲がよろしいんですねえ……」

「あ、あ。まる殺でカツ殺プルのような殺」

「い、いえそんな……」

「そーいや、マシユちゃんって何処住んでんだべ？ 外国からきたんでごじやーしよー？」

殺意が隠せてない友人の視線を必死に反らしながら、早く昼休み終わってくれと願うマ

スター。 マシユも照れたことでマスターへの視線が物理的に痛くなってくる。

そんな中、最早何弁か分からない方言を使いながら、質問するサルと呼ばれた学友。マスターに殺意も向けず、素直に羨ましいと口にするこの学友こそ真の友なのではないかとマスターは思ったが、今サルの学友が放った質問は、この教室を崩壊に導くことに気が付かなかつた。

「はい、先輩の家にお邪魔させていただいてます！」

何かが顕現するかのように、窓ガラスにひびが入った。

マスターの明日はどっちだ。

「うーん、また遅くなっちゃった……」

日も落ちて、夜の帳が下りてくる頃、また裁判の資料集めで遅くなったマスターの父が帰りを急いでいた。だが走り方はなんだかスキップみたいで上機嫌である。

それもそのはず、家族が増えたのだ。いや実際には義娘であるが、性格もいいし、容姿も端麗、気配りも出来てとても良い娘さんである。ちよつと考えているより早かつ

だが、息子が嫁を連れてきたことに父として喜びの感情の方が大きかった。なぜモナリザがいるかは別として。

「ううううう……」

「……………」

と、家も近くなつてきた頃、近くの路地で誰かの泣き声をマスターの父は耳にした。少女の声である。何だかマスターの父は幽霊かと勘ぐつたが、あまりその手の話を信じていないマスターの父は、何かあつたのかもしれないと路地に入り込む。マスターの父は正義感の強い男で、弱い立場の者を救うために弁護士になつた正義の人物でもある。

「お嬢さん、どうかしましたか?」

「うう……」

路地に入るとすぐに、その声の主は見つかった。なんだか町には不格好な着物の少女だが、所々は擦り切れ、頭にはなぜかカップラーメンが乗っている。

「うう………旦那様を追いかけたのは良い物の、途中で飛行機に振り落とされるとは……清姫一生の不覚……」

「なんだ、道に迷つたのか。お嬢さん大丈夫ですか? お怪我は? お送りしましょうか」

「あら、天の救いとはこのことです……何と正直に何の邪のないお人……ある方の家を訪ねたいのですが、この有り様でして」

ふと、顔を上げると中々の美少女、マスターの父はこんなところに少女一人を置いていけるほど冷たい人間ではいられなかった。しゃがみこんで頭に着いたゴミを払いながら、マスターの父は目の前の和服美少女の力になろうとした。

「そうですか、大変でしたね。してその人の名前は分かりますか？」

「ええ……様と言うお方の……」

「はい？ 息子？」

マスターの父の明日はどっちだ。

マスター、帰省するヨヒメン襲来編

「先輩、大丈夫ですか……？」

「……」

その日、マスターとマシユは暗くなつた夜道で家路を急いでいた。もう時間は七時を回っており、きつと料理を作つて待つてるマスターの母はお冠だろう。

だが仕方がない今の今まで冬木の異端審問会の刺客から逃げ回つていたので。何の集団なのかと聞かれれば、なんてこともないカップルに対する只の嫉妬にまみれた男たちの怨念で構成された春の来ない男たちの集団なのだが、その怨念こそが人間を人間足らしめるのだと、どこかのアヴェンジャーが言つていた。

「あ、着きましたよ！ お義母さん怒つていないといいんですけど……」

「？」

マシユのお母さん呼びが今変じゃなかったかと思ひながら、マスターは震える手でドアに手をかける。明日からどうしよう、当然家もマークされているだろうし、いっそメデアさんから結界張つてもらうか。と明日から始まる大変な一日を思つて肩を重くしながらマスタードアを開く。今はとりあえず、マスターの母に謝るのが最優先

だったのだが……

「お帰りなさいませ、旦那様♡」

ドアを閉める。表札を確認。 良し自分の家。 カルデアに続く何処でもなドアじゃない。 もう一度ドアを開ける。

「お帰りなさい」

ドアを閉める。 近くのホテルを検索、マシユの手を取る。

「？」

「ほ、ホテルにですか!? いや、でも私達にはまだ早いともうしますか、心の準備が……いえ、先輩が望むのなら……」

マシユは顔を真っ赤にして何か盛大な誤解をしているが、マスターにはそれどころではなかった。 すぐさま、ここを離れなければ……とりあえず近くの寺の鐘に隠れればいいかな……!」

そんな思いで駆け出そうとするマスターに、家の扉が開きフライパンが飛んできたかと思うと、マスターの頭にクリーンヒットした。 良い金属音が響き、マスター駆け出したのも合わせて電柱にぶつかるまで転がっていった。

「先輩!?!」

「ふふふ、別に怒ってはいないのよ。 若い二人が遅くまでナニしてたか聞くなんて野

暮じやない？ おかーさん全つ然怒ってない。でも……この子は何なのかよく説明してほしいんだけど……」

玄関にはどう見ても怒り心頭なマスターの母が立っており、そしてその後ろには慎ましげに咲く百合の花のような可憐な少女、またの名を嘘つき焼き殺すガール。ある意味この現代社会に一番出してはいけなないサーヴァントが、清姫が、につこりとその場ますたあで旦那様の帰りを待つていた。

「清姫さんがなぜここにいますか!?!」

「妻が夫の傍にいるのが可笑しなことでしょうか?」

「答えになっていません!」

「息子が現地妻作ってた……」

リビングで正座をさせられているマスターに二人の少女が取り合う様にその腕を引つ張り合っている。なんだか時代劇の有名な裁きの一つを思い出すが、おそらくどっちもマスターが死んでも離さないだろうし、本気で引つ張ったら多分千切れる。

「んで、この状況をどう説明する気でしょうか息子様?」

「さ、裁判になったらどうしよう……弁護するべきなのか……?」

そして目の前には仁王立ちのマスターの母と、なんだか気まずそうにしているマスターの父。状況的には最悪である、味方が一人もないというより、ダ・ヴィンチちゃんと言ったようにカルデアの職員として誤魔化せないというのが不味かった。なんせ清姫は嘘を嫌い、嘘を見破る。下手に誤魔化すと清姫はそれを嘘と認識して最悪火を噴く大蛇になるであろう、そうなつてはこの家はおしまいである。それだけはマスターは避けたかった。令呪で危険行動を縛ることも可能であるが、それはマスターの心情に反することであるべくなら使いたくは無かった。

「……………」

「はい？ 何ですって？」

ならば、覚悟を決めるしかない。嘘が駄目ならば、ここは正攻法、正直に全てをぶちまける——！

「——実は清姫はカルデアで世界を救うために自分のサーヴァントとして召喚された英霊で嘘を嫌う嘘つき焼き殺すガールなんだ！」

部屋の空気が凍る。長い沈黙の後、言い切ったとんだか吹っ切れた顔をしているマスターの肩にマスターの母はそっと手を置いて慈悲深い顔で微笑む。もしかして上手いっただかとマスターは顔を明るくするが。

「んなわけあるかー!! アンタ今何歳か言ってみろー!!」

「?!」

「せんばーい!?!」

「だんなさまー!?!」

そのままマスターの母はマスターの腕を握るとそのまま思いつきり投げ飛ばした。事前にマスターの父が開けていたベランダへと続く窓を抜けそのままマスターは花壇に頭から突っ込む。

「しまった、間に合わなかったか!」

と、慌てて玄関からダ・ヴィンチちゃんが家へと帰ってくる。姿を見ないと思ったら、どこか遠出をしていたらしい。彼女にしては珍しく慌てた表情である。

「カルデアから姿を見ないと連絡があつたと思つたら……やつぱり自力でここに来てたのか……」

「あら、レオナルドさんのお知り合いだったの?」

「ええ、まあ我々の仲間といいますか……とにかくカルデアの一員でして……」

天才ダ・ヴィンチちゃんが嘘にならないように細心の注意をはらいながら清姫の説明をしている間、清姫とマシユは花壇に埋まってしまったマスターの頭を必死に掘り返していた。こういう時は仲の良い二人である。

「へえ、清姫ちゃんもあつちでうちの息子とね……父さんの血かしらね……」

「か、母さんその話は後にしないか、な？」

「はい旦那様、お口を開けてくださいまし。良く味が染みたま卵です。さあ、さあ

……」

「むつ、先輩こちらのこちらの大根は良く味が染みて美味しいですよ！」

「……………」

その後無事にマスターが掘り返された後、とりあえずご飯が冷める前にと言うことで清姫も加えてテーブルで食事をしていた。マスターに食べさせようと箸で格闘しているマシユと清姫に挟まれ、非常に気まずそうにしているマスター。母と父の目線がすごく痛い。心に痛い。因みに今日の夕飯はおでんであり、アツアツのおでんをマシユと清姫は食べさせようしているので凄く熱い。両頬がものすごく熱い。

「まあ、なんとというかアグレッッシブな子でして……」

「まあはるばるここまで息子を追いかけてきた時点でそれは分かるというか……でも清姫ちゃん日本人よね？ お家はどこのの？」

「紀伊国でございます、お義母様。でも婚約の儀はこちらでも私は全然構いません！」

「なんか字が違う様な気がするのは私だけかしら。あと婚約自体認めてませんから」
 「紀伊……という和歌山あたりか、それでも遠くだな。しかし古めかしい言葉を使
 うんだね清姫さん」

「ああそれは私自身が平安じだ」

「はい！ 清姫さんこんにやくです！」

「あちゆい!? 火を噴けるからってこれはあちゆい!?」

あつあつのこんにやくを清姫の口に入れ込むマシユ。危うく神秘が漏えいする所
 であつた、嘘を嫌う清姫は自分の正体でさえも躊躇なく喋ってしまった。下手をすれば
 マスターの両親の記憶をいじらなければならない事態にもなりかねないので、マスター
 達三人は常に気が抜けない状況であつた。

「旦那様あ、舌を火傷してしまつたかもしれません。見て頂けませんか？」

「あちゆい!? たまごは！ たまごは止めてください！ ああでも旦那様からあーんさ
 れてるみたいで幸せ！」

「あ、アグレッツシブな子なんだね……」

色つぼく舌を出す清姫に無慈悲にたまごを入れ込むマスター。とりあえずこれで
 清姫に喋る暇を与えないのが一番だとマスターは思ったらしい。その後もマスター

「私たちは清姫が要らない事を喋ろうとした瞬間、おでんを口に突っ込むことを繰り返して、無事夕飯は終了した。」

「ひどいです……おかげでお腹は膨れましたが、おかげで本当に舌を火傷いたしました……」

「いえ、清姫さんが喋ってしまうこと自体がカルデアの機密事項に関わるので……」
「嘘を言っていないので、余計にひどいです……」

夕飯の後、マスターの両親が後片付けをしている間、マスターとマッシュと清姫の三人はソファアークに座ってテレビを見ていた。ちょうど午後のニュースがやっており、テレビという物自体見たことが無い清姫は、興味津々であった。なお当たり前のように二人とも隣に座るため、マスターは挟まれる状態になっており、非常に居辛い状況である。

「そして当たり前のように腕を組んで引っ張り合いをしているので肩が外れそう、痛い——」

「しかし清姫さんはどうやってここまで？」

「先ほど言ったじゃありませんか、旦那様と一緒に飛行機に乗っていました」

「え、でもカルデアのプライベートルジエツトにはダ・ヴィンチちゃんと先輩と私以外の生体反応は……」

「いえ、乗ると言っても飛行機の上です」

「飛行機にしがみついていたのですか!？」

「ええ、旦那様の為ですもの。しかしながら途中で横風のせいで振り落とされてしまつて……下が海じゃなかったら危なかったです」

「いえ、下が海でも十分アウトな気がします」

清姫の凄まじいまでの愛のなせる業に若干引きながらも少しばかり尊敬するマシユ。困みに頭にあつた角も愛の力でどうか隠しているらしい、愛、愛つてなんだ。

「それから、しばらく街を彷徨っていたのですが。旦那様のお義父様が私を見つけてくださった……ああまさにこれは運命……」

「凄まじい幸運力ですね。確か清姫さんの幸運はEだったはずですが……」

「愛の力です!」

「便利ですね、愛。……先輩?」

ふと二人に挟まれているのに何も反応が無いマスターを不思議に思ったマシユがマスターに声をかけるが、返事も何もない。何かと思つてマスターの顔を覗いてみると、マスターはテレビで合っているニュースをただじつと見つめていた。

「先輩、そんなに真剣に何を……」

「?」

マスターは清姫に、街中で何もしていないかと氷のように冷たい声で清姫に尋ねる。その声に驚いた様に清姫はマスターを見つめるが、マスターは清姫を一瞥もせず、ただテレビのニュースを見ていた。

ニュースには、焼き焦げたアパートが映し出されていた。犠牲者も多数出ており、ニュースではそのアパートはある悪質な詐欺業者が使っていたとされる部屋から出火していたことから、何者かが強い恨みを持って放火したのではとの見解が出されており、目撃者もいまだに出てきていなかった。

「先輩、これって……」

マシユが驚き、テレビを見つめる。可能性は十分あった、他の英霊なら目の前の惨状が起ころうとも自制が利くものが多いが、清姫は嘘にだけは自制という物が利かなかった。それは彼女を構成する部分であり、精神の根底にある部分。彼女は嘘を許せないのだ、それが起こると本能に近い怒りで炎を吹き上げる。それは「嘘」だけを焼却する炎、そこに良いも悪いも関係ないのだ。

もし、彼女が本当にこのテレビに映っている惨状を起こしたのだとしたらマスターはどうするのか。

決まっている。彼女を「敵」と判断する。無辜の人々を傷つける「敵」だと判断し、躊躇しながらでも令呪を使い、自害をさせてでも彼女を英霊の座へと強制送還させる。

それは彼の冷酷な覚悟の一面であつた、彼は敵には情をかけるが、容赦はしない。人理を救う旅の様々な出会いで彼が磨かれてきた一つの覚悟であつた。「因みにそんな日々暖かい彼の冷たい一面はどこかの女神と母には大うけらしい」

「いえ、違います。この清姫、魂に懸けて旦那様のお手を煩わせることはしておりません」

だが、清姫も真直ぐマスターを見つめながらそれを否定する。少しばかり声が震えているのは、信じてもらえないか分からない不安の表れであろうか。しかしながら清姫の性質上、嘘をつくというのはあり得ない事で

「よ、よかつたあ……」

と、しばらくの静寂の後、体中の空気が抜ける様な溜息をつきながら、ソファアーへと体深く預ける。安心した様に笑う姿は何時もの通りのマスターであり、先ほどの冷たさ何て元からなかつたみたいで、マシユもほつと安心する。

そもそも一線を越えたのなら冷酷に敵とみなすが、一線を越えていなければ生前どんな悪逆を行ったサーヴァントでも笑顔で受け入れ信じるし、一線を越えようする者がいるならば全力で阻止しようとするのがマスターであつた。「そんなこちらが心配になるほどの深すぎる懐が特にアヴェンジャー系サーヴァントに受けている」

「謝ることはありません、私も自分の性格は十分に把握していますので……疑われることは仕様がなないので。でも良く疑いもせず信じてくださいました……これはやはり婚約するしかないのでふあつ、ひやつ……」

「むっ……」

何時もの調子に持っていこうとする清姫を遮るように、マスターの手が清姫の頬を柔らかに包む。マスターの指が優しく清姫の頬を撫でるたびに清姫から熱い吐息が漏れ、興奮のあまり清姫の頭から小さく角が生えてきだしている。綺麗な青い目は清姫をじっと見つめ、清姫は逸らすことも出来ず、そのまま長い時間が――

「せんばいっ!」

「――っ!?!」

「ああ……もうちよつと……」

流れる前にマシユがマスターのふともを爪で掴って無理矢理中断させた。マスターからしてみれば、清姫を疑ってしまったケジメというか、清姫が落ち込んでいたので元氣を取り戻してもらおうとしてやった事なのだが、周りからしてみれば只のプレイボーイである。これも何処かの女性経験豊富なサーヴァント達が旅をする中、マスターがそういったことに疎かったのをいいことにあれよこれよ要らぬことを仕込んだのが原因なのだが、やられる方は得しかなないので誰も突っ込まないでいた。

「へえ、何だか知らないけどあんな乙女ゲーみたいなこと無意識でやったわよ。なんだか昔の誰かさん思い出すわねー」

「勘弁してください……」

なんだかあくまのような笑顔で笑いかける母と、その笑顔を受けて顔をそらす父。

こちらもなんだか色々とおつたらしいが、マスターの父があまり語りたがらないのでマスター一家最大の謎なのであつた。

「あつ、そういうや清姫君は明日で強制送還だから」

「えっ」

「当たり前だろう？ 正式の手続きもせずに来たんだから、解雇されないだけマシと思いたまえ」

とそうしているうちに、お風呂^{ダ・ヴァイン}上りのモナリザ^{チヤ}がワイシャツ一枚で髪をタオルで乾かしながらリビングに入ってきた。その色つぼさに思わずマスターの父とその息子は見入ってしまうがどちらも人生のパートナーから思いつきり太ももを抓られる。こういう所は父親似らしい。

「そんな、旦那様の実家でらぶらぶ新婚生活は……」

「そんなものとはとりあえず君の性格をどうにかしてから言いたまえ。あ、清姫君の寝室は私の部屋だからね、今夜は夜通しお説教だゾ☆」

「~~~~~や~~~~~!!」

清姫の絶叫があたりに響く、今夜はなんだか賑やかになりそうな予感をマスターの母は感じて、また娘が増えるのかなと一人面白そうに笑っていた。

「いただきます」

「いただきますだべ」

「いた殺だきま殺す殺」

翌日、穂群原学園の昼休み。前日と同じくマスターと学友たちはお昼になるとやってくるマシユと机を合わせて昼食と取っていた。いつも通り殺気がむんむんである。

結局清姫は一日中嫌がったが、マスターの父の言い訳に嘘を感じ取って火を噴こうとしてしまい、マスターからもお叱りを受けて渋々強制送還を受け入れた。今はダ・

ヴィンチちゃんと港で迎えるの船待ちである。マスターの護衛と冬木の調査のためにサーヴァントを何人か調査用の器材と共に船に積んでいるらしく、その入れ代わりでカ
ルデアへと戻っていく手筈らしい。

「?」

ちよつと可哀そうだったかな思いながら、マスターも自分のお弁当を食べようと鞆を探るが、どうもお弁当の感触がしない。マスターから血の気が引く。

「……………」

「先輩、お弁当を忘れてしまったのですか？」

「あらまー、今行つても学食混んでるべー。オラのほうれん草食べるけ？」

「マシユちゃんにあらんなんかするから、天罰が下つたんだらう」

「まったくもつて同感である」

二人の学友を殴りたい気持ちを抑えながら、お弁当忘れたことで不機嫌になる母の顔を浮かべ、大きくため息をつくマスター。こうなるとマスターの母の不機嫌は数日間続くのだ。

「せ、先輩。でしたら私と半ぶんこなんてどうでしょう。そのお箸は一人分しかないのです。その……食べさせあいになつてしまいますが」

「だれか割り箸持つてこーい!!」

そうはさせるかといたるところからマスターに向つて投げられる無数の割り箸、アンミリテッド・チョップステイック・ワークスとでも言う様にあつと言う間にマスターの机にいくつもの割り箸が乗っていく。おのれ、それほど人の幸せが憎いかとマスターがニヤニヤしている学友に宴会芸のように口と鼻に割り箸を突き刺そうとした時、教室

のドアが開き一人の少女が入ってきた。

それはマシユを雪山に咲く白百合とするならば、その少女は風に舞う桜のよう。

一つ一つが上品な動きであり、学校に不似合いな着物姿がまたすれ違う人々の目を奪う。パーフェクト、まさにパーフェクト。正に可憐な日本美少女であった。

教室がしんと静まる。少女は手に包みを持っており、誰かを探しているかのようにで
あり。教室の男子は無いとわかりつつも、もしかしたらと言う妄想が止まらない。

「ああ、こんなところに居られたのですね！」

そして、その少女は誰かを見つけたように声を上げると、パタパタと小走りで駆け寄っていく。

もしかしたら止まらない男子たちがその足が自分に向ってくるのではと淡い期待を抱きながら、敗れていく。

「せ、せんば……」

そんなことに気付かず、箸を持って勝手に学友のおかずを食べていたマスターはなぜか顔を青くしているマシユに首をかしげる。

何故そんなに焦っているのか検討が付かないでいるとマスターにふわりと良い花の匂いが包んで来た。良い匂いだと思っっているのも一瞬、なんだかとても身に覚えのある匂いにマスターは何かを感じづき、ゆっくりと後ろを向く。

そこにはいるはずのない

「お義母様から頼まれて、お弁当を届けました。旦那様♡」

何かが破裂するかのようには教室から殺意があふれ出し窓ガラスが砕け散った。

マスターの明日はどっちだ。

「清姫ちゃんにお弁当渡したのだけど、大丈夫かしら」

「大丈夫さ、なんせ一人でここに来たんだから」

お昼が過ぎたころ、珍しく休みを取れたマスターの父は昼間つからマスターの母と、ソファアで抱きしめあいながら映画を見ていた。

「あら、宅配便かしら」

「ああ、良いよそのままで、俺が出るよ」

すると、玄関から呼び鈴が鳴り、だれか家に来た事を知らせた。妻の頭を撫でながら、玄関にへと向かうマスターの父。はて、宅配便でも頼んだらうか、なんだか嫌な予感がするが気のせいだと言いつい聞かせながらドアを開ける。

「はい、どちら様でしょうか？」

「ハイ！ えーっと——君のお家デース？ こーこ？」

が、ドアを開けるとそこには宅急便ではなく、南国のお姉さんが立っていた。ホツトパンツに、シャツからは豊満な胸を覗かせており、向日葵を思い浮かぶような優しい太陽色の髪をしていた。

「ああ、また息子の名前……」

「オーウ！ 息子ってことは貴方あの子のお父さんネー!? んー！ 初めまして！」

なんだか悪い予感的中してしまった父に、目を輝かして抱き着く南国のお姉さん、ついでに両頬にキスをするのは正にドラマで見る様な挨拶であり

「あーなーたー?」

妻の嫉妬心を煽るには十分な行為であった。

—————
マスターの父の明日はどっちだ。

妹、巻き込まれるく無理矢理帰省編く

多くの摩天楼が立ち並び、その下を人が行き交っている。道路に車は絶えることなく、電車にはすし詰めされた人たちが互いを押しながら流されていく。

そんな冬木から遠く離れた大都会に、一つの女子校がある。その中ではトツプクラスの高校であり、様々な秀才やお嬢様たちが通う花園。――流石に金ドリルはいない――

そんな花園に通う一人の少女の口クでもないことに巻き込まれた話。

「じゃあ、この問題は……」――さん、お願いね――

「はい」

一人の少女が先生に当てられ、黒板へと向かう。薄い赤の入った色の髪の毛と目をしており、小さな顔立ちに真ん丸とした大きな目が合わさって全体的に幼く、小動物的なイメージを持たれるが、細い腰つきの割に、胸などは周りの生徒と比べてもなかなか大きい部類にであった。

「……はい、正解です。流石――さんね。この通りこの問題はこの公式を応用して

「……さんって頭良いよね。今回入学した一年生の中でもトップなんでしょ？」

「そうそう、それにおしとやかだし、誰にでも優しいしね。今度の生徒会選挙でも生徒会長から推薦されたつても納得かも……」

教室で流れる噂を特に気にする様子もなく席に座り、少女は誰にも見えないように机の中に入れていた封筒を中から取り出す。中に入っているのは一枚の手紙と写真。

学校に行く前にポストに届いていたものだ。この現代社会においてわざわざメールも使わずに送ってくる自分の母はまだ機械音痴が治っていないのかと苦笑する。|
そういう少女も全くの機械音痴である――

「……帰ってきたんだ、兄さん。別に帰ってこなくて良かったのに」

写真には、いつも通り変わらない自分の兄とその隣で幸せそうに微笑む謎の美少女。|
変わらない笑顔で幸せそうに笑っている自分の兄に心の中で舌打ちをする。まっ
たくもつて忌々――

「ふん、そのまま彗星のガスで目覚めなければ……は？」

「いやいや、隣の美少女は誰だ？　なんでうちの兄さんと幸せそうに腕組んでるの？」

「誰だこの外国人!?　誰だ!？」

「いやいやいや、あの兄さんに彼女？　まさかそんな……あんなぐだぐだ男を好きにな

る女の子なんか……」

いやいや、有り得ない。と、現実から逃避するように小さく笑いながら、残っていた手紙を開く。どうせ合成写真でしたとか、ドッキリでしたとかに決まってる。心の中でそう思い込みながら、手紙を開いていくと、そこには

「お変わりないでしょうか、これを見ているとき貴方は写真を見てとても驚いていることでしょう。そうです音信不通だった親不孝息子が帰ってきました、それも嫁を連れて。とても心配りの出来て良い子です、一度会ってみることをお勧めします。というか、彗星ガス事故から貴方も帰ってきてないのだから一回帰ってきて下さい親不孝娘
母より」

とだけ書いてあった。……嫁？

「YOMEIっ!? あっ……」

思わず少女は立ち上がり叫ぶが、その後すぐにしまったという様に顔を引き攣らせらる。教室にいる全員が少女のいきなりの行動に目を丸くしていた、今は授業中ということですっかり忘れていたのだ。

「おいおい、授業中に謎の奇声をあげたんだってえ？　とうとうお前の化けの皮もはがれる時が来たか！」

「止めないか、君だって授業中読んでる漫画に感情移入しすぎて叫んで先生から廊下に立たされたことあるだろう」

「その時感涙もしてたから、困惑する先生も合わせてなんだか映画の」

「あーやめやめこの話止め！」

「あー……」

昼休み、廊下を歩いていると三人の学友が塞ぐようにして話をしてきた。知的な少女、野性味あふれる少女、ほんわか少女という水と油並に混ざり合わない性格の三人だが、何気に気は合うのか、それともほんわか少女が卵の役割をしてマヨネーズと化しているのかは分からないが、いつも一緒にいるメンバーであり、よく少女に絡んでいた。

「じゃあ、私はこの辺で……」

「だー待て待て！　なんか一通り話し終わったみたいなの雰囲気出して逃げようとするじゃない！」

「じゃあ、私急いでの……」

「完全に避ける気じゃねーか！　待て待て待て！　あれだ兄ちゃん帰ってきたんだろ！」

絡まれると面倒くさいので避けようとしていた少女の足が止まる。

「なんでアンタ知ってんの……」

「母上かーちゃんから電話で聞いた。偉く大騒ぎだし、つて。確か外国にバイト行ってたんだよな？」

少女は思わず顔を押しさえる。この三人の中でも野性味あふれるのとは少女は子供からの付き合いであり、母親の付き合いもあってお互いの家庭事情にはなぜか詳しくあった。そして昔っから頭悪いはずなのに偏差値が高いこの学園にこの野生の黒豹が来れているのかも少女にとっては謎であった。

「ほう、兄君が居たのか。初耳だな」

「お兄さん……つてことは……さんに似てるのかな？」

「それがさーぜっせん似てないのさ！……の兄貴から良く遊んでもらってた

けどさ、性格も……と真逆っていうか……ふぐっ!？」

「あら、誰との性格が逆なのかしら？」

「いでででで！ やめてアイアンクローはやめて！」

どうも少女は兄の話題と関わりといつもの自分ではいられない。猫を被るのを忘れ、目の前の学友をアイアンクローで締め上げる、すると学友が暴れた拍子に、少女が持っていたファイルから、兄の写真が一枚こぼれてゆつくりと床へと落ちる。

「む？ 写真が落ちたぞ。 どれ、私が拾おう」

「あつ！ ちよつ……！」

「わ、可愛い子……隣にいるのは……」

「おー、それぞれそれが――の兄貴！ って隣の美少女は誰だー!」

少女のアイアンクローから逃げ出した黒豹の学友が写真を見て絶叫する、どうも少女の兄が帰ってきたのは知っているが、謎の美少女を連れて帰ってきたことは知らされてなかつたらしい。そのまま床に倒れ伏せて、かさかさというかじたばたというか何だか虫が這いずりまわるようなもがきを見せている。女の子というより人間が見せてはいけない姿である。

「マジか……兄ちゃんマジか……信じて送り出した兄ちゃんが外国人の美少女にドハマりして幸せダブルピースフォトレター送ってくるなんて……ジョン万次郎かよ……」

「なんでアンタが一番シヨック受けてんのよ……というか、なによその最後の意味不明なジョン万次郎は」

「なんだ、もしかしてあの黒豹……」

「しー、あの子もそういう時があつたんだよ……」

床で這いずりまわる物体に、憐みの目線を向ける学友二人。 同じ学友の余りのシヨック具合に二人は黒豹の学友が持っていた淡い……淡くはないかもしれないがそ

んな気持ちを感じて合掌をしているが、少女には悪い何かに憑りつかれた黒豹の学友を除霊しようとしている学友二人の凶にしか見えなかった。

「対象を確認……いつでもいけますが……」

「まあ、待て。只の誘拐と思われなくちゃいけねえ」

学園の外に、そんな賑やか少女たちを遠くから見ている謎の者たちが居た。一人は細くやせ形、静かな雰囲気とは裏腹に底なしの狂気を内包した姿であり。一人は

一人は背の高い筋肉質の男、無害そうな笑い方をしているが、何を思っているか他人に全く悟らせない人物であり、ある意味一番の危険人物であった。

「しかし、なんで妹君を狙うのですかキャプテン……まったくもってこちらにプラスが無いと申しますか……ぶっちゃけクリスティーヌを敵に回すだけなので帰りたいのですが……」

「なーに、俺様には計画があるのさ、誰にも予測ができない最高で最大なの……ふっふっふ……くっくっく……でゅーふふwwwデューフツフwww又カコプウwww」

女子校の前で、気持ち悪く高笑いする謎の大男、通りを行く人々が怪訝な目で見つめ、それを見た小さな女の子が指を指すが、見ちゃいけませんと母が目隠して連れ歩いてい

く。　　なんだかロクなことにならない予感がしていた。

「いい加減に立ち直りなさいよ、兄さんくらいでそんなうじうじして……」

「うるせー……兄ちゃんとは小さい頃結婚の約束……はしたこともないけど、フラグ立ってたじゃん？　入学祝いに、似合うからって綺麗な髪留めくれたじゃん？　完全に親友の兄との禁断の愛ルートじゃん？」

「立ってないわよ、兄さん素であれよ。　そもそも自分で高校まで家族としか女性とは手を繋いだことがないって嘆いてたから、妹みたいな存在にしか見られてないわよ、貴方」

「……ぞとばかりに止めを刺すなよ!!　兄ちゃんだぞー……顔は良いのに全くモテる気配のなかったあの兄ちゃんがだぞー……てかそもそも男子校だろー……どこで見つけてきたんだよー……」

学校も終わり、運動部の生徒も校庭でそれぞれの競技の練習をし始めたころ。　少女はいまだに落ち込んでいる黒豹の少女に付きまとわれ食堂まで連れてこられていた。

野性味あふれる少女はこの後部活動があるというのに、なぜか牛丼をやけ食いしており、これで三皿目である。

「それに、オマエはどうなんだよ。自分の兄さん取られて思うところ無いのかよ……」

「あるワケないでしょ。なんで兄さんが彼女連れてきたくらいで目くじら立てなきやいけないのよ、どちらかと言うとあんな男選ぶ彼女さんの方を……」

そういつて、少女は頭を抱える。……そういえば彼女じゃなかった

！

「ほら、オマエだつて頭抱えてんじゃんか、素直にお兄ちゃん取られたくない……なんだこの手紙？」

ブーブー言ってくる学友の前に一枚、母から送られた手紙を広げる。学友はそれを怪訝に思いながら読んでいると、ある一文字を見つけたとたん血相を変えて席を立ち上がった。

「YOMEEー!? 嫁つておま、彼女できたとかのレベルじゃねー!? なんなんですこの子はー!?」

「はーい、全く同じ反応をありがとう」

「なあ! 実家帰るんだよな!? 明日から祝日重なつて連休だし!」

「帰らないわよ、なんでわざわざ兄さんの顔見に行かなきゃいけないのよ馬鹿馬鹿しい」肩を揺らしてくる学友を鼻で笑う少女、此処からだど高速バスか、新幹線でも使わな

ければいけないし、大体少女には行く気なんてさらさらなかった。テストも近いし、兄の顔を見るぐらいなら勉強でもした方が何倍もマシだと思ったのだ。

「よし！ 私もついていく！ 準備してくるからおいていくなよ！」

「話聞いている!？」

が、色々と頭がパンクしている学友にはそんなことは一切お構いなしと、残った牛丼を掻き込むとその場からものすごい速さで家へと向っていった。正にジャガーである。

一人残された少女は溜息をつきながら学友が残していった皿を返却口へと返すと、どうやって学友を説得するか考えながら、自分も帰ろうと食堂を後にした。

「——ん？」

が、玄関へと向かっているうちに少女は何かの違和感に気付く。赤く染まる夕暮れ、土足でありながらいつも綺麗な廊下、自分の足音しか聞こえないくらい静かな

「今、部活動の時間じゃ……」

否、静かすぎるのだ、部活動が始まり、生徒たちが多く行き来するこの時間帯に少女は誰ともすれ違わなかった。少女が今いる廊下を見渡しても誰一人として少女以外に人が居ない。

「誰もいない……？　先生……？」

流石に不気味に思った少女が近くの職員室の扉を開く。この時間帯ではまだ学校職員は帰宅していないであろうし、誰かしら絶対にいるはずなのだが――

「うそ……」

職員室でさえもまるで伽藍の堂、誰一人として姿は無かった。しかし、机の上の書類は出しっぱなしであり、パソコンだつてつけたままの状態であつたためこの直前までは人が居たのは確かであつた。

「皆、何処に行つてしまったの……？　そうだ、携帯……」

思いついた様に、折り畳み式の携帯を取り出すが、当たり前のように圏外になつており少女を嘆息させるだけであつた。いよいよもつて自分が異常な事態に置かれていゝことを実感してきた少女は、とにかく走つて外を目指すことにする。

誰もいない廊下に少女の足音だけが響いていく、玄関に着いた少女はそのまま外に出ようと流れる汗も拭かずにそのまま扉に手をかける。

「……?!?　なんで、鍵が……?!?　開かないっ……!」

が、その扉さえ鍵が施錠されており、こちらから鍵を開けようとしても何か強い力に抑えられているかのように動かない。

まるで学校が少女を自分の中から出さないようにしているかのようにだつた。　常軌

を逸した事態に、半ばパニックなつてきている中、一つの足音が少女の背後から聞こえてきた。

少女は天の助けとばかりに振り向いて、声をかける。

「良かった、私以外にも学校に……ひ、と?」

「ああ、クリスティーナの妹よ。残念ながら私は人ではない……この身は憎しみの詰まった只の肉袋、醜き憎悪の幽霊が動かしている只の人形であるが故に」

それは、人の形をしているが、明らかに人の雰囲気や身にまといていなかった。細い長身に、まるで舞台に出る様な衣装姿、顔の片側だけ仮面をつけており、そして鉤爪のように歪に変化した爪は人のモノではなかった。

「だ、誰……?」

「おお、なるほど……声がクリスティーナにそっくりだ……喉が震えて出る声ではない、我が姿を見て恐怖をした時、魂の震えからでるその声が……」

その男の眼のはまるで少女を見ていなかった、まるで遠く誰かに思いをはせているかのように遠くを見て、自分の肌にもその鋭い鉤爪が食い込むことも構わず自分自身を抱きしめる。

その光景は、異様であるが、美しくもあり、その相反した光景が深く少女に恐怖を抱かせる。

「ああ、クリスティヌ。けれど君は昔の君のように私を受け入れてくれたね……ああクリスティヌ、クリスティヌ……！」

「貴方は一体誰なの……！ 私はクリスティヌじゃない！」

少女が叫ぶと、男はゆっくりと少女を見据える。その眼には凍える様な悲しみと燃える様な怒りが同時に存在しており、底なしの狂気が彼を渦巻いてるかのようだった。

「もしかすると我がクリスティヌになっていたかもしれない緋色の乙女よ、そうとも、お前はクリスティヌではない。我がクリスティヌは『――』ただ一人

……」

「兄さん……!?!」

「さあ、お喋りは終わりだよ。クリスティヌの妹よ、どうか手間を取らせなくてくれ」

その言葉と同時に鉤爪がせわしく動き、男はゆっくりと少女へと近づいていく、明確な死が近づいてくる様に少女は逃げまどい、そこらにある物を手当たり次第に投げつけるが、何を投げつけようとも、男の鋭い鉤爪が意にも介さず容易き切り裂いていつていまい。

「ああ、緋色の乙女よ。何を怖がっている？ 恐れることは……っ!?!」

突然、白い粉の様な物が辺りに散らばって行き、男の視界から少女が掻き消える。

足元には先ほど男が切り裂いた赤い円筒状の物体が転がっていた。

「……………これは、消火器。　　というものだったか……………?」

男は音で、少女が階段を使って上へと向かったのを確認すると、ゆっくりと歩きながら少女を追い始める。

「しかしながら、流石はクリスティヌの妹君……………機転の利きようは憎きシャニユイ子爵の様……………」

白き霧を纏いながら不気味な仮面と共に歩く様は正に怪人と表現するにふさわしい姿であった。

「……………はあつ、はっ!」

少女は必死で走っていた、時に躓き、時に物に当たりながら必死にであの男から逃げていく。「常に優雅であれ」と少女の母はいつも言っていたが、今はそんな言いつけを守るほどの状況ではなかった。

「ああ、何処に行こうというのか。　　その体に傷がついてはいけないというのに」

「っ!?!」

だが、隣の教室の扉が開いたと思うとあの男がゆっくりと出てくる。　　先ほどまで下

の階にいたはずなのに一体どうやって来たのだろうか。そもそもどうやって教室の中で待ち伏せをしていたというのか。

少女は恐怖のあまり尻もちをついてしまうが、それでも逃げようと四つん這いになりながらも逃げていく。相も変らず男は、只ゆつくりと歩いて少女を追いかけていく、まったくもって捕まえようとする気が見られない。しかし狩りを楽しもうとする気配は男からは全く感じられず、まるで何かを試そうとしているかのようである。

「……はあ、近寄らないで！ こっちに、来ないで！」

「おお、緋色の少女よ。もうこれで御仕舞なのかい？ ああ、駄目だ自分で顔を隠しては……恐怖の時こそ顔を上げなければ、誰がその顔を見るところなんだい。顔を隠すのは決まって醜い怪物なのだ……」

「いやっ！ 助けて！ 誰か助けて！ ……兄さんっ！」

「ああ……ならば仕方がない。緋色の少女よ、痛みは無い……安心して眠りにつくがいい」

ついに追い詰められた少女は、ゆつくりと向かってくる鉤爪に目を深く閉じる。知らずと彼女のポケットからゆつくりと写真が一枚零れ落ちて、裏返る。すると妙な紋章が写真から浮かび上がり、鈍く光り出した。

「……キャプテン、作戦変更です。 ……キャプテン？」

「とーーーーーうー！」

と、一人の男がガラスを突き破つて少女の前へと立ちふさがった。黒い髭の生えた長身の体格の良い男で大きなマントを羽織つて、手にはなぜか海賊が持つている様なマスケット銃と鉤爪を持っており、ハッキリ言つて目の前の仮面の男よりも奇妙であつた。

「だ、誰……?」

「誰だ誰だと聞かれたら答えてあげるのが世の情け! 美少女の叫びを聞きつけ海賊マントを引つ提げてやってきた、貴方だけの救世主、人呼んで髭黒、イズヒア!」

「は、はあ……?」

先ほどの間でホラー的展開がぶち壊しであつた。いきなり、目の前に現れて聞いたこと以上に喋りまくりわざとらしくウインクしてくる謎の髭黒に少女は只々困惑するだけである。

「さあ、怪人フアントムよ! 大人しく彼女から手を引くでござる! さもなくばこの髭黒の銃が火を噴くことに……」

「ああキャプテン、計画変更です……早くここから」

「ちよちよちよ、フアントム殿! ちゃんと台本通りにしてもらわないと困るでござる! このままではマスターの妹ちゃんをかつこよく助けてベタぼれしてもらつて第

二章は二人でイチヤイチャしながら解決していくという作戦が……」
「ですから、その計画が……」

「あの、全部聞こえているんですけど……」

小さく話しているつもりだろうが、少女にまる聞こえである。もはや少女には何が何だかわからない、謎の怪人から襲われたら次はなんだか気持ち悪い怪人が来て打ち合わせをし始める、一体自分が何をしたというのか。

少女は自分の運命を強く呪った。あとついでに関係者らしい兄も呪った。

「ほら、もう一回！ 栄光の主役の座を勝ち取るためにはこうやるしかないでござやる！」

「いえ、ですから。それ……」

「もー、何が不満でござ……あれ？」

仮面の男床を指を指す方へと黒い髭が顔を向けると、目玉が飛び出さんばかりに目を開いて驚き始める。紋章が浮かんだ写真が誰かにメッセージを送る様に点滅している。

「あ、あれーっ…… これってもしかして……」

「もしかしてです、バレました。昔話の君が血相を変えてこちらへと来るでしょう」

「馬鹿ー!? なんてそういうことは早くいつてくれないのー!?」

「ですから先ほどお伝えしよう」と

「……バイクの音?」

怪人同士が言い争っている間に、少女の耳には都会では珍しくないバイクの音が聞こえてきた。その音はどんどんこちらへと近づいてきており、その音に少女は疑問を持つ。

無論、バイクで登校なんて禁止されているし、そもそもここは学校の三階、バイクの音が近づいてい来ること自体おかしいのだ。それも上から。

「失礼します」

「えっ、きやつ——っついでいやーっ!?!」

すると、何者かに抱きかかえられる感触の後、少女はそのまま窓から外へと投げ出された。体が宙に浮く感覚が今から下に落ちるぞということを思い知らされ、少女は絶叫するが、その直後、今まで自分がいた教室が盛大に爆発した音でかき消される。

「お、おち——?」

そのまま少女は地面へと真つ逆様、地面へと激突するかと思われたが、何時まで経っても衝撃がやってこない、恐る恐る目を開けてみると誰か自分を抱きかかえて立っていることに気付いた。

「ごめんなさい、怖がらせてしまいました」

見ると、抱えているのは自分とあまり変わらない年の少年。まるで忍者の様な衣装とマフラー、赤い髪を目元まで伸ばしており、髪からうつつすら見える目もまた髪と同じく、燃える炎のように真っ赤であった。

「えつと、どなた？」

「ああ、名乗りもせずに見えません。怪しい物ではありません、えーつと……小太郎とお呼びください。妹殿」

もはやこの空間に怪しくない者がいる者か。仮面をつけた怪人、なんか変な髭、それに忍者風の少年。いよいよもって少女はこれは夢じゃないのか、夢であつてくれと思いはじめた。

「大変混乱していると心中お察しします。まさか自分達もこのような事態になるとは想定外で……」

「い、いえ……もうこつちとしてもついていけないというか……自分『達』？」

「はい、もう一人自分と同じく主殿から頼みを受けた、」

と少年が喋っていると、空から一つの影が少年の隣へと落ちてきた。

「金時殿という頼れる御人が僕と行動を共にしてくれています」

それは、ライダースーツに身を包んだ大男。輝かんばかりの金髪に、スーツの上からでも分かるぐらいの肉体。サングラスをかけ、派手な意匠を凝らしたベルトを付け

たその姿はテレビで見る様なヒーローの様である。

「おう、風魔の！ 嬢ちゃんは無事か？」

「はい、金時殿。この通り」

「オーケイ、じゃ行くか！」

「行くかって、何処に？ 誰か説明を……というか降ろしてー！」

金髪の男が指笛を鳴らすと、爆発した教室からバイクが飛び降りてくる。そんなバイクに特に驚きもせず、赤毛の少年は少女を有無を言わずバイクのサイドカーに乗せると、自分は金髪の男の後ろに乗って、そのまま学校を走り去る。

校門を出る時に、妙な感覚が少女の体を通り抜け、学校の方を見て見ると部活動をしていた生徒たちが爆発した教室を驚いたように見つめていた。

「そんな、さっきまで誰も……」

「すまねえな嬢ちゃん、向こうの魔術は俺ツちもわかんねえから詳しいことはいえねえが、嬢ちゃんはいぶデンジャラスな結界に閉じ込められてて迎えに行くのが遅くなっちゃった」

「結界？ 魔術？ そんな子供みたいな……」

「残念ながら真実です。 本当でしたら知らずにそのまま学校生活を送って居れたのですが……どうも身内が暴走してしまって……」

ヘルメットを被らせられながら、少女はどんどん都市から離れて行つて光景と頬の当たる風の感触が、とうとうこれが夢じゃないことを認めざるを得なくなつて、深々と溜息をつく。

「あの、これ何処に向かつてるの？ 私の家はそんなに裕福でもないし、身代金なんか……」

「へへっ！ 聞いたか風魔の！ 流石は大将の妹、ゴールデンな凶太さと言うか。安心な嬢ちゃん、向かっているのは嬢ちゃんの家だ！」

「ええ、妹殿。今はとりあえず自分たちにまかせてください。説明はそこでちゃんといたしますので……」

「あー、そう。貴方たちも兄さんの知り合いつてわけ……分かったわ、兄さんにたつぷりと説明してもらうから……」

そのままバイクは、高速に乗るとものすごい速さで駆けていった。もうすぐ、日が沈もうとして、空が暗くなり始めた時だった。

「うっそ、信じらんない。もう着いたわけ……？」

「そりゃあ、俺ツちのベアー号はゴールデンにグッドスピードだからな」

「まあ、途中空も飛びましたしね……」

数時間後、少女は、マスターの妹は実家の前へ立っていた、新幹線でも一時間以上はかかるというのに、只のバイクでこんなに早く着けるとはマスターの妹は思っていなかった。

なんだか、途中森を突っ切ったり、空を飛んだりしたがそこはまあ、気にしないというか自分の兄に詳しい説明をしてもらうつもりではあるが。

「はあ、帰ってくるつもりなんてなかったのに……荷物も全部あつちに置きっぱなし……」

これで、今日何度目か分からない大きなため息をつくとき、実家のドアノブへ手をかける。

この向こうには兄がいる。本当は顔を見たくもないが、いろいろと説明をしてもら分ければならない。写真の美少女は誰か、後ろの二人は誰か、なぜ自分の日常をぶっ壊してくれたのか。聞きたいことは山ほどあるのだ。

息を整えて顔を上げるとマスターの妹は実家のドアを勢いよく開けて――

「マシユちゃん、清姫ちゃんと来て次は南国風のお姉さんってアンタって子はどれだけ節操がないのよ！ しかもその次はお母さんだあー!? アンタ自分の母親を蔑にして現地妻、いや現地母作るって一体どういう神経しているのよー!？」

「!?」

「オー、見事なレイネーラデース！ さてはお母さんけっこうな格闘技ファンデスね！」
「母は悲しいです……ぐすつ、マシユさんは分かりますがこの南蛮人とも密かに内通していたなんて……」

「せんぱーい!? お母さんそれ以上は先輩の骨が！ 骨がー!?」

—— そつと閉める。 なんか兄が母に人工衛星式背骨折り喰らっていた。 そして
周りには様々な美女たち。 ハッキリつてカオスである。

「家、間違えたみたい」

「え？ でも確かにここが主殿の……」

「間違えてるみたいー！ 連れてつてー！ 何処か遠くへ連れてつてー!!」

「嬢ちゃん!? ベアー号が嫌がつてるつて！ 待て待てエンジンを噴かすな!」

「あんなん誰が見たつてカオスでしょ！ いやー！ 小太郎君助けてー!」

「妹殿のキャラが先ほどと全然違う……!」

もはや、まだあの不気味な空間がマシだとジタバタするマスターの妹。 完全に猫の皮なんか剥ぎ棄て途中ででなんだか仲良くなった小太郎に抱き着きながら助けを求める。

あの中に入るのだけは死んでも嫌だった。

「む、娘が……」

「あ、お父さん！ 良かった、お父さんはまともだった！」

その時、丁度仕事から帰ってきたのか、マスターの父が驚いた様にマスターの妹を見つめる。それもそうだ、連絡もせずに急に帰ってきたのだから驚くはず――

「娘が……男の子侍らせて帰ってきた……！」

「えー!?」

と思つたら、真つ青な顔して家に入っていく、マスターの父。絶対に勘違いをして
いると父を追いかけるが、そこには

「へえー……息子も、息子なら。娘も娘ね……」

般若みたいな顔をしたマスターの母が立っていた。リビングのドアからはみ出して
痙攣している足はもしかして兄のものだろうか。

「だから、帰ってくるの嫌だったのよ……」

――妹の明日はどっちだ。

マスターと武蔵と、ときどきじいじ

「結局、世界救おうが何しようが給料は変わらないんだな」

「元々高い方だろうが、文句を言うな」

「あ、でもあの子は時給が上がったって喜んでましたよ」

「うむ、あの少年は欲があるのか無いのか分からんな……」

「因みにいくら上がったんだ？」

「えーっと、日本円で五十円」

「安い！」

此処はおなじみ人理継続保障機関カルデア……の食堂。世界が救われても彼らの仕事は続いていく、この頃は外界からの連絡も取れて時計塔や国連からの人員も増員されて交代制の二十四時間態勢でのメンテナンスもしなくても良くなり各自が十分な休息を取れるようになった。

なので、いつもはまばらだったカルデア食堂も常時賑わいを見せる様になり、厨房も増員の忙しである。

「しかしあの少年も真面目だねえ、もう戦う必要もないってのに日々トレーニングに励むなんて」

「ふむ、しかしながら近々あちらの上層部が少年の模擬戦を見に来ることもあるし、鍛えておくことには損はないだろう」

「といつても、もう戦闘シミュレーターの難易度もカンストしてますからね。いまはタイムアタックに執心してるみたいですよ」

「シミュレーターだ。ある意味あの子の成長具合が楽しみでもあるが、恐ろしくもあるな……んっ?」

と、白衣を着たカルデア職員が不意に何かに引つ張られる感触を感じて、後ろを見る。流石にもう、厄介ごととは無いと思いたいのだが……

「こ、子供……」

「わ、わあ、かわいい……あの子にどことなく似た可愛さですね……」

「……」

そこには小学校の高学年くらいだろうか、黒い髪と綺麗な青い目をした可愛らしい少年が白衣を引つ張っていた。なんだかどことなくマスターに似ており、この前もこんなことがあった気がする職員は素直に少年に話しかけることが出来ない。

「この前の時よりもずいぶん大きいな……」

「小学校高学年だな、この前の無邪気さや、奔放さよりも今の少年の大人しさが目立っているようだ……」

「……っ！」

すると、少年はどうかやら白衣のカルデア職員を男だと思っていたようで、引つ張っている白衣の人物が女性だと気付くと顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「この女性への耐性のなさは決まりだな……うむ、幼いところなるのか……」

「かわいいですね……」

マスター？の少年はそんな女性の視線に気付くと、あたふたしながら他の男性職員の背中に回り込む。それがまた女性職員にはツボに入るらしく写真を撮る始末である、白衣のカルデア職員に至ってはなんだか目が怖かった。

「おいおい、そんなにいじめてあげんな。ほら坊ちゃん、一緒に飯食うか？」

「……！」

「せんぱーい！どこですかー！」

「……!?!」

と、食堂の入り口からマシユが呼ぶ声が聞こえてくる。するとマスターは更に顔を真っ赤にしてテーブルの下に隠れるがデミ・サーヴァントがそんなことで見逃すはずがなく、机の下の少年をすぐさま見つけると、そのまま抱きかかえた。

「もう、勝手に歩き回ったらいけません！ その状態のマスターはいろんな人のゾーンに入ってしまうのですから！」

「！」

「おお、あのマシユ嬢がおねえちゃんみたいじゃないか、滅多に見られんなあ」

まるで珍しいもの見る様にカルデア職員は笑うが、小さいマスターにとってはマシユから抱っこされてなお注目を浴びるのが恥ずかしすぎるらしくマシユの腕の中でジタバタと暴れはじめた。

「先輩、余り暴れないでください。こうでもしないと先輩はまたすぐに、」

「う……もう！ おねえちゃん嫌い！」

「なっつ」

マシユにとっては地球が七回ほど滅びるほどの威力の発言に、マシユは石のように固まってしまい、その間にマスターはマシユの腕を退かして着地するとそのまま何処かへと走り去っていった。

「あー、あの子にとっちゃ恥ずかしすぎたかな。まあマシユちゃん、あの年頃の男の子は皆……マシユちゃん？」

「」

「気絶してるな……」

「よつぽどシヨックだったんでしょうか……」

「あー、有り得ないー！ あのと遮那王が女の子だなんて……しかもあの第六天魔王まで女の子ー!? この国は間違ってる！ 女の子がどうやって刀振るうのよー！」

「いえ、沖田さん的にはあの宮本武蔵が女の子と言う時点で割とシヨックなんですけど……」

カルデアの廊下で、そんなお前が言うなのバーゲンセールを開催しているのは、かの劍豪、新免武蔵守藤原玄信こと宮本武蔵と新撰組一番隊長、沖田総司である。因みに武蔵に宮本が付いてないじゃんと思いの方もいると思うが、苗字の「新免」の代わりに出身地である宮本を使っていただけなので、さほど問題はない。

「というか、この国女剣士多すぎない？ あの源氏の棟梁も凄い体だし、こりゃあ、あの上杉の毘沙門天の現身も女かも知れないわね……」

「歴史って分かりませんねー」

どう突っ込んだいか分からない会話をして歩いていく二人。二人は腕の立つ侍同士と言うことで手合せをして来たばかりであり、死合いにはどんな手でも使うという戦術観において非常に気が合っていた。今も手合せが終わってお腹も空いたし一緒

にお茶でもしようとした食堂を指している所である。

「ここつてうどんもあるのかしら、私お腹すいたー」

「ありますよ、食堂には西洋人風で日本出身のおかんとよばれる双剣使いのアーチャーが居まして……」

「何それ、すごく気になる！ 矛盾しすぎてすごく気になる！ あとで会いに……あれ、噂をすればあれ遮那王と弁慶じゃない？」

見ると、廊下の向こうに遮那王、牛若丸とその従者である弁慶が歩いてた。だがどうにも牛若丸の方は不機嫌な顔を隠せてはおらず、弁慶の方はそんな牛若丸をいつ爆発するか分からない爆弾を見ているかのように戦慄している。

「ああ、これはお二人方食事に向かっているのですかな？ 武蔵殿は噂はかねがね……義経殿もいつかは手合せ願いたいと楽しみにしております」

「え、ええ、それは光栄と言うかなんというか……良かったー弁慶は女の子じゃなかったー……」

「それで、弁慶さんはどうしたんですか？ その、牛若丸さん機嫌がすこぶる悪そうに見えるんですけど……」

「ああ、それは……」

「？」

と、弁慶の後ろからひよっこり小さな顔が二人を覗く。それは綺麗な青い目をした子供であり、武蔵と沖田がその視線に気付いて見つめ返すとその小さな顔は顔を真っ赤にしてまた弁慶の背中へと隠れた。

「えーつと弁慶さんってお子さんいましたっけ……う？」

「いえ、拙僧はこれでも仏に仕える身なので……破戒僧ではありませんが」

「……主殿です」

「主殿って……マスター？ そんなまさか、私の知ってるマスターはもつと大きくて、キリつとした美少……なんでもない」

「それがですな……ほらマスター殿、ご挨拶を……」

「……」

弁慶が恥ずかしがる少年を前に出すと、少年は顔を赤くして俯きながら自己紹介してまた弁慶の後ろに隠れてしまう。弁慶の服を握りしめて腰に抱き着く様は何だか親猿に抱き着く子猿の様でもあったが、何にせよこの子供が弁慶大好きだということは二人には理解できた。

「うわーまた小さくなっちゃたんですね。でも可愛いですね！ この前よりも大きくなってるのでしょうか」

「なんで小さくなってるの……」

が、そんな光景を見て齒ぎしりをする人物がいる。マスターに懐かれている弁慶を殺意のこもった目で見つめ、マスターが居なくなり次第即刻首を取ろうと鯉口を切ったりに戻したりしたりしている。

「……寺の裏で切る」

まあ、牛若丸なのであるが。これでもかとマスターにくつつかれていた弁慶を見て目からビームを出せるメジエド様もかくやと言う目力で殺意を送り、弁慶に冷や汗を絶やさせない。

「義経殿、もうそろそろ機嫌を直してくださいからぬか……」

「別に私は機嫌など悪くしていない。別に小さき主殿が弁慶派と知ってたとしても、大きくなった主殿は牛若丸派だと私は信じているのでな」

「ならば、刀の鯉口を切るのを止めて頂きたいのですが……」

どんどん増していく殺意に何とか鎮めようと弁慶が四苦八苦している間、武蔵と沖田はマスターに近づきその顔をもっと見ようとしていた。しかしながら恥ずかしいのか二人が来ると弁慶の体を壁にして顔を見せようとはしない。

「うーん、恥ずかしがり屋さんですね。このころから女の子は苦手だったんでしょうか？」

「赤面癖のあるマスターかあ……いいかも……ほら、お菓子食べる？」

「武蔵が懐から飴を取り出してマスターに差し出すが、マスターは弁慶の後ろから少し顔を覗かせるだけでまたすぐに引つ込んでしまう。まるで土竜の様であるが、そんな恥ずかしがり屋なマスターがなんだかツボに入ったのか、武蔵はなんと少しでもマスターの顔をじっくり見たくなり突然自分の刀から鏢を取り外す。

それは綺麗な細工がこしらえられた物であり、売れば結構な路銀になると武蔵自身が言っていた一品であった。

「鏢？ それでどうするつもりなんです？」

「いいからいいから！ ……ほーら、かっこいい細工でしょー？ 見てみないー？」

と、その鏢をマスターの前に持つていくと見せびらかすようにいろんな角度から見える様に動かしていく。

「……………」

すると興味を持ったのか、マスターが弁慶の後ろからひよっこり顔を出すと鏢を見つめ始めてきた。細かい細工がなされた鏢をもっと近くで見ようと少しずつ顔を出していくマスターに武蔵はにやりと悪そうに笑うともっと近くで見せるかのようにマスターの方へと近づいていく。

「ほら、持つてみる？ 綺麗だよー？」

「……………」

鏢を手のひらに載せてマスターの方へ持つていくと、マスターも鏢を手に取ろうと武蔵の方へ躊躇しながらも手を伸ばす。少しずつ亀が首を伸ばすようにマスターの手が伸びていき、武蔵の手のひらにある鏢へと触れようとする――

「獲ったっ！」

「!?!」

鏢を上へと投げてマスターの視線が逸れている隙に、マスターの手を掴みそのまま自分の胸へと抱き寄せた。そのまま抱きしめるようにしながらマスターの顔を覗き込む。

「フイーツシュ！ 釣れた釣れた！ 小魚で駄目なら海老で釣る。これぞ二天一流の極意！ うわーほんとにマスターなんだ、かわいいく！」

「それでいいんですか二天一流……あー！ ずるいですよ、沖田さんにも触らせてくださいー！」

「!?! べんけー！ べんけー！」

「ぬおつ、義経殿！ 流石にそれは死にまする！」

「動くでない、これは主殿を牛若派に戻すためのいたしかたない犠牲なのだ……」

美女二人に挟まれ頭から湯気が出そうなくらいに顔を真っ赤にしながら弁慶に助け

を求めるが弁慶はマスターが離れてしまったことで牛若丸の刀から逃げるので精一杯でありそれどころではない。結果マスターはむにむにの中ぶにぶにと顔を突つつかれたり頭を撫でられたりでやられたり放題である。

「わ、綺麗な目……こうやって見ると本当宝石みたい……」

「お肌もつるつるでぶにぶにですしねー下手したら女の子でも通じちゃいますね」

なんだかヒートアップしていつている二人にマスターは暴れて逃げようとするが、相手はサーヴァント、子供が敵うはずもなくテンション上がっているお姉さんたちはマスターの嫌だけど嫌じゃなくて抵抗するけど抵抗できない悔しさの表情が加わってなんだかさうに二人はさらにヒートアップする。

「なんだろう……なんだか……」

「なんでしようね……はい……」

「ねえ、マスター、お部屋でお話、しよっか」

「そうですね、廊下ではなんですし……」

「?!?!」

完全に肉食動物の目をしている二人に本能的な恐怖を感じるマスター。マスターは目が渦巻きのようにぐるぐるとまわっている二人を必死に説得するがまったくもつて耳を貸さない、頭に熱がこもり過ぎて正常な判断ができていないのだ。サーヴァン

トなのに。

「大丈夫、大丈夫。ちよつと着物とか着てみるだけだから……」

「そうですよ、ついでに新撰組の羽織袴も着せましょう。きつと似合いますよ……」

嘘だ、絶対それだけでは終わらないと彼女たちの目が、手つきが証明していた。飢えたライオンセイバーの群れにクー・フリーンを投げ込めばどうなるかなんて子供でも分かる、マスターは自分の母が言っていた「いい？ アンタは年上受けするから、一人で女の人に近づいては駄目、最悪食べられるわよ」という言葉を今更思い出して涙目になる。食べられるのは嫌だった。

「……じいじー！ じいじー！」

「ふふふ、弁慶は牛若丸の相手で……じいじ？ じいじつて……つ!?」

「マスターにお爺さんっていましたっけ？ エミヤさんはおかんですし……殺——っ!?」

マスターが涙声でその名を呼んだ瞬間、二人の背中に冷たい感触が走る。それは明確な死という存在が自分たちを覆う様な感触。死神が自分たちの首筋をなぞるような錯覚、振り向いたら目に映るのは首から離れた自分の体という確信めいた予感。

ギャグ空間に居てはいけない人物が自分たちの後ろに立っているという感覚が二人を動けなくする。

「……マスター」

その中で唯一後ろを振り向いて笑顔を見せるマスター。そのまま動けない二人を退かしてその人物へと走っていくが、彼女たちは振り向こうとしても明確な死のイメージによって振り向けない。

「……面妖な。だが、その光は失われず、眩しき程に輝いている。ならば肩に乗るがいい我が小さき契約者よ、未だ旅は終わらず」

「これ、じいじと言うかじょうじなんじゃ」

「しっ、少しでも動けば首が飛ぶ……」

マスターの楽しそうな笑い声と共に、ゆっくりと甲冑が刻む重い足音が遠くになって消えても弁慶たちが声をかけるまで結局二人は動くことも振り向くことも出来なかった。

そのあと廊下に元に戻ったマスターが寝ていたのをマシユが発見するまで、小さくなったマスターの消息は不明であった。その日、廊下で子供の笑い声と共に甲冑が歩く音が度々確認され、カルデアの謎に一つ新たな謎が加わったのはマスターには知る由は無かった。

「結局、マスターがああ姿になったのって誰のしわ……いや聞かなくてもいいや」

「しかし今回は一体誰が元に戻したのか……ダ・ヴィンチちゃんもパラケルスス殿も知らないの一点張りだ」

「それよりも、あの子、昨日マシユちゃんにあんなこと言っちゃったから機嫌を直すので大変らしいですよ」

「まあ、気絶するくらいだから……まあマシユが拗ねるなんてあの子にしかしないだろうしレアといえばレアだな」

翌日のカルデア食堂、相変わらず賑やかになった食堂でカルデアの職員たちが昼食を食べながら喋り合っていた。因みに今日の献立はエミヤのビーフシチュー、深い味わいと口に含んだ瞬間とろけるぐらいにとろとろに煮込んだ牛肉が売りである。

「因みにいつでも二人がコトに及んでも良いようにバイタルチェックは二十四時間体制だ」

「うむ、グラインドオーダー中に鍛え上げた観測術は伊達じゃない」

「先輩たちサイテーです」

「まったくだな……ルーラーたちに裁いてもら……ん？」

ふと、食事中白衣を引つ張られる感覚して、振り向いてしまう白衣のカルデア職員。回りの三人は察したのか無言で席を立てて厨房へと避難していった。

「……なんで毎回私なんだ……」

そこには、昨日見た青い目の可愛らしい少年。青い目からはうるうるとか何かを訴えかける様な目をしており――

「いた！ おかあさんいたよ！」

「でかしました！ 早くソリに乗せるのです！」

「早くしないとジャバウオックが来てしまうのだわ！」

と、食堂のドアを突き破ってくるのはクリスマスで仲良くなったジャック、ナーサリー、ジャンヌ・スパム・ダルク・スパム・オルタ・スパム・サンタ・スパム・リリーの三人組みである。後からマシユも戦闘態勢で食堂へと突入してきて、騒ぎに慣れない新入りの職員たちが何事かと騒ぎ出す。

「ああ、良かった。先輩なら貴女の所にいると思いました！ さ、ソリに！」

「ちよつと待て、何だその言いぐさ！ 完全に最初から私も巻き込むつもりじゃないか！？」

「まああああすたあああああ母はここですよおおおおお！」

「旦那様との愛の結晶ううううううう！」

「来たのだわ！ ジャバウオック達が来たのだわ！」

「おかあさんのおかあさんって鬼さんみたい！」

「言ってる場合ですか！ 行きますよ！ 最大出力！」

「待って！ せめて心の準備をさせてええええええええ……」

そのままマスターと白衣の職員を連れのまま、近くの窓を突き破って空へと舞い上がっていくソリ、かわいそうにここでもかなりの標高があるというのには実際には高熱確定だろう、厨房へと避難していた職員たちは静かに合掌する。

「世界は救われても堅物女史は救われないな……」

「悲しいですね……じゃあ私エミヤさんのビーフシチューおかわりしてくるので……」

「南無……じゃあ自分も……？」

と、折角厨房にいるのでお代わりしようと鍋の方へと向かうが、なんだか下にある柵からガタゴト物音が聞こえてくる。

何かと思つて三人が覗いてみると。

「お聞きしたいことがあるのですが……」

「ますたあ、ご存じじゃありません？」

人が詰まっていた。

職員の明日はどっちだ。

マスター、帰省するくわくわくぎぶーん編く

流れるプールにきのこの大型ウォータースライダー、波が出るプールと様々なお客様のニーズに合わせた遊び場に、プールサイドには白い人工砂によって美しい海の砂浜を再現し、まるで本場ヨーロッパのリゾートの海に泳ぎに来たように錯覚させるようなゆつたりとした空間を実現させている。

ここは「わくわくぎぶーん」という名前は少々あれだが冬木では人気のレジャースポットであり、体温に近い水温で保たれているプールはガラス張りの巨大ドームと合わさって一年通して楽しめる全天候型屋内ウォーターランドと化している。

今日も休みとあつて、そんなわくわくぎぶーんは老若男女問わず人でごった返していた。小さな男の子から大きな水着美女まで様々な人が行き来するなか、ある四人の男たちは砂浜で走り回っていた。

「なんで貴様マシユちゃん連れてきてねーんだよ！ 死ねー！」

「何のために俺たちがお前誘ったと思ってるんだばーか！」

「ぐだつち足早くなったペなー！」

「!!」

否、その中一人を殺意を持って追いかけて回していた。三人に一人は競走のつもり
に追い掛け回されているのは、青い目がチャームポイント 匿名の姫からのお便り
のカルデアのマスターである。

「!?!」

「なにい、サルが『久しぶりに四人で泳ぎ行くべー』っていったから男だけで行くと思っ
たあ?」

「貴様サル! どういうつもりだ!」

「どうって、おみやあらが『サル君、プール行きたいよねー。ぐだの奴も誘ってさーひ
さしぶりにさー』って気持ち悪い顔して言ってきたから、オラてつきり昔みたいに男だ
けで遊びたいんべなって……」

「お前が原因かー!!」

「うつきー!?!」

殺意が隣に居た猿っぽい少年に向けられ、マスター学友二人の息の合ったドロップ
キックによってプールの底へと沈んでいった。

そう、今日マスターは学友と共に泳ぎに来ていた。若干一人溺れかけているが。

「……………」

「まだ泳いでないのになんでこんなに疲れているんだ俺たち……」

「流石に三十分全力疾走の走り込みはキツイな……」

「オラ、プールの水盛大に飲んじやつたべ……」

その後、なぜかマスターが皆にジュースを奢ることになり、同施設内にある飲食スポットにて一息つくことになっていた。水着でも入店することができ、四人以外にも様々な人が休憩をしている。

「しかし、ぐだっち筋肉ついたつべな……」

「うむ、我等神聖隊の中でもぐだ男の筋肉ランキングは中堅だったはず……一体だれがこんな見事な鍛え方を」

「あっちのバイト先でトレーナーでもいたのか？」

「……………」

「スパルタ？　なんだべ厳しい先生でもあてられたのけ？」

ふと、学友たちがマスターの体を見て感嘆の声を漏らす。四人は元は同じ体育が盛んな男子校ということもあり皆中々筋肉が付いた良い体をしていたのが、その中でもマスターの体は群を抜いていた。

引き締まった体には決して余分な筋肉の付き方をしておらず、全ての部分に一切の無

駄なく隅々まで細かく計算されたダビデの彫刻像を想像させるような肉体美、しかし武道やその道を行く者が見るとそれは鍛錬だけではなく実戦の積み重ねによって出来た正に刀の様な肉体だと分かる。

まさに現代人が鍛えても再現できない古の鍛錬法によって鍛えられた肉体である。

学友がどうやって鍛えたのかマスターに尋ねるが、マスターはただ遠い目でスパルタ式豹撃退術や影の国式ブートキャンプや、マジカル八極拳と呟くだけで学友たちは理解できなかった。

「その無害そうな顔でその体つきはある意味武器だな……」

「その体でマシユちゃんを……」

「……………」

アホかとマスターは突っ込むが、学友の言葉はあながち間違いではなかった。虫一匹殺せないような、のほほんとした顔とその体のギャップはカルデアのお姉さま方に好評だし、カルデアにいる時に着ていた黒のインナーは体のラインが浮き彫りになって妙にセクシーさを醸し出していて、それだけで過ごしているときは清姫たちの目が何だか妙な光を宿していた。

「これは、今度の体育が楽しみな……」

「ああ……体が震えて……あれ？　サルは？」

ふと学友たちが周りを見るとサルの様な学友がない。マスター達が探して見ると向こうからひよっこりと歩いてきた、どうもジュースの缶を捨てに行っていたらしい。

「なんだ、えらく時間かかったんだな」

「小っちゃい子が迷子になってたから親御さん探してあげてたんだべ。可愛い外国の子だったけど」

「ほう、流石神聖隊の一員、子供には優しいな。それにしても冬木も外国人を良く見るな、マシユちゃんとか……」

「……」

まだいかと苦笑しながら、窓ガラス越しにプールを見るマスター。確かに日本人以外にもいろんな人種の人たちがプールで遊んでいた。マシユも一緒だったらと頭の片隅で想像してしまつて赤くなりながら頭を振るマスター。無人島でのマシユの水着姿が頭よぎつてしまつたのだ、あれはいろんな意味でマスターにはデンジャラスだった。

「……？」

「おう、すごい人だから。　なんだアイドルでもきてんのか？」

頭を冷やすためにジュースを飲んでいるとふと、プールに人だかりが出来ているのをマスターは発見した。学友の言うとおりアイドルでも来ているのかと目を凝らして見てみるが、

「!?」

「ぬおお!! ジュースを噴きだすんじゃない! 何やつてるんだ貴様!」

その人だかりの中心にいる人物たちを見た瞬間、マスターはジュースを噴き出す。完全に身に覚えのある顔だったからだ。

一人は赤い髪で糸目の優男、一人は金髪蒼眼で骨格の良い優男、一人は義手を付けた如何にもな優男。三人全員がすれ違った女性すべてが振り向く様な一級品の男たち。

「だがマスターには見覚えがあった……」

「!!」

「おろろ? どうしたぐだつちサイン貰いにいくんだべ?」

堪らず、飛び出して人ごみの中心へと向かうマスター、遅れて学友たちも何事かと後をついていく。

「行きますよ! ナイスアタック、アガートルラム ボールを弾け、銀色の腕!」

「ぐつ……! さすが恐るべき膂力のベディと呼ばれた男……だが私はビーチバレーにおいても今の時間は三倍! 例え二対一でもそのボール全てを受け切つて見せましょ

う！」

「私は悲しい……バレーボールとは二対一では成り立たないゲームなのではなかったのでしょうか……」

そこには水着姿でビーチバレーをしてはしゃいでいる、キャメロットの誇り高き騎士達がいた。何で二対一人でビーチバレーが出来ているのか不思議でたまらないがその疑問は置いておいてマスターは人ごみを押しわけバレーコートの中へと乱入していく。

「……!!」

「なっマスター……!?!」

「おお……私は驚ぐふう」

マスターが乱入したことでは見をしてしまったトリスタンにガウエインが放ったボールがダイレクトにぶつかり、その衝撃でトリスタンは近くのプールに落下する。

「しまった! 力が入り過ぎたか! トリスタン卿無事です……マスター!?! なぜここに!?!」

「………」

それはこっちのセリフだと言い返すマスター。呆気にとられているガウエインとベデイヴェールが少し顔を青くしている中、トリスタンは静かに流れるプールに身を

任せていた。

「おお……私は流れる……」

「？」

「はい、それでこちらに密入国したサーヴァントを連れ戻すべくこちらの調査に呼ばれた我が王と共に……」

「？」

「いえ、その捕獲には成功したのですが……その、モードレッド卿がそのまま遊びだしましたあげく行方不明になってしまいました……そのなんといいましょうか……」

「私は悲しい……此処にディナダン卿がいればマスターにも上手く言い訳ができるのでしょうが……」

「彼のユーモアあふれるジョークはかのアグラヴェイン卿でさえも表情を崩しましたからね。まあ、その口の上手さゆえにモードレッド卿からは嫌われていました」

青筋を立てているマスターの前で必死に弁明をしている中、ゆつたりとジュースを飲んでるガウエインとトリスタン。因みにジュースは彼ら曰く「気の良いご婦人」から頂いたらしい。

「それで、トリスタン卿が『モードレッド卿は賑わいごとが好きだから自分たちが勝負事

をしていれば混ざってくる』と提案しまして、あそこでビーチバレーを……」

「……？」

「おお、私は無実……確かに提案したのは事実ですが……」

「しかしながら三人とも楽しんでいたのは事実、罰を受けるならどうかこの身にも」

「……」

水着姿でジューズ片手に言われてもマスターはため息をつくが、来てしまったのは仕様がな、家に突撃して居座り続けているどこかのサーヴァント達と比べると動機はずいぶんと真面だし、停泊しているカルデアの船の方で過ごしているのもう満杯であるマスターの家にさらに人が住みつくことはない。――何処かの彼女らのおかげでマスターは屋根裏部屋に金時たちと共に押し込まれているのだ。

「……」

「寛大なご処置、感謝いたしますマスター。このガウエイン、しかとこの命にかけて誓いますよ」

「なあなあ、ぐだちちつてどつかの王子様なのけ？」

「お、俺に聞くなよ……」

ちゃんとモードレッド卿も連れて帰ること、次回からは自分にも許可をとることを約束させ、今回だけは不問にすることにしたマスター。その処置に感謝して三人の騎士

が膝を折るが、此処は城でもカルデアでもなくプールサイド、学友含め周りからの不審な目に晒されマスターは急いで三人の騎士を立たせる。このままでは要らない誤解を招きかねない。

「で、でっけえ……この人たちもぐだ男の友達なのか……?」

「ああ、マスターのご友人ですか。これはご挨拶が遅れてしまい……」

「マスター? ご主人様?」

「!!」

「へっ? 増田さん? でもこの赤毛の人どう見ても日本人じゃ……」

「?」

「はい……私は増田トリスタン……この頃帰化したのです。得意な楽器は琴です」

「なるほどなー」

とりあえず、バイト先で知り合った貴族の人たちがお忍びで遊びに来ていたということにして何とか学友たちを誤魔化していくマスター。――若干一人変な名前になつて
いるが――

「?」

「そうですね、とりあえずモードレッド卿を探さなければ……」

「なんだべ、増田さん達って人と待ち合わせしたんだべか?」

「私は悲しい……トリスタンでよろしいのですが……」

「まあ待ち合わせと言えば待ち合わせですが……仲間とはぐれてしまいました……」

「広いからなーわくわくぎぶーん。すれ違ったらまた面倒だし」

ウォーターランドにしてはかなり広い部類に入るわくわくぎぶーんは確かに散らばってしまったては見つけるのは難しいだろう、此処の他にもプールはまだまだあるし、人も多い。散らばって一人で探すのもいいが、そうなると自分たちが迷う危険性がある。

どうするかとガウエイン達が悩んでいると、学友の一人が手を挙げた。

「じゃあ、散らばって探すのはどうだ？ 自分たちが一人ずつ増田さんたちに着けば迷うこともないだろうし」

「トリスタンでよろ」

「いいのですか？ 貴方たちはここへ遊びに来たのでしょうか？ 私達に付き合うことは

……」

「いいつぺよ、ぐだつちの友達が困ってるのにほつとくなんて出来ないべー」

「なんと……さすがはマス……こほん、——殿のご友人、——殿は良き友をお持ちですね

……」

「……」

感動しているベディには申し訳ないがマスターにはサル君を除く学友の頭の中には邪な思惑が渦巻いていることを長年の友人の勘から察していた。

おそらく、何もしなくてもあちらから女性がやってくるガウエイン達的美貌に乗っかって出会いでも探す気なのだろう。マスターは半ばあきれた表情で、握手を交わしている学友たちを見る。

「それじゃあぐだ男はここでお留守番だな」

「!?!」

「だって、俺たちが居なくなつた後すれ違いになつたら大変じゃないかあ。お前なら知り合いが来ても分かるだろう?」

「あ、あの残るなら私が……」

「ぐだつちなら大丈夫だべ! てかベディさんも優しい顔してるのに筋肉すごいっぺな! もしかしてぐだつち鍛えたのベディさけ?」

「ああひつぱらないでください……! ……殿また後程に……!」

「!!」

そのまま学友たちはニヤニヤと笑いながらガウエイン達を引つ張つていってしまふ。完全にマスターの予想通り騎士達に便乗して自分たちにも春をこさせようとしていたが、自分を除外させようとするのはマスターには想定外であった。まさか奇数状態

で二人組を作るとは、完全に外道の所業である。

自分が謀られたことに気が付き抗議するが、ベデイ以外そのままマスターがいるなら安心だと思つてそのまま行つてしまふ。――信頼されすぎるのも問題であつた。――

もしかしたらトリスタンもナンパするんじゃないのだろうか。

意外と女性経験豊富な円卓の騎士たちに少しの不安を抱えながらマスターは何処にもいくことが出来ず一人、人ごみの中ポツンと立っていることしかできなかつた。

「……………」

それから三十分程度が立つたが、モードレッドはおろか学友たちとガウエイン達さえも帰つてこない。マスターは人工砂に文字を書きながら一人体操座りで膝を抱え寂しく皆の帰りを待つていた。

こんな事だったら本当にマシユを誘えば良かったと一人思いながら、賑やかに泳いでいる人々を見つめるマスター。その寂しげな姿は、昼下がりに燦々と煌く太陽の日差しがプールに反射して人々を照らす中、一人頭の上に曇天が出来て、影が落ちているかのようであり、通りがかる人は皆怪訝な目をしてマスターを見ていく。

「おい、見ろよあれ。すつげえな……」

「うわ、どこかのセレブ？ スタイル良すぎでしょ……」

「隣にいる小つちやい子も可愛いわね……顔に傷があるのは何でかしら……」

そんな時マスターの近くでまたざわざわと喧騒が巻き起こる、また誰かしら円卓の騎士かと思うがマスターはその場からは動かない。スタイルは良いならモードレッドじゃないだろうし「口に出すと真つ二つだが」、集合場所から離れるわけにもいかない。マスターそのまま体育座りでプールを眺めていることにした。

「はい、そこのお兄さん。お一人かしら？」

「一人なら僕たちと遊ばない？」

「？」

と、そんな半ばいじけているマスターに声をかける影が二つ。内容からして遊びのお誘い、加えて女性からである。所謂女性からの遊びのお誘いと書いて、逆ナンと呼ぶ日本ではおそらく珍しい行為であろうことは誰がどう見ても間違いはなかった。

人探しにかこつけてナンパしに行った学友よりも一人残されたマスターが逆ナンされるという何とも皮肉な状況であったが、当のマスターは特に動揺せず丁重にお断りしながら振り返る。

マスターの学友たちならこの時点で飛び上るぐらいに喜ぶだろうが、マスターは逆ナ

ンどころか不特定少数のサーヴァントから日常的に逆夜這いを受けているため女性に声をかけられたぐらいでは「それこそマシユの様に神秘的な少女かマタハリの様な妖絶な美女でもない限り」動じなくなっていた。

それは女性に慣れてきたという点では良いことなのには違いないのだが、女性の扱いに慣れてきたという点では良いことなのかマスターは首を傾げるしか他がない。

何にせよ、若くして枯れてきている自分が物悲しくなってくるマスターであった。

「あら、メアリーお断りされてしまいましたわ」

「ざんねーん、折角寂しそうにしているマスターを癒しに来てあげたのにねー」

が、マスターは振り向いた瞬間凍りつく。

一人は輝かんばかりのスタイルと美貌を持った、歩くだけでどこかのセレブと勘違いするほどの品の良い長身の美人。

もう一人は隣の美女とは正反対のスタイルだが、道行く人たちの目を引くという点では顔についている大きな傷と、それを気にしなくなるぐらいの可憐さを持っている少女。

が、実際は通りゆく人々のイメージとは逆に自由をこよなく愛し、束縛を嫌う職業海賊のアウトローコンビ。

その名もアン・ボニーとメアリー・リードである。因みに背の小さい方の少女であ

るメアリーの方がアンより年上である。少女、少女つてなんだ。

「!?」

「なんでつて……私達海賊ですし? 海あるところに海賊ありですわ」

「そうそう、陸いる海賊なんて聞いたことないしね。それ山賊だし」

とぼける海賊二人に、そういう事言ってるんじゃないと頭を抱えるマスター。そもそこは海じゃなくてプールである、というか陸である。立派に山賊である。

「?」

「へ? 不法入国? 失礼だなーちゃんとあの博士から許可取ってるよ。今はやとわれ海賊、ドレイク船長やホーニゴルドの奴みたいなものさ」

「ホーニゴルドの裏切者とはちよつと違いますけどね、それに元々と言えばマスターに雇われている様な者ですし、うふふっ」

そういつて不法入国の事を否定する二人。と、するとここに來ていた不法入国者は誰の事だったのか、ガウエイン達に聞くのを忘れていたマスターは首をかしげるが、アン&メアリーはそんな隙だらけなマスターをサンドイッチにするように抱きしめはじめ。ハムという名のマスターを焼きたてのパンよりも柔らかい二つの柔肌が包み、マスターはトーストされたように顔を赤くなつていく。

「そんなわけで、遊びましょう? ま・す・た・あ……」

「日焼け止めは塗った？ 外は冬でも日焼けしちゃうよ？ まだなら……塗ってあげようか、す・み・ず・み……」

アンがマスターの耳に息を吹きかけ、メアリーがマスターの体をその細い指先でゆつくりとなぞっていく。多方向からの刺激にマスターは顔を赤くする一方だが、さらに周りの人々の殺気やら嫉妬やら軽蔑やらの視線で赤くなつてばかりもいられない。

とりあえず離してもらおうと身をよじらせながら、行方不明中のモードレッドの話題を出してみる。

「？」

「モードレッド？ あああの水着でいると良く睨んでくる子ですね……確か先ほど見た様な……」

「あー、なんだっけ。 さつきマスターの所に行くときに見たよね。 何かの大会に参加するのかなんとか……なんだっけ、ブリット？ ブリッジ？」

「？」

「そうそう、ウォーターブリッツ。 優勝賞品も中々良くてアンと出ようかと思っただけど、三人一組だったから出れなかつたんだよねー」

「そうでしたわねー。 あのペンギンカップとスイートルームの宿泊券は惜しかったですね……あともう一人、信頼できる人が居たらよかつたんですけど……」

そういいながら二人は自分たちが抱きしめているマスターに気付くと、目を合わせた。比翼にして連理、考えていることはどうやら兩人とも同じだったらしく、ニヤニヤと笑いながらサンドしているマスターを抱き締めている力を強めていく。

「ねえ、マスター」

「ご提案があるのでですけど」

「？」

そんな二人の笑い方に不安を覚えたマスターは素直に笑い返せず、ぎこちない笑い方をしながらアン&メアリーに聞き返す。増々笑みを深くしていく海賊二人、それは宝を追い求める海賊特有の目差しそのものであり……

「？」

「そんなの決まっています」

「そんなの決まってる」

「楽しいこと！」

妹編に続く。

妹、巻き込まれるく激闘わくわくぎぶーン編く

流れるプールにきのこの大型ウォータースライダー、波が出るプールと様々なお客のニーズに合わせた遊び場に、プールサイドには白い人工砂によって美しい海の砂浜を再現し、まるで本場ヨーロッパのリゾートの海に泳ぎに来たように錯覚させるようなゆつたりとした空間を実現させている。

ここは「わくわくぎぶーン」名前は少々あれだが冬木では人気のレジャースポットであり、体温に近い水温で保たれているプールはガラス張りの巨大ドームと合わさって一年通して楽しめる全天候型屋内ウォーターランドと化している。

今日も休みとあつて、そんなわくわくぎぶーンは老若男女問わず人でごった返していた。小さな男の子から大きな水着美女まで様々な人が行き来するなか、ある二人の女子がプールサイドに立っていた。

「すごい……外は冬なのにここだけまるで夏海辺の様です……」

「人が多いわね、何処で泳ごうかしら？」

一人はまるで西洋人形を思わせる様な白くきめ細かい肌に細い手足、触ったら崩れて

しまう様な儂さとは裏腹に、ワンピース型の水着で主張している大きな双丘は健康的そのものであり、その彼女を包む儂さと彼女から出る色気が矛盾することなく混ざり合ったその様は道行く男たちの視線を奪うには十分すぎるほどであった。

もう一人は、片方の少女と違って活発な印象であり、水着も片方の少女の大人しげな水着とは違い、オレンジとホワイトのストライプの動きやすさを重視した水着であるが、彼女の薄赤色の髪と目と合わさって彼女には良く似合っている。その胸を押さえつける水着によってもう一人の少女と比べると胸のポリウムが少ないように思われるが、リングの部分から見える谷間を見るとそれはただ大きい胸を小さく見せていることがその道の人間なら分かる。

その美少女達はカルデアが誇る人理の守り手マシユ・キリエイトと、その彼女が敬愛する、または敬い、なお愛するカルデアのマスター、その妹である。

二人は出会ってそんな日数も経ってはいない、そんな二人がなぜこのわくわくざぶーんにぎざーんしに来たのか、それは数刻前に遡る。

「先輩？ 先輩ー？ せんぱーい？ こちらですか？」

その日、マスターの家ではマシユが忙しく家の中を歩き回っていた。目的はマスターその人、せっかくの休日たまたま寝室として使わせてもらっているマスターの部屋で「ゴットマーザー」なるイタリアマファイアの壮絶なる抗争を描いたらしい映画をベツトの奥下で見つけたので一緒に見ようとマスターを探しているのだが、どうも見つからない。

「先輩？　いないのですか？　せんばーい？」

今のマスターの寝室である屋根裏部屋、各人の寝室、庭、キッチン、リビング、バスルーム、床下の収納室、トイレ、鍋の中まで探してみたがその姿はない。

また誰かにアンサモンされてしまったのかとマシユは不安になって天才ダ・ヴィンチちゃんを頼ろうとしたが、今は冬木の調査に行っているようで姿が見えない。

どうしようもないマシユはリビングに行つてマスターの所在を知らないか聞いてみることにした。

「あー、あの子なら友達と遊びに行くつて言つてたわよー珍しいわね、あの子がマシユちゃん誘わないなんて」

「遊びに……ですか」

結果、所在は簡単に分かつた。マシユはまた厄介ごとに巻き込まれてないようであったと安心するのが半分、何故自分に一言言つてくれなかつたのだろうかというやきも

ちの入った疑問が半分のため息をつく。

「あらら、拗ねちゃったかしら、帰ってきたから機嫌を取るために甘やかしコースね。

……そこらへんも私達に似てくるとは」

「兄さんも兄さんね、そんな遊んでばかりいるから成績上がらないのよ」

苦笑しながらテーブルで新聞を読んでいるマスターの母の横でノートにペンを走らせているのはマスターの妹である。

燈色の眼と髪は極端に母似なマスターとは真逆にマスターの妹は極端に父似であることを示し、その幼さを思わせる大きな目もまた父から継いだものである。しかしながら性格はどちらかと言うと母似であり、大人しげな第一印象とは裏腹に積極的な行動力を持ち、人とは隣で一緒に歩くことが好きなマスターとは違い三歩先を歩くことを好む。

これは人との関係構築性にも当てはまることであった。

「全く、帰ってきたと思っただら女の子を連れて帰ってくるなんて……頭が足りていないというレベルじゃないわ……ああマシユさんが悪いってことじゃなくて」

「……さんは先輩の事が嫌いなんですか？」

マシユからの問いにマスターの妹はペンを止めるとマシユの方をじつと見る。マスターの青い目とは違う、薄赤色の目が少しばかり不機嫌な顔と共にマシユを見つめて

くるのでマシユは目をそらしてしまふ。

出会つてから数日しか立っていないが、どうもマシユはマスターの妹からは良い印象を持たれていないと感じていた。

「嫌いよ、大っ嫌い。 あんな人。 マシユさんもあんな男なんかじゃなくて
もつと」

「こーら」

「あいたあ!？」

「人の色恋に口出さないの。 うちの子を好きになつてもらつたマシユちゃんに失礼で
しょうが」

「す、好き……」

「あら、違ふの?」

「いえ! あつ、その好きというか尊敬してるといいますか……」

「あらあら、良いのよ別に隠さなくて」

真つ赤になつて俯くマシユを見て増々不機嫌になるマスターの妹。 別に妬いてい
るわけではない、ただ納得がいかないのだ。 あんなに素敵な女の子が自分の兄なんか
に無自覚ながらも恋をしているということに。

「なんで、あんな子が兄さんなんかと……」

マスターの妹がマシユと出会ったとき、彼女は息を飲んだ。それくらい可憐であり、儂く思えた。接してみると心まで透き通った水のように清らかで純粹だった。

だからこそ、自分の兄と言う俗な青色の絵の具に彼女の心が塗りつぶされていくのに納得できなかった。もつと相応しい相手がいるはずだと思つたのだった。

「もつと相応しい人が……兄さんなんかには勿体ないのに……」

「でも、それじゃあマシユちゃんも暇ね……そうだ、遊びにつてらっしやいな！ あ、そうだ何処かにチケットが……」

ぶつぶつと独り言を言うマスターの妹を放つておいて、何処かの棚からチケットを取り出すマスターの母、チケットには「わくわくざぶーん」と書かれた入場券の類のようで、乗せてる絵を見る限り遊泳施設の様であった。

『わくわくざぶーん』、プールでしょうか……しかし今は冬ですし、泳ぐには寒すぎるのでは……?」

「のんのん、まあ行けば分かるわ。なんだかイベントも合ってるみたいだし、そうね、一人じゃつままないだろうし……そのぶつぶつ言ってる猫かぶり娘も連れて行くといいわ!」

「誰が猫かぶり……へっ?」

にっこり笑いながらマスターの妹に指を指す母、それはある意味強制に近い母からの

お願いであつた。

「母さんつたら無理矢理なんだから！」

「すいません、私のせいで……」

「ああ、いいのよ気にしないで。……確かにマシユさん一人で行かせると色々危ないだろうし」

「はい？」

時は戻つてわくわくぎぶーン。

美少女二人はまず何処で泳ごうかとわくわくぎぶーン内を歩き回っていた。遠くの方では男たちがマシユ達に声をかけようとしてお互いを牽制し合っている。

「しかし、何処のプールも人が多いわね。これじゃあ満足に泳げるかどうか……」

「今日はイベントがあると聞いていますし、仕方ないかと」

「そうねー」

休日とイベントが重なったこともあつてか、わくわくぎぶーンは賑わいを見せてお

り、何処のプールも人で溢れていた。仕方ないのであまり人気がないプールを目指す
が、そこもイベントの会場として使われるらしく泳ぐことは出来ず、仕方なく周り
と比べて人の少ない流れるプールで泳ごうということになった。

「まあ、贅沢は言つてられないか。マシユちゃんつて面白いや泳ぎは得意なの？」

「いえ、あまり経験がないと言いますか……夏に海で少し泳いだきりでしょうか」

「そっか、じゃあ私が手取り足取りおしえ……きやつ!？」

と、前を注視してなかったマスターの妹が前から走ってきた小さい子供とぶつかって
しまう。マスターの妹は体勢を崩すだけで済んだが、子供の方は尻もちをついてし
まったらしく床でへたり込んでいる。

「つと、ごめんなさい。大丈夫かしら?」

「はい、ごめんなさい、こちらも前を見ていませんでした」

外国人だろうか、マシユと同じように白い肌に白に近い銀のような髪の毛を束ね、金
色の目をしていた。倒れた少女はマスターの妹の手を取ると立ち上がるとお辞儀を
してお礼を言った。中々礼儀正しい子であり、そのまま何ともなく別れようとした
が、マシユが固まっていることに気付く。

見ると向こうもマシユを見て固まっている。

「……何故、(ハハ)に?」

「えつと……その……」

「あー……マシユさんのお知り合い？」

じりじりと近づくマシユに、冷や汗を垂らしながら後ずさる少女。なんだかカバデイでも始まりそうな空間にマスターの妹はとりあえず落ち着かせようと間に入るとするが、

「あー！ トナカイさん！」

「先輩っ!？」

突如向こうに指を向けてなぜかトナカイと叫ぶ少女、それになぜか先輩と釣られて向こうを向いていしまう。その一瞬を見逃さず少女は信じられないくらいの速さで人間の間を駆け抜けていつてしまう。

「はっ、騙されました！」

「なんでトナカイが兄さんに変換されているの!？」

「待ちなさい、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リレイさん!」

「なにその名前!?! サンタ!?!」

そのまま貴族みたいな名前の少女を追いかけていくマシユ。遅れてマスターの妹も追いかけていくが、マシユも中々に足が速く追い付くのがやつとである。

「くつ、人多くてなかなか……!」

「マシユさん、あの子知り合いなの?」

「ええ、彼女もカルデアの仲間です、しかしなぜここに……」

「ああ、つまり兄さんの知り合いつてこと……」

また兄かと溜息をつくマスターの妹、妙齢から子供まで一体カルデアという所で兄は何をしていたのかと疑問が増すばかりである。

「あわわわわわわ! どどど、どうしましょう! 騎士さーん! 助けてー!」

と少女が走っていく方向に、友達と保護者だろうか他に二人の少女と一人短髪の背の高い外国人の男が少女に向かって手を振っていた。それを見た瞬間マシユは更にスピードを増してその集団に向って走っていく、もはやマスターの妹には追いつけない。

「ああ、良かった。皆散らばってしまったから探すのに苦労……どうしたんだいレディ、そんなに息を荒げて」

「あわわわわ、見つかりました! 見つかりました!」

「ああ、見つけたとも。これに懲りたら皆散らばるような」

「違います! 見つかってしまったんです!」

「なに? それは一体どういう……」

「なーにーを……」

「んん？ この声は……いや、幻聴だろうこんなところにあの子が」

「しているんですか卿はー!!!」

「んぐわあー!?!」

マシユが高く飛び上がったかと思うとそのまま男に向けてドロップキックを放った。対応も出来ずダイレクトに顔面にドロップキックを食らった男はそのままプールに突っ込んで沈んでいく。

「あ、マシユだー」

「本当だわ、こんなところで奇遇ね!」

「あわあわあわあわ、騎士さーん!?!」

「ナーサリーさんにジャックさんまで……ここで何をしていますのですか?」

「泳ぎに!」

「答えになつてません!」

「ぜえ、ぜえ、やつと追いついた……」

やつとマスターの妹が息を切らして追いつくと、マシユの周りをくるくる回っている少女二人とプールに沈んで行っている保護者らしき男。何が何だか分からない妹はただ沈んでいく保護者を逃げた少女と共に引き上げるしかなかった。

「つまり、ジャックさん達がカルデアの船に乗り込んで密航したので捕まえに来たと……」

「ごめんなさいい」

「す、すまないマシユ、なぜ私だけ正座をさせられているんだ……？」

その後、マシユはランスロットと呼ばれる保護者をとりあえず正座させてから、残りの少女たちに事情聴取を行っていた。逃げた少女を合わせると少女は三人、名前をジャック、ナーサリー、それとジャンヌ・リリイである。自由奔放なジャックとナーサリーはともかく真面目なジャンヌ・リリイがカルデアから脱走したのはマシユにとつては意外だったらしく、どうも額に手を当てながらどう自分の先輩に説明したことかと悩ませることになった。

「マシユ嬢、せめて正座を解いてくれないだろうか……このままだと周りの視線が」

「事情は分かりましたが、なぜジャックさん達はこんなところにな？」

「無視なのか!?!」

「海の予行練習よー!」

正座をさせられている男の周りをくると回りながらナーサリーと呼ばれる少女が答える。その少女は西洋人形その物を思わせるような可愛さを持っており、なかなか不思議な魅力を持った少女であった。

「予行練習？」

「だって、皆泳げないんだもん。これじゃジャンヌが海に行つても泳げないし」

水色と白のストライプの可愛らしい水着を来た少女、ジャックが答える。なぜか大きなサングラスをかけており、右手にはサルっぽい人から貰ったというジュースを持っていた。

「つまり、泳ぎの練習をするためにわざわざ密航し、冬木に来たと？ この冬真つ盛りの寒空とは思わずに？」

「ええその通り！ まあ、実を言うと泳ぎの練習はこのクジラのお腹の中の様な建物を見つけた時に決めたのだけけれど」

「それでは、当初の目標は何だったのですか？」

「おかあさんに会いに」

「やっぱり……」

もはや何度目ともいえないサーヴァント達の田舎に帰ろうである。実際にはマスタアの田舎に無許可でアポイント無しに帰ろうであるから性質が悪い、サーヴァントた

ちは自分たちが外に出ると言うことはイコール神秘の秘匿が破られていると言うことに気付いていないのだ。いや、気付いてはいるがそんな事を気にしていないサーヴァントたちが圧倒的多数ではあるが。

マシユはまたマスターがマスターの母からプロレス技を食らう光景がありありと浮かび、また深く溜息をつく。これでこの冬木には聖杯戦争が出来るぐらいにサーヴァントたちが集まってしまったことになる。

「それで、ランスロット卿は何をしているのですか？ まさかジャンヌさん達のエスコートなんて言わないですよ？」

次に、マシユは正座をさせているランスロットに質問した。ランスロットを見るマシユの目は冷たく、可哀想に明日には発狂して数年間全裸で森を走り回るのねと言う様な目である。

戦闘時には冷たいどころか積極的に頼りにするぐらいには尊敬されているのだが、ランスロットが女性といるときはまるで反転現象が発生したかのように、冷たい目で塩対応になり、その眼を見るとランスロットは生前のある騎士を思い出して心臓が止まりかける。

「いや、私達は密航したレディをカルデアに帰還させるために王と同行して……」

「私、達？ 他の方々もこちらに？」

「ああ、ガウエイン、トリスタン、ベディ、モードレッドの四人だ」

「全員ではないですか!? お、王は、アルトリアさんは許可したのですか!」

「ええ、許可しました。私だけでは彼女たちを押さえきれなかったでしょうし、日々の疲れを癒してもらおうと思ひまして、モードレッド卿がはしゃいで行方不明になるとは思ひもしませんでした。いや予測は出来たのですが、かのじゃじゃ馬を抑えるとなるとアグラヴエインでもないと説得は不可能でした」

後ろから聞こえる聞き覚えのある声に振り向くと、彼、彼女たちの王がいた。黄金の髪をまとめ、凜として立つその姿はまさに一国の王としての相応しい威厳を持つっており、その姿にランスロットも正座を正して王に首を垂れる。――ジャパニーズオジギ――

まあ、今は水着姿で片手に水鉄砲を持った姿ではあつたが、それでも眩しいほどの輝きは放っていた。

「アルトリアさん……!」

「あの、もうそろそろ私ついていけないんですが……」

いきなり登場人物が増えすぎて、訳の分からなくなつてきているマスターの妹。此処だけ外国になつたかのように外国人だらけであり、そして恐るべきことにマシユの知人ということは自分の兄の知人と言うことでもある。なんだか友達の友達に囲まれている様な気まずさを覚え、控えめに手を上げながらマスターの妹は説明を要求した。

「ああ、失礼しました。 貴方は……」

「こちらは—— さん、マスターの妹さんでして今日は二人で此処に遊びにきていたのです」

「なんと、マスターの……私はアルトリア・ペンドラゴン。 どうぞ気楽にアルトリアとお呼びください」

「は、はあ。 どうも……マスター？」

自分と同年代にも見えるが、その精神は自分よりも大人であり、そのギャップに戸惑いながらもマスターの妹とアルトリアは握手を交わす。

「それで、ガウエイン達はまだモードレッド探索から戻ってはいないのですね」

「はっ、恐れ多くも私もレディたちの対応に追われておりモードレッド卿を発見するのと叶わず。 逆に散り散りになってしまった結果に……」

「良いのです。 少し、思い出に浸るために一人になってしまった私にも責任はありません。 これから皆で探せばいいでしょう」

「ね、ねえマシユさん、あの人たちってどういう関係なの？」

「え。 あっ、えーつと……大きな会社の社長とその部下と申しますか……」

まるで騎士とその王の様なやり取りにマスターの妹はマシユに関係性を問うが、マシユの方もまさか古いブリテンの王とその臣下と言えず誤魔化していく。

マスターの妹はどこかの黒い髭のせいで神秘に触れてしまったとはいえまだ一般人、あまりこちらの方に巻き込むことをマシユは良しとはしなかった。

「それでは、各自分散してモードレッド卿の捜索に……」

「いえ、ここは固まって動きましょう。此処は広大です、また散り散りになつて手間がいるでしょう」

「承知いたしました。それではレディたち、行きましょう」

「えーマシユと一緒が良いー」

「こら、ジャックつたら！ 元は私たちが悪いんですから……」

「だつて騎士のおじ様つたら女の人から声をかけられるたびにお話ししてちつとも前に進まないんですもの」

「お父さん？」

「いや、声をかけてくださるご婦人を無下にするわけにはだね……」

マシユからプールも凍るような冷たい目で見られ、滝のように汗を出しながら弁解するランスロット。なるほど、と何となくマシユが冷たくなる理由が分かった気がする。マスターの妹であるが、それならばなぜ同じように女の子に囲まれる自分の兄には冷たい目どころか熱い眼差しを向けるのかと疑問が増すばかりであった。

「宜しいのですか？ 貴女はマシユと遊びに来たのでは……」

「いえ、いいんです、私はここには何度も来たことがあって案内も出来ますし、それに懐かれちゃったみたいで……つとと次はどこ行くの？」

「あのキノコのスライダーにいきましょう！」

「賛成です！」

その後、マシユ達はアルトリア達と一緒に行動していた。マスターの妹の周りには彼女に懐いた三人の少女たちがこぞつて彼女の手を取つてあつちに行つたりこつちに行つたりするので、そのたびにマスターの妹は三人の少女から振り回されていたが、妹が出来たみたいで悪い気はしていなかった。

少女たちをマスターの妹に任せている間、マシユ達はどやつてモードレッド卿を見つめるか話し合っていた。

「それで、モードレッド卿について目星はついているのですか？」

「いえ、ですが誘い出す方法があります」

「それは？」

マシユが問うと、ランスロットが遠くのプールを指さす、そのプールには何かの小さ

な即席のステージが出来上がっており、垂れ幕には「集え強者！ 冬木市ウォーターブリッツ大会」と書いてあった。

「モードレッドは王への叛逆の精神が渦巻いている。なので、今ここで開催されているウォーターブリッツの大会に王が出場することを伝え、モードレッドを誘い込む」

「つまり、アルトリアさんを囮にして見つけ出すと？」

「囮ではない、あちらが王の威光に誘い出されるのだ。その為には大会で勝ち進まなければいけないが……王ならばそのくらいは容易いことだろう」

「欲を言うならばマスターの指揮があれば勝利はより確実に近づくのですが、贅沢は言つてられません。三人一組での出場なので私としてはランスロット、ガウエインを加え、確実に勝利を収めていきたいところですが……」

「それではまず、サーガウエインを見つけなければいけませんね、エントリー時間も近づいてきています。急いでガウエイン卿の所在を……」

「マシユちゃああああああん!!」

突然可笑しな青年たちがマシユの名前を呼びながら走ってくる。あまりの血走つた目に思わずマスターの妹とランスロットがマシユの目の前に立って威圧感を出す、後ろから来た人物たちに気付くと驚いた様に目を開かせた。

「待つてください、いきなり走りだされては……ガラハッド卿！」

「ガウエイン卿……？ 何だね、その周りの美女たちは？」

その青年たちの後ろにいたのは同じ円卓の騎士ガウエインであった、後ろにはトリス
タンとベディヴィエールもおり、ベディ除く二人の騎士は「何となく理由は察せるが
」、どういふことか美女たちに囲まれていた。

「うわああああ！ マシユちゃんだああああ！ 水着可愛い可愛い！！ 天使
いいいいいい！！」

「な、なに!? 誰……あ、サルさん」

「ありや、ぐだつちの妹ちゃんじゃねえべか。 ありやー大きくなったがやー」

「あ、さっきのおサルさんだー」

「おろ、さっきの迷子ちゃん。 今度は迷子じゃないんだべな、えがったえがった」

「本当お猿さんにそっくりだわー」

「ナーサリー！ 失礼ですよ！」

「いいべ、いいべ、自分だつてそっくりと思つてつから。 木登りだつて得意だべ？ な
ははー！」

青年たちはマシユに近づくと、プールの水も蒸発するような目線でマシユを下から上
まで見つめ始める。 が、ランスロットが鋭い目線で威嚇しているのに気付くと、マス
ターの妹といつ知り合ったのかジャックと話しているサルと呼ばれた青年の背中に急

いで隠れ始めた。

「王よ、分散してモードレッド卿を搜索しましたが、姿は見えず。用心深く潜んでいるのか、それともプールの底に潜んでいるのか……」

「ご苦労でした、ベディヴィエール。その青年たちは？」

「はい、こちらはマスター達のご友人でして、ご厚意に甘えてモードレッド卿の搜索に協力してもらっているのです」

「先輩が此処にいらっしやるのですか!？」

マスターがいると知った瞬間に、そわそわと周りを見回していくマシユ。時折自分のどこか可笑しい所がないかと身だしなみを整えている姿はまるでデートで相手より先に来てしまった女の子の様である。

もしマシユに尻尾があつたなら千切れるぐらいに振り増しているだろう。

「それがな、ぐだ男は皆で迎えに行つたらいなくなつてんのさ」

「うむ、ナンパ……ごほん、搜索に加えなかつたのがそんなに気に障つたのか……少し悪いことをしたな」

「マシユー、なんぼつて何？」

「確か、出会いを求めて男の人が女の子の人に声をかける行為だと聞いたことが……」

「じゃあ、フェルグスのおじさまと同じね！ ロマンチックに言い寄つて結局失敗する

んでしよう？ 可笑しいわ、可笑しいわ！」

「ぐっ?!」

「うぐっ?!」

子供の純粋で残酷な言葉のナイフが青年たちの心に突き刺さる。確かに見ればガウエイン達には美女たちが群がっているのに、マスターの学友たちには相手にもされないどころか最初から眼中にも入っていない。辛うじてサルの子友が今ジャックたちに懷かれて追いかけてっこをしているだけである。

「あー、つまり兄さんの友達たちはイケメンの外国人にあやかろうとして見事失敗したってわけ。宝石と石ころどっちを取るかなんて見なくても分かるでしょうに、男ってなんでこう浅ましいというか……ここまで来ると哀れね」

「心無い言葉ぐわっ?!」

「言い返せない正論ぐわっ?!」

さらにマスターの妹が止めを刺して、撃沈する青年二人。いそいそとプールに入っ
ていつて流れ出る涙を誤魔化している姿は海に浮かぶクラゲのそれである。

「んで、兄さんはいるの、いないの?」

「いやーいたのはいたんだべが、皆で別れた後からどつかにいつちやっみたいだがや。それで次は皆でぐだっちを探そうってなってるんだべ」

「先輩、いないんですか……」

先ほどとは一変して、露骨に気を落とすマシユ。直前でフォーを取り上げられたフォー君のようにうなだれている。

「まあ、ここにいるのだからいつかは会えるだろう。そうだ、先ほどレディから貰ったジューズは」

「いりません。ご婦人からの饗応はお断りしてください、自重してください。ひっそりとマスターの妹さんにも声をかけようとしなくてください」

いつもより棘のあるマシユの言葉に、プールでクラゲの真似をする人間が一人増える。

「そうですね、彼が此処にいるのだったらぜひ見つけたい所ですが、時間も近い、とりあえずエントリーに向かいます。ここまで来たのです、貴方達もご一緒に」

「うわあーい！ここにきて初めて美人からのお誘いだあ！行きます行きます！」

「食事など一緒にいかがですか？」

「それは止めた方が……」

アルトリアの誘いにプールから飛び出して後に続く学友達、美人に弱いのは騎士も学生も関係は無いらしい。――騎士達の目が何だか怖かったが――

開催の時間が近づいていた。

「やってまいりました！ ウォーターブリッツ冬木カップ！ 百戦錬磨の兵ども、聖杯が欲しいかー！ 高級ホテルの宿泊券が欲しいかー！」

ウォーターブリッツ特設会場の中、司会の声に応え、会場に選手たちの声が響き渡る。会場には老若男女様々な人が集まっており、それぞれの首にかけ、種類が違う水鉄砲を手に持っている。

「ならば戦え！ 栄光を掴むために！ ルールは簡単、相手を濡らして自分が濡れなければオーケー！ 胸と背中にあるのが十分に濡れるとセンサーが発動して選手は退場となる！ チーム全員、もしくはリーダーが濡れてしまったらそのチームは失格！ これだけだ！ チームにはそれぞれ長距離、短距離用の水鉄砲とそれを防ぐための盾が支給されている、十分に戦ってくれたまえ！ それでは全員指定された持ち場に行つてくれたまえ！」

しかし説明もそこそこに、チームに開始場所が記された紙が配られ、貰ったチームからそれぞれ持ち場へと歩いていく。

皆、豪華な賞品もあつてか、戦気があふれ出ており、例え小さな女の子で編成された

チームであろうとも油断は出来ないくらい、戦いの雰囲気が出来上がっていた。

「ほーう、ぐだ男君つてば何時の間にそんな綺麗なお姉さんと知り合ったのかしらー不思議ですわねー」

「そうですねー奥様。　しかも逆ナンですつて？　全敗した私たちのあてつけかしらー」

「んだ、ぐだつち！　おめえさも大会出場してたんだべか！　いやーこれは負けてらねえべー！」

その中で特にそんな雰囲気に関係なく出来る限りの殺意を噴き出しているチームが居た。　マスターの学友たちで構成されたチーム「神聖隊」であった。

殺意の向き所は一人の青年と二人の美女で構成されたグループ、マスターが率いるというか率いさせられているチーム、「ブラックフラッグ」である。

「……………」

「あら、マスターのお友達ですの？　お友達の割には凄い殺気向けて来てますけど」

「マスターが羨ましいんですよ。　もつと挑発してあげよつか、その方が戦いやすくなるし」

「それもそうですね、ほらマスター、ぎゅーつてしてあげます」

「!?」

そんな美女たちに抱き着かれて顔を真つ赤にするマスターと、抱き着かれたマスターを見て顔を真つ赤にするマスターの学友。その怒り、もとい殺気は周りに共感、もとい伝染として周りの男たちも移って行き、あの男だけは殺すと会場の意識が一つになっていく。

「おや、マスターはここにいたのですね。今回はお互い別チームなのは残念ですが、お互い全力を尽くして頑張りましょう」

そんな中にどろどろとした空間の中に清涼剤の役割を持ってアルトリアのチーム「ラウンズ」が挨拶をして持ち場へと歩いていく。パートナーにはかの有名なランスロットとガウエインの双璧、突破するには常人はおろかサーヴァントでさえも困難である。

「そうそう、マシユもこの会場に来ていますよ」

「!?」

「ははは、そこまで驚く必要はないでしょう。観客席でライブ映像を見ながら残りの騎士達と共に応援してくれています、お互いかつこ悪い所は見せられませんね」

そう言つてランスロット笑うが、それを聞いたマスターは苦笑いしかできない。ライブ映像で見ているということはマスターがアン&メアリーと一緒にいる所も見ているということ、それは帰つてから妬きマシユマロ案件であり、それを解消させるためにマスターはマシユを精一杯甘やかさなければならず、それが二人つきりならいいもの

他のサーヴァントが見ている所でやってしまうと、大事件が起こりかねない。

マスターは戦う前から汗が止まらなくなってきた。

「先輩、また違う人と……」

「兄さんまた違う女の人と……」

そんなマスターの思いを知ってか知らずか、しっかりとマシユは観客席からマスターを拗ねた表情で見しており、マスターの妹の方もなんだか機嫌を悪くして自分の兄を睨んでいた。

残された円卓の騎士たちは、同じ観客席で自分の王を応援しながらモードレッドが何処に紛れ込んでいるか監視しており、双眼鏡で選手たちの顔を一人一人確認している。

「トリスタン卿、何時までも水着の女性に目を奪われないように」

「私は悲しい……なぜベディ卿は私の思考パターンを先読みしてくるのか……」

若干一名、違う確認をしている騎士が居たが。

「なによ、兄さんったらデレデレしちゃってみつともないったらありやしないんだから
！」

「しかし、先輩が出場をするなら私も一緒に出てみたかったです……」

「同感ね、あのへらへらした顔をびしょ濡れにしてやりたかったわ」

「じゃあ、出てみるか?」

「誰つむぐ?!」

突如現れた少女に声を上げる前に口を塞がれるマスターの妹、その少女は彼女が先ほど出会ったアルトリアに良く似た顔で、水着の上からジャケツトを羽織っており、三人分の的と水鉄砲を持っていた。

「モードレッドさん!?!」

「モードレッド? じゃあアルトリアさんが探していたのつてこの人? 男じゃなかったんだ……」

「しーっ、あの真面目野郎どもに気付かれるだろ! それよりも、丁度いいところにいたな! な、一緒に出場してくれよ!」

そういつて手を合わせるモードレッド、普段は無理矢理にでも相手連れまわすぐらい自分本位なモードレッドの貴重なシーンであったが、そもそも手に持っている水鉄砲は何処で手に入れたのか、三人一組のエントリーなので一人では出場は不可のはずである。

「出場つて、その水鉄砲はどうしたんですか?」

「譲つてもらつた! ちよいと尻を蹴飛ばしてな」

つまりは脅迫に近い形であった。モードレッドのあまりの奔放さに開いた口がふ

さがらないマシユであつたが、そんなことはお構いなしにモードレッドは無理矢理マシユに盾を持たせようとして来る。

「いや、私は今回は観戦をアルトリアさんから……」

「なんだあ？ マスターの貞操より父上の命令の方が大事なのか？」

「な、なんで先輩の……その、なんで危機なんですか！」

「なるほど、親子なのね……似ているはずだわ……」

マスターの妹の何だか合点のいつている様子に、嬉しいのか怒つてるのか分からない表情を一瞬見せるモードレッドだが、気を取り直してマシユに何か企んでいる顔をしながら近づく。

「そりゃわかんだろ。もしマスター達が優勝して見ろ、あのメロン海賊たちはさつそく賞品使つてホテルで一泊と洒落込むぜ？ そこで何が起きるか分からねえほどいい子ちゃんじゃねえだろ？」

「そ、それは……まだそうとは決まったわけでは……」

「そりゃそうだ、父上が俺以外の奴に負けるわけないからな。だが、相手はマスターがいる。それに父上は自分が前に出たいからつてあの不倫野郎にリーダーを任せやがった」

「し、しかし……」

「それに、俺たちが優勝すればホテルに泊まるのは、俺たちだ。無論マスターも入れてな」

「なっ……!」

「ちよ、ちよつとマシユちゃん……?」

完全に極悪人の顔をしながらマシユにあることないことを吹き込んでいくモードレッド。だが、マスター関連には見境が無いマシユはどんどんと眼に闘志の炎が宿っていく。気付けばマシユはモードレッドに乗せられて怪しい話に聞き入っていた。

「きつとアイツも喜ぶぜ? そのまま良い雰囲気になって、そのままホテルで長い夜を……なんてことも」

「そ、そんな……ダメです……私達にはまだ早すぎます……ああ、でも先輩が求めるのであれば……」

「早いか遅いかの問題なの……!?!」

「なあ、いいじゃねーか。これは私欲の戦いじゃねえ、マスターを守る立派な正義の戦いだぜ?」

「正義の、戦い……!」

完全に私欲の戦いであるが、もはやマスターの事しか頭にないマシユは判断も出来ずモードレッドから差し出された手を握ってしまう。

商談成立と見たモードレッドは、次の獲物にマスターの妹を捕捉すると、その腕を取って有無を言わずに試合会場へと引つ張っていった。

「ちよ、ちよつと！ 私には説得も無しなわけ!？」

「おう、お前はそうだな……うちのマスターと同じところがありそうだったからな！ 説得が無理と思つたら実力行使だと相場は決まつてる！」

「な、なんでさー!？」

妹の叫びもむなしく、騎士達に気付かれなままマシュとマスターの妹は、一人の逆の騎士によつて無理矢理参戦させられてしまい、ここにチーム「カムラン」が結成されることになった。

ほどなくして、試合が開始される合図である笛が施設中に鳴り響き、戦いの幕が開けた。

このモードレッドの参戦がどのような混乱をもたらすことになるかは、まだ誰にも分からなかった。

「いいですかガウエイン、貴公の遠距離型の水鉄砲は射程こそ長いですが、一回の射撃ごとに空気を籠めなければいけません。撃つなら当たる時を狙いなさい」

「はっ！ このガウエイン、王への忠誠を持って敵を打ち破る様をお見せしましょう」
「ランスロット、貴方の盾は攻撃性こそ持ちませんが、防御の方法はこれしかありません。今回は貴方が倒れてしまうと私達の敗北となります。貴方の技巧をもつてその身に一粒の水滴さえも防ぎきることを期待します」

「はっ、お任せください。王は後方の憂いなく御自身の御威光をその水鉄砲を持ってお示してください」

南国のジャングルをデザインされたいろんな背の高い木々が並ぶジャングルプールエリア。そこで索敵しながらウォーターブリッツ経験者であるアルトリアは忠臣二人に戦い方を享受していた。開始されてから、三十分以上は経っており、所かここで脱落者も出始めていた。

円卓の誇る最強の騎士達といえど、持つのは剣ではなく水鉄砲であり、自分たちの時代では考えられぬ動き方をしなければならなかったため、円卓の騎士達は苦戦を強いられると思われていたが、彼らが撃滅または壊滅させたチームは開始から五チームにまで上る。

経験者であるアルトリアの的確な作戦指示も要因の一つだが、恐るべきは騎士達の異

常な適応力であった。水鉄砲の仕組みを理解し、盾の有効範囲を理解し、射線を理解し、自分たちが勝利するための動きを理解した。

結局彼らが危うかったのは最初のチームの戦闘のみであり、その後は相手の動きから自分の動きを理解し、いまや並の選手の力量を大きく上回る動きをするようになっていた。

「しかしなるほど、これがウォーターブリッツという競技……王が楽しむ理由も分かる気がしますな。怪我の心配が無い所が特によろしい」

「先ほどのチームで五チーム目ですが、油断は禁物です。このサバイバルのルールは言わば弱者必滅のルール、弱いチームから駆逐されていき必然的に強者が残る……それ」
「此処は広い、狙撃や挟撃などには気を付けたいところです」

「確かに、飛んでくるのが弓ではなく殺意無き水では我々の戦場で鍛えられた勘というのも働きのいいですからね。超絶技巧のランスロット卿でも飛んでくる水を二方向同時にというのは難しいでしょう」

「彼女……マシユなら造作もないのだろうが、いや盾だけを振るとするのは経験が浅いのでな。今回ばかりは卿に頼らせてもらおうか、私の出番がないこと祈るよ」

「そういいながら微笑み合う騎士達、上空のドローンから映されているライブ映像ではその様になり過ぎる二人に会場の女性達が黄色い声を上げる。」

「対象発見だべ……」

「待て、まずは経験者らしいアルトリアさんを狙う。そのまま続けて第二射でリーダーを狙う」

そのアルトリアを狙う影があつた、生い茂る木々に隠れながら長距離用の水鉄砲がアルトリアに狙いを定め、引き金を絞つていく。殺気のない銃口にアルトリア達はまだ気付いていない。

「セット
アライメント照準、完了……あ、だべ」

「撃て」

「……この感覚?!」

「王よー、私の後ろに!」

アルトリアが何かに気づき、大きく体を逸らすと同時に、的があつた部分に勢いよく水がレーザーの如く飛んできた。長距離からの正確な狙撃にランスロットが前に出てアルトリアを庇い、すぐさまガウエインが索敵を開始する。

アルトリア達は自分たちにも悟られぬほどの狙撃に驚くが、それ以上に驚いたのはその狙撃を避けられたマスターの学友たちのチームであつた。

「マジかよ、避けやがったぞ?! マジで人間か?! 第二射は!」

「無理だべ、こつちに気付いたべ。アルトリアさんと盾役の人が向かってくるべよ、敵の有効射程内まで想定五秒。足早いっぺな……」

「水の軌道から位置を把握したのか！ 弾幕張りながらウォータースライダー区域まで走るぞ！ 狙撃が無理なら他の敵と混戦させるしかない！」

「急げ！ 時間稼ぎも長くは持たんぞ！」

迫ってくるアルトリア達に出来る限りの弾幕を浴びせて物陰に隠れさせている間に、サルと学友は長距離用の水鉄砲を持って現エリアから離脱していく。

彼が離脱したことを確認すると、残りの学友たちも最後尾に盾持ちが付き、後ろから狙われない様にながら離脱していった。

「敵二名、離脱していきます。追いますか？」

「いえ、おそらく相手は私達を誘い込んで他の敵と戦わせる魂胆でしょう。おそらく敵が多く集まるであろうウォータースライダーエリア方面へと離脱していききましたから」「では、このまま敵同士が消耗するまで待ちますか？」

「いえ、それでは機を逃します。ここは誘いに乗って、敵が集まるウォータースライダーエリアで敵を殲滅させましょう。おそらくもうそろそろエリア封鎖が始まる頃です」

今回のウォータースライダーはワクワクギブーン全域を試合会場としたため、選手が少

なくなると会敵が難しくなる。なので一定時間毎に中央のエリア以外のエリアは侵入不可になるように出来ており、不可になった時そのエリアにいる選手は失格となる。

なので、選手たちは皆自分たちのエリアから中央エリアを目指さなければならなくなり、その途中で同じ考えを持つ同エリアのチームと戦闘になる。結果そのエリアで生き抜いた強者だけが中央のウォータースライダーエリアを目指すことになり、そこで決着がつく。

「しかし、このままいくと乱戦になるのは明らかです。そこで……」
アルトリアが一つの案を出す。彼女のっただけ飛び出している髪の毛がびよこんと揺れた。

ウォータースライダーエリア、中央には大人たちがスリル満点に飛びこめる二、三メートル程度の滝があり、その横にはなぜかきのこに模されたウォータースライダーが並び、子供から大人まで人気のあるエリアである。

そのエリアは今ウォーターブリッツ用に様々な障害物が立ち並び、そこではいくつも

の水が飛び交っている限りなく平和な紛争地域と化していた。

プールの上にも足場が出来ており、滑ったらプールに真つ逆様ではあるがその足場の先で乗り込める子供も大人も遊べる海賊船は拠点としては最適であり、皆そこを目標そうとして牽制し合っている。

「サル！ 無事か！」

「おう、二人とも無事だったべか。こっちはどうも膠着状態だつべな、あの外人さんたちが後ろから付いて来ててくりやあ一気にあの沈没船までいけるんだつべか……」

「それが、どうもあつちの動きが可笑しい。普通はそのまま追撃、ここで挟撃しようと迫ってくると思ったのだが……」

「あちゃあ、読まれたつべかな？」

「多分な、あの人たちが付いてきてくれたらそのまま乱戦に参加させれたんだが……」

その後マスターの学友たちは近くに設置された障害物を高台代わりにして地の利を取りながら戦況を観察していた。

自分たちのチーム以外誰も敵であるこの空間で、戦闘能力的にも、その人目を引く顔の良さ的にも目立つアルトアリア達を乱戦に引きずり込むということは、この膠着状態に陥って皆が場外負けをするという状況を打破する一手だったのだが、それも期待できなくなり、マスターの学友たちは溜息をつきながら撃ってくる相手を冷静にチーム

ワークを駆使してやり返している。

「このままじゃあ、誰もあの海賊船にたどり着けずにルール負けしちゃうな……」

このウォーターライダーエリア以外のエリアが禁止区域になった時、エリアは海賊船を中心に狭くなっていく。つまり、海賊船に乗りこまない限り場外負けの危険性は無くならない。

しかしながら海賊船をつなぐ通路はこの大会では封鎖されており、プールに浮かぶ足場しか海賊船に続く道はない。

なので、最初にこの海賊船に到着した者にとつて後から足場を渡る者は一列に並ぶことを余儀なくされ、格好の的でしなくなり、実質勝利に王手をかける。これが全チームが海賊船を目指す理由でもあった。

「ほぼ全チームが集まっているこの状況で何の策もなく飛び出すようなものだな」

「エリア封鎖の時間も残り少ないし、どうすつかな……ぐだ男の奴がさっさと脱落してくれているのを願うが」

「だべな」

だが膠着状態になって十五分程度が経ち、エリア封鎖が予告されるアナウンスが流れたところ、事態は急変した。

「……どうもおかしいな」

「妙だっぺな……どうも撃ち合いの方向が違ってきてるっぺ。」

それまでは、各チームはそれぞれの障害物に身を隠し、自分の対角線上にいる敵を攻撃しており、大きく勢力はジャングルエリアからきた中央、流れるプールエリアからきた右側、子供向けエリアの左側で、敵の敵は味方理論で各方面で撃ちあう形になっていたのだが、今は自分が来たエリアの方角に向って撃ち続けている。

後からこのエリアに来たチームに挟撃を食らったのか、それともまず自分の周りのチームを片づけようとしたのか、中央にいるマスターの学友達は一向に状況がつかめない。

「しかし、各方面が潰しあっているのは好機だ。こちらも暗黙の臨時協定を壊して、中央突破を図りながら海賊船を目指す！」

「いや、待て……何か変だぞ。左右の敵が中央に向かってきている!？」

それは、左右のチームたちが撃ちあいながら中央の方へ向ってきている光景であった。中央に向かう左右のチームたちはお互いに潰しあいながらも中央に向かって足を進めており、中央もそれを押しとどめるために撃ち返さなければならず、結果全員が共倒れと言う形で脱落していく。もはや誤射などを気にしていられないぐらいの混沌とした戦場と化していた。

「なにが、起こっているんだ!？」

「二人とも、あれ見るべ！　ありや人間じゃねえべよ……」

「あれは、アルトリアさん!?　一人で左側全員追い詰めてんのか!」

「右の方にはガウエインさんとランスロットさんか……何てことだ、三人でこの戦況を崩壊させたのか……」

それはアルトリアが一人で突入して、場をかき乱している様であった。飛んでくる水をまるで先読みしているかのようにかすりもせず、避けながら的確に打ち返している。

ガウエインの方も的確にワンショットワンキルで仕留めていき、飛んでくる水はランスロットが盾で全て弾いている。

「くそ、中央はじきに崩壊する！　こうなったらいったん他のエリアに……」

「駄目だ！　エリア封鎖が始まった！　俺たちは前に出るしか生き残る術はない!」

「誘われていたのはオラ達だったのだがや……!」

サル君がやられたという様に、頭を抱える。もはや共倒れしか向える結末は無い。

辛うじて残ったとしても、アルトリア達からの残党狩り、そうしなくても海賊船に乗り込み高みの見物をするだけであとは決着はつく。

「よし、このくらいでいいでしょう。あとは皆が潰しあうだけです」

アルトリアが合図とばかりに空に水を飛ばすと、それを見たガウエイン達が合流に向

かう。

これはサーヴァントだからこそ実行可能な作戦であった。マスターの学友達が逃げたあと、エリア封鎖ギリギリの時間になるとアルトリア達は二手に分かれた。

アルトリアは単騎で子供向けエリアからスライダーエリアに、ガウエインとランスロットは流れるプールエリアからスライダーゾーンに。どれもカメラに映らないように、しかしながら全速力で向かい、到着すると各方面を後ろからじわじわと狙い撃ちにした。

後ろから撃たれたチーム達は暗黙の共戦協定が崩れたと誤解し、内側で撃ちあいを始め、それはどんどんと広がっていった。

焦ったのは最前線にいるチームらであり、後ろで始まる撃ち合いに挟撃の可能性を危惧し、参戦したいが、参戦すると次は各方面からの挟撃を食らうという状況にどうにもできない。

その状況でアルトリア達が戦線を押し上げると、いよいよ前線にいるチームは挟撃の恐怖を無視できなくなり、唯一の逃げ場である前へと足を進めざるを得なくなる。

すると、全く同じ状況に陥っていると気付かない左右の陣営はどちらとも、相手が自分の前に出たために相手も前に出てきたと考え、そのまま両陣営は激突、そのまま中央を巻き込む形で、乱戦と化したのである。

恐るべきはそんなことを実行できる精神と肉体を持つサーヴァントである。もはやイカサマに近い。

「しまつ……アルトリアさん達が海賊船に向かうぞ！」

「んな事言つたつて、もう無理だべ！」

「くそつ……！ 何故誰も気づかん！ このままでは共倒れだぞー！」

この状況を破るにはこのチーム全員が協定を結んで、アルトリア達に牙をむくことであるが、そんなことは不可能である。

学友達が、自分の身を守るのに必死な間、これを機として海賊船に向かつていたチームを尽く打ち破りながらアルトリア達は海賊船へと悠々と足を進めていた。

「これで、勝利は間違いないでしょう。 ガウエイン、ランスロット良くやってくれました」

「いえ、これも王の戦術があつてこそ。 私は盾役でしたので実質はガウエイン卿が居なければ成立しませんでした」

「いえ、ランスロット卿の鉄壁の守りがあつてこそこの作戦は成功したのです。 流石は円卓最強と名高い騎士……」

「いいえ、どちらか一人でも欠けていたならこの作戦は成功しませんでした。 誇りなさい、貴方たちは王の勅命を見事果たしたのだ」

「はっ……！」

まるで城へと凱旋するかのようになり、海賊船へと向かうアルトリア達。

だが、アルトリア達は忘れていた。この状況を予測しえる人物がいることに。彼らを尊敬し、目指すべき目標とし、理解し、彼らから教えを受けた者がいることを。

「この覚えのある感覚っ！　しまっ……!?!」

「王よー！」

海賊船まで、あと半分と言ったところで、海賊船から水がガウエインの的を一閃する。

アルトリアを狙った射撃を庇ったのだ。アルトリアは最前列で、盾となるランスロットは最後尾、盾も間に合わず、結果ガウエインがアルトリアをその胸に隠して背中の的をさらけ出すしかアルトリアを救う道はなかった。

「ガウエインー！」

「王よ、どうか、勝利を……！」

そういつてガウエインはそのままだプールの中へ消えた。いや、怪我一つないのだが、場面的に浮かばない方が良く空気は呼んだのかそのままガウエインは潜水しながら姿を消してそのまま浮かび上がることはなかった。

「そんな……！」

「王よ、まだ相手は健在です！　盾の後ろへと！　ガウエイン卿の犠牲を無駄にするお

つもりか!」

「……っ! ランスロットはその身を第一に! 貴方がやられると御仕舞なのです! 私はそのまま射線を見て避けます! このまま海賊船へと突撃! 敵を撃滅します!」
「御意! ……それでこそ我等が王です」

そのまま二人は陣形を維持しながら不安定な足場を全速力で進んでいく。海賊船からは絶えず、水鉄砲の狙撃が続いており、正確な狙撃と常人では考えられない空気の再装填速度に、アルトリアは同じく大会に参戦していたサーヴァントたちを思い浮かべる。

「わお、あの騎士が庇う所までピシヤリだね。 さつすがマスター」

「でも、そんな相手の性格まで利用して避けられない罠を仕掛けるなんて、マスターったら根っからの善人の癖に、戦いときはこんなチョイ悪になれるんですね……」

「嫌いになった?」

「いいえ、ゾクゾクします♡」

「僕も。 んじゃ出るから援護よろしくー」

「お任せください」

そうして、海賊船から白い水着姿の少女が出てくる。顔に大きな傷がある以外は可愛いらしい少女であるがその手には短距離用の水鉄砲、つまりは大会の出場者である。

彼女の名はメアリー・リード、会場でマスターと共に居た美女の一人であり、サーヴァントの一人である。

「貴女は……」

「こんにちはは王様、そしてさようなら王様。まさか海賊に名乗り何て期待しないよね？」

「——っ！」

敵の出現にアルトリア達が足を止めた際に、水鉄砲を乱射しながら一気に間合いを詰めていくメアリー。プールの波で揺れる不安定な足場でさえも何の意にも介さずに走れるのは流石海賊出身のサーヴァントと言う他ない。

「あてずっぽうでも、この回避行動がとれない足場では……王よ、私の盾に隠れて射撃を！」

「分かりました！」

そのままランスロットが盾だけをアルトリアの前に出して、アルトリアの身を守る。幸運にも他のチームで海賊船へと続く足場に向かう者はおらず、前だけに集中することが出来たので、このままメアリーはアルトリアを仕留める事が出来なくなった。

「ふーん……でもそうすることも想定済みなんだよね、こっちは！」

が、メアリーもサーヴァントである。そのままメアリーは至近距離までアルトリア

達に近づくとそのまま高く飛んで空中で宙返りし、ランスロットの後ろに回り込みながら水鉄砲を乱射する。サーヴァントであり、水上の戦闘に慣れたメアリーだからこそできる芸当であつた。

「なんとつ……！　むんっ！」

だがランスロットも円卓最強の騎士、盾を使って水を弾き飛ばしながらメアリーと対峙するが、その時点でランスロット達は自分たちが詰れたことに気付く。

「しまつ……！」

「くっ……！」

「はーいそこまでです」

海賊船の甲板部分からもう一人の美女が長距離用の水鉄砲でアルトリアに狙いを定めながら声をかける。メアリーとは対照的に赤色の水着を着た、誰もが羨むナイスなバディの美女である。

彼女の名前はアン・ボニー。射撃の名手であり、メアリーの一癖の相棒である。

「さ、どつちを選ぶ？　僕に撃たれて負けるか」

「私から撃たれて退場となるか」

「どつちがいい？」

「どちらがよろしいですか？」

これはランスロットが何よりも固い忠義を持つことを逆手に取った作戦であった。完全なる挟撃、アンに対処しようとしたらメアリーが、メアリーを対処しようとしたらそのアンがその引き金を引く。アルトリアがランスロットを庇おうが、ランスロットが攻撃することは不可。どうあがいても対処は不可能であった。

これがサーヴァントではないなら突破も可能であっただろうが、相手はサーヴァントに加え射撃の名手である。唯一の突破方法は挟撃される前に、アルトリアが自分の勝利にかけてメアリーに向かって突撃することであったが、それも今になっては叶わない。

「流石ですね、この作戦を考えたのは？」

「分かるでしょう？」

「サーヴァントの事になると誰にも負けないからね、僕たちのマスターは。単身での挟撃、その隙に乗じての乗船、その時の列の並び、誰が何を持つかまでゼーんぶ御見通し」

ふとアンの隣に一人の青年が立っていることにアルトリアは気付く。

「マスター……！」

誤魔化すように頬をかきながら笑うマスターに、アルトリア達は自分たちが罠にかけ

られた事に納得がいく。アルトリア達はマスターはあの乱戦に巻き込まれているものだと思い込んでいたが、どうやら甘かったらしい。下手をすれば自分以上にサーヴァントを理解するこの青年に、なんの対策も無しに挑むこと自体が甘かったのだと、爽やかな悔しさと共にマスターと笑いを交わす。

「了解、これが手向けといたしましょう」

「うん、解体しちゃおう」

「それ、わたしたちのセリむぐぐ」

マスターが手を上げると同時に、アンとメアリーの水鉄砲に力が籠められる。次は勝つと、アルトリアがリベンジを決心してメアリーに最後の抵抗を試みて銃口を向ける。

マスターの手が降ろされる

「ちよーつとまったー!!」

「ちよちよつと落ちるー!?!」

「ゴムボート、足場に接触します……!」

その時であった。勢いよく発進してきた一つのゴムボートが足場へとぶつかってきたのだ。当然足場は大きく揺れて、そこにいる全員は身動きが取れなくなる。

「今だ！ あの船の上のデカメロンを狙え！」

「えっ!? えーつと……そこ、動くな！」

「……っ！」

「きやつ……!?!」

その間に、ゴムボートに乗っていた一人の少女の水鉄砲から、綺麗にアンの胸元に向かって水が発射される。咄嗟にマスターが盾で防ぎ、アンを押し倒すことで脱落せずに済んだが、これによってマスターの詰みが崩れる。

「王よっ！」

「ええ、突入します！」

「しまっ……!?!」

その隙を逃さず、アルトリアが船内へと突入する。逃がさぬとメアリーは水鉄砲を乱射するが、ランスロットと一人の少女によって全て防がれてしまう。

「んなっ……マシユ!? 君は観戦しているのでは……それにモードレッドまで！」

「それがいろいろと事情がありまして……」

「父上を倒すのは、この俺だ！ 邪魔はさせねえ！」

「この……邪魔はそっちだ！」

その少女たちはモードレッド、マシユとマスターの妹で編成されたチーム「カムラン」

であった。メアリーとモードレッドが睨みあっている間、マシユとマスターの妹は船内へと入っていく。

残されたのは、ランスロットとモードレッド、それにメアリーであった。

「そんじやあ蹂躪と行くか！」

モードレッドが吠える。決着の時は近づいていた。

「マスター！ 御覚悟を！」

「先輩！ 不純異性交遊はまだ早すぎます！」

「兄さん！ ……えっと、とりあえず覚悟！」

「マスター、こういう事はもつと落ち着いたところで……ほら、人が見ていますわ」

「!?」

三人が甲板に到着した時、マスターはアンとくんずほぐれつになっていた。実際は

アンが掴んで離そうとしないので、マスターが離れようともがいているだけのだが、アルトリア除く二人には、またマスターが女性と良い雰囲気になつてるようにしか見えない。

「へえ………余裕あるのね兄さん………」

「先輩、最低です」

「!？」

一瞬の躊躇なくマスターの妹はマスターに向けて水鉄砲を発射する。対するマスターは弁解しながら床を転がり盾を展開してこれを回避するが、彼女たちの冷たい視線は回避できなかつた。

「マスター、どうします?」

「……」

が、そんな時でさえもマスターは何とか戦略を立ててこの状況を打開しようとアンと密着しながら小さく作戦を話し合っていた。

「……」

「……そうですわね、私としては勝ちたいです、優勝よりも」

「……」

「リーダー狙い……? ……ふむ、ふむ、なるほど……」

「いい加減、離れないかしら?」

マスターの妹が顔に青筋を立てながら、水鉄砲をマスターに向ける。さすがのアルトリアもこんな状況になっているとは思ってもよらなかつたため、銃を向けていいのか戸惑っており、マシユに至っては笑顔が怖い。

すぐさまアンと離れると、アンの前に立って盾を構える。

「先輩、降伏を。こうなった以上先輩に勝利の可能性はありません」

「待つてください、此処は正々堂々と一騎打ちに……」

「そんな必要はない！今すぐにでもその顔をびしょびしょに……！」

ここで突入したのがアルトリア一人であったなら、問答無用で戦闘になっていたであろうが、マシユとマスターの妹が一緒に乱入してきたのがマスターにとっては幸運であった。

それぞれ、マスターの対処を協議している間、横目で下で戦っているメアリーを見る。

メアリーはモードレッドの乱入によって、ランスロットとの二対一の戦闘を強いられ
ており、このままでは敗北は確実であった。

「……………」

一瞬、モードレッドが突撃してきた時のようにマスターには一瞬の隙が欲しかった。

それさえあれば、逆転できるのだ。マスターは目の前の三人に時間稼ぎをしながら
その時をじっと待っていた。

「おっと、そろそろ動きが鈍くなってきたか？」

「くっ……」

「モードレッドあまり前に出過ぎるな！　もしお前が当たったらマシユ達まで失格なんだぞー！」

「うるせえ！　俺に指図するんじゃない！」

モードレッドとランスロットの相性は凄ぶる悪かったが、戦闘においてその連携は見事の一言に尽きた。命中弾をランスロットが叩き落とし、隙を逃さずモードレッドが撃ち続ける二人の連携は、水上戦のプロであるメアリーを苦戦させ、その体力を奪っていった。

「一瞬、一瞬の隙があればいいんだ……」

「……？　　さてモードレッド、何か様子がおかしい。　防御戦に徹しすぎている。　相手は何かの策を持っているのではないか？」

「なら、その策ごと打ち破ればいい！　ランスロット俺に合わせろ！　このまま一気に……!？」

その時、決着をつける一撃がその銃口から放たれた。　しかしそれはその場にいるサーヴァントたちの水鉄砲からではなかった。　その一撃は船から遠く離れた地上から、一人のサルのような人間からであった。

「セット。　多分避けるだろうけど、これで……オラ達の勝ちだべ……!」

長距離水鉄砲による狙撃。その一撃は遠く離れたモードレッドの的を捉える。

「……………つぐおお!!」

前に出ようとしたせいで、ランスロットの盾も間に合わず、モードレッドはその直感によつて体をそらしてその狙撃をすれすれで回避するが、体をそらしたことで一瞬隙が出来てしまう。

「「それを、待っていた!」」

アンが、甲板から素早く水鉄砲を取り出し一瞬でランスロットに照準を合わせて発射する、そのタイミングに寸分の狂いもなくメアリーがランスロットに水鉄砲を発射しながらモードレッドに抱き着きそのままプールの中に引きずり込む。

「んだとお……………!?!」

「ま、さ、か……………!」

正に比翼にして連理、正反対の二方向からの同時攻撃にさすがのランスロットも対応できず、その背中の的が水に濡れ、モードレッドも抵抗できずプールへとダイブしてしまい。両人とも失格、そしてリーダーが退場となったためそのチームのメンバーも全員失格となる。

「まさか、先輩は……………まで予想して……………?」

「……………」

驚く後輩に、まぐれだと笑うマスターであるが、そのマスターの的も濡れていた。

アンの照準がぶれないため、一瞬遅れて発射された二人の水をその身を挺して受け止めた結果であつた。これによりマスターのチームも失格である。

「……引き分けですか。次回に持ち越しと言ふことですね」

失格になつたことによつて、アルトリアも笑つて水鉄砲を下ろす。決着は次回に持ち越しとしたらしい、そのまま船を下りてランスロットを迎えにいった。

「……兄さんは一体、向こうで何をしてきたの？ 一体何が……」

「……どうかされたのですか？」

兄の姿を見て信じられないという目で見つめるマスターの妹。それはまるで別人を見ている様な目であり、マシユはそんなマスターの妹を不思議そうな目で見つめながら、モードレッドの回収に向かつていった。

「ごめんなさい、マスター。勝ちたいがために優勝を不意にしまして」

歩きながら、申し訳なきように謝るアンに、笑つて頭を撫でるマスター。結局のところマスターは優勝よりも勝ちたいというアン・ボニーの気持ちに最優先に作戦を立案したのだつた。次は勝とうとアンに微笑むとアンは少し顔を赤くしながら、彼の頬にキスすると走つてメアリーを迎えに行つた。

「先輩……」

「兄さん……」

冷たい視線を残して。

「こ、これで、オラ達の優勝だべ……オラを守るために散っていった学友よオラは勝ったべ……！」

その様子を見ながら、勝利の涙を流すサル君、周りには失格となったチームがへたり込んでおり、どうやら神聖隊はあの地獄の様な戦いを大きな犠牲を経て勝ち残ったようであった。

「うう……みんなホテル行くべ……つておろう？」

そんなサル君の的からヒットしたというブザーが鳴る。まさか涙で反応したのかとサル君は笑うが、顔に水がかかった時その顔は真っ青になった。

「えつと……解体するね？」

「解体はしちやだめよ！」

「こんな勝ち方でいいんでしょうか……？」

サル君がその眼に見たのは、水鉄砲を持った三人の少女。そういえば会場で見た気がするなど近くで鳴るブザー音が遠くに聞こえながら、サル君はそう、ふと、思った。

「終了ー！ 優勝はチーム「おとぎばなし」だああああ!!」
「うつきー……うつきー!!」

その日、わくわくぎぶーんではサルの泣き声が聞こえたという。

「で、何処のキャベツ畑から拾ってきたの、その子たちは」

マスターの家、その玄関でマスターの母は腰に手を当てながらそう言った。

「……」

マスターの母が見つめる先には、苦笑いをしながら立っているマスターとその背中に隠れながらマスターの母を見る三人の少女たちがいた。

「マシユちゃんから、他のお客さんの事は聞いてるけど。その子たちを家に住まわせるなんて話は聞いていません」

「……」

「あのねえ、この家がそんなに大きいように見えるかしら？ アンタだって部屋を譲っ

て屋根裏部屋に住んでいるのに、この子たちのスペースが何処にあると思ってるの？」

マスターの母の正論に言いよどむマスター、それでも何とか説得をしようとするマスターに一人の少女がマスターの裾を引っ張って首を振る。

「あの……もういいんです。 ごめんなさい、トナカイさん。 カルデアから出ることを諦めたのに、これ以上トナカイさんに迷惑はかけられません……」

「でも、また寂しいって泣いちゃうのジャンヌでしょ？ それに、マスターにホテルの券プレゼントするって」

「いいえ、泣きません。 と言うか泣いてません！ 立派にお留守番できますー！」

そう少女は言うがその言葉とは裏腹にマスターの服を握る力は強くなる一方で、口では強がっても本当はマスターと離れるのが嫌なのは誰が見ても分かることであった。

「はあ……アンタって子は何でこう節操無しなんでしょうね？」

そういつてため息をつくマスターの母。 なんだか昔を思い出してるようで、遠い目をしながら、クスリと笑った。

「!?」

「無自覚なのが余計に性質悪いの。 全く……さ、外は寒いでしょう中にお入りなさいな」

「えっ……?」

「いいの……?」

「別に駄目だなんて一言も言っていないわ。私、子供が寒そうにしてるのだけは耐えられないのよ」

そういつてウインクするマスターの母を見て、少女たちは喜んで家の中へと走って入っていく。

「？」

「どうせ、良いというまでそこ動かないつもりなんでしょ? そういう所もお父さんそっくりなんだからまったく……まあ、ちよつと早い孫が出来たと思うことにするわ」
そういつて笑うマスターの母に、マスターはどれだけ懐が深いんだと若干困惑しながら笑い返す。その笑い顔はまるで兄弟のようにそっくりであった。

「ありがとう! おかあさんのおかあさん!」

「ちよつと待つて、ほんとに孫じゃないわよね?」

—— マスターの明日はどつちだ。

ぐだぐだカルデア。 その宝石の名前は？

カルデアの一室、他の部屋と違いちやぶ台に、やかんに炬燵、畳も敷かれてまるで日本にあるごく普通の和室を再現されているこの部屋はあるサーヴァント達の寝室になってた。

これまた何処から持ち込まれたのか古いテレビにはどうやってつないでいるのか最新ゲーム機器が繋がれており、その住人であるサーヴァントはくつろぎながらゲームに夢中になっていた。

「のう、人斬り」

そんなサーヴァントをこたつに入って同じようにだらけてみかんを剥きながら見ているサーヴァントがふと何を思いついた様に口にする。

「なんですか、今ちよつと空に落ちるのに忙しいんですけど」

「ゲームしてるだけなんじゃが……マスター日本に帰ったんじやる？」

「そうですよー、ご両親に顔を見せてくるらしいですよ。 おつ、タリスマンげつとー」

「それで、こつちからも何人か調査で出て行ったんじやよな」

「そうですねー。 学者さんや聖杯戦争に参加経験のあるサーヴァントが選ばれてまし

たね、あと日本出身とかも」

「それなんじゃが……可笑しくないか？」

「何がですか？ マスターだって色々あるんですから帰ってくるのは遅くなるって

……」

「いや、なんで儂呼ばれてないのじゃ?! ワシ日本出身で聖杯戦争にも参加したんじゃが!」

「そりゃノツブがロクなことしないってマスター達から思われているんですよ。ぶー信用がないって辛いですねー」

「それ、思いつきりブーメラン刺さってるんじゃが」

「ちが、ちーがーいーまーす！ 私はマスターが留守中のカルデアを任されているだけなんですー。 日々治安を維持するため陣羽織来て悪即斬に励んでいるんですー!」

「普通に忘れられて置いて行かれたんじやろ」

「……ちーがーいーまーす！ カルデアから出(る)の(禁)止)を受けているノツブとは違って何時でも行けるんですー！ ただ何時でも行けるから行かないだけなんですー!」

「お主は声をかけられなくて居残り！ ワシはそもそも出られないので居残り！ そこに何の違いもありやしねえじやろうが!」

「違うのです!!」

「是非もないよネ!!」

カルデアの夜は更けていく……

「あの子、早く帰ってこねえかなあ……」

「あれー？ 先輩、あの子が居なくてももしかして寂しいんですか？」

「堅物女史と一緒にするんじゃない。ただな、色々と面倒事が多すぎるんだよ……」

「なっ、なんでそこで私が出てくる!?!」

「ううむ、力のある常識人が大勢調査に向かってしまったからな……いや、彼を追って問題児も着いて行ってしまったが……」

「若干、カルデアにも問題児が、いや訂正しよう、多く問題児が存在しているがな。今

この食堂を見てわかる様に」

「なーんでエミヤさん達連れていつちやったかなあ……」

お馴染みカルデア食堂にて、カルデア職員の四人は他の職員から強い要望により設置された中華テーブルに座りながら、物が飛び交っている食堂を溜息をつくながら見つめ

ていた。

人理保障機関カルデアの食堂は、人理崩壊後はあのレフ・ライノールのテロによって二十人数名にまでカルデアの職員は減少しておりその食堂を利用するのは、休憩時の職員かサーヴァントたちであった。幾らサーヴァント達が入ろうと、広い食堂にはそれでも寂しく見えたこともあったものだが、人理定礎を完了した後は外から増員が送られてきたこともあり、食堂は毎日満員の賑わいを見せていた。

だが今回は賑わっているというよりか騒がしくなっていると表現する方が正しい状況になっていた。

いたるところには「食堂に自由を」、「マスターの早期帰還求ム」、「カルデアのおかんを取り戻せ」、「でもエリチャンだけは勘弁な!」などと叫んだ旗を持ち、厨房の中で何やらメガホンで演説をしている職員たちの姿があった。

厨房の入り口前では機動服を来た職員たちと、サーヴァントたちが結託して守りを固めており、そこを突破しようとする何人もの職員が押しかけている状況であり、外からはいろんな食材や調味料が飛び交っていた。

人呼んで「食の解放前線」と名乗っているこのメンバーは厨房内に立てこもり食材を人質にしてマスター達の早期帰還を訴えており、今日で丸一日立てこもっている状態である。

こんな状況になったのは、カルデア唯一のマスターが日本に帰省したことからは始まる。

マスターが帰省する際、冬木の調査のためにダ・ヴィンチちゃんが連れて行ったサーヴァントは十数人に上り、それに無許可の密入国者、王のお供として着いてきた騎士達を含めるとかなりの数になるのだが、その中にはカルデアのおかんことエミヤも同行していた。

その際にカルデア食堂の総料理長を務めるエミヤは今や百人近い職員が利用している食堂の指揮に穴が開くことを心配したが、職員たちは心配ないと笑顔でエミヤを見送った。なんせ料理が出来るサーヴァントはエミヤだけではなかったし、エミヤが開講した料理教室を受講した職員たちが交代制で調理をすることになっていたからだ。

実際、最初の一週間はさほど問題なかった。カルデアに残ったブーディカや頼光に加え、タマモキヤツトやエミヤの料理講座を受講した職員たちが交代制で調理を務めたこともあり、少々効率が落ちるだけで食堂は何ともなく稼動していた。

しかし次の週に移ると、マスターに構ってもらえないことに気付いたタマモキヤツトが不貞寝してたことに加え、頼光の姿が見えなくなり、残されたバーサーカーたちのお世話にブーディカが手を離せなくなったために、職員たちだけでカルデア職員全員分の料理を用意しなければいけなくなった。供給が追い付かなくなり、次第に料理を受け

取るのに行列ができ始め、それを解消するために整理券が配布されたが、またそれを受け取るために行列ができるという悪循環に職員の不満は堪る一方であり、それを解消するために料理が出来るサーヴァント達にも交代制で料理当番が回るようになったが、それが事態を大いに悪化させることになった。

簡単に言うると現代的な料理を作れるサーヴァントが少なすぎたのである。

ある日の看護婦の料理は見た目的にも、味的にも問題ないのだが妙に薬臭いそれは食堂を病院の様な匂いの上書きし、また消毒を徹底された食堂は、徹夜明けで入浴する暇がなかった職員が食堂に入った瞬間、看護婦から頭から消毒液に突っ込まれる自体が多々発生することになった。

ある日では某研究員が疲れている職員たちを見て、良かれと思つて入れた栄養剤が効果を發揮しすぎて、肌が青色になったり、女性が男性に、男性が女性になったり、髪の毛が異常に伸びたり、奇声を上げながら三メートル以上飛び跳ねたりと異常すぎる事態となり、職員たちは対応に追われ、更に疲労する結果となった。

そして極めつけは、元気を出してもらおうと彼女らなりに頑張ろうとしたドラゴン娘三人衆が厨房に潜入しその金星の料理の腕をふるった結果、カルデアの約四割の職員が緊急治療室に担ぎ込まれたことをきっかけに暴動が発生、「食の解放前線」が結成され厨房を占拠したのである。

「考え直せー！ いまならまだ間に合う！ カルデアのおかんだってこんなこと望んじゃあいいはずだ！」

「煩い！ 俺の親友はエリちゃんのを料理を食っちゃまって口からエーテルを今も吐きだし続けているんだ！ 第五架空要素を吐き出すってあの料理は一体何で出来ているんだ畜生ー！」

「馬鹿野郎！ そんなこと言うからそのエリちゃん落ち込んで段ボール被っちゃってるんじゃないか！ 慰めるためにエリちゃんのを料理を食すことになるマスター君の気持ちを考えてみる！」

「ちよつと！ 誰ですかトマトを投げようとした愚か者は！ ここはスペインですか！」

「ぬううううん！ なめこだけは！ なめこだけは守り抜きますっ！ これはムアスタアアアア！ と！ 私が丹精込めて作ったなめこなのですよ！」

「あいたつ!? だれぞ吾に豆投げた人間は！ 節分か!? 節分のつもりか!？」

そんなこんなで食堂は混乱の極みに達しており、サーヴァントを巻き込みつつさらに戦火を拡大させつつあった。

ここにエミヤがいれば一喝の元、調理場を指揮して混乱を収められるのだが生憎遠い

日本に出張中であり、最後の頼みのマスターもまた同じくして日本である。

テーブルの職員四人はいなくなつてから分かるその人の苦勞という物を栄養価は高いが味気のない非常食と共に噛みしめながら溜息をついた。

「まあ、なんだ。この暴動も皆腹減つて馬鹿らしく思つてくるだろ。投げ捨てすぎて冷蔵庫空っぽになつてなきやいいけどな」

「元々は、旨い飯を取り戻すために蜂起したというのに、そうなつたら皮肉なことだな」
「皮肉……肉……ああーお肉が食べたいです……金星の極赤料理じゃなくて……」

「贅沢を言うな、全く……この非常食があるだけでも有難いと……おお？」

と、ふと職員の一人が羽織つている白衣が誰かに引つ張られる感覚を覚えて、白衣の職員は確かめる様に後ろを向く。これがマスターがカルデアに在籍の時だとなにかと厄介ごとに巻き込まれるのだが、今回はマスターは不在の為その心配もなく職員達は気軽に振り向くことが出来るという複雑な心境と共にだが。

「一体誰、が……？ んん？」

しかし振り向くと、人の姿はない。不思議に思つて白衣の職員が白衣を引つ張つている正体を確かめようとする四人座っているテーブルに一つの影が落ちた。

テーブルの四人が不思議に思いふと見上げてみると、

「んなっ……!？」

「ぶぐつ……!?!」

「ぴっ……!?!」

「なっ、んで、ここに!?!」

四人が驚いて声を上げる、四人が見上げる先には一人のサーヴァントが立っていた。高すぎる身長と、天使の様な金色の羽、それと反するように悪魔の様な巨大な蛇の尻尾が伸びており、薄紫の長い髪は何本か束になつて集まると、まるで生きた蛇のように蠢き、目を光らせており、一匹が食べ物と勘違いしたのか白衣に噛みついていた。

「ぐ、ゴルゴーン……!?!」

「何時まで経つても食事が出てこないと思つたら、なんだこの騒ぎは?」

天使と悪魔が同居しているような風貌の彼女はゴルゴーンと言う名のサーヴァントであった。英雄であるペルセウスによつて倒された怪物でもある彼女は基本的には召喚は不可能であるが、特殊クラスアヴェンジャー復讐者としてこのカルデアに召喚されていた。

根本的に人間とは相容れない存在の彼女は、普段はカルデアの下層にある特定の職員しか立ち入りを許可されていない区域にて自らその身を隔離している。

サーヴァント以外の人間とは例外であるマスターを除いて接触を禁止されているゴルゴーンはレイシフト以外では基本的にはその部屋から動くことは無く、ケツアルから「部屋から出ないと健康的じゃありません!」と部屋から連れ出される以外は本を読

んで過ごしている。

食事も基本的に他のサーヴァントが部屋に運んで来る料理を食し、自らが食堂に出向くことはマスターが部屋から連れ出して一緒に食事をする時以外にはありえない事であった。

「あ、貴方はマスター以外との人間の接触は禁じられているはずですよ！　いますぐ……」

「……煩い」

「ぷい……」

勇気を出したオペレーター担当の職員がゴルゴーンに向かって警告するが、一瞥もされず髪の毛で構成された蛇の威嚇によって一瞬で黙らせられる。

他の三人の職員たちも恐怖を感じてその場から一步も動けない、全身の血の気が引き、心臓が凍りつく様な錯覚さえ受ける。

目の前にいる怪物はゴルゴーンその気になればこの空間にいる人間すべてを液化化だつてできるのだ、彼女の気まぐれ一つで自分の命が無くなるという状況で恐怖を覚えない人間など存在しなかった。

「(生で見るのは初めてだが、復讐の女神と言う奴は……ここまで凄まじいか……)」

「(彼女が進入禁止エリアから出た瞬間、隔壁が降りるはずなのだが……あつ、霊体化できるといった。みんな当たり前前に姿を見せてるので忘れていた……)」

「(人間などとは比べ物にも……あの子はどうかやってこの怪物と笑い合っているんだ……?)」

その恐怖心とは裏腹にゴルゴーンから職員たちは目を離せない。それは鼠が猫に睨まれた時のように恐怖心と緊張感で一切の動き、眼球の運動さえも硬直させられていたのだが、もう一つ、人間とはかけ離れた彼女の美しさに見とれていたというのも理由の一つであった。

「おい」

「えっ、ひゃい!？」

食堂で起こっている暴動を見ながら、ゴルゴーンはオペレーターの職員へと声をかける。先ほど煩いと言われた職員はどう返事をしたらいいのか迷ってしまい変な返事になってしまいがゴルゴーンは一切気にせず自らの尻尾を椅子にして座り始める。近くにいる白衣の職員は堪ったものではなかった。

「アレは、どこだ？」

「あ、あれって……?？」

「私の、^{マスター}宝石だ。あの憎たらしい顔をした滅らさず口はどこに行つたと聞いている」

「あ、あの子なら帰省中です……冬木への調査もかねて……」

「帰省、だと？ アレは何も……いや、なるほどケツアル・コアトルの奴がいなくなった

のも領ける。見つかると面倒だと思ったか……」

「は、はい。ダ・ヴィンチちゃんの提案ですがあの子が此処からいなくなると聞くと必ず着いてくる人たちがいるので……」

「ふん、遠い海の向こうに行けばついて来れないだろうと高を括ったわけか。そんなことで止められる者達でもあるまいに」

向こうでサーヴァントたちに囲まれ苦勞しているマスターを想像して鼻で笑う共に少しばかり不機嫌な顔になるゴルゴーン、なにか気に障ることも言ってしまったかと職員たちは戦慄する。

「しかし、私に一言も話さずに飛び出していったのは気に食わん。勝手に持ち主から飛び出していく宝石があるものか」

「ほ、宝石……?」

「何はともあれ、まずは腹ごしらえだな……」

困惑する職員たちをよそに、暴動が起きている厨房へと向かっていくゴルゴーン。他の職員たちもゴルゴーンが食堂へと姿を見せたことに気付くと三者三様の驚き方と恐怖心を見せて散り散りになっていった。

サーヴァントたちもまさかの人物に思わず戦闘状態へと入り、みな職員たちを守るために前へと立ちふさがる。部屋が歪んで見えるほどの緊張感が周りを包み、皆何が起

こるかを固唾を飲んで見守る。

「……食事はまだか？」

だがゴルゴーンの言葉によって一気にその緊張感は崩れ去る。 厨房側の守り手であつたマルタも、なめこを守ろうと奮闘していたレオニダスも呆気にとられてしまう。

目の前の存在の外見とその口から出た言葉のギャップに皆、いつの間にかいそいそと料理を作る準備を始めていた。 ある者は投げつけた食材を拾い集め、ある者は皿を用意し、ある者は献立を決めはじめる。

なんだか分からないが女神様が、ご飯を欲している。 ただそれだけの認識がサーヴァント以外の人間を料理に駆り立てていた。 なんだかどこかの黒い王様がエミヤにご飯を強請る気持ちがあつたのである。

復讐の女神が今だけは暴動を治めたはらぺこの女神になつていた。

それは、彼女を知るサーヴァントたちにとつては到底信じられない事であつた。

「……どうした。 何だ貴様らのその顔は」

カルデアの一室、他の部屋と違いちゃぶ台に、やかんに炬燵、畳も敷かれてまるで日

本にあるごく普通の和室を再現されているこの部屋はあるサーヴァント達の寝室になつてた。

これまた何処から持ち込まれたのか古いテレビにはどうやって映っているのか高画質なアニメが流れており、そんなアニメを見ながらあるサーヴァントたちはこたつに入りながらアイスを食べるといふ究極の贅沢に浸つていた。

「それで、あの暴動どうなつたんです？」

「あー、いつの間にか職員たちの料理合戦になつてうやむやになつたつて話じゃったな。

あのドラ娘たちは当分厨房には出入り禁止みたいじゃが」

「ゴルゴーンさんはどうしたんです？」

「チャリン娘の成長版は腹が膨れるとそのまま部屋に帰つてつた、職員よりもサーヴァントの方がその姿に動揺したというのもおかしなもんじやな」

「マスターと接しているうちに丸くなつたんでしようか？」

「そりやありえんじやろ。今回はお腹が空きすぎプラス、マスターの顔を立てて大人しくしてただけじゃろうし」

「なんで、ノツプにそんなこと分かるんです？」

「十七人、あの女神の力に魅入られてゴルゴーンに契約を持ちかけてチェスト本能寺さ

れかけた哀れな魔術師たちの数じゃ」

チェスト本能寺とは織田家にとってぶっ殺せの隠語である。

「十七人……」

「あの女神は根本的に人間など好いてはおらんよ、むしろ嫌らうておる。マスターはそうじゃな、あの女神にとって宝石のような存在になれたからこそ目の前にいることを許されているというわけじゃ」

「つまり、他の魔術師たちが持ちかけた契約は自分から宝石を奪う行為に等しい行為だったと」

「多分じゃけどネ。 まったく神様とは良く分からん考えをしとる、月にしろ太陽にしろ……」

「だから神様なんでしょ、あとチェストは敵性言語なので次使ったら斬りますね」

「是非もないよネ!？」

カルデアの夜が更けていく……

「貴様は私の虜だ、マスター。 我が青い宝石よ、最後は必ずお前という指輪を私の指にはめてみせる……その体から魂まで、全て」

それと同じ頃、カルデアの下層進入禁止区域の一室にて一人の女神が暗い部屋の中で

自らの手を蕩けた目で見ていた。
ような目で

—— マスターの死後はどつちだ

それはまるでその指に指輪がはめられているかの

チョコレート・ディア・

人理継続保障機関フィニス・カルデアはその名の通り人理を守るために作られた様々な研究施設、実験施設、その施設を支える発電施設からなり、一部露出している出入り口から想像もつかないほどの巨大な施設である。

無論そこに配属される人数は百から二百に上り、一時はレフ・ライノールのテロによってその人員は二十数名までに減ってしまったが元々は最大で五百名を収容できる施設なのである。

さまざまな人種が年齢を問わず集められているカルデアは一部の人間はそこを小さな時計塔と表現するがそれは間違いである、カルデアでは魔術だけではなく科学も取り入れているのだ。

なので時計塔とは違ってその思考はどちらかというと現代的、過去へ向かって進化していく基本的な魔術とは違い、魔術さえも利用して人理を救おうと未来を目指すのがカルデアの指針なのである。

と、なんだかかまじめな話になったが、そんな建前を立ててもやはりカルデアというのは閉鎖空間、窓から見えるのは雪だけの景色であり、温かい光景を見られるのはデイス

プレイに映し出される景色のみで、やはりどこか気を病んでしまう時もあるだろう。

そこでカルデアに取り入れられたのは様々な娯楽施設である、日々汗を流すことができるトレーニングルームや、ビリヤードなどを楽しめる娯楽室、果てには大人な空間を演出したバーまである。職員たちはこの娯楽室のおかげで外出もできないカルデアの中で心も体も元気に過ごせているわけである。

その中でも一番人気なのは、大国の一般的な料理から、一国のちいさな田舎にあるマイナーな郷土料理まですべてを網羅しているといっても過言ではない食堂であった、三ツ星レストランのシェフ百人とメル友と豪語するおかんと筆頭にそこに召喚されたサーヴァントとその講習を受けた弟子たちから繰り出される料理はまさに絶品、故郷の母親を思い出すと涙を流すものさえいるのだ。

そんなカルデアの食堂ではしばしばイベントと称して国々の料理を作る体験会や、規模は小さめであるが祭りを再現したりすることがある。もちろん参加は誰でも可能、サーヴァントだって参加できる。

そして今回食堂で開催されているイベントはある意味、男女どちらにとっても重要な催しであった。

いつもは食事が並んでいるテーブルにはいろんな容器とチョコレートが並び、食べる側である職員やサーヴァントもエプロンを着てせつせとお菓子作りに励んでいる。

そのほとんどが女性だが、ちらほらと男性の姿も混じっており、それぞれ思惑があつて動いているようであつた。

ある者は恋人に、ある者は大切な友人に、ある者はお世話になつてゐる人に、そしてある者は恋人になつてもらふために。皆思いをそれぞれに、自分のお菓子に思いを込めてゐる。

そう今日はバレンタインデーである。

バレンタインデー、恋人たちのために祈つた聖バレンタインの名をとつたこの日は、大切な人とこれからも過ごせると感謝をこめて贈り物をする日である。

一般的には花やアクセサリーなどを贈るが、食堂の料理長が日本人なこともあつて、比較的安価でそして思いも込めやすい（料理長談）チョコレートを贈るといふ日本式のバレンタインをカルデア食堂では取り入れることになり、カルデア中の女子たちが集まることになつた。

ちなみに去年は人数も少なく、各人が個々でチョコを作つていたのでつちやける人が、どうかはつちやけるサーヴァントが多かつたのでそれを抑制するためイベントでもあるのだが、全く意に介さず今年も好き放題やつてゐる。

「ね、ね。誰に贈るわけ？」

「カルナさんでしょ、李書文先生、それにベオウルフさんにクーフリーンさんに……」
「イケメンサーヴァントばつかじやないの！ もうちよつと自分に合った出会いを探しなさいよ」

「うっさい、そういうそつちは誰に送るのよ？」

「ギル君、アレキサンダー君、アンデルセン先生に……」

「そつちはシヨタサーヴァントばつかじやない！ 余計に性質悪いわ！」

「今日こそはあの人に一步近づくとチャンス……」

「へー、誰に贈るの？」

「デオンさん！」

「へえ、デオン……さん？ あの子男の子なの？ 女の子なの？」

「可愛いからどつちでもOK！」

「カルデアも大概ね……」

女子同士で集まりながら賑やかにお菓子作りが進んでいく、どうやら届け先のほとんどはサーヴァントたちであり残念ながらカルデアの男性職員たちは見向きもされてはいないようであった。確かに美男美女でも最上位に来るようなサーヴァントたちと一般人を比べるのは酷というものであるが、ただ男性職員たちも只目の前を通り過ぎていくチョコをそのまま指を啜えて見送るような男たちではなかった。

「えーつとチョコを溶かした後は……生クリームと混ぜればいいんだっけか」

「これでマタハリちゃんからチョコを……」

「悲しきかなチョコを貰えぬ男の集まり……」

「うるせえ、お前ももらえねーからここにいるんだろ！」

お菓子作りに励む女性たちに交じり隅の方で不器用ながらも協力してお菓子を作っているのはカルデアの男性職員であった。特に決まりはないものの、バレンタインデーで男性から女性にチョコを贈るということは珍しいことであったため、女性職員たちは皆不思議そうな目で男性職員たちを見ていた。

「ぐふふつ、今年こそアストルフオちゃんからチョコを……」

「アストルフオ……ちゃん？」

「しつ……世の中には知らない方が良いこともある」

そんなこんなで男性職員がお菓子を作るのは、チョコを贈ってお返しとして女性から義理でも何でもチョコを貰おうとする苦肉の策であった。もちろん男性職員も女性職員に見向きもせずサーヴァント狙いである。狙いは人それぞれであるが、周りに配っているブーティカやマタハリの宝石になるチョコの他に美人サーヴァントから貰いたい欲深な男性職員はなんだか人に見せられない笑い顔でチョコを作っている。一見すると魔術師が怪しい薬を作っているような光景に周りの女性達は変なものを見

る様な目をしながら距離を置き始める。

「しかし、チョコを贈る代わりにお返しチョコを強請るなんてな……いいアイデアだとは思うが……」

「俺たちじゃあ良くて義理確定、悪くて受け取り拒否まであるぞ……」

「そんなのやつてみなきや分らないだろ！　ほら、もつとペース上げろ！　俺たちは数で勝負するんだ！」

「男って何歳になっても子供よねー」

「あそこまでされるとなんだか可哀想よね、作ってあげようかしら？」

意外なところで同情票ならぬ同情チョコが贈られる可能性が芽生えている中、一人の女子職員が男子達の中にある一人の少年の姿を見つける。

「あれ？　あの子……マスター君じゃない？　いつ帰ってきてたの？」

「あら、知らなかったわけ？　ダ・ヴィンチちゃん博士があつちでの研究結果持ち帰って解析してるから数日間だけ戻ってきてるのよ。　なんでも残留魔力から聖杯の……なんだつけ、とにかくまたあつちに戻るらしいけどその間だけあの子もついでに帰ってきてるってわけ、丁度バレンタインだしね」

話しかけられたもう一人の女性職員が人形型のクッキー生地を型抜きしながら答えた。

「へー、それでなんであの僕ちゃんまでチョコを作ってるわけ？ 言っちゃ悪いけど……作らなくても貰えるわよね、チョコ」

「馬鹿ねえ、そりゃサーヴァント達の皆さんに日々のお礼つてことでしょ、うちの男どもと一緒にしてもらっちゃ困るわ。人気は出るべくして出るってわけ」

二人が見ると、エプロン姿のマスターのテーブルには多くのチョコが並んでおり、その数は三十を超していた。それでもマスターの手は休まることは無くお菓子を作り続けている。

「皆さんって、もしかして英霊たち全員分作ってるの？ 今日中に作れるわけ？」

「まっさか、此処に帰ってきた時から夜なべで作って半分以上は朝に渡しているみたい。

お姉さんの分も作ってもらっちゃったときは思わず抱きしめてなでなでしちゃった」

話し合っていた女性職員の中に妙齢の美人が間に入ってくる、赤い髪と凛々しい顔とは裏腹に溢れる母性を備え持ったこの美人はサーヴァントの一人であり、名前をブーデイカと言った。

手には作り終えたお菓子を入れたバスケットを持っており、これから配りに行こうとしていたらしい。

「わわっ、ブーデイカさん!? もう作り終わったんですか？」

「んー、これでも追加で作ってたぐらいだよ？ 前よりも人が増えたから大変大変！」

「そ、それよりももしかしてあの子サーヴァントの人たち全員分作ってるんですか!？」

男女含めて!？」

驚く女性職員を見てブーディカは小さく笑うと、マスターの方を指さす。

「……? 普通にお菓子を作ってるようにしか……」

「あ、違う違う、その後ろ。 マスターの背中からずーつと真直ぐに指を動かしていくと

……ほらいた」

「うーん……んん!？」

女性職員たちが目を凝らすと、マスターから少し離れたテーブルで情熱的な視線を投げかけているいくつかの顔が見えた。 無論全員サーヴァントである。

自分の分はまだかとまだかと待ち望んでいる姿は御馳走を目の前に出されて涎を垂らしている犬の様だが、犬との違いはそのままマスターを食い散らかす危険性を孕んでいることである。

「すつ(い)見てる……」

「これでわかったでしょ、 誰か一人だけになんて特別なチョコとかあげれないのよ。

だから全員の分作って皆に渡しているの、 誰にも上げない方が楽なのね。 ま、そ

れがあの子の良い所なんだけど！」

「あー、あの子の分のチョコも作ってあげよつかなあ……」

「あはは、喜ぶだろうけどそれもやめた方が良いかも。ほら」

ブーデイカがまた指を指すと、一人の女性職員がマスターに向かつてチョコを渡そうと近づいている所であった。可愛らしい包装にハート型のチョコは本命チョコ以外に考えられず、渡す本人も中々の美人であった。

「あー、あの子この頃入った降霊科の……」

「男から結構人気な子なんだけど、意外な趣味していたのねー」

だが、そのまま女性職員は、マスターの後ろに立って声をかけようとした瞬間に床から穴が開いてそのまま地面に引きずり込まれるように音もなく落ちて行つた。正に一瞬。落ちた本人も何がなんだか分からないまま声を出せずに落ちていくしかなかった。

「……？」

マスターは誰からか声をかけられたような気がして振り向くが、当然そこには誰もおらずそのまままたチョコ作りに戻っていく。控えめについてホラーであった。

「え、ええ……」

「ね？ 絶賛抜け駆け禁止結界展開中。あとで助けにいかなくちゃ」

「過保護つてレベルじゃないわよ……」

因みにこの神代の魔術師がマスターの安全のために最高峰の魔術結界を無駄に使用したこのマスターに張られている抜け駆け禁止結界は、抜け駆けしようとした物体を自動的にレオニダスチョコレートブーツキャンプ室に転送し、飛ばされた相手はそこで一日トレーニングに励むことになる。

「まあ、いろいろとあの子も大変ってわけ。それじゃあ私は行くから良かったら手伝ってあげてね、狙いを付けられない程度に」

そういつてブーディカはバスケット片手に食堂から出て行ってしまった。

「手伝うったって……」

「ねえ……」

マスターの後ろ姿に熱い視線を注ぐサーヴァントたちを見ながら女性職員たちはマスターの女難の相に同情をすることしか出来なかった。

当のマスターは何も気づかず平和にお菓子をただ何事もなく作り続け、もう少しで全員分が完成するという所であった。

「デュフフフフフフさつきはふぁーらーおーされて記憶が吹き飛んだでござるが、今

回は安全！ アストルフオキくんはもちろん、ラーマキくんやデオンキくんの男モードを満載にしたある意味マスターには安全な秘蔵ファイルであります！ 借りを返さないのは海賊の流儀に反しますからな。男の娘の楽園が今、ここに！」

「うーん、でも女の子の様な男の子とか、女装している男の子とか、女になれる男の子とか言っても結局全部衆道なんじゃ……？」

「なんだア？ てめエ……」

「えっ、えっ？ 新免武蔵守藤原玄信です……」

——黒髭、キレた！

それは翌日昼過ぎのカルデアの廊下、黒髭と武蔵という珍しい組み合わせが二人が一緒に歩いていた時の出来事であった。

武蔵の何気ない一言が黒髭ことティーチの心に突き刺さり、小刻みに震えながら青筋を立てている。

「そーじゃねんだよ！ 何と言うか男の娘は……尊いんだ！ 美少年好きの癖に、美少年の絡み合いが見れないとはとんだ弱者！ ふーんだ、恋愛クソザコ剣豪！」

「なっ!?! 誰よそんな失礼極まる名前付けたの！ そもそも所帯持つと剣が鈍るって仕様がですなえ！」

「拙者でござる！」

「斬るうー！」

対する武蔵もティーチの悪意ある煽りに顔を真つ赤にしながら剣を抜く。無論、峰打ちであるが受ける傷が致命傷から重症に変わるだけで痛いことには変わらない。

「け、劍豪が鉄の棒振り回して不殺つて馬鹿みたいだよネ！　せめてたけのこにしてほしいでござるー！」

「たけみつ！　問答無用とりやー！」

「ぎゃーお助けー！　また記憶消去されるー！　物理でー！」

そのまま武蔵の剣は大きく振りかぶられるとティーチの頭へと一直線に振り下ろされる。さすがの逃げ足の速いティーチも劍豪の音速に近いスピードで振り下ろされる剣を間合いに入られては避けられるはずもなく、武蔵の剣はティーチの頭を砕くであらう。

「――！――」

「へっ？　マスター？」

だが、その剣は黒髭の頭を砕くすれすれで止まる。まさに黒髭危機一髪であった。

「おおおおお！　マスターわが友よー！　拙者を助けに来てくれるなんて……やはり拙者たちはソウルブラザー!？」

そんな黒髭の危機を救ったのは意外にもマスターであった。手にはチョコレート

を持っており、頭と肩には三匹の猫の様な銀河が映し出された様な体を持つ不思議な生ものに乗せていた。

「へっ、お返し？ この前の？ い、いいよ！ あんなのだったら何時だって連れてってあげるし……」

感激している黒髭を華麗に無視しながら、マスターはちよつと赤面しながら手に持っているチョコを武蔵の目の前に差し出す。クッキーにチョコをコーティングしたそれは刀の形をしており、四本セットでラッピングされていた。

本来ならホワイトデーというお返しの日に送るのだが、マスターはホワイトデーにはまた日本に戻るのだから、こうやって事前に作っておいたチョコレートをお返し代わりにしてサーヴァントたちにかけていた。

「うわっ、これ小っちゃいけど私の刀になってるんだ……もしかして手作り？」

「？」

「う、ううん！ うれしい……すつごく……うん……」

「あのー拙者にはぶべっ?!」

マスターの頭に乗ってる謎の生き物が顔からビームを出して黒髭に直撃させ、丸こげ

にしている中、武蔵は赤くなつた顔をさらに赤くしながらチヨコを受け取る。

マスターの照れくさそうに笑いながら上目がちで武蔵の様子をうかがう姿は、なんだか子供みたいで思わず武蔵はマスターのその姿に唾を飲んでしまう。

「チヨコっていうんだっけ、大切にするよ、うん！ 宝物にする！」

「えっ？ あつ、そつか食べなきゃ意味ないか！ あは、あははは！」

ひとしきり笑つた後、武蔵は人差し指を合わせながら少し恥ずかしげにこう続けた。

「そ、それでさ。明日ぐらいに帰っちゃんだし、そのお礼のお礼つて変だけど私の部屋にでも来てゆつくりいいいいいいいい！」

否、続けようとした。武蔵の言葉が抜け駆けと判断されたため、結界が発動して一瞬にして落とし穴に落ちて行つてしまったためである。この抜け駆け禁止結界にかかつてしまったサーヴァントはこれで二ケタに上る。恐るべしは男子にも発動してしまつた事ではあるが。

「ちよつとー！ 折角いい所だったのにー!!」

呆れ顔で笑うマスターの前で、落とし穴に落ちていく武蔵の声が廊下に響いていた。

「あつ、マスターコレ拙者の男の娘これくしょおおおおお……」

不意にマスターにプレゼントを贈ろうとした黒髭の声も響いた。

「やれやれ、私がいけない間にずいぶんと埃が溜まっているんじゃないかと思つたが、綺麗に掃除されているじゃないか」

それは賑やかなバレンタインデーの夜。一人の女性が誰にも使われていない薄暗い部屋の中で一人、片手に包装されたチョコを持つて佇んでいた。その姿は何かを懐かしむかのようなであり、その眼も何処か過去を思つて遠い目をしていた。

「君にも人望があつたつてことだ。まったく、感謝しなくちやいけないよ？」

その女性はゆつくりと部屋の机を指でなぞりながら誰にも聞こえないような声で、だ
が誰かに語りかける様な口調で一人呟く。

「そうそう、今日はバレンタインデーだつてね。どうせ誰にも貰え無さそうだから、そ
ら、作つてあげたよ。天才のチョコだ、有難く食べると……」

女性はチョコを机の上に置こうとして、手が止まる。既に机の上には二つ同じよう
にチョコレートが置かれていたからだ。一つは青色の包装をされており、もう一つは

桃色の包装をされていた。

「なんだ、あの子たちからも貰ったのかい。幸せ者だね、まったく……まったく。ディア・ドクターと来た。泣かせるじゃないか、なあ？」

女性は苦笑しながらそのままそのチョコの横に自分のチョコを置くとそのまま部屋から出ようと足を進める。

「それじゃまた来るよ、その時まで味の感想でも考えていてくれたまえ。……それじゃ」

女性は誰もいない部屋に微笑みかけると、そのまま扉を閉めた。

この部屋はかつて皆にとつて掛け替えのない友人が使っていた部屋ということは限られた者達しか知らない。カルデアの中でも謎の空き部屋と呼ばれるこの部屋の住人に何があつたのかを知る者も限られている。

ただ誰かが住んでいたという記録があるだけである。

マシユ学校へ行く。くチョコレートクッキーはミントの香りく

「おかあさん、朝だよー遅刻しちゃうよー？」

「？」

朝、人類最後のマスターだったカルデアのマスターは体を感じる重みで目を覚ました。だが、天井は見知ったカルデアの物ではなく慣れ親しんだ自分の家の天井である。

カルデアから自分の家へと帰ってきたことを再認識しながら、まだ意識を手放せようとする睡魔と格闘し首を下に向けるとマスター自分の腹部に押し掛かっている一人の少女を見つける。

銀髪で大人しそうな印象であるが意外と活発的であり、気まぐれな猫の様な性格のこの少女はジャック・ザ・リッパー。可憐な少女であるが、その実霧の都ロンドンを騒

がせた連続殺人鬼である。

先日マスターと一緒にカルデアに帰り、お留守番を命じられたのにも関わらず懲りずにまた日本に密入国したサーヴァントの一人でもある彼女は、マスターの旅行バックに忍び込みまたマスターの実家にお世話になっていた。

「おかーさんのおかーさんもう朝ごはん作って待ってるよ？ わたしたちもお腹すいちやった」

「……………」

「あと五分って言ったら解体してもいいっておかーさんのおかーさんが言ってたよ？」

「……………」

流石自分の母親、そこらへんは御見通しだとマスターは苦笑する。だがもう少し寝ていたいのも事実であるのでマスターは自分に乗っかっているジャックを排除するために起きるふりをして、自分の布団にジャックを引きずり込む。

「わあっ、おかあさん？ うあっあは、あははははは！ くすぐりたいよう！」

「……………」

「うふふ、あはっははは！ きぎぶあつぷ！ ギブアップするからこちよこちよ止めてえ

！」

そのままマスターはジャックがギブアップして布団の中で大人しくなるまでくすぐると、ジャックを胸の中に抱きしめながらそのまま二度寝をしようと目を閉じる。ジャックのほんのりと暖かい体温が寒い屋根裏部屋の中で湯たんぼ代わりになっても快適であった。

「おかあさんの匂いがする……」

ジャックもそのままマスターの胸に顔を埋めるとそのまま寝息を立てていく。これがマスターの年齢が未成年でなかったらまだ微笑ましい親子の図だっただろうが、悲しいかなマスターはまだ高校生であり、おかーさんもおとーさんになるにはまだ早すぎた。

「わ、我が子が幼児愛好者に……！ これは母として何とかしなければー」

「いや、実母が横にいるんですけど……」

なので要らぬ誤解を招いてしまう。マスターが恐る恐る顔を向けると涙目の義母と顔に青筋を立てながらフライパンを持つている実母が立っており、マスターがさらに激しい目覚めをさせられることになった。

「だ、大丈夫ですか？ 先輩？」

「……………」

穏やかな日差しの中、頭におおきなたんこぶが出来たマスターとマシユの二人は学生服に身を包み学校へと向っていた。彼らの通う学校は少々距離があるため最寄駅まで電車で行き、その後は歩きで学校へと向かう。

二人と一緒に他の生徒たちも姿が見えてきて来る中、マスターは何だか生徒たちがいつもの雰囲気と違うのに気付いた。特に男子生徒だ、なんだかオールバック大目で何と言うかいつも地味な生徒も少し恰好を付けて歩いて皆そわそわしている。

「……………」

「確かにそうですね……今日は何かイベントがあるのででしょうか？」

「おーい、マシユちゃん！」

「お二人さーん！ おはようだがやー！」

不思議がる二人の元に、マスターの学友たちが駆け寄ってくる。マスターが見るとサルみたいな学友以外の学友たちも何だか髪型を固めていたり、制服のボタンを外してかっこつけたりしている。

「おはようございます、皆さん。お二人も何だかいつもと様子が違いますね。今日は何かイベントでもありましたか？」

「何言ってるんだよマシユちゃん！ バレンタインだよ！ 男の価値が決まると言っても良い日さー！」

胸を張って答える学友の一人にマシユは首をかしげる。 バレンタインはもうすでに過ぎ去ってしまっているのだ。

「バレンタイン……？ バレンタインは先日なのでは？」

「うむ、俺たちの学校振替でバレンタインデーは休みだっただろ？ だから入れ替えで今日になっているのだ」

「……………」

「そうそうだから、俺たちもこうしてバツチリ決めているわけよ！」

自慢げにポーズを決める学友二人、その自信満々な姿を見てマスターはバレンタインデーに格好つけても相手は前日に上げる相手を決めているのだから意味はないんじゃないかと言うツツコミを飲み込む。 友人の甘い夢を醒まさせないのも友情の一つである。

「と、いうわけで……マシユちゃん、その……チョコとか……」

「も、申し訳ありません。 まさかそういう日とは知らなかったので用意が……」

「二ですよ……」

「でもマシユちゃんぐだつちの家に住んでいるんだし、ぐだつちにはバレンタインのチョコはあげれるんじゃないんべか？」

「はい！ それはお渡しすることが出来ました！」

「でーすーよーねー」

マシユの笑顔を見て、マスターに殺気を向ける学友二人。笑いかけているが目はまるで笑っていない、笑うとは本来威嚇のために用いられたと聞くがあながち嘘では無いなどマスターは思った。

そのままマスターは友人二名の濃い殺気を眠気覚ましの打ち水代わりに受けながら、一行は学校へと到着する。校門から学生たちは皆賑わいを見せており、玄関でチョコを渡す者や、下駄箱の中にくっそりと入れる者もいた。中には一足早い春を迎えている男女までいる。

「よし……行くぞ……」

マスターの学友たちも、自分の下駄箱に着くと深呼吸しながらゆつくりとその扉に手をかける。栄光か絶望か、まるで何かに祈る様に目を閉じながら開けていくが、目を開いた瞬間その顔は落胆に変わった。

「な……ない……」 つも……」

「ま、まあ引き出しの中の可能性だつてある！ 諦めるのはまだ早いぞー！」

「……」

まだまだくじけない学友たちに苦笑しながらマスターも下駄箱を開けると、中に何か

が入っているのを発見した。マスターが取り出してみるとそれは可愛らしいリボンで飾られた袋の中に可愛くラッピングされたチョコレートが入っており、メッセージカードにはただハートのマークが一つだけ書かれていた。

「ほう……ぐだ男どんにはマシユちゃん以外にもたぶらかしじや女子がおるとか？」

「モテる男はよかばい……なんば釈明ばせんとか？」

「……………」

「もう言わんでよか！」

「おんしら出身南のほうだったべか？」

余りの憎しみに薩摩の方のぼつけもんになった学友二人が隅に置いてあつた箒を持ち、目の前の裏切者マスターを叩き切ろうとじりじりと迫っていく。正に一刀必殺、殺意しかにじまないその構えに、此処に沖田がいたら、一瞬で壬生狼モードにチェンジしていたことであろう。

「きゃつ……!?!」

「……………」

「あれはマシユちゃんの声ばい！ まつさかがんたれな男から言い寄られてるんじやなかとか！」

「そりや大変ばい！ 助けにいきもす！」

その時、隣の下駄箱からマシユの小さな悲鳴が聞こえたので、チェスト関ヶ原どころではなくなった学友たちが急いでマシユの所へと向かうぼつけもん二人。マスターの方は、此処が人の多い学校と言うことと、マシユの力の強さとそれよりも強い精神の強さを誰よりも理解しているの、安心しながらマシユへと向かう。無論悪い男に言い寄られているのであれば実力行使をしても止めるつもりでもあったが。

「マシユちゃん、大丈夫か……ああ……」

「おお……う……」

「せ、先輩。上履きを取ろうとして扉を開けたら中からこんなに……」

しかし男たちが見たのは、そんな男の姿ではなくチョコの山だった。大小それぞれ異なるチョコがマシユの下駄箱から溢れるほどに詰め込まれていたのだ。マシユが自分の上履きを取ろうとすると更にあふれて、床へと零れ落ちていく。

「あ、いたいたマシユちゃん！ はいこれチョコレート、ってうわもうこんなに！」

さらに一人の女子がマシユに手渡してチョコレートを渡しに来る、それを見た他の女子たちもこぞってマシユの周りに集まってきた。

「あ、ありがとうございます。しかしバレンタインと言うのは女子が男子に渡す者では？」

「何言ってるの！ 今の時代は友チョコが主流なのよ。友達同士でこれからもよろし

くって渡すわけ！ ま、この量のチョコ見る限り友達になつてくださーいって人達も多そうだけど……ねえ？」

「んなつ！ 俺たちはもうマシユちゃんと友達だつーの！」

「友人同士でチョコ……そういうのもあるんですね……わわつ、これ以上はバックに入りません！」

意地悪そうに笑うクラス女子に、向きになりながら反論する学友たち。賑やかに笑い合っている人達の中心にマシユが居るところを見て、マスターはマシユが学校生活に馴染めていることに安堵すると同時にマシユが皆に知られているということに少しだけ心の中で妬いてしまっている自分を自覚する。

意外に自分も独占欲が強いのもかもしれないと思いながらマスターは、全方向から贈られてくるチョコの対応に四苦八苦しているマシユをただ微笑みながら見つめていた。

「結局一つも貰えなかったあ……」

「まだ、まだ放課後があるから……」

それから、学校の昼休み。チョコを貰った男子や女子たちが昼食のデザート代わり

に貰ったチョコを開封して頬張っている頃、マスターの学友二人は溢れる涙と共に机に突っ伏していた。机からは流れた涙が横から流れ落ちて滝の様な光景と化している。

「まーだやつてんのけ、チョコぐらいでそんな落ち込むことあるべか？」

「うるせえ！ ていうかお前らちやつかりチョコ貰ってんじやねーよ！」

「サルに負けるとは……」

ぼりぼりと口いっぱいチョコを頬張りながらサルの様な学友、こちらは敗北者二人とは違い、チョコを貰うことに成功していた。

サルの様な学友は、そのフレンドリーな性格が功を奏したのか様々な女子からチョコを貰っており、それが雰囲気的に義理チョコだったとしても数にするとクラスで一貫っている男子とも言えた。

一方マスターの方は下駄箱に入っていたチョコを含め、その後机の中や手渡しを含めると三つ程度であり、サル君に比べると少なかつた。だが、何だかどれも気合が入っているというか、ハートが書かれていたり、好意的なメッセージが添えられたりしている、まさか本命なのかと学友たちを戦慄させることになった。

「そうだ、マシユちゃんからチョコをおすそ分けしてもらうのは女々か？……そうしたら俺たちだつてチョコを貰えることになる。しかもマシユちゃんからの手渡しで」

「名案に……」

「……………」

「悲しくないのかつて？ 悲しいさ、だがゼロよりはたとえマイナスでも一が欲しい……持てる者に持たざる者の気持ちは分かるまいて……」

「そういうや今日はマシユちゃん遅いつべな」

サルの様な学友が時計を見ると、昼休みはもう半分を過ぎようとしていた。いつもならマシユはこの時間ならすでに自身の弁当を持ってマスターの教室で仲良く昼食を取っているはずであつた。「友人たちの嫉妬の視線を浴びながらではあるが」

「確かに遅いなあ、何か用事でもあるんだろうか？」

「……………」

クラスの女子たちに誘われて昼食を取っているんだらうとマスターは笑うが、チョコレートを貰えなかつた学友たちはそのモテない脳内回路をフルに巡らせて様々な憶測を立てていた。その真剣なまなざしと燃える情熱の目にはとても似合わない阿呆な想像をしていることはマスターにも分かつたが、何にせよマシユが自分の意志で決定して行動しているのならばマスターは何の文句も言う必要は感じなかつた。

「……………」

ふとマスターは今朝の友人たちに囲まれたマシユを思い出す。友人たちに囲まれ困惑しながらもどこか楽しそうなマシユの姿、それは何処にでもいる素敵な女の子であ

り、その姿を見てマスターは思わず顔をがほころんだことを覚えている。

もつとマシユにはいろんな友達を持つて、いろんな経験をしてもらいたいとマスターは思い、そしてそれには自分という存在が邪魔なんじゃないかとも考えた。

カルデアでマシユとマスターが出会つてから二人はどんな時も一緒であった。それはマスターがマシユとデミ・サーヴァントとして契約し、それに加え特異点が危険な場所であり、マシユがいないとマスターの身が危険だったのもあるが、何時しか二人はそんな理由を持たなくとも一緒にいることが当たり前になり、マシユもそれでよいと考えている。

だが、そのせいでマシユが同年代の子との交流を断つていたり、自身の行動の自由を束縛しているとしたら、それはいけない事だとマスターは考える。ここは特異点ではなく平和な一地方なのだ、自分の事なんて放つておいて自分の好きなように行動しても誰も文句は言わない。

忌避するべきはそれをどこか嫌だと感じている自分の心だ。

「どしたべぐだつち、そんな考え込むような顔をして」

「……………」

サル君の声に意識を戻してマスターは笑つてごまかす。

思い上がりだろうか、いや思い上がりなのだろう。　だけど、それでも——それはマ

スターがただの男の子であるが故の苦悩だった。

「なんだかしらねえけど、悩み事なら相談乗るべ？」

「？」

「へ？ チョココどつちから食べようか迷ってた？ それオラもなんだべー。いやー飯食う前にチョコ食つちやうのもどうかとは思うんだべが……」

「死ね……！ 死ね……！」

凄まじい怨念と共に机をたたき音がするが二人は無視しながら貰ったチョコ見せ合う。確かにサルの様な学友のチョコの量は昼食のデザートとしては多すぎるようである。

「おーサル君！ 私のチョコ食べてくれたー？ お返しは三倍返してよろしくねー！」

「おう、ちゃんとカカオ豆でお返しするべー」

「原材料三倍って意味じゃない!! あ、そうそう今日は下級生のクラスは家庭科の実習だったらしいよ。振替バレンタインデーの時にチョコクッキー何て先生も分かっていると知らない？」

「教頭先生からして愉快的先生だからなあ、ちなみにどこのクラス？」

「えーつとBだったかなあ……」

教室が凍る。教室にいる男子の視線が全てマスターへと向かい、じつと真顔で見つ

め始める。カルデアにいるメジエド様を思い出すが、それ以上に自分にミイラ案件が迫っていることがカルデアで身についた危機察知能力によって察知していた。一人、また一人と席を立ちマスターを囲むようにして周りに立ち始める。

「……………」

そして気づく、Bのクラスはマシユが在籍しているクラスである。つまりマシユもクッキーを作っているのだろう、遅れているのはその為であり、そしてそのクッキーが誰に送られるのかなんて日々昼食毎にマシユを見ている男子生徒なら考えずとも分かることであつた。

「囲め……………こいつは足が速いからな、出口をふさぐんだ……………簧巻きにするぞ……………」

「……………!!」

「ははあー? 裏切者ー? 果たして裏切つたのはどちらかな……………お前は俺たちの心を裏切つたんだっ!」

「……………!!」

「逆恨みのどこが悪いというのだ! 言つたはずだゼロよりマイナスでも一が良いと! マシユちゃんお手製クッキーが食えるなら俺は喜んでマイナスになろう……………!」

「男たちの眼に漆黒の炎が宿る、殺ると言つたら殺るそんな覚悟を持つた目であつたがこんなことのためにそんな覚悟を持つてどうするといふのか、マスターは目の前の男た

ちのオルタ化現象にに困惑すると共に、マシユのクッキーを奪おうとする敵と認識する。鈍感やらなんやら言われるマスターではあるがそう易々と大事な後輩のクッキーをはいどうぞと渡すような優男ではなかった。

「……………」

「その意気やよし！ 我等神聖隊がメンバー二人プラス嫉妬に燃える男子たちがお前の相手だ！ 不足はないだろう！」

今ここに美少女のチョコクッキーをかけた戦いが始まろうとしていた。因みに周りで見ている女子は皆ドン引きであった。

「そ、それで先輩はそんなにぼろぼろなんですか……」

「……………」

夕日も沈みかけ、夜の帳が降りようとしている頃ぼろぼろになったマスターと普段通りのマシユの二人は家路へ向っていた。歩く速度はマスターがマシユに合わせ、会話はマシユがマスターに合わせる。二人以外は誰もいない、静かな黄昏の帰り道であつ

た。

結局マシユが作ったクッキー争奪戦の勝利者は誰もいなかった。マシユのチョコクッキーは所謂友チョコになったからである。一応マシユは周りに渡せる分を作っていたのだが、周りの女子がそれを友チョコとして皆美味しく頂いてしまったのである。なので教室には無数の屍と真っ白く燃え尽きたマスターが椅子にもたれかかっているという惨状のみが残り、女子たちには白すぎる目を向けられるだけとなった。

「因みにサルのような学友はチョコの食い過ぎで鼻血を出して保健室へと搬送された」

「？」

「はい、皆さんとのお菓子作りは楽しかったです！ 隣の子はミントを入れるといいと言い出しましたので餡を砕き始めまして、その次は」

楽しかったかとマスターが聞くと、マシユは目を光らせて思い出話に花を咲かせる。

その笑う姿はとても可愛らしく、正に花が咲いたような笑顔でマスターへと微笑みかけるたび、マスターもまたつられて笑う。

そしてその笑顔を見るたびに、マスターは何処か心が軋むような感覚を受ける。

「それで今日の放課後に皆で遊びに行こうと—— あっ、いえこれは私は遠慮したのですが……」

つい口が滑ってしまったマシユに、マスターは一瞬だけ表情を曇らせるが、それをマ

シユに悟らせないようにしながら表情を作りながらマシユに尋ねる。

「……？」

「あ、はい。夕食に遅れてしまっただけじゃないし、それに……その、こーやっで一緒に帰れませんから」

そういつて少しかだけ赤面して照れくさそうに笑うマシユに、マスターは心がねじ曲がるような痛みを覚える。それはマシユに思われているという嬉しさと無意識に彼女の自由を束縛しまつていてという罪悪感が同時に彼の心に渦巻くが故の痛みであった。

「マシユ」

「はい、先輩。どうされました？ あっ……」

マスターは何かの決心をすると、マシユの手を握り目を見つめ、その言葉を口にしようとする。マシユは突然の事に顔を更に赤くしてただ固まるだけである。

「マシユ」

「は、はい……！」

もう守ってもらわなくも自分は――

そう言いかけようとして、マスターは言葉が喉につかえて先の言葉が出てこない。

その言葉を言えば彼女を失う、そんな恐怖が彼の心を満たし何も言えなくする。

独占欲の強すぎる男め、マシユを縛り付けるつもりか臆病者、彼はあらゆる限りの罵

倒を自分自身に浴びせるが、それは自分自身がマシユの事をどう思っているかの表れでもあった。

「……先輩？」

心配してマシユがマスターの眼を覗き込み、ようやくマスターは自分がただ何も言わずに立ち止まっていることに気付き、慌てて笑って誤魔化す。

「、――！」

「昼のダメージが蓄積していた？ それは大変です、帰ってダ・ヴィンチちゃんにメデイカルチェックを……」

「――！！」

本気で心配をするマシユを落ち着かせながら、その手から伝わるマシユの暖かみにマスターはただ一人苦痛へと苛まれていった。

淡くその色を失っていく黄昏のように、彼の心もまた深い、深い暗がりへと落ちていくようであった。

――マスターの明日はどっちだ。

リリイパンデミック！ アラサー紳士編。

その日マスターはとても珍しいことに自分から目を覚ました。寝ぼけ眼で時間を見てみると朝の六時過ぎごろ、マスターが自分でも珍しいと思うほど早起きであった。

珍しくというのもマスターはかなりの寝坊助であるからであった。毎朝マシユが起こすか、その他のマスターの私室に潜り込んだサーヴァントなりが起こすなりしないといつまでも暖かな布団の中で安らかな眠りについてしまうのだ。これが大人数のサーヴァントの契約したことによる副作用なのかそれともただの体質なのかは誰にも分からなかつたが、日々ガードが固い彼が寝起きの時に限っては甘くなるので日々特定のサーヴァントたちが彼に愛の物理的モーニングコールをしようと争いを繰り広げられているのは確かであった。

「起きたか。お前にしては珍しいことだ……まあこの状況では仕方のないことだが」

暗闇の中から若い男の声が聞こえる。姿形は見えぬが、その声だけでマスターには

誰かが分かつて優しく返事を返す。彼ならば自分の部屋にいつの間にかいたとしてもなら可笑しくないからだ。

「アヴェンジャー……」

眠そうな声で姿形の見えない男の名をクラス名で呼んだ。マスターはサーヴァントたちを基本真名で呼ぶ、カルデアには数十名のサーヴァントが召喚されており同じクラスも重複しているため戦闘の際指示に支障が出ないようにするための措置なのだが、この姿の見えない声の主だけは別であった。

男の真名を巖窟王エドモン・ダンテス、復讐者アヴェンジャーのクラスを冠するこの男は生前は復讐者を持つて悪を断じた男であり、マスターとは特別深い縁を持ったサーヴァントでもあった。

初めて出会ったのにも関わらず親しい雰囲気醸し出す二人に、とあるサーヴァントたちは大きな危機感を持つぐらいである、一体どこで出会ったのかと聞くとマスターは笑って夢で出会ったというばかりであり、そんな少女マンガ的な答えが返ってくると思わなかった某サーヴァント達は青ざめるばかりである。

「？」

「いや、コーヒーは俺が入れよう。それよりもあまり体を動かすな、起きるぞ。」

「!？」

マスターがふと隣を見ると、ひとりの少女が寢息を立てていた。背は小さく綺麗な長髪をしていて年齢はジャックやナーサリーと同一年ぐらいであった。

少女はぐつすりと眠りながらマスターの腰にしがみついております、マスターは全く見たこともないサーヴァントに困惑するが、エドモンはその光景に小さく笑う。

「まるで見たことがないと言いたそうだな。いや、確かに見たことはないだろうな、だがあちらからしたらお前の事を十二分に知っている。そら、顔を良く見てみる」

「？」

エドモンの言うとおりマスターが子供の顔を良く見ると何だか見知った顔に似ていることに気付く、有り得ないと思いつつも頭を撫でてみると二つの小さな角がその頭についており、その疑惑は確信へと変わった。

「清姫……」

だがそれに気づいたことで増々マスターは困惑することになった。元の清姫とは小さすぎるのだ、これではまるで

「気付いたようだな、そうとも若返っている。あり得ないことにサーヴァントがだ」

エドモンが、コーヒを持ってマスターにその姿を見せた時マスターは今度こそ息を飲んで驚いた。

「そして、そう、この現象はどうも無差別らしい」

若返っていた。小学生高学年ぐらいの背になり、長いネクタイをぶら下げた少年がそこに立っていた。入れたてのコーヒーをマスターに渡すさまは小さい従者の様でとても信じられなかったが、この口ぶりは間違いなくマスターの知る巖窟王であった。「コーヒーを飲んだら起きるがいい、今日は大変な一日になるだろう」

そういつて少年らしからぬ凶悪な笑みを見せた。なるほど自分の昔の姿を見させられるというのは中々に巖窟王には気に障ることらしい。

その日カルデアは混乱に包まれていた。まず驚愕したのは朝食を作るために厨房へと立ったエミヤであった、彼は自分の姿を鏡で見たとたんその自分の姿に悲鳴に近い声を上げた。

その栗毛で童顔な少年に自分が戻っていると気付いたエミヤは姿を消して自室へとひきこもり部屋から出てこなくなった。

その次に坂田金時が金太郎になってしまい、高校生ぐらいの年齢になった頼光が「だがその胸は豊満であった」暴走。

「ブーティカは目つきの悪い少女になり――その胸は豊満であった――、アン・ボニーも縮んだ――その胸は豊満――がなぜかメアリーは傷が少なくなつたぐらいでその容姿は変わらなかつた。

更に小さくなつたネロ・クラディウスを見た若くなつたカリギュラが卒倒して緊急治療室へ運ばれ、カエサルは著しく痩せてしまい、クレオパトラが気絶してしまつた。

その対応に追われた職員たちはこの前例のない事態に右往左往するばかりで、そればかりかサーヴァントとしての能力はそのままであつたので止めようとしても止められず、増々場は混乱するばかりである。

「おかわりです」

「おかわりだ」

「おかわりを」

「おかわりします!」

「おかわり……」

「は、はい! 唯今! これがあの王で、この杯が……」

「これどれがどの父上なんだ!?!」

そして混乱しているのは職員だけではなかつた。カルデア食堂で食事をしているのはアルトリア・ペンドラゴン達である、最早残すのみはキャスターだけとなつたこの

最も多い同一人物の集まりもまたリリイがすでにいるのにも関わらずリリイ化現象に巻き込まれており、さしもの臣下たちも困惑していた。

これまではその王としての在り方や真に失礼ではあるがその身体的特徴によって判別が出来ていたのだが、リリイ化してしまったことにより更に見分けが付けづらくなつたのだ。

辛うじて見分けがつくのが、リリイ化してもまだ大人びた少女で若返りが止まった口ンゴミニアドを抜いて成長することが出来たアルトリアである。が、服もご丁寧に取りイ基準になつて甚だ見分けづらい。

そして困惑する臣下たちも若返つており、モードレッドは小さな少女に、ガウエイン卿は齡十五程度の少年に、そしてランスロット卿はロン毛になつていた。皆が皆自分の知らない顔になつているのでいちいち驚きながら友に接する光景は何処か喜劇を思わせるが本人たちにとっては混乱極まる状況である。

「!!」

「ましゆたあ、お腹がすきました……」

と、そこにあの髭は何処だとマスターが怒鳴り込んでくる。右手には清姫と手をつなぎ。肩にはほうほうと逃げてきた金時改め金太郎が乗っている。ちよつとしたビックダディであった。

「これはマスター! 良かった、貴方まで若返っていては場の收拾ができませんでした」
 「これはこれは。 ははは、控えめに言っ見て見習い保育士と言ったところですか?」

「……………」

笑い事じゃないと目の前のロン毛にため息をつきながら、元凶を探す。 あの髭の事だし朝は優雅にコーヒーか紅茶でも飲んでいるに違いないと踏んでここまでやってきたのだがどうやら的を外したらしく、その姿は食堂には無い。

「おい! マスター! 一体どうなってるんだよ! 父上が皆して縮んじまつてるじゃねーか! てか俺も!」

「……………」

「ぼつ、可愛いつてなんだばーか!? 頭なでんじゃねえ! 噛むぞコラ、つちよきいてつておま、なでるなあ……………」

とりあえずモードレッドの頭を撫で回した後、マスターは清姫たちの朝食を用意してから食堂にいるサーヴァントたちに被害状況を確かめながら犯人の聞き込みを始めた。

エドモンとは別行動での、手分けしての聞き込みである。 十中八九犯人は分かっていたが

結果は朝食を取りに来たサーヴァント達全員が若返っているという状態であり、昨日は一日部屋にいたというサーヴァントたちも縮んでしまっていると言う、だが神様系の

サーヴァント達は若返っておらず、またスカサハなどの一部サーヴァントや、元々から小さいサーヴァントなどは若返ってはいなかった。――クーフーリンによると少し

ぐらい若返ろうが変わらないぐらいに年を取っているらしい、なおその後クーフーリンはセタンタ再教育コースへとスカサハに連れて行かれてしまった――

だが、肝心の犯人の行方は知らないらしく、皆首を横に振るばかりである。そんな時マスターに犯人の居場所を知っているというメドゥーサがマスターに話しかけていた。

どうやらメドゥーサはリリイ化から逃れられたらしく、昨日偶然厨房で怪しげな人物を見たらしい。

「姉上達も元々が神だったからか若返ってはいませんでした。なので私も影響はなかったのだと思いますが……こちらです、確かこの食糧庫の中で誰かが……」

普段着である黒いセーターを着てメドゥーサに案内されるとそこは厨房の食材庫の中であった。冷蔵庫に入りきらない食料や、果実などが保管されているこの倉庫の中でメドゥーサは不審な人物を見たらしい。基本的に料理を作る者しか入らない食材庫の中になんでメドゥーサがいたのかマスターは不思議に思ったが特に追求せず手がかり探しを始めることにした。

「確か……」と辺りで、何か怪しげな事をして居たような気がします。何か手がかり

を残しているかもしれません、探してみましよう」

率先して調べ始めるメドゥーサを見てマスターは頼もしさを感じた。メドゥーサはサーヴァントの中でも屈指の常識人でもあり、英霊ではなく一般人の目線に立つて物事を考えることが出来る数少ないサーヴァントであった。

聖杯戦争に参加し現代と言うものをその体で感じたことが大きいとメドゥーサは語っていたが、それを抜きしてもマスターにはメドゥーサは落ち着いた大人の女性であり頼りに出来る女性であった。――時々血を吸ってくるのは勘弁願いたかったが――それを何気なしに伝えると。

「……そうですか、ありがとうございます」

と、不満げな声で返答が帰ってきたのでマスターはしまったと自らの言を後悔した。メドゥーサは姉たちを美しさの定点としており自らの高い身長などをコンプレックスにしているのだ、メドゥーサとしては頼もしいやかっこいいなどではなく可愛らしいと言われた方が好むのである。

「……………」

「いえ……自分で分かっていますから」

何とかしてマスターは機嫌を直して貰おうとフォローの言葉を選ぶが一向に自体は

悪くなるばかりで、マスターは気分を沈ませながらどうやって機嫌を直して貰おうか頭をフル回転させる。が、マスターの鼻孔にふと花の良い匂いが香ると背中に柔らかない感触と共にいくばかの心地よい重さが押し掛かる。

「ふふ……貴方と言う人はどこまでもお人好しなのですね。ただ私が勝手に機嫌を悪くしただけで自分の失言だと気を落とすなんて……まったく……」

「……!?!」

マスターはメドゥーサに後ろから抱きしめられていた。彼女の肌理きめやかで細長い腕がマスターの首で交差し、美しい長髪がマスターの頬をくすぐり花の良い香りで満たすとマスターは見る見るうちに顔を赤くして動揺する。

「全く、貴様という奴は何処まで阿呆なのだ？」

「……?」

そういうとメドゥーサのマスターを抱きしめる力が一気に強くなる。彼女の髪が一束一束集まると、まるで蛇のように形を成していき、マスターの体を締め付けていきマスターは指一本動けない状態となる。

「呆れたものだ、人の言葉を信じ切り、疑うこともせぬとは。それはもはや美德と言うよりただの間抜けと言うのだ。そもそも私は神の出来そこないだというのに何故姉上達と一緒にこの身が変化しないと思つたのだ？」

「!!」

マスターはその変わり様に驚愕すると共にある一人のサーヴァントを思い出した。この尊大な口調で、マスターを嘲笑う声、そしてこの蛇の様な髪の手を持つサーヴァントは一人しかいなかった。

「ゴルゴーン……!」

「そうとも、やつと気づいたか馬鹿め」

今までマスターがメドゥーサと思っていたのはメドゥーサではなく、メドゥーサに若返ったゴルゴーンであった。元々はメドゥーサが成長してしまった姿がゴルゴーンであるから、その癖や口調が全て再現されており、マスターを完璧に騙せていたのだ。姉であるステンノ達が大丈夫ならメドゥーサも大丈夫だろうと信じ込んでしまったマスターの敗北であった。

「なるほど、その顔は完全に信じ込んでいたな? 全く、我がマスターならこの私でも見分けがつくだろうと思っただが、心底残念だ。サーヴァントの見分けもつかないとはな、期待外れも良いところだ」

「……………」

わざと心底がっかりした様子でマスターを詰っていくゴルゴーン、マスターが悔しそうな表情を見せるたびゴルゴーンは快感を感じる様にその頬を上気させて、吐息を荒く

する。

冷える食糧庫の中で、体温が上がった二人の白い吐息だけが中に浮かんでは消えていく。

「まあ、良い。　すぐに見分けがつくようにしてやろう……今度こそ間違えぬようにな！」

そういつてゴルゴーンはマスターの服を乱暴に破くと、その首筋に口を付けて思い切り歯を立てた。

「——っ!?!」

その瞬間マスター視界がまるで目の前で火花が散ったように閃光と暗転を繰り返していく。　マスターの服の中にゴルゴーンの髪がマスターの体をまさぐる為に入り込み、吸いつく口の端からは血が一筋また一筋と流れていた。

吸血である。　魔術師の血は魔力を短期間ながらこめやすく、それを経口摂取などで魔力を譲渡させることが可能であるが、ゴルゴーンやその姉妹たちは吸血によつてその対象から魔力または生命エネルギーを強制的に摂取可能である。　衝動とはいかないものの吸血は中々に癖になるものらしく、ステンノ達はメドゥーサに、メドゥーサはマスターや女性職員などに吸血を度々行っている。

だがマスターはゴルゴーンからの吸血は初めてであり、そのどの姉妹とも違う痛みと

快感にマスターは只々悶える事しかできなかつた。まるで全身の血を一滴残らず吸い取られそうな勢いでゴルゴーンから血を吸いとられていき、マスターは意識が朦朧となり始めていた。

「んぐっ……じゆるっ! んふっ……中々に美味ではないか、なるほど姉上達が褒める程度はあるらしい。貴様、まだ耐えられるだろうな? 貴様とは初めての直接的な魔力供給だからな、この程度でくたばって貰っては落胆の極みという物だ。それとも……」

ゴルゴーンがマスターの首から流れ出る血をその長い舌で舐め取ると、そのままマスターの耳へとその舌を侵入させ、淫靡な声でマスターへと呟いた。

「こちらの魔力供給でも、良いのだがな?」

ゴルゴーンの目が捕食者の眼からそれとはまた違う獣の眼になった時、マスターは赤く上気した顔を一転させて青ざめると朦朧とした意識の中激しく抵抗するがサーヴァントであるゴルゴーンに敵うはずもなく、ゴルゴーンの髪がマスターの服をどんどんと脱がしていく。

「!!」

「そうか、だがこちらはもう準備は万端と言った様子だが?」

もはやマスターは猫に追い詰められた鼠、後は猫の好きなようされてその屍をこんこ

んと晒すのみである。

「……………」

「優しくしてやるとはいわん、いわんが……天国に、連れて行ってやろう……」
「ほう、それは良かった。こちらも優しくするつもりはないからね」

その時食糧庫に無数の銃声が響いた。とつさにゴルゴーンはマスターを抱きかかえると室内を跳ねまわりながらその銃弾を全て回避し、謎の相手と会敵する。

ゴルゴーンは目の前の御馳走をもう少しと言う時で奪われたことに怒り心頭で、自分の歯を噛み砕かんばかりに歯を食いしばっていた。

「うーん、本当ならばダンス君や、君の妄信的な愛の追跡者達などが助けに来るのが筋というものなのだろうが……」

「誰だ貴様は！」

「誰だと聞かれて答える悪の親玉はいないなあ、そういうのは探偵が自分で見つけるものだし？ まあ今の私はすこぶる機嫌がいいので姿を現すのもやぶさかではない」

そういうと男は、その心の内で幾つもの悪事を考えてそうな笑みで手に超過重武装棺桶を構えながらその姿を現した。

「始めまして、ゴルゴーン君。新入りのアーチャーアラフィフ紳士、改め若返ったアラサー紳士だ！ いやー体が軽い軽い！ こんなに軽かったかなあの棺桶！」

その人物は髭も無ければ皺もない若々しいが青年終了期の男であったが、マスターにはその男が持つている棺桶にどうも見覚えがあった、そしてその減らず口にも。自分の若返った姿にテンションが青天井であり、これでもかと先ほどゴルゴーンに放った機関銃に劣らぬほどその口からは言葉が飛び出していく。

「そうか、新入りか、ならば今すぐ私の視界から姿を消すがいい。それが嫌ならば私が消す」

「Oh、このお嬢さんはお楽しみを邪魔されてお冠らしい、わかるよーその気持ち。私でも怒り狂うだろうネ!」と言つてもマスターをそのままにしては置けない、というか生きてるかいマスター君? おーい?」

「……………」

顔だけを上上げて、マスターはやあ教授と目の前に笑いかける。それ見ると表情だけ驚いたという顔をして、マスターを笑い返す。

「お流石にタフだな。全く君は新宿でもそうだったがどうも悪というものに好かれやすくないかね? 私が言うのもなんだが友人は選んだ方が良い、せめて密室で二人きりの時に相手を襲わない程度の友人をネ! おっとこの場合はどうなるんだろうか、友人でなく強姦魔とでも表現すべきかな?」

「良し殺す。死んで後悔するがいい」

「おっと、そうはいかない。 実際君の相手をするのはこの年の私でも腰が折れるからね、というか無理だ。 あーレデイ達！ 出番ですよー！」

目の前の教授が指を鳴らすと、二人の女性が入り口から姿を現した。 最上級の陶器のように白く輝く肌と女神の様な美貌に不敵な笑みを備えたこの生ける芸術品を見た瞬間、激怒していたゴルゴーンは一瞬にして青ざめて後ずさりを始める。

「あら、メドゥーサがいるわね」

「あら本当、縮んだはずのメドゥーサがいるわ」

「まあゴルゴーンなのでしょうけど、ずいぶんとまあ盛った猫の様に鳴くものね」

「躰がなっていないかったのかしら、メドゥーサよりも年が上ならちゃんとお行儀よく出て来ていると思っただけれど」

「残念ね、私」
ステッノ

「ええ、残念よ私」
エウリユアレ

「再教育ね」

「き、貴様っ！ 何て事を……なんてことをしてくれる……！ 貴様には罪悪感の欠片もないのか！」

「ないない。 私を誰だと思ってる？ 天才数学者兼、教授兼、悪の組織の大ボスだよ？」

「そんなものに心を痛めていては悪巧みの一つも出来やしない」

「貴様あ……い！ 覚えておくぞ！ 次に会ったときは覚悟しておくがいい！」

二人の姉に追い詰められながらゴルゴーンはその教授にありとあらゆる呪詛と暴言を吐き続ける。マスターが連れてきても怒るくらいなのに、只の人間にやられたとあつてはその怒りは倍増しているはずである。

「好きにしたまえ。私が君を覚えていたらの話だが……おっとキメ顔しててマスター忘れるところだった、さあ行こうか」

教授がマスターを担いで食糧庫から出ると、ゴルゴーンの声にならぬ悲鳴が食糧庫に響いたが扉が閉まった瞬間、その声も消え失せてしまった。

「うーん、窮地のマスターを救うとかまた正義の味方っぽいことやっちゃったな……癖になりそうで怖いネ、これ！」

「……………」

「ああ、犯人は確保した。やはり黒髭だ、理由はくだらなすぎて聞いていない」

その後、マスターは食堂でレバニラ炒めを食べ自分の貧血気味である体を戻そうとし

ながら、帰ってきたエドモンから報告を受けていた。

「どうやら犯人の調査から逮捕まで全てマスターが襲われている間に完了していたらしく、首謀者の黒髭はまたルーラー裁判へと連行された。判決は最近召喚されたアヴェンジャーのお世話、どうやら極刑であるらしい。」

「ついでにメドゥーサ状態のゴルゴーンもマスター独占法違反によつて三日間ご飯抜ききの判決を下され、また自分の姉達との雑用にも駆り出されることになった。」

「リリイ化現象は今日にでもダ・ヴィンチが解毒剤を作つて元に戻すらしい、それまでの辛抱だ。まったく、くだらん」

少年姿のエドモンがマスターに食後のコーヒーを作るために厨房へと入っていく、ついで教授も注文したが完全に無視をしていた。

「いやあ、この姿とも今日でお別れか。もつとアラサー紳士でいたかったのだが、ぶつちやげアラフィフの私が全盛期なのでアラサーだとあまり力も出ない。仕方ないと腹をくくつて激渋いぶし銀オジサンへと戻るとしようか……」

「……？」

教授のボケを華麗にスルーしてマスターはなぜアラフィフが全盛期なのかを目の前の教授に尋ねる。すると教授は少し考えると、

「悪のボスが一番輝くときは、読者の前で姿を現し、そして消える時だからさ」

と意地の悪そうな笑みをしながらマスターに答えた。なるほど、確かに彼の人氣はライヘンバッツハへと落ちる描写と共に上がっていったのだろう。マスターはそう思うと、一つため息を吐いて、もう一つ質問をした。

「？」

「真犯人が私？ ははは、そんな馬鹿なこと……やっぱりわかっちゃった？」

証拠もない、証言もない、ただあるのは勘だけであった。少し目が逸れているとか、助けに来るタイミングが良すぎたとか、どこか申し訳なさそうな顔をしているとかそんな証拠にもならないマスターの勘が、自分の目の前の教授が真犯人と言う妙な確信に繋がっていた。

「全く、証拠もなしに犯人と決め付けるなんて探偵失格だなあ？ まあぶっちゃけ黒髭君が吐いちゃってるだろうしこの後ダンテス君の口から遅かれ早かれ告げられていただろうしね」

「？」

「うん、裁判の心配？ ハハハそこはご無用、証拠も全部消してるし、私はただ薬品の場所とそれを効率よくカルデア全体にまき散らす公式を黒髭君に教えただけだからね。

私にはなーんの危害は及ばない」

つまりそれは全責任が黒髭一人に行くということであった。流石悪の大物ボス、ト

カゲのしつぽ切りが上手らしい。

「？」

「うん？ 動機？ そうだなあ、肩慣らしに一度悪い計画を立てたかったのもあるし、もう一回アラサーの若さを経験したかったのと、ホームズをちつさくして笑いたかったのと……」

そういつて、一つ咳をすると目の前の犯罪界のナポレオンは無い髭をなぞり、微笑みながらウインクしてこういった。

「君にいい所を見せたかったのサ」

珍しくマスターはその日自分から目を覚ました。時計を見るとまだ六時である。マスターは自分でも珍しいなと思うと大きく欠伸をした。

珍しいというのもマスターは重度の寝坊助であり、毎朝マシユが起こしに来るか、マスターの自室に入り込んだサーヴァントが起こすかしない限り永延と安らかな眠りついでしてしまうのだ。

それに昨日はサーヴァント無差別リリィ事件により、幼子になってしまったサーヴァントたちのお世話に翻弄されっぱなしだったため疲れ果て早起きするどころではなかったのである。

「……起きたようだな」

ふと暗闇の中から一人の若い男の声が聞こえる。その聞き覚えのある声にマスターは特に驚くことは無く、一言おはよう、と告げると男は影の中から姿を現した。

長いネクタイが特徴的なスーツに身を包み、手には自分とマスターの分であろうか入れたてのコーヒが湯気を立てている。

「……………」

「戻ったとも、まったく忌々しい物を見せられた」

男の名は巖窟王エドモン・ダンテス。今度こそ子供の姿ではなく、恩讐の彼方へと身を投じた一人の男としての姿でマスターの目に映る。

「おっと、動くな。起きるぞ」

マスターがコーヒを受け取ろうと身を起こそうとすると、何かに抱き着かれています。様な重みを感じて動きを止めた。ゆっくりと首を回して重みを感じる方向見てみると、そこには見慣れている人物たちがマスターに抱き着きながら寝息を立てていた。

「しえんばい……良い匂い……」

「ましゆたあ……抱っこ……」

「まじゆつしさまあ……肩車を……」

「……………」

「くくつまるで見たことがある顔だと言いたそうだな？」

エドモンが小さく笑いながら、コーヒーを近くのテーブルへ置く。

マスターはだんだんと昨日の出来事を思い出す、リリイ化事件の真犯人が分かった後、マスターは小さくなったサーヴァントのお世話をする際、怖いので一緒に寝て欲しいというサーヴァントたちの願いを聞き一緒にベットで寝ていたのだ。

マスターはサーヴァントたちが寝付き終わった後自分はこっそりと違う部屋に移動するつもりだったのが、なんとサーヴァントたちよりも先に寝付いてしまったのであった。

その結果がこの全方位に敷かれた地雷原である。エドモンが元に戻ったのと同じく、皆同じ大きさに戻っており一見するとハーレム状態だが、誰かが目を覚ました途端マスターがどんな目に遭うかは想像に易い。

とかいいつの間にかマシユが居るのはなぜなのか、事件中は姿を見なかったがもしや夜中こっそり自分のベットに忍び込んだというのだろうか。

乙女の柔肌を全身に感じながら、マスターは必死に解決策を探すがまったくもってこの状況を打破する作戦が思いつかない。

「……！」

「知らん、他人からはいざ知らず、お前が招いたことだろう。心配するな骨は拾ってやる」

唯一の頼りのエドモンも、コーヒを飲みながら本を読みだしており全く手伝う気を見せない。それでも骨は拾うと言っている当たり本当に危なくなったら助ける準備は満タンであった。

「………」

昨日の事件をしのぐ大事件の予感にマスターは死刑台へと送られる死刑囚の気持ちになりながらまた一分また一分と彼女らの目覚めが近づくのを感じる事しかできなかった。

「マスターの明日はどっちだ。」

星の海にて狼は鳴く。

文明の光が届かぬ暗く深い森というものは、獣だけではなく様々な危険が潜んでいる。動いたびに光景が変わり旅人を迷わせ、木々から飛び出した根や細い木々は足を取り、その肌をえぐる程度には鋭利である。

そんな危険な森は最早この現代において自ら飛び込む事をしなければ迷い込むことはまずないだろう。だが目的のために自らそんな森に飛びこまなければならぬ立場の人間もいる、カルデアのマスターはそんな人間の一人である。しかも現代の森ではなく神代の森となればその危険性はいうまでもない。

「トラップ設置完了、今夜はここで一夜を過ごしますが……マスター？ 空を見て何をしてるんで？」

そんな深い夜、神代の森の中でたき火の傍で空を見上げているマスターに緑がかかった灰色の外套に身を包んだサーヴァント、ロビンフッドが獣用の罫を設置して帰ってくる。

「

「星が綺麗？ んなもん見てどうするんです？ まさか俺を口説くつてわけじゃねえですよね？ 星より君がくつてな」

ロビンの軽口にマスターは笑って、首を振る。彼の青い瞳に夜空の星々の光が映り込みまるで一つの青い宇宙が彼の瞳の中に存在しているかのようなであった。

そんなマスターの眼を見てロビンは宝石の様だなど心の中で呟き、たき火で熱していたケトルを取ってマスターのコップに熱湯を注ぐと、ココアの粉と砂糖を入れてマスターの目の前に差し出した。

「ほい。そのまま星を見るのもけっこうですがね、そのままだと首も凝るし風邪ひきますぜ」

「マスターは礼を言いながらコップを受け取ると一口ココアを口にする。冷える夜の森の中で冷えた体が体の芯から温まり、ほうと吐いた白い息が空へと向かって消えていく。」

そんな子供っぽいマスターの姿に、ロビンは少しだけ微笑むとたき火の中に小枝を投げ込んでいく。

「そういう貴殿も一つどうですか？」

「うおっと、気配遮断しながら近づくのは止めてくれ！ 鬪體の旦那」

ふと闇の中から髑髏仮面が浮かび上がり、長い腕がロビンの顔まで伸びたと思うとココアの入ったコップを差し出してきた。呪腕のハサンである。

ロビンとは違い漆黒の外套に身を包み、周りの暗さと相まって髑髏が宙に浮いているように不気味極まるが、本人は秩序を守る暗殺者であり、マスターに忠実な礼儀の正しい男であった。

「マスター、こちらを罫を設置完了いたしましたでしたが此処は神代の森、刻一刻と地形は変化いたします。念のため交代制で見張りを立てておくべきかと」

「ではその通りに。しかしながらマスター殿まで見張りをすることはありませんぞ？

あと夜更かしもせぬように」

仮面の前で指を立ててマスターに言いつけるその様はまるで子供をしつける親のようだが、なんせ相手が物騒な格好なのでまるで今からお前を殺すという様な宣言にしかロビンには見えない。

「あー、後の二人はまだですかね？」

「ああ、それならもうそろそろでしょう。今夜の夕食を狩りに行っていたはずですか

ら……」

「ハイイ！ 噂を聞きつけ、帰ってきたヨー！ マスター、お帰りのキッスをくださいサイイ

「！」

「!?」

「猛獣を素手で絞めるとは、ヘラクレスかこの女神は……」

噂をすればなんとやら、茂みの中から二人の女性が姿を現した。一人は南国風の衣装に身を包んだ背の高い陽気な女性、もう一人は獅子の耳と尻尾が付いた気高き雰囲気を持つ狩人で、名をケツアル・コアトルとアタランテ。南国の神と、伝説上の狩人の二人は自分の背丈よりも高い獣と幾つかの果実を持ってマスターたちの元へ帰っていた。

「ココア！ ココアあるデスカ！ マスター、ちよつと一口くださいな？」

ケツアルはその担いでいた自分の背丈より大きな獣を何の重さも感じないような動作で下すと、そのままマスターのコップをその彼の手ごと握ると自分の口に持っている、ココアを口にした。

「うーん、甘いデース！ 温まりマース！ それにえへへ、間接キスで更に甘いデース……」

「このテンションの高さは、万女神共通なのか……？」

頬を手に当てながら恥ずかしそうに顔を振る女神を見て、自分の信望する女神を思い出したのか胃の部分を押さえるアタランテ。マスターはそんな光景に苦笑いしながら

ら、夕食の準備に入ることにした。さすがにココアだけでは夜を過ごすには心もとないし、マスターもただ何かをしてもらっただけではサーヴァントたちに申し訳なかったのである。

その代わりマスターの手料理が食べれると聞いて飛び上るぐらいに喜んだケツアルが、マスターが調理をする時じつと見ていたのでマスターには中々のプレッシャーになることになったが。

「うーん！ ムイ リコ！ 美味しいデース！」

「そーいやあの赤マントから料理習ったんだっけか……中々上達してるんじゃねえか？」

立派立派」

「私としてはもう少し薄味の方が好みだ」

「そーいうアタランテ殿は何杯目ですか？」

「不味いとは言っていない」

それから半刻もすると、マスターお手製のごった煮スープが出来上がった。獣のなぞ肉や採ってきた薬草などを入れ、持ってきた調味料や匂い消しの薬草を入れて完成するこれは、いつでもどこでも美味しくモットーにしたエミヤ直伝万能野宿飯の一つである。

食材が地域ごとで変わるので時折謎の野菜や、キメラの肉などが混ざるのが難点だが、その地域ごとに変わる味と変わらない真心を込めたスープはサーヴァントたちにも好評である。

「？」

「ん、ああ。目標は確実に追い込んでいる」

マスターがこれで三杯目となるスープをアタランテに注ぎながら、目標の魔獣の状態を聞いた。

今回の任務は、魔獣の駆除であった。バビロニアの泥の海を生き残った魔獣が成長し、近隣の人間を襲い始め極小規模の特異点が発生したので、マスターに出動要請がかかったのである。

なので今回の人選も狩りに適したサーヴァントが選ばれることになった。呪腕のハサンは斥候、またマスターの護衛として選抜され、ケツアルは本来選ばれるはずであったジャガーマンの代わりである。――謎の女神から気絶させられたため――

「そうだな、ここが吾々だとすると目標は――」

「(さりげなく隣に座つたな)」

「(説明するついでに座りましたな)」

「(耳がピコピコ動いていまーす！ ムヘル ボニー♪)」

「……何だ汝らのその顔は」

「「いいえ、なんでも」」

何だか優しい目にアタランテは怪訝な顔をするが、全員目をそらして何でもないふりをするので気にせず説明を続けていく。

「――？」

「そうだ、ダミーである罫を避け続けて此処に来る。後は追いたてるだけだが……マ

スター、私はまだ反対している」

「――？」

「そうだ、あの狼だ」

アタランテがマスターの目を見据えてそういつた時、遠くから狼の遠吠えが聞こえてきた。魔獣ではない、純粹な狼の美しく、気高い声である。だがその声の中に憎しみと怒りが混じり、それがマスター自身に向けられていることをマスター自身は感じていた。

「なぜ、彼奴らを連れてきた。アレは汝の命を狙っている、おそらく今この時も」

それは狼王と未だに微睡む首なしの騎士のサーヴァントであった。アヴェンジャーであるその狼王は人間という人間を憎み、人と言う存在に怒りを抱いており、それはマスターでも例外ではなかった。

召喚されたその日、狼王はマスターに向かつてその首を食いちぎらんとその牙を剥いた。即座にその場にいたサーヴァント達に取り押さえられ事なきを得たが、ゴルゴンと同じく狼王はカルデアの下層隔離領域へとその身を移されていた。

なのでその狼王を連れて行くとマスターが言い出した時、そのほとんどの職員とサーヴァントたちは反対した。そんなことは自分から腹を空かせたライオンの檻に入りに行くようなものである、これには流石のマッシュも断固反対してマスターを止めたがマスターも譲らず、結果狼王に二十四時間カルデアからの監視を付け、いざとなれば強制送還させるという手段を用いるという条件でマスターの提案を受け入れることになった。

「お前はどんなサーヴァントとも分かり合えると思っっているかもしれないがそれは違う。あれは聖獣ではない。ただ憎しみに塗れた獣だ、人の味を覚えてしまった獣に話し合う余地はない、奴らは人間ではない、その子供でさえ噛み砕くことに容赦はない」

「分かっているならば、なぜ……」

アタランテはふと言葉を途切れさせた、マスターが夜空を見ていたからである。

星々が彼の青い目にこぞって入り込み月が彼の瞳孔に重なる。 神代の時代だから

こそ起こる現象なのだろうか、そのマスターがまたアタランテに視線を戻すとその眼は元の青い目に戻ってしまったが、それまでアタランテは彼から目を離すことが出来なかった、見惚れていたのだ。

「？」

「い、いやなんでもない。 何でもないからあまり見つめるな……」

「??」

顔を赤くして俯くアタランテに、何が何なのか分からないマスターは首を傾げるしかない。 そんな姿を見てロビンは口元を隠しながら小声でケツアルに話しかけた。

「オタク、マスターに何かやっただんですか？」

「ハイイ、ちよつとロマンチックになる様に行くつか仕掛けを……と思っただけど何だか他の神様からも干渉を受けてるような……気のせいでしょうか？」

「あれ、俺にもかけられますか？ ちよつと町娘を口説くのいい感じで……」

「ノーデース」

「ですよー」

そのやり取りにいけなれないと思いつつも笑いがこぼれてしまう呪腕のハサンだが、ハサンもこの夜何者かから見られているような感覚があった。それは自身のシャイターの腕があるからこそ感じる事が出来る、一種の同族感知の様な者であった。深く暗い世界の底にいる様な、まるで冥界にいる様な……それゆえに全く悪意を感じないこの気配に困惑していた。

結局この気配の持ち主にマスターはすぐに出会うことになったのだが。

「……きなきい、起きるのです。 ……きなきいったらー！」

「……？」

マスターが起きるとそこは何とも奇妙な空間であった、薄暗い洞窟の中にいくつもの青い焰が宙に浮いており、しかしながら地面には美しい花が咲き乱れ美しい花園を作り出していた。

その生と死が混ざり合った様な空間を見渡していると、突然マスターの目の前に一人の女性が現れた。

「やっとなってきた。 寝坊助な所は変わってないみたいね」

それは、美しい女性だった。流れる金の稲穂のように美しい金髪をなびかせ、冷たく冷徹な表情とは裏腹にその赤い目は情熱に燃えており、その佇まいは気品のある女王を思わせた。

「？」

「っつ！ すーはー……そう冥界の主、全ての生き物が最後にたどりつく場所、その女王人。 エレシユキガルです。 カルデアのマスターよ久しぶりですね」

エレシユキガルと言ったその女性は、マスターから名前を呼ばれた瞬間沸騰するように頭を赤くしたが、深呼吸をして落ち着かせた後、まるで冷酷な女神のようにマスターにその微笑みを持つて接した。

「？」

「そう、私は冥界から出られぬ身です。そしてこの身も……ごほん、しかしながら貴方がこのバビロニアに来たことで、貴方の記憶と魂を利用して、貴方の夢を冥界の一部に浸食させて私を一時的に召喚させました。まあうたかたの夢のようにほんの少しだけでしか貴方の夢にいられません……」

「！」

「っつ！ そ、そうよね！ もっと褒めたっていいのよ！ こんなチャンス滅多に訪れ……ごほん。 ええ、世界を救ったマスターの顔でも見てやろうと思ひまして……感

「謝しなさい？」

エレシユキガルはクールに接しているつもりなのだろうが、マスターから凄いと褒められた時から口がにやけるのを必死に止めるために口の端がプルプルと震えている。

「よし、よしよし！ 第一印象はばつちりなのだわ！ クールな女神と思われてる！ しかも二人つきり！」

エレシユキガルは心の中で思いつきりガッツポーズをする。冥界でも最終決戦でも、マスターから甘ちよる系女神と思われていると思っていたエレシユキガルは何とか印象を変えようと、クールで冷酷な女神ぶる練習を何回も練習していたのである。

やっと成功したと喜んでいたが、肝心のマスターには冥界の可愛い女神としか思われていなかった。

「え？ あの時の礼？ べ、別に冥界を壊されては堪りませんから……人が来ない冥界なんて何の意味もありませんから」

それでも有り難うといって笑うマスターにエレシユキガルはまたまた顔を赤くするが、こんどは深呼吸をしてもその顔は戻ることは無かった。

二人は近くに座ると、喋ることもなくしばらくじっとしていたが、またしばらくする

とエレシユキガルが話を聞きたいと、いつかのバビロニアの夜みたいにもマスターに願った。

マスターはその願いに笑顔を持って答えると、新宿幻霊事件のことを話しはじめた。新宿で起こった様々な出来事に、エレシユキガルは時に目を輝かせ、時に顔を青ざめさせながらマスターの話にのめり込んでいった。

「なんて悪党なのかしら！ 最初から人をだますために人を信じるなんて、冥界では信じられないほどのひねくれ具合なのかわ！ きつとすごい悪の組織の親玉なのね！」

マスターが話をひとしきり終えた後、エレシユガルは胸に手を当てて目を閉じる。

「いいなあ……自分もそんな夜でも明るい所に行つてオシヤレを楽しんでみたい……つてこれじゃああの時と同じね。 ふふっ」

「？」

「良いじゃない死にかけたつて。 もしも死んじやつたら私の所に招いてあげる。 そうしたら一人じ……こほん」

そういつて笑うエレシユガル、もはやクールで冷酷な女神のイメージはどこにもなかった。

「いいわね、カルデアつて。 私も召喚されたかつたな……」

「！」

「うん、楽しみに待っているのだけ。きつとよ?」

マスターが小指を立てると、そのままエレシユキガルの前に持っていく。エレシユキガルは何をしているのか分からず首をかしげるのみで、マスターはそんなエレシユキガルに気付くとその意味を説明した。

「指切りげんまん? ハリセンボン? ヘー約束の証なのね……分かったのだけ、はい」

エレシユキガルが小指を立てて、マスターの小指と絡ませる。そのまま笑ってマスターに続いて誓いの言葉を口にした。

「ゆびきりげんまん、嘘ついたら針千本のーます! ゆーびきつ……」

だが、最後まで言ってマスターが指を離そうとすると、エレシユキガルはその指を硬く繋いで離そうとしなかった。

「あれ、可笑しいわね……離そうとしたのに……貴方に触れられたと思うと、なんだろう、なんでだろう」

エレシユキガルはただ困惑するようにそういうと、あとは何も言わずただそのままマスターの小指と絡めたまま、ずっと俯いていた。

マスターもその姿に少しだけ微笑むと、もう片方の手をエレシユキガルの手に重ねる。マスターの暖かい手が、彼女の冷たい手を包むと氷が解ける様に徐々に彼女の手にも暖かみが伝わっていく。

そしてまた、静かな時間が過ぎていった。気付くと背景は崩れ始め、花は舞い散り花吹雪となつて二人の周りを舞い踊る様に飛んでいく。

「現実の方で何か起こつたみたいね。もうそろそろ起きなきゃいけないみたい」

エレシユキガルが名残惜しそうに、マスターに微笑みかけた。

「有り難う、貴方の手、暖かつたのだわ。さようなら、貴方のこと、待つてるから」

そういつて繋いでいた小指を離そうとする。

「さようならじゃない」

だが、離れない。今度はマスターがエレシユキガルの小指を離さず繋ぎ続いていた。それは楔の様であり鎖の様であり、彼女との心をつなぐ絆であつた。

「えっ？」

「こういうときは、またねつて言うんだ」

「……そうね、またね！ また会いましょう！」

そういつて笑い合う二人、マスターの視界が白色に染まり、意識がまた遠のき始めても、その小指は繋がつたままであつた。

「■■■■……」

それは誰かから見られている感覚からか、それとも頬を擦る柔らかい感触からか、マスターが目を醒ますとマスターは白い毛布の様な物体に包まれていた、しかも妙に暖かい。

「マスター、動くな」

しかし、物凄い形相で弓をこちらに構えるアタランテを見て今度こそマスターは驚いて息を飲む。今にもこちらに向かって弓を放たんとするアタランテに必死に落ち着くように呼びかけるが、当のアタランテは聞き耳を持たず、その狩人の眼をまつすぐこちらに向けている。

「——！」

「動くなと言っている！」

気付くと、アタランテだけではない、ロビンも、呪腕のハサンも、ケツアルも武器を構えてこちらに体を向けている。

もしかしたらスープが不味すぎたのかと、自分でも馬鹿だと思いう考えが頭よぎる中、マスターの疑念は上を向くと即座に解消された。

「グルル……」

それは巨大な狼であった、三メートルもあろうその巨大な狼と共に首なしの騎士がその背中に乗り、その禍々しい気配と共にどこか神聖な、気高い雰囲気醸し出している。狼王とその乗り手である微睡の騎士である。

復讐者である彼らは今まさにマスターを手にかけんとその刃をマスターの首筋に当てて、周りのサーヴァントに威嚇していた。

まさに一触即発、誰かが動こうとするならば即刻殺し合いが始まりそうな雰囲気。マスターは慌てて止めようとするが皆応じる気はない。

カルデアに連絡を取ろうとも、何かにジャミングされて連絡が取れない状態である。

「マスター、お願いだから動くなよ……」

「駄目です。 私たちが武器を下ろした瞬間魔術師殿の首を彼奴は掻っ切るでしょう。」

「そやつには矜持などありません」

だがこのままでは結局争いが起こってしまう。 そうなつては最悪の状況であり、マスターが生き残ってもお互い深い傷が残ってしまう。 それだけはマスターは避けたかった。

「……………」

「グル……」

マスターが狼王の方へ顔を向けると、その青い目同士がぶつかる。その眼は怒りや憎しで燃え盛っており、マスターと言う人間を強く憎んでいる眼であった。傍にいる微睡の騎士は首さえもないものの、その体の仕草から狼王を止めるつもりはないらしい。だが、マスターから見られていることに気付くと持っている鎌で空を指す。

「？」

「……」

その時であった、マスターがその鎌につられるように上を向くと空に満点の星空が映し出された、その星々がマスターの眼に吸い込まれ映っていることに気付いた狼王は驚くように、目を見開くと、マスターと同じように空を見上げる。

「マスター！」

「待ちなさい、待ってください。そう、あの子は空を見上げることを忘れていたのね……」

かの狼はこの時代に連れてこられてから、否、召喚されてから空を見上げることは無かった。地面の匂い、空気までが故郷とは違う、同族はおらず、いるのは奇妙な魔獣だけ。そんな場所に連れてこられ、ただ狼はマスターへの殺意を膨らませるだけであった。

だが、夜空を見てその狼は思い出した。浮かぶ大きな月、輝る満点の星々、位置は違えどそれは故郷を思い出させるには十分であった。忘れていた、星の輝く美しさを、星よりも強く光る街にいてその輝きは失われたとずっと思っていたが……

「……………」

マスターが、狼王に故郷に連れてこれなかったことを謝る。その言葉を聞いてアタランテたちはマスターがなぜ周りの反対を押し切つてまでかのアヴエンジャーをこのレイシフトのメンバーに加えたかを理解した。故郷の風景を見せたかったのだ。

「アオオーン………」

その言葉を聞くと狼王は一つ遠吠えをした、その声は遠く遠く自分の故郷にまで届かせるような声であり、自分は此処にいると何処かに呼びかける様な声であった。

その後狼王はマスターの拘束を解くと、そのまま歩いて立ち去つていった。その背中は何を思うのか分からなかったが、ただ、微睡の騎士が感謝を示すようにマスターに向かつてその胸に拳を当てていた。

「まったく、肝が冷えたぜ………」

「この馬鹿者が！ その右手の令呪は何のためについている！」

危険が去ると、大腿でアタランテが近寄り、マスターを叱りつける。その顔は冷や汗で濡れており、彼女もまたマスターの危機に相当肝を冷やしたらしい、そもそも襲わ

れそうなのに優雅に寝るな、しかも気持ちの悪いほど寝ながらにやけるなど散々お叱りを食らったが、マスターがアヴェンジャーの為にも令呪を使いたくなかったというところのまま呆れたように閉口した。

「まったく、お人好しめ……いやお人好しではないな、獣好しだ汝は、なんせ獣にまで情けをかけるのだからな！ 今日私は私と一緒に寝ろ、また襲われるとも限らん」

「!?!」

「(体よく連れ込んだな)」

「(連れ込みましたな)」

「(意外と攻めるタイプデース……)」

「なんだ汝ら、何か私の顔に着いているのか？」

「「いえ、別に」」

大丈夫だと騒ぐマスターを黙らせながら、同じ毛布に入り込むアタランテを見ながら、今この時だけはカルデアの通信が妨害されてよかったと思う三人であった。

「うーん、一晚寝かせたスープも美味しいデース」

「寝かせるって程の時間でもなかった気がしますがね……カレーじゃあるまいし」

「魔術師殿、しゃんとしないと。スープがこぼれそうですぞ。はい？　あまり眠れ

なかつた？」

「おかわりだ」

次の朝、マスター一行は朝食をとりながら、今回の狩りの作戦を確認していた。妙に耳や尻尾の動きが速いアタランテと目にクマが出来ているマスターを除けば皆準備は万端であり、いつでも出発は出来る状態であった。

「結局、あの狼は何処に行ったのでしょうか」

「さあな、あれでマスターに危害を加えないなら俺たちは安心して作戦に集中できて楽しいんだが」

「私は大丈夫と思いきいマース……だってあの子……ワオ？」

「そうとはいかないようだな、マスター！」

マスターとケツアルを除くサーヴァントたちが唐突に武器を構えると、マスターの近くの茂みに体を向ける。それからしばらくすると何者かの足音がゆつくりとマスター達に近づいてきたと思うと、狼王と微睡の騎士が姿を現した。

「さてと、またうちのマスターを狙いに来たわけか？ 前回は上手く行ったが今回はそうとも限らないぜ？」

「グルル……」

瞬間アタランテが文字通り目にも留まらぬ速さでマスターを抱き寄せると、狼王から引き離す。これでマスターの危険性は無くなったが、当の警戒されている狼王はもう一度茂みに姿を消したと思うと、謎の物体をマスターの目の前まで投げつけてきた。

「なっ……？？ これは……」

「魔獣……？」

それはマスターたちが目標にしていた魔獣であった。そのあとにも狼王は何回もマスターへ魔獣を投げつけると、その量は討伐目標にしていた数を大いに超えて一つの死骸の山がその場に出上がった。

「これを昨日の夜から短時間で……？」

それは狼王の類稀なる知能がなせる技であった。サーヴァントたちが張っていた罠を把握し、逆に利用して、全ての魔獣をその微睡の騎士と共に狩りつくしたのである。

人間の罠を尽く看破した狼王のその逸話の再現とも言えた。

その光景にただただ驚くマスターに狼王は一鳴き、

「ワンっ！」

と吠えるともまるで微笑むような表情を作ると、少しだけ尻尾を振った。それはまるで昨夜のお礼だとも言っているかのようで、マスターはただ目の前の誇り高い狼とその乗り手に笑い返した。それはまるでサーヴァントとマスターと言うより、只の友人のようであり

マスターの明日はどっちだ

無頼漢とハンバーグ。

身長、平均的長身。 体重、見かけにしては重め。 足が速いのが子供からの特技

であり、家庭はクォーターの母と正義漢の父に妹が一人。

その生活は正に平凡、エスカレーター式の男子校へと小学校から入学し、友と出会い、思わぬ幸運に喜び、時には目の前の理不尽に怒り、膝を屈する挫折に哀しみ、それらすべてを人生だと受け入れ楽しんでいた。

正に、何処にでもいる善良な一般人。 だがその記憶はある時からその平凡な生活から一転する。

カルデア、特異点、未来を取り戻す旅、英霊、人々の歴史、裏切り、友との別れ、運命の宿敵、そして初恋。

今まで生きていた人生とこれから生きていく人生すべての時間をその二年間に詰め込んだような、愛と勇気の物語。

そんな事を経験しても、その性格は善良な一般人を超えていない。

なぜ。

そんな、何も持っていない人間がなぜ、世界を救えたのか。

なぜ。

そんなただの人間が世界を救って、その在り方を変えようとしなのか。

面白い。

一つ、その方法を思いついたとき自分の口が大きく歪んだことを覚えている。

「しかし、魔神柱が生き残っていたとは……」

「彼を殺すただけに特異点を作り上げるとはな」

「凄まじいまでの殺意ですね、あの子はこれから大丈夫でしょうか」

「出来ることをやるしかないだろう。そして今解決すべき問題は今回召喚されたアヴェンジャーだ」

カルデアの廊下を四人の職員が歩いていった。日も落ちて、もうそろそろ夕食も出来

上がるといった時間で、四人は先に食堂の席をとっておこうと早めに仕事を終わらせ食

堂へと向かっていた。今日の献立はエミヤ特製ハンバーグ定食であり、油断している
とあつという間に席が埋まってしまい肉が焼けてる良い匂いを嗅がされながら順番を
待たなければいけないのだ、この四人はそんな精神的拷問を受けるつもりはなかった。
「ああ、あの狼か……あの本は俺も小さいときに読んだことがある。確かに人間を恨
んでも仕方がないよなあ……」

「あの子も危うく、殺されそうになったと聞いたが」

「でも、あの毛並みは一回モフってみたいですよねえ……」

「食いちぎられるぞ。下層隔離区域に押し込んだのは良いが、問題は食事だ」

このカルデアにいるサーヴァント全員の魔力を供給しているのはマスターではない、
正しく言うと直接的に供給するのはマスターだが、その大部分はカルデアから生成して
いる魔力をマスターに通してそれからまた英霊に魔力を通している。

そうでもしないと魔術師的にはヘッポコであるマスターは百を超えるサーヴァント
どころか一体でも維持不可能である。

しかしながら、魔力のパスはマスターに繋がっており、いくらカルデアから膨大な魔
力が生成されようともそれを流す蛇口は一つ、幾ら膨大な水が溜まっていようが、一度
に水が出る量は決まっているし、それを超えて流そうとすると蛇口の方が壊れる危険性
がある。

なのでサーヴァントたちはカルデアでは疑似的な受肉を果たしており、食事や睡眠などをすることで出来る限り魔力の消費を抑えている。といったわけで、珍しいことにマスターにとっては霊体化されるより実体化される方が魔力の消費が少なく楽なのである。

「あの狼王は人からの施しを受けない。人から出された食事を絶対に受け取らないんだ。と言つてもここは雪山、狩りの獲物なんかいないし、そもそもさせるわけにもいかない。これがまだ人類滅却中であつたらレイシフトでもして適当な森にでも放つことが出来たが、今では外からの眼がある。もともとレイシフトは魔術教会と国連とが議論を煮詰めた上で許可される一大プロジェクトなんだからな」

「じゃあ、今はどうしているんです?」

「唯一の例外はあの子だ、彼が作った料理を彼があの子と同じ場所で同じ物を食べる時によろやく口にする。上に乗っている騎士はその……口が無いからどうにもできないが」

「彼に服従したのか……?」

「いや、それはどうだろうか」

一人の職員が異議を唱えた。

「古来から人間と狼と言うのはその生物的頂点の座を巡って争いを続けてきた。その

自立性と個性、強い縄張り意識……人間で言うプライドと言えいいだろうか、犬との違いはそのプライドの高さであり、人間と協力しても服従という選択肢は取らないだろう」

「ならば、マスターとの関係はどう説明するんだ」

「受け入れられるのではなく、受け入れる。つまり、服従と言うよりはあちらが群れに入れた、と言う方が正しいのかもしれない」

「でも、ただ単にお友達同士になっただけのこともあるかもしれませんよ？」

「あほう、相手は狼王だぞ。そんな手を握り合って仲良しってわけにはいかねえよ」
「でも……」

「問題は、マスターとの関係ではなく、マスターがいないと食事を行わないということだ。今は彼がいるから良いとして彼が不在の時誰が料理を食べさせるのだ？」

四人は頭を悩ませる。どうしても食べないという時は霊体化してもらうしかないのだが、相手が素直にこちらの言うことを聞くとは限らない。

それにマスター以外の人間が狼王の前に立つということは獲物と見定められるということと同義である。

「誰かオレの事呼びました？」

「ああ、丁度良かった。丁度お前さん達の事話し合ってたんだ」

「オレの?」

と、そこにマスターが偶然職員たちと出会う。マスターも夕食をとろうと食堂に向かっていたらしく、職員たちはマスターに狼王の事を話ながら一緒に食堂へと足を運び始める。

「うーん、そうですか……オレとしては一人ぐらい負担が増えたって大丈夫なんですけど」

「そういうと思った……いいか? 君は本来ならばサーヴァント何て一人も維持できないほど回路は少ないんだぞ、無理に魔力を供給して体に異常をきたしたらどうするんだ」

「へー、そんなに……」

「うん? どうした?」

「いえ、何も。まあ、あの狼の事はこちらも考えておきますよ、それよりもこちらも腹ごしらえといきましょう。自分達人間は霊体化できませんからね」

「え? あ、ああそうだな」

「なんだか、いつものあの子と雰囲気違います? なんだか、大人びているっていうか」

「男子三日会わざれば、つて奴だろ。男つてのはきつかけがあればいくらでも成長す

るんだよ、あれは俺が十五の時だったか……」

「うーん、そうでしょうか……」

そうこうしているうちにマスターたちは食堂へと到着する、まだ夕食には三十分程度時間があるというのに、食堂のテーブルは埋まり始めており、マスターたちも慌てて自分たちが座れる場所を探し始める。

「あー、なんだ。折角ここまで来たんだし、どうだ、一緒に喋りながら食事でも」

「そうだな、色々と今後の事について話し合いたいこともあるしな。まあもつとも堅物女史は違う目的がありそうだが？」

「んなつ、んなわけあるか！」

「いえ、オレも丁度そう思っていました。もつとも二人つきりじゃないのが残念ですが」
「はうあつ!? ば、馬鹿っ! 大人をからかうんじゃない……」

ウインクしながら微笑むマスターに、思わず白衣を着た職員は赤面して目をそらしてしまふ。そんな光景を見てさらに眉間にしわを寄せたのはオペレーター担当の職員である。

オペレーターの職員は隣の先輩を耳を掴むと自分の口もまで持つてきて小声で話しかける。

「やつぱり可笑しいですよ! あの子があんなエミヤさんみたいな真似を意図してでき

るはずがありません！　いつもなら女性相手には赤面して小声で早口になっちゃおうおぼこちゃんなんですよ!?!」

「お前がマスター君にどんな印象を持っているか良く分かった、あとな、内緒話をする時は自分の口を持つてこような？　耳がちぎれるかと思つたよ俺は」

「だつてあの子ですよ!?!　私が胸元のボタンかけ忘れてた時にすつごいチラチラ見ながら、顔を隠して指摘してくれるような純粋な子なんですよ？　そんな子がかつこつけて女性にウインクなんかできません!?!」

「お前が何やってんだよ!?!　そもそもあんな美人なサーヴァントたちに囲まれてるんだから、否が応にも女性には慣れるだろうよ」

「えー、でも……」

オペレータ職員が横目でマスターを見る。外見は何も変わらない何時もの少年であり、その大人びた笑顔以外は何も変わらない。

やはり自分の勘違いなんだろうか、たしかにエミヤさんからは女性を怒らせない方法を学んでいる姿を何回か見たけど……と顎に手を当てて悩んでいると、一人の男が周りの職員と肩がぶつかることも気にせず、大股でマスターへと近寄つてきた。

その意匠を凝らした服と、尊大な態度から見ると近頃時計塔の各科から送られてきた魔術師の一人の様であつた。マスターほどではないが年は若く、美男子であり、その

グレーの瞳でマスターを見据えるとその顔を少しだけ歪ませた。

「ふん、百を超えるサーヴァントと契約しているマスターと聞いて期待したが、こんな……はっ、凡人とは。英霊は良い目を持っているみたいだな、こんなに操りやすいマスターも他にはいいまいよ」

「はあ……ありがとうございます……？」

「褒めてないわ！ ……ほん、私は不思議でたまらないんだ、魔術回路も才能も下の下である君がどうやって世界なんてものを救えたのかとね、どうか教えてはくれないかな？」

「お言葉ですがミスター、彼はマスターではありませんがそれは現世とサーヴァントを繋ぐ楔の役割でしかありません。その他の交渉、戦術面での指揮などは全てロマニアキマンが対応したと報告書に記入されているはずですが」

男の言い方に、思う所があったのか白衣を着た職員が言葉を放った。冷静に努めようとしているが、その言葉の端々には怒りを含んでいた。

実際このような事はこれが初めてではなかった。

人理定礎後、魔術教会から人員が補充されたのは良い物の、このカルデアの現状はどうやって切り裂こうかとナイフを持って悩まれているテーブルの上のパイのようなもので、様々な時計塔の権力者たちがカルデアの権利を求めて様々な人員を紛れ込ませて

おり、静かに権力闘争の場へと化している。

その中でサーヴァントの力を求めてくる魔術師もいる。彼らからすれば、サーヴァントを手に入れることが出来れば、最強の使い魔としてその力を十分に振るうことが出来るし、それだけで他の権力者たちから一定のアドバンテージを得ることも出来る。

なので密かにサーヴァントを引き抜こうと交渉したり、時には力に訴えて自分の陣営へと引き入れようとする、が、これが上手く行かない。マスターにその剣を預けることを誓った騎士達は勿論として、仕える主を選ばない武人の英霊たちも、一度契約した以上マスターからの命令が無い限り鞍替えはしない、どうしても変えさせたかつたら自分のマスターを殺すなりしてその令呪を奪え、その代り手を出そうとした瞬間にその手を切り落とされても文句は言うな。と言うのだ。

なので魔術師たちは結果的に直接マスターに平和的な交渉を強いられるが、相手は自分より才能も血筋もない只の一般人。そんな相手に頭を下げてお願いするということはプライドが許さなかつたのである。

「勿論見たとも。君が出来たのは精々サーヴァント共のご機嫌取りぐらいだろうか？」

「そりゃまあ、アンタ方には耐えられないでしょうね」

そういつて鼻で笑うマスターに男は眉をひそめるが、ここで怒ったら交渉――彼からし

「たつたではあるが」は決裂である。男は一つ咳をして、不敬な態度を無視すると本段に入つた。

「どうだろう、ここは才能があるものに管理を任せてみないか？ 君も使い魔などにこ機嫌取りをするのにはもううんざりだろう、私達なら正しくアレ達を扱えるのだよ？ 君にとつても損にはならないと思うが……」

「そんな言い方つて！」

「金は？」

流石に腹を立てはオペレーターの職員が抗議しようとする声を、マスターが遮つた。足をテーブルに乗せて薄笑いしながら男を見るマスターの姿に、職員たちは今度こそ自分の目を疑うことになつた。

「金ですよ、まさか只で物事運ぼうとしてたんですか？」

「あ？ ああ、金か。もちろん用意するとも！ 幾らでも言いたまえ、君は日本出身だつたな、ならば百万でも二百万でも用意しよう！ 幾らだね？」

男はその顔を大きく歪ませながら嬉々として紙とペンを用意する。幾ら立派な事を周りが言おうとも本人は平民、金の誘惑には勝てないのだと男は心の中でほくそ笑んだ。自分が今金で手放そうとしているのは金ではいくら積んでも買えない物なのだということに気付いていない、金なら幾らでもある。こんなことで済むなら早くやつて

おくべきだったと男は今後自分に待っている栄光に酔いながら交渉を進めていく。

「お前、何をしようとしてるのか分かってるのか!?」

「どうしたんだ一体! 君はそんな子じゃなかったはずだ!」

職員たちも、そのマスターの変わり様に信じられないような顔をしながら止めるが、マスターはただ面白そうに笑うだけである。

「ハハハ、人も変わるといふことさ。 さ、いくらだね? 幾らでも用意しようじゃないか」

「じゃあ、百億でも」

が、マスターが放ったその法外な値段にその場の全員が固まった。 男は思わず、持っていた紙とペンを落とし口をあめぐりと開けたまま固まる。

「ひゃ……馬鹿にしているのか! そんな額到底払える者じゃ……」

「なんだ、払えないんですかい? じゃあこの話は無かったということで」

「なっ……! 待て、五千万! 五千万なら払えるぞ! どうだ?」

「ひえっひええへへへ、なんですその程度なんですか? そんな貴族っぽいカツコシで意外とせこいんですねえ?」

「き、貴様……私を誰だと……!」

男が青白い肌を真っ赤にしながら怒り狂う、自分より下の人間から言い様に扱われて

いるという屈辱は男にとっては耐えられない。

そんな姿を見てマスターはさらに笑い、止めとばかりに舌を出しながら言い放った。

「誰って、こんなガキ相手に偉そうな態度取った挙句に良いようににからかわれている馬鹿な貴族様です！ いやあなるほど大変だなマスターも！」

「貴様っ……！」

「危ないっ！」

そのマスターの言葉で男の張りつめた怒りの糸が千切れる。瞬間男は何かを呟くと、マスターに向けて指を指す。それがどういった魔術か分からなくともその男がマスターになんらかの危害を加えようとしているのは明らかであり、職員たちはマスターを庇おうとするが間に合わない。当のマスターは反応出来ないのかそれともしようとしなのか只笑って席から逃げようともしない。

そのまま魔力の塊が男の指先から発射

「まったく、いい加減にしたまえ」

される直前に、何時の間にか男の後ろに立っていた老紳士が杖で男の腕を弾き、結果魔弾はマスターの髪を掠めてテーブルへと着弾し、爆発した。

「んなっ」

「なんだい、見てたのかい」

「見てたとも、全く酷い変装もあつたものだ」

老紳士はそういうと、マスターを庇おうとして転んだ職員に手を貸して立ち上がらせる。男は邪魔されたことに文句を言おうとしたが、老紳士の鋭い視線に萎縮して何も言えずに立ち尽くすままである。

「おっと、流石に気付いたかな？」

「そりゃあ気付くだろう。いや、十七ほどマスターとは違う癖のある動きをしていたのもあるけど、まずキャラが違うすぎる！ マスターがそんな妖絶な笑みを浮かべるかね。いや時々浮かべることもあるけど、あれは動物が生命の危機に瀕した時に使う死んだふりみたいなものだからネ！」

「え？ え？ どういう事？」

「こういう事さ」

マスターの姿がいきなり影に包まれたと思うと、中から一人の美男子が飛び出した。長い髪をなびかせ、何処か女性を思わせる美しい顔立ちであるが、その立ち振る舞いや完成された肉体に刻まれた義の刺青には男らしさと風流が醸し出されている。

好青年と言うより無頼漢と表現した方が適切であろう、この男は最近マスターから召喚されたサーヴァントの一人であつた。クラスはアサシンである。

「んなっ……マスターじゃなかったのか!？」

「やっぱり! そうだと思いました! あの子はもつと可愛いんです!」

「はは、やっぱり記憶も読み取れると言つてもそのまんま真似するつてのは難しいもんだなあ! 特にマスターは難しい!」

そういつて無頼漢は笑うと、固まつている男に視線を向ける。男は何が何だか分からないといった表情で口をあんぐりと開けている。

「そういうこつた、いやーすまん旦那! まさか魔術師とはいえサーヴァントと人間の区別も分からないとは思わなかったからついからかちまつた!」

「んなっ……!」

「君もそこまでにしておきたまえ、そもそもうちのマスターは世界の半分をくれてやると言われてもいいえを押しすタイプなのだ。それとね、君の為にも言つてるんだヨ?

目の前の男は数秒で君をミンチに出来る男だ、容赦もない。私が止めなかつたらそうなつていただろう、だから今回は帰りたいまえ、な?」

「うぐっ……覚えていろ……!」

目の前の無頼漢の尋常ならざる存在感を今更感じたのか男は冷や汗をかくと捨て台詞を残して走つて去つていった。途中食堂のドアにその豪華な服が引かつかつて転んでいく光景は通りかかったナーサリーを笑わせるには十分であった。

「すごい古典的な捨て台詞だなオイ。しかし、なんだ、意外と甘いんだな教授。悪の親玉とは思えない優しさだったじゃないか」

「別に彼の為じゃないよ。あのまま彼が今日のハンバーグみたいになつたらマスター君が悲しむだろう？ あの子もお人好しだからネ、きつと自分の責任だと落ち込むだろう」

「なんだか孫の世話するおじいちゃんみたいだなあ」

「せめておじさんと言いたまえー」

二人はテーブルの席に座ると、そのまま対話を続ける。英国アラフィフ紳士と中華美麗無頼漢の組み合わせは非常にアンマッチであったが、それが逆に周りの目を引いており、一緒に座っている職員たちは一人を除いてなんだか居心地の悪い。

「しかし、なぜマスターに化けたのだね？ マスターが熱狂的追跡者から隠れるために君をスケープゴーストに仕立てたわけじゃあるまい」

「別に、只マスターに化けたらどうなるのか、と思っただけさ」

「なるほど、君は気になつたわけだ。どうしてマスター君があんなにサーヴァントを率いてられるのか」

「……まったく、どうして教授は一だけ聞いて十まで分かるのかね」

「別に仮説を立てているだけさ、君は化ける時対象の記憶まで化けるからね。彼に特

別な何かがあると思つたんだろう？　それで記憶を見るために彼に化けた。　彼に化けるために記憶を見るのではなくて、記憶を見るために彼に化けたのだ。　違うかな？」

教授がそういうと、無頼漢は両手を上げて参つた言う様に溜息をついた。

「まったく、趣味の悪い爺さんだ」

「オジサンと言いたまえ。　それで、何か分かつたかね？」

「余計に分からなくなつちまつた。　生まれてから此処に至るまで全く普通の人間だつたよ、特別な生まれでも、特殊な才能もなく、至つて平凡の生まれで平凡に生きてきた坊ちゃんだ。　ありやただの善人だよ、教授。　アンタはなんでマスターに付いていつてるんだい？」

「理由？　理由は無いなあ。　只面白いから付いていつてるだけだネ、私は」

「なんだそりゃ」

無頼漢が笑うが、教授は至つて真面目な顔で答えた。

「いやいや、彼は面白いよお？　正義側の癖に悪の親玉雇つてるんだからね。　多分皆もそうだろう、大層なセリフ並べても結局は面白いから着いていつてるのサ」

「まさか……」

今度は無頼漢は笑えなかつた。　世界を救つた英霊たちが面白いからと言う理由で

マスターと共に戦ったというのか。

「多分、君も彼の記憶を見たときそう思ったはずだ。まあ救ってくれた恩で主に仕えてた君にとっては理解するのに難しいだろうが……ほら君って無頼漢とか言いながら忠義には厚かったからネ」

「面白いから……?」

「なんだか難しい話してますね……ハッ!? アラファイフ紳士と美青年とあの子との三角関係……!」

「大丈夫かお前」

一人興奮するオペレータ嬢にドン引く職員たちの中、無頼漢は一人面白いからと教授が言った理由に頭を悩ませていた。

「面白いから……ねえ……」

数刻後、無頼漢のアサシンは一人与えられた部屋で思いにふけていた。

宋江とも違う、自分の元主である盧俊義のように選ばれた人間でもない、ただの平凡

な人間に仕える理由が面白いから？ 恩でも忠でもなく……？

面白いから仕えるという感性は持ち合わせていない、相撲、喧嘩、花、女すべてを愛してあまつさえ無頼漢と呼ばれた自分がこんなことで悩むとは。

無頼漢は、まだ殺風景な部屋で一つため息をつく。すると、部屋のドアが開いて一人の少年が入ってきた。

「誰だ……つてマスターかい？ どうしたんだそれ？」

マスターは手に二つのプレートを持っており、それを部屋のテーブルに置くと、無頼漢に向かって手招きをした。

「なんだ？ ハンバーグ？」

それは今日の食堂の夕飯であるハンバーグであった。既に時間は食堂の開いている時間を過ぎておりハンバーグも売り切れているはずであったのだが、マスターはどうしてか作りたてを無頼漢の部屋に持ってきていた。

「？」

「え？ そりゃたしかに食わなかったが……」

「？」

「ああ？ い、いただきます……」

困惑する無頼漢をよそにマスターは箸を渡すと、そのままいただきますとハンバーグを食べ始める。マスターが食べたとあつては自分も食べないわけにはいかず、おらずと無頼漢もその箸を進める。

「あ、結構うまいな……」

箸でハンバーグを裂くと肉汁があふれ、良い匂いが鼻孔をくすぐる。デミグラスソースとの相性も良く、噛むごとに肉の味が口の中に広がって、白米も良く進んだ。

「へ、なんだコレマスターが作ったのか？ そりやお見事だ、星三つ付けられるぜ」

良かったと安堵するマスターに無頼漢はハンバーグをマスターが作ったことを知った。食堂はもう閉まっている時間であるし、当たり前的事だったが一見不器用そうな目の前の少年が作ったとなると無頼漢としては感心せざるを得ないぐらいにそのハンバーグは旨かった。

「へ？ オカンから手伝ってもらった？ そりやあ良いが何でわざわざ」

無頼漢が聞くと、マスターは照れくさそうに食堂でのお礼だといった。魔術師の男が無頼漢が化けていたマスターに交渉を迫った時の事である。

「いやいや、あれは俺が勝手にやったことで、マスターが気にする必要はねえよ。だからお礼も言う必要も」

それでも、とマスターは無頼漢に向かって礼を言った。　こうもされると無頼漢もなんだか照れくさく頬を掻くことしかできない。

「はあ……分かった分かった。だからってなんでハンバーグなんだ？」

「？」

「いやまあ、腹は減っていたが。　そもそもサーヴァントは飯食わなくたって支障は無いんだぜ？」

「？」

またマスターは、それでもいいながら誤魔化して照れくさそうに笑う。　結局マスターはお礼とかなんだかんだ腹を空かせている無頼漢を放っておけなかったのである、そのことに気付いた無頼漢は溜息をついて彼のお人好しさ加減に呆れた。

「まったく、そしたらわざわざ手間かけなくてもいいだろうが……まったく」

「？」

そういわれるとマスターは何も考えたわけでもなく、一緒に温かいご飯を食べた方が美味しい、それにエミヤ直伝のハンバーグは美味しい。　と答えた。

「……ははっ、参つたよ。 そうだな、違くない」

二人は笑い合つと、冷めないうちにハンバーグへと箸を進めていった。

——なるほど、面白いな。

無頼漢はハンバーグを口に入れながら、教授の気持ちを少しばかり理解した。 出来るならば、この面白い主と末永く過ごしてみたいものだ。 とそんな気持ちを抱きながら。

「ふああ、今日も徹夜かあ……」

長くなったポニーテールを揺らしながら、誰も歩かなくなった廊下を一人オペレーター担当の職員は歩いていった。 普段使つていた機械が異常をきたしたためにその対応に追われ遅い時間まで駆り出されていた職員は眠たそうに自室に向かう。

「お肌が荒れたらどうしよう……ダ・ヴィンチちゃん印は良く効くけど高いのよね……」
肌を触りながら、そんな心配をしていると、一つの部屋から見覚えのある少年が出ていくのが見えた。 マスターである少年だ。 少年は二つのプレートを持って誰かと

親しそうに喋っており職員に気付いていない。

「おっ? こんな夜中に誰かと親しそうにするなんて、もしかしてあの子にも春が……!?

スクープね、これはスクープよ!」

あふれ出る青春の気配に職員は素早く隠れると、じつとマスターを観察する、相手はマシユだろうか、それとも他のサーヴァントだろうか、それともそれとも大穴で自分の先輩である堅物女史であろうか、カルデア史に残る大事件の香りに職員はもう一人が見送りに出てくるのをじつと待っている。

「んじゃ、ありがとなマスター。旨かつたぜ、ハンバーグ。また食わせてくれよな」

出てきたのは今日見たあの髪の毛の長い美青年であった。

「(スクリーーロープ!?)」

職員は心の中で絶叫する。まさか、まさか、あの子があの人とこんな時間まであんなことやこんなこと……! 職員の中で脳内妄想が肥大化していき、鼻から一筋の血が流れ出て来るのも気づかずに、職員は叫びだしたい気持ちを抑えながら二人が親しそうに別れるのを見つめていた。

次の日、マスターは謎のタレこみを受けた女性サーヴァントから徹底的指導を受けることになるのだが、そんなことは今のマスターには知る由もなかった。

マスターの明日は……明後日はどっちだ。

マスター、帰省する～鯖を釣るサバと太陽編～

一つ風が吹くと、潮の匂いと共に春を感じさせる生暖かい風が彼の頬を撫でた。堤防に打ち付ける波が白く泡立ち、際限なく流れていく。

空に上がった太陽が海に煌くと少年の目を眩しく照らし、少年の記憶に女神と勇者と海賊の奇妙な海の物語を思い出され、少年は少しだけ頬を緩めた。

あの時は、一人の少女が少年と一緒にだったが今その隣には誰もいない、ただ流れる海と空を飛ぶカモメ以外は少年一人である。

此処は冬木にある名もなき堤防の一つ。たまに釣り人が竿を持って緩やかな時間を過ごしていき、タコなども釣れる隠れた名所でもあった。

そんな堤防を少年は釣り道具も持たず、ただ堤防沿いを一人で歩いていた。

目的は無い、ただあてもなく只時間を過ぎるのを待っているのみである。つまりは時間つぶしなのであるが、これにある理由があった。

他の誰かから見れば笑う様な、けれどもマスターとっては深刻な悩み。それは日々彼の心を突然に締め付け、砕こうとその茨を伸ばしてくる。

少年が一つため息をついて顔を上げると、ついに冬木の港が見えてくる。どうやら港の方まで歩いてきてしまったらしく、少年は無意識に中々遠くまで歩いてきてしまったことに苦笑する。

これまでの旅で、探検家も驚きな未開の地などを探検してきたおかげか少年は中々の健脚に成長しており、ちよつとやそつとじゃ足に疲れも感じなくなっていた。無論、レオニダスブーツキャンプのおかげでもあるだろうが。

この先に行くと、小さいながら灯台のある広い場所に着く。先述の隠れた釣りの名所であるこの港はロマンチックな雰囲気を作り出すには絶好な場所であり、釣り人の他にも家族連れのお父さんや恋人たちにも好まれている。

そして雲一つない快晴と、春を感じさせる生暖かい風。まさに文句の付けようのないお出かけと釣り日和。

この絶好のロケーションにこの日、この時間人が居ないということはまずないのだが……

「……しかし、鯖しか釣れねえな……」

この一人の暴力団風の男によって誰も近寄らぬ魔境へと姿を変えていた——！

ケルト最優の戦士とも言われる光の御子、ランサー、クー・フリーンである。恐ろしくその性格を表しているアロハシャツを来たクー・フリーンは釣竿を構えて暇そうに欠伸をしている。

が、流石はケルトの戦士、その釣竿を構える腕は一ミリも動かず、静かな巖のように風が吹こうが波が大きく揺れようが釣竿もまたその体の一部のように僅かも動かない。その悟りを開いた剣士の様なクー・フリーンにマスターは素直に感心して、近くの自販機からコーヒーを買ってきてクー・フリーンに投げ渡した。

「？」

「おう、ぼちぼちつてとこだな。マスターも奇遇じゃねえか」

クー・フリーンはマスターからパスされたコーヒーを片手で受け取ると、持ってきていたバケツへと指を指す。

マスターが中身を見ていると、中身はランサーが釣った魚でござった返し小さな豊潤な海がそこに出来ていた。

「つつても、殆どサバなんだけどよ。中にはタコもいるぜ」

「？」

「おう、調査とやらが無い日は大体ここで釣りでもして過ごしているな。あとは魚屋でバイトも少々」

思わぬサーヴァントの現実に溶け込んだ暮らしに少々面喰つてしまうマスター。今までのサーヴァントを見る限り、現代社会に溶け込むなんて正直無理なんじゃないかとまで思っていたのでマスターは兄貴の兄貴っぷりにおもわず感動さえしてしまう。

「しかしなんだ、てつきり嬢ちゃんも一緒かと思つたが一人なんだな」

「……」

「あー……ま、そういう時もあるわな」

自分の問いに顔を曇らせて口籠る少年を見て、クーフリーンは苦笑いしながらこれ以上何も聞かずにまた海の方へと視線を移した。こういう時に深く理由を聞かず、自分から話す以外に詮索もしないこのクーフリーンの人柄はマスターにとつてはありがたかつた。

その横に少年も座つて同じように海を見る。その後ろ姿はは親子の様であり、兄弟の様であり、仲の良い友人の様である。

「……………」

「うん？ 竿がけ？ ああ、いらねえいらねえ。こーやって竿と糸で海の動きを見るが好きなんだ。まあ大量に釣れるんならそれが一番楽しいがな……よつと」

クーフリーンの竿が撓しなつた瞬間クーフリーンが手首をスナツプさせた。するとまるで魚が自分から陸へと飛び跳ねていくようにクーフリーンの近くへと着地して自分

が釣られたことに気付けなかったかのように一瞬遅れて暴れ出した。

その神がかつた鮮やかな手つきにマスターは思わず拍手してしまふ。

「またサバ……つと。なんだ、そんなに褒めてもらう様なことじゃねえよ」

慣れた手つきで魚から釣り針を外すと、バケツに投げ入れる。空から新入りが一匹増えたバケツの中は驚いた魚が所狭しと泳ぎ回っていた。

「？」

「ん？ まあ、趣味半分鍛錬半分つとこだ。だがこいつには自信があつてな、カルデアでは最強の自負があるね」

そのクローリーンの自信あふれる言葉に、マスターは苦笑したがこの小さな海と化したバケツを見る限りあながち言が過ぎるということでもないように思えた。

「？」

「あん？ 師匠？ ありやあ竿と言うより槍で一突きつて方が得意なんじゃねえか？」

ほら、海女つていうんだっけか、あの恰好を師匠がしたら笑うしかねえがな！ ハハハ」
ああ、そんなこと言ってもいいのだろうか。壁にアンあり障子にメアリーである。

時にスカサハの場合は何処で聞き耳たてても不思議ではない。実際カルデアでクローリーンは何回か軽口を叩いて刺されそうになっているではないか。

心配したマスターがクローリーンにその意を伝えるが。

「なーに、流石に師匠の地獄耳も此処までは届きやしねえだろ。まったく年取ると耳聴くなると聞かありやあ相当年取らないとなれねえなあ」

ほう。

空間が割れたような音が聞こえたのはマスターだけだったのだろうか、誰かに見られているような感覚にマスターはうすら寒い物を感じると立ち上がってその場を後にしようとしてフリーリンに別れを言った。

「なんだ、帰るのか？ だったらこれ持ってけ」

「？」

するとフリーリンはバケツから何匹かの魚をコンビニの袋に入れて差し出した。マスターが慌てて遠慮すると。

「いいってことよ、痛んじやいけねえから早く帰ってやれ。嬢ちゃんによろしくな」

と、言つて手をヒラヒラと振つてまた、竿と糸を見つめ始める。これ以上は何も言う気は無いらしい。

どうやら見抜かれてたかなとマスターは少しだけ顔を曇らせると、魚を受け取り、クーラーの無事を祈りながらその場を後にした。

今頃マシユはなぜ自分がいまいかと心配し探し回っているころだろう。少年は少

しばかりクーフリーンに勇氣をもらいながら穏やかな日差しを浴びながら元来た道を歩いて行った。

雲一つない快晴に、春を感じさせる心地よい風が潮のにおいと共に心地よく頬に流れ
てくる。

カモメの鳴き声が寂しさを和ませ、波の音も加わって心を穏やかにさせるリラックス
効果を生み出している。

まさに非の打ちどころのない絶好のロケーション。

午後の親子の散歩や、ご婦人の健康と美容のためのウォーキングに適したこの冬木の
港は、しかし。

「どうした、竿が止まっているぞ。 クランの猛犬とも言われた男が情けのない、おつと

十七匹目フィッシュ」

「なるほど、こうやって広大な海を前にして心を無にすると中々感じるものがある。

そういえばジナコも釣りが得意と言っていたな」

「なんでまたこうなつちまうんだ……」

その華麗さと美麗さも相まって、外国マフィアの取引現場の様な雰囲気醸し出して
いた——！

「……」

「クーフリーンさん、それにスカサハさんに、カルナさんも。皆さん奇遇ですね！」

その日マスターはマシユと一緒に港へ釣りへと来ていた。昨日クーフリーンから貰った魚を見て、誰にも行先を告げずに一人何処かに行ってしまったマスターに顔を膨らませると同時に魚釣りに興味を持ったマシユをダ・ヴィンチちゃんも察知し、その日の内にダ・ヴィンチ製フィッシングロッドをプレゼントしたのである。

マシユの事で悩んでいる少年は最初は遠慮していたが、マシユの輝くような期待のこもった目に耐えられず結局一緒に行くことになった。——マシユの上目遣いは少年に特大特攻なのである——

「マスターか、なるほど良い漁港だなこは。あちらの海と違って海に生があふれている」

ダメージジーンズと黒いジャケット来た女性がマスターに話しかける。例え何キロ離れていようが美人だとわかるその美貌と何処か武人の強さを持った威厳のある話

し方をする女性はスカサハ、クーフリーンの師匠である。

先日のクーフリーンの悪口を遠く何千キロも離れたカルデアからしつかりばっちり聞きつけて即来日してきていたのである。

手には二本の釣竿を片手ずつ持ち、精密機械の様な一ミリも無駄のない動作で魚を釣り上げていく。しかもまだ力の弱い魚は釣り上げた瞬間その竿を巧みに動かし指一本触れずにリリースしている、なのでスカサハのバケツには超大物というような魚がぎつちり詰っていた。因みに竿は海魔獣^{ククリイド}の骨から作り上げたもので、ルーンに加護でクジラ三体が一度にその竿にかかっても折れることは無い。――そこインチキとか言わない――

「そのバカ弟子が大言壮語にすぎる事を言っていたらしくてな。時には弟子の鼻を折るのも師匠の務めという事でわざわざワシ自ら出張ることになったのだ」

「嘘つけ、ルーン使つて盗み聞きしてただろ……」

「何か言ったか？ おっと十八匹目フィッシュ！ ふ、どうしたセタンタまだ鯖が八匹しか釣れてはいないではないか」

「ほっとけ。別にあんたと競うために釣りをしてるわけじゃねえよ、向こういけ向こう」

「ふふ、負け惜しみとして受け取っておこう……十九匹目フィッシュ！ 私に釣られない

魚はいるか？ ふ、いるはずもない、か」

「す、すごいですスカサハさん……」

釣られた瞬間自分からバケツに入っていくように飛ばされていく魚たちとテンションが上がっていく影の女王。こんなことに自分のキメ台詞まで使つて良いのかと童心に帰つている大人のテンションに若干戸惑いながら、マシユとマスターは一人静かに海に糸を垂らしているカルナの横で釣りの準備をし始めていく。

因みにフィッシュユとは当たりの意味です。 ヒット、ビンゴ、コーブラー等とお考えください。

「……………」

「ああ、マスターか。別に横でも構わないが、俺の横では魚は釣れないかもしれん」

そういつてただ海を見つめる男はカルナというサーヴァントであった。 インドの英霊であり、サーヴァントたちの中でも最強の名を争える男の一人である。

そんなカルナは麦わら帽子に薄着の服と言う季節違いの服装であったが、その陶器の様に白い肌に太陽が当たると、輝きを増して煌くので美しい。

「カルナさんは、あまり釣れてはいませんか」

マシユがバケツの中を見るとその中には、小さなカニがバケツで遊ぶようにハサミを鳴らすように開いたり閉じたりするだけで魚の姿は無かった。 技量的には他のラン

サー達と引けと取らぬ技量を持つているのだが、餌が悪いのだろうか？ そうマスターが考えていると。

「ああ、竿にかかるのはかかるのだが……」

カルナが竿の糸を引き上げると、そこにはフグがその体を大きく膨らましてカルナを睨んでいた。中々の大物であり、素人では調理をするのは危険だがその身はたっぷり詰まった様な外見をしていた。

「この魚ばかり釣れてしまう。これで十回目のぶぎやーだ」

「はい？ ぶぎやー？」

なんだか目の前の大英雄から聞こえる事のない単語が聞こえて、思わずマシユとマスターは聞き返す。強さの基準が可笑しいインド神話だが、まさかインターネットが普及していて掲示板で煽り合いをしていたなんてことは宇宙が神の微睡であつてもあり得ない事であつた。

「……？ オレの遠く親しい友人がモニターの中で釣りをする時はいつも言っていた言葉なのだが……違うのか？」

「多分、違うかと……」

「そう……なのか……」

なぜかショックを受けた様な声色で、カルナは目の前の釣れたフグから針を取るとそ

のまま海へとリリースしていく。

「？」

「ああ、膨らんだ姿がジナコに似ているので俺としたことが情が移ってしまつたらしい。人間と魚の知恵比べにこのような情をかけるのは相手にも失礼なのだろうが……こういう事だ、だから俺の横にいとこの魚しか釣れないかもしれないぞ」

はてフグに似たジナコというインドの英霊何ていたかとマスターは思うが、どうやらカルナ個人の友人らしく英霊の座にはいないらしく、カルナはそう説明するとなにか懐かしむような目で海を見つめてまた竿を引いた。

またフグだった。

「……」

マスターが夕日と共に心地よい潮風に吹かれて少しだけ目を閉じる。マシユ達が釣りに参加してからだいぶ時間が経っており、日も沈んできておりもうそろそろ釣りも終わりと言うことなのであるが、その頃になつてもマスターは一匹もフィッシュユできて

いなかった。

マシユは初めてとはいえ、つたないながらも二、三匹の魚がそのバケツに入っていたのだが、マスターはワカメと長靴ぐらいである。

何時まで釣れないマスターにマシユも励まそうと、近くの自販機まで暖かい飲み物を買に行つてしまった。経験したことがあるから任せろと胸を叩いて言い切つた割にこの始末、マスターは自分が言つた言葉に激しく後悔しながら竿を揺らして魚が食いつくのを待つていた。

「さて、と私はもうそろそろ戻るが……お主たちはどうするつもりだ？」

「？」

「そうか、ならば行くぞバカ弟子。船まで案内するがいい、明日も釣りに洒落込む予定だからな」

「こんなに釣つてどうすんだよ、加減しろ……俺の樂園を返せ……」

魚がこれでもかと言うぐらいに詰め込まれたバケツを持ちながら、ケルトの師弟二人はマスターに別れを言うとそのまま歩いて意気消沈しているクーフリーンと一緒に港から自分たちが拠点としている船に帰つていった。

船を知らないとなるとスカサハはどうやって来たのかマスターは気になったが、それを聞く前に姿が消えてしまいそれは叶わない。

とりあえず一匹釣れるまで粘るとマスターはいつて竿を握りなおしたが、本当に釣れるかマスターには分からなかった。

「俺も、此処までにしよう。マスターよ、例え魚が釣れなくてもそれはお前に非があるということではない。単に魚の知恵が上回っていたというだけだ」

すると、先ほどまで永遠とフグを釣ってはリリースしていたカルナが、中々に傷つくことを言いながらカニと一匹のフグを入れたバケツを持って何処かへ歩いていく。

カルナからしてみれば、仕掛けが見破られているかもしれないから釣れなくても仕様がなと言いたかったのであろうが、カルナはその言葉には一言足りない。

ある人物にそれを指摘されてから自身は直そうと努力しているが、時折カルナの言葉で騒ぎが起こったりするのだ。

「それとマスター、お前がマシユに向けているその感情は至って普通だ。そう自分を責め立てることは無い、自分が愛している者を何の躊躇もなく手放せるのはアルジュナぐらいしかオレは知らん」

「……………」

カルナの藍色を薄くした浅葱色の瞳がマスターを捉えた時、マスターはまるで自分が丸裸にされた様な感覚に陥った。躊躇もなく自分の心の最奥をえぐり出されたマスターは反論しようにも口を魚のように開け閉めするだけで、空気が言葉の代わりとなつ

て薄く細く音を鳴らし口から出ていくだけである。

「お前は彼女から向けられる特別な感情を自分自身へと向けた憎悪で塗り替えているよ
うだが、太陽は自らが照らす者を選ぶ。そこに太陽があるからではなく、照らすに値
する者を太陽が選ぶのだ。それを自分がたまたまそこに存在しているがために
太陽に照らされていると思うことはおこがましいことではないか？」

「……………」

「今度は一言足りすぎている？ ……そうか、それではさらばだ。 特別ということは
善ではない、自分と向き合ってみることだな、マスター」

ようやく絞り出されたマスターの言葉に、カルナはなぜだか嬉しそうな顔をする。そ
のままマスターに背を向けそのまま歩いて帰ってしまった。

そのすれ違いでマシユがコーヒーの缶を抱えてマスターの元へと戻ってくる。

「すみません遅くなりました。 皆さんの分も買ってきたのですが……どうも帰ってし
まわれたようですね。 ……先輩？ 顔が真っ青ですよ、どうかされたのですか？」

「……………！」

不安げな表情をするマシユに、慌てて笑顔を見せてマシユから暖かいコーヒーを受け
取るマスター。 受け取る際にそっと触れるマシユのすべやかな指の感触でさえマス
ターの心を優しく抉るには十分であった。 夕日が海へと飲まれていき黄昏は徐々に

夜へと姿を変えていく。港に居るのは二人だけであり、暖かいはずの春の風が冷たい心枯らす風となつて二人を包む。

「……どこか痛むのですか？ やはり帰つてダ・ヴィンチちゃんからメデイカルチェックを受けた方が……」

「……」

「しかし、後になつて大事になつては……先輩は大事な私のマスターなんですから健康状態は」

「……っ！」

「えっ……」

大声が港に響く、マスターは目の前で目を丸くしているマシユを見て自分が何をやってたか自覚すると、更に顔を真っ青にしてマシユに謝り始める。

魚が釣れなくて、初めてのマシユに負けるのが悔しくて、というか餌食われるんじゃないかな。と自分でもわからない本心をひた隠しにしながら、釣りのことを言い訳しながら両手を合わせて頭を下げ続け、何とかマシユに許してもらおうとする。

対するマシユはその姿にらしくないと違和感を感じていたが、信頼する自分の先輩でもそういうことはあるだろうと無理矢理納得してマシユからもマスターに頭を下げた。

「い、いえ。私も先輩の気知らずに……すいません」

「!」

お互いの謝り合戦が際限なく繰り返し、このまま謝罪の言葉と下がる頭と共に日も沈むと思われた、顔を上げたマシユに映ったマスターが海に下げていた竿の糸が何かに引っ張られる光景を見て不意に中断される。

「せ、先輩! かかってますヒットしています!」

「!」

その竿の曲がり具合を見るにかなりの大物、この日最後のラストチャンスを逃すまいと竿を引くが、獲物も負けじとマスターの体ごと持つていくように引っ張ってく。

「せ、先輩! お手伝いします!」

「!?!」

その様子にマシユも居ても立つても居られずにマスターの後ろから竿を握って一緒に釣り上げようと引いていく。後ろから感じる柔らかい二つの感触にある意味マスターも立つていられなくなりそうになるが、そこは男の意地として我慢しそのままひっぱっていく。

「ah ……」

さすがの魚のほうも二人がかりの力に抵抗できないのか少しづつ竿に引かれ、リールにまかれて少しずつ陸へと近づいていく。このままいけば大物をフィッシュを出来

るであろうことは確実であった。

「a h _____ !」

「先輩、何か言いましたか！」

「_____ ?」

すると海の方から歌声の様な、叫びの様な声がマシユの耳に微弱な振動として入ってきて思わずマスターに確認を取るがマスターは前の力と後ろのマシユマロとの戦いにそれどころではなく、マスターの声でも無いことが分かる。

「A h _____ !!」

「先輩、なんだか嫌な予感が」

「_____ !?!?」

だがその声は魚が釣られようとするにつれて大きくなってきており、不気味に思ったマシユはマスターに中止の進言をしようとするが時すでに遅く最後の力を振り、思いつきりと竿を引つ張り上げる。

そしてそれは顕現した。

「これは……いやこの人はっ……！」

マシユが驚きの声を上げる。それは魚ではない、ましてや人間でもない。人間の様な長い髪と美しい肌と肌理やかな四肢を持っていてもその頭についている角が人間

いない清姫はマスターへと抱き着くので生々しい感触がマスターに伝わり、いろんな意味でマスターはピンチに陥る。しかもマシユがくっ付いたままなので……

「まさかカルデアから泳いできたのですか!？」 此処まで何キロあると……」

「そんなの愛と比べれば何の障害でもありません!」

「愛を万能の言葉にしないでください!」

「……………」

頼むから自分を挟んで会話しないでとマスターの声が切なく風に吹かれて消える。この状況では清姫はマスターの家に泊まる事になりまたマスターとマシユが家の嘘を駆逐する作業が始まる。マスターの両親は清姫が嘘が大の苦手だというとなかなか明も求めずに只従ってくれるのだが、問題はマスターの妹である。この前はいなかったから良かったのだが、その素直ではない性格は清姫との相性は最悪であった。

マスターはこれから起きようとしている災害と、これから起きようしているマスターの一部を抑え、ただ空を仰ぎ見る。薄く見えてきたオリオン座から「ガンバ!」と一筋の流星が流れた。他人事みたいに言いやがって。

—————
マスターの明日はどっちだ。

風邪とローンなレンジャーとアルターエゴ。

「先輩？ 起きていますか？ もうそろそろ朝食の時間ですが……」

此処は人理継続保障機関カルデア、世界を救つても亜種特異点の出現によりカルデアのマスターが家でくつろげるのはまだまだ先の事の様であった。

それでも、カルデアでの日々は彼にとつての日常へと化している。少しぐらいは彼の支えになろうとマシユはマスターに世話を焼き、今朝もカルデアでの日課であるモニングコールをしようとマスターの部屋の前で呼び出し鈴を鳴らしていた。

熟年夫婦かとクフリーンから突っ込まれてはいたが、マシユにとつては大事な日常の一つ。サボるなんて有り得ない……

「先輩？ せんぱーい？ 入りますよー？」

のだが、肝心のマスターが何時まで経つても起きてこない。こういう場合はレムレベルが最大値の時か、他のサーヴァントがマスターの部屋に入り込んでいるかの二つであったため、マシユは深呼吸をしてマスターの部屋へと入っていく。前者だった場合は起こすのに時間がかかり、後者の場合はサーヴァントの対応にさらに時間がかか

るからである、マシユは気合を入れた。

「せんぱーい！ 早くしないと朝食の時間に！ ……あれ？ 起きてたんですね」

「――」

マシユが部屋に入った時に目に入ったのは、ふらふらと服を着替えようとしているマスターであつた。マスターはいつもの様に笑顔でマシユに朝の挨拶をするがどうもどこかが可笑しい、どうも目の焦点が合っていないようだし、マシユが話しかけてもどこかの空である。心配になつてマシユがマスターに近づくと、その顔がいつもより真つ赤になつている。

「先輩……？ 大丈夫ですか？ どこか体調でも……」

「――……」

「きやつ……!? 先輩大丈夫ですか!?!」

その赤くなつている額にマシユが手を伸ばすと、その手を交わすようにマスターはマシユへと倒れ込んでしまう。息が荒く、何時ものマスターよりもずいぶんと重く感じる。マシユが額に手を当ててみると、その熱は平常時よりもずいぶん高いようであつた。

「これは……は、早く誰かに伝えないと……!」

「旦那様？ マシユさん？ 何時まで経つても食堂にいらつしや……」

とその時、二人が遅いからであろうか心配して部屋へと入ってきた清姫がマシユ達を見て絶句する。マスターが倒れているからではない。いやそれもあつたが、マスターの恰好が下着だけの恰好であり、そのマスターをマシユが抱き締めているという一見すると今にもお楽しみの中の光景だったからである。

朝一のこの光景はさすがの清姫にも大打撃であつた。

「ああ、清姫さん丁度良かった。先輩が……清姫さん？」

「は……は……」

「は……？」

「はれんちなー……!!!」

早朝のカルデアに少女の叫びが木霊した。

静かに眠るマスターを見て緋色の目が穏やかに細まる。手袋を付けた指でマスターを起こさないように静かにその額へと触れると、身をひるがえしてマスターに背を向ける。

銀のように美しく生糸のように滑らかな髪が揺れ、軍靴の足跡だけが部屋の中に響いていた。

彼女はナイチンゲール、クリミア戦争に従軍し、兵士からはクリミアの天使、権力者からは小陸軍省とまで言われたその人はその身全てを人を救うために費やした近代看護教育の母とも言われる貴人である。

その性格は患者の為ならば決して譲らず、決して妥協しない、鋼鉄の衣を着た天使と言うべきものであり、その性格はカルデアに召喚されてからもいかなく発揮されていた。

「過労による風邪ですね。精神、肉体の疲れによつて体の免疫機能が著しく低下したのですよう」

「過労、ですか……」

叫ぶ清姫に慌てて事情を説明した後、マシユ達はマスターを医務室へと運んでいた。常駐しているナイチンゲールがマスターをベットへと運び、氷水の入ったビニール袋をタオルの上から頭に乗せて優しくその頭を撫でると、少しばかり落ち着いたようですのまま穏やかな寝息を立てはじめた。

その姿に少しばかり微笑んだ後、ナイチンゲールはその後相変わらずの鋭く厳しい目で別室にいるマシユ達に説明を始めていた。

「ああ、おいたわしや旦那様……こここのカルデアは右を向いても左を向いても問題児ばかり……日々対応に追われる旦那様に限界が来るのは当たり前だったので……」

「……」

「……」

「なんですか？」

マシユからは困惑した、ナイチンゲールからは呆れを含んだ視線を向けられ純粋に顔を傾ける清姫。このカルデアの欠点は自分だけは真面だと思っている人物が多いことであろう。

「とにかく、マスターは絶対安静です。今はただの風邪ですが、衰弱している今他の病気を連れてくる可能性があります。二日、三日は安静にさせる様に」

「魔術で回復させることは出来ないのですか？ そちらの方が先輩も早く治ると思うのですが……」

「はあ？ 魔術？ そんな得体の知れない物で患者を治せと？」

ナイチンゲールが此処にいるのもその魔術のおかげではあるのだが、この英霊の状態であってもナイチンゲールは魔術と言うものを信用していない。人を癒すのは魔術より人による純粋な医術である、というのがナイチンゲールの主張であった。

だがマスターも何時緊急事態が舞い込むか分からない体である、早く治るならばそちらの方が良いと清姫もマシユに賛成するがナイチンゲールは断固として首を縦に振らない。

「人間で最も尊重するべきものは何か、変えの利かない物は何か、それは心です！ いいですか、腕が無くなれば義手があるでしょう、足が無くなれば義足があるでしょう。だが腕を無くしたという心の傷は治る物ではありません。貴方たちが言う魔術でマスターの病気が一瞬で治ったとしても、心の疲れは一瞬では治ることは無い。肉体が精神を癒す、確かにそれも一理ある。ですが精神こそが肉体を治すものなのだとは強く主張します！ マスターは療養すべきです！ いえ、させます！ 例えマスターが死ぬことになろうとも！」

「わ、分かりました！ 分かりましたから落ち着いてくださいー！」

ナイチンゲールの目が燃え上がり赤に染まると同時に、言葉の端々に興奮の色が見え、右手にメスを持ち始めたので堪らずマシユ達の方が首を縦に振ることになった。

因みにナイチンゲールのクラスはバーサーカー、清姫と同じである。なので基本的には人の話をあまり聞かない。

「よろしい、それではマスターには最低でも四日は療養させてもらいます。良いですね？」

「あの、三日なのでは……」

「なにか？」

「い、いえ……なんでもありません……」

こうしてマスターの臨時入院が決まった。

マスターが風邪を引いたという事実は、マスターが病に倒れたとやや誇張的な表現も加わってカルデア中に広がることになった。

その反応もまた三者三様であり、ある者は心配してお見舞いに行き、ある者は風邪を引けたのかと驚いて、ある者は一笑すると普段通りの生活をしていった。

中でもジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイは何処をどう聞き間違えたのかマスターの余命が三日と聞いてわんわんと泣きながらマスターの病室へと飛び込んできて、マスターがあやして一日一緒に寝るまで病室を離れようとはしなかった。

基本マスターへの面会はフリーであつたが、ナイチンゲールにより規定時間以外の面会——リリイはマスターの強い要望により例外——またはマスターの療養の障害となる人物の入室は禁止されていたため、夜中に忍び込もうとするサーヴァントには遠慮なくナイチンゲールの銃が火を噴くことになった。

マスターの方も一人の時間が少なかったため、病室に一人つきりと言うのは少しだけ寂しい思いをしていたが、トレーニングもなく悩み相談室もなく、ただ一人で本でも読

みながら大人しく過ごすという静かな時間はカルデアに来てからなかった一人だけの時間という物を思い出させ、マスターを大いにリラックスさせた。

何より朝起きたらいつの間にか誰かが自分の隣で寝ているという恐怖を感じなくて良いということがある意味一番マスターをリラックスさせた。

そうしてマスターの熱も下がって、あと二日もすればナイチンゲールからの退院の許可も得られるというところで、問題が起こった。

まず、海賊たちの酒の量が普段は戒めるマスターがいないことをいいことに膨大に増え、次にサーヴァント同士の喧嘩を仲裁するマスターがいないため腕試しと言う名のインド同士の喧嘩が勃発しトレーニングルームが半壊、さらにランサーであるアルトリアの愛馬「ダウン・スタリオン」が謎の失踪。

止めにそれを解決しようとナイチンゲールがいない間にマスターが病室を抜け出して熱がぶり返し、その夜「料理でハートをキャッチ！」と意気込んだ何者かがマスターにおかゆと言う名の赤黒い何かをマスターに差し入れ、マスターがそれをパエリアか何かと勘違いして食して、緊急治療室へと運ばれた。

これにはナイチンゲールも激怒し、面会を一切禁じた上に自らがマスターを二十四時間監視して熱が下がるまで半ば幽閉状態にしたため、いよいよ問題を解決する者がいなくなり事態はサーヴァントたち自身で解決することを強いられることになった。

正にカルデアは荒野のウエスタン。ルーラー達が新撰組の面々を雇ってこれ以上騒ぎを起こさないためのカルデア警察を作ったが、どっかの教授が嬉々として悪のプランニングをしているためそう簡単に成果を上げることが出来ていなかった。

「いやあ、どこもかしこもどつたんばつたん大騒ぎ。あれだね、マスターの存在はある意味サーヴァントたちのストレスの発散にもなっていたんだね」

「……なぜ人の部屋に我が物顔で居座っているのかね？」

広くもなく狭くもない一人が生活するには十分な空間の部屋の中に動物の毛皮や、干し肉、香りの強い薬草などが細々とぶら下がっている。他の近代的な部屋と違い部屋の主によってまるで先住民が暮らしているかのように生活空間が整えられており、部屋の中央に置かれたIHヒーターに乗せられた鍋からは独特な匂いと共に煮立つ音がポコポと小気味良く鳴っていた。

背の高く、黒い肌をした男がその鍋をお玉でかき混ぜ、少しだけ皿に乗せて味見をすると、一つ頷いてからぶら下げてあった一つの薬草をその鍋の中に入れてかき混ぜていく。

「なんでつて……何を作っているか気になってね。中々美味しそうじゃないか。あ

まり食事なんてしないからよく分からないけど」

その後ろから花のように美しく、夢の中の霧のように儂げな男が面白そうに声をかける。恰好、態度、仕草、どれをとつても奇妙という印象をぬぐえないが一番奇妙なのはその足元から絶えず花が咲き乱れていることである。

この男の名はマーリン。言わずと知れたアーサー王伝説の中に出てくる魔術師であり、キングズメーカー。そして大体の女性からの評判が悪い男であった。

「いや、実を言うとダウン・スタリオンが居なくなつたつて珍しくアルトリアから相談されたから、探すことにしたんだけど。途中で食事に誘つた女性職員に見つかつてしまつてね。慌てて逃げてきた先が此処だつたというわけさ」

「……そのまま食事に行けばよかつたのでは？　と言うか食事はしないのではなかつたのか？」

「別にできないつてわけじゃないからね、女性を誘う時ぐらいはするさ。でも丁度その女性は二人組でね、しかも一人は昨日、もう一人は一昨日食事に誘つたばかりで、さらに丁度良く二人とも『昨夜はとても楽しかつたです』なんて言つてしまうものだから。

いやあ、あははは」

「……」

「そんなチベツトスナギツネみたいな顔しないでくれたまえよ。それにジエロニモ君

だつて確か八人ぐらいと結婚してたよね？」

「アパッチは一夫多妻が認められている。軽薄な女性好きと一緒にしないでもらえるかな？」

呆れる様に言いながら、ジェロニモと呼ばれた男は、鍋をかき混ぜてIHヒーターの電源を落とすと鍋に蓋をした。

ジェロニモ、アメリカでのアパッチ戦争と呼ばれる凄惨を極めた戦いにおいて先住民として戦い抜いた男。敵にとって守護聖人の名前に代わるほどの恐怖を相手に植え付けた、アパッチ族の戦士である。だがその口伝で伝わるような苛烈な性格でも、残忍な性格でもなく、ジェロニモは相手に恐怖よりも安心の印象を持たせるほど理知的で穏やかな性格であつた。

「しかしなんだいそれ？ お粥っほいけど」

「半分当たりだ、マスターの国にあるお粥という病人に効く料理と、アパッチに伝わる薬草を使ったスープを合わせたものだ。これならば食にトラウマを負ったマスターでも食べられるだろう」

「なるほどね、君がナイチンゲールに何か話していたと思つたらそういうことか。

まあ僕も食べた瞬間エーテルを放出し続ける料理なんて見たこともなかったしね」

ジェロニモもマーリンもその光景を思い出したのか少しだけ真顔になる。それほ

ど凄まじい光景だったのだ。

「そういうことだ、さて、冷めないうちに持っていくとしよう。ついてくるかね?」

「そうだね、ダウン・スタリオンを探すついでにナイチンゲールを食事にでも誘ってみるかな」

「それは無理……ん?」

それでは移動しようとジエロニモが鍋を持ち上げた時、廊下からどこかの職員だろうか大声を上げながら走ってくる音が聞こえてきた。どうも異様に焦っているらしく誰彼構わず助けを求めているようで、ほつとくわけにも行かないジエロニモ達は鍋を置いて、職員に声をかける様にした。

「落ち着きたまえ、どうしたんだ一体?」

「ああよかった! 大変なんです! 食堂でオリオンさんが……!」

「オリオン? あの熊の様な物体がどうかしたのかね?」

いつもの様にオリオンが女性にちよつかいかけてアルテミスから天罰を受けているのであれば、それは平常運転という物であり職員がそこまで焦る必要はないはずである。となると、オリオンの身に洒落にならない危険が及んでいる可能性があるが、大体アルテミスからチョコにされたりなどあまり洒落にならない扱いを受けているのでジエロニモはいまいち想像が出来ない。

「オリオンさんが……」

だが目の前の職員は真っ青な顔でジェロニモとマーリンにその大事件を伝えた。

「パッションリップちゃんの谷間に落ちましたッ!!」

パッションリップ、最近このカルデアに入ったサーヴァントである。クラスはアルターエゴと言う特殊なエクストラクラスであり、化け物ともとれるような巨大な金属製の手を持つ女の子である。

と言ってもその手を含めても相手から守ってあげたいと思わせるような庇護欲を掻き立てる可憐で儂げな少女であり、性格も——本人いわく成長したらしい——大人しく可愛らしい良い子である。

そして何と言ってもその胸。カルデアには豊満な胸を持つ女性は多くいるが、パッションリップの胸は正に規格外であり、すれ違った男どころか女でさえ皆その胸を凝視してしまいうぐらいである。

こういう要素もあつてパッションリップは召喚されてから、本人からして「こんなにしてもらつて良いのでしょうか」と思うくらいに甘えに甘やかされ、召喚されて数日で

男性たちの親衛隊が出来上がってしまいうぐらいであった。

そんな彼女の胸にオリオンが潜り込んだ。只そう聞けばアルテミスと親衛隊が殺意をマシマシにしてくるぐらいで他の人からすれば只々羨ましい話にしか聞こえないが、これにはパッションリップのスキルである「プレストバレー」が問題となっていた。彼女のトレードマークとなっている胸には虚数空間で作られた廃棄場があり、そこには彼女が潰したデータならば無限に収納が出来る所謂パソコンで言う「ごみ箱」の様な存在となっていた。正に一度入ると這い上がることは不可能な死の谷であった。

「あわ、あわわわわ！ どうしたら、どうしたらいいんですかー!? クマさんが、胸の中に入っちゃいましたー!」

「本当に困ったわね……いえ、本来だったらそのまま放っておいていいのだけれど……女神アルテミスの恋人なわけだし……てかオリオンがあんなクマってどういうことよ……」

騒ぎを聞きつけてサーヴァントたちが食堂に集まると慌てるパッションリップと、それを見て頭を抱える一人の少女がいた。

その少女はパッションリップとは色々な意味で正反対な少女であった。スレンダーな体、氷を感じさせる冷たい視線、そして巨大な鉤爪の代わりに鉄でできた茨の様な具足。

その下半身は大胆に露出し、パッションリップと同じく道行く人々の視線を釘付けにすることは間違いない。

名をメルトリリス。パッションリップと同時期に召喚されたアルターエゴであり、パッションリップとは姉妹の様な関係であるらしい。

性格はパッションリップと違って冷淡であり、嗜虐的にさえ見える。

そんなメルトリリスであるが、マスターは彼女にどこか感じるところがあるようで率先して世話を焼いており、彼女も最初は厳しい言葉と共に拒絶していたが、最近は厳しい言葉は変わらずもまんざらでもない様子である。

「うわーん！ ダーリーン！ こうなったらとりあえず権能でも使って無理矢理その谷をこじ開け……」

「タイムム！ アルテミスちゃんタイムデース！ 下手したらここが潰れマースー！」

「そうよ何やろうとしてんの！ とりあえずやるならマアンナで転移させてから……」

「イシユタルちゃん、お姉さんそういう問題じゃないとおもうのー」

「ダーリンって……」

パッションリップの胸の前ですったもんだしている神々を見て微妙な顔をするメルトリリス。何を隠そう彼女達アルターエゴはハイ・サーヴァントと呼ばれる者であり、その体は三人の女神を混ぜ合わせて作られている。

その一柱であるアルテミスはメルトリリスを構成する女神の一人なのであるが、いざカルデアに召喚されてみたら自分の尊敬するアルテミスはだらしのない体をしたスイーツ脳。彼女の女神像は破壊されてしまった。

それでもまあ尊敬する女神なのだと、前向きに考えているのだが目の前の女神のお惚けを見てしまうと何だかやりきれない。好きなアイドルがいつの間にか結婚していたような気分である。

「ふふ……何なんでしょうねこの気持ち……バカップルつて……」

死んだような目でアルテミスを見ているメルトリリスの肩に手が置かれる、ふと下を見てみると獣耳をした狩人が無言で同じく死んだような目でアルテミスを見ている。

メルトリリスはその姿を見て自分と同じアルテミスの信望者^{ファン}だと気付くと、そつと握手を交わした。言葉は無くとも心が通じ合う、そこにはたしかに友情が存在していた。

「まったく、やってる場合かね……」

「いやあ、面白いことになってるね!」

とそんな中にジェロニモとマーリンも食堂に入ってくる。他にも続々とサーヴァントたちが食堂に集まっていた。

「やれやれ、誰かマスターを呼びにいった者は？」

パッションリップの脱出不可のプレストバレーであるが、本人の努力によってマスターだけは例外的にそこから出し入れできるようになっておりこういった場合はマスターに頼るのが一番早い——傍から見れば少女の胸に手を突っ込む男子という非常に不味い絵柄になるのだが。

「行つたけど、ナイチンゲールから通して貰えなかつたわ。『今マスターは謎の物体を食してしまい高熱を出しています、話を聞く限り自業自得なのでですから数日間そのままでも問題ないでしょう』ですつて。子イヌつたらなんでそんなもの食べちゃつたのかしら？」

「ソウデスネーナンデデシヨウネー。まったく何でマスターがいないときに限つて飛び込みますかねあのクマは」

健康たつぷりのお粥を上げたのになんでかしらと悩むエリザベートの後ろで落ち込んで面倒くさいから指摘するな、とロビンフッドがジェスチャーで周りに伝える。

兎にも角にも、何とかして助けださなければならぬ。ぶつちやけ放つておいていいのならマスターが完治するまで放置したいのだが、そうすると月の女神がどんなトラブルを起こすか分からない。

ああ見えても立派な神様、しかも我が道を行くでなく、我が道を作る邪魔したら潰す

系の神様である。ある意味導火線に火が付いたダイナマイトよりも危険なのだ。

「ロープを垂らすとか？」

「ダメだろう、入ることは出来ても出ることは不可能なのだから」

「キヤスター勢が空間転移でもして連れ出すつてのは？」

「ダメね、あつちは虚数空間なのだから転移しようと思つたらこつちが吸い込まれるわ」

「こんなに大きい胸をしているのが悪いのだわ！ 牛だつてこんなに大きくないもの！

おもちゃ箱をひっくり返すように、この子もひっくり返してみるのはどうかしら！」

「はわあ！ 胸で遊ばないでください……」

「ああ、駄目ですよナーサリー！ パッションリップさんが困っているじゃないですか

！ それにパッションリップさんの体重は一tです！ そんなの持ち上げるだけで一

苦労です！」

「うう……ひどい……」

ああでもない、こうでもないとなーヴアントたちが議論を重ねるがどうも良い案が浮かんでこない。やはりこのまま放置して、アルテミスが何かをやらかさなないように監視するのが良いというアンの案で決定しようとした時、勢いよく食堂のドアが開かれたと思うと一人の少年が馬に乗って乱入してきた。

「ハイヨー！ シルバー！」

白い馬に乗ったその少年は、黒いサンタムマスクを着けており、なんだか袋に入れた物体を片手で持ちながら得意そうに面々を見渡す。

「やあ、皆。　どうやらお困りの様だね？　いくら歴史に名を残す英雄たちでもこういうった問題には頭を抱えるらしい」

「侵略者の小僧……何やってる？　あとなんだそのマスクと馬は？」

「あつ!?　ダウン・スタリオン!?　なんでビリーに乗られているのです!？」

ランサーの方のアルトリアが声を上げる、確かに良く見てみると覆面の少年が乗っている馬はランサーアルトリアがいつも乗っている愛馬のダウン・スタリオンである。

「ビリーじゃない！　僕はアウトロー仮面！　お宝の匂いを嗅ぎつけ、参上した次第さ！　因みにこの馬は主人達の日々の食費に悩んでいた所に僕が食券をちらつかせて雇った！」

「スタリオン!？」

「いや、もう誰がどう見ても侵略者の小僧だろう。　変なマスク付けた変なテンションの侵略者の小僧だ」

「違うと言っているだろうトント！　声が似ているだけだ！　ドレイクかもしれないだろう！」

「なーにいつてんだ！　BBAがそんなぺちやばいなわけねーだろうが！　BBAは

なあ、もつと背が小さくて余計な脂肪が付きまくりなんだよバー」

銃声が響いて、誰かがダストシュートに入れられた音がした。

「とにかく、君たちは解決手段を探していて、そして僕は持っている。 どうだい、取引しないかい？」

「取引……?」

「これを見てみなよ」

謎の少年が抱えていた袋を取ると、なんと中からはマスターが出てきた。 なんだか白目をむいて泡を吹いて意識が無いがとにかくこの状況を打開するマスターであった。

「マスター!? どうやってナイチンゲールの監視から連れ出してきたのだ!」

「簡単さ、この名馬シルバーの突進力さえあれば薄い壁の一枚や二枚……」

「つまり隣の部屋から壁を突き破って入ったと……?」

返事の代わりに口角を上げて得意そうな表情を作る謎の少年。 部屋の中の何人かが青ざめ、そそくさと食堂を後にする。 それはつまりナイチンゲールの所から無理矢

理患者を連れ出したということであり、その怒りたるや想像するだけで近くのラーマの背筋に冷たい物が走る。

「ふふ、正直に白状すると今この時も看護士が迫ってきているという時点でギャレットから追われるよりも怖いから早く済ませたいんだけどいいかな? 報酬は食堂バイキ

ング無料券十三枚で」

「いいからさっさとクマを取り出してここから去れ！ お前はカルデアを壊滅させるつもりかね!？」

ジェロニモには珍しい焦った表情で、謎の少年を急かすと少年ははいはいと返事を返すと、馬から降りて、なんとマスターを頭からパッションリップの谷間へと突っ込んでいった。

「ひゃあああああ!?!」

「いや何やってんだアンタ!?!」

まさかの行動に思わずパッションリップが叫ぶ横で同じく思わず突っ込みを入れるロビン。そのままマスターはどんどんと谷間に沈んでいって上半身が谷間に埋まってしまっている。

非常に名状しがたい光景に、キャスターの方のジルが何かを思い出したかのように顎をさすって感傷に浸り始めた。

「マスターなら出入りできるんでしょ？ なら、マスターを突っ込んであつちから掴んでもらうのを待つのか!」

「いや得意そうな顔して行ってるけどそれ只の力技じゃねえか！ うわ、これ大丈夫なのか……!」

もはや凄惨な光景には慣れていくはずのサーヴァントたちでもドン引きの光景である。そんな中マスターの体が陸に打ち上げられた魚の様に跳ねるのを見逃さず捉えた謎の少年は、マスターの足を掴むと、そのまま勢いよくパッションリップの谷間から引き抜いた。

「うひゃあああああん?！」

「うわあ……こんなマハトマな光景の映画何処かで見たわね……確かエイリア……」

「おい! 大丈夫かね、君!」

謎の少年がマスターを引き抜いてもマスターの痙攣が収まらないため慌ててジエロニモがマスターの近くへとよると、マスターの顔面になんだか茶色の物体が張り付いていた。どうやらそれがマスターの呼吸を阻害していたらしい。

「ダーリン! よかったー! もう何処にも行かせたりしないんだから!」

「お、おう……心配かけたな……あとその言葉なんか怖いから止めて……」

その物体はオリオンであった。辛うじてしぶとく生きていたらしく、若干二名の死んだ目で見られながらアルテミスは半泣きになりながらオリオンを抱きしめる。普段の行動がどうあれ神話で語られるカップル、なんだかんだでお似合いであった。

「それはそれとしてお仕置きね」

「戻してー! 戻してくれー!! 死ぬときはでっかいおっぱいに埋もれて死にむぎゆう

！」

改めて止めを刺されるオリオンを横目に見ながら、謎の少年は満足そうに微笑むと、ジェロニモに話しかける。

「さて、仕事は済んだし僕はお暇するかな。 ああ報酬はビリーの部屋によろしく。

他意は無いけどね！」

「待て！ マスターを連れて行け！ 私達に責任を負わせるつもりか！」

「ははは！ 待てと言われて待つ人はいないよ！ ハイヨーシルバー……とおっ!!」

ナイチンゲールの怒りの矛先を食堂にいるサーヴァントたちに向けて自分は悠々とバイキングでも楽しむつもりであろう謎の少年は、そのまま周りの人々に手を振ってドウン・スタリオンに合図を出す。 どうにもドウン・スタリオンは動こうとしない。

何故かと、ビリーが前を見てみるとそこには一匹の狼が唸りながらドアの前に佇んでいた。 狼王である。

「ヴルルルルルル……」

「そういうえば、この狼に料理を運んだのは何日前だ……?」

そういうえばロボに料理を運ぶのはマスターが率先してやっており、そして今回のこの騒ぎである、誰もが料理を運ぶのを忘れていた。 皆がゆつくりと謎の少年から後ずさりする。

そんな口ボは床に転がっているマスターを見て、更に唸りを上げると、謎の少年を見る。どうやら目の前のドウン・スタリオンと共に獲物として見えているらしく、謎の少年は口を引くつかせるしかない。

「ビリー・ザ・キッドオオオオ！ 何処にいますか！ 重体の患者を連れ出すとは、私は貴方を殺してもマスターを病室に戻します！」

さらに、もう一人ある意味狼より恐ろしい声が廊下から聞こえてくる。完全に怒り心頭であり、時々銃声も聞こえてくる。

「どうやら、僕達ってピンチかな……？」

若干震えた声で謎の少年はジェロニモへと顔を向ける。ジェロニモはと言うと、一人ダストシュートに入ろうとしている途中であり、クールな表情が途切れようとしている少年に笑いかける。

「俺達？ 達とは誰の事かね？ それではさらばだキモサベ」

皮肉たっぷりなようにとうとうとジェロニモはダストシュートの中へと消えていく。それを皮きりに他のサーヴァントたちも緊急離脱していき、着々と食堂から人が消えていく。

「あー……なるほど、映画みたいにはいかないってわけだね……」

謎の少年、ビリーはマスクを取ると、目の前で唸る狼に向かってぎこちない笑顔を向

ける。いつの間にか乗っていたはずのダウン・スタリオンも消えていた。どうやらアルトリアが呼び寄せたらしい。

怒れる狼と怒れる看護婦が迫ってくる。　どうやらバイキングの夢は潰れたらしかかった。

「はあ……嘘だわ……女神アルテミスがああだつていうなら私もいつの日かバカツプルになるつていうのかしら……」

それから一週間が過ぎマスターも完治して退院した後、メルトリリスは一人部屋で頭を抱えていた。悩みの種はアルテミスの事であった、自分の尊敬していた女神が外見も性格も想像の540。も違ったシヨックは未だに癒えそうになかった。

それもそうだ、自分よりも前に来た獣耳の狩人もいまだに癒えていないのだから。そう思つてメルトリリスは溜息をつく、因みにその狩人とは時々「信仰を頑張つていこうの会」と言う名目で共に食事をして励まし合っている。

「人に臆面もなくダーリンだなんて……いえ相手はクマだつたけど……ダーリン……」

ダーリンと言う言葉を呟きながら繰り返すメルトリリス。少しだけ憧れていないという嘘になった、自分の体にアルテミスが組み込まれているからかは分からないが何だか素敵な響きに聞こえるのだ。

無論一度も呼んだことはない、これからも呼ぶこともないだろう。しかしああやって無邪気に人に好意を伝えられるというのは素直に羨ましいとメルトリリスは思う。

「ダーリン……ダーリン……」

鏡の前で笑顔を作って呟いてみる、笑えるほどに似合っていないとメルトリリスは自嘲気味な笑みを鏡の自分に向ける。

「やっぱり相手がいないと駄目ね……いやいやいや、何を考えているのよ馬鹿らしい」

ふと脳裏にどこかのしつこいお馬鹿さんスの顔を思い出し必死に有り得ないと首を振る。

「あんな人に向かって言うぐらいだったらどつかのトリ頭に言った方がマシよまったく……まったく……」

だが、まあ、案山子か何かと思つて練習してみるもいいかもしれない、とメルトリリスは心の中で思うと少しだけ想像する。

——自分の後ろにはいつもみたいの間抜けな顔で笑っているお馬鹿さん、私はゆつくりとターンして女神アルテミスがしているように、出来るだけ可愛く笑つて、心まで溶

かすように甘い声で……

「ダーリンー！」

「……………」

と振り返ったところでマスターの顔と鉢合わせた。手にはメディアなどから貰ってきたであろうドールマニア向けの雑誌を持っており、そういえば強請ったんだなと冷静にメルトリリスは思うが、数瞬して顔が沸騰するような感覚に襲われた。それはつまり目の前のマスターがまぎれもなく本物と言うことであり……

「あ、あ……その、これは、そう。あれなのよ、そう」

最高峰の演算処理能力を持つメルトリリスの頭がパニックになり、もはや言葉が出てこない、恥ずかしい、顔が熱い。完全にオカンから痴態を見られた思春期の少女である、何でもないと澄ました笑顔を作ろうとするが口がヒクついて上手く行っていない。

「……………」

一方のマスターもメルトリリスをフォローしようと言葉を選んでいるらしく、色々と言いよどみながらも脳をフル回転し、最適解を出して、とりあえず笑顔でこう言うことにした。

「——は、ハニー……？」

「…………っ！ ノックぐらいしなさい、このあんぽんたんーっ！！」

部屋の中で何かが衝突する音が響き、マスターがドアを突き破って大量の水と共に廊下へ飛んで行った。

雖もみ回転する体で風を感じながら、また入院かなあ、でも笑顔は可愛かったなあ、と思いつつながらマスターは静かに意識を手放すのだった。

因みに今度は全治一週間であったが、打撲痕は無く、原因は水に濡れて風邪を引いたことであつた。

——マスターの明日はどっちだ。

女子会、男子会。 似た物同士。

「やっぱJKと言えば女子会っしょー！」

ある日突然そう言いだしたのは、この頃カルデアに召喚された一人のサーヴァントであった。美しい山吹色の髪をなびかせた古き日本の小町を思わせる美少女は、その頭の天辺と腰の先にそれぞれ狐の耳と尻尾が生えている。

服装はと言うとこちらは古き日本と言うよりかはちよつと古いJKの恰好じょしこうせつをしており、性格もまたそれに準じる様に活発で人付き合いの良い、悪く言えば馴れ馴れしく良く言えば面倒見の良い性格をしていた。

その名は鈴鹿御前、「鈴鹿の草子」や「田村の草子」等々で登場する女丈夫であり、またの名を立烏帽子。本来の性格はJKにほど遠く真面目でアンニュイな委員長らしいのだが、何があつたかギャルギャルな女子高生を本気で演じている。因みに彼女を象徴する立烏帽子は滅多に付けず、簪を専らつけているのだが本人からすると「自分を何を着てもそれが『立烏帽子』スタイル」だと開き直って主張している。

そんな鈴鹿御前がいるのは、人理継続保障機関カルデアにある食堂である。

料理長オカンのエミヤ尽力の元、安い、旨い、早いの三拍子がそろつたこの食堂は職員たち

の評判がすこぶる良く、昼夜人間サーヴァント問わず大いに賑わっていた。

そんなカルデアの食堂は今日はいつもの様子とは違いなんだか華々しい。テーブルに並べられた夕食の数々はバイキング式で、どれもヘルシーながら味も良く、オシャレに盛り付けられており、中には芸術品の様なお菓子まで置かれている。

席に座っているのは皆女性であり、職員やサーヴァントたちが垣根なしに談笑しながら中にはお酒を嗜んでいる物や嗜み過ぎて多少酔っぱらいと化している者もいた。

右を見ても美女、左を見ても美少女と桃源郷のような光景にフェルグスなどが突入しても可笑しくなかったが、今日は食堂に男子が入ろうとすると結界により一日眠ってしまうほどの電流が体に走る様になっており、黒髭とダビデがその餌食になっていた。

正に男子禁制の乙女の花園、女性の女性による女性のための会、略して女子会である。

女子会を発案したのは鈴鹿御前であった。今どきのJKは女子会と合コンだと、唸るマスターの協力を無理矢理取り付け、ダ・ヴィンチちゃんから許可証を貰い、エミヤに許可を貰い、カルデア中の女子たちを集めて何とその日に開幕を宣言、宴は知れど「女子会」なんて知らないサーヴァントや日々の激務から解放された職員の耳に入り、鈴鹿御前の想定していた人数の約二倍の人数が集まり女子会ならぬ「女子宴」が此処に開催を宣言されたのであった。――因みに合コンはメンバーによってはカルデアが壊滅しかねるのでまた後日となった――

「それで、マシユちゃんはマスターとはどんな感じなのさー」

「それは私も気になるわー、見ててほっこりするもの貴女達」

「どんな感じと言われましても……いつも通りで特に変わったことは……」

その中でマシユは、お酒でいい感じに仕上がっているブーディカとマタ・ハリから絡まれていた。 普段大人な二人であるが、誰かの恋の話になるとそれはもうお見合いを進めてくるおばさんのようにちよっかいをかけてくる。 更に今日はお酒も入っているため、更にねちっこくマシユに絡んでいる。

「ちがーう、そうじゃなくて。 進展したの？ あんなに一緒にいるんだからもうそろ

そろ一歩先を踏み出したっていいんじゃないの？」

「それ私も気になるわ！ 実際の所どうなっちゃってるのかしらー」

「一歩と言われましても……」

その話を聞きつけたのか、三人目のお節介焼きであるアイリスフィールがとてとと近づいてくる。 遠くではイリヤとクロクが溜息をついており、どうやら先ほどまで大いに絡まれていたようであった。

「好きなんですよ？ あの子の事！」

「す、好き……確かに尊敬していますし、大事な人だと思つていますが……私の様な地味

な人間が……」

マシユは「好き」という気持ちをあまり自覚できていなかった。人理が救われたあの日、マシユの心の庭に一粒愛と言う花が芽を出してきたのは彼女自身が自覚しているほどに事実であるが、それを育てる恋の太陽からの日差しが足りなかった。

そもそもマシユは自分を過小評価する癖があつた。周りが大人な母性の化身のような女性だったり、その美貌を武器にしていたアサシンや、世界三大美人の一人などがいたらそれは自己の評価も低くなるだろうが、マシユもまた何処に出ても恥ずかしくない立派な美少女であり、可愛らしい乙女なのだ。

「もう、マシユちゃんつたら貴女も十分可愛らしいのよ？ まったくこんなかわいい子を不安にさせるなんてあの子もなんだかんだで罪作りねー……」

「まあお姉さんがマスターに意識的にアプローチしろつて言つても無理だろうし……」
「それは……まあ、ねえ……」

結局のところマシユが一步前進するより、マスターがマシユに一步近寄ればいい話なのであるが、女性に関しては酒吞童子曰く「小僧と同じか下手したらそれ以下のおぼこ」なマスターにはある意味世界を救うより無理難題なのであつた。

の割には何処かでサーヴァントを召喚してはフラグを引つ提げてくる。相手に意識だけさせておいて自分だけ無意識とはキープをしまくる恋多きやり手の女子高生み

たいなマスターであるが、面白がつて異性へのテクニクを教えている男サーヴァントたちにも原因はある。無駄に覚えが良いので結構活用しているのだ。――無論性質悪く無意識に――

「じゃあもう、後ろからぎゅーっ！　つてやつちやえばいいじゃん！　言葉で伝えにくかつたら行動で示すしかないし！」

さらに恋バナと聞いてJKなセイバーである鈴鹿御前が首を突っ込んでくる。その後ろからは呆れ顔満点にもう一人の狐である玉藻の前Ⅱタマモが頭を抱えながらついてきていた。

「んで、更にチューでもすれば一発っしょ！」

「まあ、情熱的ねー。でもあの人も結構情熱的だったわねー……三年目の頃だったからしら？」

「へえ、アイリさんって意外に奥手だったんですねえ。旦那様と付き合つて三年目です？」

「いえ、生まれて三年目かしら？」

「リアル源氏物語!？」

玉藻が尻尾を逆立てて驚愕するその後ろで、事情を良く知らない娘二人は父親の異常性癖だと勘違いして世界の向こうにいる父親に向けて若干軽蔑の視線を向けている。

届いているか分からないが届いていたのなら風邪の一つでも引いているのかもしれない。

「偽狐はああ言ってますけど、言葉に乗せて伝えるのは大事な事ですよ？ それこそ『お前が好きだ、お前が欲しい！』みたいな事を叫びながら伝えたってマシユさんからだつたら喜んで落ちちやうと思うんです」

「そ、そんな海中武闘伝G人魚姫みたいなこと言えません！」

「何その人魚姫!？」

G人魚姫とはアンデルセン先生が提案しバベツジ先生の協力の下執筆された、旧三部作とはまるで作風が違う人魚姫である。歴代人魚姫のファンからの評判は悪かったが、サブキャラである円卓無敗などのキャラクターや熱くて王道な展開は低学年サーヴァントにも受けて徐々に人気が出始めた作品であった。

「ま、まあG人魚姫はともかく自信を持つことです。このまま下向きで何もせず過ごしていたら周りにすぐ盗られちゃいますよ？ まあ別世界の私は旦那様を無事ゲットできましたが。そこの偽狐と違って？」

「はあ？ そんなこと言うなら私にだつて月にカレシいるし！ てかここでのアンタは脳内旦那様しかいない何時かは結婚できると思つているアラサーみたいなものだし！」

「はあ!？ まだアラサーじゃありませんし！ これだからのべ別世界384,400

k mの超距離恋愛の良さが分からないJKは……それだったら貴女だって彼氏出来なくて焦ってるなんちゃってJKでしょうが！ 合コンとかほんもんの狐になって出直してくださいまし！」

「はん、言つとくけどアンタみたいなの合コンしたら酔豚に入っているパイナップル並にウザがられること間違いなし！」

「んなつ、乙女に向かつてパイナップルイン酔豚とか、なんという侮辱！ ムツキー！ あつたまきた！」

「お、お二人とも落ち着いてください！」

「えーお姉さん意外と好きだけどねパイナップル」

「そういう問題じゃありません！」

ぎやーぎやーと騒ぐ狐二匹を落ち着かせようとするマシユ。

——先輩が、私の心の中を覗いてくれれば良いのに。 それだったらこの胸を締め付ける思いを解いてくれるに違いないのに

全体宝具持ちの鈴鹿御前を羽交い絞めしながらマシユは、この場にいらない自分の先輩に思いを馳せる。 何故だか今すぐにでも会いたくなってくる。

——先輩は今何をしているのでしょうか。

「だから俺は思うのだ！ 筋肉と美女に出会う確率は比例しているよ！」

「なるほど！ 数学的ですね！ やはりすべては筋肉に帰結する！」

「ねーよ」

「その頃マスターは自らの部屋で筋肉たちに囲まれていた。右を見れば細マッチョ、左を見てもゴリマッチョ。正に筋肉の楽園、マッスル天国である。」

余りの暑苦しさに礼装でかけていた眼鏡が拭いても拭いても曇っていく。

原因は、食堂が今日だけ女性専用になつて飯のありつきに困つたサーヴァントたちがマスターの部屋に押し掛けたのが原因であつた。一人用に作つていた夕食は相手が女子会ならこつちは男子会だとマスターの部屋で勝手に宴を始めた男たちのつまみに持つて行かれ、部屋の主はおつまみを作る使用人へとランクダウン。今では一緒に

マッスル達に囲まれて酒臭い空気と共に自分で作ったおつまみをハムスターのようにかじっている。

「応、マスター！ ここにきて大分経ち、お前を慕う女もいることだ。一人や二人は抱いた頃だろうか？」

「！」

と、先ほどまでレオニダスと筋肉統一論を話していたフェルグスがマスターの肩を組んで豪快に笑いながらとんでもないことを聞いてきた。大きな手で肩を叩いてくるから若干痛い。

余りの唐突さにおつまみを嘔き出そうになりながらマスターが否定すると、その眉を八の字にしながら唸り始めた。

「……もしかして、そっち系か？ それだったら俺と……」

「！！」

更に必死にマスターは否定する。止めて熱い目で見ないで。これが冗談ではなく本当にやるのがフェルグスである、マスターはバレンタインの時に渡された部屋の鍵を未だに返せていないのだ。

「はははっ！ 冗談だとも、まあ冗談でなくても良いがな……全く勿体ない、お前だったら頼まずともあちらから絶世の美女たちが来るといふのに。自らチャンスを棒に振

るのか？」

「……………」

「頼んでも止めてくれない？ ……まあ、そうだな。じゃあマシユ嬢はどうだ？ 一夜過ぐすとはいかずとも熱い口づけなどは交わしても良い頃ではないか？」

それこそ無理だとマスターは笑う。マシユは大変可愛らしく素敵な女の子だが、何より大切な後輩であるし、傷つけたくない。

だがそのことを伝えるとフェルグスはさらに口まで八の字にして唸り始めた。

「そりゃあ傷つけるのはいかんが、恋人という物は傷つけあうものだし、愛とはその傷で出来たかさぶたのことを言ったりするのではないか？ 一回傷つけるのを覚悟して思いつき抱きしめてみたらどうだ？ きつと良い結果が」

「……………」

「いやいやマスターが自分から女性を抱きしめるとかカルデアの終わりですつて。いや比喩じゃなくてホントに」

マスターが顔を赤くして首を振ると、その後ろから右手にビールを持ちながらロビンフッドが姿を現す。このアーチャーも自他ともに認める恋の狩人であり、この間メドウーサを口説いて撃沈していた。

「こういう時は恋文ですよ旦那。一枚の紙に出来る限りの表現使って愛を伝えるつて

は辟易してきた。　　とうか周りに筋肉が密集してきてなんだか意識が朦朧として来
ていた。

　　なんだかんだで人と言うのは自分以外の恋に首を突っ込みたがる生き物である。
他人事と思つて、とマスターは心の中で思うがこれが自分ではない誰かの恋バナであつ
たならマスターも喜んで首を突っ込んでいたのは間違いなく、強く言えない。

　　マスターの恋バナをつまみに男子会はさらに筋肉密度を増していく。

　　それこそマシユがマスターの心を覗いてくれればそれで済む話なのだが、そんなこと
は出来はしない。マスターは少しだけ胸が締め付けられるような感覚に天井を見て、な
んだか無性にマシユに会いたくなつていた。

　　マシユはいま何をしているのだろうか……

　　二人の明日はどっちだ。

「待て待て、なぜ私はどっちの会にも入れないんだ!？」

一人の白百合の騎士が静まった廊下で叫ぶ。

「うーん、どつちにも異性だと判断されてるんじゃない？ 僕も出来なかったし！」

一人のセーラー服を着たピンク髪が笑いながら答えた。

「いや可笑しいだろう!? せめて体を女にしているのだから女子会には居れてもいいだろう?」

「性別がどつちでもなれるというのは不便な事だね、自分も体を男のそれにしてみても男子会は駄目だと言われたよ」

緑色の髪をした人物が興味深そうに自分の体をまさぐっていた。その胸が大きくなったり小さくなったりしている。

「いいじゃん、いいじゃん! このまま僕たちで男女会といこうよ! 似た者同士でさー!」

「いや貴方は明確に男だったはずではないか!? ちよつとまって、引つ張るな! 私は違うー!! 似ていないー!!」

引きずる音が聞こえて、三人の姿が廊下の向こうへと消えていった。白百合の騎士は若干涙声であった。

これは誰も知らない物語、性別とか特攻とかいろいろんな意味で。

——白百合の騎士の性別はどつちだ。

メガネデス。パニツクと鼻血。

魔術礼装という物は所謂「魔法使いの杖」みたいなもので、魔術師の詠唱のサポートする杖や魔術師自身を守る水銀、使用者の能力を封じるメガネまで幅広い物が存在している。

特にカルデアで作られた服型魔術礼装は魔術師そのものを補助する役目を持つ「増幅機能」と、それ自体が魔術理論を帯び、使用者の魔力を動力源として神秘を発動させる「限定機能」を上手いように練り込んだカルデア開発局自慢の一品なのであった。

これさえあれば魔術に関してはずぶの素人でロクに魔術が行使できないマスターも魔力を通すことで一定の魔術を使えるようになるし、身体能力も強化されるといふ正に戦闘では手放せない、もと衣着せない物であり、最初はカルデアの制服だけだった礼装も開発局の研究が進むごとに新しい礼装が生み出され、学校の制服風のものや、果てには水着まで幅広い礼装がマスターのクローゼットに保管されているのであった。

そんな服型礼装は今日も主人に着られてその役目を果たしたばかりであり、その主人はそのままカルデアの食堂で昼食を取っている所であった。

今日はアトラス院の制服であり、紫を基調としたデザインは高貴な印象と共に凛々し

さを際立てており、またそれと一緒にかけている眼鏡もまた知的な印象を相手に持たせやすい。イメージとするならば大図書館にいる物静かな司書の様な印象である。

「おう、少年。アトラス院の礼装を着てるな！俺はどっちかと言うとその礼装は少々ピーキーな性能をしてるし、消費魔力量が多いから魔術協会の方が調整しやすく好きなんだが、まあ一對一のサーヴァント戦の補助ならそれで決まりだな！因みにその眼鏡は只のファクションじゃないぞ？サーヴァントのドンパチの際に発生する過度な光量をカットするし、魅了防止、魔眼による呪いもある程度カットできる。それにパソコンから出る光を抑えて長時間の作業にも良い！不要だという輩の声を圧倒的 majority の声で黙らせて作ったその眼鏡は実を言うと服よりも高価だったりする！」

「……………」

すると、いつもの様に開発局所属であろう職員の一人在鼻高々に説明をしてきた。

マスターはグラランドオーダーの際にも着用してきたのである程度の効果は知っていたが最後の無駄に目にいい効果は今まで気づかなかった。というかその最後の機能はいるのだろうか。

ある程度職員と世話をすると職員は「新作を楽しみに待ってるよ！」と意気揚々に去っていく。なんだかオーダーメイドで自分の服を作ってもらっているようで恥ずかし半分嬉しさ半分のマスターであるが、この頃職員が落としていった企画書の中に

「お月見バニー計画」という表紙を見てからなんだか素直に喜べないところもあった。

「いようマスター。うどんを食うのは良いがぼーつとしてると伸びちまうぜ、あと眼鏡が曇ってる。つと、横いいかい？」

「ありがとさん」

そういつて隣に座ってきたのは、アサシンの燕青である。長い髪に飄々とした顔つき的美青年であるが、その体に入っている刺青と引き締まった肉体は一目で只者ではないと相手に分からせることが出来る男であった。

その性格は正に無頼漢と言ったところで酒と喧嘩と女を愛す風来人と表現するのも容易いが、一方で義理にも熱く義を持った男であり、マスターにも何かと世話を焼くお人好しな一面もあった。

「いや、飯と酒に関しては召喚されて良かったと思ってるぜ。いやホントき、カレーライスなんて俺の時代……まあお話の中の時代には無かったからな！ はっは！」

そういつて持ってきたカレーライスを食べ始める燕青の後ろの席ではいつの間にか何名かの女性職員達が熱い視線を背中注いでいた。無論燕青の方は気付いているだろうがあえて放っておいているらしく気にする様子もない。

ファンかとマスターが尋ねると、燕青にもこの頃から良く分からないらしく、ただ

見つめてくるだけで声もかけてこないのでもこちらとしても聴きにくいらしい。

「なんだろうなあ、水滸伝のファンでもいるのかね。この頃妙にマスターといるところって何人かが熱心に見つめてくるんだよなあ。まあ女の熱い視線には慣れていから俺としては気にしないんだけどな」

「？」

「喋ると印象が変わる？ くくつ、黙ってれば色男つてありや褒め言葉かね？

……

「カレー一口いるかい？」

「？」

「ほいきた、そら」

マスターのカレーを見る視線に気付いたのか、スプーンで一すくいするとマスターの口の元を持つていく。その時点で後ろがざわめき始め、マスターが普通にそのままスプーンを啜るとそのまま歓声が沸き起こった。

「全く、マスターと言うよりかは雛鳥みたいだな。育てるのに一苦労しそうだ」

「？」

「はは、まあ確かにそうしたら俺が親鳥つてことか。じゃあ可愛い可愛い雛鳥ちゃん

よ、もう一口どうかね？ ……なんだいありや？」

ふと燕青達が後ろを見ると女性職員が思い思いにガッツポーズしたり頭を抱えたり、

打ち付けたりして「あーんキター」とか「燕ぐだイエスツ」とかそれぞれ口走ってる。

一見すると怪しいお薬使っちゃった集団か妖しい新興宗教の儀式のそれである。普通に怖い。

マスターと燕青は知らなかったが、ダ・ヴィンチちゃんたちのカルデア女子達のもと女性専用総合アンソロジープ「カルデアガールズ」が発刊されて数カ月が経過しており、その中でも特に人気が高かったのは「ゴールデンとマスター」と「燕青とマスター」の同人漫画であり、バラ色に飢えていた淑女たちの心を大いに潤わせたまた狂わせていた。彼女たちはその中でもノンフィクションを見たいと常時チャンスをうかがっている過激派の一員なのであった。

「うわあ、なんじゃこやつら……おおおった、マスターよこの『しよっけん』とやらは何処で渡すのじゃ？ 妾わらわこういうのは召喚時の知識に入ってなくてのう……」

マスターと燕青が困惑していると、その集団を奇妙な目で見ながら一人の少女がマスターに近寄ってきた。

年は若くあどけない少女と表現するに適しており、中華風の豪華な衣装で身を包んだ姿は何処かの令嬢とも思える。腰まで伸びている紫の髪を二つに束ねて揺れる姿は金欄草きんらんそうを思わせ大変可愛らしい。

自分の事を「だいなまいとほでい」と自称し、尊厳ある態度でマスターに接するこの

少女は「不夜城のアサシン」と呼ばれるこの頃カルデアに召喚された幼女サーヴァントである。

「えっ？ カウンターで渡す？ あの看板？ ああ……分かっておつたぞ？ 妾はそなたを試しただけじゃ。うむ、召使として雇ってやつても良いぞ？」

かなりドヤ顔で無い胸を張るアサシンは、強がって背伸びしている大変可愛らしい子供にしか見えない。なのでマスターの対応も笑ってアサシンの頭を撫でるぐらいのもので、大変微笑ましい。

「……………」

「いやいや何で子供扱いなのじゃ、不遜すぎてびっくりする。あーいやいや、やめろとは言っておらん。言っておらんからその刺青入った優男、ちよつと代わりにいつてもらえんか」

「ひえっへへへへ、いやすげえ。荊軻の姉さんが姉さんだったのも驚いたが、へっへへ、アンタもそういう姿で現界してんのか。いや現実は小説より奇なりつてのは本当だな」

何かアサシンを見て思う所があつたのか、燕青は笑いながら不夜城のアサシンの食券を取ると厨房へと向かつていった。「不敬なこととして手足もがれないようにな」と不

吉な言葉を残しながらであつたが……

「此処つて意外と中華系のサーヴァントもいるんじやな……まつ！ 妾が一番ぱーふえくどぼでいーで可愛く美しく、そして輝いておるがな！ うん？ ぷりん？ うむ、食す。むろん食後でな、にはっ！」

なんだかんだで小さい子を甘やかすのが好きなマスターは相手がサーヴァントと分かつていてもついつい何かと世話を焼いてしまふ。

不夜城のアサシンもなんだかんだでまんざらでもなさそうな顔をしており、そのため食堂の奥からやはり幼子が好みなのかとすすり泣く母の声が聞こえてくることになる。

「なんだこのちっこいのは、お前のガキか？」

「あら、本当時時の間に……隠し子かしら？」

そこに西洋の軍服に身を包んだ短髪の男と妖しい仮面をつけた白髪の女がこれまたカレーライスを持ってマスターのテーブルへと座ってくる。

男の方は日本で知らぬ者はいないというほどの知名度を誇る新撰組の副局長、土方歳三。女の方はエリザベート・バートリー、その未来が行きつくもの、カーミラである。

中々に珍しい組み合わせなのでマスターが不思議に思っていると、先ほどまで一勝負してきた後らしい。

「？」

「ん？ この別嬪が拷問に一家言あるつていうんで、どちらが早く相手を吐かせるかシミュレーションで技比べとってきただよ」

「流石に拷問中にまで口説いてくるのは勘弁してほしかったけれど……あとあなた詩のセンスないわよ」

「はっはっは外人には日本の俳句の良さはわかんねえか！」

「いえ、そういう意味では無くて……」

この土方歳三、クラスはバーサーカーと言うこともあり、まさに鬼と見間違えるぐらいに激しく自分が倒れるまで進むかそれで無かつたら流水のように冷静な戦闘マシンの様な男なのだが、意外にも女好きで俳句好きという風流な一面もある。

女の方はまだしも、俳句はどうにも佐々木小次郎が苦笑いするような出来なものが多く、上手いという者と、下手だという者が綺麗に二分する腕前であった。

「あら？ 貴方メガネかけてたかしら？ ああ礼装なのね、それも」

「まためんどくせえもんつけてんな。ウチでは誰が付けてたか……永倉のやつか？」
「なんじゃそなた、元々は裸眼だったのか？ どれどれ……？」

マスターはアガルタを探検した時はアトラス院の礼装を着用しており、不夜城のアサシンには眼鏡を取った姿を見せたことは無かったのでアサシンはマスターの顔に手を伸ばすとそのままその眼鏡を取って自分の目に装着する。

「おお、本当に度は入っておらぬのだな。ふふん？ 似合うか？」

そういつて顔を上げる眼鏡装備型アサシン、ロリロリしい雰囲気と眼鏡をかけたことによるんだか知的な雰囲気混ざり合つて別の魅力が引き立てられていた。つまりは中々に似合つていて可愛らしい。普段眼鏡をかけている後輩によつて新たな好みに眼鏡属性が追加されたマスターにとつては中々に来るものがあつた。

「――！」

「ふふん、そうであろうさうであろう。この国一の眼鏡美人と言つても過言ではないぞ？ そなたが惚れても無理はないということじゃまったく罪作りな女じやのう！ くふふ、にはは！」

自慢げにそういいながら高笑いする不夜城のアサシン。だが、アサシンは知らなかつた。ここでの「マスターについての」不用心な一言は思わぬ災害を「主にマスターに」もたらすことを……

次の日の朝の事であつた。

朝寝返りを打つとなんだか目の周りに違和感があつて目覚めたマスターが鏡を見てみると、自分の顔に眼鏡が着いているのに気付いた。

いつも裸眼であるマスターが眼鏡をはめたまま眠りにつくなんてことはありえず、装の眼鏡も昨日シャワーを浴びた時しつかりと礼装と共にしまったはずなのである。それに礼装とは違った眼鏡でありどうにも可笑しいとその眼鏡を外そうとすると、なぜかぴたりとくつついていて幾ら力を入れようと外れる兆しが無い。

「マスターさん……起きていますか……？」

そうやってマスターが外れない眼鏡に悪戦苦闘していると、ドアからけだるそうな声が聞こえてくる。

マスターにはこの声には聞き覚えがあった、金色の髪に、琥珀を思わせる目の色をした物静かな文学少女、謎のヒロインXのライバル的な存在である謎のヒロインX・オルタ、通称えつちゃんである。

ブレザーに制服、眼鏡と言った学生スタイルのえつちゃんは時々仲の良い同級生の如くマスターの部屋にお菓子を強請りに来ることはあるが、こんな早い時間に来るのは初めての事であった。

怪奇現象が悩まされていたマスターは丁度来たえつちゃんに取ってもらおうと、ドアを開ける。

「……………」

「眼鏡……取れますか？」

が、そこにいたのは同じく怪奇現象に悩まされていたえっちゃんであった。マスターと同じように眼鏡がくっ付いているが、えっちゃんの場合はもともと眼鏡をかけていたので眼鏡の上に眼鏡と言う良く意味の分からない状態になっている。因みに新しい眼鏡は大きい瓶底眼鏡であり、これはこれである意味可愛らしい。下に眼鏡が無ければ――

「夜更けまで本を見ていたら、いきなり眼鏡が飛んできて……あ、羊羹いただきますね」
えっちゃんの話を聞く限りどうも何の兆しもなく眼鏡が飛んできて自分の眼鏡と合体したらしい。

敵の呪いや、奸計の類ではない事は確かであるが、いつも通り何処かの誰かが碌でもないことをやらかした結果であることは間違いない。　　とうかこれが敵の作戦だったら嫌であった。

「――?」
「取れませんか……マスターの眼鏡も無理やり取ろうとしたらマスターの首が取れてしまう可能性がありますよ」

自分では取れなかったのでお互いならと、マスターとえっちゃんはそれぞれの眼鏡を引っ張ってみるが、やはりというかうんともすんともしない。　　こう見えても筋力のリンクはAの持ち主であるえっちゃんが取れなかったのだから、これ以上はヘラクレスな

どの怪力の持ち主が試すしかないが、そうするとマスターの頭が危ないので結局力づくでは無理だと言う結果に終わった。

「……………」

「そうですね、こういった事は今までの経験から黒幕と首謀者は大体決まっていますし……………探しに行きますか……………」

「……………」

マスターがため息をつきながら重い腰を上げると、そつとその横に並んでえつちゃん
が少しだけマスターに微笑んだ。

「でも、マスターのその丸眼鏡お坊ちゃんみたいで似合ってますよ?」

余計なお世話であった。

「ああ、シグルド……………! その叡智の結晶は正にシグルド……………貴方なのね!」

「すまない……………俺はシグルドではない、この眼鏡は朝勝手に飛んできたものなんだ本当にすまない……………」

「そう、なんですか……………でもその眼鏡はシグルドに似て……………良く似た連れて行くべき英

雄……ごめんなさい、やつぱり殺しますね」

「すまない！ 意味が分からないのだが！」

その日のカルデアは謎の眼鏡病の蔓延によつて混乱の渦にあつた。眼鏡を付けたジークフリートを見たブリュンヒルデの暴走。元々眼鏡をかけていたサーヴァント達が二重に眼鏡をかけることになり、さらに宝具やクラスなどによつて同時に召喚された幻想種や馬までもが眼鏡をかけている事態となつていた。

だがそれだけなら、異常事態ではあるもののサーヴァントや人の体にはとれない眼鏡以外にはどれも体に異常はない物で騒ぐほどの事でもない。呪いが解けるまで眼鏡ファツションショーでもしようとかダ・ヴィンチちゃんが提案するぐらいである。

「ふん、またくだらんことになつていようだな……この連中は落ち着くという言葉を知らんと見える」

「……！」

「ど、どうもダンテスさぶふっ……すいません、どうにも笑いをこらえるのが難し……くくう……！」

「……笑いたければ笑え」

いつもの様にマスターの影から浮かび上がる様に姿を現したのはアヴァンジャーのサーヴァント、エドモン・ダンテスであるが。エドモンの顔を見た瞬間マスターと

えっちゃんは嘔き出してくる笑いを抑えようと口を手で覆って必死に笑いをこらえている。

それもそのはず、エドモンもまた眼鏡病に感染したらしいのだが、その肝心の眼鏡が鼻眼鏡だったからである。いつも着用している黒い外套と帽子とネクタイの中に爛々と輝くように自己主張する瓶底の様なレンズと鼻毛が飛び出たデカい鼻の鼻眼鏡。申し訳ないと思うが、普段とのギャップがあり過ぎてマスターも笑いをこらえることが出来ない。

いつも氷のように冷たい表情のえっちゃんもこればかりは笑いをこらえるのに必死であつた。

眼鏡だけなら気にしなかつたサーヴァントもランダムでかけられた眼鏡が鼻眼鏡になるといふ現象だけは黙つて見過ごすことはできなかつたらしい。しかも普段シリアスなメンバーに限つて鼻眼鏡で普段の印象が台無しである。

アヴェンジャーの他には、ナイチンゲール、スカサハ、ヴラド三世、等々が被害に遭つており、キングハサンに鼻眼鏡が飛んできた際は鼻眼鏡が一瞬のうちに両断され周りは笑うどころではなくなつたし、よりにもよつてオジマンディアスに鼻眼鏡が装着されてしまつた時は、横にいるニトクリスに笑つてはいけないうるカルデア二十四時が開催され、冥界の女王は自分が絞首台の十二段目を笑いをこらえながら昇っている様な思いで必

死に今を過ごしている。

「くすつ……しかしこの眼鏡病の発端は誰なのでしようか？ 大体の黒幕のパラケルススさんや黒髭さんも眼鏡がしつかり装着されていてどちらも否定されましたし……」

「大体検討はつくがな、またどこかの誰かが挑発したのだろう」

「？」

「無論、お前の事だ。こうなっている場合犯人というものはお前に対して見せつけてくるだろう……そら」

アヴェンジャーが呆れたようにため息をつくとき鼻眼鏡が少しだけ曇る。そのままマスターに後ろを向くように言うそのままコーヒーを入れに何処かへ歩いて行ってしまった。

「旦那様……どうですか、この清姫マスターが眼鏡好きだと聞いて駆けつけてまいりました。ますたあ どうですか？ どうですか？」

「ふふ、眼鏡を付けただけで金時も恥ずかしがって母を直視できないなんて、これが噂に聞く『いめちえん』でしょうか？」

「こういった趣向は生前でもありませんでしたので……似合いますかマスター？」

こういつたときにやはりと言っていいまでにその姿を現すのは例の三人衆であった。

皆それぞれ当然のようにかけている眼鏡をマスターに見せつけ、マスターの感想を

待つているようであった。

「なるほど、察しました。自首してください、なぜか全員鼻眼鏡らしかったルーラーさん達の温情には期待しないほうが良いですが……」

「いえ、今回は私たちではありません。確かに依頼はしましたけれど、ここまで眼鏡が感染病的な意味で流行するとは思っていませんでしたし」

スクエア型と呼ばれる細い四角形の眼鏡をはめて若い女教師の様な凛々しさと色気を醸し出している頼光が頬を抑えて応えた。

「依頼はしたんですね」

「まあ依頼と言いますか、あちらからの提案でした。三人で眼鏡を選んでいた時に『B

Bちゃんにお任せです！』やらなんやら一人の少女が飛び出してまいりました……」

「……………」

B B、その名前を聞いた途端マスターは眉間に寄った皺をほぐすのに若干の時間を要した。

B B、ムーンキャンサー。パッションリップ達と同時期に入った謎の多いサーヴァントであり上級A I、彼女らの生みの親とも言える存在である。その性格は小悪魔的でありラスボス的でありフリーダム。マスターの事を「センパイ」と呼び、何かしら悪戯やイベントを仕掛けてはマスターの困った顔を見てほくそ笑むのが好きだという

いろんな意味で困った人物なのである。

彼女が来たおかげで平穏じゃないマスターの日常が掛け算的に波乱万丈となつていくので、マスターとしては堪ったものではなかった。

根本的な所に人間は好きではないと公言しているもののお人好しな所があるのかマスターが怪我したりしないような配慮をするのが救いであつたが、それでもやはり巻き込まれる側は堪ったものではないのだ。

この子を大人しくさせられる人が居たらそれはさぞ諦めという字が自身の辞書から喪失している超人ぐらいであろうとマスターはいろんな意味で思つていた。

「ふーっふふーっ！ ついにたどり着きましたかちっぽけな勇者たちよ！　そうです、私
がラスボスです！　眼鏡の眼鏡による眼鏡の為の空飛ぶモンティ眼鏡を作ったのはこ
の私！　BBちゃんでしたー！　びっくりしました？　絶望しました？」

噂を聞きつけたかなんなのか、床に突然穴が開いたかと思うとそこから無駄に壮大な
BGMと共に眼鏡を付けてなぜかナース服に身を包んだBBが登場してきた。果て
しないほど腹立つドヤ顔であつたがそれと同じぐらい可愛いので周りの職員たちはそ
のセクシーなナース服を見つめながらにやけている。

「？」

とりあえず、どうしてこんなことをしたのか聞くことにするマスター。　その横で

えっちゃんが供述書を作るために紙とペンを用意し始めている。

これは質問ではなく取り調べであつた。

「ふふん、もちろんセンパイを困らせるためです♪ どうです、この見渡す限りの眼鏡、眼鏡、眼鏡！ 見る人が見るなら歓喜な濃密な眼鏡空間で足掻くセンパイ……ふふふ、どうです？ 絶望しましたか？」

もうとりあえず元に戻してと懇願するマスター。なぜ眼鏡だけでこんなにもパニックにならないければならないのか、マスターはニヒルな皮肉屋にはなれないと自身自身思っていたがこの時ばかりはどこぞのオカンの真似をして皮肉の一つでも言いたい気分であつた。

「ふふつ、センパイだったらどこかのアーチャーさんみたいに皮肉ろうとしてもムダです♪ まったくメルトリリスちゃんが目立つてからラスボス系後輩である私が大人しくしていると思いませんか？ 丁度眼鏡萌えに飢えていた黒い髭さんとのプランニングは大成功！ 職員さん達が研究していた飛行型礼装をちよこつと弄って眼鏡を増やせばこの通り！ 解除には一日経過が必要で無論ディスプレイする方法何てありません！」

「共犯者の名前が出ましたね。後程出頭命令を出しておきましょう」

「おおっと、逮捕するつもりですか？　ざーんねん！　既に捕まって囲んで叩かれた黒髭さんとは違って私はちゃんんと対策しているんですからね？」

「手遅れだったみたいです。代わりに葬式のプランを用意しておきます」

そのままBBちゃんがポーズをとりながら指を一鳴らした。揺れる胸に、ヒラリと舞うスカート、見えそうで見えないチラリズムが男性職員達を更にテンションアップさせ、その熱狂が男性職員を見る女性職員達の目を冷たくさせる。

「BBちゃん、デス！　LOVEアイ！」

「!？」

「マスター!？」

BBちゃんがその名前を言った途端、マスターの顔が見る見るうちに赤くなっていきその鼻からは赤い液体がとめどなく溢れ出てその場に倒れ込んでしまった。

驚いたえつちゃんやマスターの安否を確認しようとするも、そのえつちゃんにも異常が生じてきていた。

強制的に装着されている眼鏡が光つたと思うと、ある映像が眼鏡に投影されはじめたのだ。不思議なことに目を逸らそうとしてもその映像は視界の先に映し出されており、瞼を閉じようとその映像は貫通して脳に強制的に認識させていた。

「さあ……えっちゃん口を開けて……」

「そうです……我慢なんかしないでいいんですよ……」

それはえっちゃんに時を見せた。一糸纏わぬ姿で和菓子を差し出してくるマスターと怨敵X、星の海の中で行われるその行為はえっちゃんの心理的ユニヴァースを臨界点まで上昇させ、キーゼルバツハ部位の血管を断裂させる。

「ぶふっ、意味が不明過ぎる……!? こ、これは一体……!?」

「そうこれこそは眼鏡をかけた対象の脳を分析して、興奮値を最大値まで上昇させる映像を見せ強制的にキーゼルバツハ部位から出血させる超絶むっつりなセンパイ特攻プログラムなのです！ 無論サーヴァントの皆さんもそのエーテル体に干渉してばっちり鼻血ブーです♪」

見れば、周りの職員やサーヴァントたちも悶えながら鼻血を流しており、この効果は眼鏡を装着した全員に作用しているようであった。つまりはこのカルデアは鼻血の海に沈もうとしているのだ。

「なんて無駄な技術を……!」

「ふふふ、正直にあくどいことしてもセンパイは解決しちやいますからね。リップちゃんの谷間とメルトちゃんの股間をチラ見すること幾億回のセンパイには、こういうのが一番有効なんです」

「そ……つくう、そんなことをしてマスターさんが失血死したらどうするんですか!」
「そこは安心、私もそんな幸せ殺しをするほど悪魔じゃありませんからそこまではならないように……あれ?」

ふとBBが足元を見てみると、赤い液体が自分のブーツを濡らしていることに気付いた。見ると床が赤いペンキをひっくり返したかのようにどんだん赤色に染まっけており、BBが顔をしかめながらその液体の出所へと視線を向けていく。

「……………」

「きゃーっ!? センパイ!? こ、これ全部センパイの血ですか!? どれだけえつちな映像を見たんですかぁー!」

「か、完全に致死量です……! ど、ドクター!」

倒れた後も脳裏で続く過激な映像にマスターは気を失いながらもその鼻から噴水さながらに鼻血を噴き出していた。その量は人間の血は3L程度しか無いという常識を打ち壊すほどの量であり、自分の鼻血で窒息しながら痙攣する様はさしものBBちゃんも顔がBig Blueである。

このままではマスターの魂がざざーんざざーんなのだわなのだわと冥界に引つ張られることは遅かれ早かれ確実であり、そんなことになった暁にはこのカルデアに太陽の日が昇ることはなくなるだろう。大慌てでBBちゃんがデス・LOVEアイを解除し

てマスターのバイタルを安定させながら警報を鳴らす。

けたたましくカルデアの中に警報が鳴り響き、マスターのバイタルが急変したことに気付いた職員たちが眼鏡と鼻血を垂れ流しながらマスターを担架に乗せてナイチンゲールが待つ緊急治療室へと運ばれていった。

「せ、センパイのむつつり具合があんなにひどいなんて……このBBちゃんの目を持つても見抜けないとは……」

「マスターさんの死因が鼻血にならないように祈るばかりです……えっ？ くっ、くふふ……！」

「……？ どうしたんですかえっちゃんさん、いきなり私の顔見て笑い始めるなんて。

言っておきますが私にはデス・LOVEアイは作用して……？」

突然笑いだすえっちゃんにLOVEアイが効きすぎて可笑しくなってしまったかと思つたBBちゃんであるが、後ろから叩かれる肩に自分ではなく自分の後ろにいる人間を見て笑つたことに気付く、そのままBBちゃんが振り向くとそれは一人ではなくしかも全員が全員変な鼻眼鏡を付けておりそこから鮮血が流れ出ていた。

「BBさん、やつと見つけましたよ……」

「まったく何処かに逃げたと思つたら変な通路を作っているなんてね」

「困つたものです……」

「あ、ああー……どうもお元氣そうですね……ルーラーさん……」

それはカルデアのルーラーたちであった、皆が皆鼻眼鏡と鼻血を垂れ流しながらBBに冷たい態度で冷やややかな目線を向けている。

が、瓶底眼鏡の奥から見える目はそれはそれは怒りに燃えており、表情が落ち着いているものの今にも断裂しそうなぐらいに青筋を浮かべている。ただ怒りの炎が燃えすぎて赤から青に変わっているだけであった。

「ルーラー簡易裁判、は……今回は不要ですね……」

「そうね……分かりきった事ですし……」

「それでは行きましょうか……」

「ちよ、ちよつとまってください！　る、ルーラーは弱点クラスなんですよ！　それを三人がかりつていうのは卑怯とか思ったりしないんですか!？」

「さあ？　戦闘システム的にも相手の弱点でぼっこぼこにしろって書かれていますし……」

「宝具使わないだけでもありがたいがたく思いなさいな」

「いやでも、その手甲は死にますよね!？　死んじやいますよね!？」

「あ、私は使いますよ。この頃強化されましたし」

「げ、外道神父……!　いやー!　助けてセンパイー!　先輩ー!」

そのままルーラーたちに引つ張られていくBBちゃん、肝心のセンパイは自分の鼻からでた血で沈み、先輩の方は遠い月の彼方である。つまりはしばらくBBちゃんは自分がナースに看護される側に回るということであつた。

ちなみにマスターは一日中輸血をしなければならず、アホな事で死にかけてたことでナイチンゲールからお説教を食らいBBちゃんのLOVEアイで我慢できなくなつたらしいサーヴァントたち不特定少数が押しかけ、マスターは貧血の身でカルデアでマラソンをする羽目になつた。

そしてBBちゃんを見た者は三日たつたが今の所いない。

マスターとBBちゃんの明日はどつちだ。

クッキーとおにぎり、アルターエゴと。

料理という物は五感全てを使って作る芸術品なのだと言った。

五感の内どれかを疎かにしても料理の味は変わってくる、耳も鼻も目も手も無論舌も全てを集中させてやつと相手を満足させることができる料理が完成する。

だが重要な事はそこではないと、同じ言葉を言った人が続けて言った。

料理という物はそこに込められた心こそが重要なものだと言った、心の籠められていない料理はどれだけ美味であろうと意味は無く無味に等しい。

子を想う母の料理がどんな一流のシェフの料理も敵わない理由はそこにある。

恋人、友人、家族、そして名前も知らぬ誰かのための世界で最も行われている一般的な献心的行為、それが料理である。と。

一理ある、かもしれない。と、私は目の前で私が作った出来そこないの料理ともいえない物を笑顔で頬張って「ごちそうさま」と言ったその人を見てるとそう思った。

次は貴方のためだけに作ってみたいと、そう、思った。

「と、いうことで食べるがよい。 夢げで可憐な少女が慣れない手つきで懸命に作ったクッキーである。 この世の宝石一つ物よりも貴重なその思い、食べ残しはノーなのだな」

「お、お口に合わないかもしれませんが、た……食べてください……！」

「「「ウオオオオオーツ!!」」」

狂乱喚起する男性職員達の声が響くのは人理継続保障機関カルデアの食堂である。 エミヤ達率いるオカン達の尽力の元、早い、安い、旨い、の三拍子がそろい更に健康にも良い、バストアップの効果もあるとカルデアでは人気の食堂であった。

時間は丁度おやつ時の三時ごろ、テーブルには沢山のクッキーが乗っていた。 それぞれのクッキーにはサーヴァントをデフォルメ化した可愛らしい絵柄やカルデアのマークなどが焼付いており中々食べる物の視覚も楽しませる出来になっている。

そんなクッキーを作ったのはパッションリップというサーヴァントであった。 野に咲く一輪の花のように可憐で庇護欲を誘うその少女の両手には自らの体よりも大きな巨大な金属の鉤爪がその手の代わりについており、そのアンバランスさを見る者に恐怖を与える物である。

その異常さは彼女も自覚しており、召喚された際にはその周りの視線から怖がられて

もしようがないと半ば諦めていたが、いざ三日も経ってみるといつの間にか親衛隊が作られ、巨大な鉤爪を恐れることなく接してここでは不便だろうと世話を焼いてくれる人々の方が多かつた。

中には貴方は鉤爪より胸の方が目立つから男たちには気を付けなさいと笑いながら冗談まで言ってくる者もいた。

嬉しさよりもなんだか涙が出てくるようであつた。月を見ながらこんなに幸せで良いのかと不安になつたこともある。

だから何か自分からお返ししたいと思つてタママモキヤットに相談したところ、そういう時は料理が一番であると返つてきたことが始まりであつた。

料理などしたことないリップが巨大な鉤爪で皆に料理を振る舞う何て夢のまた夢と思われたが、肉球で料理が抜群なタママモキヤットとブーティカなどの世話焼きがリップでも作れる料理と聞いてクツキーを思いつき、多くの時間と人々の協力の元、消費したボウル六個、オーブンの扉五枚、冷蔵庫の取っ手三個、爆発二回、キツチンキューブ化二回という犠牲の果てに彼女らのためのクツキーが出来上がったのである。

「いやあ、本当に美味しそうだなあ。本当に頑張つてくれたのかあ……」

「あら、これフオウ君の絵柄ね。女の子らしいわねえ」

「お、オレこれ防腐加工して飾っておくよ……」

「いや食えよ」

まさに感心の出来、芳ばしく香るバニラとバターの匂いと可愛らしい絵柄のクッキーは年頃の女の子が作ったと言っても嘘偽りのないほどの出来であり、職員にとつてはアイドルが自分たちのためにクッキーを作ってくれたようなもので胸に込み上がる感情を抑えながらクッキーを取ってそれぞれ口元へと持つてくる。

「それじゃあ、いただきまー——!?!」

「がつ!?!」

「(っ)っ!?!」

だが、クッキーを口に入れ、歯で砕こうとした瞬間クッキーとは思えない金属音が頭の中に響いた。クッキーが固い、硬すぎる。幾ら強い力で噛んでもひび一つ入らない。

正に超硬度クッキーである、人間では食べれる気がまったくしない。

「かたっ……!?! これは一体……!?!」

「ふむ……やはり硬かったか……クッキーを作ったものは良いものの、リップが作るクッキーはなぜか超硬度になってしまったのだ。まあそこらへんは試食前のクッキーより柔らかくは出来たので愛の力で乗り切つてほしい。実際試食をしたご主人は令呪を二つ使つて完食したのだナ」

「あ、あの！ 食べ切れなかったら残しても構いませんから……つ、次はちゃんと柔らかく作りますから……！」

「「食べる!!」」

「ふえっ!?!」

が、彼らもまたマスターと共に世界を救った者達である、ただクッキーが固いからと言つて目の前の少女の残念がる顔を見るぐらいなら歯を砕く方を選ぶ。

彼らは目を合わせ頷くと、グループに分かれそれぞれクッキーの完食方法を模索し始めた。

「物理的固さだ、概念的固さではないということは何処かに柔らかくする方法があるはずだ!」

「A班は牛乳で試せ。 B班は強度を測定してどの力で噛めば砕けるか調べるんだ。

C班はオレが率いる! ハムスター作戦だ!」

「味は美味しいのよ! 人理定礎に比べれば美味しいクッキー食べる方が何倍も簡単で楽しいわ! ねえ!」

「応っ!」

ある者は牛乳に浸し、ある者は細かくして食べようと尽力し、ある者は顎を強化する機械をどこからか持ってきて強引に食べようとした。

職員が言った通り味は良い、牛乳にも合うし非常におやつとしては美味である。いかほどあの腕で苦勞して作ったのだろうか、職員たちはリップの気持ちを想うと何としてもこのクッキーを完食しなければという思いが強くなる。

想像よりも大事になってしまったパッションリップが止めようとしたが、制止も聴かず職員たちは硬化クッキーも何のその、一枚、また一枚とそのクッキーを減らしていき、ついには大盛りのクッキーはその姿を消してその皿だけがテーブルの上に乗っていた。クッキーの欠片も残っていない見事なまでの完食であった。

「よっしゃー！ 完食じゃー!! 美味しかったー!」

「顎が随分と鍛えられた気がするな……」

「リップちゃんご馳走様ー! ってアレ? リップちゃん?」

「ぐす……ひっぐ……」

御馳走様と職員たちがパッションリップを見てみると、当のリップは俯きながらほとんどと涙をこぼしていた。その姿を見て職員たちは大慌て、なにか悪いことでもしてしまったのだろうかと右往左往、あたふたするばかりでこういう時に頼りなキャットも優しい顔つきでリップに微笑みかけているだけである。

「ど、どうしようか! やっぱハンマーで砕いてみたのは不味かったかなあ……!」

「クッキーに牛乳は邪道と思われたのかな……!」

「キャッツちゃん！ 私達何かやっちゃったのかしら！」

「そうですね、私もそう思います」

「キャッツ君!? 言葉使いが変だぞ!？」

「ぐすつ、違うんです……嬉しいんです……嬉しいんですけど……なんだか涙が……止まらなくて……ごめんなさい……」

涙で途切れ途切れになったリップの言葉を聞いて職員たちはキャットと同じように優しく微笑んだ。一人の職員が自分では拭けないリップの涙をかわりにハンカチで拭って笑いかける。

「クツキー、美味しかったわ。またいつか作って頂戴ね」

「次はチョコが入ってる奴がいいなあ」

「毎日でも良いよー!」

「馬鹿、それだとリップちゃんが大変だろうが」

「でも次は少しだけ柔らかめがいいかなーははは!」

そういつて笑いだす職員たちに、リップは涙を床に水溜りが出来るぐらい勢いを増して流していくので慌てて職員たちがそれぞれハンカチを持って駆け寄っていく、何時しかそれは争奪戦になり、また食堂が賑やかになっていった。

「あり、ありがとうございます……ぐすつ……わ、私ここに来て、良かった……」

四方八方から伸ばされるハンカチにもみくちやにされながらパッションリップはいつ止むか分らない涙と共にくしゃくしゃな笑顔で幸せいっぱいに笑っていた。

「メルト！　メルト！　良かった、ここにいた！」

「……余り廊下を勢いよく走らないで頂戴。　只でさえ重いんだから床抜けるわよ？」

「ぬ、ぬけないもん！」

その数刻後、カルデアの廊下で一人の少女を見つけたパッションリップは急いでその少女へと駆け寄っていった。　リップとは違い華奢で細身である少女は正に無駄を一切そぎ落としたような人形のように艶やかで美しかった。　だが少女の足はリップの手のように何者も切り裂くような鋭い脚の具足で出来ている。

少女はメルトリリス。　パッションリップと同じアルターエゴのサーヴァントである。

「聴いて、メルト！　皆クッキー食べてくれたの！　それで、皆有り難うって……」

「そう、それで？」

リップはその後の言葉を出すべきか少しだけ迷い、メルトの顔を伺いながら恐る恐る口にした。

「それで……その、メルトもお料理やってみない？ その、メルトだったらもつと上手く出来るだろし、そうしたら皆さんとだって……」

「必要ないわ」

メルトは即答した。そういつてこの話は終わりだと言う様に背を向けて歩き出す。慌ててリップが追いかけるが、メルトは振り向くことさえしない。

「で、でもあの時メルト遠くから眺めてたでしょ？ メルトだってきつと皆から分かって……」

「もう一度言うわ」

メルトが立ち止まってリップを見据える。

「必要ない。ここの人間たちに私を分かちて貰う必要なんてないし、私達は人間を否定するように作られた以上、私達の在り方はその人間たちを傷つける。私達は怪物なの、理解は必要ない」

「でも、マスターさんはメルトのこと……」

「あの人の話はしないで、まったく忌々しい……」

途端に苦虫を噛み潰した様な顔をしてさっさと歩きだすメルト、そんなメルトを分か

らず屋といいながらもメルトの分のクッキーも取つてあるからとリップは声をかける。

「良かったら、メルトも食べてみて？ そうしたらメルトも……」

「気が向いたら食べてあげる、気が向いたらね」

「もうメルトの意地悪！」

そういつてメルトの姿は廊下の先へと消えていった。

時は深夜、物音一つしない真つ暗な食堂の中淡く光る非常灯に照らされて一つの影が現れた。その影はぎこちない手の動きでテーブルをなぞると、そのまま厨房へと入っていく。

普段こんな夜中に厨房に入るのはスイーツをつまみ食いしに来た茨木童子ぐらいなものだが、今日は違った。

流れる様な長い髪にいかなるものも切り裂く鉄製の足を持つ少女、メルトリリスである。

彼女は厨房の明かりも点けず、鈍い動きで冷蔵庫の扉を開けると、何かを探し始めし

ばらくして一つの小包を取り出した。

それは可愛らしくリボンで包装されており、見事な達筆で「メルトへ」と書かれており、中には二、三枚のクッキーが入っていた。　　どうやらリップがメルトに作ったものらしく、昼に作ったものと同じものであるらしかった。

「……………つかた……………」

メルトはそのクッキーを袋から出すと、一かじりしようと口に含むがその固さに一瞬間をしかめてしまう。　　サーヴァントでも硬いと感じるほどの固さなのに昼の人間たちはどうやってこのクッキーを完食したのかと一瞬だけ感心してしまうぐらいにリップが作ったクッキーは固かったのだ、だが、そのままサーヴァントの力でクッキーを噛み砕くと、その次はバターの香りとバニラの良い匂いがまるで今まで凝縮された風味が解き放たれたかのように口の中に広がっていった。

これにはメルトはまた違う意味で驚いた、認めるのが癪ではあるが美味なのだ、あの爪で調理するには相当の修練と努力が必要だったであろう。

「……………悪くないわね」

自身にも聞こえないような小さな声でメルトはそう漏らすと、自身の手を見つめた。　　神経障害により極端に指先の触覚が低下しているものそれは美しく白い手であり、そこには一切の無駄もなく正に人形の様な手である。

「あの子はあの手で……」

だが、メルトはその日々自分でも一片の無駄のない完璧に美しい体と自称するほどのその一部を見て少しだけ目を伏せた。人ではない手と人ではない足を持つ少女達、そしてその片方はその手を受け入れ、受け入れられようとしている。

メルトはそれが羨ましいわけではない、嫉妬しているわけでもない、ただ少しだけ嬉しいという感情があった。あの子が受け入れられている、良き人々に出会った彼女の幸運をメルトは優しく微笑み、もう一つクッキーを口にしようとする。

「料理……か……いやいや、有り得ないわ、有り得ない。……まったくリップのせいね」
これもクッキーが美味しいのが悪いと誤魔化しながら残りのクッキーを味わおうとしたメルトだが、突如厨房の明かりが点いたことよってその手が止まってしまった。

今の今まで穏やかな気持ちでクッキーを頬張っていたメルトであるが、何も知らない第三者が見ると厨房でクッキーを頬張っている姿は只のつまみ食い犯であり、メルトにとってそれは消滅したくなるほど恥ずかしい事でもあるので、代わりに目撃者の記憶を消滅させるべく目にも留まらぬ速さでその足を振り上げて目標の頭へ振り下ろす――

「!？」

寸前でその少年の姿を見たことでその足は止まった。鈍く光るその足が髪の毛の本を切り裂きながら元の場所へと戻っていく。

「貴方、こんな時間に何してるのよ……」

「……」
それはこちらのセリフですといきなり目の前に刃のヒールを突き付けられ震えながら返したのはカルデアのマスターであった。

その姿は寝間着と言うよりは今まで運動していたかのような恰好であり、黒いインナーを着ていた。

「……」

「訓練……？　こんな夜中に……？」

マスターは訓練の帰りであった。訓練と言っても正式なものではなく、時々やる秘密の特訓の様な物であり、金時たちから格闘技などの戦闘訓練を集中して受けている。

元々はマスターがサーヴァントを呼べないアクシデントがあつた際の訓練であるがマスターの怪我率が高く、普段ではあまり許可されないためマスターが秘密裏にお願いして夜中密かに行っている物であった。

その帰りに小腹が空いてしまったため、イケないと思いつつも何か摘まもうと厨房へとやってきてメルトと鉢合わせてしまったのである。

「……？」

「私は、別に何も……」

そういうメルトは何をしていたかと聞かれるが、しどろもどろになるメルトが答えるよりも早くメルトが持っていたクッキーを持って察してしまった。

「……………」

「そのにやけ顔直さないと本当に記憶を失うことになるわよ？」

「……………」

「なんだか仲の良い姉妹を見たような気分でニヤニヤしてたのも束の間もう一度メルトが足を上げ始めたので、顔を青くして自分の目的を果たそうとマスターは冷凍庫を開ける。」

「……………」

「が、運の悪いことに冷蔵庫に作り置き料理は無く、材料等ばかりで食べられるものは全くなかった。スイーツなどにはすでに予約が入っているため手が出せず、かといって一から作るというのも手間がかかるし証拠が残ってしまう。」

「しかし小腹は空いたら気になるという物で、マスターは炊飯器を開けて中のお米が残っていることを確認すると手を洗ってその手に塩を付けていく。」

「その行動に厨房を後にしようとしたメルトはマスターが何をしているのか興味を持ち横目で目立たないように見ている。」

「……………」

そのままマスターはお椀に入れたお米を手に乗せると、上手く手の中で握りながら形を整えていく。何回かコメを握るとそれは綺麗に三角型に形が整えられていき一つの料理が出来上がった、日本で古くから伝わっている伝統料理で、その中に入れる具で様々なレパートリーが楽しめる料理、おにぎりである。

「それ、なんなの？」

おにぎりが余りにも単純で簡単にできたので、メルトはついマスターに目の前の米の塊のことをマスターに聴いた。

マスターも聴かれるとは思っていなかったのか少しだけ驚いたが、少しだけ微笑んでお握りの事を説明すると興味深げにマスターが握ったおにぎりに視線を移す。

「おにぎり……勿論AIだし知っているけれど、こんな簡単に作れるものだったのね……私の手でも……」

「？」

「は、はい？ 作ってみるって、私が？ 冗談言わないで、なんで私がそんなことを……」
メルトに興味があると分かったのか、マスターはメルトにおにぎり作りの提案をする
が、メルトの方は冗談じゃないと首を横に振る。

「」

「嫌いとかそういうことでは無くて、私の手は鈍いから……じゃなくて、ああもう！」

これだから目の前の人は嫌いだ。

とメルトリリスは心の底からそう思った。いくら自分が突っぱねても構って来て、世話を焼かなくていいといつても焼いてきて、幾ら冷たい言葉をかけようが気にしない。自分から嫌われてるって思っていない、いや嫌われてたって構わないって思ってる。

嫌な人、嫌な人、嫌な人、嫌な人。

だからこの人の前ではふと思つてもいけない事を言ってしまうし、いつの間にか乗せられてしまっている。

「はあ……わかりました、一度だけよ……」
今回みたいに。

「それで、次はどうすればいいの?」

数分後、マスターの提案に折れたメルトの手にはラップの上に乗せられた米が湯気を漂わせていた。メルトは初めてだし、火傷しないようにとメルトはマスターとは違いラップを使っておにぎりを作るようになった。

メルトからすれば、神経障害で熱さも感じにくいというえにサーヴァントなので平気だと

言うがそこもマスターは譲らなかつた。

「包むようにして優しく握る……んっ……」

マスターが見ている中、メルトがおにぎりを握っていくが、指の感覚がないメルトは感触がつかめず米が零れ落ちたり、潰れたりですていまいか。何回かやり直すもやはり神経障害がネックになっているのか、なかなかおにぎりの形が出来上がらない。

「んっ……くっ、なんで……あんなに簡単そうだったのに……こんなこと、リップはもつと難しそうなこと出来ていたっていうのに……」

自分の思う様に指が動かず、想像する物が出来上がらない。何も作れない、その思いに焦りが生じてまた手の中の米を潰しそうになった時、ふとマスターの手がメルトリリスの手を包み込む。

「え……っ？」

メルトがマスターの顔を見ると、マスターは微笑むとゆつくりとメルトの手を動かしていく。それ合わせてメルトの手も動いて米が優しくにぎられて出来上がっていく。

「(あつたかい……?)」

何も感じないはずのメルトの手が、ふと温かく感じた。有り得ない、とても有り得

ない事なのだが、マスターの手から確かに伝わる温かさはメルトの心を落ち着かせ、少しだけ彼女の頬も暖かくさせる。ずっと前にこんなことがあつた様な気までしてくる。

そのままマスターの手に導かれるまま手の中を握っていき、その手を開いてみると、そこには一つの丸いおにぎりがメルトの掌に出来上がっていた。

所々歪んでいて、お米も最初の時より少なくなっており、にぎり慣れたマスターと比べると子供が握つたようなおにぎりであるが、立派なおにぎりである。

「出来た……？　これが、おにぎり？」

「え？　交換……？」

マスターはそのまま自分もおにぎりを握ると、そのままメルトリリスの前へと差し出す。呆気にとられたメルトは一瞬固まってしまったが、すぐに元に戻ると焦りながら首を横に振る。

「な、なんで交換しなきゃならないのよ!？」

メルトからすれば自分の失敗作に近いおにぎりというだけでも恥ずかしいのにそれが他人の口に入るということは耐えがたく赤面物でありからかっているかとも言つたが、マスターは優しくも真面目な顔であつた。

「大事なこと？ ああのドンファン顔から教えて貰ったって……」

それはエミヤがこのカルデアで初めてマスターに料理を教える時であった。その時はまだ人理滅却時であり、マスターはエミヤにまだ当時は苦手であった料理を教えてもらうつもりであったが、まずエミヤはおにぎりを作らせた。簡単な料理ぐらいマスターも作れるので、子ども扱いをされていると不満げであったが、真剣な目つきであったので何も言えず、ただおにぎりを作った。

「それじゃあ、そのおにぎりと交換だ。俺のをあげるから、マスターのおにぎりを戴きます」

おにぎりが出来上がると、エミヤはそういつてまだ形も歪なマスターの出来立てのおにぎりをそのままペロリと平らげてご馳走様でしたと手を合わせた。

その時エミヤが何を言いたかったのかは分からなかったが、ごちそうさまと言っても残るのは悪い気分ではなく、またごちそうさまといつてもらいたいという気持ちが残っている間にか料理が苦手だという気持ちはいつの間にかどこかに消えさつていった。

マスターは今になってもその時のエミヤの真意を全て理解しているとは言えない、が、誰かにご馳走様と言ってもらえるのはとても大事なことなのだと思うている。

だから、メルトリリスのおにぎりと交換してほしいとマスターは言った。別に本当に嫌なら構わないと付け加えたが、マスターの青い目は真直ぐにメルトリリスを見つめている。

「……初めてできつと美味しくないわよ」

メルトリリスは一つため息をつく、諦めたようにマスターのおにぎりを口元に持つていく。

「きつとべちやべちやで食べにくいわよ」

「塩だつていれすぎたかもしれないわ？」

「貴方つて本当に嫌な人……」

「い、戴きます」

戴きますと二人で言つて、メルトはマスターのおにぎりを口に含む。俵藤太の提供である塩と米は良い塩梅で混ざり合つており甘い米とほんのりと効いた塩が食欲を進ませるようであつた。

メルトリリスは自らのおにぎりを食べているマスターを一目見ると、やはり塩が多す

ぎたのか塩辛そうな表情を浮かべていたが、メルトリリスが見ていることに気付くと、笑顔で「美味しいよ」と言った。

その姿を見てメルトリリスは、

「馬鹿ね」

と慎ましく咲いた一輪の花のような笑顔でそういった。

——彼女たちの明日はどっちだ。

another sky編 お宝写真と女神の微笑み。

「ふっふーん♪ ふふふーん♪ でゆふふふー♪ ふーひひひー♪」

奇妙で奇怪で不気味な鼻歌が廊下に響いていた。その出所は2mを超すひげを蓄えた大男であり、そんな大男が乙女みたいにスキップしてにやけながら廊下を渡っているのが通りがかる者がその男が通るたびに怪訝な目を向けるが男は全く気にしない。それほど上機嫌なのだ。

「がっぼりがっぼり大儲け♪ これはマスターに何か奢っても良いでござろうなあっ」

その男はエドワード・ティーチという英霊であった。通称黒髭という海賊の代名詞と言っても良いほど有名な男で、その性格は冷酷であり残忍だと伝えられているが、このカルデアの黒髭はオタク文化に体の水分一滴まで染まった全方位オタク海賊なのであった。

「そうしたらマスターもいつかは拙者の後ろから抱き着いたりして『くろひく大好き（はーと）』なーんて言っちゃったりしてそこからはじまるカルデアハーレム……むふふ、夢がひろがりんぐー！」

「先輩、あの英霊はどなたなんでしょう……」

「しっ、みちやいけません！」

隣でカルデアの研究員から指さされても気にしない、その子の手を掴んで足早に去っていった職員を見たって気にしない。

なんたつて今日の黒髭は上機嫌なのだ、なんと思ったより取引が上手く行ってQPが
がっほがっほ。 一か月ニートしても十分お釣りがくるほどの利益が黒髭の元に転が
り込んだ。

買いたいフィギュアもあったし、ゲームもあったし、マタハリちゃんの新作写真集
だつてあつた。 いまから何に使うか幸せな金勘定をしながら黒髭が廊下をスキップ
していると、後ろから一人の少女が黒髭に向かって走ってきた。

その少女は赤栗色の目と髪をした年齢にしては小さな顔立ちと大きな目で童顔に見
られる顔立ちをしているが、その胸と臀部は年齢にしては少々成長しすぎている体を
持つており、それが男性職員には密かに好評である。

性格は非常に活動的で有り余る元気と人懐っこく、友人を作りやすいタイプで実際に
友人が多い何処にでもいる普通の女の子である。 ——ちなみに兄が一人いる——

そんな彼女はその小動物的外見からは想像できないが、この人理継続保障機関カルデア
唯一のマスターであり、カルデアの人々と世界を救った少女であつた。

そのマスターは一見笑顔に黒髭に走り寄ったと思うと、何をトチ狂ったのかそのまま手を回してその背中に密着し始めた。

「——！」

「ふおう!? この背丈と柔らかさと匂いは……まさかマスター!? 拙者に後ろから抱き着くなんて……もしや、もしや、もしかして!?」

まさか抱き着かれるとは思っていなかった黒髭は、魑魅的な声をあげて驚いた。女性から後ろからされることと言えば銃で撃たれるかカトラスで刺されるかぐらいしかなかったのだ、黒髭はついに自身の青春の到来を予感し、背中に伝わる柔らかさに全神経を集中させながらマスターに声をかける。

「ま、マスター。マスターの気持ちは拙者分かったでござる……だが俺は黒髭……惚れちゃあ火傷しちまう——」

そういつて黒髭マスターの手を握ろうとした瞬間、黒髭の視界が反転する、天井が下に地面が上に、まるで自分が浮いているかの様な感覚の後黒髭の頭は勢いよく地面へと激突した。

「このへんたいー!!!」
「ひゃーん!?」

それは見事なマスターの投げっぱなしジャーマンスープレックスであった。これ

には近くで衝撃的な光景に顔を青くしていたアステカ神話系お姉さんも一転して手放しの大絶賛である。

「ったアー!?! ちよつとこれ床硬いし多分サーヴァントじゃなかったら死んじやう系の奴なんですけどー!?!」

流石の黒髭も涙目になりながらマスターを見上げるが、当のマスターは般若の様にしかめつ面のはずであるが、幼顔なため何となくかわいく見える|になりながらポケツトから数枚の写真を黒髭へ投げ渡す。

「――?」

「んん、写真? ……こ、これはっ!?!」

その写真を見た黒髭が目を開いて驚愕した。

その写真は一人の少女がトレーニングの後、もう一人の少女とシャワーを浴びながらじゃれ合っている様子であった。その年では中々に育ち過ぎな体に流水が流れ非常に色っぽい。

因みに大事な所はすべてカメラに着いた水滴で隠れており、それもそれで想像掻きたら非常にポイントが高い。

言うまでもなく一人はマスターであり、もう一人はマスターの一番の相棒であり後輩のマシユ・キリエライトである。

この写真には黒髭は非常に心当たりがあった。と言うか黒髭が一年の苦心の末に取った最高の一枚であり、先ほどの取引の中で最高額で取引された写真である。

「？」

この写真は最近黒髭が奇妙な動きをしているという噂をもとに本人の部屋をシャーロックホームズをお願いしてまで探った時に出てきたものであるらしく、マスターはこれを使って如何しようとしていたかを聞こうとして顔を赤くし、心当たりがあるだろうと質問を変えて言い放った。

「合点がいったか？ はい、まあいきましたけども。あ、いやこれは違うんでござやる、たしかにこれを撮ったのは拙者でござやるが、そもそも侵入に成功したのは他のサーヴァントと女神の幸運のおかげと言うか、というか売れ行きの女性の方にも需要があったことが個人的に闇が深いと言いますか」

「!？」

「ぴっ！ いや、売ったたっていっても、その違うでござやるよ？ 協力の報酬として大っぴらじゃなくて秘密裏に何人かに……」

「!？」

「えーつと、30人ぐらい……？」

「!!!」

「ありがとうございますウ!？」

全然秘密裏じゃないという叫びと共に放たれるローリングソバット。これには近くで観戦していた神様系ルチャドーラも両手を挙げての大喜びである、因みに彼女も黒髭から写真を買っている。

「ま、まあ私はそんなに気にしていませんから……」

「気にしなきゃダメ？　そ、そうですか……」

その数刻後、頬を膨らませながら怒るマスターとそれをじゃじゃ馬を抑える様にどうしようとマスターを押さえるマシユが二人で廊下を歩いていた。

黒髭が盗撮したお宝写真はカルデア中にばら撒かれており、ケツアルお姉さんの筋肉式説得で黒髭がそれで得た収益は全てマスターとマシユの懐に入ることになったのは

良いことなのだが、マスターにしたら自分の裸は別にどうってこともないが、マシユの裸が公然の目に晒されるのは我慢ならなかった。

なので、子供のサーヴァントたちをご飯と引き換えに雇い、写真回収に乗り出すことになった。黒髭のQPよさらば。

ジャック達や新入りのポール・バニヤンの尽力の元お宝写真は大方回収に成功したが、驚くべきことに所持していた者は男性サーヴァントや男性職員だけではなく女性サーヴァントの所持が多かったことである。

しかも、一人で二、三枚以上も買っており、ルーラー裁判に連れて行かれる前に黒髭が言っていた「女性にも需要があった」と言う言葉を思い出してマスターは溜息を一つ吐く。

「で、でもこんなに売っていたってことはカルデアでの先輩の人気の高さが伺えて私としても鼻が高いと言いますかなんといえますか……」

その溜息を見てマシユが必死にフォローをするが、どちらかというマシユが人気で売れたと考えているマスターは苦笑いしながらマシユの頭を撫でて、ある部屋の前に立つ。

そこは部屋番号に「2211b」と割り振られており、マスターがそのドアをノックしようとする

「どうぞ」

と先んじて男の声が部屋の中から聞こえてきたので、そのまま二人は部屋の中へと入っていく。

「大体の数が集まったようだが、金輪際いかなる理由があろうとも彼の部屋には連れて行かないでくれたまえ。事件が起こったのなら別だが彼の部屋からは火事か有毒性ガスぐらいしか発生しないだろうからね。ああレディ・マシユ、この前君が欲しがっていた本は机の上に置いてある。おっとそこ以外の所は触らないでくれたまえ、散らかっているように整理しているんだ」

「やあ、マイレディ。君がこの男に用があるワケが無いし、目的は私だろうか？ 申し訳ないが写真は持つていないヨ、この年になると父性の方が強くってネー」

中に入ると埃っぽい部屋の中に横積みされた本の数々、謎の骸骨に実験器具が片づけられないままに放置されており、その奥で一人の初老の男と若者がチエスに興じていた。

二人とも視線も向けずに一言も発していないマスター達を言い当て、目的まで事前知っている態度をとっており、チエスをする手を休める気もない。

だがそれは不思議でもなんでもない、彼らは世界最高とも言える探偵とその宿敵なのだから。

一人はシャーロック・ホームズ、そしてもう一人は自らを教プロフェッサー授と名乗るサーヴァントである。

「いえ、匿名のタレコミで教授、貴方が写真を買ったのはすでに発覚済みなのですが」「いや、本本当アラフィフ嘘つかない。なんならボディチェックしてみるかね？」

そのままマッサージしてくれると非常に腰に良いだけどネ」

「え？ いいの？ ホント？」

「教授、君の番だが」

「どうせ私が何処を指すか分かってるんだろう？ どうせそこまで行ったら八手目で君のチェックだ、それで終わり。私はマイレディのマッサージを堪能しなければならぬのでね」

マスターから、と言うか若い子からのマッサージが嬉しいのかチェスを放って何処から持ってきた棺桶の上うつ伏せに寝っころがる教授、武器に使う棺桶をそんな扱いにしてよいのだろうか、そのまま教授が棺桶の中に入る破目にならないだろうかと疑問は浮かぶが、マスターもマッサージするために教授の上に乗っかっていく。

何とも珍しい光景にマシユも目をぱちくりとさせながら見守る中、ホームズはパイプを一つ吹かすと一つ嫌な笑みを浮かべて教授に話しかけた。

「いや、五手でチェックだ」

「ほおう、探偵の前で黒幕補正を受けている私でもそこまでチェスは弱くは無い。どんな手を使うのかね？」

「ふむ、そうだな……右肩、左脇、右足太もも……」

「ほう!? ま、待ちなさいマスター！ ホームズ貴様ア！」

ホームズに言われたとおりにマスターがその部位を探ってみると、精巧につくられた隠しポケットがありそこからは何枚かの写真が出てきた。無論マスターのお宝写真であり、黒髭から買ったものに違いなかった。

「それに、右足の靴の裏、最後にベルトの裏。これでチェックだ」

「す、すごいです！ 教授の体から集まらなかった写真の全てが……！ 直にして六十万QPを超える程度かと！」

「な、なぜ……他の者に買わせてそれをまた買い取る者にさらに第三者を使って足を突かないようにしたはず……！」

「なぜってタレコミをしたのは私だからね、いやあ確証はなかったが君ならやると思っ
て先手を打っておいてよかったよ」

「おのれホームズ！ 証拠もないのにタレコミとか探偵のやることじゃネー！ はっ
……！」

「……………」

背中から伝わる凄まじい殺気に気付くも遅し、マスターは教授の両足を掴むとそのまま背中の方へ引つ張り始める。

リバース・ボストンクラブ、日本で言う逆エビ固めである。

「あいだだだだだだだだ！ 腰っ！ 腰が逝つてしまっ！ マイレデイ！ ギブ！ ギブ！」

軋む骨、痛む腰、アラファイフにはサーヴアントでもなかなか辛い固め技に棺桶を叩いてギブを宣言するがここには後輩と探偵はいてもレフリーはいない。

悪人に仏の慈悲は無用。お構いなしなマスターのプロレス技が続く中、アラファイフ教授の声がいつまでも221Bに響いていた。

「くっそー……マスターちゃんの貴重なお宝写真が……高かったのに……」

「マシユちゃんとのツインお宝だったのに……あの子元氣っこのなにガード固いから難

易度高いんだよなあ……」

「先輩、男子たちまだ悔しがってます」

「阿呆ね」

次の日、写真を没収されてQPだけなくなつた様々な人々が肩を落として歩いている中、一人の女性が周りとは違つて明るく笑いながら廊下を歩いていく。

アステカ風の衣装に身を包んだ背の高いお姉さん、その正体は太陽神のケツアルコアトルである。今日はいつともより上機嫌で、暗い表情で歩いている人たちを元気付けながら朝食を食べに食堂へと向かつていた。

「ウーン、みんな今日は暗いネー、特に男の子。まあ十中八九写真を取られたからでしょうけど、なんだか悪いことをしてしまつたですね……」

そういつて誰も見ていないところで胸から二つの写真を取り出す。

「グラフィアス、黒い髭さん。全部あなたのおかげネー……でもごめんなさい、こんな良い写真はやっぱり独占したいもの」

一つは全部回収されたはずであつたマスターのお宝写真であつた。黒髭に筋肉式説得する際、マスターからご褒美に誰にも見せないという条件付きで特別に一枚だけ貰つたものである。

「そして、こつちの写真も……ふふ、オーレ……」

そしてもう一枚、マスターの寝顔が写された写真である。こちらは黒髭の盗撮の手伝いをしたときに女神に願った捧げものとして黒髭から貰った写真である。

ケツアルはその写真のマスターに一つキスをする、胸にしまいなおすとまた廊下を歩いて職員たちに元気を振りまいていく。

「ブエノスデイアス！ さあ！ 今日も素敵な一日デース！ 皆さん、元気よく生きまシヨー!!」

正にそれは太陽の様な笑顔であった。

——マスターの明日はどっちだ。

お酒は二十歳になつてから！

「この頃各サーヴァントの飲酒量が増えているというマスターからの注意文が届きました」

此処はおなじみ人理継続保障機関カルデア、今日はいつもの食堂で昼食と共にサーヴァントの不定例会議が開かれていた。マスターとの訓練の調整や、サーヴァントの要望、逆にマスターや職員たちからの要望をまとめてルーラーたちが報告するのだ。

今日前に立って分厚い書類を読んでいるのはカルデア一の凄女様せいじょと呼ばれるマルタである。

「へえ……そりやあ大変だねえ……ちよいとなんで揃いも揃つてこつちを見るのさ」

「アンタが昼食と言うのに片手にビールを持つてるからよ！ ……こほん、それで集計した結果なんと飲酒量は先月と比べて二倍、先々月と比べると四倍。いくら外との連絡が繋がつて物資が届くようになったとはいえこれはあんまりです」

「でも、外は雪山だと言うのにこの施設は何故か夏真つ盛りのように熱いし、正直お酒が無いとやつてられないよ」

「そうそう、しかも暑さは増す一方でこんなに暑いのにお酒を飲むなと言う方が酷です

わ

そう答えたのは海賊のアン&メアリーである。よほど暑いのかカルデアの中で水着になっており、それを盗撮しようとしたどこかの髭に銃声が鳴った。

それを華麗に見なかったことにしながら、マルタはさらに呆れ顔になる。

「あのねえ、なんでそれでお酒を飲むという選択肢になるの、水飲みなさい水、塩分補給も忘れずに」

「ええー、暑くて汗がびしょびしょの時にエールを飲むときの快感がいいんじゃないか」
「凄女様ったら服装以外お堅いんでござるんだからー」

ぶーぶーと文句を垂れる酒飲みたちに鉄拳を見舞おうかと青筋を浮かべながらマルタはお酒を制限させる方向で会議を進めていく。

実際サーヴァントが増えるごとにお酒の量と種類は増す一方で、それにかかる金は馬鹿にならない。

カルデアだって無限に資金があるわけではないのだ、お酒のせいでお金が無くなってレイシフトが出来ないなんて笑い話にもなりはしない。

「とにかく今週からお酒入荷量を半分にしますから、そこんところ理解するように!」
「おいおい! そりゃ酷くねえか?」

「横暴であろう! 酒呑の酒に不備があつたらどうする!」

「おお、バーで出すお酒に不自由があつては困るのですが……」
「妾に献上させるためのどんペリとやらはどうなるのじゃ？」

マルタの決定に、今度は大勢の酒飲み達が不満の声を上げるがマルタが手甲を装着し霊基を変更し始めたのでその声はとたんに小さくなつていく。

これ以上言うところか飲酒を禁止にまでされかねないからである、ルーラー勢はその公平さをマスターから信用されてカルデアの財布の一端を握っているためマルタが禁止と言つたら本当にカルデアからは酒が無くなる可能性があるのだ。

「はい、決まり。次はマスターからの懇願、『お願いだから暑いからつて水着でマイルームに忍び込むのは止めてください』……まあ禁止ですね」

「『異議あり！』」

「却下します」

「『そんなっ！』」

こうして会議は続いていく。

「全く騒がしい……」

「しかしこれもマスター、ひいてはカルデアの環境を良くするためです。外の敵を倒

すにはまず内側から強固にしなれば」

「同感です、マスターよりサーヴァントの欲を優先させるなどあつてはならぬことです」
「ふん、おかわりだ」

遠くの円卓では、かのアーサー王として知られるアルトリア・ペンドラゴン達がそれぞれのリアクションと共に会議に耳を傾けていた。――XとXオルタは除く――

過去未来別世界の同一人物が揃いに揃つてもうそろそろ全クラス制覇する勢いの彼女たちの健啖家具合はカルデアのエンゲル係数を約三十パーセントにまで引き上げている原因の一つでもあつた。

「お酒が半分になるんですね……男の人にはお酒が喜ばれると聞いたので、マスターに日々のお礼として送ろうと考えていたのですが……」

そういったのは遠慮がちに三杯目のご飯のおかわりを貰つたアルトリア・リリイである。

白百合の様な純粋さと優しさを持つ少女でアルトリアの中では一番若く、過去の自分ながらアルトリア達から末っ子の妹のような扱いを受けていた。

「いえ、彼はまだ成人していないのでお酒は飲めなかつたはずですが？ よく誘われてはいるようですが、彼の国では二十歳になるまでお酒は禁止されていたかと」

「そうなのですか？ マスターはお酒に酔うと人に絡みやすいというお話を聞いていた

のでてつきりお酒は嗜む方なのかと……」

「むむ、誰かがマスターに飲酒をすすめたのでしょうか、それはいけません。サーヴァントとして一人の王として指導しなければ」

「そうですね、我がマスターに悪影響になるものは排除すべきかと」

大きい方と小さい方の青い王がお互いに頷く中、リリイは疑問符を頭に浮かべる様に首を傾げたままなのでこの頃ライダーにもなったアルトリア・オルタが目のリリイの方へと向けた。

セイバーの方と比べるとやや厳しい性格をしているが、根の優しさは変わっていないオルタはリリイの面倒見は良いほうなのであった。

「どうした、何か気になることでもあるのか」

「いえ、その、マスターが酔うと目の前の人を褒めちぎった挙句に『きすま』になると聞いていたので、いったいそれがなんなのかと気になって……」

瞬間、全員の食事を進める手が止まる。

リリイはただ純粹に聴いた言葉をそのまま伝えているだけだろうが、いかんせん言葉の意味を知らずに口にすることもあるので聴いている周りが反応に困ることがある。

家族でテレビを見ていた時にCMに青少年が反応する描写が流れてしまったときのような気まずさと同等の空気が円卓に流れ始めてきていた。

「『きすま』というのはどういった意味なのでしょうか……? 皆さんはご存知ですか?」

「ごほん! リ、リリイ、マスターはまだ未成年なので贈り物は違うものにした方が良いでしょう。そうダクツキーなどはどうですか?」

「え? はい、そうですね……?」

「待て、リリイ。その話は一体だれから聞いた?」

「え……? 武蔵さんですが……?」

「……詳しく話せ」

いつの間にかオルタ二人が身を乗り出すようにして聴いてくるのでその鋭い目線にリリイは若干気圧されてしまう、なんだか答え次第では戦いが勃発してしまいそうなそんな予感がしたのだ。

「えーっと、つい先日玉藻さんと酒呑さんから逃げてきたらしいマスターを介抱した武蔵坊弁慶さんがそのような目に遭ったと私に……」

「そちらか! ……急用ができた。私はこれにて失礼する」

「同じく」

リリイのお話を聞いた後、オルタ二人は料理の代金をテーブルに置くと足早に食堂の後にし始める。余りに急であったので残ったアルトリア達は同じように首を傾げた

が、何だか碌でもないことが起きそうな予感に一抹の不安を覚えていた。

「旦那様ますたあが……」

「キス魔に……」

「なでなで……褒めてくださる……」

そして此処はカルデアの食堂、障子も壁もない空間でマスターに関する話を聞き逃さなかつたサーヴァントたちが食堂を出て行ったオルタ達と同じく目を光らせていた。

マスターは未成年である。母譲りだと言われる大人びた風貌と上物のラピスラズリのような青い瞳は年上に見られるには十分で、また遠くから観察している清姫に深いため息をつかせるにもまた十分であつたが、まだまだ大人というには様々な経験が乏しい少年であつた。

酒もその中の経験の一つである。まだまだ成人するにはもうしばらくの辛抱が必要であつたマスターは飲酒は禁じられており、また自分からも飲もうとはしなかつた。

時たまマスターを飲みに誘うサーヴァントもいるが、基本的にマスターが未成年と知ると自重するし、規則には厳しいサーヴァントたちが飲ませる前にストツプをかけるので今の所マスターは酩酊するという感覚を味わつたことが無かつたのである。

そう、玉藻と酒呑の企てで新しいジュースと言われたチョコ味のジュースを飲まされるまでは。——なお、タマモシャークの激ヤバお屠蘇はマスターの記憶が無いので除外とする。——

「先輩、大丈夫ですか?」

「……………」

サーヴァントたちの不定例会議から日をまたいだ翌日の事である、マスターはマシユに介抱されながら自室のベットで唸り声をあげていた。

マスターといえどその体自体はただの一般男性のそれである、病気もするし、怪我だつてするが今回の病は「二日酔い」というおよそ危機感のない病名であつたため胃薬などを持たされ大人しく部屋で寝ていなさいと医療スタッフから苦笑いと共に送られて三日は経つがまだ酔いは醒めそうになかつた。

だが実際は二日酔いどころではなく三日酔い以上の悪酔いであり、頭痛はするわ、吐き気はするわ、世界は回るわでマスターにとって初体験の二日酔いはまるで魔術王に呪われたかのように最悪の体験である。

そして一番不味いのは泥酔した時の記憶が一片たりとも頭の中に残っていないかつたことであつた、玉藻と酒呑童子の悪笑みに嫌な予感を感じとつてトイレに行くと言つて逃げたもののそこから記憶が無いのだ、介抱してくれたという弁慶はマスターに目も

合わせてくれないしなんだか気まずそうにするのでマスターは何か不味いことをやってしまったのではないかと気が気でなかった。

「まだ気分が優れませんか？ お水を持ってきますね」

マシユが聴いたところ、先輩であるマスターはそれは本人が覚えなくて良かったというほどに乱れに乱れたらしい

——先輩が自ら痴態を晒すなんてお酒と言うのは怖い物ですね。

とマシユは他人事のように冷蔵庫から水を取り出すが、彼女自身も酒に酔うと記憶を無くすタイプである。

「先輩がこんなになつてしまうなんて……玉藻さん達は先輩に何を飲ませたのでしょうか、そもそも先輩は対不浄の加護を持っているのでお酒などには極端に酔いにくいはずなのですが……」

「……………」

声なき声でマシユに声をかけるマスターだが、相変わらず呻く様な声しか出せていない。

「■■■■！」

「あれ……これは確か先輩がファラオ・オジマンディアスから頂戴した……」

マシユが冷蔵庫を開けた音を聞いたのか、どこからか三匹の奇妙な動物がどの動物に

も当てはまらない鳴き声をあげながらマシユの周りをくるくると回りだした。

この小動物はオジマンディアスからマスターが賜った子スフィンクスであり、コスモスフィンクスと呼ばれるスフィンクスを統率する上位のスフィンクスの子供なのであった。

その体は銀河を内包したかのように黒い体の中から星々の光が映し出されており、尻尾や頭には可愛らしいエジプト風の被り物と装飾が施されていてその仕草は獅子の子供のようで大変可愛らしい。

「え、これは水じゃなくてスフィンクスさん達のご飯なのですか？」

驚いたマシユがペットボトルに入った液体をまじまじと見るがどこをどう見ても只の水にしか見えない。

ふとマシユが足元見ると、これまた何処から持ってきたのかマスターの扶養家族たちはそれぞれの器を持ってマシユの目の前でお座りをしながらペットボトルが開けられるのを今か今かと待ちわびていた。

そのゆっくりと振られる尻尾を見てマシユは何とも言えないときめきを覚えながらフォウ君がこの頃マスコットの座を奪われなかと戦々恐々している理由を察する、中々のキュートさである。

「■■■■……」

「……………」

「ご飯の時間だからあげてもいい？　で、では……失礼して……」

その液体は確かに水ではなかった。マシユがペットボトルの蓋を開けると、熟れた果実の匂いが部屋の中で弾けた。様々な果実がその水の中に濃縮されたかのような豊潤で濃い香りは正に桃源郷か、エデンの園かを再現しているようである。

マシユが餌皿にその液体を入れるとスフィンクスたちは体の星々の光を増して喜び目も口もない顔でその液体を食していく。

その食べ方もまた独特であり、スフィンクスのモノアイのように輝る一際大きな星の光が、点滅したかと思うとその液体がゆっくりとその星へと吸い込まれ、体に溶けこむようにして体内へと吸収される。

摩訶不思議であるが、神秘的で美しくもある食事方法にマシユは身をかがめながらスフィンクスたちを見つめるが、その時勢いよくドアが開かれたことで侵入者と思つたスフィンクスたちがマスターの防御態勢に入ったために中止となつてしまった。

「ま、マスター！　御無事でしたか！」

マスターの部屋に駆け込んだのはカルデアの美男子ランキングで一、二位を争うほどの美貌の持ち主、デイルムッド・オディナであった。

驚いたマスター達が見るとその眩いほどの美貌にはいくつもの傷がついており、服もいくつが裂けて只ならぬ雰囲気をまとっていた。

デイルムツド程の男がその端正な顔を崩すときは、特異点などの緊急事態か、碌でもない事が起きた時である、そして今回は外の騒音からして十中八九後者であるらしい。「ど、どうしたのですかデイルムツドさん!？」

そのデイルムツドの姿に声をかけるマシユと警戒する子スフィンクス達であるが、問われたデイルムツドは言い難そうにしながらマスターの方を向いて口を開く。

「そ、その……サーヴァントたちがマスターに酒を飲ませる飲ませないで戦いを……」「はい?！」

それはサーヴァントたちの不定例会議が終わった後の事であった、この頃メイドに変身したアルトリア・オルタがダ・ヴィンチちゃんの工房に突然乗り込んでいき、袋一杯のQPと共にダ・ヴィンチちゃんにこう言い放ったのだ。

「アルコールは入っていないが対不浄の加護持ちの対象を酔わせる飲み物が欲しい」

——と。何の脈絡もない、いきなりの依頼にダ・ヴィンちゃんも一瞬戸惑った。アルコールが入っていないお酒はもはやお酒じゃないような気がするし、そもそもなぜそんな飲み物を作れと言うのか、だがダ・ヴィンちゃんもなんだか面白いことになりそうな予感がしたので理由を聞いてみると。

「将来、完璧なジェントルマンにするためにメイド直々に酒の飲み方を教えるためだ」

と返ってきた。それですべてを察したダ・ヴィンちゃんは笑いながらその依頼を承諾して、そのお酒の様でお酒ではない飲み物を作るために席を立ったが、丁度その時もう一人の客が扉を勢いよく開いた。

「余だよー」

それは萎れた薔薇ももう一度花開く様な笑顔と、大袋に入ったQPを持った皇帝陛下であった。因みに花嫁の方である。

そんな皇帝陛下はメイドよりも二回りも大きな袋をカウンターに置くと、たわわに実った胸を張ってダ・ヴィンちゃんにこう言い放った。

「酒が欲しい！　だが、此処で売っている様な物ではなく絶世の美酒で、こう、飲んだ後蕩けた目で見てみると、目の前にいる美少女の美しさを改めて認識して心の底から惚れこむような、そんな酒が欲しいのだ！」

それはそれは良い笑顔であったが、それは惚れ葉じゃありませんか陛下？　とダ・

ヴィンチちゃんが入った。横やりを入れられたメイドが皇帝陛下に突っかった。

「何が、『絶世の美酒』か。マスターの年齢を考へろ、未成年に悪影響だろうが、貴様のようにあーぱーになったらどうするのだ」

「二歳二歳の違いなど関係あるまい! そちらだつて酔わせようとしていたではないか!」

終着駅は同じでも、そこまでに至るアプローチが違う二人の言い合ひは、ああいえばこういう口論へと発展して泥沼と化していった。

「そもそも、マスターを酔わせて何をするつもりなのだ、頭の中まで薔薇色に染まったか?」

とキングメイドが言うと、

「そういうそちらも『とーへんぼく』とそなたがいつも言っているマスターが『キス魔』になるのが見たくてそんな酒を注文したのであろう! そもそもローマであつたイタリアなる国では十六歳から飲酒は可能と云うではないか! ならば日本のローマ市民であるマスターが飲酒できない理はない!」

と皇帝陛下が言い返す。

実際二人にはイシユタルが変装した積極的なマスターがそのまんま現物で手に入る

かもしれないという密かな期待もあったのも事実であった。普段しつかりして大人しい者ほど酔ってしまおうと大胆になったりするのだ、酔ったトリスタンが勢いでCDを出したことは二人の記憶にはまだ新しい。

ついには実力でマスターを勝ち取ろうと両者が武器を構え始めたので、ラボを壊されてはかなわないダ・ヴィンチちゃんが両者に始まっている騒動の原因である言葉を言い放った。

「二人とも満足できるであろう飲み物がマスターの部屋に一つだけある」

「それが全ての始まりでした。そのまま黒い騎士王とネロ殿は廊下で高速戦闘を行いつつながらマスターの部屋を直指していましたが、途中で清姫たちも参戦し場は混乱状態……それを止めるために幾人かのサーヴァントが間に入りましたが、その中に『飲みすぎ、ダメ、絶対』と書かれたプラカードを首から下げたヘラクレスがいたことで一気にその場は混沌と化し……なんとかそこから抜け出しマスターの無事を確認をと……」

「デイルムツドの報告に、何とも言えない顔をしながらとりあえずマスターはしばらくお酒を禁止にしよう」と心に誓った。

「それで先ほどから廊下が騒がしかったのですね……そういえばダ・ヴィンチちゃんと言っていた飲み物とはどれの事なのでしょう？ 先輩の冷蔵庫にはそんな物は見当たりませんでしたし……」

マシユの言うとおりダ・ヴィンチちゃんが言う様な奇怪な飲み物はマスターの部屋には見当たらなかった。そもそもマスターはお酒を飲まないのもそのような物は自主的に於くことは無いし、他のサーヴァントが置いていくということもほとんどのサーヴァントがお酒類などはマスターの部屋には持ちこまないのも有り得ない事であった。

なのでマスターの冷蔵庫には少しばかりのアイスやジャンヌ・オルタ・リリイが置いて行っているジューズなどしか入っていないはずであった。

「確かに気になるな……この騒動の発端でもある、マスターは何か心覚えはおありで？」

「……」

ベットに伏せながら、少しだけあるかもしれないといながらスフィングスの餌が入っているペットボトルに目を向ける。半分ほど注がれてテーブルに置かれているそれは未だに冷たく冷やされているかのように周りから水滴を落としていた。

「あれは確か先輩の……」

「そこをどくがいい!!　そこは私が通る道だ!」

「なにおう!　マスターの初めてを貰うのはこの余である!!　なんだか奪われているが、自ら差し出すのは初めてであろうしな!」

「それは丁重に私が預かる!」

「!?!」

「マスター!?　大丈夫ですか!」

何かがぶつかり合う音と共に廊下から誤解を招きかねない会話を大音量で繰り広げているネロとアルトリア・オルタに思わずマスターは咳き込んでしまう。

清姫あたりが聴いたら正に大炎上ものである、現に目の前のマシユの目が何だかつんとしており必死にマスターは誤解を解こうとするが変な所に唾が入り込んだのか咳き込んで上手喋ることが出来ない。

慌ててデイルムツドが近くにあったペットボトルに入った水をマスターに持つてきてゆつくりと飲ませるが、その果実の匂いと、子スフィックスが慌てだしたのを見てマシユはそのペットボトルが何なのかを直ぐに察した。

「どうぞ、マスター。ゆつくりと飲まないと……」

「デイルムツドさん!　それは水ではなく——!」

「……………」

「んなつ、マスター?」

マシユの制止も間に合わず、デイルムツドから差し出された水を飲んで数秒後、マスターに変化が生じ始めた。体温が急激に上がって行き、その顔は見る見るうちに赤くなっていく、目は蕩けていき楽しく笑っているかのように口角をあげて、体はゆつくりと揺れ始め、まるで深く酔っているかのような、そんな様子であった。

「せ、先輩……?」

「ま、マスター? 大丈夫なのですか……?」

「……?」

「え、はい!? はい、デイルムツドですが……」

そしてマスターの変化は更にヒートアップしていった、まるで酔っぱらいが人に絡むようにデイルムツドに絡み、同じ話を何回も繰り返し、どんどんと声が大きくなっていく。

これだけであればデイルムツドも対処が可能であったが、問題はその内容であった。

褒める、これでもかと言うぐらい相手の事を褒めるのだ。顔のことから性格の事、戦闘面で頼りにしていることや信頼していることをこれでもか和本心のままに相手を褒め称えるので聴いている方は嬉しいやら恥ずかしいやらでマスターと同じぐらいに顔を赤くすることしかできない、しかも今回はデイルムツドと言う忠義の戦士なのでなん

だかデイルムツドまで感極まっている。

隣で見ているマシユはなんだかそつちのけにされているようで少しだけ頬が膨らむのを感じた。

「あ、ありがとうございます……どうにもこういうのはなれないと申しますか……おつとつとそういうのはご婦人に……」

「デ、デイルムツドさん……?」

「ああ、マシユ……ちよつと、外の風に当たつてくるとする……次は素面の時に聞いてみたいものだな……」

「いえ、デイルムツドさん? 外は大乱闘の最中では……デイルムツドさーん!」

結果デイルムツドはマスターをベットに落ち着かせると夢ごちで部屋の外へ出て行ってしまう。数秒後に何かの衝突音がしたがそれがデイルムツドではないことを祈りつつ、マシユはマスターの介抱へと戻っていく。

どうやら身体への影響はこれ以上は無いうでマスターは散々デイルムツドを褒めて疲れたのかそのままベットで目を閉じているようであった。

「まさか、スフィンクスさんのご飯がダ・ヴィンチちゃんの言っていた……?」

マシユがマスターの近くに座りながらベットポトルを持って中身を見る。

マシユの考察は正解であった、スフィンクスは靈魂などを餌とするが、さすがにそれ

を毎日あげるとなると非常に手間もかかるし何処にでもいる存在でもない。なので子スフィンクスには靈魂などの味を出来る限り再現した栄養ドリンクのようなものをダ・ヴィンチちゃんの監修の元作ってそれを摂取させていたのである。

そしてそれは様々な材料でできておりその中には濃度が高めのアルコールも入っており、魔術的なものでもないのでマスターの加護がそれだけは弾かずに結果マスターが酔っぱらってしまふ結果になってしまったわけであった。

「今度から着色してもらわないと、匂いでしか見分けがつかないならまた間違つて飲んでしまふ可能性も……先輩?」

ふとマシユは手を握られている様な感覚を覚えたので、そちらに目を移すと、マスターが手を伸ばしてマシユの手を握っていた。まだ酔いは醒めてはいなかったみたいだが、マシユを見るその眼はいつものほんわかとした目ではなく、戦闘を行う時のようなしつかりとした真面目な目をしており、マシユを少しだけ動揺させる。

「せん、ばい?」

「……………」

「きれい…………? それはどういった…………きやつ!」

そのままマスターは体を起こすとマシユの手を引つ張つて自分の所まで引き寄せる。突然のことに抵抗も出来ないままマシユはいつしかそのままマスターの押し倒される

ようにベットに横になつてしまふ。

マスターの宝石のように蒼い目が真直ぐにマシユの目を捉えて離さそうせず、マシユは自分が置かれてはこの状況を理解していく内に胸の鼓動がどんとどんと大きくなつていくのを感じた。

この光景を他の者が見たら驚嘆するであろう、女性耐性のないこういつたことに小心者の少年が大事に思っている少女を押し倒している。結ぶことが無かつたであろう他のサーヴァント達のいらぬ教えがアルコールの力も入つて、今成されようとしていた。

「は、はい……………」

それか今の少年は目の前の少女の美しさを改めて認識しただけなのかもしれない。

少年はデイルムツドの時とはまるで異なる、小さく確かめる様に少女の名を呼びながら、頭を撫でる。そのまま美しく流れる髪を梳きながらそのまま少女の耳をゆつくりと撫でた。

「あつ……………せんぱ……………」

少女はその愛しむような触り方に一層胸を高鳴らせて、頬に熱を集める。少女はこんな少年を見るのは初めてで、その青い目に奥に秘める野獣の様な光を見たとき若干耳年

増などころがある少女はこれから何が起こるのか想像して、彼の顔が自分の顔に近づいてくるとその胸の鼓動は少女の耳を塞ぐぐらいに大きくなっていた。

「……………」

「えっ、あつ、のっ! んんー!」

どんとんと近づいてくる先輩の顔、唇に、マシユはこれ以上は心臓が耐え切れないと判断したのかそのまま目を瞑る、だが顎はあげて少しだけ唇を突き出してその時を今かと待ち構えていた。

「……………んん?」

が、何時まで経ってもその感触はやってこない。最初のキスの味は無味乾燥とでもいうのだろうか、不思議に思っただけのままゆっくりとマシユが目を開けてみると、

「……………ZZZZ……………」

当のマスターはマシユのすぐ隣で顔を突っ伏してそのまま深い眠りについていた。どうやらマシユより先に眠りの神ヒュブノスに口づけをしてしまったらしい。そのまま寝息を立ててピクリとも動かない。

「……………よかったような……………残念だった様な……………」

マシユはまだ鳴りやまぬ心臓を痛いほどに感じながら覆いかぶさっているマスターを元の位置に戻そうと、マスターの背中に手を回してそのまま転がる様にしてマスター

を下にしようとする。意外と大きい背中と固い筋肉の感触に、マシユはまた少し胸が高鳴るのを感じながらそのまま回ろうと勢いをつけていく。

「よいしょっ、せーの……」

「マスター！ 待たせたな！ 余……だ……よ」

「隣の脳内薔薇色女は放っておけ、私が直々……に……」

「いい加減にしなさい、マスターの健康は私……が……」

その時であつた、ついに激闘を繰り広げ立ちはだかる強敵を打ち破りながら三人のサーヴァントが部屋の中に転がり込んできた、この頃水着になったネロとこの頃メイドになったアルトリアオルタ、それに二人を阻止しようとして来た最近馬が戻ってきたランスアーのアルトリアである。

「あ、あの皆さん……これは……」

が、三人が見たのはマシユを押し倒して体を密着させているマスターの姿。マシユは顔を真っ赤にして背中に手を回しているし、見る者が見れば邪推するような光景に間違ひなかつた。

そしてその三人は思いきり邪推をする方であつた。

「なるほど、我々の決着の前にはやる事が出来たらしいな……」

「誰にでも盛るご主人様は、再教育といこう……！」

「とりあえず、再指導といきましょう……!」

「せ、先輩! 起きてください! せんぱーい!」

それぞれ武器を構えだす三人にマシユは急いでマスターを起こそうとするが、日常でも一度寝たら中々起きないマスターである。アルコールが入った今は何が有ろうとも起きる気配はない、これでは永遠に起きられなそうな体にされそうな予感。マシユは何とか三人を説得しようとするが

「ま、待つてください。これは……これは口づけをするだけのはずで……!」

「^{ギル}罪ありき!!」

語弊のあり過ぎるマシユの言い方に、三人の武器が一緒に光った。

翌日、マルタ達から一週間の禁酒制限が出され、マスターの症状には二日酔いに加えて全身むち打ちが加わることになった。

——マスターの明日はどっちだ。

ミニツク・メルトリリス

「?」

彼は何かを決心したかのように私に過去に電話をすることは出来るか? と聞いてきた。勿論とは言えないが出来る、此処はある意味出来ると思えばなんでも引き出せる虚数空間に似た空間だ、私が少しハッキングすれば過去にだつてつながることが出来るだろう。

だがそれは気軽にできる方法と比べてとてつもなく危険な行為である。不確定な未来とは違い、それは正に歴史を変える、人類史を破壊する原因にもなりかねない。

人理を救った彼が人類を破壊する可能性のある方法を取る。この人は未来に希望を持ち、過去の後悔に引きずられる様な人ではない。

彼らしくない、私はそう思つて極少ないリターンと大きすぎるリスクを説明した。出来るだけ思い直すように。

それでも彼は「頼む」と一言いうと、すがるような目で私を見てきた。それは私が今まで見たことのない彼の顔だった、弱弱しく、子供の様。

「……私は、忠告したわよ」

その目に負ける様に私が通信機を渡すと、彼は震える手で番号を押し始めた。

「まったく、なんで私が……あのドンファン顔の言うことなんか……」

それは日も落ちかけてカルデアに夕食の時間が迎えたころ。誰もいない静かなダ・ヴィンチちゃん技術工房に足元に広がるガラクタか発明品か見分けのつかない物に足を取られながら一人の少女が踏み入っていた。

白鳥のように美しく、儂げな印象を持たせる誰もが振り向く美少女であったが、その足はおおよそ人間の物としては固く鋭すぎる鉄の具足であり彼女が人間ではない事を一目で分からせるに十分な要素であった。

彼女の名はメルトリリス。カルデアに召喚されたサーヴァントでありプリマドンナである。

そんな彼女は今その可憐な顔に精一杯皺を寄せて最後に目撃されたというダ・ヴィンチちゃん工房に足を運んでいた。

なぜ彼女がわざわざダ・ヴィンチちゃんの工房にその足を踏み入れなければいけないのかそれは、絶賛夕食に遅刻中のマスターを呼び出すためであった。

カルデアに存在する食堂は、エミヤ率いる母性溢れるサーヴァントたちの尽力の元、早い、安い、旨いの三拍子がそろった人気の食堂で、決められた時間内に来ればいつでも愛情籠った暖かいご飯を食べれるとして標高六千メートル、雪山の中のインスタントとヌードルしか作れない職員たちにもありがたられていた。

無論カルデアのマスターも食堂を利用して一人であり、幾つもの旅を超えて大人びるようになった顔が好物の時に子供の様な顔に代わる様は母性を刺激されると料理好きのサーヴァントと某の母には密かに人気でもあった。

なので某の母が食事当番の時は時々メニューをマスターの好物と金時の好物にしてその笑顔で食べる顔を体をくねらせながら幸せそうに眺めるのが日課だったのだが、今日のマスターはなぜか食事の時間になってもやってこない。それどころか金時とベアー号でゴーでもしていると思ったら金時が先に来る始末である。

「折角今日はある子の好きな料理を、よよよ……」

と時計の秒針が一つ進むたびにその大きな胸を悲しみにいつぱいにして某の母が涙を目に浮かべはじめたので、大体こういう時はまな板が犠牲になると知っているエミヤは丁度食券を買おうとしていたメルトリリスにマスターの搜索依頼を出したのだった。

メルトリリスからすればそんな依頼蹴り飛ばしてさっさと食事にしようと思ったのだが、ドンファン顔を頭を下げる姿は気持ちよかったし、デザート無料券を出されたため仕方なくマスターの搜索を了解したのである。

「まったく、いないじゃないの……」

という経緯でダ・ヴィンチちゃんの

「確か工房を見てみたいと言ってたからそこじゃないかな、確かにあそこは様々な発明品が転がっているから彼が夢中になるのも仕方がないだろうね、いやあ少年の心をいとも簡単につかめる自分の才能がおそ——」

という発言の元、技術工房に足を運んでいるのであるが、当の技術工房は何かの絵画や模型、それに大量の計算式やメモが書かれた紙が散らばっているだけでマスターの姿なんて姿形も見当たらない。

作業場と倉庫が兼任されているような部屋は広く、背の高い絵画や天井からぶら下がっている物もあつて見通しは悪い、日々マスターが交換に利用している部屋はその氷山の一角であつたらしい。本当にこの部屋にマスターが来たのも怪しい所である。

だが、部屋の入出口にはたしかにマスターが入つたらしい記述があつた。それも

ダ・ヴィンチちゃんと言った通り昼過ぎに一回である、だが不思議なことに退出のログには誰もそのあとこの部屋から出ていないのだ。

ということは先ほどの天才が言った通り、時間も忘れるほど発明品などに夢中になっているか、いつもの様に眠気が襲ってきて場所も選ばずにヒュプノスの導きあるままに惰眠をむさぼっているかのどちらかである。

そしてマスターの場合後者の確率が高いため、メルトは見つけたらどうしてやろうかと脳内でマスターをけちよんけちよんにしながらマスターの搜索を開始し始めた。

「まったく、さっさとしないと夕食に——……う？」

ふとメルトの瞳に一つの痕跡が映る。

それは埃が被った芸術品のテーブルに着いていた手形であった。埃が被っていると知らずに手を置いてしまったのだらうか、くつきりと手の跡が残っており、メルトはそれに目を近づけて分析を始める。

「掌、指の太さに第一から第二関節の長さ……あの人ね……」

メルトは以前にマスターから手を包まれた時にマスターの手の形を記憶しており、その記憶を頼りにこの手の跡がマスターであると推察する。

「足りないのは、温かさだけ……か」

これはメルトにとつては好都合であった、このまま痕跡を辿っていけばいずれマス

ターが転がっているであろう床に辿りつけるからであり、その分早くマスターを見つけ、夕食にありつける。

「メモを踏んだ後、此処に手をつけてさらに奥へ……一直線ね何かを見つけたかしら。ドジ、ここで転んで手を床につけてる、そしてそのまま部屋の隅に……？」

そのままマスターの痕跡を辿りつつ、部屋の奥へと進んでいくと、不自然にマスターの痕跡が途絶える。

行動を追っていたメルトの目の前には木製の宝箱が埃をかぶって忘れ去られたかのように置いてあり、マスターの痕跡はこの宝箱を開けてから途切れていた。

足跡などから判断するとマスターは此処から一步も動いていないことになるのだが、現にマスターの姿はどこにもなく羽でも生えて飛んでいくか、霊体化でもしない限り土台無理なことであり、メルトは普遍的なホラーかミステリーの中にある様な感覚に一つため息をついた。

「あとは、この宝箱に……いえそれこそ馬鹿らしいわね」

残る可能性としてはこの宝箱の中にマスターが入って、昼過ぎから夕方の方の今現在までミニツクのようにそこを住処として宝箱ライフを満喫していることであつたが、それこそ有り得ない事であつた。

確かに人が入れるぐらいの大きさの宝箱であるが、寝転がるスペースもないし蓋を閉

めればマスターの背では屈んでも閉じるのに苦勞するであろうし。さすがに誰かが来る確証もないこの部屋でそんなところにわざわざ入って今の今まで宝箱の主になるほどマスターは変態ではないとメルトは思っていたし、思いたかった。

だが、その宝箱を見ていると何だか中から聲が聞こえてくるようでメルトはなんだかその宝箱の中身を確かめたくなくなってきてしまう。

「いや、いやいやありえないわ、ありえない」

—— 匣の中には少年がぴったりと入ってゐた。

なんて魍魎な匣的な展開が待っているわけではないが、どうにも一度気になると確かめられずにはいられない。

マスターがこの中にいるわけない、馬鹿じゃあるまいし、とメルトはこの宝箱が空であることを祈りつつその蓋を足でゆっくりと開けてみる。

宝箱は深淵の蓋を開いたかのように不気味に軋んだ音を立てながら開いていく、部屋の光が宝箱の中をゆっくりと照らしていき、そこには——

「ほうー……」

—— 匣の中には少年がぴったりと入ってゐた。

「……………」

静寂が部屋を包み込み、数瞬してゆっくりと宝箱の蓋が閉じられる音が部屋に反響

し、また静寂が部屋を包む。

メルトリリスは下がっていた両手をゆっくりと震わせ、苦勞しながら顔へと持つて行き自分でもガラでもないと思いながら小さく

「神様……！」

とここカルデアでは何人かが振り向きそうなセリフを呟いた。

なになが、どうして、どうなつて、高性能AIでも追い付けない目の前の光景にどうかして落ち着こうとメルトは深呼吸をするが目の前の現実が虚像であつたという痕跡など見つかるはずもなく、メルトはまたゆっくりと確かめる様にまた宝箱を開けていく。そこには――

「――あ、あはは」

「ふんー」

――匣の中には少年がてへへと入つてゐた。

勢いよく閉められる蓋。

部屋に響く音。

メルトはいよいよ宝箱に体操座りに入っている変態が亡霊でも幻覚でもなくマスタ―だと認めざるを得なくなつた。

二回目も蓋を閉じられたからであろうか、宝箱が跳ねるように動いて此処にいるぞと

さらに自己主張しており、メルトは頭痛持ちのスキルを獲得したような面持ちで勢いよくまた宝箱を開けた。

「何をやってるの貴方……」

「……………」

「箱に入ってるのは見ればわかるわよ！　なんでこんな時間まで宝箱に入ってるか聞いてるの！」

そのメルトの言葉にマスターは怪訝な目をして周りを見渡し、今が何時かメルトに尋ねる。

カルデアは標高六千メートルの雪山の中にある、もちろん部屋の中は窓なんてなく疑似景観描写窓でも見なければ外の景色で時間を判断をすることなんてできない。

「もう夕食の時間も過ぎてるわ、早くしないとあのリップほどじゃないけど無駄に脂肪が付いたバーサーカーが泣くわよ、泣いてるけど」

「……………」

「はい？　宝箱に入ってから十分程度しか経ってない？　そんなことあるわけないじゃない、さっさとそこから……!?!」

メルトから時間を聞いたマスターが慌てて宝箱から出ようと足を外に出すが、何か可笑しい。

宝箱から出た足がマスターの体と比例して大きいのだ、まるで遠近法の二つの物体を無理矢理同じ空間に持つてきたかのような屈折した光景だが、宝箱を境にマスターの体のサイズが変化しているのを見るとそれが逆だと分かる。

宝箱に入ったマスターが小さくなっているのだ、宝箱に納まらないサイズの物でも収まる様にその物体が収縮されているのである。

「まるで世界が分けられて……屈折現象……いえ、私がそう認識しているから……？」

「……………」

「へっ……？」

その光景を見て、思い当たる節があつたのか考え込むメルトであつたがそれがいけなかつたのか、自分のさらけ出しているお腹へ急接近するマスターに気付かなかつた。

マスターもすき好んで——嫌いではないが——美少女のお腹に突っ込むわけではない、マスターが宝箱の中から見ていたメルトはもつと遠くの場所にいたはずなのだ。

それが宝箱から出た瞬間、目の前にはメルトの柔らかなお腹。マスターは呆気にとられて避ける暇もなくそのままメルトの柔らかな腹部にへと幸せな衝突を起こしてしまう。

「……………」

「……………」

ぶに、という擬音が付きそうな衝突と共に今日何度目か分からぬ沈黙が部屋を包んだ。

双方の顔はダイナマイトの導火線に火が付くように徐々に赤くなっていき、爆発までにそう時間はかからないように思えた。

「にや、な———!?!」

「———!?!」

打って変わって双方の絶叫が部屋を包むんだ。

思わず足を振り上げるメルトに驚いたマスターは後ろの宝箱に足を取られまた宝箱の中に尻もちをついてしまうが、そのまま底が浅いはずの宝箱に上半身全部がぬるりとうって言ってしまい、足だけが宝箱から真直ぐに飛び出している状態で止まってしまう。

まるでどこかの金田一な映画で見たことのある殺人現場の様であった。

「ひゃつ、えつ、ちよつと———」

それに巻き込まれたのはメルトである。

マスターが宝箱にスケキヨる直前に咄嗟にメルトの服の裾を掴んでしまったためバランスを崩したメルトが振り上げた足を入れたのは宝箱の中、190センチの身長

約半分を補っているメルトの足が宝箱の中に吸い込まれ、そのままメルトも宝箱に落ちるように収納されていってしまう。

その騒動で宝箱が揺れたのか、宝箱の蓋はそのまま軋みながら口を閉じていき、

「あいたあ!？」

メルトの頭を押し込むように勢いよくぱたん、完全に二人を中に入れたまま閉まってしまう。

「馬鹿！　ヘンタイ！　トーヘンボク！　シシオドシ！　アオイロムツツリー！」

「――!」

真つ暗な空間の中でペシペシと何かを叩く音が鳴る。

空間の中には顔を真つ赤にしてマスターの頭をその袖で叩いているメルトとそれと正座しながら受けているマスターがいた。

宝箱の中身は柔らかいクッションで囲まれているものの、物理概念は全てが淀んでいると言っても良かった。標準男性より背が高いマスターをさらに超えるメルトでさえすっぽりと収納しているが手を伸ばしても天井に着くことは無い。

だが、マスターがまばたき

蓋が閉じてから出口でさえも元々なかったかのように宝箱から外の空間は遮断され、メルトがサーヴァントの力で高くジャンプしても蓋に辿りつくことも出来なかったのだ。

まるで一寸先も見えない暗闇の迷路に閉じ込められたかようであった、しかも出口は無く、入り口さえも閉じられている。

だがメルトはその迷路に閉じ込められたことに怒っているわけではなかった、自分のせいで落ちてきたメルトを庇おうとマスターがメルトの下敷きになったからである。

メルトもサーヴァント、それも元々は女神を融合したハイ・サーヴァントである。自分で体勢を整えて着地出来たのにマスターが下にいたせいで鋭い脚を下に向けることが出来ず、体ごとマスターに当たらなければいけなかったし、その際にマスターの顔が自分の谷間——果たして深さが無い谷間を世間一般的に谷間と呼ぶかは置いておいて——に埋まつて呼吸までされた。

つまりはその超幸運的破廉恥、またの名をラツキースケベに憤っているわけであり、どちらかと言うと落ちてくる自分を庇おうとしたマスターは騎士ぽかったし密かにそこからへんは評価しているのであった。

「まったく、なるほどね。これなら出られないはずだわ」

「……………」

十分後、叩き飽きたのか落ち着いたメルトが状況確認のために周りを見渡すと一つため息をつく。高性能AIであるメルトはこの空間の正体に察しがついたようだが、只の一般人で魔術も素人なマスターには何が何だか分からない。

「さて、何が何だか分からない顔をしている貴方のために説明……しても無駄ね、ええ」

「……………」

「あらそう？　じゃあ少しだけ掻い摘んで説明するけど、ここは虚数空間に似て非なる場所よ。これのベースは多元宇宙論を元に行っているみたいだけど、これはそこまで再現は出来ないみたいだから認識宇宙を元に作り出されたみたいね。つまりこの箱に入りさえすればどんな物体もそこに入ったと認識されてどんな物もすっぽりと収まるわけ、蓋が閉じると認識は入っているか入っていないかの0と1の間に分解されて虚数の中に」

「……………」

「あらそう？　素直が一番よ、重要なのはここがどんなところじゃなくて、どうやって此処から出るかが問題よ、なにか通信手段は持っているかしら？」

素直じゃないのはどちらかと心の中でぼやきながら、マスターは胸元から一つの機械を取り出す。それは前時代的な折り畳み型の携帯電話であり、アンテナが先端から伸びていた。

いつも近未来的なモニターなどで会話をしている光景からは思いもつかない機械の登場にメルトの顔は疑問符で埋め尽くされる、彼女にしては珍しい困惑した顔である。

「……何それ？」

「ああ、そりゃあこの空間で通信は出来ないでしょうけど……」

それはマスターが最初にこの空間に落ちた時に拾った物であった。何を隠そうマスター自身宝箱にこの携帯電話を見つけ、拾おうとして落ちたのである。

マスターはその時からこの携帯電話を持っていたが、電源は点くがそれ以外では全く操作を受け付けないので無用の長物として胸ポケットに今の今まで閉まっていたのだが、通信手段と聞いて、とりあえず出してみたのだった。

メルトはマスターが持っているそれを物珍しげに見た後、何か閃いたように自分の手に携帯電話を持たせると、そのままじっと見つめはじめた。

「ちよつと黙ってなさい。なるほどね、機械が得意ってわけじゃないけど、ここまでシンプルなら弄りやすいわ」

その数秒後、携帯電話の画面から謎の光が溢れだしたかと思うと謎の文字列が大量に流れ始める。携帯のアンテナが一人で伸び出したかと思うと、何かを探すように四方

八方に回りだす。

「んんっ、ちよつと安定しないけどこれで大丈夫なはずよ」

「———?」

「これでもAI生まれってこと忘れてないかしら? 古い機械に無理矢理新しいプログラムを組み込んだわけ、これで通信ができるかもしれない」

「———!」

「ふふん、当たり前な事を褒められても嬉しくもないわね」

そういう割には、得意そうな顔をしているメルトから携帯電話を受け取ると、マスターは早速誰かと連絡を取るために携帯を見る。どうやらカルデアの内線に繋がる様に改造してくれたらしく画面にはカルデアの部屋番号がそれぞれ選択できるように割り振られていた。カルデアにはそれぞれの部屋にモニター付きの固定電話が取り付けられているので何とかそれを利用するという手であった。

マスターはとりあえずその時間は分からないが、人が居るであろう休憩室の番号を選択する。職員であれサーヴァントであれ誰かが出てくれればここまで助けに来てくれる、宝箱の蓋さえ開けてくれればよいのだ。

「はい、()こちら……あれ? 画面が出ないな……」

幸運なことに数コールで男性職員らしき声が電話に出てくれた、慌ててマスターの職

員に事情を説明しようと自らの名前を名乗る。

「あれ？ マスター君じゃないか、どうしたんだい？」

「——！」

「ダ・ヴィンチちゃん工房？ ははは、何言ってるんだい今君は時計塔に行ってるはずだろ？」

「……？」

だが、職員から帰ってきた言葉にマスターは困惑してしまふ。時計塔にも何もマスターは今ダ・ヴィンチちゃんの工房の宝箱なのだし、そもそも時計塔に行くなんて話はこれまで一回も出ていなかった。行く理由もない。

「あつ、もしかして燕青さん？ もーこの頃マスター君がサーヴァント連れて行かなかったからつて悪戯が多すぎますよー？」

「——！？」

「ははは、ダメダメその手にはもう乗りませんからね。あ、もうそろそろ時間だ。それじゃ燕青さん、イタズラもほどほどにしてくださいよ」

「——！」

そのままマスターだと信じないまま電話が切れてしまふ。切れた電話を持ったままマスターはただ啞然としているのみであった。

何時の間に自分はイギリスに旅行に行くことになっていたのか、考えれば考えるほど謎は深まるばかりで釈然としないし分かりそうなメルトも先ほどの会話を聴いて考え込んで話かけられる雰囲気でもなかった。

「………」

しかしこのまま悩んでも仕方がないのでマスターは次はマシユの部屋番号にかけてみることにする。こういう時に一番信頼出来て安心できる人物であるが、問題は部屋にマシユが居ることが分からない事である。

「はい、こちらメンタルケアルームで……あらマスターではありませんか」

「………？」

が、出た声の主はマシユではなくどこか色気のある大人の女性であった。マスターは思わず携帯の番号を確認してみるが間違ひなくマシユの部屋番号である、マシユがこんなに色気のある大人になるにはまだ数年の時間が必要であるし声色からして別人なのは分かつているが、相手は自分の事を「マスター」と言った。

つまりはサーヴァントなのであろうが、一度会ったらと言うか召喚したらこんなに色気のあるサーヴァントを忘れるだろうかとマスターは思ってしまう。

だがどこかで聞いた覚えはある声なのだ。それが何処で聴いたかが思い出せていないが。

「……………?」

「あら、あらあら私が誰かと……? そんな、あんなに情熱的な時を過ごしたというのに
お忘れなのですか、それとも私に焼きもちを焼かせたいのでしょうか……? うふ、初
心なのに可愛らしい所があるのですね……なんだか滾ってしまいます……」

「……………!?!」

まるでマスターと親密な関係かのように甘い声を出す電話の主に、マスターは電話越
しに頬が赤くなるのを感じた。

一体いつ知り合ったというのか、電話越しに聞こえる荒い息にマスターは増々パニツ
クになるのを感じながら声の主の正体を聴こうとするがその前にメルトがそんなマス
ターの横足を出してマスターの携帯電話を無理矢理奪い取った。

だが、顔は真剣そのものでむしろ何かに警戒しているようなそんな雰囲気まである。
「忘れたくても忘れることが出来ないその声……貴方、なんでカルデアに存在している
の。殺生院キアラ」

それは何時ものメルトとは違い怨敵を見る様な敵意と憎しみがこもった声であった。
それと同時にマスターの顔も一瞬で元に戻り引き締まっていく。

殺生院キアラ、以前、最早存在したことさえ無いことになった場所で対決した一人の
ピーストである。

キアラはサーヴァントたちの激闘の末、今やマスターの記憶にだけ残るメルトリリスの決死の攻撃で消滅したはずであった。なぜ目の前の魔性は自分と話せているのか、マスターは自分の手を力強く握りしめていた。

「あら……誰かと思つたらまた貴女ですか……まったく、良い所で邪魔をするのが好きなのですね。いつもいつも、マスターに触れるという所で邪魔を……不快です」

「そのままそっくりお返しするわ、なぜカルデアに貴方がいるか分からないけれど今すぐ場所を教えなさい、次は化けて出てこれないように魂の一片まで蹴り潰してあげる」

「これまた異なることを、この前カルデアを巻き込んで大騒動したというのに……二人まとめて正座させたのが我慢なりませんか？ それともマスターが私の方へ心を寄せていくのが我慢なりませんか？ まったく、この間は貴女が喧嘩を仕掛けてきたおかげで患者の目の前で角を生やしてしまう始末……ぐうたらアルターエゴの貴女と違つて私にはちゃんと職業という物が……」

瞬間、メルトが力の限り足を床に叩きつける。空間自体にはダメージは無いようだがその威力は爆発の様な音となつて周りに響いていく、キアラの方にも聞こえたらしく、メルトを挑発するような声が掻き消える。

「ちよつと、待ちなさい。あなた自分を何ていったのアルターエゴ？」

「……？ そちらこそ何を……あ、ええどうぞお入りください。喧嘩を売るのもご自

由ですが、少しは自分でQPを稼ぎになって来てください、こっちはマスターからの禁欲生活で……」

「してやらないわよ」

そのまま通話が切れる。何であろうか、宿敵との会話のはずなのに何故かお説教をされた気がするメルトは納得のいかない表情を浮かべて、ゆつくりと電話をマスターへと返す。

しかし先ほどのキアラは自らをアルターエゴと表現した。ビーストではなくアルターエゴ、つまりはサーヴァントで召喚されていることにメルトも気付くと何か合点がいったように顔をあげた。

「――?」

「大丈夫よ。それと、さっきなんでキアラに電話が繋がったのか分かったと思う」

「――?」

「ええ、もう一回どこかに電話して見なさい。それで貴方にも分かると思うわ」

メルトに促されるまま、マスターは番号を入力していく。今度はハイリスクハイリターンではあるが自室であるマイルームの番号を入力していく。

これならば清姫などのマイルーム不法侵入勢のサーヴァントたちが気付いてくれるだろうし、一瞬で駆けつけてくれるはずである。

問題は密室でメルトと二人っきりの状況をどう取られるかであったが、この状況で贅沢はいえない。

電話は2コールもしないうちに取られた、さすがサーヴァントである。

「……………」

「あら、ダーリンじゃない?」

電話口から親しみのある声が聞こえてきて、マスターは思わず安どのため息をつく。

電話の相手はメルトリリスであった、これならば事情を話せば助けに来てくれるだろう。ダーリンと呼ばれるのは初めてだが……

「……………」

そこでマスターは思考が固まる、電話の相手がメルトリリス? じゃあ横にいるのは……………」

マスターはゆっくりと横に立っているメルトリリスに目を移した。メルトの方はマスターのこの現象に気付いたと思ったのか頷いてマスターに小さな声で説明する。

「そう、どうにも此処から電話したら違う場所に繋がってしまうみたいね、それも未来であれ別世界であれお構いなしに。この認識空間のせいだと思うけれど……どうしたの?」

目を大きく開くマスターに首を傾げるメルト、どうやらメルトの方は電話の相手が自

分だと気付いてはいないらしい。

とうかそれではだめではないか、先ほどの二人も別世界や未来の人ならば助けを呼んでこれはない。そう思うマスターだが遠慮なしにあちら側のメルトは喋りはじめる。

「どうしたのこんな時間に。ちよつと特異点が長引いたからつて寂しくなったの？ ふふ、寂しがり屋さんなんだから」

「……………」

なんだろうか、ある意味先ほどの電話よりも謎である。マスターはあーやらうーやら言うしかないが、さらに電話の向こうのメルトは話しかけてくる。

「もう——仕方のない人ね、ダーリンつたら♡ でもいいわ、丁度私も特異点で怪我してないか心配になって眠れなかったの」

凄いい声で話しかけてくるメルトは何と言うか凄いいことになっていた。先ほどのキラアとはベクトルが違う甘い声でデレツツつとしている、砂糖と蜂蜜で煮詰めたような、公衆の面前で抱き合つて相手しか見えない恋人達のような、そんな名状しがたい幸せのビームを電話から送られてマスターは只々口元を引くつかせることしかできない。

「……………」

「なにこによこによ言っちゃつて？ また特異点で苦戦しているわけ？ ふふつ、仕方

のない人。ダーリンたらピンチの時はすぐ私に頼るんだから♡」

なんだろうか、言っていることはいつも同じで高圧的、上から目線の様なのに言い方が違うだけでここまで違うものなのか。

何時もの声がスイートボイスに代わるだけでこの破壊力。言葉だけなのにハートマークが見えてしまう。

そしてそんな声を聴いて青筋を隠しきれないすぐその脅威メルト。隣にいる身としてはいつ爆発するか分からないダイナマイトを隣に置いている気分であった。

「いいわ、すぐにそっちに行つてあげる。私の活躍を見て、まだまだ底なしに惚れて貰つちやうんだから。覚悟は良いかしら？ 私のダーリン♡」

何と言うか聞いているマスターが耐え切れないほどの甘さであった、何が、なぜ、どうやって。もはやショックを超えて笑いしか出てこない、しかも隣のメルトのおかげで砂漠のように水分一つもない乾いた笑いである。

「何を笑っているの、ちよつとその携帯貸しなさい」

「――！」

必死にやめた方が良いと忠告するマスター。よせよせ。自分との戦い何て碌なものじゃないぞ。赤い弓兵の言葉が甦るが、メルトはそんなことは意にも介さず、鉄の具足で携帯電話を上手くはじくとそのまま上手く耳と肩に挟む。

「いいから貸す。なんだか分からないけどその女の声を聴くと妙に鳥肌が立つの！ 液体になれるのに！」

「あら——ダーリン、誰かしら今の女の声？」

電話越しでも分かる空気が割れる音、マスターに日々培われている修羅場センサーに巨大な反応がキャッチされる。

しかもメルトリリスvsパラレル・メルトリリス。マスターはもう空間の端っことで縮こまりたい気分であった。

「もしもし、リップでしよう？」

いきなりの断定、その発想が若干怖くなるマスターである。

「はあ——？ そういうあなたこそ誰——ああなるほどね……」

「誰って……」

「ああ、そう。また新しい泥棒猫なのね、せっかく一掃したと思ったのに。ダーリンたら特異点に行くとか大体英霊に気に入られるんだから、どうせ性格の悪い混沌・悪らへんが私と縁を切れって迫っているんでしょう？ まったく人の物に手を出すなんて恥知らずにもほどがあるわね」

「な——そういう貴女こそ、正気は到底思えないほどの声で月の女神みたいにダーリンやらキスの音やら、本当に理性が蒸発しているのではなくて？」

同一人物の嘯みつき合いに、若干状況は違うがアルトリア達は本当に平和だったのだと思うマスター。これが顔を合わせた状態ならとくにカルデアが壊滅するまでの喧嘩に発展しているだろう。お互いがお互いに気付いていないのが本当に救いであった。

「どこの誰だかは聞かないわ、でも貴女みたいに散々相手を甘やかすような人はマスターには、ああいえマスターが不釣り合いよ。あのむつつりスケベには厳しく、演目を間違つたら軌道修正させてあげる様なサーヴァント、言うならばパ・ド・ドウの相方のようなサーヴァントよ。おわかりかしら、そんな100%純粋蜂蜜のように甘つたるい貴女じゃそんな演目をこなせる要素なんて一つもない、分かつたら幕を下ろして一からやり直すことをお勧めするわアーティーストさん？」

「……………」

若干馬鹿にされている様な気がして涙目になるマスター、それを聞いたあつちのメルトはふっ、つと一つ鼻で笑った。

「呆れたわ、たとえ間違いでもダーリンが気を許したサーヴァントだからまあまあ見どころはあるかと思つただけけれど、貴方も彼の優しさに絆されているだけの人ってわけね。軌道修正？ パ・ド・ドウ？ 分かつてないのは貴女よ、彼がその程度で自分の弱さを見せると思いかしら？ いいかしら、彼は私でさえ何年も手を焼くほどの頑固者なの、雨垂れ石を穿つって言葉知っているかしら？ 何回も何回も固い心に愛を一滴ず

つ垂らすこと少しずつ彼の心を開かせていく、必要なのは引つ張っていく力じゃなくて一滴の献身的な愛なわけ。

分かるかしら、貴方の考えはもう古臭い演目なの、凄く古いわ。具体的に言うとな年前ぐらいの私を見ているようで恥ずかしさで死にそうになるぐらいね！」

「……………」

緊迫していく空気、マスターはカルデアの月の女神に祈る。

——私は、一体何をしようのですか

と。数年後の自分は一体どうなっているのだ。

「……………くつ、ま、まあ口だけならなんとでも言えるわ。どうせあのむつつりスケベの事だわ、貴女が下品な色仕掛けでもしてホイホイと誘われたんでしよう。まったく本能で動く単細胞にはピツタリだわ。後で教育ね……………」

負け惜しみの様なセリフを言うメルト、修羅場は未来のメルトに軍配が上がりつつあった。

鋭い眼光で睨みつけてくるメルトにこっちの自分は何もしていないのにとマスターは身の危険を感じてしまう。なんだか何を選んででもデッドエンドな予感がヒシヒシと伝わっており、マスターはとりあえず太陽の女神にも祈りを増やす。

「待ちなさい」

その時であった、電話の向こうから未来のメルトの冷たい声が聞こえてマスターとメルトは固まってしまった。そのぐらいに冷ややかで殺気の籠った声であった。

「別に私が何を言われようとかまわないけど、口論で負けたからと言って彼の体と心どれか一つでも傷つけてみなさい、貴女を殺すわ。何処に逃げようと追い詰めて苦しませて殺す。いいわね？」

「……………」

愛が重いというか怖い。ある意味清姫たちよりも容赦なくキルしにくる様が想像できてマスターはさらに頭を抱える、いったい向こうのマスターは何をどうしてメルトをここまでにしたのか、もはや一種の特異点なのではなからうかとまで考えてきていた。

「言ってくれるじゃない、普通のお優しいサーヴァントとは違うのね。でもハツキリ言っておくと趣味が悪いわよ、このマスターはね肝心なところで乙女心が分からないスケコマシよ？　なんでそこまで入れ込まなきゃいけないの？」

抗議の声をあげようとする就先にメルトの足が上がるので結局マスターは隅で体操座りをするしかない。

「……………」

だが、以外にもその返答は沈黙であった。完全に軍配は向こうのメルトに上がっていたはずであり、妙な沈黙にこちらのメルトも少しばかり動揺してしまっている。

「なにか、反論はないのかしら？」

「更」に沈黙、メルトはその沈黙が気になるのか眉をあげて一つ相手を挑発する。

「そう、貴方もやっぱりその程度なのね、貴女もマスターはあまちゃんだって」

「そう、その全部が好きなの——」

マスターとこちらのメルトの脳天が揺さぶられる。

メルトは立ちくらみを覚えて、マスターはその率直な言葉に耳まで赤くなってくる。

「は、な……」

「むつつりスケベな所も、人をやきもきさせるところも、妙なところで鈍感なものも、子供っぽい所も、他人に涙を見せたがらないところも、人のために傷を負うところも全部、全部愛しているの。素直になりなさい、貴方もそんなところが愛おしく思ってきているのでしょう？」

「んなつ、ふざけないで！ 私は本気でそういうところが——！」

「ええ、ええ。今は分からなくていいわ。でもプリマ、私は彼を変えようとは思わないわ、彼の一挙手一投足全部を私の愛にして彼に還してあげるの、彼の涙も受け取って愛の一粒にして返すわ。実をいうとね、彼と一緒に幸せなんてならなくていいの、彼を問答無用で幸せにしてその姿を見るだけで私はもうずっと彼を愛していいける、生きていいける

の

「そ———そんなの絶対にわかりっこ……ぐつ、この人が自分だけ幸せになろうとはしないでしょうけどね！ いいわ、好きにすればいいじゃない！ 私はそんな人はもう知らないったら！」

流石のメルトも顔を赤くして、電話を睨みつける。その眼は少しだけ潤んでいるように見える。

「ええ、好きにするわ。だって私達は最高のパートナーですもの。ねえそうよねダーリン？ 私達は相思相愛、何をやったって恥ずかしくないわ。だ・か・ら、電話越しでもいいからキスを頂戴♡」

それが止めになったのか、頭で何かが切れたメルトが電話に向かって捲し立てて携帯電話を上へと投げる。

「ええ、こんな男幾らでも持っていきなさい！ 何がダーリンよ月の女神じゃあるまいし！ 白馬の王子様もアルブレヒドも全部幻なんだから！ 理想を抱いて溺死すればいい……！」

そのままメルトは空中の携帯電話に向かって足を一閃、携帯電話はそのままどこまで続くか分からない暗闇の空へと高く高く昇って行ってしまった。

特異点並の衝撃が二人を襲ってさらに十分が経った、蹴り上げられた携帯電話はいまだに落ちてこずなんだか気まずい雰囲気だ二人の中に漂っている。

それもそのはず未来のメルトがなんともまあお砂糖たつぷり添加されてマスターにラヴだったのだから。メルトリリスは気付いてはいなかったが、気付いて無くとも先ほどの会話の内容はマスターとかなり親密な仲である女性との会話であり、しかも口論では相手に軍配が上がった。

プライドの高いメルトリリスは、もつと怒ると思っていたが携帯電話を蹴り上げた後は悔しげに歯ぎしりをしただけ、マスターには特に何も言わずただ暗闇の中で立っているだけだった。

「……………」

マスターもまた朝の来ない夜空を見る気持ちで青天井ならぬ黒天井を見ていた。メルトが携帯電話を蹴り上げたことで連絡手段は失われてしまった。

そもそもが未来に繋がったり別のカルデアに繋がってしまうので、あまりあてにはできないが、それでも連絡手段があるというのは大きな希望であった。

数十分しか入っていないのに、外では数時間以上たっていたことを思い出すと一時間

以上が経った今外がどうなっているのか見当もつかない、いきなりマスターが消えたからどこも大騒ぎであろうことは予想できた。

だが不安であるがここから出れないことは無いとマスターは自分を励ますように少しだけ笑った。彼はしばしば周りから楽観しすぎだと言われるが、ときにそれは彼に底なしの希望を持たせるようにも見えた。

「……………!?!?」
その希望に神が答えたもうたかのように蹴り上げられた携帯が空から降ってくる、ただしマスターの頭に落ちる形で。

子気味の良い音を周りに響かせながら携帯電話はマスターの頭へと衝突し、マスターに鳥の首を絞める様な悲鳴を出させた。

中々に痛かったらしいマスターは涙目になりながら日々鍛えてくれているサーヴァント達に感謝しながら携帯電話を開いていく。

「ちよつと、大丈夫なの?」

マスターの素っ頓狂な声を聞いてか、メルトも慌てて駆け寄ってくる、なぜかマスターと目を合わせないようになっているがそれでも心配はしているようである。

「……………」

「ああ、やつと落ちてきたのね。少しばかり飛ばし過ぎたと思つてたところよ」
「……………」

「良く壊さなかつたつて？ それはそうよ、壊さないように改造していたもの」

ハッキングするついでに外側も強化していたらしい、通りで固いチーズが頭に飛んできたような衝撃が来たと、納得するマスター。実際あと少し固かつたらマスターの頭蓋骨は砕け散つてたかもしれない。

「さあ、携帯を見せて」

メルトがマスターの携帯電話をじつと見ると、また画面が明るく光だして様々な文字列が流れていく。今度は緑色の文字であった。

「アップデート完了。これでタイムラインを選択して通話が出来る、これでまっとうに助けを呼べるはずよ」

「……………」

「え？ ええ、さっきの通話からこの空間の特性を解析してたわけ、さあさつさと誰かにかけてこの空間から出しましょう」

さっきの通話を思い出したのか、少しだけ顔を赤らめるメルトを見ながらマスターは携帯電話に番号を打ち込んでいく、今度は医務室の番号であった。

医務室なら交代勤務で二十四時間誰かがいるし、ナイチンゲールなら埃っぽい部屋に

いると言ったらすぐさま駆けつけてくるだろう、その後に来る殺菌地獄に目をつぶれば良い判断であり、これで宝箱生活も終わりを迎えることになる。

「……………」

「何を、しているの？」

だが、発信しようとする直前でマスターの指が止まった。一向にそれから動かないマスターを不審に思ったメルトがその顔を覗き込むと、その眼には明らかに動揺の色が見て取れる。

マスターの額から汗が流れ、それが顎から落ちた時、静かにマスターがメルトに一つの疑問を投げかける。

「……………」

「ええ、未来に繋がるわ。少し調整すれば一年二年の単位でつながることが出来る。でも、未来と言うのは無限の選択肢を持つわ、出る世界はあやふやね。だから、通話の相手に一人として同じカルデアの人間は出なかった……サーヴァントもね。もしかして未来に電話かけたいというわけ？」

マスターは唾を飲むと、黙って首を横に振り、散々悩みながら一つの決心をするとう一つだけといってマスターはメルトに問いかけた。

「……………」

「過去へ……?」

それは未来を見る事よりも代償が大きすぎる行為であった。

「いい、過去に干渉するということは未来を破壊するということと同義なのよ? 下手すれば地球の量子記録固定帯を壊すことにもなりかねない、そうなたら人理を救った貴方が人理を壊すことになるわ、人理定礎のために犠牲になった人々の侮辱に他ならぬいわよ」

「……………」

マスターがやろうとしているのはまぎれもない過去への干渉であった。歴史を変え、その罪の重さは幾つもの時を超え、人理を修復してきたマスターが一番よく分かっているはずである。それは今まで生きてきたものと死んで来たもののすべての侮辱に他ならない。

それでも、とマスターは自分が何をやろうとしているか承知でメルトにすぎるような目つきで見る。その眼差しはいつもマスターが持っている爛々とした輝きではなく弱弱しい子供の様であった。

「……はあ、こうなったら最後まで付き合うわ……忠告はしたわよ」

「……頼む」

その眼に負けるかのように、メルトは携帯電話にハッキングをしてマスターに手渡す。メルトは人理ではなくマスターの縁で呼ばれたサーヴァント、こうなったら世界が崩壊するまで付き合うらしい。

メルトから受け取った携帯電話を開くと、マスターは一文字一文字を震える手で押していく、場所は先ほどの医務室と同じ。だが今度は時が違う、時はこれより遡って約二年前の夏である。

「——っ！」

番号を打ち終わった後、マスターが目を固く閉じながら発信ボタンを押すと、電話は何のとどこおりもなく発信されていく、発信中の音が鳴るたびにマスターは胸が締め付けられているような痛さを感じる。

目指す相手はもはや、どの世界、過去、未来にもいない存在である。だが人理が救われたことが確定した未来から、未だ人理が救われていない自分の世界の過去にならもしや、とそれは一抹の願いであった。

「はい、こちらドクター……？ あれおかしいなあ、画面が映らない？ レフに相談してみるか……？」

マスターの心臓が大きく跳ねた。もう聞くことのないと思つてた声が鼓膜を振動し、脳を揺らす。賭けに勝つたのだ、この時代このタイミングだけならまだ彼は存在していた。魔術王の陰謀が始まるほんの少し前、世界が彼をいない事にするまでにある、ほんの少しの取りこぼし。

「……………」

声を出そうとするが、上手く声が出ない。何をしゃべればいいのか、何と伝えたら良いのか、ただ口が開くだけでそこからは声の一つもでない。

一つ、声が出せればいいのか、なんでもいい。そしたら電話の向こうの男性に未来からの電話だと伝えて、いまから起きることの顛末を語ればいい、それで声の主は救われる、消えなくていい。

自由に生きていける、何だつてできるのだ、彼ならば信じてくれるだろう。

「あれ？ もしもーし？ おかしいなあ声まで聞こえない」

だが、彼の声を聴けば聞くほどマスターは何も喋れなくなる。胸が締め付けられ、息さえもままならない。

電話越しからでも彼の顔がありありと思ひ浮かぶ、一言でいいのだ、いいのに、マスターはそのまま震える手で通話終了のボタンを押すと床へへたり込んだ。通話の切れた携帯電話が持ち手を失いそのまま床に落ちていき、音を立てた。

「マスター……?」

力なく俯き、手で顔を覆うマスターにメルトは近寄ると、その床に幾つもの水滴が落ちていくことに気付いた。涙の跡である。

「貴方……」

「……ごめん、なさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ただ誰かに謝りながら涙を流す姿は、メルトが今まで見たことが無いマスターの姿であった。それは強い意志を持つ英霊たちを率いるマスターでも、メルトにいつも見せる様な優しい青年でもない。

酷く、ひどく、ただ後悔に叩き潰され、無力さに慟哭し、ただ泣き伏せる姿は何の衣も纏っていないマスターの心そのものであった。

ここままで、小さく、弱弱しいものなのかとメルトは初めて見た少年の姿に、ゆっくりとその感覚をしないその時間をかけながらも手を広げて後ろからぎこちなくマスターに回しゆつくりと抱き締めていく。

「……?」

「何も言わなくていいわ、落ち着くまで傍にいてあげる」

柔らかな温かみがマスターを包み、長い髪がマスターの鼻をくすぐる。しばらくするとマスターの方からもメルトの手を握りしめ、そのまま二人は長い時間を過ごしてい

く。

音もなく光もない空間で二人の鼓動だけがお互いの場所を知らせる様に伝わり、メルトはその暖かさと鼓動に愛しさを募らせながらただ柔らかに抱きしめていた。

「……………」

マスターが目を覚ますと、そこは覚えのある自分のマイルームであった。重く感じる体を動かしながら起き上がってみると、部屋のソファーにメルトが座っておりマスターに気付くとそのまま声をかけた。

「起きたのね、運んでいくのは大変だったんだから感謝しなさい？ まあ部屋まで運んだのはナイチンゲールだけだよ」

「……………」

マスターが起きると同時に、メルトがソファーから立ち上がってマスターの近くに

寄っていく。

どうやらあの後マスターは眠ってしまったらしく、そのままメルトが救助を要請したらしい。気付けば宝箱に入っていた時間は二時間ちよつとのはずなのに外では三日が経過しており、マスターは長い間カルデアを留守にってしまったことに焦りを感じてしまふ。主に清姫たちが黙っていない予感がヒシヒシと伝わるのだ。

「貴方の考えている通りカルデアは大騒ぎよ、後片付けは覚悟しておいた方が良いわね、そこ座るわよ」

予感の中させられベットの端で頭を抱えるマスターにメルトは顎でベットを指した。横に座ると思つたマスターは端の方へ移動するが、メルトは首を振りながらマスターに近づいていく。

「違う、ベットじゃなくて、こっちよ」

「!？」

「動くど怪我するわよ?」

だが、メルトが座つたのはベットではなく、マスターの膝の上であった。そのままメルトはマスターに体を預けるので様々な所が柔らかい感触に包まれマスターは数秒もしないうちに顔が沸騰していく。

「!？」

「別に、したくなかったからやるだけ。ちょっと、腕前に回してくれないと落ちちやうじやない」

メルトに言われるままにメルトに手を回して抱き締める方になると、マスターは宝箱の中でメルトから抱きしめられたことを思い出した。あの中でもメルトは柔らかく、良い香りがしてマスターはいつの間にか眠ってしまっていたのだ。

わんわん泣いてそして抱きしめられて眠るなんてなんにせよ恥ずかしい所を見られたのは間違いはなかった。

「……………」

「なんのことかしら？ 覚えてないわ」

だがメルトはそんなことなかったかのように振る舞い、ただ自分が乗りたかったから膝に乗ったとしか言わない。

マスターはそんな不器用なメルトの優しさに微笑むと、感覚が鈍いメルトにも分かる様にすこしだけメルトを抱きしめている力を強くする。

あの時と同じように、静かな部屋の中に二人の鼓動だけが通じ合う。

「私も、あんなふうになっちゃうのかしらね」

胸に集まっていく暖かな気持ちを感じながらメルトは自嘲気味に呟く。

「……………」

「いいえ、なんでもないわ」

何か言ったかと聞き返すマスターに否定しながらメルトは胸元へと後頭部を埋めていく。

——すぐ上にはあの人の顔、顔を伸ばせば届く距離、何時奪ってあげてもいいけれど今この時はまだ、このままで行こう

「……支えてあげる、ダーリン」

誰にも本人にも聞こえないような声で、小さくメルトは呟いた。

——彼らの明日はどっちだ。